２章　日本の温泉文化の現状

１節　温泉文化の現地調査

１－１　温泉地の現地調査の目的と調査対象

（１）現地調査の目的

前章で述べたように、我が国の温泉利用には、温泉の療養（湯治）の効果を前提としつつも入浴自体の喜びも重視していること、入浴に当たっては着衣せず多人数で「湯に浸かる」ことが現在では通例となっていること、露天風呂など自然を感じられる入浴環境を重視していること、長い歴史を有することから、伝承や信仰、それに基づく祭事・芸能・風習・特産品などが豊富であることなど、特有の文化的な特徴がある。こうした温泉利用の文化を支えるため、日本人は、独自の技術や社会的な基盤を整備させてきた。

こうした技術や社会的基盤としては、まず、湯の管理のあり方を指摘することができる。日本の温泉は、先に歴史の説明でも触れたように、自然湧出している源泉を人々が発見したことが利用の端緒となっており、近代に入るまで、人工的な掘削による源泉開発は殆ど行われていなかった。そのため、近世以前からの歴史を有する温泉地（「実態調査」によれば、先端的なボーリング技術が投入され、源泉数が大幅に増えた現在でも、全体の４割以上は近世以前に開湯が遡る）では、自然湧出した源泉をいかに管理し、人が安全に、しかも安定的に入浴できるようにしていくかが、温泉を利用していく上で、極めて重要であった。

環太平洋火山帯に属する日本は、先述の通り、世界最大の温泉国となっており、基礎自治体の８割以上に温泉地が存在する。ただし、各温泉地を支えている源泉は、必ずしもそのまま利用できるものではなく、極めて高温であったり、あるいは火山性ガスの混入により酸性度が高かったり沈殿物が出やすかったりすることで、通常の素材では引き湯管や貯湯槽などの設備類がすぐに破損してしまう、スケールが大量に付く、飲泉に不適、肌に刺激が強すぎるなど取り扱いが難しいことがままある。また、湧出量自体も、例えば河原での湧出の場合、河川の水量の増減などによって大幅に変動するなど、必ずしも安定しておらず、気候や天候による湯温の変化も無視できない。このため、自然と対峙しながら、源泉の管理から湯殿までの引き湯をどのように行い、適切な湯温で適切な量を供給していくかという湯の管理技術の開発と継承は、温泉の利用において、常に課題であり続けた。

また、温泉地に訪れた人々、湯治客や観光客に対して温泉地ならではの魅力を味わってもらうためには、魅力的な宿泊・入浴環境を用意するとともに、接遇や優れた料理などのサービス、自然の美しさや歴史的な情緒を取り入れた魅力的な設えの提供、さらには地域全体での名所・旧跡、景観、土産物の整備などを行い、温泉地でなければ味わえない文化的空間を提供していくことが重要となる。こうした文化的空間の提供を、温泉地全体として、各種の地域づくりの活動を通じて行っていくためには、その前提条件として、限りある温泉資源の持

続的な活用を担保し、温泉地の伝統を次代に継承していくためには、地域をまとめ、濫掘・乱開発を押しとどめていくだけの力を持つ地域社会の基盤づくりも求められる。

本節の第一の目的は、各温泉地への現地調査を通じて、それ以外の長い伝統を持つ温泉に関わる文化、伝統的な入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品など温泉地の文化空間を構成している要素を見出すとともに、それを支えてきた地域のあり方や歴史的に継承されてきたこの温泉の湯の管理の技術を抽出していくことにある。調査に当たっては、温泉地の現在までの歴史を詳細に辿り、上述した温泉文化に関わると考えられる各要素を調査し、各地の温泉文化の全体のありようを整理する。このうち、歴史史料として文献に記載されていることが少ない温泉の源泉管理から各旅館への引き湯や旅館における浴槽の管理などの湯の管理の技術については、現地におけるヒアリングと視察を丁寧に行い、その結果をまとめていく。

（２）調査先の温泉地

上記の目的を踏まえ、今回調査では、全国の主要な温泉地の中で、下記の条件を満たす温泉地を選定し、調査対象とした。

条件１：近世以前から温泉地として一定の繁栄を示していたこと
条件２：歴史的な源泉地が、少なくとも一部で、利用され続けていること
条件３：伝統的な入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等のいずれかがあること

以上の条件を踏まえ、また、現地調査のしやすさなども考慮し、今回は下記の温泉地を現地調査の対象とした。

図表 2-1-1. 現地調査対象地

温泉地名	都道府県	概要（立地、泉質、文化財）、調査対象[98]
乳頭（にゅうとう）温泉郷	秋田県	＜概要＞ 立地　：田沢湖の北東にある乳頭山麓の山道沿いに７軒の温泉宿が点在する秘湯。田沢湖高原温泉郷の一部として国民保養温泉地に指定されている。 泉質　：単純温泉・酸性泉・硫黄泉

98 立地、泉質については、温泉名人ホームページ「温泉地検索」一般社団法人　日本温泉協会 https://www.spa.or.jp/#searchwrap（令和６年 10 月 29 日最終確認）を参照。文化財については文化庁「国指定文化財等データベース」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index（令和６年 10 月 29 日最終確認）を参照。

		文化財：鶴の湯温泉本陣（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 休暇村乳頭温泉郷支配人・乳頭温泉協同組合理事長 平体直也氏 株式会社妙乃湯　代表取締役・女将 佐藤京子氏 支配人 佐藤勉氏 蟹場温泉 鬼川弘氏 鶴の湯温泉 代表取締役 佐藤大志氏 株式会社孫六温泉 女将 豊島由佳子氏 有限会社黒湯温泉 会長 池田泰久氏　池田浩之氏 湯守 須田十市氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：鶴の湯温泉、黒湯温泉、蟹場温泉、孫六温泉、妙乃湯、大釜温泉、休暇村乳頭温泉郷 源泉　：休暇村乳頭温泉郷／乳頭の湯・仙北市所有田沢高原源泉、妙乃湯／湯本源泉、蟹場温泉／唐子源泉・ひなざくら源泉・蟹場源泉、鶴の湯／白湯源泉・黒湯源泉・鶴の湯源泉・太白源泉・中の湯源泉、孫六／唐子の湯源泉・石の湯源泉、黒湯／黒湯上・下源泉、大釜／大釜源泉 その他：鶴の湯神社、薬師神社（黒湯温泉）
鳴子温泉郷	宮城県	＜概要＞ 立地　：江合川とそこに合流する大谷川沿いに広がる鳴子・東鳴子・川渡・中山平・鬼首の５つの温泉からなる温泉郷。国民保養温泉地に指定されている。 泉質　：硫酸塩泉、炭酸水塩泉、単純温泉など。 文化財：鬼首のおよび雄釜間歇温泉（特別天然記念物）、板垣家住宅板倉・主屋（登録有形文化財）、鎌田家住宅主屋・長屋門（登録有形文化財）、ゆさや旅館本館・土蔵（登録有形文化財）、遊佐家住宅板蔵・板倉・馬屋・材料小屋・主屋・外風呂・土蔵・広間・味噌蔵・味噌部屋・室（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 旅館ゆさ代表取締役、鳴子まちづくり株式会社　専務取締役　遊佐久則氏（鳴子まちづくり株式会社の温泉事業部主任　熱海 和則氏も合わせてヒアリング） 旅館大沼五代目湯守　大沼伸治氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：旅館ゆさ、大沼旅館 源泉　：川渡・共同浴場源泉地／下地獄源泉地、東鳴子・大沼旅館自家源泉

		その他：川渡共同浴場、温泉石神社、潟沼、馬場温泉、温泉神社、東鳴子神社
岳温泉	福島県	＜概要＞ 立地　：安達太良山の東側山麓、標高 600 メートルの高原に位置する温泉地。国民保養温泉地に指定されている。 泉質　：酸性泉
		＜調査対象者＞ 岳温泉旅館協同組合理事長、岳温泉管理株式会社取締役、株式会社マウントイン　鈴木安一氏（岳温泉管理株式会社の技術者　武田喜代治氏も合わせてヒアリング）
		＜調査対象地＞ 旅館　：マウントイン その他：岳温泉神社、引き湯小屋、分湯所
草津温泉	群馬県	＜概要＞ 立地　：白根火山の東側、標高 1,000～1,200m に位置する温泉地。 泉質　：酸性泉、硫黄泉(硫化水素型)、アルミニウムー硫酸塩泉、硫酸塩泉、塩化物 文化財：湯畑（指定名勝）、山本館本店（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 奈良屋 総支配人 佐伯達也氏　同 湯守 菅野健一氏 望雲 女将 黒岩智絵子氏 池田水道 代表 池田清氏 （一社）草津温泉観光協会 事務局長 福田俊介氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：奈良屋、望雲 源泉　：湯畑、白旗、西の河原、万代 その他：千代の湯、光泉寺、裏草津、草津中和工場、温泉基地
四万温泉	群馬県	＜概要＞ 立地　：四万川上流の清流沿いに位置する温泉地。国民保養温泉地に指定されている。 泉質　：ナトリウム・カルシウムー塩化物泉・硫酸塩泉 文化財：（日向見）薬師堂（重要文化財）、積善館山荘（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ （一社）四万温泉協会 事務局長 宮崎博行氏

		四万たむら 四万グランドホテル 女将 田村早代氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：四万たむら、積善館 その他：日向見薬師堂、御夢想の湯、河原の湯、美遊時庵（みゆうじあん）まるたか、中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」
伊香保（いかほ）温泉	群馬県	＜概要＞ 立地　：榛名（はるな）山の中腹に位置する温泉地。 泉質　：カルシウム・ナトリウム－硫酸塩泉、炭酸水素塩泉、塩化物泉 文化財：伊香保観光ホテル（登録有形文化財）、横手館本館東棟・西棟（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 千明仁泉亭（ちぎらじんせんてい） 若女将 千明恭子氏 伊香保温泉小間口組合 湯守 田村兼造氏 (一社)渋川伊香保温泉観光協会 常務理事 伊藤信明氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：千明仁泉亭 源泉　：黄金の湯 その他：伊香保神社、石段、飲泉所
和倉（わくら）温泉	石川県	＜概要＞ 立地　：能登半島七尾湾に突き出す弁天橋先端に位置する温泉地。 泉質　：塩化物泉 文化財：青林寺客殿／和倉御便殿本殿（登録有形文化財）、信行寺書院／和倉御便殿供奉殿（ごべんでんぐぶでん）（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 多田屋　代表取締役社長　多田健太郎氏（和倉温泉創造的復興まちづくり推進協議会　代表） 和倉温泉観光協会・旅館共同組合　平野正樹氏 加賀屋　女将　長谷川明子氏 ゆけむりの宿美湾荘（びわんそう）　代表取締役会長　多田計介氏（日本温泉協会会長、和倉温泉合資会社　代表社員副社長） 和倉温泉合資会社　代表社員社長　小泉孝史氏 青林寺　住職　濱田晃瑞氏 信行寺　住職　伊賀正道氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：加賀屋、ゆけむりの宿美湾荘

		源泉　：5 号・8 号・10 号・13 号源泉、温泉管理施設（弁天崎貯湯槽・静波槽） 共同浴場：和倉温泉総湯 その他：弁天崎源泉公園、湯元の広場、青林寺客殿／和倉御便殿本殿、信行寺書院／和倉御便殿供奉殿（清涼閣）、少比古那神社
山中温泉 （加賀温泉郷）	石川県	＜概要＞ 立地　：大聖寺川の渓流「鶴仙渓」沿いに位置する温泉地。風光明媚な環境にある。加賀温泉郷のひとつである。 泉質　：単純温泉 文化財：道明が淵[山中の温泉]（指定名勝）、陶製金剛童子立像（重要文化財）、山岡商山堂[山岡ビル]（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ （一社）山中温泉観光協会・山中温泉旅館協同組合　事務局長　井上慎也氏 加賀市産業振興部　観光商工課　企画官　河嶋浩司氏 加賀山中温泉財産区　配湯管理員　板屋憲二氏 白鷺湯たわらや　代表取締役社長　田向公一氏 加賀市議会議員　荒谷啓一氏 千津の家　ぼたん、きよ乃 医王寺　住職　鹿野恭弘氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：白鷺湯たわらや 源泉　：7・8・10・11 号源泉、大生水（旧 5 号源泉） その他：配湯所、こおろぎ分湯槽、菊の湯、笠の露（飲泉・足湯）、山中座、医王寺、白山神社、長谷部神社、紙谷用水、加賀依緑園、芭蕉の館、鶴仙渓、こおろぎ橋、あやとりはし、道明が淵、黒谷橋
野沢温泉	長野県	＜概要＞ 立地　：長野県北部の山間に位置する温泉地。 泉質　：硫黄泉 文化財：野沢温泉の道祖神祭り（重要無形民俗文化財）
		＜調査対象者＞ 旅館さかや　代表取締役　森晃氏 地縁団体　野沢組　惣代　河野盛雄氏　副惣代　坂井俊氏

		富井裕昭氏 野沢温泉マウンテンリゾート観光局　事務局次長　佐藤俊介氏 三久工芸　久保田敏昭氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：旅館さかや、寿命延 外湯　：大湯、上寺湯、熊の手洗湯、真湯、横落の湯、河原湯、麻釜の湯、滝の湯、十王堂の湯、松葉の湯、新田の湯、秋葉の湯、中尾の湯 源泉　：麻釜熱湯湧泉（大釜・丸釜・ゆで釜・下釜・竹のし釜） その他：分湯槽、道祖神社、湯沢神社、健命寺、温泉薬師堂、三久工芸
下呂温泉	岐阜県	＜概要＞ 立地　：飛騨川沿いに位置する温泉地。 泉質　：単純温泉 文化財：湯之島館本館・玄関・渡り廊下（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 水明館　代表取締役・下呂温泉観光協会　会長　滝 康洋氏 水明館　取締役・施設管理部長　今井 眞氏 下呂温泉事業協同組合　広瀬敬氏　二村則之氏　和田直樹氏 温泉寺　住職　岩浅 宏観氏 下呂発温泉博物館　副館長　徳原修氏 奥田又右衛門膏本舗　代表取締役社長　日向靖成氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：水明館、湯之島館 源泉　：共有 11 号泉 その他：幸田貯湯槽、幸田ポンプ所、温泉スタンド、下呂温泉噴泉池、白鷺乃湯、下呂発温泉博物館、奥田又右衛門膏本舗、温泉寺、温泉神社
有馬温泉	兵庫県	＜概要＞ 立地　：神戸市の北部、六甲山の北側山麓に位置する温泉地。 泉質　：含鉄泉、単純温泉、二酸化炭素泉、炭酸水素塩泉、塩化物泉、硫酸塩泉 文化財：旧駿河屋（登録有形文化財）、御所坊新館・本館・土蔵（登録有形文化財）、橋乃家本館（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 摂津有馬　陶涼御所坊　陶涼居　金井啓修氏

		上大坊（かみおおぼう）　代表　堂加雅丈氏 有限会社　有馬設備　代表取締役　門出健一氏 株式会社ワイドハーバー　営業所長　田中敦之氏 株式会社有馬温泉企業　有馬営業所長　席定康博氏 株式会社有馬温泉企業　有馬営業所　岸本治氏、兵藤篤氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：御所坊、上大坊 源泉　：有明、天神、妬（うわなり）、御所、極楽、炭酸 その他：温泉寺、温泉神社（湯神神社（とうせんじんじゃ））、有馬の工房、太閤の湯殿館　他
三朝（みささ）温泉 （梨の花温泉郷）	鳥取県	＜概要＞ 立地　：鳥取県中部温泉郷の中核となる温泉地で、世界屈指のラジウム含有量を誇る。日本遺産「三徳山 三朝温泉 ～六根清浄と六感治癒の地」に指定されている。 泉質　：放射能泉 文化財：木屋旅館（登録有形文化財）、三朝橋（登録有形文化財）、南莞寺山門（登録有形文化財）、三仏寺奥院（投入堂）（国宝）
		＜調査対象者＞ 桶屋旅館　代表　松原隆雄氏 木屋旅館　代表取締役社長 御舩秀氏、専務取締役 御舩利洋氏 すーは一温泉　NPO みささ温泉　市村禎子氏 三朝温泉病院　事務部長　糸原博史氏、リハビリテーション科長　荒石章夫氏、診療技術部長　山根隆治氏、総務課　施設管理係主任　錦織徹氏 鳥取県三朝町　観光交流課　課長　藤井紀好氏、三朝町長　松浦弘幸氏
		＜調査対象地＞ 旅館　：桶屋旅館、木屋旅館 源泉　：三朝温泉病院　第 1 源泉 その他：すーは一温泉、三朝温泉病院、薬師堂、薬師の湯、三朝神社、神の湯（三朝神社内飲泉場）、株湯　他
道後（どうご）温泉	愛媛県	＜概要＞ 立地　：松山市街にある温泉地 泉質　：単純温泉

		文化財：道後温泉本館（国宝・重要文化財）、湯築城跡（史跡）、 水口酒造店舗兼主屋（登録有形文化財）
		＜調査対象者＞ 道後温泉事務所　所長　杉村幸紀氏、須賀弘明氏、山田豊樹氏 道後温泉旅館協同組合　理事長　奥村敏仁氏、 事務局長　越智英幸氏
		外湯　：道後温泉本館、道後温泉別館 飛鳥乃温泉、椿の湯 源泉　：第 2 分湯場、第 4 分湯場、8 号源泉 その他：湯神社、伊佐爾波神社、石手寺、宝厳寺、園満寺、ハイカラ通り、子規記念博物館、湯釜薬師、道後公園（湯築城跡）
杖立温泉	熊本県	＜概要＞ 立地　：筑後川の源流、杖立川の渓谷沿いに位置する。熊本県阿蘇郡小国町（旧肥後国）にある温泉。温泉街の一部は大分県日田市に広がっており、両県を跨ぐ宿泊施設も存在している。 泉質　：塩化物泉 文化財：阿蘇の文化的景観／涌蓋山麓の草原景観（国重要文化的景観）※杖立温泉の景観も含まれている。
		＜調査対象者＞ 熊本県小国町　町長　渡邉誠次氏 泉屋　女将　渡邊香氏、専務　渡邊孝治氏 杖立温泉観光協会　協会長　権藤芳春氏（葉隠旅館　代表） 大進工業　芦塚勲氏 大学堂薬店　代表　河津正彦氏（元　友芸会　会長）
		＜調査対象地＞ 旅館　：泉屋、ひぜんや 源泉　：山本泉源、北里泉源 その他：元湯、薬師湯、御前湯、足湯、蒸し場、流水湯跡、 東林琉璃堂、雲泉瑠璃堂、温泉神社、大神宮、杖立水天宮
明礬、鉄輪温泉 （別府温泉郷）	大分県	＜概要＞ 立地　：双方とも別府温泉郷（八湯）を構成する温泉のひとつ。ともに国民保養温泉地となっている。 鉄輪温泉　泉質：塩化物泉、酸性泉、硫酸塩泉 明礬温泉　泉質：硫黄泉、酸性泉、含鉄泉、アルミニウムー硫酸塩

		文化財：別府の湯けむり・温泉地景観（重要文化的景観）、別府の地獄（名勝）、冨士屋旅館主屋・前門・石段・石垣（登録有形文化財）、別府明礬温泉の湯の花製造技術（重要無形民俗文化財）
		＜調査対象者＞ 別府温泉保養ランド　社長　首藤加代氏、支配人　本田英徳氏、広瀬文生氏 奥みょうばん山荘　代表取締役　岸本勝仁氏 みょうばん湯の里　代表取締役　飯倉里美氏、総務　フロント　飯倉一巴氏 ひょうたん温泉　代表取締役社長　田中仁氏、総務部主任　于涛氏 鉄輪むし湯　鉄輪観光交流センター　センター長　安波照夫氏 別府市役所　温泉課　温泉整備係　課長補佐　山下恭助氏、 別府市役所　温泉課　参事　釘宮誠治氏
		＜調査対象地＞ 旅館：　別府温泉保養ランド、みょうばん湯の里 源泉：　別府温泉保養ランド源泉、奥みょうばん山荘源泉、ひょうたん温泉 1 号源泉・2 号源泉 その他：別府市立図書館、浜田温泉資料館、平野資料館、長泉寺、永福寺、一遍湯かけ上人、ひょうたん温泉、奥みょうばん山荘、鉄輪むし湯、竹瓦温泉、熱の湯、渋の湯

１－２　温泉地現地調査

（１）乳頭温泉郷

乳頭温泉郷は、田沢湖の北東、十和田八幡平国立公園内の乳頭山山麓にある温泉地で、山道沿いに６軒の温泉宿と休暇村乳頭温泉郷の計７つの宿泊施設が立地している。

山間地ながら近世初めから温泉場が開かれていた乳頭温泉郷は、昭和 30 年代に田沢湖一帯の観光地化が進んだ後も昭和後期まで長らく自炊の湯治場としての運営を続けてきた。その後、1980 年代に秘湯ブームが到来すると、一躍有名温泉地の仲間入りをする。ただし、現在に至るまで、伝統的で簡素な温泉地の風情は残されており、自炊施設を持つ宿も２軒（鶴の湯温泉、黒湯温泉）残っている。また、北東北に多く残る混浴の風習が今も生きている温泉地の一つである。

乳頭温泉郷の源泉は、休暇村の源泉が動力揚湯となっているのを除き、全て自然湧出となっており、各宿で管理されている。ここではこうした乳頭温泉郷の温泉地としての特徴、文化的要素と湯の管理の技術を概観する。

乳頭温泉郷の歴史

＜近世までの歴史＞[99]

乳頭温泉郷についての記載が史料上に見られるようになったのは、江戸時代に入り久保田藩（秋田藩）の藩政下に入ってからとなる。それまで、田沢湖の北東部の山間に位置する乳頭温泉郷は、中世後期には、仙北郡（現在の仙北郡に仙北市、大仙市などの市域を含めた地域）の一部として戸沢氏の支配下に置かれていたが、慶長７（1602）年、佐竹義宣が常州から秋田に転封されたことに伴い、佐竹家の久保田藩の支配下に置かれることとなった。藩政下、乳頭温泉郷のある田沢湖北東部は、仙北郡田沢村に属していた。

乳頭温泉郷最古の温泉地／温泉宿である「鶴の湯」は、旧称を田沢の湯といい、元和元（1615）年頃までに既に名湯として知られていたと伝えられる。慶安３（1650）年、万治２（1659 年）に久保田藩第二代藩主佐竹義隆が入湯したという記録がある。当時はまだ道も整備されていなかったため、佐竹義隆は、先達川を船で上り、鶴の湯に入湯したという。記録では、白湯（冷の湯）、黒湯（熱の湯）、黒沢、中の湯の４つの湯があった。鶴の湯という名称については、宝永５（1708）年の史料で、傷ついた鶴が怪我を温泉で癒やしたことをマタギが目撃したことから名付けられたという謂れが残っている。

藩主が入湯した鶴の湯は、藩の御用湯治場に指定され、本陣が置かれた。久保田藩内からの

99　この項及び次の項については、新田沢湖町史編纂委員会「新田沢湖町史」平成９年３月を主に参照し、各温泉宿の記述について一部田沢湖町史編纂委員会編集「田沢湖町史」昭和 41 年 10 月の記載を利用した。また、鶴の湯温泉の詳細及び幕末の湯治の様子については、無明舎出版編「鶴の湯温泉物語」無明舎出版　平成 11 年２月、及び、佐川日奈子「湯治場集落の発達と湯治慣行の変容　秋田県乳頭温泉郷を事例として」秋大地理　P19-P24 昭和 63 年３月を参照した。その他の参考資料を用いたところについては別注を施した。

藩士や裕福な町人の入湯客が増え、湯治を楽しむとともに、武家同士の供応やたしなみのあるもの同士の歌会、句会の舞台ともなっていたという。湯治場を引き上げる際には酒宴も行われたと伝えられる。鶴の湯の建て屋については、藩主をはじめとする佐竹家一門の投宿の度に普請が行われており、また、鶴の湯までの山道も整備され、先達川に橋も架けられた。元禄２（1689）年には、浴場２棟、宿舎７棟の計９棟の建て屋が並び、薬師十二神将を祀る湯神堂（現在の鶴の湯神社）もあった。鶴の湯神社には、城下から湯治に訪れた人々の奉納品が残されており、近世を通じて藩内の湯治場となっていたことを証拠立てている。また、鶴の湯温泉本陣については、明治元（1868）年に建て替えられた寄棟造茅葺（よせむねづくりかやぶき）の建造物が残り、国の登録有形文化財となっている[100]。



鶴の湯温泉に残る明治元（1868）年に建て替えられた鶴の湯温泉本陣の建物。現在でも宿泊施設として利用されている。



鶴の湯温泉本陣の室内。囲炉裏があり、かつてはこれで自炊をしていた（現在は温めのみ）。

鶴の湯の古記録である「鶴の湯日記」によれば、２～５人の株主が鶴の湯の運営に当たっており、士分や町人からは宿泊費と食費・道具類の損金を、自炊であった農民の湯治客からは宿泊費と損金のみを徴収、その売上で道具類や施設の補修などを行うとともに、湯守として湯役銀を藩庁に収め、また、運営に助力していた田沢村、生保内村（おぼないむら）両村に協力金を支払っていた。協力金を支払っていた両村の村民には、宿泊料・損金なしで湯治をさせていたという記述も見える。

鶴の湯の株式は 60 株あり、うち半数の 30 株を代々所有していたのが、昭和 56（1981）年まで経営を続けていた羽川家である。羽川家は、新田開発で財を成すとともに、田沢鉄山の開発と製鉄を行い、製鉄事業が衰退した後は材木業も展開していた素封家（そほうか）であった。

次に開湯したのが「黒湯（くろゆ）」である。元和２（1616）年に藩家老梅津正景の妻が、翌年には初代藩主義宣の側室が、延宝２（1674）年、佐竹家家臣で角館の城主を務めていた芦名氏とその家臣が入湯したという記録が残る。黒湯の名称については、先達川の支流黒湯沢には昔から温泉の湧出地が多数あり、多くの獣が傷を癒やしに来ていたので、獣が「来留湯（くるゆ）」で黒湯と呼ばれるようになったとの言い伝えがある。また、明治半ばまでは、鶴の湯と対をなす湯として、「亀の湯」とも呼ばれていた。

100 文化庁「国指定文化財等データベース」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/searchlist（令和７年６月最終確認）。

江戸時代の最後に出来たのが弘化３（1846）年開湯の「蟹場（がにば）温泉」である。この湯は鶴の湯に湯治に来ていた医師太田元泰と鬼川良策が発見したものと伝えられ、周囲に沢蟹がたくさんいたことから名付けられたという。４年後の嘉永３（1850）年に湯宿が作られている。

幕末に大阪東岳という画家が描いた「田沢湯元道中画報」に当時の鶴の湯の湯治の状況が描かれている。江戸時代に久保田藩の一門家臣であった佐竹北家が領有していた角館からは、馬での便もあり、引き馬に乗って鶴の湯まで行くことができた。ただし、馬代を払えるのは裕福な層のみで、普通の湯治客は徒歩で山越えをして田沢村を目指す必要があった。

まず湯治客は生保内へと峠の山道を越え、急流を渡し船で渡河しながら北上、そこから街道を外れ、田沢湯道と呼ばれる山道を、さらに北に 15㎞ 離れた鶴の湯へと向かう。先に述べたように藩費で道は最低限の整備がされていた。ただし、それでも山道は狭く、険しく、先達川には橋が架かっていたものの、沢についてはせいぜい丸木橋がある程度であった。こうして苦労して着いた鶴の湯では、男女がのびのびと混浴をしていた。



左は乳頭温泉郷に引き馬で荷物を抱えながらいく様子。右は裸で混浴を楽しんでいる様子。
※鶴の湯温泉に寄贈された「田沢湯元道中画報」の展示物

この画報で描かれているのは鶴の湯だけであるが、先に触れた「鶴の湯日記」では、隣村にある玉川温泉や生保内村の黒湯との湯治客の取り合いが厳しいとの記述もあり、黒湯も同じように藩士や裕福な町人などの湯治客を集めていたものと思われる。

なお、全ての温泉地は、積雪で山道が閉ざされてしまうことから、冬季は休業となっていた。

＜明治から昭和戦前期まで＞

明治４（1871）年、廃藩置県が行われ秋田県が設置されるとともに、戸籍編制法が施行された。これに伴い、それまでの村方を通じた間接統治から政府が直接国民を把握する直接統治体制への移行が図られ、各府県には、それまで置かれていた郡に近い大きさの大区、大区の下に江戸時代の旧村を複数まとめた小区が置かれることとなった。この大区小区制度は、戸籍による管理を上から行う体制とそれまでの地域の村方自治の体制とのすり合わせが難しかったこと、また、当初は府県自体の統合や整理が頻繁に行われていたことから、短期間のうちに何度も変転することとなる。

乳頭温泉郷のある江戸時代の旧田沢村と旧生保内村は、上記の地方制度変更の中、明治４（1871）年４月の廃藩置県直後は第８大区に所属することになった。しかし、同年中に第一次府県統合が行われ、また各府県の飛び地の解消が実施されたことから、同年 11 月には第 12 大区に編制替えになっている。小区は第４である（第 12 大区第４小区）。さらに明治６（1873）年には、大区を江戸時代の郡の地域割りとし、小区も旧村を単位としたものとして再整理しており、旧田沢村・生保内村は、第５大区（江戸時代の仙北郡）の第２小区に属することとなった。これにより江戸時代からの村の地域的な繋がりをもとにした地方行政体制が復活、さらに明治 11（1878）年には郡区町村編制法が施行され、大区小区制度は廃止、郡と町村が再開されることとなる。この後、明治 14（1881）年、旧田沢村は、玉川村と合併、田沢村の大字田沢となった。２年後の明治 16 年には、今度は旧生保内村が刺巻村と潟村と合併し、ここでも旧生保内村は大字生保内となっている。新たに出来た田沢村、生保内村は、明治 22（1889）年の市制町村制施行後でも変更されることなく、昭和 31（1956）年の田沢湖町発足までそのまま続く（ただし、生保内村は、昭和 28（1953）年、生保内町となっている）。

藩内では名湯として知られ、藩主の入湯もあった乳頭温泉郷であるが、街道自体は、角館から北上し、現仙北市中心部（田沢湖南東部）の生保内を経て東進、国見峠を通って盛岡に至る生保内街道が羽州街道の脇街道として整備されていたのみであり、現在の乳頭温泉郷がある山中自体は街道筋から離れていた。村内の道路も、特に田沢村については、明治期までは全くの山道で、徒歩もしくは牛馬しか通行できず、荷車も無理、駕籠を通すにも草刈りが必要といった状態だったという。黒湯については明治 27（1894）年に年間の湯治客が 1,210 人という記録が残っているが、麓の生保内の集落から、江戸時代と同様、20km もの山道を荷物を持って歩いて登っていたと伝えられている。

村内の道路の整備が有志により始まったのは明治末から大正初めにかけてで、その後大正５（1916）年より郡補助道としての整備が本格化、昭和初期にかけて道路の整備が進んでいく。人力車の利用が本格化したのは大正初期、貸切自動車の営業が始まったのは昭和５（1930）年である。現在田沢湖畔から乳頭温泉郷の休暇村、妙乃湯、大釜温泉、蟹場温泉を繋いでいる県道西山生保内線（鶴の湯温泉と黒湯温泉、孫六温泉は県道から外れている）ができたのは、さらに遅れ、第二次世界大戦中となる。この道の整備に当たっては、蟹場温泉を経営し、県議や村長を務めた鬼川寛一の尽力によるものが多いと記録されている。大正 12（1923）年には奥羽線の支線である生保内線（昭和 41（1966）年より田沢湖線）が開通、秋田側（大曲駅）から生保内（現：田沢湖駅）までが鉄道で結ばれることとなった。

田沢村・生保内村を含む田沢湖観光開発の試みが始められたのも明治末期からとなる。明治 44（1911）年に初めての本格的な田沢湖観光のガイドブック「田沢湖案内」が発行され、初めて地域外に田沢湖の素晴らしさが伝えられることとなった。仙北郡長が序文を寄せた「田沢湖案内」には、日本画家であるとともにアララギ派の歌人としても知られた平福百穂が描いた田沢湖道路略図が付随しており、平福の伝手で著名人に贈呈されるなど、マスメディアが発達していない中で口コミでのＰＲが盛んに行われた。こうした流れを受けて、鉄道開通

後の大正４（1915）年には田沢湖地域初の観光旅館「湖心亭」が開業、大正 12（1923）年にはそれまでの丸木船に変わってモーターボートが、昭和３(1928）年には本格的な遊覧船「蓬莱丸」が就航するなど田沢湖遊覧の体制が整えられ、犬養毅をはじめとした有名人の来訪も見られるようになった。

ただし、田沢湖観光も、この時期までは、上述した「田沢湖案内」において温泉の存在が押し出されていないなど、乳頭温泉郷を含む各温泉地と連動したものとはなっていない。加えて、昭和７（1932）年には昭和大恐慌、昭和９（1934）年から 10 年にかけては東北に大凶作が起こり、田沢湖観光自体もその勢いを失ってしまう。その後は、15 年戦争の拡大、そして第二次世界大戦の開戦へと時代は動いていき、昭和 18（1943）年に生保内まで乗合バスの運行が始まったものの、観光業の本格的な発展は第二次世界大戦後を待つこととなった。このため、乳頭温泉郷についても、江戸時代からの延長線上の近隣地域の湯治場としての展開に止まることとなる。ただし、武家や裕福な町人から始まった湯治も、明治以降は、農民を中心とする一般庶民に大きく広がっていたと伝えられる。

昭和５（1930）年頃まで、湯治客は主に仙北郡の農民であった。時期は夏場の農閑期で、年に１回定期的に訪れることが通例となっていた。湯治に来れば風邪を引かないとか、足腰の痛いところが治るなどと言われ、長男夫婦が両親を親孝行で湯治に行かせることも多かったという。食料持参の自炊で、水は沢水を使い、山菜を採り、筍の旬である田植えの時期の湯治では筍取りにも勤しんだ。取った筍を販売し、湯治の費用に充てるものもいた。

なお、温泉としては、新たに明治 39（1906）年に「孫六」という温泉宿が出来ている（現：孫六温泉六庵）。孫六の源泉は、田口久吉によって、慶応年間（1865～1868 年）に黒湯の近くの河原で発見されたもので、田口家は、その後孫六を令和４（2022）年まで経営していた（現在は、合資会社から株式会社に変更した後、乳頭温泉郷の休暇村を除く各宿泊業者による共同出資を経て、大仙市の東商事株式会社が経営）[101]。また、昭和４（1929）年には、黒湯温泉の経営者が田代家から池田家に交代している。池田家は、宮城県の齋藤家、山形県の本間家に並ぶ東北三大地主であり、当時資金繰りが悪化していた田代家から黒湯温泉を買い取ったという[102]。なお、この頃まで、各温泉地（各宿）は個別に経営されており、乳頭温泉郷全体としての繋がりはあまりなかったと言われている。

＜第二次世界大戦後の発展[103]＞

第二次世界大戦後、民主化に伴い基礎自治体が担当する行政量が拡大したことから、昭和 28（1953）年に町村合併法が施行され、基礎自治体の規模拡大が図られることとなった。昭和

---

101 孫六の開湯については、林みかん著「乳頭温泉郷」無明舎出版　平成 16 年４月を参照。また、現在の経営については、現地調査ヒアリングを参照。

102 現地調査ヒアリングを参照。

103 この項については、新田沢湖町史編纂委員会「新田沢湖町史」平成９年３月を主に参照。また、乳頭温泉郷ホームページ「乳頭温泉郷　歴史年表」http://www.nyuto-onsenkyo.com/history/chronology/（令和７年６月最終確認）も参照した。

の大合併の開始である。この流れの中、田沢村・生保内町と神代村が合併、昭和 31（1956）年、田沢湖の東半分が田沢湖町として統合される。この田沢湖町は、平成 17（2005）年、平成の大合併で仙北市が誕生するまで続く。

終戦直後の 1940 年代半ば～1950 年代半ばの時期、高度経済成長が開始するまでは、国民の窮乏も続いており、乳頭温泉郷の利用も夏期に大学などの教育・研修事業の場に利用されるに止まっていた。その後、経済の復興・発展が本格化するに伴い、昭和 30 年代後半から 40 年代、50 年代にかけ、まず田沢湖周辺の交通基盤が整備されていく。

第二次世界大戦前から進む道路開発については、昭和 37（1962）年、除雪体制が整い、冬季でも田沢湖高原地域までの運行が可能となった。これを皮切りに、昭和 39（1964）年には峠越えの工事が進み、国道 46 号線が「南八幡平パークライン」として盛岡・田沢湖間を直結した。国道 46 号については、さらに昭和 51（1976）年、盛岡との間の峠にトンネルが開通し、冬季でも太平洋側から日本海側までの直通が可能となった。昭和 44（1969）年には田沢湖の一周道路が完成、昭和 50（1975）年には主要地方道十和田角館線が国道 341 号に格上げされ、田沢湖・八幡平・十和田湖という広域観光ルートも構築された。一方、鉄道については、昭和 41（1966）年、岩手県側からの路線が生保内駅まで開通、大曲から盛岡までの路線名が田沢湖線となり、駅名が田沢湖駅に改名されている。この他、地域内の道路の整備も次々と進み、高度経済成長が終焉するまでには、田沢湖周辺の地域は、かつてとは様変わりし、観光交通至便の地に変身することになった。

これに合わせ、観光業自体も大きな発展を見せる。第二次世界大戦前までは前述した湖心亭と蓬莱館（大正 13（1924）年に青年館として開業）の２軒しかなかった湖畔の宿泊施設も、昭和 30 年代以降、陸続と大型旅館・ホテルの開業を迎え、休憩施設も多く整備された。観光振興については、昭和 28（1953）年に田沢湖観光協会が発足し、同年から、幾度かの中断を挟みつつ、田沢湖観光まつりを実施している。また、昭和 31（1956）年には乳頭温泉郷が十和田八幡平国立公園の一部となり（既に開業していた鶴の湯温泉、黒湯温泉、蟹場温泉、孫六温泉、妙乃湯については、この時、自然公園法に基づく宿泊事業として認可を受けている）、昭和 35（1960）年には、「田沢湖・抱返り渓谷」が県立自然公園に指定された。

こうした田沢湖観光の盛り上がりに合わせ、乳頭温泉郷と田沢湖の間に位置する田沢湖高原の開発も進み、それまで展望台程度しかなかった地域に、昭和 36（1961）年には町営国民宿舎「駒草荘」が、翌年には田沢湖スキー場が完成している（その後、田沢湖高原アッスルスキー場に改名し、平成の後半に廃業）。これを皮切りに田沢湖高原では、昭和 43（1968）年に日本体育協会の青少年スポーツセンター、昭和 45（1970）には秋田県立のスキー場も開業、宿泊施設も林立することとなった。

田沢湖高原の開発に続いたのが乳頭温泉郷の観光地化である。昭和 36（1961）年の第 16 回国民体育大会秋季大会登山部門が乳頭山と駒ヶ岳を会場としたことを契機に、乳頭温泉郷のある地域も登山の拠点として着目されることとなった。また、この大会の２年前、昭和 34（1959）年には、営林署の事業用林道「鶴の湯線」が開通しており（西山生保内線から鶴の湯温泉入り

口で分かれ、鶴の湯温泉に至る一部未舗装の道路。昭和 51（1976）年に町道に編入）、蟹場温泉に向かう西山生保内線も県道に認定され、自動車での入山が可能となっていた。

これに対応し、乳頭温泉郷の各温泉宿では、湯治客向けの自炊の宿泊施設だけでなく、昭和 29（1954）年の鶴の湯温泉を皮切りに、短期客向けの旅行部を設け、一般観光客への対応を開始した。昭和 38（1963）年には鶴の湯温泉までのバス路線が開通（昭和 53（1978）年、マイカーブームにより路線廃止）、また、昭和 40（1965）年には「乳頭山麓国民休暇村」が開業、温泉が楽しめるとともに、広大な敷地内にキャンプ場やスキー場（スキー場は平成 15（2003）年に休業し、その後廃止）などが整備された。休暇村では、昭和 54（1979）年に全国自然公園大会、昭和 57（1982）年には第 20 回全国スポーツ少年大会が開催され、それぞれ常陸宮（ひたちのみや）・同妃殿下が行啓されるなどしており、全国的な知名度を大きく向上させることとなった。なお、黒湯温泉まで自動車が入れるように道路が整備されたのはこの行啓に合わせてのこと、黒湯温泉にはこの時高松宮殿下の宿泊用に建設された山荘も残っている[104]。また、昭和 42（1967）年には、乳頭温泉郷は、田沢湖高原温泉郷とともに、国民保養温泉地となっている。

上述した国民休暇村に加え、第二次世界大戦後、乳頭温泉郷には新しい温泉地が２カ所増えている。ひとつが昭和 27（1952）年に、黒湯温泉で働いていた人が源泉を発見し、昭和 30（1955）年に開業した「妙乃湯（たえのゆ）」、もうひとつが昭和 37（1962）年に開業した「大釜温泉」である。このうち大釜温泉については、いったん廃業状態になった後、昭和 44（1969）年に別の経営者により再開したものの、昭和 52（1977）年にそれまでの山小屋風の建て屋が全焼、その後昔の小学校の建物を解体･移築して再建という経緯を辿っている。また、昭和 24（1949）年には、鶴の湯温泉、孫六温泉、蟹場温泉、黒湯温泉が集まって乳頭温泉郷組合が発足、この組合には、その後開業した３つの宿も順次加入している。これにより、第二次世界大戦前まで各宿の個別運営が主だった乳頭温泉郷に、宿屋同士の繋がりが作られていく。

＜湯治場としての変遷[105]＞

先に述べたように、乳頭温泉郷では、昭和 30 年代後半に至るまで江戸時代以来の湯治場の伝統がそのまま続いていた。第二次世界大戦後しばらくの間まで、鶴の湯温泉では、地元の田沢・生保内地区をはじめ、横手・秋田・本庄・由利郡などの農村・漁村からの湯治客が宿泊者の殆どを占めている。湯治の期間は９泊 10 日が相場で、自炊のため、湯治客は山に入って筍を採ったり、川に行ってイワナやヤマメを釣ったりしていた。第二次世界大戦前と同様、湯治客から筍を買う仲買人もおり、また、あめ売りの商人も訪れていたという。時期は田植えの後、夏の草刈りの後、稲刈りの後などの農閑期である。湯治客が 100 人を超えると、客が民謡や三味線などを披露する演芸会も開かれるなど賑わいを見せた。宴会の場には、当初、

104 現地調査ヒアリングによる。

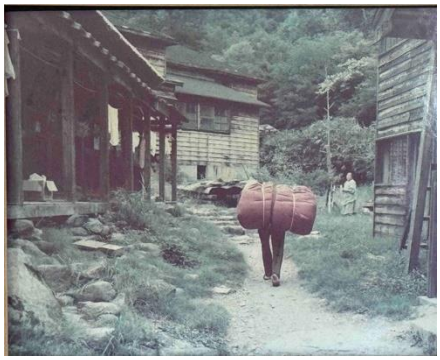
105 この項については、無明舎出版編「鶴の湯温泉物語」無明舎出版　平成 11 年２月、林みかん著「乳頭温泉郷」無明舎出版　平成 16 年４月を参照。また、乳頭温泉郷ホームページ「乳頭温泉郷　歴史年表」http://www.nyuto-onsenkyo.com/history/chronology/（令和７年６月最終確認）も参照した。

鶴の湯神社が利用されていた[106]。

上述したように、昭和 30 年代半ばまで自動車が入れる道がなかったため、それぞれの温泉地の湯治客は、自炊用の食料品やランプ用の灯油などを麓から徒歩で担いで登らなければならなかった（乳頭温泉郷が電化されたのは昭和 40（1965）年である）。荷背負（にじょ）いを頼むと、三斗俵（約 45kg）の俵を担ぎ、一個 5 kg の味噌缶を両手に提げて、15㎞ の山道を担いで登ってくれた。湯治の期間が二廻りとなると、中上げといって、追加の食料の運搬を頼んだという。また、鶴の湯温泉では、昭和 20 年代に共同の炊事場ができるまで、自炊の調理は各部屋の囲炉裏で行っていた。鶴の湯温泉、黒湯温泉、蟹場温泉、孫六温泉など第二次世界大戦前からの温泉地には､同じような湯治場時代のエピソードが多く残されている｡また昭和 30(1955)年頃までは、全ての宿が冬季休業を続けていた。その後、道路の整備などにより通年営業の宿が増え、現在では、黒湯温泉を除く全ての宿泊施設が通年営業となっている。



昭和 30（1955）年頃の黒湯温泉の様子。荷物を抱えた湯治客が写っている。画面右にあるのは今も使用されている黒湯下の源泉。ただし、現在ではさらに川下に移動しているため、左に写る建物は取り壊されている。
※黒湯温泉ポストカード



昭和後半の黒湯温泉の湯治客の様子。寝具を抱えている。
※黒湯温泉ギャラリー展示写真

こうした伝統的な湯治場の姿が変わっていったのが、昭和 30 年前後の時期である。登山客などの増加に対応し、先に述べたように、鶴の湯温泉を皮切りに各宿に湯治客滞在用の施設の他に、一般客用の食事付きの客室（乳頭温泉郷では「旅館部」と呼ばれる。対して、従来の湯治客用の施設は、旅館部に対して「自炊部」と呼ばれるようになった）が置かれるようになった。その後、他の宿も追随し、昭和 30 年代には旅館部があることが当たり前となった。

昭和 40 年代が終わり、高度経済成長が終焉する頃になると、兼業農家が増えていったことから、農閑期に湯治をする農村の宿泊客が減少、伝統的な湯治場から観光地としての温泉地への移行が進んでいく。次第に自炊での長期の湯治を楽しむ人は少なくなり、短期で食事付きを希望する顧客が増加、結果令和 7 年現在では、逆に「自炊部」が残っている宿泊施設は鶴の湯温泉と黒湯温泉のみとなっている。このうち鶴の湯温泉では自炊客が近年大きく減少している。一方、黒湯温泉では、自炊棟を二棟維持しており、いまでも一定数の自炊客が集まっているという。

106 現地調査ヒアリングによる。

自炊については、かつては部屋ごとの囲炉裏を利用していたが、現在は安全上の問題から囲炉裏は鍋などの温め程度に限定し、基本は共同炊事場を使うものへと変更されている。また、自炊客といっても、かつてのような県内の農家の農閑期の骨休めというわけではなく、自炊で温泉を楽しむタイプの観光客と言った方がよく、滞在期間も、一泊二日か二泊三日程度である。鶴の湯温泉では、新型コロナウイルス感染症が蔓延する前のまだ一定数の湯治客がいた時の話となるが、関東圏から取れたての魚をクーラーボックスに入れて自動車で乳頭温泉郷まで来る宿泊客も少なくなかったという。一方、黒湯温泉では、これも新型コロナウイルス感染症蔓延以前のこととなるが、１月ほど滞在し、瓶詰めにして販売するために山菜や筍・茸を採取していた人もいた[107]。



鶴の湯温泉の共同炊事場



黒湯温泉の共同炊事場

湯治客の減少が著しくなった昭和 54（1979）年、乳頭温泉組合が、温泉郷の７つの湯を宿泊客が回ることができる「湯めぐりスタンプ帳」の発行を開始した。「湯めぐりスタンプ帳（現：湯めぐり帖）」は、個々の宿だけでなく、伝統的な湯治場の雰囲気を色濃く残す乳頭温泉郷全体の魅力を入湯客に伝えるとともに、協働で温泉地としての振興に取り組む有力な仕掛けである。この「湯めぐりスタンプ帳」の他の温泉地にはあまり見られないポイントとして、温泉組合からの卸値と各旅館での販売価格が同じ、つまり、収益が全て組合の財源となるという点がある。これにより、組合は、温泉郷全体のプロモーションを大きく進めていくだけの財源を手に入れることができた[108]。

こうした内部の努力に加え、昭和 60 年代に入ると秘湯ブームが到来、これが、交通至便（東京から３時間半程度）なのにも関わらず、環境的にも、湯治場の風情を残している点でも、秘湯としての魅力をわかりやすく持つ乳頭温泉郷の評価を大きく高めることとなった。

乳頭温泉郷が秘湯ブームの中心となったのは平成初めの時期である。平成４（1992）年に

---

107 乳頭温泉郷ホームページ「宿泊施設のご案内」http://www.nyuto-onsenkyo.com/information.html（令和７年６月最終確認）、現地調査ヒアリング。

108 これ以降の段落については、内田彩、無量井春菜*、鈴木愛、山﨑瑞季「温泉組合を中心とした旅館の事業継承の取り組みについて－乳頭温泉郷を対象に－」第 39 回日本観光研究学会全国大会学術論文集　令和６年 12 月　P370-P375、及び、乳頭温泉郷ホームページ「乳頭温泉郷　歴史年表」http://www.nyuto-onsenkyo.com/history/chronology/（令和７年６月最終確認）と現地調査ヒアリング。

は、鶴の湯がブルーガイド（実業之日本社）「温泉 100 選・露天風呂の部」１位に選定され、以降 10 年間トップを維持し続ける。平成 10（1998）年には「日本旅のペンクラブ賞」を受賞、文化人や著作者が会友の「日本旅のペンクラブ（旅ペン）」主催のこの賞を受賞したことで、乳頭温泉郷のマスコミ露出がさらに拡大した。平成 12（2000）年には、公益社団法人日本観光協会の「優秀観光地づくり賞」、平成 14（2002）年には日本経済新聞温泉大賞「あこがれ賞」及び「岩切章太郎賞」も受賞、平成 15（2003）年には旅行読売出版社「にっぽん温泉遺産 100」上位 10 選にも入っている。また、平成９（1997）年には秋田新幹線も開通しており、秘湯ブームにのった乳頭温泉郷の人気を交通面からも力強く支えることとなった。この中で、温泉が好きな人々や一般観光客の来訪が大きく増えていく。一方、登山客については、全体的に高齢化が進み、数を減らしていくこととなった。



乳頭温泉郷の飛躍のきっかけとなった「日本旅のペンクラブ賞」と「優秀観光地づくり賞」については、石碑が建てられている。

「湯めぐりスタンプ帳」に始まる乳頭温泉郷全体としての魅力度の向上、及び、秘湯ブームの到来は、乳頭温泉郷を、長い伝統を持つ湯治場というだけでなく、現代のニーズに対応した魅力的な温泉地として大きく発展させてきている。令和元（2019）年、新型コロナウイルス感染症蔓延前の時点で乳頭温泉郷の観光客数は、176,646 人と、僅か７軒しか旅館のない秘湯とは思えないほどの数に達している[109]。これまでの経緯を見ても、バブル景気崩壊の時期は秘湯ブームの中心に乳頭温泉郷がなった時期でもあり、他の温泉地のような客足の減少を見ることはなく、その後も、新型コロナウイルス感染症蔓延時期を除き、極めて高い稼働率を維持し続けている。

この背景には、乳頭温泉郷のそもそものポテンシャルに加え、外部からの評価で自信を深めた乳頭温泉郷の組合及び各温泉宿の多様なチャレンジがある。まず指摘されるのが、国立公園内に立地しているという環境条件である。各温泉宿は紅葉の美しい渓流沿いや日本有数の自然のブナ林などの絶景を、多くは露天風呂から、楽しめるようになっており、また周囲

109 秋田県ホームページ「秋田県観光統計　各年資料」https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/9790（令和７年６月最終確認）を参照。

の開発が制限されているため、過剰開発による自然破壊に脅かされることもない。国立公園内における新築や増改築、広告物の設置や土地形状の変更についての厳しい規制は、そもそも施設規模の拡大が難しい、立て替えの際可能な限り既存の建て屋の構造を維持する必要がある、外壁に使える色が焦げ茶や黒などに限定されるなど、各温泉地の施設の整備や維持自体をも強く縛っている。乳頭温泉郷の各温泉宿では、こうした規制の下に工夫を続けることで、自然環境を害しない規模やデザインを維持するとともに、古くは明治・大正からの歴史性を持った建て屋を継承し、独特の情緒を保ってきた。厳しい規制が乳頭温泉郷ならではの大自然と文化空間の継承に繋がっている。

江戸時代以来の湯治場としての伝統も大きな役割を果たしている。歴史的な建造物に加え、神社や石仏などもあり、大昔の雰囲気を伝える。また、かつてのような長期の自炊による湯治自体は廃れてしまっているものの、そこで培われた文化的な伝統は今も要素として生き残っている。そのひとつが混浴の習慣である。乳頭温泉郷では、山中に作られた狭い浴場に男女の隔てなく入浴するという混浴の文化を伝えており、今も、露天の最も良い浴場を混浴にしている宿が多い。混浴に加え、もう一つの伝統として食文化がある。先述したように、湯治客は、山菜を採り、筍を掘り、イワナやヤマメを釣っていた。乳頭温泉郷の各宿では、旅館部で出す食事でこうした伝統を活かしており、今も地場の山菜・筍・川魚を中心とした山の料理を出し続けている。

こうした温泉郷全体を通じた魅力に加え、乳頭温泉郷の７つの宿それぞれの努力・個性も光る。最も開湯が古い鶴の湯では、藩主御用達の歴史を感じさせる鶴の湯温泉本陣の建て屋を中心に、風格のある空間を伝える。黒湯では、未だに冬季休業を続け、自炊棟を２棟も残すなど、古き良き湯治場の風情をもっとも濃く感じられる温泉地となっている。蟹場では乳頭温泉郷の大自然に浸れる原生林の中の露天風呂を設えていることが特徴である。孫六は、令和７（2025）年春、伝統的な湯治場の建て屋の躯体を最大限に残しつつ、隠れ家的な高級温泉リゾートに生まれ変わった。妙乃湯は、女性経営者が建築デザインからインテリア、サービスのひとつひとつにまで気を配ったモダンジャパニーズな宿として運営されている。旧い小学校を移築した大釜温泉にはノスタルジックな雰囲気が残り、乳頭温泉郷唯一の足湯もある。そして休暇村は、他とは打って変わり、近代的なホテル型の宿泊棟を持ち、キャンプ場などアウトドアのアクティビティが楽しめる施設となっている。

これらのそれぞれに個性的な魅力を持つ施設を繋ぎ、地域全体の魅力を楽しめるようにしているのが、先に述べた「湯めぐり帖（当初の湯めぐりスタンプ帳から、湯めぐり帖と湯めぐりマップに改訂されている。湯めぐり帖は宿泊客向けで全ての温泉地の日帰り入浴料込み、湯めぐりマップは日帰り客向けで湯めぐり号の乗車権利のみで入浴料は温泉地ごとに支払う）」である。平成 21（2009）年には「湯めぐり帖・湯めぐりマップ」を持っている人が無料で乗車できるシャトルバス「湯めぐり号」も、湯めぐり帖の売上により整備されており、これにより域内の回遊が非常に便利になった。



宿泊客用の「湯めぐり帖」と日帰り入浴用の「湯めぐりマップ」



入湯客を乗せて乳頭温泉郷内を巡回している「湯めぐり号」。この就役により回遊が格段に楽になった。

その他、組合では、地域としてのウェブサイトの運営[110]やSNS、取材対応などのPR、「乳頭温泉郷」等の商標登録や乳頭温泉組合として地域団体商標の取得による地域ブランドの維持などを実施している。平成25（2013）年には、妙乃湯関係者によりグローカルプロモーション株式会社が設立され、ウェブサイトやSNSなど乳頭温泉郷を中心とした温泉地・温泉文化のプロモーション業務や、インバウンド対応のウェブサイト運営などを実施し、乳頭温泉郷のブランド向上に活躍している[111]。また、温泉組合自体も、令和５（2023）年に、協同組合として法人化されている。

また、乳頭温泉郷のもう一つの強みとして事業継承がうまく行われてきていることも指摘される。個人事業主が主体の小規模な温泉旅館の場合、経営自体はうまくいっていても、後継者不足により廃業に至る場合が少なくない。この点、乳頭温泉郷では、親族以外への事業継承がこれまで何度も行われてきており（黒湯、鶴の湯、大釜など）、令和４（2022）年から６年にかけて、孫六温泉が、経営者の高齢化と新型コロナウイルスの影響により事業継続を断念した時も、組合が行政と協力しながら事業継承を検討した結果、組合員による共同出資での継承に成功している（その後、株式を大仙市の東商事株式会社に売却。東商事株式会社は、メッキ会社の東電化工業株式会社を中心としたAZUMAグループの一員で、食品販売・農業・旅行業・不動産業などの事業を行っている企業[112]）。

こうした事業継承の成功の背景としては、先に述べた乳頭温泉郷自体が、秘湯ブーム以降、好況を継続してきたことがある。こうした外部環境に加え、温泉郷内部や近隣の旧仙北郡などの範囲で、1970年代以降、個別の宿単位ではなく、地域全体での振興体制を作り上げてきた実績が、後継者不足という伝統的な温泉地に多く見られる困難な課題に対しても有効に機能したのである。

---

110 乳頭温泉郷ウェブサイト　http://www.nyuto-onsenkyo.com/index.html（令和７年６月最終確認）

111 グローカルプロモーション株式会社ホームページ　https://glocal-promotion.com/index.html（令和７年６月最終確認）を参照。

112 東商事株式会社ホームページ　https://azuma-trading.co.jp/#topCompany（令和７年６月最終確認）を参照。

乳頭温泉郷の源泉

乳頭温泉郷の源泉は、温度は 30 度から 90 度近く、泉質は硫黄泉が多いが、単純温泉、ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩泉などもあり、バラエティに富む。また一部飲泉にも使用されている。

古来、沢沿いに多くの源泉が発見されており、現在でも、少しの掘削で新たな源泉が見つかる。また、管理されていない源泉も多くあり、一部は温泉が好きな人々に野湯として利用されている（安全性に懸念があるので、乳頭温泉郷では利用を推奨していない）。そのため、基本的には、温泉地（宿）ごとにそれぞれの源泉を保有・使用しているが、休暇村では、一部仙北市所有の源泉を利用している。また、孫六では、自前の源泉に加え、黒湯からの引き湯を実施する予定である（令和７年現在の計画）。

なお、現在、乳頭温泉郷がある地域では新たな源泉の掘削は制限されている。また、高温の源泉が多く、温度調整のために加水を行っている例が複数の温泉地で見られるが、乳頭温泉郷には水道設備はなく、加水用の水源は沢の水が使われている。温泉の廃湯はそのまま沢に流されており、下水については各施設の浄化槽で処理されている。



先達川にある野湯。他にも幾つかよく知られた野湯があるが、令和７年６月現在、橋が落ちているため、アプローチができない。
なお、野湯についてはテレビなどのマスコミで紹介されることも多いが、上述したように安全性が担保されていないため、乳頭温泉郷共同組合では野湯へのアテンドは行っていない。

＜鶴の湯温泉＞

鶴の湯温泉には、敷地内に６つの源泉がある。歴史的に旧いのは江戸時代の古文書にも名前が残る白湯、黒湯、中の湯の３つである。温泉地の名前を取った鶴の湯源泉は第二次世界大戦後に重機で地面を掘ったところ湧出したものである。

白湯源泉は女性専用の露天風呂「太白（おじろ）の湯」から 10m ほど離れた場所にあり、木の蓋をかぶせてある。「太白の湯」の底からは太白源泉が湧出している。黒湯源泉は東本陣のそばにある。鶴の湯源泉は混浴の露天風呂の下から湧出している。また、打たせ湯に利用している滝の湯の源泉も、白湯の浴場の建て屋の近くから湧いている。中の湯の源泉のみやや離れており、敷地の先の川下から山道を登った先にある。

下記、令和６（2024）年の温泉分析による掲示に基づき各源泉の状況を記す。なお、湧出量

については、平成 29（2017）年に発行された国民保養温泉地計画書の数値を引用した（計画書には、白湯・黒湯・鶴の湯の３源泉のみ記載）[113]。この他、野湯が複数湧いている。なお、中の湯源泉は、800m 先にある鶴の湯別館「山の宿」にも引き湯されている。

源泉名：白湯
泉温　59.7 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉（硫化水素型）／湧出状況　自然湧出／pH 6.5／（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　58.1 リットル分）

源泉名：黒湯
泉温　60.8 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉（硫化水素型）／pH 6.9／湧出状況　自然湧出／（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　湧出量　14.1 リットル分）

源泉名：鶴の湯
泉温 43.3 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉／湧出状況　自然湧出／pH 6.8／（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　湧出量　80.0 リットル分）

源泉名：中の湯
泉温　48.5 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉（硫化水素型）／湧出状況　自然湧出／pH 6.7

源泉名：太白
泉温 55.3 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉／湧出状況　自然湧出／pH 7.0

源泉名：滝の湯
泉温 52.7 度／泉質　ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩温泉／湧出状況　自然湧出／pH 6.6


鶴の湯温泉の白湯の源泉


鶴の湯温泉の黒湯の源泉
※鶴の湯温泉提供写真

113　環境省「田沢湖高原温泉郷　国民保養温泉地計画書」平成 29 年１月



鶴の湯温泉の中の湯の源泉。川から少し登ったところにある。



鶴の湯温泉の混浴露天風呂。湯船の下から鶴の湯源泉が湧出している。



鶴の湯温泉の女性用露天風呂。湯船の下から太白源泉が湧出している。

＜黒湯温泉＞

黒湯温泉には多数の源泉があり、大きなものを、川上にあるか川下にあるかの位置関係によって、暫定的に「上」、「下」などと呼称している。ただし、実際には敷地内各所から湧出しており、区分けが付きにくい状況にある。下記、令和６（2024）年の分析に基づき掲示されていた温泉分析表に基づき、源泉の状況を記す。いずれも硫黄泉であり、酸性度が高い。

この他に、主なものとして、黒たまごを作るために利用している源泉、高松宮の行啓に際に作った山荘用の源泉などがある。

源泉名：黒湯上

泉温 72.9 度／泉質　単純硫黄泉（硫化水素型）／湧出状況　自然湧出／pH 2.9／

湧出量　88.0 リットル分

源泉名：黒湯下１

泉温 54.7 度／泉質　単純硫黄温泉／湧出状況　自然湧出／pH 4.3／

湧出量　45.0 リットル分

源泉名：黒湯下２

泉温 86.6 度／泉質　酸性・含硫黄-単純温泉／湧出状況　自然湧出／pH 2.8／

湧出量　23.0 リットル分



左右双方とも川上にある源泉（すぐ隣りに並んでいる）。右側の木組の下にある方が泉温は高い。





川下にある源泉。ポストカードになっている昭和 30 年頃の写真に写っていた源泉で位置が当時よりさらに川下側になっている。左奥の川に近い方の泉温が高い。



川下にある源泉のすぐ横に湧出している高温の源泉。黒たまごを作るために使っている。



高松宮行啓の際に作った山荘用の源泉。山中に入ったところにある。

＜蟹場温泉＞

蟹場温泉では敷地内に湧出している３本の源泉を利用している。下記、令和５（2023）年の温泉分析表に基づき、源泉の状況を記す。

源泉名：唐子

泉温 49.8 度／泉質　単純硫黄温泉／湧出状況　自然湧出／pH 7.62／

湧出量　121.7 リットル分

源泉名：蟹場

泉温 51.6 度／泉質　単純硫黄温泉／湧出状況　自然湧出／pH 8.0／
湧出量　58.8 リットル分

源泉名：ひなざくら

泉温 49.7 度／泉質　単純硫黄温泉／湧出状況　自然湧出／pH 8.0／
湧出量　40.9 リットル分



蟹場温泉の露天風呂「唐子の湯」のすぐ脇にある唐子源泉



蟹場源泉



ひなざくら源泉。奥のマンホールではなく、手前の木組と落ち葉の下にある。

＜孫六温泉＞

孫六温泉では敷地内に湧出している２本の源泉を利用している。また、令和７年現在、黒湯からの引き湯を計画している（既に引き湯管は引かれているが、令和７年６月現在、引き湯の際の湯温低下の問題が残り、まだ引き湯を開始していない）。

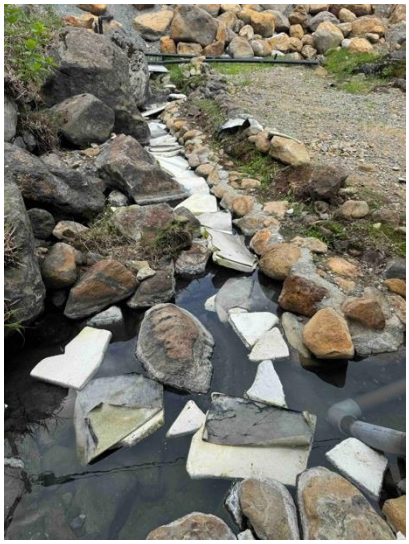
下記、令和６（2024）年の温泉分析による掲示に基づき各源泉の状況を記す。なお、湧出量については、平成 29（2017）年に発行された国民保養温泉地計画書の数値を引用した。

源泉名：唐子の湯

泉温 70.0 度／泉質　単純温泉､硫黄泉／湧出状況　自然湧出／pH 6.6／(平成 29(2017)年報告書記載の湧出量　20.8 リットル分)

源泉名：石の湯

泉温 50.8 度／泉質　単純温泉／湧出状況　自然湧出／pH 7.1／（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　10.4 リットル分）



孫六温泉の唐子の湯源泉。溝全体から湧出しており、保温のため発泡スチロールが浮かべられている。

石の湯源泉。浴槽の脇から湧出している。また浴槽自体からも湧出している。



＜妙乃湯温泉＞

妙乃湯はもともと敷地近くにある「妙乃湯源泉」を銀の湯として利用していた。その後銀の湯が温度低下したため、2～2.5km ほど離れた山中にある新たな源泉「湯本」の利用を金の湯という名称で開始している。源泉「湯本」は、次の大釜源泉と並び、乳頭温泉郷でも最も酸性度が高い。

下記、施設内に掲示されている温泉分析表に基づき、各源泉の状況を記す。

源泉名：妙乃湯（銀の湯）

泉温 23.0 度／泉質　単純温泉／湧出状況　自然湧出／pH 6.4／

湧出量　200.0 リットル分

源泉名：湯本（金の湯）

泉温 67.0 度／泉質　単純酸性温泉／湧出状況　自然湧出／pH 2.7／

湧出量　42.0 リットル分



山中にある妙の湯の湯本源泉（金の湯）。写真中央右やや上の黒いところの先に源泉が流れ込んで溜まっている「釜場」がある。

＜大釜温泉＞

大釜温泉は、初めて、近場の源泉ではなく、離れた源泉地（2～2.5km ほど宿舎敷地から離れた山中にある）からの引き湯を使って開業した温泉地である。源泉は妙乃湯の源泉「湯本」の近くにある。

施設内に掲示されている平成 24（2012）年の温泉分析に基づく源泉の状況は下記の通りである。

源泉名：大釜温泉

泉温 94.2 度／泉質　含鉄 - 単純酸性泉／湧出状況　自然湧出／pH 2.5／

湧出量　66.0 リットル分



山中にある大釜温泉の源泉。写真中央若干右側の下に釜場がある。
塩化ビニールの引き湯管が左に向かって伸びている。

＜休暇村乳頭温泉郷＞

休暇村では敷地内にある源泉と、仙北市が所有する隣接する山地にある蒸気泉の２つを利用している。蒸気泉については１号から４号まであるが、現在使用しているのは２号のみで、これに沢の水を当てて温泉を造成している。

なお、仙北市の所有源泉については、かつて田沢湖高原の宿泊施設への配湯も行っていたが、現在では中止し（現在、田沢湖高原温泉の各宿泊施設には水沢温泉の源泉から配湯）、休暇村にのみ配湯している。

下記、令和５（2023）年の温泉分析による掲示に基づき各源泉の状況を記す。なお、湧出量については、平成 29（2017）年に発行された国民保養温泉地計画書の数値を引用した。

源泉名：乳頭の湯

泉温 49.5 度／泉質　ナトリウム - 炭酸水素塩泉／湧出状況　動力揚湯／pH 6.9／

（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　30.0 リットル分）

源泉名：田沢湖高原の湯（造成井）

泉温 62.4 度／泉質　単純硫黄泉（硫化水素型）／湧出状況　自然湧出／pH 5.2／

（平成 29（2017）年報告書記載の湧出量　575.0 リットル分）



休暇村乳頭温泉郷本館から登ったところにある乳頭の湯の源泉。源泉自体は写真右下の鉄板の下にある。
写真中央に建っているのはポンプなどの制御装置となっている。





仙北市所有の蒸気泉（左）と、温泉の造成装置（右）。左の写真の左部に写っている蒸気のパイプが、右の写真の左にあるタンクにつながり、そこから写真中央の丸石が張られた装置に流されて温泉が造成される。
源泉に差し込まれているケーシングがかなり劣化しており、現在は２号泉しか稼働していない。

乳頭温泉郷の各温泉地の概況と湯の管理の技術[114]

＜鶴の湯温泉＞

鶴の湯温泉は、先述した通り、乳頭温泉郷最古の温泉であるとともに、平成４（1992）年から 10 年に亘ってブルーガイド（実業之日本社）「温泉 100 選・露天風呂の部」１位に選定され続けた日本の代表的な秘湯の一つでもある。

駐車場から敷地の入り口に入ると、明治元（1868）年に建て替えられた国の有形登録文化財である茅葺きの鶴の湯温泉本陣があり、横に事務所棟、向かいに宿泊棟である二号館、三号館（三号館には自炊用の共同炊事場がある）が並ぶ。その他の建物を含め、全て黒塗りの木造の建て屋となっており、江戸期の温泉街を思わせる風情ある佇まいである。部屋は全て和室で、和室の宴会場もある。また鶴の湯温泉本陣の５つの部屋の他に３室、囲炉裏付きの部屋が用意されている。



鶴の湯温泉の入り口。左が鶴の湯温泉本陣の建物。江戸・明治の情緒を残す温泉街のようになっている。



水車。かつては自家発電の一翼を担っていたが、現在は修景要素。

県道から離れているため、東北電力から電気を引くようになったのは 2000 年代になってからで、それまでは自家発電であった（もともとディーゼル発電であったが、水車を作り、一時それも発電に利用していた）。そのため、電圧が安定せず、電球や冷蔵庫がすぐに壊れていた。現在、電圧問題はないが、温泉の硫黄成分により、デスクトップ PC などはすぐに壊れてしまう。なお、鶴の湯温泉本陣の５部屋については、かつての伝統を残し、今も照明には灯油のランプを使えるようにしている（電灯もある）。宿泊客は、ランプの灯りと囲炉裏で、かつての湯治のありようを偲ぶことができる。

鶴の湯温泉には、露天風呂として混浴と女性専用のものが１つある。混浴露天には女性専用スペースが設置されている。内湯としては、白湯、黒湯、中の湯の３つが、こちらは男女別に浴室を分けて、独立の建て屋で提供されている。その他、打たせ湯として滝の湯と貸切風呂がある。このうち古くからあるのが白湯、黒湯、中の湯で、ふたつの露天風呂は半世紀ほど前に源泉を掘って作っている。この他、正式な浴場ではない野湯が複数湧いており、内１つは、浴場と繋がっているため、入浴することができる。

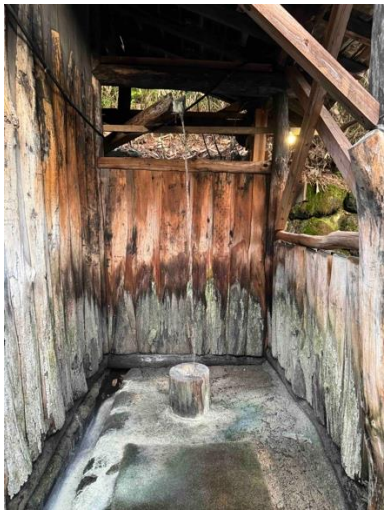
114 この項は現地調査ヒアリングによる。



鶴の湯温泉の白湯。若干白濁している。



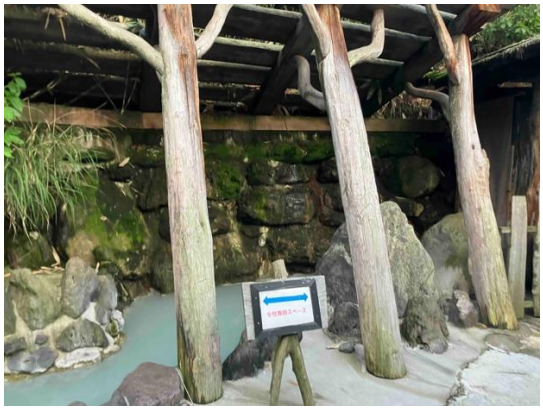
鶴の湯温泉の黒湯。白湯と比較すると灰色みがある。



滝の湯。打たせ湯となっている。

中の湯外観。





混浴露天風呂の女性専用スペース。



女性専用の露天風呂の近くには野湯も湧いており、入ることもできる。

混浴露天風呂と女性用露天風呂の源泉については足下湧出である（女性用露天風呂については白湯も利用している）。現在では、硫化水素中毒などの危険があるため足下湧出は認められていないが、以前からの浴槽ということで足下湧出のままとなっている。白湯、中の湯、滝の湯は敷地内にある源泉から短い距離引き湯をしている。引き湯用のパイプは塩化ビニールである。また基本は自然流下だが、貸切風呂では黒湯をポンプアップして利用している。

空気と触れないパイプ内にスケールが溜まることはなく、湯の花は浴槽に流れて空気と触れてから析出する。そのためパイプの清掃は行っていない。ただし、継ぎ手の部分が壊れることはあり、たまにその交換は行うが、パイプ自体は敷設以来交換していない。浴槽は週１回お湯を抜いて清掃している。

湯温が高い源泉が多いため、沢の水を入れて温度を下げて利用している（ただし、混浴露天で利用している鶴の湯源泉は、源泉の温度が比較的低いため、冬場などは滝の湯の源泉を加えて温度を保っている）。加水については、引き湯をしている源泉では、源泉近くで加えている。掛け流しのため、源泉自体に消毒用の塩素は加えていないが、加水に使っている沢水自体には消毒用の塩素が加えられている。



中の湯源泉からの引き湯のパイプ（下の塩ビ管）。途中に沢水を加水して温度を下げるための口が開いている。



バルブを回して、沢水の加水量を変更しているところ。湯温が変わる度にこうした調整を行う。

＜黒湯温泉＞

乳頭温泉郷で二番目に旧い黒湯は、昭和 39（1964）年に高松宮が行啓された際、スコップで道路を作り自動車が入れるようにした温泉地で、それまでは徒歩でしかアプローチできなかった。電力も、東北電力から引くようになったのは近年のことで、それまで自家発電に頼っていた。また、現在も冬季は除雪ができず、11 月半ばから４月前半までは施設を閉めている。

先にも述べたように、大正時代に建設された黒湯最古の自炊棟（囲炉裏が付いているが、炊事はできず、鍋などの温めのみ）と、共同炊事場が付帯した自炊棟（一部職員宿舎）の２棟を擁し、現在自炊客が乳頭温泉郷で最も多い温泉地となっている。自炊が多かった頃は、山菜や筍・茸・川魚に加え、野兎も狩って食用にしていた。ただし、秋田新幹線が通った頃から、自炊客は大きく減少、また、駒ヶ岳の登山客についても、高齢化が進んで数が減ってきている。自炊棟は全て和室だが、旅館部の建物については、ベッドの入った和洋室も用意されている。



大正時代の自炊棟。この建て屋のみ池田家が事業を継承する以前に建設されている。



自炊棟の内部。囲炉裏がそのまま残っているが、現在は温めのみに使用。

全ての建て屋が黒か焦げ茶の落ち着いた色調となっており、茅葺きの棟も７つある伝統的な風情の残る温泉地である。ただし、自炊客が減ってきていることもあり、素朴な山の宿からやや高級な宿へと少しずつ変更してきている。国立公園内にあることから外観などは変えられないものの、内装を変え、付加価値を向上させている。ただし、山の幸中心の食事を、敢えてプロの料理人ではなく主婦出身の職員に調理を任せて田舎料理として出すなど、これまでの伝統を踏まえたサービスの提供を心がけている。

温泉としては、混浴が内湯と露天、打たせ湯の３つがあり、男湯の内湯が２つに露天が１つ、女湯の内湯が２つ、露天が１つ、打たせ湯が１つ、貸切風呂として内湯と打たせ湯が１つずつある。昭和 30（1955）年頃、湯治客のみであった時は、風呂は全て混浴だったが、旅館部ができてから男女別にしてほしいという要望が強くなり、次第に混浴を減らしてきている。

混浴の浴場では、入り湯の際のタオル着用は不可である。そもそも湯が白濁しているので、出入りの時以外、問題はないと考えている。また、管理人を十分置けないため、女性向けの時間帯は設けていない。なお、混浴については、新たに作ることはできないため、残してほしいという要望を各所から受けている。老朽化した建物の改修が必要となるが、新築よりも費用が掛かるため、一気には進められない。

主な源泉は川の上流にひとつ、そのすぐ近くにひとつ、川の下流にひとつある。この他、高松宮行啓時に建てた別館用の源泉（山の上から引き湯）、川の下流にある源泉の近くの温泉卵（黒湯の「黒たまご」として販売）用の源泉があり、また混浴の露天風呂の中からも温泉が湧出している（黒湯の敷地内のあちこちで自然湧出している）。引き湯については地形を利用した自然流下となっている。

上流の源泉とその近くの源泉は混合され、分湯枡を通して混浴の露天風呂と旅館棟にある男女の内風呂、下流の貸切風呂や打たせ湯に利用されている。下流の源泉は、自炊棟の下に独立した建て屋として建っている温泉施設の男女別内湯と露天風呂用である。



黒湯温泉の受付棟。茅葺きの屋根が右側に見える。計７棟が茅葺きで葺き替えに費用がかかる。



混浴露天風呂。上流の源泉を使用。
※黒湯温泉提供



下流の源泉の近くにある男女別の湯。独立した建て屋となっている。内湯と露天がある。



女性用の露天風呂。下流の源泉を使用。
※黒湯温泉提供

源泉の温度は、上流の大きな池状になっているものは 38 度程度と低いが、その近くの木組で屋根を付けてある源泉は 70 度くらいあり、川の下流の露天となっている源泉も 60 度程度（源泉が広いため、川に近いところでは 80 度以上ある）、その近くの温泉卵を茹でるのに使っている源泉はさらに温度が高く 90 度近くある。源泉の温度は、源泉自体が露天のため、天候によって下がるが、雨が降ると、湯脈に掛かる川の水圧が上がるためか、雨が源泉に入ってしまうにも関わらずかえって湯温が２度ほど上昇する。

下の源泉からの温度調整は、沢から採取した水の加水によって行う。浴槽の湯口に近い中継点で温度を測りながら、加水用の沢水のコックを調整する。この時は、２～３時間後にどうなるかを経験によって判断しながら量を調整していく必要がある。こうした温度の調整は、気温が高い日などは、１時間に１度ずつこまめに行っている。また、内湯の男風呂はやや引き湯の距離が長いため１度高めにするなど、引き湯の状況についても勘案しなければならない。ただし、温度調整をしているのは浴槽用だけで、温泉卵用はしていない（そもそも湧出している源泉をそのまま使っており、調整のしようがなく、またゆで卵に使えるほど常に高温のため、調整する必要もない）。

引き湯は地形を利用した自然流下式である。露天の源泉は湯の花が溜まるため定期的に清

掃し、採取した湯の花は乾燥させ、袋詰にして売店で販売している。パイプの中については、パイプの長さ分の固いホースを利用して中を突き、スケールを落としている。なお、沢水については、湯温を下げるための加水に使うだけでなく、源泉の中にホースを通して熱交換で温水にし、客用の洗面所や洗い場用に使用している。また、源泉が近いため、テレビやPC、非常灯などの故障が非常に多い。



上の源泉から流れてきた源泉は、まず、この分湯枡で露天、旅館棟内風呂、下にある貸切風呂用など４つに分湯される。縦になっているパイプは空気を入れて流れを良くするためのもの。



上の源泉の一部は旅館棟の脇にあるこの枡を通じて下流にある貸切風呂と打たせ湯用に配湯されている。



川下の池状になっている源泉の下流側にある源泉の採取口。ここから塩ビ管で独立の建て屋となっている男女の内湯と露天に流している。



流れが悪くなるとホースで引き湯管の中を突いてスケールを落とす。ホースは、引き湯管の長さに応じた長いもので、先まで届く。



先の採取口から来た塩ビ管（写真の右上）から４つに分かれてこの男女内湯／露天の建て屋の脇の分湯枡に来る。



温度計で分湯枡の温度を測りながら、沢水の加水量を加減し、適度な湯温にしていく。



川下の露天の源泉から清掃の際に集めた湯の花を詰めた土嚢。乾燥させ、黒湯特製の「湯の花」商品として販売している。



源泉の中にある熱交換用のホース。こうしたホースが各源泉の中に多く入れられており、熱交換で温水を作っている。

＜蟹場温泉＞

江戸時代終わりに開業した蟹場温泉は、先に述べたように原生林の中の露天風呂「唐子の湯」（混浴）が印象的な温泉地である。この他に、女性用露天風呂、男女別の木風呂、岩風呂がある。客室は和室のみとなっている。

利用している源泉は３つあり、うち一つ（唐子源泉）が混浴露天用、もう一つ（蟹場源泉）が男女別の木風呂・岩風呂用、最後の一つ（ひなざくら源泉）が女性露天用である。唐子源泉については混浴露天風呂のすぐ横で自然湧出しており、そのまま温度調整せずに露天風呂に流れ込んでいる。蟹場源泉については源泉を枡に溜め、そこで温水を作るための熱交換を行って温度を下げ、その後は掛け流しの湯量の調整で適温にしていく。湯量の調整は、熱い時には浴槽の湯口の樋にスポンジを置いて流れる源泉の量を減らして対応している。また、入浴客自身が水を足すこともできる。

ひなざくら源泉は、木の下に源泉があり、そこからポンプで引き湯をしている。ポンプで流れる源泉の量を調整し、適温にしている。



蟹場温泉正面玄関



混浴露天風呂「唐子の湯」



女性専用露天風呂「ひなざくら」



木風呂



岩風呂



蟹場源泉の湯が溜められている枡。中にあるホースは熱交換用のもの。



左にある枡から塩化ビニールのパイプで引き湯され、中途で木風呂、岩風呂へと分岐している。

＜孫六温泉　六庵＞

孫六温泉は、令和４（2022）年まで、乳頭温泉郷でも特に素朴な山の宿という印象が強い宿泊施設として運営されていた。自家発電のため電力容量に制限があったことから、テレビなどの電化製品も客室に備えられておらず、常連の宿泊客はその不便さをあえて尊重していた。敷地内に乳頭山の登山道入り口があり、登山客が多く泊まることから、女将さんが早起きして山登りの前におにぎりを持たせる風物詩もあった。自動車によるアクセスも、隣接する黒湯温泉の駐車場までであり、そこからは徒歩であった（リニューアル工事の際は仮橋を通して重機を入れた。仮橋は既に撤去されている）。冬場は、車道の除雪が難しく黒湯温泉が閉じてしまうため、大釜温泉から沢沿いに 900m の距離を長い雪中行軍をしなければ宿に辿りつかなかった（現在もこの条件は変わらないため、冬場のアクセスについては様々な施策が検討中である）。

それが、経営者の引退に伴い、大幅にリニューアルすることとなった。歴史の項で先に述べたように地域全体で円滑な事業継承が図られ、令和７（2025）年４月 26 日、孫六温泉から、「孫六温泉　六庵」となって再オープンした。これに合わせて東北電力から高圧電線も引いている（電線敷設の費用は環境省の補助で孫六が負担）。

リニューアルのコンセプトは高付加価値化で、それまでの躯体を活用、大きく外観のイメージを変えることなく内装を上質な和モダンのインテリアに完全にリノベーションしている。各風呂は、浴槽・源泉はそのままだが、内湯の唐子の湯には、ヒバを張り、高級感を出すとともに、建て屋を若干増設、シャワーを備え付けた。また、露天風呂の石の風呂には、乳頭温泉郷初のサウナも用意した。サウナ自体の熱源は電気だが、サウナ横の水風呂については、沢の水を汲み上げて利用している（概ね 13～14 度）。



リニューアルした孫六温泉の全景。建物の躯体自体や色味などは以前の姿を継承している。以前使っていた看板も残してある。



内部に入ると一転し、上質な内装、調度が整えられている。ただし天井をみると以前からの梁がそのまま残り、躯体はいじっていないことがわかる。

ベッドがあるまるで高級リゾートホテルのような広々としたハイ・クオリティの二人部屋が６室用意されており、基本的には、夫婦や知人同士の大人の二人連れがターゲットとなっている（リニューアル前は、今よりも面積の少ない宿泊棟に、20 室あった）。料理について

は、大型旅館やホテルを長年勤め上げたベテランの料理人を招聘、地の山の幸をふんだんに使った会席料理をオープンキッチンで提供する形式で、そこでの宿のもてなしや宿泊客同士のコミュニケーションがひとつの売りとなっている。食材は、地の山の幸を中心に、男鹿半島の魚などを使っている。その他、日帰り客も利用できるカフェがある。





各客室、特に以前は倉庫に使用されていたスペースを立て直した離れの部屋は豪華で、各部屋には個別の露天風呂もついている。

風呂としては、上述したように、宿泊棟と独立した建て屋で男女別の内湯としている唐子の湯と、サウナ施設と繋がっている混浴露天風呂の石の湯の２つがある。石の湯とそこに繋がるサウナについては、男女別の湯あみ着の着用を義務化している。また、貸切湯もあるが、これについては先に述べたように黒湯温泉（山荘用の源泉）からの引き湯となっている。ただし、湯温等に課題が残り、現在はまだ稼働していない。



唐子の湯の内部。建て屋はほぼそのままで、ヒバを張って高級感を出している。かつては男女の湯が繋がっていたが、現在では仕切り（湯口のあるところの壁）で男女を区分けしている（壁の向こうが女湯）。



混浴露天の石の湯の全景。野外にある岩風呂（定休日のためお湯を抜いている）の他に、黒い片三角の屋根の下にも風呂がある。
宿の敷地側には目隠しの板が張られているが、渓流側はそのままなので、絶景が楽しめる。特に秋の紅葉のシーズンは渓流の向こう側が一面赤く染まる。



石の湯の屋根の下の部分。奥に脱衣所の入り口がある。



石の湯に繋がるサウナ。手前の２つの桶は冷水浴用。



円筒形のサウナの内部。



女性用湯あみ着。石の湯とサウナ利用時は着用必須。

唐子の湯で使われている唐子源泉は、唐子の湯の建て屋のすぐ横の露天の源泉地に湧いている。気温が下がると湯温が低下するため、源泉の上に発泡スチロールを浮かべて保温している（今後、上に屋根を付ける予定）。そこから一旦貯湯槽に入り、掛け流しの量を調整して適正な湯温としている。冬季、雪や雨が降ると、湯温が大きく下がるため、湯量を全開にして対応する必要がある。一方、石の湯については、源泉がすぐ側にあり直接流れ込んでいること、露天風呂自体からも湧出していることから、掛け流しの量での湯温調整ができず、加水をして調整している。



源泉の上の発泡スチロール。うまく組み合わせて浮かべないと湯温が低下する。



唐子の湯の源泉の貯湯槽。定休日のため清掃作業を行っている。

＜妙乃湯温泉＞

妙乃湯は、昭和 27（1952）年、現在の経営者（女将）の祖父母が源泉を発見したことで始まった。詳細は伝わっていないが、当初は日帰りの入浴施設で、昭和 30（1955）年に宿として開業している。当初は自炊の湯治宿であったが、昭和 30 年代から 40 年代に自炊から食事付きに次第に移行していった。平成３（1991）年、現在の女将が経営を始めてから改築を重ね、客室を増やすとともに、女性にも人気のモダンジャパニーズなテイストの宿となった。女将は元インテリア・デザイナーで、宿のエクステリア・インテリアは全て女将の監督の下に作られている。結果、現在では女性の宿泊客が半分を占めるまで増えてきた。




左側が建て屋の正面、右はレストランの内装。こうした外装、内装のひとつひとつを女将がプロデュースしている。

外観・内装こそ変わったが、伝統的な湯治の文化を守るという方針は一貫させている。その基本は、大自然の中にあること、その中で男女ともに裸で入浴する混浴の文化が続いていること、また食文化にしても地元の山菜や川魚などの山の幸を中心としたものを継承することである。混浴については、タオルを巻いての入浴は認めているが、湯あみ着については今も使用させていない。また、タオルについては、かつては持ち込みもあったが、湯への衛生的な影響を考え、現在は宿から共通のタオルを貸し出している。

妙乃湯には、開湯以来使っている妙乃湯源泉（銀の湯）、昭和 40 年代に新たに利用を開始した湯本源泉（金の湯）の二本の源泉がある。湯本源泉については、当初利用していた妙乃湯源泉の湯温が低下したため、新たに 2〜2.5km ほど離れた山中から引き湯することにしたものである。現在、銀の湯は、内湯２つ、露天２つ（うち一つは混浴）と貸切風呂で、金の湯は露天３つ（うち一つは混浴。一つは寝湯となっている）で利用されている。なお、内湯については、男女の時間入れ替え制である。

銀の湯については、湯だまりに鉄管を横から数本差し込み、そこから源泉を採取している。引き湯は塩ビ管で実施、ポンプなどは使っていない。殆どスケールはなく、たまに砂利が詰まる位なので、パイプの清掃はあまり必要ではなく、また塩ビも 20〜30 年持つ。ただし、温度低下して 30 度台になっていることが多いため、重油のボイラーで加温を行った上で掛け流しにしている。加温は自動調整ではない。



混浴露天風呂「妙見の湯」。金の湯の源泉を使用している。 ※妙乃湯の提供写真



貸切風呂「やわらぎの湯」。銀の湯の源泉を使用している。 ※妙乃湯の提供写真



金の湯のタンク
※妙乃湯の提供写真



銀の湯のタンク
※妙乃湯の提供写真



バルブ調整の様子
※妙乃湯の提供写真

管理が大変なのが金の湯である。金の湯は、山中の「釜場」と言われる場所（くぼんだ所にそのままでは入湯できない程の高温の湯が湧出している箇所を言う）から引いてきている。引き湯は地形を利用した自然流下である。距離があるため、引き湯の間に 20～30 度湯温が低下する。なお、調査当日（６月下旬／晴）の時には、妙乃湯の金の湯の貯湯槽に来た時点で 56 度であった。こちらについては、加温・加水はせず、掛け流しの量で適温に持って行く。

金の湯の管理で大変なのは引き湯のパイプの清掃・メンテナンスである。特に源泉近くでは鉄分が溜まってしまうので、頻繁に清掃する必要がある。大雨が降ると１～２日で湯量、湯温が下がるので、山中に出向き、清掃を行う。反対に天候／天気に恵まれると１～２ヶ月清掃しないで済むこともある。

引き湯の塩ビのパイプは４ｍのものを繋いで使っている。清掃の際には、それを外してハンマーで外を叩いたり、ホースを中に入れて突いたりしてスケールを落とす。金の湯の引き湯の塩ビパイプの寿命は、温泉により次第に柔軟性を失ってしまうため、長くても 10 年程と短い。特に清掃の際に壊れやすく、交換が必要となることも多い。

また、冬になると、小さな雪崩が起こり、パイプが落ちてしまう事故が起こる。この際には、外部の業者に頼み、重機を入れてパイプをつり直す必要が出てくる。一冬の間に３回から４回も起こるため、対応に苦慮している。

近年、各浴槽に温度計を入れ、タブレットで湯温を常にモニタリングできるようにした。現在では、このモニターを常時監視し、湯温の調整（銀の湯のボイラーの火力調整や金の湯の掛け流し量の調整）を適宜行っている。





金の湯は 2㎞ 程度離れた山中の釜（源泉の項参照）から、沢を越え、森を抜けて、最後は宿の横の川の上に吊られた塩ビパイプを伝って自然流下で流れ落ちてくる。中途で詰まると復旧は極めて大変である。



川を越えて渡されたパイプ。右手は妙乃湯。



浴槽の湯温は常時モニタリングされ、タブレットで確認される。

＜大釜温泉＞

大釜温泉は、廃校となった小学校の校舎を移築したノスタルジックな建て屋の宿である。創業は農家の湯治が少なくなりつつあった昭和 37（1962）年となっている。現在、自炊、混浴はない（混浴については、時代的に、開業当初からなかった可能性が高い）。男女別に露天と内湯があり、建て屋の外に乳頭温泉郷唯一の足湯がある。利用の中心は友人知人同士で、期間は基本的に一泊二日、食事は山の幸中心のものを提供している。



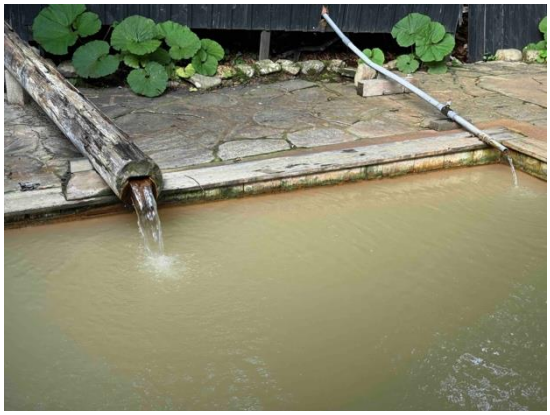
大釜温泉は廃校を移築して再利用している。温泉名の横の分校名はその由緒を宣伝するもの。ここに分校があったわけではないという説明書きも掲示されている。


乳頭温泉郷で唯一の足湯。誰でも使うことができる。

源泉は一つで、上述した妙乃湯の金の湯と同じ山中にある。そのため、引き湯の管理が難しいことは同様で、詰まると２～３日直らない。特に一切重機が入らない冬場は全て手作業となってしまい、一旦止まると復旧に１ヶ月はかかる。源泉が一つしかないため、その間は、休暇村に宿泊客の温泉利用をお願いすることになる。

源泉が高温で、そのまま浴槽に引き湯されて来るため、常に沢の水を加水して温度を適温に保っている。加水用の水道については入浴客が調整できるようにしているので、それで入浴時に微調整してもらっている。


大釜温泉の内湯。太い方が山中から流れてくる源泉である。茶色い塩ビ管からの沢水を加水して温度を調整する。入湯者も調整可能。


大釜温泉の露天風呂。こちらも源泉から流れてくる温泉のパイプ（左）と加水用の細いパイプ（右）が見える。

＜休暇村乳頭温泉郷＞

休暇村は、乳頭温泉郷の観光地化が始まっていた昭和 40（1965）年に誘致された施設で、当初から混浴や自炊はない（併設しているキャンプ場では自炊ができ、食材セットも売っている）。平成 13（2001）年に大規模リニューアルをしており、洋室・和室双方ともに備える近代的なホテル形式の建物である。また、付帯施設としてキャンプ場があり（立地当初はスキー場もあったが、廃止）、自然を楽しむウォーキングコースを設定、また自然観察の体験プログラムを展開するなど、休暇村ならではの施設となっている。食事については、秋田料理に加え、ここでも山菜を名物としている。

源泉は、自家源泉である乳頭源泉と、仙北市所有の田沢湖高原源泉があり、乳頭源泉については内風呂、田沢湖高原源泉については内風呂と露天風呂で利用されている。浴室は男女別で、各源泉の内風呂と露天風呂がそれぞれ繋がった構造となっている。露天風呂は自然のブナ林に囲まれている。

乳頭源泉については、乳頭温泉郷唯一の動力揚湯の源泉となっている。一方、仙北市が所有する田沢湖高原源泉については、休暇村から上ったところにある山中にあり、蒸気が漏れていたところを行政（当時は田沢湖町）が掘削した。蒸気泉が１号から４号まで４本あり、そこに山水を当てて温泉を造成している。ただし、現在稼働しているのは４本のうち２号源泉のみとなっている（平成 27（2015）年に硫化水素の事故があったこと、またスケールが析出して蒸気泉の根元が固まってしまっていることから仙北市では廃泉にする予定であったが、極めて高圧なため廃泉工事実施の見通しが立っておらず、令和７年６月現在に至るまで暫定利用が続いている）。

各源泉からの湯は、一旦貯湯槽に溜められ、そこから浴槽まで引き湯されている。概ねの温度については掛け流しの量で調整し、加水もしくはボイラーの加温でさらに微調整して適温としている。



休暇村乳頭温泉郷の貯湯槽。乳頭の湯の源泉、仙北市の源泉から来る源泉はここに一旦蓄えられ、そこから配湯される。自然流下で流れるよう、本館裏の高い場所にある。



温度の微調整を行うための制御盤。下に分湯用の大きなパイプが見える。

伝統的入浴法

我が国における温泉利用は、近世以前から外湯（共同浴場）での男女の区分けがあった地域（九州以外の西日本に多い）がある一方で、明治時代に入るまで混浴の習慣が残っていた地域[115]、明治以降も混浴を残す地域など様々である。この中で、乳頭温泉郷を含む北東北は、現在に至るまで混浴の習慣が広く残る地域としてよく知られている。

令和３（2021）年段階では、乳頭温泉郷の温泉のうち、江戸時代から第二次世界大戦直後までに開業した鶴の湯温泉、黒湯温泉、蟹場温泉、孫六温泉、妙乃湯の５温泉で混浴が実施されている。ただし、全ての温泉で女性専用風呂が別途設けられており、また、蟹場・孫六・妙乃湯については女性のみ入浴可能な時間帯が設けられている。なお、妙乃湯については女性が混浴風呂に入る時にタオルなどの着用を認めており、孫六ではリニューアル後は専用の湯あみ着の着用を男女双方に義務づけている（先述したように孫六の混浴風呂は、乳頭温泉郷最初のサウナと繋がった施設となっている）が[116]、他は入り湯の時のタオル等の着用は原則的に禁止である。

混浴が残ってきた理由としては、そもそも足下湧出の湯を使っており、浴槽を分けることが難しかったこと、硫化水素などの有毒ガスの滞留を防ぐため仕切りが作りにくかったこと、歴史的に地域にとって当たり前の習慣となっていたこと、また近年では観光資源としての価値も出てきたことなどが指摘されている。これも日本の多様な温泉文化のひとつであるが、一方で、混浴への抵抗感を持つ人も多い。都道府県の条例や厚生労働省通知など混浴を原則的に禁止する規制があるため、現在混浴を行っている温泉施設が後継者難などにより廃業してしまうと、新規施設による代替が極めて難しくなるという問題もある。インバウンド客の増加を含む温泉利用客の変化が進んでいく中で、混浴という伝統的な温泉利用のあり方をどう繋げていくかも大きな課題である[117]。

信仰・伝承[118]

乳頭温泉郷を含む駒ヶ岳周辺の地域には、密教の影響が濃い神仏混交の修験道系の山岳信仰が、遅くとも中世から伝えられている。このため、田沢湖周囲の主要な山岳には、山号寺号が付けられており、駒ヶ岳は生度山駒の寺、男神山・女神山は玉生山桂満寺、院内薬師岳は寅生山青海寺、国見峠の頂上は長閑山往来寺と呼ばれていた。こうした山岳にはそれぞれ霊場

115 石川理夫「中四国地方の温泉浴場にみる歴史的な浴室／浴槽区分」温泉地域研究第 41 号 令和５年９月 P12-P24、石川理夫「温泉浴場にみる歴史的な浴室／浴槽区分（二）　近畿地方と石川県の事例」温泉地域研究第 42 号 令和６年３月 P1-P12、石川理夫「温泉浴場にみる歴史的な浴室／浴槽区分（三）　九州地方の事例」温泉地域研究第 43 号 令和６年９月 P1-P12

116 孫六についての状況については現地調査ヒアリング。

117 混浴の状況については、大日本ダイヤコンサルタント「令和５年度 10 年後の混浴プロジェクトのための調査等業務」令和６年３月も参照した。

118 この項については、新田沢湖町史編纂委員会「新田沢湖町史」平成９年３月を主に参照

としての由緒があり、各霊場を巡る抖擻（山伏・修験者による山駆けの修行）が行われていたことが窺える。

このうち、駒ヶ岳については、山内にある石仏である田沢鳩留尊仏（横たわった姿の涅槃仏の石像。寝仏さまとも呼ばれる）参詣の表入り口とされ、かつては女人禁制であった。この寝仏さまには、子どもに知恵を授ける、病気を快癒させるなどの功徳があるとの民間信仰が残る。周辺には他にも石仏が多くあり、田沢のお諸仏と呼ばれている。男神山・女神山には伊弉諾尊・伊弉冉尊の二柱が鳩となって飛んできた八百万の神の発祥の地だという中世神話があり、頂上近くの錠前岩屋がその地であるとされてきた。また、甚内という村人が石と化して田の守り神になったという「田の神石」、甚内の妻が石となったという安産の神「孕み石」がある。乳頭温泉郷は、こういった修験系の山岳信仰に囲まれた地にあった。

温泉に関わる信仰として、幾つかの温泉地で薬師を祀っている。鶴の湯温泉には鶴の湯神社があり、現在は神社の形式を取っているが、もともとは江戸時代に建立された薬師十二神将を祀る湯神堂であり、現在でも堂内には今のご神体と思われる神鏡の後ろに旧い十二神将像が残されている。近年祭礼は行われていないが、近年結婚式に使ったこともある。また鶴の湯温泉では、この他、女性専用露天風呂の脇に子宝の神の金精さまが祀られている（金精さま、もしくは金精大明神は、全国、特に関東から東北にかけて広く信仰されていた男根信仰の神）[119]。



鶴の湯神社鳥居



鶴の湯神社社殿



社殿内部。神棚後の左右の格子の中に十二神将が見える。



十二神将像の写真資料
※鶴の湯温泉の展示物

119 以下２段落は現地調査による。



鶴の湯温泉の女性専用露天風呂の脇にある金精さま。ちなみに鶴の湯温泉の黒湯は「子宝の湯」と言われているが、女性混浴風呂に使われているのは太白源泉と白湯源泉で、黒湯ではない。
旧田沢村、生保内村では金精信仰が行われており、かつては複数の社があったという。
近場の温泉地では、岩手県花巻市の大沢温泉に金勢神社があり、盛大に金勢祭りが行われている。また、秋田県鹿角市八幡平の蒸ノ湯温泉の宿にも金勢様が祀られている。字は異なるが同じ男根崇拝である。

黒湯温泉にも駐車場横に近世以前からあったと思われる薬師神社がある。これも、堂内に今のご神体と思われる神鏡があり、その奥に二体の仏像が置かれている。こちらでは年に１回黒湯温泉で祭礼を行っている。妙乃湯には創業者が祀ったという薬師観世音菩薩の像があり、また、孫六では、かつて乳頭山登山口から上ったところにあった石仏を移動させ、宿泊棟近くに置いている。この石仏は薬師仏と言い伝えられている。



黒湯温泉、薬師神社鳥居。



黒湯温泉、薬師神社社殿。



黒湯温泉の薬師神社社殿内部。二体の仏像があり、上の仏像は、螺髪で手に薬壷を持っているため、薬師如来像と考えられる。仏像の前にご神鏡が置かれている。



孫六温泉の敷地内に置かれている石仏。薬師如来と伝えられているが、僧形で螺髪もなく、一般の薬師如来像と形が大きく異なる。

なお、乳頭温泉郷には、仏教寺院はなく、上述した以外の神社も立地していない。

土産物[120]

先に触れたように、乳頭温泉郷では、伝統的に山菜・筍・川魚などが湯治客に楽しまれてきており、現在も各宿では山の幸を中心とした食事を出している。また、温泉を利用した食材としては、黒湯温泉で黒たまご（温泉に入れて黒くなったゆで卵）と温泉で発酵を促進させた甘酒を出している。ただし、この二つはどちらも、現地で食べることを前提としたものであり、土産物として加工食品等になっているわけではない。

外部の酒造会社や製菓会社との提携での加工食品も一部ある。鶴の湯では、秋田の菓子舗株式会社菓子舗榮太楼と提携して鶴の湯のブランドの鶴の湯さなづら（秋田銘菓の山葡萄のゼリー）、鶴の湯まんじゅう、鶴の湯諸越を作っており、鶴の湯内で販売している。このうちまんじゅうについては、田沢湖産の山芋を使用している[121]。また黒湯温泉では秀よし等の秋田県の酒造業者と協力して黒湯温泉ブランドの清酒を温泉地で販売、そのうち一つは経営している池田家自らが原料の米を生産したものとなっている。なお、乳頭温泉郷というより駒ヶ岳山域全体の名物であるが、山菜については、田沢湖近くまで降りると、地場の業者が採取したものを販売する山菜屋があるなど、今も人気である。

食品以外では、黒湯温泉で「湯の花」を販売している。これは黒湯温泉の源泉を清掃する際に集められた湯の花を、土嚢に詰め、ある程度乾燥したところでふるいにかけ袋詰したものとなっている。



黒湯温泉
「黒たまご」



黒湯温泉、酒類。左端は黒湯経営者が生産した米を利用した酒。あとはブランドタイアップ。



黒湯温泉
「湯の花」



鶴の湯温泉のまんじゅう、諸越、さなづらの販売所

120 この項については、現地調査による。

121 株式会社菓子舗榮太楼ホームページ　https://shop.eitaro.net（令和７年６月最終確認）を参照。

乳頭温泉郷は、江戸時代初期、久保田藩（佐竹秋田藩）時代に藩の御用湯治場となって以来の歴史を持つ温泉地である。当初は士分や裕福な町人の湯治場から始まり、明治以降、秋田県下から多くの農家が集まり、農閑期に骨休めをする自炊の湯治場として長年親しまれてきた。その性格が変わって来たのが高度経済成長時代である。長年徒歩で険しい山道を辿るしかなかった乳頭温泉郷に、自動車が入る道が整備され、盛岡から生保内を経て大曲に至る田沢湖線も全線開通した。こうした交通基盤の整備を下支えに、乳頭温泉郷は、駒ヶ岳への登山客を皮切りに、次第に農家の湯治場から観光地へとその性格を変えていく。

この傾向に拍車を掛けたのが、昭和 60 年代から始まる秘湯ブームである。国立公園の中にあり、大自然に囲まれた立地に加え、伝統的な湯治場としての歴史情緒を色濃く持つ乳頭温泉郷は、交通至便なこともあり、瞬く間に日本を代表する秘湯の地位を確立した。秋田新幹線の開通もあり、乳頭温泉郷は、バブル崩壊などの影響を受けることもなく、新型コロナウイルス感染症蔓延の時期を除き、高い稼働率を常に維持、温泉地としての発展を続けている。

もちろん、乳頭温泉郷自体の地域の努力も見過ごすことはできない。かつては孤立した湯宿の集まりに過ぎなかった乳頭であるが、農家の兼業化が進み、農閑期の湯治という慣習が廃れていく中、昭和 54（1979）年、宿泊客が全ての宿の湯に無料で日帰り入浴できる湯めぐりスタンプ帳事業をスタート、乳頭温泉郷の宿７つが力を合わせて地域を振興していく体制を整えた。こうした協力体制があってこそ、秘湯ブームに乗り、地域の魅力を伝達し、農家の湯治場から温泉が好きな人々が高く評価する有名温泉地へと円滑に変身していくことができたのである。

現在、乳頭温泉郷は、少しずつ高級化を進め、また、インバウンド客への対応も拡大してきている。ただし、その中でも、長い湯治場としての伝統の精髄を残し、それを地域独自の魅力として継承していくことの大切さは決して忘れられていない。具体的には、第一に大自然の中の温泉地としての性格を大事にし、大規模開発はもちろん、周辺の景観を壊すような改装は決して行わないことで、これは、国立公園内の立地ということもあり、確実に実施されてきている。次に、山中の狭い宿・湯に、気心がしれた人々が集まる中で、当たり前のように行われてきた混浴の文化を残すこと。既に混浴が時代的に難しくなっていた時期に開業した２施設を除き、乳頭温泉郷の宿では、どこも混浴の維持に心を砕いている。そして、最後に、地のものを使い、山の幸を中心とする長年の食文化を伝え、発展させていくこと。自炊自体については大きく減ってしまったが、江戸時代以来の自炊文化で培われてきた食文化の伝統は、各宿で出される食事として、今も生き続けている。

乳頭温泉郷は、山間の湯治場としての伝統と魅力を活かしつつ、時代に合わせて柔軟にその歩みを続けている。

（２）鳴子温泉郷

鳴子温泉郷は、鳴子温泉、東鳴子温泉、川渡温泉、中山平温泉、鬼首温泉の５つの温泉地の総称で、宮城県大崎市北西部（平成 18（2006）年の市町村合併までは玉造郡鳴子町）に位置し、山間を流れる江合川（荒雄川）と、江合川に合流する大谷川に面して広がっている。江合川の上流が鬼首、下流が鳴子、東鳴子、川渡、鳴子付近で江合川に合流する大谷川沿いにあるのが中山平である。

370 もの源泉を有する鳴子は、泉質も、地区ごとの温泉地の性格も非常に多様である。国民保養温泉地に指定されており、今も多くの自炊宿があるなど、長い湯治の歴史も有している。ここではそうした鳴子の温泉地としての特徴と湯の管理の技術を概観する。

鳴子温泉郷の歴史[122]

＜近世までの歴史＞

鳴子温泉郷の史料上の初出は「続日本後紀」の承和４（837）年４月と考えられており、蝦夷攻略の拠点であった玉造塞の温泉石神が鳴動し、温泉が河に流れ、新沼（現在の潟沼と想定される）ができた、とある。玉造の名は、続日本紀の神亀５年（728 年）の項に見え、水晶が取れることから名付けられたと考えられている。ちなみに、玉造郡を含む東北北部は、８世紀初頭の和銅年間から石英、白雲母、硫黄の貢納が始まっており、鉱物の産地として有名であった。

鳴子の温泉神社、川渡の温泉石神社は 10 世紀成立の「延喜式神名帳」にも記載されており、古くから温泉を祀る神社があることが広く知られていた。ただし、その後の史料は少なく、14 世紀半ばに湯山氏が江合川沿いの名生定の領主になり、名生定関口に薬師堂を建立したとの記事は確認されているものの、中世までの実態はわからない。なお、本格的に湯治場として開けたのは、遊佐一族が寛永年間に温泉地の管理を仰せつかる湯守となり、同 13（1636）年に湯治人宿を始めた頃からとされる。寛永 13 年は、仙台藩の藩主が、初代伊達政宗から二代忠旨に代わった年である。その後、鳴子温泉郷は仙台藩の施政下で発展し、江戸時代後半、文政 10（1827）年の「諸国温泉功能鑑」では、鳴子温泉が東前頭５枚目に、川渡温泉が 24 枚目に記載されるまでになった。

仙台藩では、温泉を出湯と呼び、金・銀・銅・鉄・鉛等とともに金山十五品目の一つに位置づけ、金山方役人の支配下に置いていた。村方に任命されていた湯守では、湯の管理や湯治人の管理の役目を負う代わりに運上金を藩に納めている。湯守は世襲が多かったが、藩へ湯守の交代を願う例も少なくなく、競争があった記録が残る。鳴子温泉郷の中では、藩政中期（1745 年以前）には鬼首の荒湯が、明和・寛政期（1745～1801 年）には川渡が、文化・文政期以降（1804 年以後）は鳴子や現在の東鳴子地区が栄えたと言われている。寛政の頃、川渡では、湯治客が年間７～８千人いたという。しかし、その後天保の大飢饉（1833～1839 年）

122 この項、1970 年代頭までの歴史については、鳴子町史編纂委員会「鳴子町史　上巻」昭和 49 年、「鳴子町史　下巻」昭和 53 年を参照した。それ以外の典拠については当該箇所に別途脚註を付けた。

が起こったことから、鳴子温泉郷は衰えていくことになる。

湯治宿は、最初は小屋がけ程度のものが多かったが、藩政中期には本格的な木賃宿となり、食材・日用品を持ち込まなくとも湯治場で購入することができるようになった。湯治客の主体は周辺の農民であり、農作業が本格化する前の旧暦３～４月と田植え前の７～９月が繁忙期となっていた。文化・文政期（1804～1830 年）になると次第に武士の利用も増え、水戸など藩外から武士が訪れることも多くなった。客舎も整備され、鳴子には滝の湯（打たせ湯）がある共同浴場も作られ、若干の娯楽も楽しめるようになっている。また、ひき物・曲物・漆器などの木地（きじ）ものが、湯治客向けの土産物として並んでいた。木地ものの多くは鬼首産であったという。東鳴子（鷲の湯、田中、赤湯など）では、寛政期に赤湯神社（現在の東鳴子温泉神社）が作られ、文久３（1863）年、伊達藩主慶邦、夫人孝子が湯治に訪れて、義邦が松の木を一株植えたという記録が残る。このことから赤湯は御殿湯（ごでんゆ）と呼ばれるようになった。

なお、藩政期の鳴子地域では、陸羽街道の支線として、秋田に向かう羽後街道と、川渡で羽後街道から分かれ山形に向かう北羽前街道が整備されており、川渡、鳴子、中山平、鬼首に宿駅が置かれていた。鳴子地域の湯治場としての発展の背景にはこうした街道の整備があったと考えられる。北羽前街道は、義経の伝承が残り、それを辿った芭蕉が「おくのほそ道」で通ったことで有名な街道で、また、出羽三山に修験が通うための街道ともなっていた。

＜明治から昭和戦前期＞

天保の大飢饉で疲弊した鳴子温泉郷であるが、明治維新後も、地租改正による農民の負担の増加や江合川の度重なる氾濫に悩まされた。さらに明治 19（1886）年には鳴子で大火もあり、明治前半期の発展は緩やかなものに止まった。明治 19（1886）年の各地の共同浴場の浴客数（明治時代の鳴子温泉郷ではまだ旅館の内湯はない）は、赤湯 4,503 人、田中 1,063 人、川渡 4,962 人、鳴子滝の湯 2,568 人となっている[123]。

鳴子温泉郷が再び発展していくようになったのは明治中期である。明治 23（1890）年には仙台から鳴子を経由し山形県酒田市までを結ぶ現在の国道 47 号線が整備され、同じ時期には赤湯に橋が架けられるなど交通基盤の整備が始まった。併せて、殖産興業策として、銅・硫黄などの工業、林業や木地・漆器などの木材加工業が振興され、藩政期より始まっていた馬産も発展する。馬産については、明治天皇の愛馬金華山号を輩出したこともあり、陸軍用の軍馬生産の拠点になっている。なお、現在川渡には、当時の牛馬生産の繁栄を記念した碑が建てられている。

この中で湯治も再び賑わいを見せるようになっていく。東北各地の農民が、夜具や鍋釜を馬車に積んで集まり、15 日から 30～40 日逗留したという。繁忙期は正月、田植え前の時期で、夏祭りの頃もそれに次ぐ賑わいとなっていた。特に土用の丑の日は、「しひて湯治」といって、多くの湯治客が訪れたという。

---

123 小堀貴亮・山村順次「宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化」温泉地域研究３号　平成 16 年 P11-P18

明治後期の湯治を支えたのが鉄道と馬車である。明治 24（1891）年に東北本線が全線開通、東北本線の小牛田（こごたえき）駅からは、明治 33（1900）年にできた古川馬車鉄道（大正２（1913）年廃業）で古川までつながり、古川からは馬車となった。一方、江合川の氾濫は続いており、明治 43（1910）年には御殿湯の故地を含む東鳴子神社が土砂に押しつぶされ壊滅するという大きな被害も発生している。

続く大正時代、鳴子温泉郷はさらに大きく発展していく。この時期は、第一次世界大戦の好況により鳴子近くの銅鉱山が活況を呈した時期でもあり、大正２（1913）年には電気も通じている。特に画期的であったのが東北本線の小牛田駅から鳴子方面への陸羽東線の建設で、大正３（1914）年に川渡、翌４年に鳴子、６年に中山平に駅が設置され、鳴子温泉郷の主要な温泉地が全て鉄道で繋がった。大正 12（1923）年には上野々（うえのの）スキー場が開設され、大正 14（1925）年には乗合自動車も走り始めた。

こうした交通基盤やスキー場などの整備を受け、大正時代には大きく湯治客が拡大、大正５（1916）年 20 万人、６年 23 万人、７年 34 万人、８年 47 万人と鳴子温泉郷は急激な拡大を見せる。こうした繁栄を受け、この時期には、宴会用に、鳴子小唄と鳴子音頭も作られ、温泉地の夜を彩った。また、旅館の内湯が始まったのも大正時代であり、共同浴場は、内湯を持つようになった各旅館の共同経営となっていた[124]。ただし、こうした繁栄も長くは続かず、昭和２（1927）年の金融恐慌、昭和５（1930）年からの昭和大恐慌の影響で、鳴子温泉郷も、沈滞を余儀なくされることになる。

日中戦争が始まり、第二次世界大戦が近づくにつれ、鳴子温泉郷は療養の地としても着目されるようになった。傷病兵対応としては、昭和 13 （1938）年に陸軍病院臨時川渡転地療養所が開設され、その後、終戦までに仙台第三陸軍病院へと拡充された（終戦とともに国立鳴子病院となり、平成 18（2006）年に大崎市民病院鳴子温泉分院に）。また、昭和 19（1944）年には、温泉医学の研究が盛んであった東北大学へ地元が誘致運動を行ったことを契機に東北大学医学部附属病院鳴子分院も開設されている（平成７（1995）年閉院）。

＜第二次世界大戦後＞

戦後すぐの昭和 23（1948）年「鳴子こけし祭り」（昭和 28（1953）年より「全国こけし祭り」と名称変更）が始まり[125]、鳴子温泉郷は再生への道を歩き出す。直後の昭和 24（1949）年に鳴子町全域が玉造温泉郷として県立公園に指定され、昭和 26（1951）年には観光客 21 万５千人、27 年には 24 万６千人となって鳴子温泉郷は復興の道に乗っていった。また、昭和 27（1952）年には東鳴子駅（平成９（1997）年に、赤湯の御殿湯の歴史にちなみ、鳴子御殿湯駅に改名）が開業している。昭和 29（1954）年には、温泉利用農業組合が運営し、農民の農閑

124 小堀貴亮・山村順次「宮城県東鳴子温泉における湯治場の地域変容と活性化」温泉地域研究３号　平成 16 年 P11-P18

125 大崎市鳴子総合支所地域振興課ホームページ「全国こけし祭り」https://kokeshimatsuri.com（令和６年 11 月８日確認）

期の湯治の場として多く利用されていた「農民の家」（平成 30（2018）年廃業）も開業した。この時代、湯治客としては、近隣の農民や大船渡（おおふなと）・気仙沼（けせんぬま）など三陸の漁民が多くを占めた。また、この頃は、まだ内湯のない宿泊施設も多かった[126]。

この中で大きな契機となったのが、昭和 27（1952）年に起工し、昭和 32（1957）年に供用が開始された、日本人技術者のみで造った純国産第一号のアーチ式ダム、鳴子ダムである。これにより、それまで度々起こっていた江合川による水害が防げるようになった。また、ダム工事に多くの作業員が集まってきたことにより、鳴子駅前に繁華街が形成されることになり、これが鳴子温泉郷のその後の発展の基盤の一つとなる[127]。

昭和 30 年代から 40 年代にかけて鳴子温泉郷の本格的な発展が始まる。昭和 35（1960）年に奥鳴子・川渡・中山平・鬼首が国民保養温泉地となり、昭和 37（1962）年に玉造温泉郷が鳴子温泉郷に名称を変更した。施設開発では、昭和 34（1959）年に観光農業施設である鳴子熱帯植物園（平成 28（2016）年廃園）、昭和 37（1962）年に花渕山スキー場（平成６（1994）年鳴子スキー場に改名し、平成 14（2002 年）に廃業）、昭和 41（1966）年に鳴子ゴルフ場（現:鳴子カントリークラブ）が開設されている。また、県立公園玉造温泉郷は、昭和 43（1968）年、栗駒国定公園の一部として発展的に解消されることとなった。

この時期は、鳴子温泉郷の宿泊業者は、経営上の岐路に立っていた。増え続ける観光客を取り込んでいくため大規模投資を始めた宿泊業者が多く出て、かつての小規模な事業のままで止まる宿泊施設と大規模化する宿泊施設に二分されていったのである。鳴子駅周辺に大規模な旅館群が建設されたのはこの時期となる。老人クラブ、婦人会、教職員の団体などの団体旅行客が、一泊二日で訪れ、温泉に入り、宴会をやる。こうした形の旅行が増えていった。

この時、鳴子温泉郷で特徴的であったのは、自炊に対応した湯治客向けの施設に対しても投資が行われたことである。東鳴子などまだ湯治客が多かった地域では、自炊ができる湯治施設開発が進み[128]、企業等の保養施設も多数立地した。なお、鳴子温泉郷において自炊型の施設がどの程度の割合であったかをみていくと、昭和 18（1943）年の記録では、収容可能人数の割合で、自炊型の宿が 67％と３分の２を占めていた。この比率は昭和 30（1955）年は未だ 56％と半分を超える水準を維持していたが、昭和 48（1973）年は 16％と大きく低下している[129]。長期逗留の自炊客に対応した湯治宿への投資もあったとはいえ、鳴子温泉郷全体でみれば、やはり一泊二日型への移行が高度経済成長期に、大きく進んでいたのである。ただし、鳴子温泉郷において湯治が重視されている傾向は今も変わらず、令和６年現在、鳴子温泉郷観光協会で紹介されている旅館 45 軒のうち、15 軒、実に３分の１で自炊ができる設備が整えられている。また、現在ではほぼ全ての宿が内湯となっているが、湯治客が利用できる共同浴

126 第二次世界大戦後しばらくの湯治客の状況、内湯の状況については鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

127 鳴子駅前の繁華街形成については鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

128 昭和 30 年代以降の投資拡大の状況、地区による施設投資の違いは鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

129 自炊型の収容客数比率については、山村順次「鳴子温泉郷における湯治客の地域的特性」千葉大学教育学部研究紀要　第 26 巻　第１部　昭和 52 年　P245-P246 を参照。

場も、鳴子の「滝の湯」、鳴子「早稲田桟敷湯」、川渡の「馬場温泉」、中山平の「しんとろの湯」、鬼首の「すぱ鬼首の湯」と整備されている[130]。

昭和 40 年代後半以降、団体旅行から家族・個人旅行へと潮流が変わったあとも、鳴子温泉郷の発展は続いた。昭和 50（1975）年には日本こけし館ができ、片山地獄にあった硫黄鉱山跡地に鬼首地熱発電所が開業、翌 51 年には東北自動車道が古川まで開通した。また、昭和 48（1973）年には、三菱地所株式会社の負担により、鬼首スキー場（現：オニコウベスキー場）が当初町営でオープン、その後昭和 52 年三菱地所を筆頭株主に株式会社鬼首高原開発が設立される（平成 17（2005）年にホテルサンバレーに事業譲渡）と、スキー場もその管理となった。鬼首高原開発は、その後、ペンションやロッジ、保養地区画の整備販売を開始するとともに、昭和 62（1987）年にはホテル・オニコウベ、平成 7（1995）年にはリゾートパークオニコウベゴルフクラブ（平成 28（2016）年閉鎖）など次々と施設を開業、広範囲にリゾートエリアを展開した[131]。折からのリゾートブーム、映画「私をスキーに連れてって」に象徴されるスキーブームなどもあり、鳴子温泉郷の観光客は右肩上がりで拡大、最盛期の平成３（1991）年には年間宿泊客数 1,155,600 人と 100 万人を突破する[132]。

しかし、バブル崩壊後、鳴子温泉郷の状況は暗転する。上記にも示したように、スキー場が三つから二つに減り、ゴルフ場も一つ閉業し、植物園も閉園した。また鬼首のリゾート化の立役者であった三菱地所も撤退した。加えて、戦後、伝統的な農民の湯治を支える施設として運営されていた「農民の家」も閉業している。宿泊客数も、先の 1,155,600 人から減少を続け、平成８（1996）年には 987,800 人と 100 万人を下回り、平成 15（2003）年には 776,000 人まで低下、翌平成 16（2004）年から平成 19（2007）年には 80 万人台を回復するものの、その後再び減少傾向に入り、新型コロナウイルス感染症が流行する直前の令和元（2019）年には鳴子温泉郷の年間宿泊客数は 530,100 人にまで減少していた。

減少したのはリゾート客や観光客だけではない。高度成長期からバブル期にかけ、鳴子温泉郷に訪れる昔ながらの湯治客（自炊で長期逗留する客）も激減している。この背景には、今の農林漁業では、かつてのような季節的な働き方、農繁期・漁繁期、農閑期・漁閑期があるというような働き方がなくなり、年中忙しくなっていることが大きい。湯治の長期逗留を支えてきたライフスタイル自体が消滅してしまっているのである。このため、鳴子温泉郷では、現代版の湯治として二泊三日以上の連泊という比較的短いものを推奨しており、現在、こうした連泊客は増加する傾向にある。連泊中は、付近を観光するというより、ワーケーションなどに使う場合が多いという[133]。なお、鳴子温泉郷の女将は宮城県の旅館・ホテル 37 施設が加盟する「みやぎおかみの会」に所属している。

---

130 鳴子温泉郷観光協会「鳴子温泉郷観光協会公式サイト」http://www.naruko.gr.jp（令和６年 11 月８日確認）

131 鬼首のリゾート開発の経緯については、三橋勇「宮城県の第三セクター方式による観光・リゾート事業の一考察：鬼首スキー場を事例として」宮城大学事業構想学部紀要 第５号　平成 14 年　P149-P166 を参照。

132 ピーク時と後述の現在の観光客数については鳴子温泉郷現地調査ヒアリング、鳴子温泉郷観光協会資料による。

133 現在の湯治の傾向については鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

鳴子温泉郷の源泉

鳴子温泉郷の５地区合わせて源泉数の総数は利用・未利用を含め 370 本程度あり、泉質は掲示用泉質名で 10 種類のうち７種類と多彩である。平成 28（2016）年の詳細調査では、地区ごとの源泉は下記の通りとなっている（湧出量や泉質の測定が困難な源泉を除く）[134]。

＜鳴子温泉＞

高温、蒸気の源泉が多く、入浴に加え、暖房・熱交換などの利用も多くみられる。また、市有温泉の山道、下地獄（しもじごく）など、高温で噴出している蒸気に山から引いた山水を接触させて湯をつくる造成温泉もある。スケールが多く付着する源泉が多数あり、湯量の変動も見られる。

・源泉総数　158 本（うち利用源泉数は、自噴 54 本、動力 34 本）
・泉温　　42 度未満 14 本　42 度以上 70 本　水蒸気及びガス 74 本
・湧出量　　自噴合計 582.0 リットル分　動力合計 176.7 リットル分
・泉質　　含硫黄 - ナトリウム - 硫酸塩・塩化物泉
・大崎市有源泉
　①山道　１～４　号泉／蒸気泉 90～95 度（造湯量 約 350 リットル）／含硫黄－ナトリウム－硫酸塩・塩化物泉（硫化水素型）
　②下地獄　１～14　号泉／蒸気泉 90～95 度（造湯量 約 480 リットル）／含硫黄－ナトリウム－硫酸塩・塩化物泉（硫化水素型）
　③町有末沢源泉／58.2 度　92.0 リットル／ナトリウム、カルシウム-硫酸塩・炭酸水素塩泉

＜東鳴子温泉＞

スケールの付着はなく、湯量は安定している。

・源泉総数　50 本（うち利用源泉数は、自噴 35 本、動力５本）
・泉温　　42 度未満５本　42 度以上 45 本　水蒸気及びガス０本
・湧出量　　自噴合計 763.0 リットル分　動力合計 168.0 リットル分
・泉質　　ナトリウム - 炭酸水素塩泉

＜川渡温泉＞

スケールの付着はなく、湯量は安定している。

・源泉総数　33 本（うち利用源泉数は、自噴 14 本、動力８本）
・泉温　　42 度未満 12 本　42 度以上 21 本　水蒸気及びガス０本
・湧出量　　自噴合計 744.0 リットル分　動力合計 487.0 リットル分

[134] 以下、環境省「鳴子温泉郷国民保養温泉地計画書」平成 28 年５月による。なお、鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによれば、令和６年現在もほぼ同じ状況であるとのこと。

・泉質　　含硫黄 - ナトリウム - 炭酸水素塩泉
・大崎市有源泉
①川渡支所前源泉／52.5 度　115.0 リットル／含硫黄－ナトリウム－炭酸水素塩泉（硫化水素型）
②町有入沢源泉／45.9 度　44.6 リットル／単純温泉

＜中山平温泉＞
高温、蒸気の源泉が多く、入浴に加え、暖房・熱交換などの利用も多くみられる。スケールが多く付着する源泉が多数あり、湯量の変動も見られる。
・源泉総数　73 本（うち利用源泉数は、自噴 32 本、動力 12 本）
・泉温　　42 度未満 1 本　42 度以上 29 本　水蒸気及びガス 43 本
・湧出量　　自噴合計 測定不能　動力合計 297.0 リットル分
・泉質　　含硫黄 - ナトリウム - 炭酸水素塩泉
・大崎市有源泉
① 新コミュニティ源泉 星沼１号泉 混合／蒸気泉約 90 度　混合湯量約 120 リットル／含重曹-食塩-硫黄泉

＜鬼首温泉＞
高温の源泉が多いが、蒸気泉以外はスケールの付着は少ない。またホテル・オニコウベに７km の引き湯が行われている。
・源泉総数　54 本（うち利用源泉数は、自噴 33 本、動力７本）
・泉温　　42 度未満４本　42 度以上 29 本　水蒸気及びガス 21 本
・湧出量　　自噴合計 510.0 リットル分　動力合計 206.0 リットル分
・泉質　　単純泉
・大崎市有源泉
① 通産省源泉(蒸気泉)、元宮原源泉、白土源泉／集湯センターの段階で約 85 度　約 700 リットル ／単純泉

第二次世界大戦後、鳴子温泉郷では、源泉数、動力泉数が大きく拡大した。源泉数拡大の一つの要因として、かつて民間のボーリング会社が、潟沼（かたぬま）から片山に結ぶ線上に源泉が多くあると見込んで、多くのボーリングを行ったことがある（現在の下地獄の源泉はそのボーリングの成果の一つ）。また、源泉を一つに頼っていると、湯量の変動のリスクに対応しきれない。このため、自家源泉に加え、共同源泉（市有のものだけでなく、民間同士での小規模な共同源泉もある）からも引き湯をしているところも多い。
また動力泉の拡大に当たっては、湧出量が減った源泉があるだけではなく、施設の拡大や次世代継承を踏まえ予め動力化して湧出量の拡大を図った。同じ湯壺の源泉だった場合自分

のところだけ動力化しないと湧出量が減る危険性があるので横並びで動力化した、など様々な事情がある[135]。

鳴子温泉郷の湯の管理の技術[136]

＜全体傾向＞

鳴子の湯の管理の最大の特徴は、先に述べたように、源泉の温度や泉質が極めて多様なため、それぞれの源泉ごとに異なった技術が必要となっていることである。

例えば、鳴子や中山平などで多い高温（60 度以上）の源泉の場合、カルシウムが固まり、ケーシング（源泉に差し込まれている鋼管）が詰まってしまう場合が多い。その際にはスケール錐で削り、十分な径を確保する必要がある。ケーシングは、深く源泉に差し込まれているので、4ｍ位ある錐を継ぎ足ししながら削っていくことになる。すぐ詰まる源泉の場合こうしたスケール取りの作業が月１回に及ぶこともあるが、多くの源泉では３～４ヶ月に１回程度の作業である。一方、温度が 60 度以下になっていれば、カルシウムが固まることはなく、湯垢のような湯の花だけになる。この場合は強い水流をかければ流すことができる。

反対に湯温が低い場合、スケールが貯まることはないが、40 度前後はレジオネラ菌の至適温度となるため、レジオネラ菌のリスクが発生する。保健所の指導に基づき、こまめな清掃や完全換水、塩素投入などが必要となる。

加温が必要な場合、配管をボイラーで加熱するが、この際の配湯の調整が難しい。ぬるめの源泉を掛け流し、特定の地点でボイラー加熱をすると、複数の湯船がある場合、熱い湯船とぬるい湯船が出てしまう。これを防ぐには各湯船の間で湯を循環させる必要がある。また、源泉の湯温や気温により、湯温が上下してしまうので、源泉からの掛け流しの量を、長年の経験に従って、微妙に調整していかなければならない。普通はバルブで行うが、板などを挟んでおいてその抜き差しで管理することもある。アナログでの調整のため、アナログな工夫の方がうまく使えるという例である。

また硫化水素が多く出る泉質の源泉もある。この際には、空気より重い硫化水素が浴槽の上部に貯まり、ちょうど入浴者の顔のところにくる危険性がある。この危険を回避するためには、湯殿の換気に気を配るだけでなく、湯船の上部に穴を開け、硫化水素が湯船上部に貯まらず逃げるようにしなければならない。

源泉からの引き湯についていうと、地中化したパイプで引き湯をしている場合、基本的に温度の低下は殆どない。また、温度が 60 度よりも下がっている場合は、スケールの蓄積も少ない。ただし何等かの原因で温度低下が起こると、パイプが収縮し、継ぎ目に隙間が広がって外れてしまうことがある。かつて鬼首で長距離引き湯をしているパイプが、杉の木が倒れ

135 源泉数の変動の事情については、鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

136 この項は鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

て外れ、源泉が噴き出したこともあった。なお、鳴子温泉郷では源泉は川の水面より高いところにあるのが通例のため、川の水の量で源泉からの湧出が大きく変わることはない。ただし、昔川床が壊れたことがあり、その時には源泉の湧出に影響した。

上述した配管のメンテナンスについては、地元業者が行っている場合が多いが、一部旅館では自前でやっている。地区外の業者に依頼すると、コストが大きく上がるだけでなく、各源泉や旅館の配管の癖を知らないため、失敗することが多々ある。地元で長年実績を積んできた事業者の経験、知恵が円滑なメンテナンスには必要なのである。しかし、地元の小規模業者については、高齢化が進んでおり、いつまで続けられるかわからないところが多く、大きな課題となっている。

＜下地獄の造成温泉の管理＞

鳴子の特徴として、蒸気として吹き出す極めて高温の源泉が多数ある。これについては、タンクに蒸気を入れ、上部から水を霧のように落とし、火山性の蒸気と混交させて温泉を作るという造成温泉の手法を採っている。この典型が下地獄（したじごく）である。

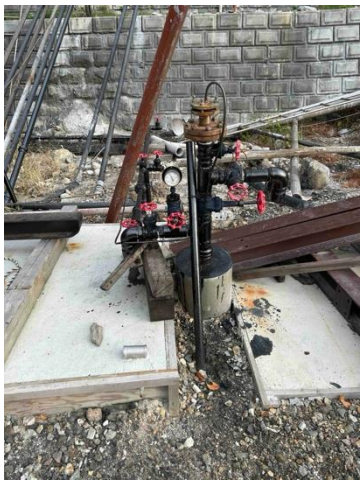
下地獄では、ガス管（鋼材）で作ったケーシングとパイプから蒸気をタンクに送り（タンクは源泉の口より高いところにある）、そこで温泉を造成、そこからは耐酸性の高い架橋ポリプロピレンのパイプで高温の源泉を自然流下式で分湯用のタンクに引き湯し、そこからさらに利用施設に下ろしていく構成を取っている。

下地獄はかつてボーリング会社が多数試掘を繰り返したところで、中には試掘用の斜めのケーシングも残っている（圧力が高く止められないのでそのままにしているが、源泉数にはカウントしていない）。今使っている源泉は、ケーシングが垂直に入っており、圧力をバルブで調整しながら使っている。スケールが固まってくるとガス管を取り外し、再び源泉の坑を掘削する。取り外した場合ガス管は交換してしまうので、耐久性が問題になるほど長い間使うことはない。

源泉の圧力が高く、何の予兆もなく水蒸気爆発をすることがあるので、極めて危険である（もし作業中に爆発したら死亡事故になる）。また高濃度の硫化水素が噴出することもある。かつて１万 ppm という濃度の硫化水素ガスが噴出し、窪地に貯まったことがあった（400ppm を超えると命に危険が生じ、700ppm になると即死する）。また、あまりケーシングの径を大きくすると噴出の勢いが大きくなりすぎて扱えなくなる。そのため 200㎜ の径のものは、現在埋めてしまっている。



分湯。造成した小屋から自然流下で降りてきた温泉を、ここで、利用者ごとの管に分湯している。分湯後の湯は架橋ポリプロピレンの耐酸性のパイプで、これも自然流下で、各施設に向かう。



下地獄の源泉。下部にあるケーシングから高圧の蒸気が吹き上がっており、黒く塗られたガス管についているバルブで圧力を調整している。



下地獄の温泉の造成。左記の写真の源泉からガス管で蒸気を上に造成小屋に送る。小屋では山からの水を上から霧のように落とし、蒸気を湯に造成している。



硫化水素の測定器が置かれているテント

＜東鳴子の旅館における湯の管理＞

次に東鳴子の旅館「大沼」での湯の管理の事例をみる。大沼には、内湯として、混浴大浴場「薬師千人風呂」（女性のみの時間帯あり）、「天女風呂」（女性）、足湯「石割の湯」、貸切可能な「陰の湯」、「陽の湯」、「灯の湯」とオンドルの「ふかし風呂」がある。また、敷地と離れたところに庭園貸切露天風呂「母里（もり）の湯」がある。

源泉としては、自家源泉（掘削自噴／上総掘り）が３本、共同源泉が１本ある。この共同源泉は市のものではなく、地区内の７軒の旅館が有限会社を作って共同で所有・管理しているものである（今は５軒に減っている）。

自家源泉については、敷地内にあり、３本を地中で１つにまとめそこから引き湯をしている。基本的にはまず旅館の地下に引き、そこからポンプで４階に揚げ（４階のタンクが空になると自動的にポンプが回る）、４階から自然流下で各浴槽に落としていく経路を取っている。また、大浴場には自家源泉から自然流下式で入る経路もある（継ぎ足し、継ぎ足しになっ

ているため配管図がなく、東日本大震災の際に、停電になって、大浴場にそれでも源泉が流れてきて、初めて、自然流下式の経路があることがわかった）。

自家源泉については、熱交換で洗面台用の温水も作っている。ただし短い距離なので源泉の温度低下はほぼない。また、地下室は温泉のパイプから出る熱を使った乾燥室としても使用している。一方、共同源泉については、敷地から１㎞程度離れた露天風呂にポンプで送っている。

温度調節は流す湯量で行う。湯量を多くし、どんどん源泉をあふれさせれば、湯温が高くなる。逆に減らせば、湯船で温度が低下していくため、湯温が低くなる。これを、バルブをゼロコンマ何度ということで調整してやっていく。しかも調整してもすぐに湯温が変わるわけではなく、１時間程度かかるので、ともかく長年の経験から判断してやるしかない。もちろんマニュアルなどないので、自分の経験を高めていくしかやりようがない。気温や気候によっても大きく変わるため、調整は極めて難しい。特に敷地から離れたところにある露天風呂については、ミスをすると、１㎞程度を行ったり来たりすることになり、苦労が大きい。

バルブは源泉側と浴槽の湯口の側の双方にある。それぞれを少しずつ動かして調整する。気温や天候を見ながら日に３回、４回と調整していく。なお、少し前までは源泉側のバルブ調整はレバー型の機器で行っていたが、流石に調整が難しく、今は回すタイプのバルブにしている。

管は普通のガス管である。かつて銅管が流行ったことがあったが、細かいピンホールが多数できてしまうということですぐに使われなくなった。



共同源泉のパイプ。中央上の白いパイプから入ってきて左側のタンクに貯まり、中央下のポンプで押し上げられ、奥に向かう黒いパイプで１㎞離れた露天風呂に引き湯される。



タンクの中身



バルブの調整。勘と経験でゼロコンマ何度か回していく。



自家源泉。この下に３本の坑道からの湯が集まっている。温泉神に供える御神酒が置いてある。



自家源泉から来るお湯はこの地下室に入ってくる。やや左に上に伸びているのが、自家源泉のお湯を４階まで押し上げるポンプとパイプ。４階のタンクが空になるとポンプが自動で動く。
パイプの経路があまりに複雑で、図面もないため、混乱しないように札をつけてある。



熱交換の様子



大浴場の側の湯口のバルブ。
これもゼロコンマ何度という調整をしていく必要がある。

伝統的入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

伝統的な入浴法は特に伝えられていない[137]。

鳴子温泉郷には、先に述べたように、温泉にまつわる神社として川渡に温泉石神社が、鳴子に温泉神社が古くから鎮座している。また文化文政期に東鳴子（赤湯）に東鳴子温泉神社（旧名：赤湯温泉神社）が建てられている。いずれも現在の祭神は、全国の温泉神社で広く祀られている大己貴命（おおなむちのみこと）と少彦名命（すくなひこなのみこと）となっている[138]。

137 鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

138 この段落以降については、鳴子町史編纂委員会「鳴子町史　上巻」昭和 49 年、「鳴子町史　下巻」昭和 53 年を参照した。他の情報源については当該箇所に脚註を追加した。

ただし、安永２（1773）年の史料をみると、鳴子温泉郷の神社全て（ただし、この時点では東鳴子神社は建立されていない）で山伏が別当（神社を管理する別当寺が全て修験系の寺院）を務めており、近世まで修験系の山岳信仰が大きな力を持っていたと思われる。なお、鳴子温泉郷の山伏には、天台宗系の聖護院（しょうごいん）を総本山とする本山派と、羽黒山寂光寺（じゃっこうじ）（現：出羽三山神社）を総本山とする羽黒派がおり、各神社はいずれかの派の山伏の管理下にあった。そのため、かつての鳴子温泉郷には、熊野、蔵王、白山、月山、湯殿山など修験道の霊山を名称とする神社や山岳信仰として山神を祀る神社が多数鎮座していた。

川渡の温泉石神社は、旧暦７月20日が祭礼日であるが、近年は大きな祭は行われていない。なお、神体は二丈余の大石となっている。



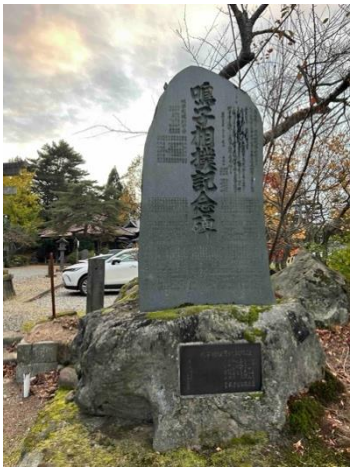
川渡の温泉石神社



鳴子の温泉神社



啼子の碑。
かつての神社の鎮座地で、共同浴場滝の湯から現在の神社に上がる参道の途中にある。



鳴子相撲の碑。
昭和40年代まで祭の際には大規模な奉納相撲があり、全国的に有名であった。

鳴子の温泉神社は、旧暦８月８日に鳴子温泉神社祭が賑々しく行われており、現在はこけし祭も同日に実施されている。かつて温泉神社は、現在の参道の中腹、啼子之碑（なきこのひ）があるあたりに鎮座していた。明治39（1906）年の大火で社殿が全焼したため、尿前（しとまえ）の関にあった薬師堂を移築して社殿とし、さらに明治44（1911）年に新社殿を作った。その後昭和９（1934）年に神社が現在地に移転し社殿も現在のものとなった。大祭の折には、山車や神輿が出て練り回る。また、明治中期から大正を最盛期とし、昭和40（1965）年頃まで鳴子の石カラ相撲と呼ばれる法楽の花相撲が行われており、往事には、九州の明烏、東京の浅草と並ぶ日本三大田舎相撲として有名であった。なお、現在の大祭でも、高校生の奉納相撲が行われている。ま

た、最近になってからではあるが、鳴子温泉旅館組合では鳴子温泉神社の祭礼の際に各旅館が内湯の湯を神社に捧げる献湯式行列を行っている[139]。

東鳴子の東鳴子神社は、玉造郡史に子の湯として祀られていた記録が残り、地蔵尊らしき石像が置かれているなど、そもそもは子宝をもたらす温泉に関わる信心の場であった可能性が高い。陸羽東線開通時に現在の社地に移転している。祭日は旧暦９月８日で、長く地祭であったが、昭和 51（1976）年より祭が大きくなっている。



東鳴子神社。
現在の社屋は陸羽東線が開通した際に遷座したもの。

上述したように、鳴子温泉郷では、温泉に関わる神社が鎮座し、おそらくは修験系の山岳信仰とも関わりながら、長く続いてきた。一方、仏閣については、他の温泉地に見られるような薬師信仰の寺は現存していない。ただし、先に触れたように、湯山氏には薬師信仰があったと思われ、湯山氏が整備した二つの城、湯山古城と湯山城には薬師堂があったとされる。このうち湯山古城の薬師堂については、昭和 20（1945）年まで、跡地に正和元（1312）年という年号が記された薬師の碑が残されていた。ただ、湯山氏の薬師信仰が温泉と関わりがあったかについてはわからない。また、先に述べたように、尿前の関の近くの薬師坂上にはかつて薬師堂が建てられていた。

温泉に関わる芸能としては座敷唄がある。文化文政以降、「おいとこ」「かっぽれ」「大津絵」「あいや節」など多くの唄が鳴子温泉郷で作られた。いずれも湯治客や芸者などが他地域から持ち込んだものが元で、鳴子で創作されたものではない。また明治時代には盆踊りの音頭（仙台藩時代は盆踊りが殆ど行われていなかったため新たに作る必要があった）、大正から昭和初期にかけには折からの新民謡ブームにのって、観光目的で、鳴子温泉小唄、鳴子音頭が作られた。

特産品としては、先にも触れたように、まず木地ものがある。史料としては、享保４（1719）年の佐久間洞巌（どうがん）「奥羽観蹟聞老志（おううかんせきもんろうし）」などにのっており、近世から多く製造され、湯治客への土産物になっていた。伝統的な製造法は二人引き轆轤（ろくろ）を使うもので、刻みタバコ入れ、碁盤の足、椀類・仏具類など多様な産品が作られていた。ただし昭和 40 年代以降は、ほぼこけしのみとなっており、木地屋という名称もこけし屋に変更された。

こけしは鬼首村の文久２（1862）年の文書に「こふけし」として名前が残るのが初見である

139 鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

とされている。ただし、当該の史料は、こけしを贅沢品の一部として禁制の対象とするという内容のものであり、それ以前からこけしが広まっていたことが確実である。こけしは、そもそもは子ども向けの玩具として、他のおもちゃ類とともに、湯治客向けに販売されていたものだが、大正以降木地ものの玩具が全国的に衰退した後も、文化性の高い民芸品として幾度もブームが起こり、現在にまで至っている。鳴子の日本こけし館では、昭和初期に日本で初めてこけしの研究を始めた深沢要のコレクション約 600 体（昭和 28（1953）年町に寄贈）、工芸家・美術史家で東京国立博物館工芸課長を務めた溝口三郎のコレクション約 800 体に加え、昭和 32（1957）年よりこけし祭において始まった全国の工人からのこけし奉納のこけしなどが収蔵されている。鳴子温泉郷のこけしは、宮城県の他の地域のこけしとともに、昭和 56（1981）年、「宮城伝統こけし」として国指定伝統的工芸品に認定されている[140]。





鳴子のこけしと店頭の様子

鳴子温泉郷の漆器（鳴子塗）については「安永風土記書上」（安永２（1773）年）の記載が初見と考えられている。明治になると、戊辰戦争の影響で、会津より塗師・蒔絵師が鳴子に移住してきたため、鳴子塗はさらに発展し、明治末に工芸品として最盛期を迎える。大正時代には土産物化していき、戦後は漆が不足したことで、職人がこけしに流れるとともに、プラスチック製品に市場を奪われた。こうした苦境の下、昭和 27（1952）年に美術性の高い竜文塗が生みだされて、工芸品として再興、今に至っている。なお、鳴子塗は、鳴子漆器として、平成３（1991 年）に 国指定伝統的工芸品に認定されている[141]。

伝統のある食品としては、鳴子地区にある餅処深瀬の「栗だんご」が有名である。このお菓子は、日露戦争後に鳴子に移住した初代が明治 39（1906）年に開発したものと言われており、店舗には観光客の行列が絶えない。ただし、製造過程で温泉を使っているわけではない。その他、鳴子温泉郷では、しそ巻きもよく販売されているが、これは宮城県の郷土料理として農林水産省が認定しているもの[142]で、広く宮城県内から山形で食されており、鳴子温泉郷のみ

140 経済産業省東北経済産業局ホームページ「東北の伝統的工芸品／宮城伝統こけし」
https://www.tohoku.meti.go.jp/s_densan/miyagi_01.html（令和６年 11 月８日確認）
141 経済産業省東北経済産業局ホームページ「東北の伝統的工芸品／鳴子漆器」
https://www.tohoku.meti.go.jp/s_densan/miyagi_03.html（令和６年 11 月８日確認）
142 農林水産省ホームページ「うちの郷土料理　次世代に伝えたい大切な味／しそ巻き　宮城県」
https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/search_menu/menu/shiso_maki_miyagi.html c

のものではない[143]。

温泉に関わる食品類としては、比較的古く 50 年ほど前からあるものとして、ラジウム卵がある。また、近年、温泉水も売られるようになった。鳴子では飲泉は歴史的に行われて来なかったが、この頃、温泉の源泉から採ったものをボトリングして売り出すようになっている。製造元は株式会社サトーで、地下から汲み出した温泉水を「まつばら源泉」などの名で全国に販売するとともに、各温泉旅館用のパッケージングを行っている。この他、ドライフーズなど、温泉を使って調理する食品加工が近年多く試みられている。



深瀬と名物の「栗だんご」

株式会社サトーの温泉水。（旅館大沼用にパッケージングしたもの）。



上記でみてきたように、鳴子温泉郷の最大の特徴は、源泉数が極めて多く、しかも泉質・泉温が多彩で、それに応じた様々な湯の管理の技術が歴史的に蓄積されていること、そして、現在では昔ほどの長期逗留はなくなっているものの、高度経済成長期半ばまで多くの湯治客を迎え続けてきた長い歴史を背景に、今に至るも自炊設備を持つ旅館が多く立地するなど、湯治場としての基盤を保ち続けていることにある。また、豊富な木材資源を持つ山間地であるとともに、そこに湯治客が多く集まっていたからこそ生まれた木地ものなどの伝統産業も、こけしや鳴子漆器という形で、現在に生き続けている。山岳信仰を背景とした温泉神への信仰も残る。

高度経済成長期以降、大規模な観光地やリゾート地としての開発が進んだものの、鳴子温泉郷には、未だ近世以来の湯治場の伝統、地場産業の存在が色濃く残っている。近年では、そうした伝統を活かし、現代版の湯治を広げていこうという動きも出てきた。農山村や漁村などの周辺地域を背景とした湯治の場としての歴史性、それを支える多彩な源泉を管理する技術、これが鳴子温泉郷の温泉文化の特徴ということができるだろう。

143 この段落と次の段落は鳴子温泉郷現地調査ヒアリングによる。

（３）岳温泉

岳温泉は、安達太良山連邦の鉄山直下の湯元（源泉地）から８km ほど離れた麓の温泉街まで遠距離の引き湯をしていることで知られた温泉地である。温泉街では、主要な宿泊施設が、メインストリートであるヒマラヤ通りの坂の左右に並ぶ構造となっている。また、国民保養温泉地にも指定されている。

ここでは、この岳温泉が辿ってきた数奇な歴史と温泉地としての特徴、８km という長い引き湯に象徴される湯の管理の技術を概観する。

岳温泉の歴史[144]

岳温泉の史料上の初出は、「日本三大実録」の貞観５（863）年 10 月 29 日の「小結」に従五位を授けるとの記載と考えられている。「小結」は現在の湯元付近であるとされており、当時から信仰の場所があったと考えられる。中世までは現在の湯元付近に小さな湯小屋があった程度と思われるが、丹羽二本松藩（寛永 14（1637）年誕生）の庇護の下、近世には陽日温泉として整備され、御殿湯が置かれ、湯女を 100 名以上抱える歓楽的な温泉地に成長した。この当時は、湯元直近の標高 1,500m の鉄山（安達太良山の外輪山の一つ）に位置していたため、冬は積雪で使えず、毎年八十八夜（新暦の５月１～２日頃）に温泉地を開いていた。山頂の温泉地に物資を上げる拠点は麓の深堀村（現在の岳温泉の西南部にある深堀地区）にあった。文化年間の「諸国温泉功能鑑」では東北地方１位（東方前頭三枚目）になっている[145]。

ところが、文政７（1824）年、温泉街全てを埋没させる巨大な山津波が発生する。「岳山崩一見」や「奥州二本松岳山変事筆記」の記録によれば、地元民や湯治客だけで 60 名以上の被害を出しており、従業員や湯女を含めた被害者数はそれを遙かに上回っていたであろう大災害であった。医師や人足 600 人以上が救助に赴いたが、死骸が地中に埋まり、腐敗し、ほくろやあざなどを手がかりにようやく誰かを見分けられるような状態であったという。二本松藩は湯元付近での再興を断念し、岳温泉街の北方、現在の不動平付近に御殿湯・温泉神社を移転させ、山津波の翌年、文政８（1825）年には、早くも十文字温泉の名（岳の湯、岳温泉とも呼ばれた）で新温泉街を開業させた。この際、もとの陽日温泉のあった湯元から、湯樋で、６km に及ぶ引き湯を始めている。二本松藩がいかに岳温泉を重視していたかがわかる素早さである。引き湯については、当初は土管であったが、湯冷めが大きいため、松の木管に変えている。松の木管の使用は、後述するように、昭和 40 年代まで続く。十文字温泉では、高台に温泉神社と御殿湯が鎮座し、旅館 14 軒、３つの共同浴場、そして多くの茶屋や商店、工人な

144 この項、戦前までの歴史については、高木亨「復興の歴史を刻む岳温泉」一般財団法人日本地図センター　月刊地図中心　平成 25 年 12 月 P18-P19、岳温泉協会「天翔ける風の光に。岳温泉復興 100 周年記念誌」平成 18 年、岳温泉協会ホームページ「岳温泉について」https://www.dakeonsen.or.jp/dakeonsen（令和６年 11 月８日確認）を参照した。それ以外の典拠については当該箇所に別途脚註を付けた。

145 東京大学デジタルアーカイブポータル「諸国温泉功能鑑（ページの題名は効能鑑だが史料画像は功能鑑）」https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/6e7ee624-7914-4d9b-bf31-07310dcc6be9（令和６年 11 月８日確認）

どが軒を連ねていたという。絵図をみる限り湯宿は全て二階造りとなっており、極めて大きな温泉街であったことがわかる。この結果、嘉永５（1852）年刊「吾妻のみやげ」所収の「諸国温泉功能鑑」では東北地方１位（東方前頭二枚目）に再びなるなど、大きな繁栄を遂げることになった。

だが、またしても状況は暗転する。明治元（1868）年、賊軍側となった二本松藩が、官軍が会津討伐の拠点に使えないようするため、自ら十文字温泉を焼き払ったのである。温泉街は、明治３（1870）年に、今度は温泉に関わっていた村人の手により再建されることとなる。深堀地区は、先に述べたように、陽日温泉の時代から温泉で働く人が住んでいた地区であり、そこに遠距離の引き湯を行ったのである。再興された温泉街は、旅館９軒、共同浴場２軒の小規模なものであった。また宿といっても、もともとあった家屋を宿に転用したものであり、近郷の農民などが楽しむ小規模な湯治場であったという。

しかし、明治 36（1903）年、失火により、この深堀温泉までも全焼してしまう（現在、深堀地区には石垣のみが残る）。その後、再び地域で出資を集め、国有林地を払い下げてもらい、本田徳治翁を中心に岳温泉株式合資会社（現在の岳温泉管理株式会社）を作り、岳温泉は現在地に再興される。８㎞離れた湯元からの引き湯、中央に坂となっている道路を敷設し、左右に旅館や商店を並べる現在の温泉街の基本構造はこの再興時と変わらない。ただし、当時は２つの共同浴場が設置されていた。

再興した岳温泉だが、大正 12（1923）年、今度は経営の悪化に見舞われる。この時、岳温泉株式合資会社を巨額の資金で買取り、岳温泉を救済したのが、秋田県出身で台湾土地建物株式会社社長として台湾で事業に成功していた木村泰治である。木村は、温泉街の経営だけでなく、最新のアメリカ製のモーターで引き湯のための木管製造を大幅に効率化するなど、湯の管理についても、大きな革新を行っている。また、木管自体の性能も上がり、湯口から温泉街まで４千本もの管を継いで引き湯していたにもの関わらず、昭和初めには、冬季でも湯温が下がらないようになったという。なお、岳温泉管理株式会社はその後も現在まで継続して湯元の管理などを行っているが、組織的には平成になってから地元の旅館業者組合を中心とした資本構成に変更されている[146]。

昭和３（1928）年には、岳温泉道路が整備され、自動車の通行も可能となった。また、昭和４（1929）年にはスキー場も初めて整備されている。岳温泉は、その後、昭和９（1934）年の大凶作の影響などはあったものの、昭和 16（1941）年まで繁栄を続けた。しかし、その後、戦況の悪化とともに、岳温泉も戦争への対応を迫られ、昭和 19（1944）年には学童疎開の受け入れを始めている。

岳温泉は、明治末期に現在地に移行した後も、共同浴場で湯を使っており、宿屋に内湯はなかった。昭和６（1931）年から旅館９軒で順次内湯が始まったが、それでも外湯を使うのが基本であった。戦後もしばらくは外湯での温泉の提供は続き、当時は、岳温泉管理株式会社の

146 岳温泉現地調査ヒアリングによる。

集金人が、各宿屋に泊まる湯治客に、直接入湯税を集めに来ていたという。完全な内湯化の契機となったのは、昭和 30（1955）年の国民保養温泉地の指定で、その際に温泉街整備の一環として２つあった古い共同浴場が廃業となった。その後は、入湯税の徴収も、各温泉旅館経由に変更された[147]。

岳温泉は、戦後、旅館９軒で再スタートした。昭和 25（1950）年には湯口近くにくろがね小屋（山小屋で、温泉も引き湯されている）も完成している。入湯客数は、戦後すぐの昭和 26（1951）年度では、32,000 人程度とまだまだ少なかった。

その後、岳温泉は、昭和 30（1955）年に国民保養温泉地に、昭和 32（1957）年には磐梯朝日国立公園の一部に指定される。また昭和 29（1954）年にはスキー場にリフトも新設された（昭和 47（1972）年より、富士急行のあだたら高原スキー場に）。なお、昭和 30 年の国民保養温泉地指定にあわせて、メインストリートの人工川と街路樹の整備をするとともに、先に述べたように、道路拡張のため、古い共同浴場を廃止している（現在は温泉街に１カ所共同浴場「岳の湯」がある。加えてスキー場近くに、平成 27（2015）年、富士急行株式会社が日帰り温泉施設「あだたら山 奥岳の湯」をオープンしている）。また、同年、盆踊り大会を、それまでの地域で自主的に行われていた小規模なものから、観光用の大きなものに変更した。

こうした動きを受け、岳温泉の入湯者数はその後順調に拡大、昭和 37（1962）年度には 120,060 人と 10 万人を、昭和 42（1967）年度には 254,926 人と 20 万人を突破し、翌 43（1968）年度には 266,661 人のピークに達した。だが、入湯客数の伸びはここで止まり、1970 年代には岳温泉は停滞期を迎えることになる。岳温泉では、こうした停滞状況を吹き飛ばすため、文化イベントなど様々な観光行事を行い、オフシーズン対策を打っていたが、大きな決め手とはならなかった。この状況に風穴を開けたのが、昭和 57（1982）年から平成 18（2006）年まで夏期に実施されていた「ニコニコ共和国」である。

「ニコニコ共和国」企画の契機としては、上記の 70 年代を通じた停滞に加え、昭和 57（1982）年に東京-盛岡間に東北新幹線が開通することが決定されたことが大きい。東北新幹線に対して岳温泉は無策で、新幹線と在来線の乗り換えが発生することで、かえって東京からの所要時間が延びてしまうことになった。こうした切羽詰まった状況の中、打開のための話し合いが行われた。この話し合いの中で、当時、井上ひさしの「吉里吉里人（きりきりじん）」（東北地方の一寒村が日本政府に愛想を尽かし、突如「吉里吉里国」を名乗り独立を宣言する物語）が大ヒット（昭和 56（1981）年）していたことから、ミニ独立国型のキャンペーン「ニコニコ共和国」をやろうというアイデアが生まれることになった。

このニコニコ共和国は、パロディ的な独立国を作って地域を PR しようという地元発の手作り企画で、具体的な内容としては、憲法を作り、大統領以下の閣僚を町民から任命し、温泉街の各施設を国家機関に模し、その設定を活かして、夏場に連続してイベントを展開するとともに、各種のグッズを開発・販売している。当時は各自治体でミニ独立国ブームがあった（最

147 これ以降、岳温泉観光協会「入湯客数推移」「年度別入湯税対象者入湯客数」、ニコニコ共和国国家広報部「ニコニコ共和国建国記」1982 年、岳温泉現地調査ヒアリングによる。

盛期は 203 カ国に及んだ）こともあり、ニコニコ共和国はマスコミに次々と取りあげられ、爆発的な量のパブリシティ効果を生んだ。

ニコニコ共和国の成功もあり、その後の 10 年で殆どの旅館が増改築を実施、昭和 60 年代には、岳温泉の入湯客が再び増え始める。また、当時は、リゾートブーム、スキーブームの時代であり、昭和 63（1988）年には岳温泉の東方、二本松市上葉木坂（かみはぎざか）に大規模年金保養基地「グリーンピア二本松」も開業していた（平成 16（2004）年に経営破綻により二本松市に払い下げ）。この中で、岳温泉の入湯客数は、平成元（1989）年度に 407,304 人と 40 万人を初めて突破、ピーク時の平成９（1997）年度には 483,026 人にまで達している。

平成７年度以降、岳温泉の入湯客数は、バブル後の低成長もあり、ゆるやかに減少を続けた。さらに、平成 23（2011）年度には東日本大震災と原発事故が発生、160,413 人にまで低下している。平成終わりに向けて 20 万人内外にまで入湯客数を戻すが、今度は新型コロナウイルス感染症が発生、令和２（2020）年度には 75,507 人にまで激減してしまう。コロナの収束に伴い復活したものの、令和５（2023）年度段階ではまだ 146,464 人と東日本大震災直後より低い水準に止まっている。

こうした中、岳温泉では、近隣のサーキット利用施設やトレイルランの訪問客などを対象としたアクティビティ型ホテルへの改装、ヘルスツーリズム商品の開発など新しい動きがでてきている[148]。また、岳温泉国民保養温泉地計画書では、「ウォーキングと温泉と食事で健康になる!」という岳温泉協会のスローガンの下でのウォーキングプログラムの展開、安達太良山の自然環境と特性を活かした「あだたらアクティビティ」名称での体験商品の展開、古来から変わらぬ泉質と引き湯の特性を活かした「湯守文化の継承」などを柱とした保養温泉地づくりが計画されている[149]。令和２（2020）年には、ニコニコ共和国時代に発刊されていた「ニコニコプレス」も復刊した[150]。なお、岳温泉の旅館の女将は「かたかごの会」を作り、岳温泉観光協会の女性組織「あだたらすみれ会」とともに、観光イベントなどで活躍している。

148 三原 昌巳「福島県二本松市岳温泉地区における集客対象の拡大とコミュニティ・ベースド・ツーリズムの可能性」日本地理学会発表要旨集　2020 年度日本地理学会秋季学術大会　令和２年

149 環境省「岳温泉国民保養温泉地計画書」令和３年４月

150 岳温泉観光協会「岳温泉ニコニコプレス」令和２年７月１日（復刊号）

岳温泉の源泉

岳温泉の泉質は単純酸性泉であり、現在 15 カ所から自噴する源泉を集中管理して各施設（旅館 10、共同浴場２、介護施設１）に分湯している。温度は約 55 度、1,290 リットル／分で、岳温泉管理株式会社が源泉を所有・管理している。源泉地から自然流下で８km 引き湯、岳温泉の温泉街に流している。pH は 2.48 の酸性泉で、無味無臭である。

源泉 15 カ所は、湯日温泉と呼ばれていた時代から変わらず、それぞれ湯温や泉質が異なる。また、「熱湯の湯（滝の湯）」「箱の湯（黒の湯）」「冷えの湯」「青の湯」などの名称が歴史的に付けられている[151]。

岳温泉の湯の管理の技術[152]

岳温泉の源泉は、上述したように、陽日温泉の時代と全く同じ 15 本の自然湧出泉であり、それをそのまま現在も使用している。麓への引き湯に当たっては、まず、各源泉からの湯を１つにまとめるが、その際には、15 本を１回で合流させるのではなく、数本ずつ合流させながら、最終的に１つにしていく。この合流、及び、麓までの引き湯は全て自然流下である。引き湯された温泉は、温泉街の上にある４つの分湯所（不公平がでないように同じ高度に設置）から各旅館、共同浴場に、ここも自然流下で、湯を流していく。酸性度が高くポンプは直ぐ壊れるため、引き湯は、近世の十文字温泉時代と同様、自然流下のままである。



湯元には洞があり、温泉神へのお備えが行われている。
※岳温泉観光協会提供

東日本大震災以前の源泉近くの状況。
その当時までは木樋が使われていた。
※岳温泉観光協会提供



源泉からのパイプは塩ビ製である。耐酸性があり、今のところ壊れていない。ちなみに、東日本大震災までは湯元の太い管には松の木の樋、昭和 40 年代まではそれから下の管に松の木管を使っていた。木管は、木村氏が買収した後は、先述したように、アメリカ製のモーターでくりぬいて作るようになり、製造工程が合理化された。木管は片方が尖っており、そちら側

151 環境省「岳温泉国民保養温泉地計画書」令和３年４月及び岳温泉現地調査ヒアリングによる。

152 この項は岳温泉現地調査ヒアリングによる。

を次の木管に突き刺して使う。突き刺したところから湯が漏れないようにヒノキの皮を縄にしたものを巻き付けていた。木管の長さは一間（1.8m）で、これが 4,000 本以上湯元から麓まで連なっていた。



温泉神社に置かれているかつて使われていた木管。



温泉神社に置かれているかつて使われていた木の樋。

木管部分は、塩ビになってから耐久性が高く便利になった。一方、湯元については、木樋を大口径の塩ビで代替しているが、実は木の樋（15cm 角）の時の方が、断面積が広く、湯の花が詰まりにくかった。

源泉の管理は 70 代３人、40 代２人、30 代１人の計６人だが、70 代の１人の体調が悪いため実質５人で回している。うち 30 代はまだ弟子の段階で、40 代からは一人前だが、70 代の２人しか岳温泉内に住んでいないので、緊急時は 70 代の２人もしくは手の空いた方の１人で対応するぎりぎりの体制になっている（令和６（2024）年 11 月時点）。

スケール（湯の花）が付くのは湯元から 800m位である。これを、毎週、３分の１ずつ掃除する。湯元の塩ビ管には 20mごとに点検口があり、この点検口にロープを入れて次の点検口まで通し、次にそこにたわしを付け、中をこすっていく。湯元の塩ビ管の径は 200㎜ と 150㎜ である。湯元で、たわしで湯の花を流すと、引き湯の管を通じて、各浴場へと湯の花が流れていく。そのため、湯が乳白色になる。岳温泉では、週に１回、湯元の清掃で湯が乳白色になる日をミルキーデイと呼んでいる。

スケールを取るのは週に１回だが、他の作業もあるので、積雪の多い時以外は、週５日は湯元に上っている。台風で壊れた土台をコンクリで直す、夏草を刈る、車を上げるための道造り、冬準備とやることはいくらでもある。冬準備としては、点検口のあるところの近くに積雪してもわかるように柱を立てる。立てられるところに立てるので点検口とはどうしても少しずれる。

３月から４月、積雪の多い時のスケール取りは極めて難しい。湯口までたどり着くのに６時間もかかり、結局そのまま引き返したこともあるし、たどり着かないまま戻ることもある。

各点検口の場所を示す柱に辿り着くと、だいたいこの辺りと当たりをつけて斜めに竹の棒を突き刺して点検口の上の雪を取り除く。真上から行うと、雪の下に空洞があるので、人が下に落ちてしまう。また、硫化水素がたまっており大変危ない。ここだと思っても勘が外れ

ることがあり、雪を取り除くのに１時間かかることもある。



冬の管理。点検口近くに建てた柱を目標に斜めに穴を掘っていく。※岳温泉観光協会提供



冬の管理。深い穴に入って湯の花取りの作業をしなければならない。※岳温泉観光協会提供



冬の管理。現在使っている径の太い塩ビパイプが見える。※岳温泉観光協会提供



ミルキーデイ　※岳温泉観光協会提供

各源泉は泉質や温度が異なる。これを適切に混合して、夏場は 53 度程度、冬場は 56～57 度程度にしていく。この際流量は三角堰で測る。麓の分湯所まで殆ど湯温は下がらない。常に熱湯が流れているため、発泡スチロールを巻いた配管自体の温度が源泉と同じまま保たれており、これが外気の影響を遮断している。

源泉にはそのまま使える柔らかいお湯もあるが（湯元付近の「くろがね小屋」には入浴施設もある）、多くがきつい泉質で、とても入浴できるようなものではなく、また、源泉管理の担当者の手も荒れる。ところが、８km 引き湯して町に着くと、これが柔らかくなっている。pH も成分も変わらないが、人が入浴できる湯に変わっている。

８km の引き湯部分については地中化されている。そのため、引き湯部分での漏れで分湯所の湯量が減った場合や、雨水などが入って湯温が下がった場合、どの部分で問題があるかがなかなかわからない。大きく地面が崩れ、初めて壊れた部分がわかることもある。湯温が下がる、湯量が減るなどの場合、湯元に行って緊急対応し、高温の源泉の量を増やすなどしていく必要がある。夜間以外は、連絡が来たら、岳温泉にいる 70 代の２人で対応している。

分湯所からは自然流下で各宿に湯が配湯されており、４カ所の分湯所それぞれに引き湯する経路や宿が異なる。分湯所に入った温泉の湯はまず中央に貯まる。その周囲に、当該分湯所経由での配湯を契約している旅館数分の区切られた貯湯スペースと、そこから各宿に繋がる配管が並んでいる。宿への引き湯は水の圧力を使ったサイホン式で、宿側が湯を使用してその宿の区分の貯湯スペースの湯量が下がると、自動的に、中央部から湯が注がれる仕組みになっている。



分湯所。セパレートされたスペースに行き先が書かれている。



分湯所の真ん中の蓋を開けたところ。

分湯所から後ろは各旅館の責任になる。管理会社と契約し、配管のアドバイスをしている先ではそう問題は起こらないが、それ以外の施設では湯温が急激に下がるなどの問題が起こることがある。その際、管理会社としては、分湯所までの湯温を上げるしか対応のしようがない。また分湯所からのパイプにスケールがたくさん付くことはないが、管の角度がない、曲がっているなどの場合、一部湯の花が貯まることがある。その際は水流で流して対応する。

ヒマラヤ坂の中程に面する旅館「mt.inn（マウント・イン）」では、分湯所から流れてきた湯は、一旦、宿の裏にあるタンクに貯めている。そこから、建物の下の配管を通して、逆側にある浴場の裏まで湯が運ばれていく。この際に、使用しない余分な温泉水は別の配管から捨てている。この旅館では、あつ湯とぬる湯の２種類の温度の温泉を提供しているため、浴槽の壁の裏側にあるバルブをひねって、季節や天候などを加味しながら、人の手で１日に数回湯量を微妙に調整し、それぞれの浴槽に適した湯温にしている。



分湯所からサイホン方式で旅館の裏のタンクに湯が入っていく。



タンクから各浴槽に自然流下で配湯されている。

岳温泉では、髪や食器などを洗った汚れた水（温泉からの湯を含む）は下水道に流して処理している。ただし、温泉水そのものがオーバーフローしたものは岳温泉の中心の道路の側溝に流れている川に廃湯している。これにより、廃湯は桜坂沿いに自然流下していく。

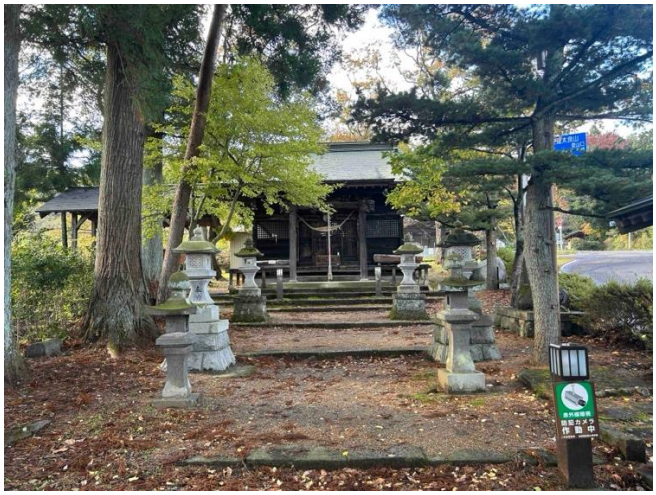
温泉街の下方には、観光スポットであり、農業用水としても利用している鏡ヶ池がある。酸性で硫黄成分が含まれる廃湯が鏡ヶ池に流れ込むと周辺の農業生産に悪影響が出る。このため、鏡ヶ池を迂回し、隣にある緑ヶ池に流れ込むようにしている。

緑ヶ池には、鏡ヶ池の真水と廃湯された温泉水が混ざって流れ込んでおり、そのため池の色が青や緑に変化する。「緑ヶ池」という名称は、この池の水の色からきている。ちなみに、鏡ヶ池と緑ヶ池の周辺は歩道が整備され、ウォーキングコースとなっている。

伝統的入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

伝統的な入浴法は特にない。

温泉に関わる信仰としては、温泉街の上の高台に、岳温泉神社が鎮座している。この神社は、薬師如来、大黒天、熊野権現、安達太良明神などが祀られている神仏習合の神社である。



岳温泉神社



岳温泉神社の大黒天

近世の絵図から判断すると、湯日にあった時には温泉の神は、おそらく石碑として、湯元のところに祀られていた（今も源泉名のひとつが「湯神様の湯」して伝えられているが、絵図の場所とはやや異なっている）。湯日温泉があった当時は、八十八夜（新暦５月１～２日）の温泉開きの日に、大玉村の相応寺が安達太良明神、湯前薬師などにお札を配っていたと史料にあり、これが現在の神社の春祭に繋がっている（現在でも、春祭は、同じ時期に、相応寺により行われている）。ただし、春祭で現在行われている献湯式は、平成２（1990）年に新たに追加されたものとなっている[153]。また、４月半ばに行われている岳温泉桜まつりは、東日本大震

[153] 以下の温泉神社についての歴史は、岳温泉観光協会「天翔ける風の光に。岳温泉復興 100 周年記念誌」平成 18 年による。献湯式については岳温泉現地調査ヒアリング。

災の後の落ち込みに対応するため、同年から始められた新しい祭（観光イベント）である[154]。

創建当時、深堀村の鎮守の社の建材であったと思われる寛政５（1793）年の記録がある柱材（現在の神社の社殿内に存置）には安達太良大明神と荒人神という２つの名が書かれており、湯日温泉と同じ山岳信仰系の祭神であった。深堀村の安達太良明神の祭は、18 世紀の記録では、旧暦９月９日に行われており、これが現在の８月 24 日～30 日の秋祭に繋がっている。現在、秋祭では盆踊りも行われているが、そもそもの盆踊りは、祭事ではなく、かつて岳温泉のヒマラヤ通りにあった２つの共同浴場の間で自主的に実施されていたものであった。それが、先に述べたように、昭和 30（1955）年の保養温泉地計画に基づく共同浴場の廃止を契機に日程をお盆の後に遅らせて観光行事化し、さらに神社の秋祭りと平行してやるのは大変だということで秋祭と１つにまとめられたという経緯がある。また、近年では、二本松市の名物である菊人形にちなみ二本松市内で菊手水（きくちょうず）と呼ばれる手水舎に洋菊を飾る催し物が行われており、岳温泉神社でも、秋祭の終わった後、紅葉の時期に実施されている。



秋祭　※岳温泉観光協会提供


盆踊り　※岳温泉観光協会提供


菊手水　※岳温泉観光協会提供

十文字時代の温泉地には、湯前薬師の宮、石の宮、稲荷宮、山神塔があり、その後、大黒天も建立された。戊辰戦争で焼けた後、湯前薬師の宮はすぐ深堀に運ばれたが、大黒天は運べず、昭和 39（1964）年になって、現在の温泉神社に運ばれている。稲荷宮は一時温泉神社にあったが、その後、祀っていた湯守とともに転居を繰り返し、今は本多家敷地内にある。山神塔は、安達太良山の向こう側の塩沢の木ノ根坂不動尊に同時期の日付がある石碑が残されて

154 岳温泉観光協会「岳温泉ニコニコプレス」令和３年４月 21 日

いるが、同じ山神塔であるかは確定できていない。

深堀温泉が焼けた後、湯前薬師の宮と深堀村の鎮守の社は現在の岳温泉の温泉神社に移され、同じ社地に祀られるようになった（湯前薬師については石製であったため、鎮守の社は村はずれにあったため焼け残ったと考えられる）。明治期の絵図、大正時代の写真では２つの社が並んでいる姿が残る。現在の社殿が竣工したのは昭和 17（1942）年で、現行のご本尊の薬師如来像は昭和 55（1980）年、現行の大黒天像は昭和 59（1984）年に作られたものである。なお、現在の社殿の奥には、深堀から運ばれた２つの社殿がそのまま納められており、石製の温泉神の社殿には湯神、陽日温泉神、薬師如来が、木製の鎮守の社には熊野神、安達太良明神、甑明神（こしきみょうじん）が祀られている。

神社の春祭を担う安達太良山相応寺は、最澄、空海との論争で知られる法相宗の名僧で、奥州にいた記録がある徳一（とくいつ）法師が開山したとの伝承を持つ寺である。同寺の開山縁起として、「安達太良山で漁師が猪を追い詰めたところ、猪が温泉に落ち、たちまち傷を癒やして反撃し、逆に猟師が怪我をした。それを見つけた徳一大師が猟師とともに温泉に入ったところ、猟師の傷もたちどころに癒えた。不思議に思ってよくみると、温泉が薬師如来の像の肌から湧き出ていた。そこでその像を眉岳(前ヶ岳)に運び開山した」といういわれが伝わっている。その後、眉岳の寺が焼けたため、宝徳４(1452)年、玉井亀山に再建され、修験道当山派の拠点となった。現在の本堂の左に建つ薬師堂内に安置されている薬師如来は、亀山の元の相応寺から移った岳山湯前薬師とされており、脇仏の日光・月光菩薩、両側の十二神將とともに大玉村有形文化財に指定されている[155]。

また、温泉にまつわるものとしては、かつて湯元で採った湯の花を入浴剤として販売していた（集めた湯の花を天日干しして袋詰めして製造）。ただし、草津のような綺麗な色にならず、やや黒ずんでいた。かつては年間販売額 100 万円ほどあったが、風呂の自動追い焚き機能が普及するにつれて故障の原因になるということで売れなくなり、販売中止としている。

食品としては、昭和 24 (1949) 年創業の玉川屋のくろがね焼がある。これは、昭和 32 (1957) 年高松宮殿下が御来岳スキーにおいでになった時の献上品である[156]。温泉に関わる商品としては「温泉たまごとろんたま」を地元の株式会社佐藤物産が製造販売している[157]。

岳温泉は、幾度も大災害にあり、転地を余儀なくされながらもその長い歴史を紡いできた温泉地である。また、山津波に伴って源泉地から離れてからは、現代のような工学的技術がないにも関わらず、６km 以上もの引き湯（現在は８km）を長年に亘って続けていた。温泉への信心も根強く、温泉地が途絶えるごとにご神体を次の温泉地に運び出し、安達太良明神に始まる山岳系の神と薬師如来を合わせて祀ってきてもいる。さらに、近年では「ニコニコ共

155 大玉村ホームページ「神社・仏閣　相応寺」
https://www.vill.otama.fukushima.jp/kankou_shiseki/spot/jinja_bukaku/sououji/（令和６年 11 月８日確認）

156 玉川屋ホームページ　https://adatarasanpo.wixsite.com/tamakawaya（令和６年 11 月８日確認）

157 佐藤物産ホームページ　https://omiyage-sato.com　（令和６年 11 月８日確認）

和国」などのユニークな観光振興や、山岳スポーツと連携した地域おこしにも積極的に取り組んでいる。

度重なる大災害があっても温泉と温泉神を守り続ける地元の強い心と、それを支える８㎞にも及ぶ引き湯の管理の技術、この２つが岳温泉の根幹を支えてきた。そして、それは令和の今も変わることなく続いている。

（４）草津温泉

草津温泉は、標高 2,160ｍの白根山の東麓に位置する温泉地で、草津自体も標高 1,000～1,200ｍの高地に位置する。東側へは、渋川などを経て、群馬県中心部へアクセスし、南側へは軽井沢からのルートがある。また、北に抜けると志賀高原へと繋がる。草津は、日本一の湧出量及び特異な泉質によって歴史的に著名な温泉地であり続けるとともに、近代には、上記の地理的要因により、観光地としても大きな発展を遂げた。

以下、こうした草津温泉の特徴とそれを支えてきた湯の管理の技術を概観する。

草津温泉の歴史

＜近世までの歴史＞

草津温泉については、日本武尊、行基、源頼朝などの開湯伝説があるが、第１章で述べたように、中世までは確かな史料を見出すことはできない。中世の史料としては、長野県長野市にある真宗大谷派の寺院西厳寺の由緒書に、正確な年代は不明ながら、1470 年代頃の蓮如の草津入湯の記載がある他、文明 18（1486）年の堯恵の「北国紀行」にも記録があり、堯恵が 27 日もの間湯治をした後、鎮守の明神に参詣したと記載されている。ここから考えると、既にこの時点で湯治場として一定の整備が進み、現在の白根神社に連なる信仰も確立されていたと思われる[158]。その他、延徳３（1491）年に書かれた「梅花無尽蔵」では、作者の歌人万里集九（ばんりしゅうく）が草津温泉を、摂津の有馬温泉、飛騨の湯島温泉（現在の岐阜県下呂温泉）と並べて日本の霊湯の最たるものと評価、また連歌師宗祇（そうぎ）の最期を記した「宗祇終焉記」に、宗祇が文亀２（1502）年に草津湯治をしていることがあるなど、室町後期には、既に草津の名が全国に知られていたことがわかる。また、織豊期の史料になるが、中世末期までには薬師信仰が広がっていたことも確認できる。この他、豊臣秀次などの豊臣一族の入湯、徳川家康による汲み湯の実施、大谷吉継、前田利家など中世末期には有名武将の草津湯治の記事が多く見られる。

草津を戦国時代に支配していたのは湯本氏である。湯本氏の史料上の初見は 1520 年代の武田信玄の吾妻郡（あがつまぐん）攻略に伴うもので、西吾妻の地侍として名前が残る（沼田藩藩士加沢平次左衛門「加沢記」）。当時武田家配下の真田家の直参となっていた湯本氏は、武田家滅亡後も真田家の家臣として活躍した。草津については、入湯者及び湯宿の双方から湯銭を徴収し領主に納めるとともに、火薬の材料となる硫黄も献上したとの記録が残り、草津の温泉資源の支配を権力の基盤としていたことがわかる。近世に入ると湯本氏は真田家沼田藩士として草津を支配する一族と、旅館業を営む一族に分かれた。藩士となった一族は寛文５（1665）年に真田家藩主に御家断絶を迫られ、草津の領主権を喪失し、農民となった。一方で旅館業を営む一族は地域支配を行う村方の有力者として近世を通じて活躍している。

草津領主としての湯本氏の断絶以降、草津は、真田家沼田藩の代官支配となり、さらに天和２（1681）年に真田家自体が改易されると、幕府天領となって、御目見得（おめみえ）以上の御家人が交代

158 以下、草津の中世の歴史については、荻原進「中世の草津」草津町発行　草津温泉誌第壱巻　昭和 51 年　P111-P512 による。

して代官を務めるように変わった[159]。また、同時期、前代に領主家から分かれ旅館業を営んでいた湯本氏の三家に内湯の権利が認められた。その後、湯本家は、男女・身分の別のない混浴や同部屋を嫌う武家や富裕な町人層に内湯付きの宿を提供していくことになる。その他の湯治客は、共同浴場をともに使い、宿にまとまって泊まっていた。食事は基本的に自炊であるが、宿が混んでいるなど炊事が難しい時には附食といって食事を頼むこともできた。また、おかずの食材を買って与えると食事を作ってくれる「飯たき女」、清水を朝夕運んできてくれる「水くみ女」、部屋の掃除を受け持つ「壷回り女」などを別途雇うこともでき、湯治客の生活を支えていた。按摩や髪結いなども多く湯宿を回っていた。

こうした湯治客は、信州（長野県方面）からの渋峠道・鳥居峠道・浅間腰道と上州（群馬県方面）からの高崎室田道・暮坂峠道・道祖神峠道を利用して草津へと訪れた。いずれも厳しい山道であるため、馬や駕籠も多く用いられた。馬については、馬の背の両側にそれぞれ２人の客が座れる櫓を組んだ櫓馬（やぐらば）という独特なやり方も行われていた[160]。

草津は、伝統的には、瘡毒（ばいどく）やハンセン病などへの効能を謳ってきた温泉地であるが、湯治客が増え、療養というよりも、避暑や遊行目的の顧客も珍しくなくなる中、次第に「草津千軒江戸構え」と称される程の賑わいを見せるようになる。二階三階建ての宿屋が立ち並び、揚弓、吹き矢、茶屋などが店を開き、宿の豪勢な大広間では江戸から来た講談師や咄家（はなしか）の寄席が行われ、芸者も多く渡ってきていた。ただし、こうした賑わいも、旧暦４月８日の薬師様の縁日から 10 月８日の縁日までの半年に限定されており、雪で道が閉ざされる冬季は「冬住み」といって、草津を閉め、近隣の地にある越冬のための家に移ることとなっていた。この「冬住み」の風習は明治 30（1897）年頃まで続く。

共同浴場としては、御座之湯、大滝之湯、熱之湯（かっけの湯）、鷲之湯、綿の湯、地蔵の湯、かっけの湯（たむし・水虫の湯）などがあり、時代によって草津五湯、草津七湯などと呼ばれていた。また、草津の湯の花は少なくとも江戸初期から著名であり、草津湯治の土産物となっていた他、近世中期には江戸でも広く売られるようになったとされる。この湯の花の採取については、代々三右衛門を名乗る湯根氏が採取権を持っていた。湯根氏については、湯小屋の清掃だけでなく、旅行病死者の処理、非人の取締、夜番等のお役を受け持っており、この役料として湯の花の採取が認められていた。

先に述べた湯本氏が残した史料によれば、明和８（1771）年から慶応３（1867）年にかけて草津温泉全体に訪れた湯治者の数は、年平均で、９千人から１万２千人程度となっている。ただし、天明３（1783）年の浅間山の大噴火とそれに伴う大凶作、天保５（1834）年の大飢饉の際には３千人台にまで落ちており、特に大飢饉の影響が最も大きかった天保８（1837）年は、1,274 人と、年間千人台にまで激減している。また、慶応２（1866）年から明治維新にか

159 以下、草津の近世の歴史については、川合勇太郎「近世の草津」草津町発行　草津温泉誌第壱巻　昭和 51 年 P513-P1123 による。別の文献を使用した場合、それぞれに脚註を付けた。

160 街道については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

けても４千人程度と減少しており、幕末の動乱が影響していることがわかる[161]。

＜明治・大正・昭和戦前期＞

近世の草津の姿は、明治維新及び明治２（1869）年に発生した大火によって姿を消した[162]。湯本氏や大家（大規模な旅館）などの有力者を中心とした地域の支配もなくなり、明治 10 年代以降、県内資本を中心に現在に続く新しい経営者が生まれていくこととなった。明治 11（1878）年の夏にはベルツが草津を初めて訪れており、明治 29（1896）年には草津の高温泉による療養法を論じた「熱水治療論」を発表している。ベルツはその後も草津を高く評価し、草津を近代的な療養型の温泉地にするべく土地の購入・開発に向けて活動する。ただし、こうした計画は、ベルツの帰国により中断されてしまうことになった。また、明治初期は、ベルツも着目した草津独特の高温泉治療（後の「時間湯」）の治療法が確立していった時期でもあり、明治２（1869）年の俳人石坂白亥（はくがい）の「白根紀行」、明治 12（1879）年の大槻文彦の「復軒旅日記」の中に初期の時間湯の様子が描かれている[163]。

当時の草津発展における最大の課題は、急峻（きゅうしゅん）な山道しかない交通の便の悪さであった。明治 29（1896）年に人力車、明治 30（1897）年頃に馬車が導入されて少しずつ改善されていったものの、極めて高価で、気軽に利用できるものではなかった。このため、本格的な交通問題の解決は大正 15（1926）年に軽井沢と草津を結ぶ草津電気鉄道（大正元（1912）年、草津軽便鉄道として創業、同 13（1924）年電気鉄道に改名）の開業を待つことになる。同鉄道の開設は草津の交通を大きく変え、昭和５（1930）年には、草津の湯治客の７割が軽井沢ルートを通っていたという記録が残る。また、大正年間に道路の整備が進んだことから、大正から昭和にかけ、タクシーや乗合自動車の営業も開始されており、昭和９（1934）年には軽井沢からのバスルートが、翌 10（1935）年には渋川からのルートが開設された[164]。

交通基盤が少しずつ整う中、温泉地自体も、明治半ば以降は大火からの復興も進んでいき、明治末年頃までには、新たな温泉街が形成され、旧来からの外湯は残しつつも旅館の過半で内湯化が進んでいく。後述する草津独自の湯治方法である時間湯が確立するのもこの頃である。また、湯畑からの湯の花採取についても新たな事業者が行うようになっており、現在の湯の花の採取者は採取を始めてから五代目に当たるという（一般社団法人草津温泉観光協会の管理の下販売されている）[165]。ただし、宿泊客数の数値をみると、明治６（1873）年の宿泊客数が年間９千人程度、明治 40（1907）年の宿泊客数が年間 10,877 人との数値が残ってお

161 宿泊客数推移については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

162 以下、草津の近代の歴史（高度経済成長期まで）については、山村順次「草津温泉集落の再編過程-特に高原都市開発に関連して-」 千葉大学大学院自然科学研究科地理環境学研究室　山村順次温泉地研究論文集　P191-P215 による。別途典拠がある場合は都度脚註をつけた。

163 ベルツ、時間湯については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

164 人力車、馬車、鉄道、バスの導入については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

165 湯の花採取については、朝日新聞デジタル記事「あ～湯～Happy！ 代々守り継ぐ 湯の花採取」令和４年９月９日、及び、草津温泉の現地調査ヒアリングによる。

り、この時点では、まだ、幕末・明治初頭の不振を乗り越え、江戸期の賑わいを取り戻した程度であった。

温泉地自体は新しくなったが、明治・大正・昭和初期にかけての草津は、それまでと同様、基本は病気療養のための湯治場としての性格が強かった。明治 40（1907）年の平均滞在日数は約 16 泊、大正７（1918）年、宿泊客数が７千人と大きく減っていた時期の平均滞在日数が約 23 泊、その後また宿泊客数が１万人を突破していった大正末期から昭和初期にかけては再び 16 泊程度となっており、平均して２週間強の長期逗留であった[166]。また、宿泊客数自体も、江戸から大きく増えているわけではない。

この中で特に注目されるのは、大正半ばになっても入湯客の中での 20～30 代の割合が５割を超えていることで、ここからは中高年層向けの保養的な湯治場というより、本格的な病気治療を目指して入湯客が集まる湯治場としての性格が強いことが窺える。この背景には、上述した時間湯の普及も１つの要素となっている。一方、大正４（1915）年には、国内で２番目のスキークラブが結成されるなど、戦後に大きく拡大するスキーの導入も始まっている。昭和５（1930）年には志賀高原側にもスキー場が開設され、志賀高原と草津を結ぶスキーツアーも開始、昭和 10 年代には草津は国内有数のスキーの聖地となっていた。湯治と行楽、双方の面で発展が見られていたのである。結果、草津に訪れる人の範囲も、県内・近隣県が多かったのが、次第に東京方面からの集客が増えていくことになった。

療養の場として、また行楽地としての発展を続けていた草津であったが、戦火が激しくなり、国内観光も規制されるようになっていくと、次第に戦争への対応が全面に出るようになっていく。昭和 18（1943）年には学童疎開が始まり、草津の旅館街は子どもたちの受け入れ施設へと変わっていった[167]。

＜第二次世界大戦後＞

戦後、昭和 20 年代から 40 年代にかけては、草津が観光地として大きく拡大していく時期となった。交通基盤としては、まず昭和 20（1945）年１月、敗戦直前に、渋川と長野原草津口を結ぶ長野原線（現：吾妻線）が開通、ついで昭和 30 年代には草津・北軽井沢間のバス路線、暮坂峠自動車道（渋川方面から中之条町を経て草津に繋ぐ峠）などが整備されるとともに、草津有料道路（長野原方面から草津を経て志賀高原へと結ぶ道路で、現在は無料の国道 292 号となっている）が開通、さらに昭和 40 年代には草津から志賀や万座に抜ける志賀草津ルートの道路が整備されている。これにより、草津は、鉄道だけでなくバスや自動車で渋川・軽井沢の両方面と繋がるとともに、志賀高原との間に広域観光ルートを発展させることになった。

こういった交通基盤の整備とそれを踏まえた草津北部でのスキー場、南部でのゴルフ場整

166 宿泊客数は山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

167 草津のスキーの発展、学童疎開については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

備の拡大により、草津は、それまでの湯治を中心とした温泉地から広域リゾートの拠点へと大きくその姿を変えていく。旧来の温泉街で内湯の温泉旅館が急激に増加しただけでなく、周辺部に大規模旅館やホテル、ペンション、別荘などが立ち並ぶようになり、草津自体が外縁部に大きく拡大したのである。結果、草津の入込客は、昭和 21（1946）年度の宿泊客 15 万人から昭和 34（1959）年度の 34 万人、昭和 44（1969）年度の 96 万人、そして昭和 51（1976）年度の 158 万人へと急激に増加した。この中で湯治を目的とする割合は、昭和 30 年代半ばには 10%程度にまで減少している。

草津温泉の宿泊客数はその後も増加を続け、昭和 61（1986）年度に 180 万人台に到達、バブル経済崩壊やスキー市場の縮小などもあったものの、平成に入っても 180 万人台から 190 万人台の宿泊客数を維持した。平成 20 年代前半には 170 万人台にまで落ち込む年もあったが、その後回復し、平成 31（2019）年度には 2,244,132 人に、新型コロナウイルス感染症の影響が終わった後の令和５（2023）年度には 2,534,699 人にまで達している[168]。この背景には、草津温泉自体による不断の再生の努力がある。

かつての草津の歴史情緒あふれる街並みを再興し、草津ならではの魅力を取り戻そうという動きは、1980 年代には既に始まっていた。その皮切りが滝下通りの再開発で、通り沿いの旅館・商店を、吾妻地方独特の和風旅館建築様式である「せがい造り」で復元し、また各旅館の一階部分を誰もが入れるスペースにするとともに、泊食分離を進め、街の賑わいづくりへと繋げていった。また、昭和 58（1983）年には、滝下通りの先に、共同浴場「大滝の湯」が復興された。昭和 62（1987）年には西の河原に大露天風呂も建設されている[169]。

続く 1990 年代前半には象設計集団を活用し、共同浴場「白旗の湯」の建設や足湯の設置、湯畑周辺の遊歩道・ベンチ・東屋の整備などが実施されており、その後も、歴史と文化、風情と情緒などをキーワードに御座之湯の再建、湯畑前の湯路広場の整備、観光施設化してしまっていた熱之湯の大正時代をモチーフとした建造物への建て替え、湯畑や西の河原での灯路の整備などが行われており、[170]大規模観光地になる前の草津の姿や魅力を取り戻すことで、入込の維持・拡大に成功してきた経緯がわかる。また、平成８（1996）年には、草津温泉の女将の会「湯の華会」も誕生する。これは女将の力を草津の地域活性化に活かそうというもので、今まで多くの PR イベントや草津の温泉水を利用した美容商品などの特産品開発を行ってきている[171]。高度経済成長期、温泉旅館のおもてなしの象徴として世に出た女将たちが、今度は、旅館の外、地域に出て街全体の活性化に挑んでいるのである。

---

168 平成 17 年度までの数値については、浅利一郎 石橋太郎 野方宏 大脇史恵「草津温泉ヒアリング調査報告」静岡大学経済研究センター研究叢書 5 平成 19 年 P17-P24 を参照。平成 18 年度以降の数値については草津町ホームページ「今月の入込状況」https://www.town.kusatsu.gunma.jp/www/contents/1485755746888/index.html（最終確認日令和６年 10 月 31 日）を参照。

169 80 年代の再開発については山村順次「草津温泉観光発達史」草津町発行　草津温泉誌第弐巻　平成４年

170 草津町役場「草津温泉再興の記録　2011-2017」平成 29 年

171 草津温泉女将会「湯の華会」ホームページ　https://www.yumomi.net/yunohanakai/（最終確認日令和６年 11 月８日）

こうした中、開湯以来の伝統を持つ湯治については、「時間湯」が令和３（2021）年に廃止され、「伝統湯」に変更される（湯長による入浴の管理がなくなるとともに、湯温についても、42 度程度にまで下がり、高温浴ではなくなった）など大きな変化があった。ただし、現在でも、町内に風呂無しアパートを借りて共同浴場（草津町内で 19 カ所運営されている）で湯治をしている人は残っている。また、新たに自炊設備を整えた宿泊施設が開業するなど、現代に合った湯治を復活させる試みも行われている[172]。

草津温泉の源泉

草津の源泉としては、草津町が管理する湯畑・白旗源泉（熱の湯及び湯畑周辺の公共用地内の全ての源泉を含む）、地蔵源泉、西（さい）の河原源泉（西の河原公共用地内の全ての源泉を含む）、煮川（にかわ）源泉、千代の湯源泉、わしの湯源泉、凪の湯源泉、湯川沿線源泉（湯川公共用地内の全ての源泉を含む）、万代（ばんだい）源泉（万代鉱（ばんだいこう））があり[173]、うち、湯畑、白旗、地蔵、煮川、西の河原、万代が主要６源泉と呼ばれている。この他、個別の温泉宿が持つ小規模な自家源泉（町管理以外）がある。この中で万代鉱のみ昭和 45（1970）年に硫黄鉱山から湧出した新しい源泉（掘削自噴泉）で、他は近世以前からの源泉となっている。



湯畑源泉



白旗源泉

令和５（2023）年の温泉分析書によると、湯畑の泉温は 52.3 度／pH は 2.0／泉質は酸性・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（硫化水素型）（低張性酸性高温泉）、白旗の泉温は 51.9 度／pH は 2.0／泉質は酸性・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（硫化水素型）（低張性酸性高温泉）、地蔵の泉温は 50.1 度／pH は 2.0／泉質は酸性・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（硫化水素型）（低張性酸性高温泉）、煮川の泉温は 49.8 度／pH は 2.1／泉質は酸性・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（硫化水素型）（低張性酸性高

172 近年の草津の時間湯や湯治の状況については、草津温泉の現地調査ヒアリングによる。

173 草津町温泉使用条例

温泉）、西の河原の泉温は 53.7 度／pH は 2.0／泉質は酸性-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（低張性酸性高温泉）、万代鉱の泉温は 94.6 度／pH は 1.7／泉質は酸性-水素-硫酸塩・塩化物温泉（低張性酸性高温泉）となっている。温泉分析書からわかるように、全て強酸性で且つ高温であり、特に万代鉱は泉温、酸性度ともに群を抜いて高い。また、いずれも泉質は溶存物質が 1,700 ㎎～3,000 ㎎の低張性（温泉の方が体液より浸透圧が低い）である。源泉のうち、湯畑、白旗、地蔵、煮川は硫黄成分が多く、湯が白濁し、湯の花が多く浮遊・沈殿する酸性・含硫黄-アルミニウム-硫酸塩・塩化物温泉（硫化水素型）となっている。一方、万代鉱と西の河原は硫黄泉ではなく、無色透明である。

自然湧出で毎分 32,300 リットル以上湧き出し、湯量は豊富で、自然湧出量は日本一である。ただし、湯川に流れ出てしまうなど温泉として利用されていないものも多い。平成 30（2018）年時点での湧出量は、湯畑 4,040 リットル／分、白旗 659 リットル／分、地蔵 252 リットル／分、煮川 252 リットル／分、西の河原 1,073 リットル／分、万代 6,200 リットル／分となっている[174]。

草津温泉の湯の管理の技術

＜源泉の管理＞

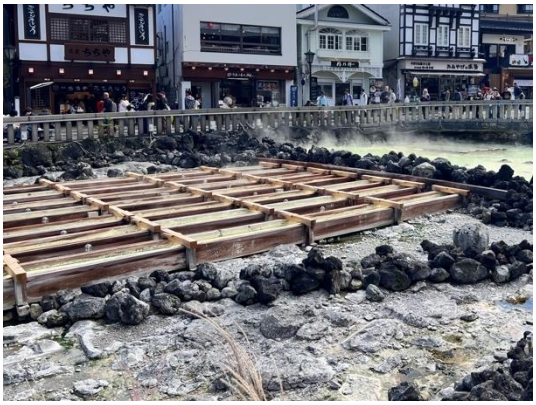
上述したように、草津の源泉は高温であり、また酸性度が高く、西の河原と万代鉱を除く源泉では湯の花が非常に多いという特性がある（なお、西の河原については、湯の花の沈殿はないが、露天風呂などに青緑色のイデユコゴメ綱の紅藻が多数発生しており、その剥ぎ取りが必要となっている。ただし、光合成が必要な藻であることから、引き湯のパイプ内にはあまり付着しない）。こうした泉質の源泉の湯を入湯客への湯の提供するに当たっては湯温を適切な温度（現在では 42 度程度）にまで加水せずに下げるとともに、強酸性に耐えうる引き湯の設備を整え、また、沈殿・付着する湯の花などのスケールを除去していく必要がある。加えて、近年では、環境保護の観点から廃湯の管理も重要となってきている。ここでは、こうした草津ならではの源泉の泉質に対応するために歴史的に引き継いできた技術の内容について整理する。

まず、近世以前の源泉についての技術の状況について、湯畑と白旗の湯を中心に見ていく。先に述べたように湯畑は江戸初期から湯の花の採取場所として知られ、徳川吉宗公に湯が献上される（湯を汲み上げた場所に「御汲上げの湯枠」が残る）など、主要源泉として歴史的に草津の中心を常に占めていた。湯畑という名称自体は明治期に確立したとされ、それ以前は「瀧ノ元」「湯の川」「湯壺」「湯の池」「湯の花の池」など様々な名で呼ばれていた。湯畑に湧出した源泉は、設置された湯樋もしくは透湯層露出部分を通った後、滝となって滝壺に流れ落ち、そこから各旅館等に引き湯される。こうした湯樋による湯畑の構造は、湯の花の

174 一般社団法人　草津温泉観光協会「草津温泉　泉質主義／圧倒的な湯量」
https://www.yumomi.net/senshitsusyugi/amount（令和６年 10 月 31 日確認）

採取、温泉の冷却、硫化水素の放散等を目的にしたものと考えられている。湯樋が設置されたのは明治 20 年代で、不定期に付け替えられており、平成 29（2017）年現在利用されている湯樋は、長さ約 40mのものが７本で樹齢 150 年以上の赤松を材として使用している[175]。

湯畑における湯の花については、先述したように、現在五代目となる特定の事業者が２ヶ月に１回採取している。２ヶ月で２～３㎝貯まった湯の花を、手作業で集めてケースに移し、軽トラックで乾燥小屋まで運び、そこで１月ほど乾燥させて網で漉して粉状にして製品化する[176]。なお、湯畑から旅館までの引き湯については、草津町の管理となっており、草津町と契約した温泉引用許可書に基づいて引き湯できる湯量が決められている。引き湯については、自然流下式とポンプ式の双方が使用されている[177]。



湯畑の湯樋



湯畑の滝

白旗源泉については、湯畑とは異なり、草津町と湯量での契約ではなく、源泉から引き湯をするｍ（引き湯のための配管）を持つという契約となっている。そのため湯量はその枡に自然流下してくる量となる。この配管については契約している各旅館が清掃を受け持っており、各宿が源泉から宿までの配管を掃除している。湯の花の掃除については、かつてはブラシで行っていたが、近年は高圧コンプレッサーも併用している。ただし、勢いが強すぎると配管を損ねるため、使用が難しい。

175 文化庁「国指定文化財等データベース」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index（令和６年 10 月 31 日確認）。

176 朝日新聞デジタル記事「あ～湯～Happy！ 代々守り継ぐ 湯の花採取」令和４年９月９日

177 草津町温泉使用条例




白旗源泉からの引湯配管清掃用メンテナンス口

＜旅館「奈良屋」における湯の管理＞

源泉から引き湯された後のお湯の管理について、明治 10（1877）年創業の「奈良屋」を例にみていく。奈良屋では、源泉として上述した白旗源泉を用いており、大浴場と貸切露天風呂を有している。

奈良屋ではまず白旗源泉から自然流下式で引かれてきた湯を、一旦敷地内の湯小屋に溜め、そこで一晩寝かせる(貯湯する)。これにより、湯温が、55～56 度から 46～47 度まで下がる。そこから、その日の気温・降水量などを考慮し、各湯船に配湯するバルブを微妙に動かしながら、湯量を調整し、適切な量を各湯船に流していく。この過程及び湯もみ（各湯船での湯の攪拌）をすることで、湯温をさらに下げ、適温の 41～42 度にピタリと合わせる。適温にしていくためには、気候や湯の花の蓄積によるパイプの詰まり等、様々な条件を踏まえるとともに、その時点だけでなく次に調整するまでの２時間程度の湯温の変化も予測しながら、バルブの開け閉めをミリ単位で調整しなければならない。

こういった作業は、電子機器などによる機械的な調整ができるものではなく、長い経験や先達からの教えにより、湯の管理の技術を磨いていくことが必要となる。また、湯小屋に貯める、湯もみをすることで、草津の酸性度が高く肌に刺激の強い湯が、体感として、「柔らかく」なっている。これも成分分析では計量できないことであり、湯の管理の経験が培った技術により提供される重要な要素となっている。奈良屋ではこうした技術を、湯守の職人の手仕事として重視している[178]。

178 白旗源泉からの引き湯、及び、奈良屋の「湯守」の職人の手仕事については草津町現地調査ヒアリングによる。



湯小屋内貯湯槽（奈良屋）



湯守による湯もみ（奈良屋）

＜草津における温泉用設備の開発と維持＞

湯畑や白旗など、近世以前から使用されてきた草津の湯の管理においてもう一つ重要なのが、酸性度が高く、また硫化水素ガスが含まれる湯に耐えられる設備の開発と保全である。このうちまず引き湯についていうと、合成樹脂材料が普及する第二次世界大戦後になるまで、草津の湯に耐えられ、引き湯に使える材料は、天然石の石組み（ただし、目地にセメント類が使えないため粘土もしくは硫黄目地を使う必要があった）と木樋・木管しかなかった（戦前には一部鉛が使用されたが、価格、耐久性の面で課題が多く、普及しなかった）[179]。

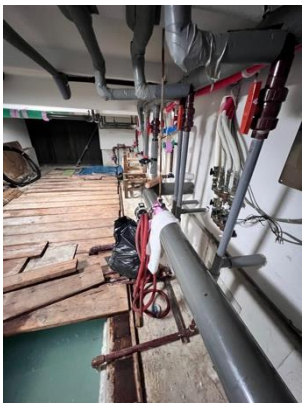
このうちよく使われていたのが木樋・木管で、草津の温泉街が歴史的に湯川沿いの低地に集中してきた背景にも、長い配管が難しい木樋・木管による自然流下式での引き湯しかできなかったことがある（先に述べたように、木樋のうち湯の花を沈殿させやすい幅の広い角樋は、今も湯畑で使用されている）。木管は、泉温を保持し、酸への耐性も高く、補修もしやすいことから、昭和 30 年代まで全ての旅館への引き湯に利用されていた。材質は樹脂の多い赤松材で根元から２～３m 程度がもっとも良質とされ、樹皮を剝がさずに使い、７年程度の耐久性があった。一方根元から３m より上の部材については３年程度の耐久性しかなかったとされる。木管は、特殊な平錐を使用して手揉みで一本一本穴を穿（うが）って作られており、高い技術と労力を必要とした。また、接合部には、和紙・桧皮・槇皮・麻などを巻いて水漏れを防ぐ必要があった。

合成樹脂パイプへの代替が本格的に試みられるようになったのは昭和 32（1957）年で、初めはポリエチレンが使用されたが、耐熱性に難があり、亀裂も多く生じたため、塩化ビニールパイプに代替された。これにより、昭和 36（1961）年には、湯畑周辺の仲町広場の全面舗装に伴い湯畑からの引き湯が全て塩化ビニールに取り替えられて地中に埋設され、草津独特の木管による引き湯の情景が消え去ることとなる。パイプの合成樹脂化に続いて、昭和 38（1963）年には、耐酸ポンプの開発にも成功し、それまで自然流下式でしか引き湯ができなか

179 草津温泉に対応した各工学技術については益子安「温泉工学」草津町役場　草津温泉誌　自然・科学編Ⅰ　昭和 59 年　P281-P350 を参照。

った湯畑の源泉をポンプアップできるようになった。この耐酸ポンプの普及が、温泉街中心地以外の旅館、さらには周辺の高原地域への引き湯へと繋がり、高度経済成長期の草津の大規模な面的拡大を支えていくことになる。

引き湯のためのパイプやポンプだけでなく、湯殿についても草津特有の湯への対応が必要であった。通常のコンクリートやモルタルを使用するとドロドロに溶けてしまうため、湯船も、湯船のある湯殿自体も、戦前・戦中までは全て松材を用いて造り、定期的に補修をしていた。この問題を解決したのが昭和 26（1951）年の耐酸セメントの実用化である。耐酸セメントは陶磁器の粉末を原材料としたもので、これをケイ酸ソーダの溶液でまとめ、モルタルの代わりの目地の材料とする。水気厳禁など、施工に当たっては通常のモルタルよりも手間がかかる技術であるが、これにより耐久性が高く近代的な湯殿・湯船が建築できるようになっただけではなく、木造では難しかった大浴場も開発できるようになった。



湯小屋内の耐酸性配管（奈良屋）



耐酸性のある湯殿・湯船（奈良屋）

もう一つ注目される技術が、熱交換により温泉から真水のお湯を造り出す技術である。肌に刺激が強い草津の湯では、真水の上がり湯を使うニーズが高く、これに対応するため、明治時代より、高温の温泉に冷たい水が流れるパイプなどを沈め真水の上がり湯を生成する装置が各種開発されてきていた。

万代鉱源泉は、昭和 45（1970）年、万座硫黄（株）が硫黄の試掘坑道の掘削をしていた時に大量の高熱泉が噴出したことに始まる。その後、昭和 47（1972）年に草津町による温泉の開発が始まった。この際課題となったのが、万代鉱の源泉が 100 度近い高温且つ大量であったことである。加水によって温度を低下させることは、膨大な上水量を必要とするため、上水の量に限界がある草津では採用できない。そこで着目されたのが既に草津に定着していた温泉と水道水との熱交換による上がり湯の製造技術であった。

これを踏まえ、万代鉱源泉からの湯については、町営の大規模施設「草津温泉 温泉基地」において温泉(96 度)と水道水(８度)との熱交換を行い、約 60 度まで下げた万代鉱の源泉を旅館等に引き湯し、一方、55 度程度まで温められた水道水については、旅館・家庭・事務所などに「温水」（真水のお湯）として配給することとなった。この結果、草津は、現在でも、

お湯を使うのにボイラーいらずという地域になっている。



草津温泉 温泉基地



同基地　熱交換設備

温水のもうひとつの重要な用途として道路の融雪がある。坂道が多く、冬季の積雪によるスリップ事故が絶えなかった草津では、道路の融雪は悲願であった。しかし、湯川（西の河原源泉から草津の温泉街を経由して流れる川で多くの源泉や廃湯が流れ込んでいる）などの酸性度の高い温泉を使っていては、融雪用の湯に自動車が接触した場合、簡単に腐食してしまうなど問題が多く、果たせなかった。これを解決したのが万代鉱の熱源を利用した豊富な温水であった。温水によるロードヒーティングは、昭和 53（1978）年、まず立町−仲町間で施工され、雪のない坂道を実現した。なお、極めて酸性度が高い源泉のため、温泉基地の設備は、貯湯のためのタンクは FRP 製、ポンプも耐酸 FRP 製となっている。熱交換器自体はチタン製となっているが、チタンであっても 10 年も持たず、定期的な交換が必要である。

草津の温泉は、利用だけでなく、廃湯についても大きな問題があった。草津の湯川水系などの下流にあり、廃湯や源泉自体が流れ込む吾妻川は、かつて死の川と呼ばれ、魚なども一切生息していなかった。これを解決すべく昭和 32（1957）年に群馬県企業局を中心に開始されたのが吾妻川の総合開発であり、この中で昭和 39（1964）年に草津中和工場が操業を開始、pH２の湯川水系の水に石灰を入れて pH５に中和する事業を世界に先駆けて開始した。なお、この際の石灰の投入量の算出については、湯川水系が硫黄及び塩酸だけでなく多くの重金属を含んでいるところから化学式からの計算では必要量が決定できず、石灰石の水系への投入実験が実施されている。計算により自動的に投入量を決定できないのは現在でも同じであり、川下の pH を試験紙で測りつつ、これまでの経験に基づき人の感覚でどれだけの石灰を入れるかを決めている。




中和工場　石灰を水に混合する装置、湯川への石灰水注入（国土交通省品木ダム水質管理所）

中和工場の操業開始についで昭和 41（1966）年には中和した沈殿物を貯める品木ダムも完成し、事業は一応の完成を見た。なお、ダムに貯められた硫酸カルシウム・塩化カルシウムなど中和生成物は、定期的に浚渫（しゅんせつ）され、脱水された後、土捨場に廃棄されている。こうした事業の結果、かつての死の川は蘇り、現在では魚も棲むようになった。なお、現在、中和工場及び品木ダムは国土交通省品木ダム水質管理所が運営している[180]。

上記の設備に関わる技術の一つの特徴として、他地域で既に完成した技術・製品を持ち込むのではなく、草津温泉の関係者が、自らで、もしくは、他地域のメーカーや技術者との協働で開発してきたものとなっていることがある。こうした流れは今も変わっておらず、旅館の建設やそこでの湯殿の整備にしても、また源泉からの引き湯や施設内部での配湯にしても、草津の事情を知り尽くした現地の建設業者や水道業者の関与が技術的に必須となっている（外部業者だけに依存すると、湯船や配管だけでなく、建築物自体にも大きな不具合がでることが多いと言われている[181]）。草津町指定の温泉温水設備指定工事店も、令和６（2024）年現在、指定業者 20 社全てが草津町の地場業者となっている[182]。

極めて酸性度が高く、高温で、湯の花も多い。草津の源泉ならではの泉質に対応するため、草津の地では、近世以前から独自の技術を生み出してきた。こうした努力は、近代技術が導入されるようになった明治以降もそのまま続き、現在でも草津における設備・施設の建設・維持には、現地にいる人々の経験に基づく日々の工夫が必須となっている。これもまた、草津の温泉文化を支える重要な技術のひとつである。

180　中和事業については、落合林吉「強酸性の河 吾妻川総合開発について」水利科学　10 巻３号　昭和 41 年８月 P62-P81、国土交通省関東地方局　品木ダム推進管理所ホームページ「中和事業とは」https://www.ktr.mlit.go.jp/sinaki/sinaki_index003.html（令和６年 10 月 16 日最終確認）、及び、草津現地調査ヒアリングによる。

181　草津現地調査ヒアリングによる。

182　草津町ホームページ「草津町指定工事店」https://www.town.kusatsu.gunma.jp/www/contents/1519362293841/files/siteikouji.pdf　（最終確認日令和６年 10 月 31 日）

伝統的な入浴法

伝統的な入浴法としては、これまでも触れてきたように、明治初期に確立され、令和３（2021）年まで行われてきた「時間湯」がある。廃止直前まで「時間湯」を行っていたのは千代の湯と地蔵の湯の２カ所のみであったが、かつては熱之湯、鷲之湯、松の湯、白旗の湯の各共同浴場に加え、望雲などの大規模旅館でも行われていた。

時間湯の具体的な入湯方法は、①体調確認・記帳・支払いなどの手続きをする、②水分を十分に取る、③神棚に拝礼、④湯もみで湯温を調整する、⑤入湯準備として足に湯を 10～20 杯かけ、⑥ついで頭部に 30 杯湯をかけ、⑦下半身を清める、⑧湯長の号令に応じて返事をしつつ３分間入浴する（入湯中は半眼・腹式呼吸）、⑨上がり（直ぐに立たず全身を拭かずに更衣室に戻る）、⑩10～15 分休息を取り、水分摂取を行うというもので、これを１日４回繰り返す。「時間湯」は、大正９（1920）年に布施医院が開業した後は同医院の医療的な監修を受けており、極端に高温な湯を使わない、１日の入浴回数を４回に制限する、など入湯時の事故を防ぐ改革を実施している[183]。

湯長は、時間湯で号令を掛けるだけでなく、湯治療養に来た人それぞれの体調を見、あるいは相談に乗るなど、幅広い役割を負っていた。初代の湯長は、明治 13（1880）年、熱の湯の管理をしていた野島小八郎だとされている。各共同浴場の湯長は、草津に湯治に来て時間湯により療養に成功した人が、初めは湯長の弟子となって働き、その後湯長となるという場合が多かった。また旅館の従業員が湯長を務める場合もあった[184]。

時間湯については、千代の湯と地蔵の湯において、湯長なし・高温浴なしの「伝統湯」に引き継がれたが、令和６年現在、伝統湯が行われているのは千代の湯のみとなっている。



伝統湯が行われている千代の湯

183 草津温泉時間湯保存会／NPO 法人草津湯治の会「湯の刻　-草津温泉写真集　明治～平成-」銀河書籍　平成 31 年

184 時間湯探求会「そろって三分。時間湯の伝統と現在」NPO 法人草津時間湯を守る会　平成 22 年

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

＜寺社仏閣、祭礼など＞

草津における温泉に関わる重要な寺社仏閣としては、草津の中心地を見下ろす高台にある白根神社と真言宗光泉寺（こうせんじ）がある。白根神社については、明治６（1873）年に近代社格制度によって吾妻郡の郷社に選定される以前は現在道の駅「運動茶屋公園」がある場所にあった。祭神は、いまは日本武尊であるが、かつては白根明神であったと考えられている。境内には沼神社、頼朝神社、三峯神社等があり、その他明治・大正年間に周辺にあった小規模な神社が多数合祀されている。例祭としては毎年７月の夏祭りがあり、明治・大正期には吾妻郡郡長が祭主となって行われていた。神輿が作られたのは明治後半である。また、奥宮として白根明神が御巣鷹山山頂付近に祀られている（かつては白根山の湯釜近辺にあった）。温泉関係の施設としては、境内に共同浴場「鷲之湯」がある[185]。



真言宗光泉寺



同左



同左

草津白根山はかつて修験道の霊場として知られており、平安末から鎌倉時代にかけての時期と推定される修験系の笹塔婆（ささとうば）が湯釜から出土している。白根神社については、「上野国神名帳」の吾妻郡の項に白根明神、小白根明神の名前があり、前者が白根神社、後者が奥宮に当たると考えられている。白根山湯釜から修験道系の笹塔婆が出土したこと、現在異本（いほん）が三種存在する「上野国神名帳」については少なくとも中世には成立したと考えられること、また道の駅・運動茶屋公園の旧社地に白根山に向けた修験道系の土壇がかつて残っていたことなどを考え合わせると、白根神社は、修験道系の山岳信仰の社として誕生した可能性が高い[186]。

なお、現在毎年８月に実施され、白根神社や光泉寺内の湯善神社を温泉の女神が回る草津温泉感謝祭は、1946 年に地元有志が始めた（一社）草津温泉観光協会主催の観光イベントで、白根神社の祭礼や光泉寺の行事ではない。縁起としては、江戸時代の草津温泉にあった、無病息災の願いを込め、丑の刻に温泉を浴び宴会を行う「丑湯祭り」（土用丑の日に鰻を食べる

185 中澤蔀「草津の神社仏閣」群馬報知新聞社　昭和 60 年　P95-P105

186 以下、修験道・笹塔婆・上野国神名帳については、尾崎喜左雄「古代の草津」草津町発行　草津温泉誌第壱巻　昭和 51 年　P３-P110 による。

風習が江戸に広まったことから作られたもの）にちなんで企画・実施されている[187]。なお、丑湯祭り自体は、全国の温泉地で幅広く行われている丑の日の行事である。

真言宗豊山派の光泉寺の境内はかつて薬師耕地と呼ばれており、文化７（1810）年の草津温泉絵図では、光泉寺ではなく、薬師堂の大伽藍を中心に多くの堂宇が立ち並ぶ様が描かれている。当時の光泉寺は現在の駐車場のところにあったが、明治 22（1889）年、薬師堂が焼失、再建の見通しが立たなかったことから、明治 36（1903）年、跡地に光泉寺が移転し、合わせて薬師堂から薬師如来を受け入れ、そもそものご本尊の千住観音と併置した[188]。このため、歴史の項で述べた中世末期からの草津の薬師信仰を、明治以降光泉寺が引き継ぐことになった。

光泉寺自体も鎌倉期には開基されていたとされる古刹であり、南北朝期に南朝の武将による祈願の記録が残されていること、室町期に複数の天皇の勅願寺となっていることなど、大きく栄えていた記録が残る。境内には、元禄時代東大寺公慶（こうけい）上人の作の釈迦像を祀っている釈迦堂（釈迦像を祀れという夢告を受けていた江戸の医師外嶋玄賀宗静が、草津の湯本家の湯で快癒したことを契機に釈迦像の安置場所として元禄 16 年８月に建立。玄賀は東大寺大仏修造に貢献があり、公慶上人が大仏内腹の骨木をもって作った２体の釈迦像のうち１体を賜ったという）、温泉を祭神とした湯善堂、湯泉観音、湯浴み弁財天、初代湯長・野島小八郎の碑、入浴逝者の塔、行基の 1,200 年祈念塔など温泉ゆかりのものが多く祀られている[189]。

行基の塔が境内にあるのは、行基が養老５（721）年４月８日（薬師堂の縁日）に草津の湯を開いたという伝承があるためである。光泉寺には、「上野国吾妻郡草津温泉由来」（近世作と考えられている）と「草津温泉奇功期」（近世の他の文献に引用がある）の２つの文書があり、前者では源頼朝、後者には頼朝と行基の開湯伝説が記載されている。近世の絵図には行基と頼朝についての記載があり、江戸期からこの二つの伝説が流布していたことがわかる。一方、日本武尊にまつわる開湯伝説については、史料的には、明治期が初出である[190]。

現在の寺の行事としてもっとも大きいものは４月７日・８日の花まつり（釈迦聖誕祭）である。かつては旧暦の４月８日に冬住みが終わる「温泉開き」として実施されており、薬師様の御縁日、及び、宿での宿泊開始日として大きく賑わった。また、毎年５月７日・８日、８月 16 日、10 月８日には湯浴み弁財天のご開帳が行われている[191]。

＜芸能、特産品など＞

その他の草津の伝統的な風習や文化としては「湯もみ」や湯もみをしている間に歌われる

187 草津町現地調査ヒアリング、一般社団法人　草津温泉観光協会ホームページ「第 78 回草津温泉感謝祭」https://www.kusatsu-onsen.ne.jp/kusatsu_kansya/　（令和６年 10 月 31 日最終確認）

188 中澤蔀「草津の神社仏閣」群馬報知新聞社　昭和 60 年　P106-P107

189 真言宗豊山派草津山光泉寺ホームページ「光泉寺のご案内」http://www.kusatsu.ne.jp/kousenji/info.html（令和６年 10 月 31 日最終確認）及び中澤蔀「草津の神社仏閣」群馬報知新聞社　昭和 60 年　P114-P122 参照。

190 関戸明子「草津温泉の開湯伝説と歴史意識の形成」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第 66 巻 平成 29 年 P65-P78

191 真言宗豊山派草津山光泉寺ホームページ「法事・行事のご案内」http://www.kusatsu.ne.jp/kousenji/event.html（令和６年 10 月 31 日最終確認）及び中澤蔀「草津の神社仏閣」群馬報知新聞社　昭和 60 年　P111 参照。

「湯もみ歌（草津節と呼ばれることがある）」、湯もみ歌をもとにしたチョイナ、チョイナで知られる「草津節」などが有名である。このうち湯もみについては、草津特有の高温の湯を冷ますためのものとして発祥したと思われるが、明治以降、先に述べた「時間湯」の中で入湯者が集団で行うものとして確立され、この際に「湯もみ歌」もできたと考えられている。「草津節」については、草津から上京し、東京の大塚の花街で修行していた芸妓・金緑竹寿が、大正年間に草津に戻り、湯治客の歌っていた「湯もみ歌」の節廻しを整理して三味線を付け、間拍子を入れたものと言われている。なお、集団で行う湯もみについては、昭和 35（1960）年から「湯もみショー」として実施されている[192]。

宝暦５（1755）年の「草津薬泉之記」に「草津に帰路の産物なし」として、わずかに「三原狗背（ぜんまい）（ぜんまいの一種で漢方に使う）」「湯晒艾（ゆざらしもぐさ）（毎年土用に取り、温泉で晒したもぐさ）」「湯の花」「にらふさ（ならふさ／茸）」を挙げるのみとなっているなど、近世より続く特産品は「湯の花」に限られる[193]。現在でも、草津ならではで有名なものは少なく、群馬県や吾妻郡の産品やそれを使った料理（上州牛、花いんげん等）、温泉地に共通した土産物（温泉まんじゅうなど）などが中心となっている。ただし、泉質の関係で、温泉卵は殆ど作られていない。また、近年では、石灰石にペンキで好みの絵や文字を描き、草津の温泉につけると石灰のところが溶けて絵が浮かびあがる「百年石づくり」等新たな特産品作りもなされている[194]。

草津は、日本一の湧出量を誇る温泉自体の恵みと、その泉質からくる高い効能への期待が、薬師信仰や山岳信仰を含む温泉神信仰と相まって、歴史的に高い知名度を誇ってきた温泉地である。諸国温泉功能鑑では東の大関を毎回独占し、近世より多くの案内書が作られ、行基や源頼朝といった開湯伝説も古くから知られていた。二階建て、三階建ての宿が建ち並び、茶屋があり、芸者が行き交い、幕末には「草津千軒江戸構え」と呼ばれるほどの賑わいを見せた。こうした賑わいの一部は、薬師さまの縁日の伝統を踏まえて賑わう花まつりや温泉感謝祭、湯もみショーなどとして残っている。また江戸期から特産品として知られてきた湯の花が、現在も、同じ採取場所で、手作りのまま作り続けられている。

草津の繁栄は、明治維新後も続き、第二次世界大戦後は志賀高原などとも連携する大規模観光地となった。さらに近年には、前述した歴史と文化をコンセプトとしたまちづくりを推し進め、次の成長へと繋げていこうとしている。こうした草津温泉の繁栄を支えてきたのが、強酸性・高温・スケールの多い草津の湯と対峙してきた草津ならではの湯の管理の技術である。必ずしも恵みだけではない厳しい泉質の源泉を、日本を代表する温泉地の源へと変えてきた歴史的な知恵の結晶がそこには存在している。

---

192 一般社団法人　草津温泉観光協会ホームページ　湯 LOVE 草津「湯もみの歴史」https://www.kusatsu-onsen.ne.jp/netsunoyu/history.html「文化・芸能」https://www.kusatsu-onsen.ne.jp/youkoso/bunka02.php、藤本秀康三味線教室ホームページ「花街の本場草津節と三味線」https://syamisen-hideyasu.com/honbakusatsu/（令和６年 10 月 30 日確認）

193 川合勇太郎「近世の草津」草津町発行　草津温泉誌第壱巻　昭和 51 年　P513-P1123

194 現地調査ヒアリングによる。

（５）四万温泉

四万温泉は、国民保養温泉地に指定された閑静な温泉地で、近世から第二次世界大戦後の高度経済成長期が終わるまで、長く自炊型の湯治場として栄えてきた。地理的には、四万川に沿って長細く展開され、奥は人造湖である奥四万湖で行き止まりとなっている。また、奥から日向見、ゆずりは、新湯、山口、温泉口の５つに大きく地区分けされている。

近世から温泉地として栄えた四万温泉には、その歴史を示す文化財として（日向見）薬師堂（国指定重要文化財）や、積善館山荘（国登録有形文化財）がある。また、温泉地を開いたとされる老舗旅館「四万たむら」には天保５（1834）年改築の母屋が残る。ここではこうした四万温泉の歴史と現在を概観する。

四万温泉の歴史

＜近世まで＞

四万温泉の開湯については、延暦年間（782～806 年）に征夷大将軍の坂上田村麻呂が老翁に導かれて入浴したのが始まりというもの[195]と、永延３(989) 年頃に源頼光の家臣・碓氷貞光が発見したという２つの伝説がある。後者には、四万の名は、碓氷貞光が読経をしていたところ、夢枕に立った童子がこの湯は四万種類の病に霊功があると伝えたところから来たのだとの縁起も付随している（地名には温泉の湧出孔が四万もあるからという別の謂れもある）。貞光はこの奇瑞に感じ入り、堂宇を建立、薬師如来を本尊として安置し、日向山定光寺薬師瑠璃光如来と号したという。現在でも日向見地区には薬師堂があり、国の重要文化財に指定されている。薬師堂自体は、中世末期の建立である。この薬師堂の建物の下に源泉があり、これが最初の四万の最初の源泉とも言われている。現在は共同場「御夢想の湯」や近隣の宿泊施設で使用されている。



日向見薬師堂本堂



御夢想の湯

薬師堂の堂内には、堂のものとして、慶長３（1598）年、天和３（1683）年、享保 13（1728）

195 以下の四万温泉の歴史の記述は、他に脚註がないものを除き、丸山知良　編集「四万温泉史」（社）四万温泉協会 昭和 52 年７月、及び、小堀貴亮・山村順次「国民保養温泉地・四万温泉の地域変容」温泉地域研究　第５号　平成 17 年、に基づく。

年、16（1731）年、延享３（1746）年の棟札が残る。また、堂内にある薬師如来を安置する厨子の棟札（むなふだ）は天文６（1537）年のものとなっており、最も古い。郡内の古記録である「吾妻古戦録」によれば、薬師堂の建立の契機は、草津温泉に入湯していた美濃国住人、清水八郎宗次が、四万日向見の神から「薬師堂を建立すれば病が本復する」という夢告（むこく）を受けたことであるという。実際、厨子の天文６年の日時の記載のある棟札には、美濃国住人藤原番匠宗次八郎四郎の名がある。

薬師堂内には薬師如来の厨子の他にも多くの仏像が安置されており、中心となる十一面観音坐像には永禄２（1559）年と墨書されている。なお、「吾妻古戦録」や「田村茂三郎家文書」によれば、薬師如来像はそもそも塩谷日向守定光が守本尊としていたもので、その後、永享年中（1429～1441 年）に関東管領上杉家のものとなり、上杉家の当主が四万を訪れた際、日向見の薬師堂に安置されたものという。この記述に従うならば、薬師堂本尊の由来の「さだみつ」は、碓井貞光ではなく、塩谷定光ということになる。ただし、２つの文書では、安置した上杉家の当主の名も、当主が四万を訪れた経緯も異なっている。

歴史的に温泉地として発展し始めたのは、中世末期、永禄６（1563）年に田村家の祖田村甚五郎が四万の山口地区において湯治宿（現在の旅館「四万たむら」）を開いたのが初めと言われている。甚五郎は、岩槻城主斉藤越前守基国に仕えており、甲斐武田氏により岩槻城が落城した同年、越前に落ち延びる基国の殿軍として四万に依り、そのまま土着、湯宿を始めたのだという。その後寛永年間（1624～1644 年）に、三代目彦左衛門が分家して新湯地区にも進出、田村家の基礎を築いた。

四万温泉のある四万村は、天正 18 年（1590 年）に後北条氏が征伐された後、真田家の支配となり、江戸初期は真田家沼田藩の藩領であった。これが、延宝８（1680 年）に、沼田藩が改易となるまで続く。その後は幕府天領である。享保 18（1733）年の天領になってからの代官への書付となるが、沼田藩支配下において田村家は藩から湯守を命ぜられ、入湯客からの湯銭の徴収と、湯治客の急病人の世話や口論等への対応を仰せつかっていたという。

天領になってからも同じ体制が続いたようで、天和２（1682）年の文書では、名主として関家の善兵衛が、湯守として田村家の彦左衛門と角右衛門の２名が記載されており、湯守が湯治客からの湯銭を取り立てて納入することを藩の代官に誓約している。翌天和３（1683）年の彦左衛門による湯守としての新湯の「湯銭取り立て帳」も残っており、県内各地はもとより、江戸、さらには豊後からも湯治客が既に来ていたことがわかる。身分別では、士分は少なく、庶民が殆どとなっている[196]。取り立て帳には他の湯宿も掲載され、既に田村家以外の湯宿が複数立地していた。ただし、宿泊人数の多くは田村家の彦左衛門の湯宿のものとなっている。

沼田藩支配の頃から元禄２（1599）年まで、四万温泉の運営は、上述したように湯守が湯治客から湯銭を徴収し、それを藩もしくは代官に上納するというものであった。その代わり、湯小屋の普請費（ふしんひ）や四万川の源泉の水〆切は藩で行った。水〆切とは、四万川の川原に湧く源

196 村田敬一、初田亨「四万温泉積善館の建築について」日本建築学会計画系論文集　第 531 号　平成 12 年５月 P259-P264 に「湯銭取り立て帳」の宿泊者の分析がある。

泉に対し、丸太や石等で堰を作って川の水を溜め、上からの圧力を掛けることを言う。この水〆切を行うことで温泉を自噴させ、それを管を通じ、川床よりも高い位置にある浴槽に引き湯していたのである。しかし、平成 11（1999）年に四万川ダムが造られるまで、四万川では、水害が多発しており、その度に水〆切も作り直さなければならなかった。

元禄２年以降、この体制は変わり、四万温泉では、入湯客から徴収した湯銭をそのまま代官に上納するのではなく、定額の地子を納めることとなった。湯治客が増え、売上が拡大すれば、その分湯宿にお金が残るようになったのである。その代わり、湯小屋や水〆切の普請は村方の負担となった。温泉経営が村方の自治に任されるようになったと評価される。また、元禄５（1692）年には、新規に温泉が湧出し、当時の名主である関家の善兵衛が代官に湯小屋（湯宿）の運営を許可されている。元禄７（1694）年には湯小屋ができ、屋敷御年貢の運上が始まっている。現在の「積善館」に繋がる旅館の開館である。

宝暦 11（1761）年に関家が代官に提出した書付によれば、山口地区に入り湯が２カ所、高さ２～３ｍ程度の滝湯が２カ所、新湯地区に入り湯と蒸し湯がそれぞれ４カ所、滝湯が１カ所とある。蒸し湯とは、普通の入り湯の浴槽の傍らに２ｍ四方の室を設けて床に温泉を流し、その上に簀の子と筵を敷いて木枕で寝転ぶもので、簀の子と筵の隙間から温泉の蒸気が湧き上がってくる。京都の儒学者平沢旭山は、天明２（1782）年に四万に訪れ、この蒸し風呂を「西は長崎から北は東北蝦夷まで廻ってみたが、このような優れたものはない」と絶賛している。現在でも、旅館四万たむらや積善館では、蒸し湯を楽しむことができる。

温泉場の説明でもわかるように、当時の四万温泉は湯宿とは別に温泉場がある外湯の形式を取っていた。ただし、18 世紀末建築の積善館本館では、宿泊施設と温泉場が同じ敷地内に設置されており、内湯化が始まっていた可能性がある[197]。

四万温泉には、先に述べたように、江戸を含む広い地域から湯治客が集まるとともに、有名な文人なども逗留した。例えば四万たむらには先に述べた儒学者平沢旭山に加え、漢詩人寺門静軒などの逗留の記録が残る[198]。しかし、文政５（1822）年に榛名山に蒸し風呂ができ、蒸し風呂を売りにしていた四万温泉の集客に少なからぬ影響を与えたこと、また天保年間（1831～1845 年）の大飢饉や天保４（1833）年に新湯で大火災があり、湯宿９軒のうち７軒が焼けたことなどから、次第に寂れていくこととなった。四万温泉の本格的な復興は、明治 22(1889)年、中之条-四万間の県道が開通し、日清戦争による折からの好景気を活用できるようになるのを待つこととなる[199]。

197 村田敬一、初田亨「四万温泉積善館の建築について」日本建築学会計画系論文集　第 531 号　平成 12 年５月 P259-P264

198 四万たむらホームページ「四万たむらの歴史」https://shima-tamura.co.jp/history/（令和６年 10 月 31 日確認）

199 村田敬一、初田亨「四万温泉積善館の建築について」日本建築学会計画系論文集　第 531 号　平成 12 年５月 P259-P264

＜明治・大正・昭和戦前期＞

上述のように、四万温泉発展の大きな契機として、中之条-四万間の県道開通がある。それまでダイニ坂と天狗坂という難所に阻まれ、徒歩か駕籠（かご）、あるいは馬背（ばはい）でしかいけなかった四万温泉に人力車や馬車で訪れることができるようになったのである。ただし、すぐに湯治客が増えたわけではない。県道開通の翌年、明治 23（1889）年に四万温泉はまたも大火に襲われており、本格的な成長は明治 20 年代後半からとなる。四万馬車合名会社が設立され、渋川との間に馬車が開通したのが明治 41（1908）年である。２年後の明治 43（1910）年には、渋川と中之条を吾妻温泉馬車軌道（馬車鉄道）も開通した。ただし、明治の頃は、まだ近郊から馬で来る湯治客も多くおり、旅館には馬小屋もあったという。乗合自動車が通るようになるのは大正２（1913）年である。

上記のような交通基盤の発展により、明治終わりには四万温泉は大きな繁栄を見せるようになった。また、明治 41（1908）年の記録では、既に現在に繋がる大規模旅館が建設されており、内湯化も進んでいる。この結果、明治 21（1888）年に県内中心に４万人程度であった四万温泉の延浴客数は、大正 10（1921）年には、折からの好景気もあり、119,325 人と 10 万人を突破、東京からの湯治客が全体の半数近くを占めるまでになった。文化人などの逗留も多く、四万たむらでは斎藤茂吉、高村光太郎、与謝野晶子など、積善館では徳富蘇峰、九代目市川團十郎、佐藤紅緑などの逗留記録が残る[200]。また、昭和初期までには四万温泉を含む吾妻郡内の温泉地を結ぶ定期バスの路線網もでき、外来の温泉客拡大を下支えした[201]。この結果、大正後半から昭和 10 年代前半まで 10 万人強で停滞していた四万温泉の延入浴客数は、昭和 10 年代後半に大幅に伸び、昭和 15（1940）年には 257,909 人のピークに達する。

ただし、浴客が増えても、四万はあくまで長期の湯治客用の温泉地であり、旅館の役割は、部屋とふとんを貸し出すとともに、主食を提供することにあった。副食は自炊というのが基本である。大正 11（1922）年に一泊で四万温泉を訪れた若山牧水は、たったの一泊ということで、長期の湯治客中心の旅館で邪険にされ、また、旅館での夕食時、宿代とは別に仕出し屋に食事代を請求されたことを怒りをもって記している。当時次第に流行りつつあった一泊二日型の温泉パッケージ旅行であるが、四万温泉ではそういった対応はなされていなかったのである。ただし、各旅館は地域の商店などと連携しており、湯治客は自炊用の食材からお酒、料理の出前、按摩やさらには床屋まで頼むことが可能であった。また自炊などのお世話をする女中を雇うこともできた。料金は各旅館の帳簿に付けられ、後でまとめて請求された。宿で提供していないものは町に出て各商店で購入した。

なお、四万温泉の湯治客の平均滞在日数を見ると、明治 42（1909）年度で年平均 8.7 日、大正 10（1921）年で 9.5 日、昭和 12（1937）年になっても 7.5 日と長い。勿論、中には若山牧水のような短期逗留客もいたであろうことから、中央値はさらに長かったと想定される。

---

200 四万たむらホームページ「四万たむらの歴史」https://shima-tamura.co.jp/history/（令和６年 10 月 31 日確認）　積善館ホームページ「積善館について」https://www.sekizenkan.co.jp/about/（令和６年 10 月 31 日確認）

201 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第２巻　昭和 52 年　P94

昭和６（1931）年の宿泊数の内訳をみると、延べ宿泊数 94,829 泊のうち、短期の「遊覧」での宿泊は延べ 2,678 泊、「業務一泊」は延べ 3,316 泊となっており、あくまで長期の湯治客中心で、一泊二日の観光旅行など殆どなかったことがわかる。

温泉地の運営については、明治 11（1878）年に四万温泉では初の温泉規約「為取替議定」が結ばれている。規約制定の契機は、明治になってからの土地所有制の近代化に伴い、源泉がある土地の所有者（田村家とその分家及び関家）が源泉税を納めるようになったことである。「為取替議定」の主な内容は、内外の差別なく今まで通りにどの温泉にも入浴できること、浴小屋の修繕や新築は従前通り最寄りで割り当てて行うこと、浴客への販売や雇い人・馬の提供などもこれまで通りとすること等となっており、江戸時代以来の慣習をそのまま継承していくことが眼目となっている。特徴的なのは、「内外の差別なく」と規定されていることで、四万温泉ではこの規定に基づき、第二次世界大戦前まで、浴客は、自分の宿泊する宿の内湯や共同浴場だけでなく、他の旅館の内湯も楽しむことができた。

この規約の内容は、明治 21（1888）年に設立された四万温泉場組合取締所の「四万鉱泉取締規約」に取り入れられ、その後の温泉規約の基本となった。「四万鉱泉取締規約」では、客引きの禁止などの営業規定が設けられるとともに、「為取替議定」では源泉権者同士の同意であったものが、地区住民全てに組合員が拡大され、地域整備に関わる項目も取り入れられている。温泉を中心とした地域自治の規定として内容が拡大されているのである。

「四万鉱泉取締規約」に始まる温泉規約は、細かな改正を繰り返しつつ、昭和 26（1951）年まで基本的に同じ形で続いている。第二次世界大戦前まで、江戸時代に確立された温泉地自治のあり方が、ほぼそのままの形で、継承されていたのである。

このように江戸以来の風習を残しつつ湯治宿として発展していた四万温泉であるが、その後、昭和 14（1936）年から数年の軍需景気を最後に、次第に衰退の傾向が見られるようになる[202]。加えて昭和 18（1943）年には戦時体制に入り、温泉地も戦争協力に駆り出されることになった。同年には中島飛行機（一式戦闘機「隼」などで有名）の保養所となるとともに、昭和 19（1944）年からは、空襲の本格化に伴い、都会から多くの疎開児童を受け入れている[203]。

＜第二次世界大戦後＞

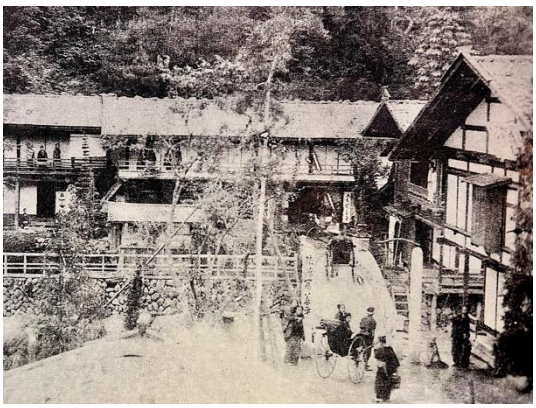
第二次世界大戦敗戦後の四万温泉の復活は早かった。昭和 25（1950）年までは戦後の混乱が続き四万温泉も閑散としていたが[204]、昭和 29（1954）年国民保養温泉地の指定を受けると、昭和 31（1956）年には延浴客者数 253,236 人と第二次世界大戦前のピークを越え、昭和 37（1962）年には 318,866 人と 30 万人を突破した。なお、この時点では、宿泊者の殆どは、味噌汁とご飯のみを宿で用意し、おかずは自炊もしくは賄いを購入するという明治以来の半自炊の長期逗留客であった。半自炊の湯治客中心の構造が、一泊二日型の観光客中心の構造へ

202 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第２巻　昭和 52 年　P196

203 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第２巻　昭和 52 年　P210-P216

204 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第２巻　昭和 52 年　P311

と転換するのは、高度経済成長期を終えた 1970 年代のことになる。



明治 10 年代の積善館
写真出典：積善館展示資料（複写）



昭和 30 年代の湯治客
写真出典：中之条町歴史と民俗の博物館「ミュゼ」
展示資料（複写）

昭和 45（1970）年の四万温泉の宿泊客構成をみると、半自炊の湯治型の宿泊 29 万５千人に対し、賄い付きの観光型の宿泊が 18 万３千人となっており、湯治客の数が上回っている。これが昭和 57（1982）年になると、半自炊６万３千人に対し、観光 38 万人と圧倒的に観光客が湯治客よりも多くなる。この時点では未だ大手旅館が半自炊対応をしていたが、2000 年代に入るとそれもなくなり、四万温泉は、長期逗留の湯治型から一泊二日型の観光型温泉地に完全に変化してしまうことになった。

湯治型から観光型への転換は、地域社会のあり方も変えていくことになった。先に述べたように、かつて四万では、宿は「場」を提供するものとされ、自炊の食材を付近の朝市や行商から購入したり、賄いの飯を買ったりするものであった。身の回りの世話をする壷回りの女性を雇用することもあり、また湯治客は日用品も購入したので、雑貨屋なども地域に営業していた。何度も訪れる湯治客については、宿の主人というより、仲居さんが顔なじみとなり、仲居さん宛に湯治客が集まっていたり、あるいは宿につくとまず地域の顔なじみの商人と談笑したりなど、それぞれの湯治客が地域社会と交流していた[205]。

昭和まで続いていたこういった地域社会の状況も、平成を経て、大きく変わってしまう。現在では一泊二日型・賄い付きの通常の旅館形態が殆どで、結果として、朝市や行商人、長期逗留客対応の商店も見られなくなっている。また、かつては湯治客に開放されていた町の共同浴場（地域で運営している「共同湯」で、町営の日帰り温泉施設とは異なる）も少なくなり、現在では、四万温泉の共同浴場の３カ所（御夢想（ごむそう）の湯、河原の湯、上の湯）が午前９時から午後３時まで一般の人に開放されているものの、それ以外の時間は清掃と地元の人のみの利用となっている（四万では、今でも自宅に風呂を作ることは極めて少なく、住民は共同場で温泉を利用している）。

205 ここ以降の段落は、四万温泉現地調査ヒアリングによる。



河原の湯（地域の共同場）



同左

この中、近年では、リトリートやワーケーションなどのコンセプトの下、新しい形の湯治やアウトドア・レジャーなどを取り込んだ長期逗留の需要を拡大しようという動きが出てきている。例えば、平成 11（1999）年、四万川ダムが完成し、美しいコバルトブルー色の湖面が特徴の奥四万湖が生まれたこともあり、カヌーなどのアクティビティやグランピングなどが楽しめるようになった。また地区内を遊覧できる電動アシスト自転車のレンタルも実施されており、令和６（2024）年には域内を自動運転するバスの実証実験も行われている。

この動きのひとつが泊食分離である。四万における泊食分離とは宿泊しているのとは別の旅館で食事を取れるようにするもので、これにより、高齢化や人手不足で食事が提供できない旅館も素泊まりで事業を続けることが可能となった。また、四万には自炊型の新しい宿泊施設もできている。かつてとは異なり、朝市もないし、行商人も来ないが、近辺の町には大型スーパーも立地している。自炊型施設が増えつつあることに対し、近隣のスーパーからの宅配を含め、新たに自炊環境が作れないかという試みも始まっている。また、地元有志の女将の会も、イベントの開催やハーブティーなどの特産品開発に活躍している。

四万温泉の源泉

四万温泉には 42 本の源泉があり、うち 39 本が 32 軒の旅館と４カ所の日帰り入浴施設に利用されている。42 本のうち３本（うち１本未利用）が四万温泉のある中之条町の管理で、残りは民間である。中之条町が管理し利用している２本の源泉は、四万川ダムの建設に伴って湧出したもので、未利用の１本が掘削自噴であることを除き、全て河原などからの自然湧出となっている。

泉温は 27.0 度 から 83.4 度と幅広いが、50 度以上が 28 本と過半を占める（未計測源泉２本）。泉質は、ナトリウム・カルシウム-塩化物・硫酸塩温泉が 29 本ともっとも多い。その他、ナトリウム・カルシウム-塩化物温泉、ナトリウム・カルシウム-硫酸塩温泉、アルカリ性単純温泉などがある。湧出量は、もっとも多い源泉で 411.7 リットル／分で、ついで 100 リットル／分台のものが５本となっており、残余は 100 リットル／分未満である（未計測源泉

２本）。なお、総湧出量は 3,000～4,000 リットル/分である[206]。

32 軒の施設数より源泉数が多いため、集中管理や引き湯はほぼなく、自家源泉を利用している旅館が多い。中には自家源泉を多数持つ宿もある。そのため各宿は豊富な源泉を掛け流しで使える状況であるが、気候や川の水量など自然条件によって湧出量や温度が大きく変化する[207]ため、調整に難しい点がある。また、ナトリウム・カルシウムー塩化物・硫酸塩泉の特性として、温度が下がる際に、カルシウムや塩分などの温泉成分が析出・硬化するため、パイプなどに詰まりやすい。

四万温泉の湯の管理の技術[208]

上述したように、四万温泉では、各旅館が自家源泉を使用している場合が殆どで、町管理の源泉は限られている。また町が管理している源泉は、ダム開発に伴って湧出した源泉と、林野庁所有の源泉のみであり、泉質の関係から、スケールが殆ど出ず（町管理の「湯の泉」源泉の泉質はアルカリ性単純温泉、「山鳥の湯」源泉はナトリウム・ カルシウム-硫酸塩温泉）、各宿に配管される支線のメーター周りのゴミ取り程度となっている。一方、民間の旅館で使用しているナトリウム・カルシウムー塩化物・硫酸塩泉は、温泉成分が析出・硬化して固まるため、定期的にパイプなどのスケールを除去する必要がある。四万温泉の湯は、肌に優しく、上がり湯にも使えるため、一般の洗面台やシャワーでも温泉水を使う場合がある。そのため、シャワーの口やカランなどを含めて定期的にスケールの除去を行っていかないと、詰まり・故障のもととなる。

より難しいのは適温のお湯を湯船に供給していくことである。四万温泉の主な旅館は源泉掛け流しで温泉を提供しており、湯温の調整は掛け流し量をどの程度にするかで行っている[209]。先に述べたように、四万温泉の自家源泉の多くは河原での自然湧出であり、気候の変化、特に降水やそれに伴う川の水の変化により、大きく湯温や湯量が変化する。これを見極め、且つ、２時間程度先となる次の調整の時までの予測を含め、ミリ単位でバルブなどを調整し、掛け流す源泉の量を変えていく必要がある。また、源泉によっては極めて高温のところもあり、引き湯管や貯湯槽を通じて温度を適切に管理することも重要である（旅館によっては四万川の冷水を使った熱交換で温度調整をしているところもある[210]）。複数の源泉から来る、湯温も、泉質も、気象条件による変動も異なる湯を混合して利用している旅館もあり、その場合、湯の配合状況も見極めなければならない。

---

206 環境省「四万温泉国民保養温泉地計画書」令和６年３月

207 環境省自然環境局「温泉モニタリングマニュアル」平成 27 年３月

208 この項は四万温泉現地調査ヒアリングによる。

209 中之条町ホームページ「温泉利用実態調査」https://www.town.nakanojo.gunma.jp/soshiki/9/1085.html（令和６年 10 月 31 日確認）によれば、令和４年現在で 35 軒の旅館のうち掛け流しのみは「たむら」「四万グランドホテル」「積善館」など主要旅館を含めて 17 軒。循環濾過のみが８軒、双方の形式があるところが 10 軒となっている。

210 豊島屋ホームページ「温泉」https://tosimaya.co.jp/onsen.html（令和６年 10 月 31 日確認）

こうした複雑な調整を実現することは機械式の調整では困難であり、長い経験に基づく人の技術が必要となる。湯の管理の担当者は、先輩からの教えと、日々の失敗から、湯の性格・性質を深く学んでいく必要がある。四万温泉における快適な入湯は、こうした管理者たちの技術によって支えられているのである。

伝統的な温泉の利用法[211]

四万温泉は、歴史的に日本三大胃腸病の湯（他は宮城県の鳴子温泉、大分県の湯平温泉）として有名であり、飲泉が伝統的になされていた。温泉療法として飲泉が中心的な位置を占めるヨーロッパとは異なり、日本では、近世以前からの飲泉の記録がある温泉地は少ないが、四万温泉はその例外となっており、享保 17（1732）年の「四万由来記」に飲泉についての記述が残されている[212]。また、先に述べたように、江戸時代から温泉の蒸気を使った蒸し湯が有名であり、現在も提供され続けている。

四万温泉は泉質が塩化物泉と硫酸塩泉に対応している療養泉である。平成 26（2014）年 7 月 1 日の「『温泉法第 18 条第 1 項の規定に基づく禁忌症及び入浴又は飲用上の注意の掲示等の基準』及び『鉱泉分析法指針(平成 26 年改訂)』について」の環境省自然観光局長による保健所を設置している自治体首長向けの通達によれば、飲用の効果として、こうした泉質においては、胃腸病に関して、萎縮性胃炎、便秘が適応症として挙げられている[213]。環境省行政においても四万温泉の飲泉には効能が認められているということになる。

一方、同通達には、「温泉飲用の 1 回の量は一般に 100～150mL 程度とし、その 1 日の総量はおよそ 200～500mL までとすること」「飲泉には、自身専用又は使い捨てのコップなど衛生的なものを用いること」「飲泉は一般に食事の 30 分程度前に行うことが望ましいこと」「飲泉場から飲用目的で温泉水を持ち帰らないこと」など飲泉について細かな規定も盛り込まれている。また、四万温泉は温泉中に微量のヒ素を含むため、昭和 50（1975）年の環境庁自然保護局長通知[214]に基づいてヒ素量の摂取量が一定量以下となるようにしていく必要もある。

四万温泉の飲泉は、伝統的に、温かいままで飲むと下痢が止まり、冷たくして飲むと便通が良くなるなどの効能が広く信じられてきており、かつては積極的に飲泉が実施されていた。そのため以前は各浴場で自由に飲泉が実施され、共同浴場にも使い回し用のコップが用意されているのが普通であった。また、常連の湯治客に飲泉用の温泉水をタンクで送るというこ

211 この項は四万温泉現地調査ヒアリングによる。

212 小暮敬「シンポジウムⅡ　飲泉療法　1．飲泉の歴史と現状」日本温泉気候物理医学会雑誌第 50 巻 1 号　昭和 61 年　P21-P24

213 環境省ホームページ「環自総発第 1407012 号」https://www.env.go.jp/nature/onsen/pdf/2-5_p_11.pdf（令和 6 年 10 月 31 日確認）

214 環境省ホームページ「環自企 424 号」https://www.env.go.jp/hourei/18/000013.html（令和 6 年 10 月 31 日確認）

とも行われていた。しかし、現在では、上記の環境省通達があるため、かつてのような飲み放題的な利用はできず、温泉水をタンクに入れて輸送することもできない（違反すれば保健所の指導対象となる）。そのため、現在では、四万で飲泉ができる場所は７カ所に限定されており、しかも使い捨てのコップで少量飲むだけで、ペットボトルなどで持ち帰ることはできない。効能は認められつつも、実際の飲泉には大きな制限があり、伝統的な利用はできなくなっている。



塩之湯飲泉所


四万たむら飲泉所



積善館飲泉所

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

先に述べたように、日向見にある（日向見）薬師堂は、四万温泉の開湯伝説の場であり、湯前薬師と呼ばれ近世以前から信仰を集めていた[215]。また薬師堂の前には近世に建てられた中之条町指定重要文化財のお籠堂が建ち、かつては病気快癒を祈っての参籠や水垢離（みずごり）などがされていた（現在では施錠され、物品の収納場所になっている）。この薬師堂には「救われる」という意味と「食べる物に困らない」という願いを込めしゃもじを奉納する風習があり、今もしゃもじの奉納が続けられている[216]。


日向見薬師お籠堂


奉納されたしゃもじ

215 一般社団法人 四万温泉協会ホームページ「四万温泉の観光スポット」
http://shimaonsen.org/spot/kankou_spot.html（令和６年 10 月 31 日確認）

216 四万温泉現地調査ヒアリングによる。

四万温泉協会では、（日向見）薬師堂で湯立の神事を描いた絵馬（正徳２（1712）年奉納）が発見されたことに因み、平成 18（2006）年より、前年に御夢想の湯が移転・新築したことも記念して、湯立祭を大寒の日に行うようになった。湯立祭では、薬師堂の前で、大釜で温泉の湯を焚き、祝詩を奏上した後、湯立の湯を湯笹で周囲に振りかける。ただし、絵馬に縁起などは記されておらず、行事としてはあくまで推定による再現となる[217]。湯立祭で実施されているものは一般的な神道の湯立て神事であるが、この神事は、古代の探湯（くがたち）や中世の湯起請（ゆぎしょう）とともに、湯の熱さへの恐れが神意を得るに当たっての精神的な畏れと重なり合って行われているものではないかとも考えられている[218]。そうであるならば、かつて湯前薬師で行われた湯立の神事も、湯を通じて日向見の温泉の神仏（薬師）と出会うための行事であったと想像することも可能である。この他、薬師堂自体の仏教行事として、毎年４月８日（花まつりの日）に、堂内の経典に風を通すとともに参拝者の無病息災を祈る行事も実施されている[219]。

（日向見）薬師堂のすぐ近くには摩耶姫伝説に関連する摩耶不動もある。四万地区には、子宝に恵まれない夫婦が薬師堂の温泉に入って女の子を授かり、成長した姫がすてきな男性と一緒に幸せな家庭を築いたという言い伝え（摩耶姫伝説）があり、この摩耶不動（石碑）はその言い伝えと結びつくものとして今に至るまで信心されてきた[220]。この伝説にちなんで、平成 25（2013）年より四万地区のひな祭りのイベントとして「摩耶姫祭り」が開催されており[221]、平成 26（2014）年には摩耶姫のキャラクターも作られている[222]。日向見地区から２km ほど歩いたところには、摩耶姫が不動さまの導きで良縁に恵まれた地という「摩耶の滝」もある[223]。


薬師堂で湯立の神事を描いた絵馬（複製品）


摩耶不動

217 四万温泉現地調査ヒアリングによる。

218 内田彩「古代における日本人と温泉の関わり：研究展望」立教大学大学院観光学研究科　立教観光学研究紀要 第９号　研究ノート　平成 18 年３月

219 一般社団法人 四万温泉協会ホームページ「イベント」http://shimaonsen.org/event/event.html（令和６年 10 月 31 日確認）

220 一般社団法人　四万観光協会ホームページ　四万温泉「四万の食と文化　四万に伝わる、摩耶の滝、摩耶姫伝説」https://nakanojo-kanko.jp/shima/appeal/cultre/#culture2（令和６年 10 月 31 日確認）

221 上毛新聞「《オピニオン１０００　主張》摩耶姫祭り　仲間と築く　地域の未来」平成 30 年２月 17 日

222 毎日新聞「四万温泉：「足を運ぶきっかけに」　「萌えキャラ」で地域おこし、「摩耶姫ちゃん」地元伝説をＰＲ――中之条　／群馬」平成 26 年３月３日

223 一般社団法人 四万温泉協会ホームページ「四万温泉の観光スポット」http://shimaonsen.org/spot/kankou_spot.html（令和６年 10 月 31 日確認）

なお、（日向見）薬師堂は明治初期まで日向見定光寺という寺に属していた。その後、廃仏毀釈の影響で定光寺が廃絶したため[224]、現在は中之条町の宗本寺の所有となっており、基本的な管理も宗本寺が行っている。その他の温泉に関わる行事としては、四万温泉の各地区にある薬師如来を祀った湯前神社（日向見の薬師堂と、温泉口、山口、新湯の小社）の例祭として四万温泉秋季大祭が毎年 10 月７日・８日の２日間行われている。この大祭では、手古舞さんを先頭に、２台の山車が引かれ四万温泉内を練り歩き、八木節も披露される。

温泉関係ではないが、地区住民向けの伝統的な祭事として、稲裏神社（いなつつみじんじゃ）の年越し・初詣の行事、小正月に各地区で行われる鳥追い祭り・どんど焼きの行事が有名である[225]。稲裏神社は、稲包山の登山口付近にある神社で、史料上の初出は三代実録の元慶４（880）年で、従五位を賜っている。原町大宮にあった岩鼓神社がそもそもの稲裏神社であったと想定されているが、岩鼓神社（いわつつみじんじゃ）の神官が、岩鼓とは稲裏のことだと断定、新たに、稲包山の頂上に稲裏神社の本宮、四万温泉譲葉平（ゆずりはだいら）に里宮を建てた。その後、あまりに便が悪いということで、明治 10（1877）年、四万貫湯平の熊野神社に遷座し、当該神社を稲裏神社としている[226]。文化元(1804)年の夏の大干魃の際、稲包山の神である稲裏神に雨乞いをしたところその夜のうちに雨になったという縁起を持つ神社である[227]。

食材・調理法・特産品として打ち出されている伝統的なものとして特記されるものはない。なお、現在、四万温泉周辺で採れる食材は主に山菜や茸となっている[228]。近世においては、板・材木が産出されており、その他水晶が採掘できたという記録も残っている[229]。

四万温泉の温泉情緒、温泉文化は、何より、今も昔も変わらない川沿いの奥まった地理的条件とそれがもたらす閑静な自然環境、河原に多く自然湧出する温泉の恵みにある。また、四万温泉には、温泉地ならではの数百年に亘る薬師への信心と第二次世界大戦後、1970～80 年代まで続く湯治の歴史があり、その風情は今も地域に残っている。

もう一つ重要なのが湯の管理の技術である。多数の源泉と豊富な湧出量に恵まれた四万温泉ではあるが、湧出地が川原ということで、川の水量の上下が、そのまま、湧出量や泉温に影響する。またダム整備前は水害も多かった。こうした中でいかに温泉を安定的に提供していくか、その技術もまた四万の温泉文化を支える貴重な伝統であり続けている。

---

224 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第１巻　昭和 51 年　P219 に明治 43（1910）年の吾妻郡案内の引用があり、そこに日向見定光寺の名前が見える。また、薬王寺ホームページ「無縁塔」https://www.myousinji.jp/yakuouji/muen.html（令和６年 10 月 31 日確認）に若干の詳細が載る。薬王寺は日向見定光寺の無縁仏を引き取り供養している寺で、日向見のすぐ奥の地に昭和 11（1936）年に薬王堂として開堂した。

225 一般社団法人 四万温泉協会ホームページ「イベント」http://shimaonsen.org/event/event.html（令和６年 10 月 31 日確認）

226 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第１巻　昭和 51 年　P91

227 一般社団法人　四万観光協会サイト　四万温泉「稲裏神社」https://nakanojo-kanko.jp/shima/spots/稲裏神社/（令和６年 10 月 31 日確認）

228 一般社団法人　四万観光協会サイト　四万温泉「四万の食と文化」https://nakanojo-kanko.jp/shima/appeal/cultre/#culture2（令和６年 10 月 31 日確認）

229 中之条町史編纂委員会「中之条町史」第１巻　昭和 51 年　P397、P400

（６）伊香保温泉

伊香保温泉は、群馬県を代表する歴史的な温泉地の一つで、鉄分含有量が多い赤い湯と、その引湯の経路となっている 400 年以上前に造られた石段で著名である。ここでは、そうした伊香保の歴史と特性、及び、江戸期より引き継がれてきた湯の管理の技術を概観する。

伊香保温泉の歴史

＜近世まで＞

開湯伝説としては、垂仁（すいにん）天皇の御宇に二つ岩より湧出というもの、行基が発見したというものがある[230]。伊香保の地名自体は古くから知られ、万葉集にも九首が採られている。ただし、当時伊香保は榛名山一帯を指す地名であったとみられ、和歌の内容も温泉のことを詠ったものではない[231]。また、続日本後紀の承和２（835）年９月には「辛未。以上野國群馬郡伊賀保社。預之名神。」とあり、伊香保神社が名神の位を賜ったことがわかる[232]。万葉集と同様、この時の伊香保神社も、榛名山系、特に水沢山を信仰する社で、立地も、現在の伊香保ではなかった[233]。なお、先に述べたように、温泉地としては「北国紀行」に記載がある。また江戸中期の漢学者である吉田芝渓の「仁泉亭（じんせんてい）記」や明治 15(1882) 年発行の大槻文彦の「伊香保志」に堯恵（ぎょうえ）や宗祇の来訪が記されており、中世末期から湯治場として既に広く知られていた可能性が高い。

現在に続く伊香保神社である山宮が温泉地に建立されたのは、遅くとも、室町時代であると考えられている。この時期の伊香保の支配者としては、伊香保神社に加え、土豪の千明（ちぎら）氏がいた。ただし、「仁泉亭記」によれば、まだ湯元にわずかばかりの人が住んでいただけだったという。応仁２（1468）年、伊香保は山内上杉家の家宰を務めていた長尾氏の領有するところとなり、伊香保神社の実権は失われる。「北国紀行」や永正８（1511）年の「宗祇終焉記」に伊香保の湯が記されたのはこの頃である[234]。

その後、元亀年間から天正年間にかけては、伊香保の地は上杉謙信、武田信玄・勝頼などの係争の地となり、長尾氏だけでなく、何度か武田方の真田氏の支配も受けている。主筋が幾たびも交代していった結果、伊香保には、長尾氏配下と真田氏配下双方の土豪・地侍が入り交じることとなり、これが後に伊香保で温泉を支配することになる有力者層が形成されることに繋がった。もともとの長尾氏配下であった千明氏、木暮氏、大島氏と、武田方の岸氏、島

---

230 開湯伝説については、西尾正仁「御影史学研究会　民俗学叢書 13　薬師信仰-護国の仏から温泉の仏へ-」岩田書店　平成 12 年　を参照。

231 佐々木政一「温泉と万葉集」日本温泉気候物理医学会雑誌第 78 巻 2 号　平成 27 年２月　P108-P117

232 『續日本後紀』朝日新聞本（『増補　六国史』（全十二巻　佐伯有義、朝日新聞社、昭和 15）巻七のデータを菊池眞一研究室がインターネット上の http://www.kikuchi2.com/chuko/shokukouki.html に公開しているものより令和６年 10 月 31 日確認）、

233 渋川市ホームページ「伊香保の町並み・建造物〉伊香保神社」
https://www.city.shibukawa.lg.jp/kankou/ikahoonsen/streetsofikaho/p000202.html（令和６年 10 月 31 日確認）

234 この段落を含む以下の近世までの項目は、伊香保史年表作成チーム、関靖「伊香保歴史年表風土記」NPO 法人地域価値プラス　令和６年 11 月を参照。別の典拠がある場合はその旨を脚註に記した。

田氏、望月（永井）氏、後閑氏の７家である。また、天正２（1574）年の医王寺建立（現在は薬師堂のみ残る）、天正３（1575）年の伊香保の砦化に伴う伊香保神社参道における引湯開始と湯小屋整備、及び、そこでの長篠の戦いの傷病兵治療など、後の伊香保温泉に繋がる基礎も築かれた。現在も利用されている源泉の手掘り掘削、石段下を使った引湯のための流路の整備も、この時、真田氏が砦作りの一環として行ったものと言われている。また、伊香保砦では、伊香保神社を本丸、隣接する医王寺を二の丸とし、神社の参道沿いに大島、島田、木暮、岸、後閑、望月、千明の各氏が陣を構えており、後の石段脇の宿屋街を彷彿とさせるものになっていたという（左記順番は推測される陣ヶ前の場所を、本丸の神社に近い順に並べたもの）。この天正３年は、現在、伊香保石段街の創始の年、初の計画的温泉都市の始まりとされている。

その後、伊香保は、天正 18（1576）年、徳川家康の関東への国替えに伴い、井伊家の支配に入る。これに伴い、７氏は、地侍から郷士となり、温泉管理と湯宿を営む「大家」となっていくこととなる。関ヶ原の戦いから３年、慶長８（1603）年には、７氏に加え福田氏（島田氏の分家）の計８氏が「伊香保の八軒郷士」として温泉を支配する「大家」一族となっていた。大家の数は、石段上部の「上組」６軒（木暮本家・分家、岸分家２軒、島田本家、大島）、「下組」８軒（木暮分家、岸本家、永井、千明、後閑、福田、島田分家２軒）の計 14 軒である。

14 軒の大家の制度は、寛永２（1625）年には確立していたとされる。また、寛永８（1631）年には餅売湯女（遊女）を置くことも認められ、温泉地としての賑わいが増していくこととなった。この中、大家同士の引湯の権利の争いが起こる。これを受け、寛永 16（1639）年、上野国安中藩二代藩主井伊兵部少輔直好により、現在まで続く「樋口并切こ満寸法」が定められることになった。この引湯権利の裁定により、石段の下に作られた大樋から左右に引湯をする切小間口の横の寸法が横四寸に固定され、口の高さにより引湯の権利の大小が決められた。この決定は、今もなお、伊香保の引湯の基本となっている。井伊家は、これ以外にも、伊香保街道の整備、三国街道とその裏往還の整備など、伊香保が温泉地として発展するための基盤となった街道筋の整備も行っている。なお、井伊家は正保３（1646）年、三河に転封となり、以降伊香保は幕府岩鼻代官所配下の天領となる。

大家 14 軒は、石段左右に７家ずつ並び、うち上部の 12 家は切小間口からの引湯、最下部の２家は大樋の残り湯を使用したとされる。廃湯は農地の灌漑用である。各大家の湯は、それぞれの湯宿の内湯として使われる他、各大家の支配下にあった門家、賃借り人に恩恵として開放されていた大家屋敷内の「屋敷湯」にも利用された（寛永 16（1639）年時点で分湯された湯壺が 54 カ所あったと伝えられている）。門家等は、この「屋敷湯」を湯治場（外湯）とする木賃宿を商い、また、湯治客に食材や日用品を販売する商店を営んだ。江戸期を通じて伊香保は、石高が少なく、温泉地での稼ぎを主体した村落であり、村落の人口は 400～500 人程度で安定していた[235]。

---

235 この段落については、山村順次「新版　日本の温泉地　−その発達・現状とあり方−」一般社団法人日本温泉協会 平成 10 年　P32-P34 も参照している。

先に述べた街道筋の整備は、伊香保を江戸にも知られる著名な温泉地に押し上げることになった。江戸初期には、周辺の観光地を巡る伊香保八景が定められ、宝暦 13（1763）年には江戸で八景の錦絵が売り出された。善光寺参りと絡めて、草津に行き、上がり湯として伊香保や四万に回ったり、榛名神社にお参りがてら草津や伊香保などの温泉にいく榛名講（はるなこう）が広がったりなど、参詣と湯治を組み合わせた旅が盛んに行われ、伊香保に多くの湯治客を送り込んでいた。文化９（1812）年から文化 14（1817 年）の間に出版されたとされる江戸後期の温泉番付、「諸国温泉功能鑑」では、伊香保は東前頭４枚目に位置づけられている[236]。

大家は、伊香保の本百姓（領主に対して村請の年貢貢納の責任を負う土地持ち層）でもあり、伊香保の村の支配にも携わっていた。これについては、享保年間（1716～1736 年）より、干支年番という名主の輪番制が確立されている。干支年番とは、大家 14 家のうち 12 家に十二支を割り振り、その干支の年に名主を務めるというものである。残る２軒（島田家分家１軒と福田家）は半人前とされ、十二支ではなく、乾（けん）と坤（こん）が割り振られ、輪番から外された。この輪番制は明治５（1872）年の太政官布告による区長・戸長制度の成立まで続いており、伊香保の宿屋では当時割り振られた十二支を今も宿の印として使っているところもある。

天領になってからの伊香保の歴史を見ると、大火が何回も起こっているだけでなく、大家間の引き湯権争いの蒸し返し、大家と門家の争い、医王寺と大家の争い（当時、医王寺でも湯口の権利を持っており、それを使って湯治客を泊め、湯女まで雇っていた。そのため、大家の利権とぶつかりあっていた）など多くの地域を揺るがす問題も発生している。温泉地の運営は必ずしも円滑なものではなかったのである。

＜明治以降[237]＞

伊香保では、明治 12（1879）年、英照皇太后の行啓に伴う渋川-伊香保間の県道化が実施され、馬車・人力車の通行が可能になった[238]。このことなどを契機に、伊香保は湯治場として急激な成長を始め、明治 17（1884）年、旧幕臣であり文人として明治期に活躍した成島柳北（なるしまりゅうほく）は、訪問の際、遠からず伊香保に「大革命之期」が訪れるだろうと記している[239]。なお、この明治 17 年は、おりからの東京の薬湯ブームに乗っかり、上野鶯谷に伊香保温泉の「支店」が開業した年でもあり（開通したばかりの上野・高崎間の鉄道で湯を運んでいることが売り文句と

236 東京大学デジタルアーカイブポータル「諸国温泉功能鑑（ページの題名は効能鑑だが史料画像は功能鑑）」 https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/6e7ee624-7914-4d9b-bf31-07310dcc6be9（令和６年 11 月８日確認）

237 以下、近代の伊香保の歴史は、山村順次「伊香保・鬼怒川における温泉観光集落の発達と経済的機能　-温泉観光地の研究第２報-」地理学評論　42 巻５号　昭和 44 年を基本的に参照。他の文献からの参考は都度脚註に記している。

238 行啓・行幸と道の整備については、関戸明子「案内書・紀行文からみた明治・大正期の伊香保温泉」群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編 第 73 巻 令和６年別刷　P47―P64

239 柳北については、関戸明子「案内書・紀行文からみた明治・大正期の伊香保温泉」群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編 第 73 巻 令和６年別刷　P47―P64

なっていた[240]）、その当時の伊香保の積極的な経営姿勢が窺える。実際、その後、後述するように、大家層の交代などもあり、明治 20（1887）年には伊香保の年間宿泊客数が 32,063 人にまで拡大している。ベルツが伊香保を含む日本の温泉地を「日本鑛泉論」で称揚したのが明治 13（1880）年、これを契機に伊香保御料地ができたのが明治 23（1890）年（昭和 20（1945）年廃止）、徳富蘆花が伊香保に来訪したのが明治 31（1898）年、蘆花の伊香保を舞台としたベストセラー小説「不如帰」（冒頭の旅館千明のシーンが有名）が上梓されたのが翌明治 32（1899）年である[241]。また、明治 43（1910）年には地元資本（木暮氏、千明氏）による伊香保電気軌道も開通した（昭和２（1927）年、東武鉄道により買収され伊香保軌道線となり、昭和 31（1956）年廃線）。

ただし、この時期までの伊香保は、夏期中心であり、また盛夏には東京からの顧客もそれなりに来るが、全体的には県内中心に人が集まる伝統的な湯治場としての性格が色濃く残っていた。明治 30（1897）発行の案内書によれば、湯治には食事付きの宿賄と室貸の双方があるが、湯治客には室貸の方が便利であり、その際には、夜具を注文し、また飯焚婦も条件を合わせて雇うとある（複数の部屋を回る契約と当該の部屋のみの契約があった）。また、溯るが、明治 13（1880）年の案内書では調味料や酒、缶詰類などの食材の持参を薦めており、基本的な食材は近隣などからある程度手に入るものの、十分とは言えなかったことがわかる[242]。現在の旅館（かつての大家）でも、かつては一棟貸しをして世話係などは湯治客が直接雇用したということを聞き伝えているところがある[243]。

一方、旅館などの状況としては、明治４（1871）年、明治 11（1878）年の２回の大火を契機に旧来の大家層の多くが没落、14 家のうち４家を残して残り 10 家の旅館は外部資本（近隣の商業資本が多い）経営に差し替わっている。ただし、東京などの大資本の進出には地元の抵抗が強く、昭和４（1929）年に中央資本がケーブルカーを敷設（昭和 18（1943）年閉鎖）して榛名山地域を含む広域観光化を目指したものの、大きな展開とはならなかった。ちなみに伊香保の宿泊客数は、昭和 10（1935）年に 189,440 人、昭和 17（1932）年に 306,828 人と順調に拡大している[244]。

第二次世界大戦後になると旧来からの源泉の湧出量の限界に対応するため、町及び旅館業者主体で新規源泉のボーリングが行われるとともに、昭和 37（1962）年に町営の伊香保ロープウェイ（温泉街と物聞山山頂を結ぶ）が開業、地元資本により冬季集客のためのスケートリンクが開設（昭和 47（1966）年に群馬県内最初のパイピングリンクである伊香保ハイラン

---

240 伊香保の支店については、関戸明子「調査報告　明治期の東京における温泉浴場の展開と場所の意味」E-journal GEO Vol. 17(2)　令和４年　P265-P285

241 徳富蘆花、御料地などの来訪年次については、渋川伊香保温泉観光協会ホームページ「伊香保温泉史」https://www.ikaho-kankou.com/aboutikaho/history/（令和６年 10 月 31 日確認）を参照。

242 宿泊案内書については関戸明子「案内書・紀行文からみた明治・大正期の伊香保温泉」群馬大学共同教育学部紀要 人文・社会科学編 第 73 巻 令和６年別刷　P47―P64

243 伊香保温泉現地調査ヒアリングによる。

244 渋川伊香保温泉観光協会「伊香保温泉宿泊客統計表（暦年）」

ドスケートセンター開業）された。また、元大家以外の地元中小旅館業者の突き上げもあり、湯量の拡大に合わせて、石段を中心とした旧温泉街から北東方面に中小旅館の移転や大家の別館新築が多数行われ、温泉地の大規模な拡大が起こることとなった。伊香保においても、湯治場から、一泊二日型の団体客対応、観光客対応の観光地への転換が行われたのである。

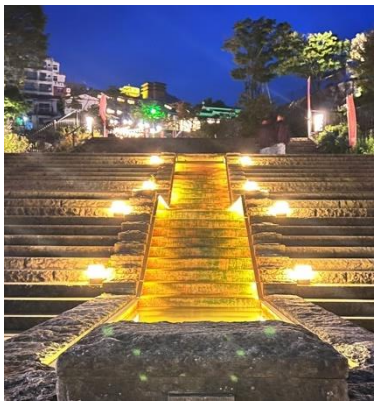
こうした中、昭和 31（1956）年まで戦前のピーク時を下回っていた伊香保温泉の宿泊数は、昭和 32（1957）年に 340,131 人と初めて 30 万人台を記録し、以降、昭和 36（1961）年には早くも 50 万人台に到達、さらに昭和 45（1970）年には 100 万人を突破した。この右肩上がりの拡大は、平成３（1991）年、バブル期に 1,723,421 人のピークを迎えるまで継続することになる。しかし、伊香保の集客数は、この後、バブル崩壊とともに大幅な減少を始めた。ただし、平成 20 年代に入ると 100 万人台で宿泊客数は下げ止まり、令和に入って新型コロナウイルス感染症による入込数の激減が起こるまで一定の集客規模を保つこととなる[245]。

宿泊客の減少停止に成功した大きな要因として考えられるものに、平成 16（2004）年度から平成 20（2008）年度にかけて行われたまちづくり交付金による「伊香保温泉再生事業」がある。この中核となったのが平成 22（2010）年に完成した石段の延伸である。これは、それまでの開発で町のシンボルである石段の眺望が県道から得られなくなっていたことから、県道を走る自動車から一目で石段がわかるような修景を目指したもので、延伸された県道沿い石段基部の部分には、合わせて、湯けむりの立つ温泉のカスケード、高速バスを含むバスの停留場が置かれるロータリー、観光案内所・土産物店などが整備されている[246]。また、女将の会「お香女（おかめ会）」も活躍している。伊香保では、近年も、観光庁補助事業での廃屋撤去・景観整備など、旧温泉街の整備を進めており[247]、歴史性を活かし、新型コロナウイルス感染症の影響からの脱却と年間 100 万人宿泊の回復に向けてのさらなる発展が望まれている状況にある。



石段街　石段地下の石造りの大樋により自然流下式で引湯し各旅館に配湯





石段の景観整備

245 渋川伊香保温泉観光協会「伊香保温泉宿泊客統計表（暦年）」

246 遠藤成宏「伊香保温泉の再生に向けて　：地域の念願 石段の延伸!」土木技術 68 巻２号　平成 25 年２月　P28-P33

247 西川亮、若佐栞「観光庁補助事業による廃屋撤去・景観整備の実態―群馬県渋川市伊香保温泉を事例として―」第 38 回日本観光研究学会全国大会学術論文集　令和５年 12 月　P39-P44

伊香保温泉の源泉

伊香保温泉の源泉には「黄金の湯」（伊香保温泉小間口（こまぐち）権者組合が権利を保有）と呼ばれる近代以前から利用されている源泉と、平成８（1996）年から供用が開始された「白銀の湯」（町所有で渋川市伊香保温泉白銀の湯供給条例により配湯。設置パイプの径により初期設置料が異なり、使用料は立米により決まる）がある。黄金の湯の泉質は「カルシウム・ナトリウムー硫酸塩・炭酸水素塩・塩化物泉」で、pH6.4 の中性となっており、黄金の湯に属する各源泉の混合泉の泉温は 42.2 度、毎分 4,627 リットル湧出し、溶存物質は約 1000 ㎎で鉄分を多く含んでいる[248]。こうした泉質のため、鉄分やカルシウムなどが沈殿しやすく、空気に触れると茶褐色になる。また、飲泉所もあるが、鉄分が多いため、かなり飲みにくい味となっている。一方、白銀の湯はメタけい酸を豊富に含む無色透明無味無臭の湯である[249]。

黄金の湯は近世以前から自然湧出しているもの（約半量）と、昭和 33（1958）年より順次掘削に成功した６つの坑を混合して石段の大樋などに引湯している。自然湧出の源泉については、横穴を掘って取りまとめる、崖から細かく湧出しているものに側溝を作って取りまとめる等の工夫をして湯を集めている。また、自然湧出分は近年湯量が半減し、温度も 35～40 度台まで下がってしまっている。これに掘削分の 40～64 度の源泉を半量混ぜて 42 度程度の源泉としている[250]。



黄金の湯　第二号源泉噴出口


飲泉所 泉質は鉄分が多い

248 温泉の成分、湧出量等については、一般社団法人　日本温泉協会「温泉名人」https://www.spa.or.jp 掲載の温泉成分表による（令和６年 10 月 31 日確認）

249 渋川市「渋川市観光情報／伊香保温泉の効能・入浴方法」https://www.city.shibukawa.lg.jp/kankou/kankou/ikahoonsen/charmofikaho/p000209.html（令和６年 10 月 31 日確認）

250 伊香保温泉現地調査ヒアリングによる。

伊香保温泉の湯の管理の技術[251]

これまで述べてきたように、伊香保温泉の最大の特徴は、湯元からの引湯を、石段の下の大樋を通じて自然流下させ、それを小間口と呼ぶ引湯のための樋を通じて各大家に流す仕組みを 400 年に亘って保持していることにある。これに対応する源泉が、先に述べた「黄金の湯」である。

黄金の湯の源泉から各大家への流路を整理すると、旧来の自然湧泉の湯と新たに掘削された杭の湯を河鹿橋（かじかばし）付近で混ぜ、そこから道路下等の管路を経由して石段の地下にある石造りの大樋に流し、大樋から小間口権利組合所属の宿屋が持つ小間口に流し込む仕掛けとなっている。小間口から後ろは各宿屋の管理となる。小間口の数は、当初よりやや増えて、16 小間となっている。ただし、石段上の薬師堂の小間（近世唯一追加されたもの。湯治は石段上の現在では薬師堂しか残っていない医王寺でも湯治客を泊めていた）は、現在は使われていない。

小間口は栗の木で作られており、長さ６尺（約 182cm）、幅４寸（約 12cm）の樋（石段上の薬師堂のところにある小間口だけは２寸）で、近世と変わっていない。この樋が石造りの大樋から突き出している。現在の小間口は、栗の木の周りにステンレスの覆いがついているが、かつては木そのままであり、木が削れること、また流れに負けて広がってしまうことから、４年単位（実際は３年程度）で交換していた。近年木樋の外側にステンレスの枠をつけたことで 10 年以上持つようになった。

小間口の交換は、各小間口が出ている箇所にある蓋を開け人が入って行う。湯を止めて実施するため、一気に 16 個まとめて交換する。大樋の部分に湯の花が泥として沈殿しており、そこにつかるようにして交換する。

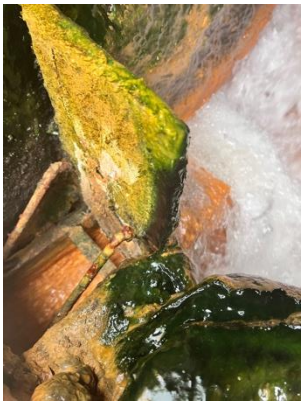
小間口は、乾燥させない栗の木を使っている。理由のひとつは栗の木が極めて重く堅いことであり、また温泉を流し続けるため、湯によって変形しないように乾燥させず生のまま使う。このため乾燥させてから加工する通常の木材とは異なり、普通の大工仕事では対応できない。



石段下の大桶（引湯された湯は自然流下）



小間口（２つの小間口で配湯）



小間口（間隙で湯量を調節）

251 この項は伊香保温泉現地調査ヒアリングによる。

大樋部分については大量にたまっている湯の花を年２回清掃している。まず、石段のカ所カ所に設けられている清掃口から、前部にタオルをくくりつけたロープを流し、一つ下の位置にある清掃口から回収して通す。次にロープにブラシを付けた（ブラシは短いため、一つのロープに 10 本以上連結させる）太いものに取り替え、それを使って、清掃口から次の清掃口までの間を、３回以上繰り返し小間口組合の人間が 30 人位総出で引っ張り、湯の花を掻き取る。


石段下の大桶の清掃口


同左


同左

出てきた湯の花については、15 年位前まで、下水に流していた。その後、湯屑（ゆくず）にヒ素が含まれており危険ということで下水に流すことはやめ、現在では、河川敷に積んでおくようになっている。

黄金の湯については特に旧来の自然湧出の湯温が低い（源泉を混合した段階で 40 度強）ため、加温が必要となる場合がある。石段下の大樋から小間口までは 0.5 度程度しか湯温の低下がないため大きな問題にはなりにくいが、小間口から直接ではないところでは７度程度下がることもあり、加温が必須となる。先に述べたように、高度経済成長期、団体客受け入れのため、石段から離れた地域に大型施設が立地した経緯があり、長い引湯を行う施設が増えた。そのため、湯温低下の問題が拡大することになった。

千明仁泉亭（ちぎらじんせんてい）では、通常の小間に加え、末端の口（小間での引湯が、横幅４寸、立て幅は保有している温泉権に対応したサイズの小間口の断面積に応じ基本的に一定量が流れてくるのに対し、末端の口は、上部にある小間に流れた湯の残りが大樋から来るため、湯量が安定しない）を使っているとともに、例外的に、石段大桶より前の薬師堂付近で分岐させた管からも直接給湯を受けている。小間、大樋末端、薬師堂付近から流れてくる源泉は、直接浴槽に流し込み用いる場合もあれば、貯湯槽に一度貯めてから用いる場合もある。また、薬師堂付近から直接給湯されている地下埋設管経由の湯については、高低差によるサイホン効果を利用し、ポンプに頼らず上階の宿泊室内に給湯している。




別ルート地下埋設管で引湯される場合は、サイホン原理で高所の宿泊室まで給湯する場合がある（千明仁泉亭）。

湯の温度管理については、配湯された湯をそのまま使う場合と加温する場合があり、後者については上面が開放された管路上部より高温蒸気を吹き付ける加温方式を採ることで、加水による温泉成分の希釈を防いでいる。多様な引湯口の使用や、高温蒸気による加温など、複雑な設備を駆使して湯を利用しているため、湯温・湯量の調整や清掃はもとより、修理の機会も多く、湯の管理を担当している湯守は専属の大工と連携し、絶えずきめ細かなメンテナンスを行っている。

上記見てきたように、伊香保の何よりの特徴は、400 年前、伊香保が現在の温泉街を形成した時点から基本的に同じ形態の引湯のあり方を温泉街中核部分において残していることにある。また、この引き湯のあり方は、近世における村の支配構造とも重なり、近代以降も、多くの大家で経営の交代はあったものの、小間口権者組合への組合員として各宿が協力・協働しあう社会慣習を支え続けてきた。先にみたように、伊香保においては、近代以降の温泉地の拡大に際して、基本的に地元資本での対応が主であり、外部から大資本が入ることは殆どなかった。こうした慣習とそれに基づく歴史の継続が、外部からの過剰な干渉を防ぎ、石段という、他にはない優れた歴史的景観と伝統的な湯の使い方を残してきたのである。伊香保温泉の文化と歴史の基盤には、石段を中心とした湯の管理の技術が生きている。

伝統的入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等[252]

黄金の湯の入浴方法については、泉質に人体への大きな刺激がないこと（かつては四万温泉とともに草津の上がり湯とも呼ばれていた）から、現在では、環境省の通達などに記された一般的な入浴のあり方以外に強く打ち出されているものはない。ただし、鉄分量が多く空気に触れると茶色になるため、入浴後には水道水のシャワーを使うことが多いという。飲泉については、近世における史料はないものの、ベルツの指導により明治以降始められている

252 この項は、別途脚註があるものを除き、伊香保温泉現地調査ヒアリングによる。

[253]。ちなみに現在では源泉に近い飲泉所が１カ所だけあり、日本一まずいとの評判も一部で呼んでいる[254]。また千明仁泉亭には「立ち湯」があるが、由来は不明確で、伝統的なものかはわからない。

石段の上に伊香保神社があり、温泉神として大己貴命と少彦名命が祀られている。大己貴命と少彦名命は各地の温泉にまつわる伝承によく出てくる神格である。ただし、先に述べたように、そもそも伊香保神社は榛名山系の山を信仰する神社であったと考えられおり、温泉にまつわる神を祭神とするようになったのは、伊香保の地に移転してからのことと考えられる。江戸期には温泉神社とも呼ばれ、境内に温泉寺が別当として置かれていた[255]。また、14 世紀頃に成立したと考えられている安居院(あぐい)流「神道集」によれば、伊香保の神は男女二神で、男神は湯の守護神で本地は薬師如来、女神は里神で本地は十一面観音という[256]。

いまの位置に社殿が建てられたのは、明治 11（1878）年に旧社が大火で焼けた後のことで、現在は仮宮とされる。明治 11 年以前には、石段上に、現在、石段下に移設されている薬師堂があった（江戸時代の絵図をみると、最上段に薬師堂があり、そのすぐ下に伊香保神社があり、さらにその下に医王寺という寺院があった[257]）。なお、現在伊香保神社に宮司は常駐していない。



伊香保神社



同左

伊香保神社については、秋季例大祭が、続日本後紀で名神大社に列せられたとあることを記念して９月 19 日と翌 20 日に実施されている。第二次世界大戦後は、この例大祭に徳冨蘆花の命日である９月 18 日を蘆花祭として加えた「伊香保まつり」が渋川伊香保温泉観光協会

253 小暮敬「シンポジウムⅡ　飲泉療法　１．飲泉の歴史と現状」日本温泉気候物理医学会雑誌第 50 巻１号　昭和 61 年　P21-P24

254 朝日新聞「鉄の味か血の味か 日本一まずい?と評判　伊香保温泉を飲んでみると」令和５年 10 月 29 日

255 温泉神社については、伊香保史年表作成チーム、関靖「伊香保歴史年表風土記」NPO 法人地域価値プラス　令和６年 11 月を参照。

256 神道集については、西尾正仁「御影史学研究会　民俗学叢書 13　薬師信仰-護国の仏から温泉の仏へ-」岩田書店　平成 12 年　を参照。

257 木暮金太夫 編「錦絵にみる日本の温泉」国書刊行会　平成 15 年　P21 に掲載の「伊香保温泉名所一覧（彩色摺）江戸末期　歌川広重　古久屋与右衛門板

主催によって行われている。「伊香保まつり」では、400kg ある本神輿を石段経由で神社に奉納する他、若衆による樽(たる)みこしが行われる。樽みこしとは、樽と丸太で作る手作りの神輿を、各神輿間でもみ合いながら石段を上げる一種の喧嘩神輿である。蘆花祭には追悼茶会や追悼式典が行われている。また、渋川伊香保温泉観光協会は、伊香保まつり以外の温泉地の文化継承として、伊香保の芸妓の保護を図っている。

伊香保の特産としては勝月堂の湯乃花まんじゅうがよく知られている。勝月堂(しょうげつどう)は明治 43（1910）年開業の老舗で、開業の年に、伊香保の湯の花の茶色に似せた湯乃花まんじゅうを開発、販売開始した。これが有名になったきっかけは、昭和９（1934）年、陸軍大演習を謁見に昭和天皇が行幸した際、群馬県が献上したことであるといい、その後、全国の温泉地に温泉まんじゅうが広がったという[258]。ただし、製造に当たって温泉を利用しているわけではない。

伊香保には、他の温泉地と共通する祭神を祀り温泉神社の性格を持つ神社があり、現在はお堂のみとなっているが薬師信仰も存在する。また、ベルツの来訪、御用地の建設、横手館本館東棟・西棟や伊香保観光ホテル、渋川市の文化財であるハワイ王国公使別邸（ハワイがまだ独立王国であった 1893 年以前に建築[259]）など、明治の大火後、大きく発展してきた近代初期の歴史景観や、全国初といわれるこれも明治期に生まれた温泉まんじゅうなどがある。だが、何より特徴的なのは、400 年の歴史を有する石段と小間口を使った源泉からの引湯の仕掛けであり、それを今の世に現役のまま伝えている湯の管理の技術である。

石段・小間口による引湯は、伊香保の湯の伝統を守るとともに、伊香保温泉小間口権者組合という地域における協働のあり方、権利処理の手法を通じて、伊香保の社会のあり方をも規定してきた。伊香保は、その当初から、温泉の湯の管理の技術に則って作られ、そして発展してきた地域なのである。

---

258 勝月堂ホームページ「勝月堂の歴史」http://www.shougetsudo.net/history.php（令和６年 10 月 31 日確認）

259 渋川市「渋川市観光情報　ハワイ王国公使別邸」
https://www.city.shibukawa.lg.jp/kankou/kankou/midokoro/history/kanrenshisetsu/p000266.html（令和６年 10 月 31 日確認）

（７）和倉温泉

和倉温泉は、能登半島東側の七尾湾南岸に立地する能登半島最大の温泉地である。近世より 90 度程度の高温の源泉が海中に湧いており、明治に埋め立てにより陸地化した。現在は元の温泉場近くで掘削した源泉から、集中管理で、21 軒の旅館の内湯と総湯へ配湯をしている。内海の穏やかで美しい情景と北陸の海産物が楽しめる温泉地であり、また、台湾に日本式のおもてなしを輸出した加賀屋の本拠でもある。

令和６（2024）年１月、この和倉を震度６強の地震が襲った。ここでは、和倉の歴史や湯の管理、温泉旅館のおもてなしのわざとともに、和倉温泉への震災の影響についてもまとめていく。

和倉温泉の歴史

＜近世以前[260]＞

和倉温泉は、古くは涌浦といい、和倉との表記になったのは延宝２（1674）年である。伝承では大同年間（806～809）年に薬師岳の西の湯谷に湧出していた温泉が、いつの時代か、海中からの湧出に変わったもの（浦に湧いているから涌浦（わくうら））と言われている。海中から温泉が発見された経緯については、漁師夫婦が海中で傷を癒やす白鷺を見つけて発見した、室町時代に地域を治めていた守護畠山氏が湯船を出して湯を取りあげた、初代加賀藩主前田利長が鷹野（たかの）の際に発見して供奉していた和倉屋少五郎（後に和倉温泉の湯番頭となった家の祖先）に支配を命じた、慶長 16（1611）年に二代藩主利常が腫れ物で困ったとき越中商人が上申したなど様々な口伝が残る。

同時代史料の初見は、明暦（1655～1658 年）頃の「十村書上」である。それによれば寛永 18（1641）年、海中から湧出する温泉の周りに湯島を築き、湯役を徴取することになったという。湯役は当初涌浦村からの上納であった。なお、十村（とむら）とは、加賀前田藩特有の大庄屋制度（十村制度）において、年貢貢納の責務を中心に代官的な役を負う役職で、地域の豪農から任命され、一定の扶持を藩から受けていた[261]。ここでいう十村書上とは、和倉を含む地域の各村落を取りまとめていた十村による藩への報告である。この当時、和倉村は、熊木組という十村に属していた。

その後の藩の記録をみると、承応３（1654）年より七尾町人（当時の地名は「所口」）市兵衛が湯番頭となり、以降湯番頭よりの上納となった。当時は、加賀藩により、改作法という農政大改革が行われていた時期であり、それに合わせ、城（小丸山城）が置かれ、奉行が常駐し、港湾も整備されていた所口の住人に湯役を徴収する役を任せ、租税上納機構を整備したものと考えられている。なお、明暦２（1656）年の記録では百姓七軒とあり、直接湯役を納め

260 この項は、七尾市史編纂専門委員会 編「七尾市史」七尾市　昭和 49 年３月を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

261 十村制度については、村井愛香「加賀藩における蔵組合の機能」金沢大学日本史学研究室紀要 3　平成 29 年 P19-P28 参照。

てはいないものの、実際には湯宿稼ぎをしていたらしく、かなり高い年貢を賦課されている。建前上はあくまで農家であったため、湯宿稼ぎのための増改築は認められていない。

その後、和倉温泉は次第に湯治客を増やし、宝暦年間（1751～1764 年）には、遠く加越からの客も多くみえるなど盛況となったため、湯宿稼ぎのための増築の願いが出るまでになった。また、既に上宿・中宿などの格付けもされていたことが記録から窺える。安永６（1777）年には、賭け事や風紀紊乱（びんらん）を取り締まる高札（こうさつ）が建てられており、相当に賑わいがあったことがわかる。この時、「病気でもない者」の入湯も合わせて禁じられたため、入湯者が腫れ物患者や負傷者ばかりとなり「汚湯（きたなゆ）」と呼ばれることになったという。そのためか、18 世紀末の「能登名跡史」の記述では、沖の小島に日本一の熱湯があること、湯桶を船に載せて島に渡りその桶で入湯することと名湯であることが言われている一方で、島には日よけもなく見苦しいこと、村では寝間着・布団を貸しているが品質が悪くとても使えないこと、夏は蚤・蚊に攻められること、十七軒の宿があるが食物類が不自由至極であることなど入浴環境についての評価はかなり辛口である。一方、所口（七尾）にいて取り湯をした方がいいとも記されており、この頃までには湯樽に温泉を詰めて送る廻湯（かいとう）が確立していたことがわかる。なお、後代になるが、安政３（1856）年には、京・大阪廻湯と江戸廻湯について村方と湯番頭の間に争いが起きており、廻湯は和倉温泉の経営になくてはならないものになっていた。ちなみに、江戸時代の所口（七尾）港は、江戸・大坂双方に航路を持つ大規模な物産の集散地であり、千軒以上もの商家が建ち並んでいた。和倉の廻湯も、こうした物流網に乗って運搬されていたと思われる。

だが、このような環境の悪さも、文化文政期（1804～1830 年）以降はかなり解消したようで、文化 14（1817）年の紀行文では、既に男女に分けられた屋根のある湯ざやが建てられていること、橋も架けられ船にのる必要はないことが記されている。また、文政 11（1828）年開板の十返舎一九（じっぺんしゃいっく）「弥次喜多（やじきた）北陸道中記」にも和倉温泉の様子が載せられており、海中の温泉で潮を柄杓で組み入れて入湯すること、湯宿が数多あり大家が多いこと、鮮魚料理が楽しめること、婀（たお）やかな婦女が多くおり酒食乏しからぬ繁盛した温泉地であると描写されている[262]。天保の飢饉が終わった頃には、「病気でもない者」の入湯禁止は死文化、安政 4（1857）年には「他所の遊女」が禁止されており、遊女を呼ぶことが続いていたことがわかる（公式に飯盛女が許されたのは明治元（1868）年）。また、嘉永 6（1853）年の藩主斉泰の能登巡検では、和倉小休止があり、大名が入湯するほどの格式を誇るに至っていた。

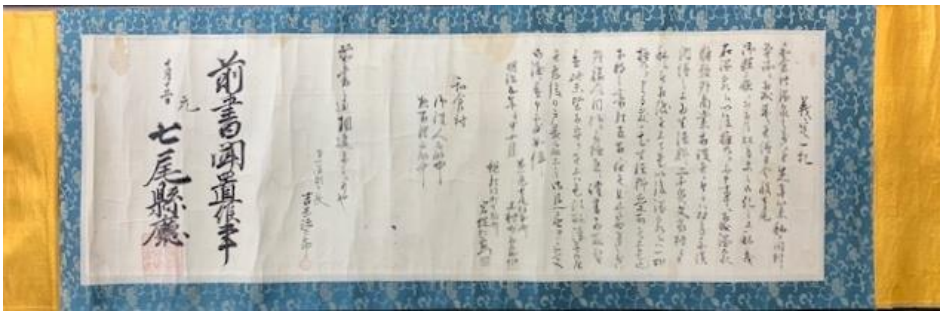
こうした繁栄の中、大きな問題となっていたのが、湯番頭和倉屋庄五郎（少五郎とも）と村との対立であった。和倉屋庄五郎は、湯番頭として湯銭の徴税を行うだけでなく、盗賊改役の下役として、村の治安維持も担っていた。こうした立場を利用しての庄五郎の利益追求は、和倉温泉を実際に担っているという意識の強い村側とぶつかりがちであり、先の廻湯の件に止まらず、多くの利害対立が生じ、時には暴力沙汰に及ぶこともあった。これに対し加賀藩

262 弥次喜多については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

は必ずしも湯番頭の味方とはならず、十村も村側に付くことが多かったため、形勢は次第に村側に傾く。だが、最終的な決着は、明治維新後の明治５（1872）年に持ち越されることになる。

＜明治・大正・昭和戦前期[263]＞

明治維新に伴い、和倉温泉の「役銀（やくぎん）」は、所口町管理から温泉の組主付けの上納になり（和倉村は、当時、十村の「青組」に所属しており、その「青組」の大庄屋経由となった）、庄五郎の支配権はその行政上の根拠を失った。明治４年に七尾県が置かれると、湯役自体も区役所（同年に置かれた複数の村落をまとめて設定された戸籍区の区役所）直轄となる（なお、七尾県は翌年廃され、七尾県能登国となっていた和倉を含む地域は石川県に編入される）。翌明治５（1872）年、湯番頭の庄五郎との争いは、村側が銭二千貫文の手切れ金を庄五郎に払うことで決着となり、これ以降、和倉の温泉権（源泉）は和倉村自身のものとなった。手切れ金については、当時の村落に居住していた住民（全 29 戸）に 275 株半の湯株を購入してもらうことで得た資金の一部を充てて償却している。



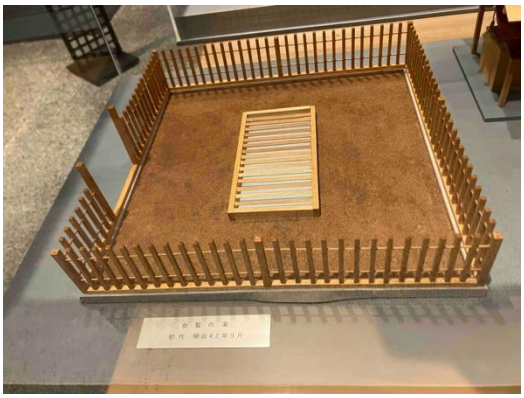
温泉権を少五郎を通して加賀県より温泉権を獲得した際の議定書　※和倉温泉合資会社提

この株については、その後明治 18（1885）年に所有者が 37 名にまで増加し、名称も鉱泉株となっている。江戸時代より盛んであった廻湯（和倉外への汲み湯の販売）と、外部の入湯客からの湯銭（一日当たりで徴収された）が湯株の組織の収入となり、収益は、湯株の配当金、積立金、道路築造費、後述の共浴場の建設・修繕費に充てられた。江戸時代までは湯銭は一廻り（七日）ごとであったとされており、湯治による長期逗留中心の状況が変化してきていることが窺える。ただし、こうした収益はあったものの、道路築造などに費用がかかり、配当金や積立金は実質的にほぼない状況が続いたといわれている。なお、湯島の源泉については、明治８（1875）年、住民の主張に基づき、官地ではなく、共有地として県に認められている。

和倉は、その後、明治 10（1877）年頃から活況を呈し、入湯客が増大、合わせて沿岸敷地の埋め立てが進んだ。これにより、源泉のあったそもそもの湯島（現：湯元の広場）に加え、その先の弁天様が祀られていた弁天島（現：弁天崎源泉公園）を含め、現在の和倉温泉の中心

263　この項は、七尾市史編纂専門委員会 編「七尾市史」七尾市　昭和 49 年３月、七尾市史編纂専門委員会 編「新修七尾市史 16　通史編Ⅲ　近現代」平成 25 年、明治以降の温泉権、営業組合、合資会社の詳細、廻湯・湯の花については、川島武宣・潮見俊隆・渡辺洋三「温泉権の研究」勁草書房　昭和 39 年、田川捷一「和倉温泉のれきし」能登印刷・出版部　平成４年８月、及び、現地調査ヒアリングを参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

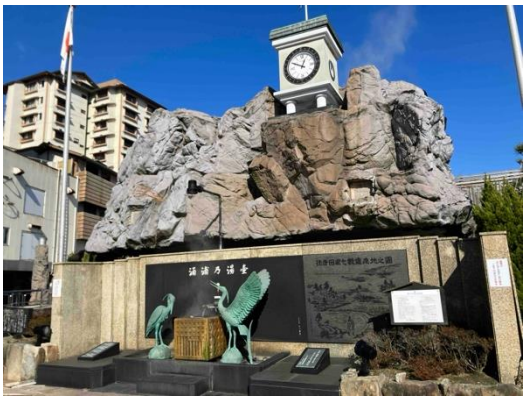
部が明治 12 年から 13 年（1879～1880）年にかけて陸地化された。また、同 13 年には共同浴場として大浴舎（共浴場。後に現在の「総湯」となる）が源泉の近くに建設されるとともに、ドイツで開催された「万国鉱泉博覧会（ばんこくこうせんはくらんかい）」の品評会にも出品し、「世界三等鉱泉」の表彰を得て、温泉地としての知名度が大きく高まった。ちなみに、和倉村は、明治 22（1889）年の町村制施行に伴い、旧奥原村と統合され端村となっている。



東宮行啓時に台覧之湯として整備された明治時代の湯元の模型。
※和倉温泉観光交流センター展示資料



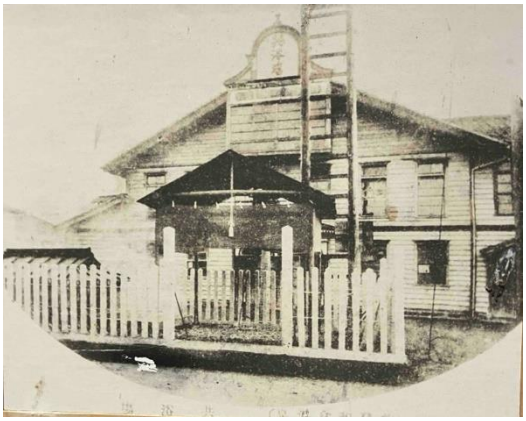
大正時代初期に交通量の増大に合わせて整備された湯元の模型。台覧の碑が建てられている（後述）。
※和倉温泉観光交流センター展示資料



かつての源泉は「湯元の広場」となっており、岩山と白鷺の像のある飲泉場が整備されている。



弁天島も埋め立てられ、現在は「弁天崎源泉公園」となっている。



明治 32 年建設の総湯。湯元のすぐ前にあった。
※和倉温泉観光交流センター展示資料



昭和 10 年の総湯。同じ場所で建て替えられた。
※和倉温泉観光交流センター展示資料

明治 28（1895）年、石川県鉱泉営業取締規則が施行される。これは、明治以降、温泉資源に関わる国法が制定されない中、温泉権を巡る利用者間の対立を調整するため、各道府県で制定された規則のうちの一つ[264]で、和倉ではこの規則に則り、翌 29 年に「和倉鉱泉営業組合」を結成、従来の源泉地共有者の組織であった鉱泉株の仕組みを発展的に解消させることとなった。この組合には、内湯を持つ旅館である「鉱泉浴営業者」、内湯のない旅館（客は共同浴場を利用）の「鉱泉宿営業者」に加え、湯宿の業務を行っていない「鉱泉株の所有者」も参加するものとなっており、庄五郎から温泉権を取り返した際の村人も当事者としてそのまま参加できるものとなっていた（ただし、非営業者の組合への関心は低く、鉱泉浴営業者及び鉱泉宿営業者が運営の中心となっていた）。当初の組合員数は 37 名、鉱泉株数は温泉使用権が 277.5 株あり、これとは別に源泉地の土地持分 37 株、合わせて 314.5 株となった。ただし、使用権と土地持分を分離して処分することは禁止されていた（使用権を販売する場合、土地持分は組合に譲渡された）。

組合員数については、温泉地の発展に従って外部からの移住者も増えたことから、株を分割しての販売が行われ、組合が後述する合資会社へと改組されるまでに組合員数が 103 名まで拡大している。また、新たな源泉の掘削は組合で厳しく禁じられており、外部からの掘削は勿論のこと、村人の自家源泉掘削も厳しく取り締まられた。このため、大正期になるまで、源泉はもとの湯島のみであり、新規源泉の掘削は行われていない。

先に述べた共浴場については、組合の運営ではなく、競争入札で請負業者（「湯番頭（ゆばんとう）」）を選定して任せていた。共浴場の入浴、及び、旅館の内湯の入浴については、村の住民は無償、外部は有償であり、湯番頭は有償売上から共浴場の運営費を捻出した。なお、和倉温泉では、先述したように汲み湯を江戸時代から行っており、それを利用した内湯が行われていた（汲み湯代は当初無償であったが、その後有償化）。ただし、鉱泉浴営業者以外の者は、村人であっても、汲み湯は厳禁であった。引き湯については、明治年間より、汲み湯だけでなく、木の樋で源泉から各宿の地下の貯湯槽へと引き湯をし、そこから湯を浴槽に柄杓で汲み上げることも多く行われるようになっていた。

また、廻湯については、全て組合名義で行われることとされ、強い統制を受けることとなった。なお、市場環境の変化もあり、廻湯は大正年間をもって終焉している。明治 32（1899）年には、共浴場が建て替えられ、初代の「総湯」となっている。

続く明治 30 年代から大正にかけては、和倉への鉄道交通の開発が行われた時期となる。それまでの和倉は、明治 22（1889）年に七尾～穴水航路、明治 29（1896）年に七尾～中島航路が開かれ和倉にも停泊するようになってはいたものの、陸路の近代化は遅れていた。まず、明治 31（1898）年、七尾鉄道株式会社が津幡から七尾までの鉄道を開業、明治 33（1901）年には北陸本線と接続し、七尾まで鉄道で繋がった。七尾鉄道は、その後、明治 40（1907）年

264 道府県の取締規則については、高柳友彦「温泉資源管理の歴史　近現代日本を事例に」水資源・環境研究 Vol.31, No.2 平成 30 年　P84-P87 を参照。

に国有化される[265]。大正４（1915）年には和倉自動車株式会社が設立され、七尾駅から和倉温泉まで乗合バスを開業している。

和倉まで七尾線が延伸し、和倉駅（現：和倉温泉駅）が開業したのは大正 14（1925）年となる。開業初日には、鉄道が到着する度に花火が上げられ、弁天崎公園で祝宴が開かれた。各旅館の内湯への引き湯も、源泉地の集湯タンクからパイプで行われるようになり、ポンプも使われるようになった。明治 40（1907）年の絵図では、埋め立てられた湯島・弁天島の周りに 16 軒の宿屋（内湯がある鉱泉浴営業者と推定される）があり、薬師堂（現：少比古那神社（すくなひこなじんじゃ））が描かれている。また、馬車・人力車が見えており、当時の交通事情がわかる。

第二次世界大戦前の和倉温泉の入湯客数についての統計資料はないが、幕末期には年間２万人程度の入湯があったと推測されている。明治になってからは、明治 39（1906）年 83,558 人、40 年 97,167 人、41 年 98,816 人という数値があり、幕末より４倍程度の伸長が見られており、この３年間の間も順調に客足を伸ばしている。大正時代の入湯客数については、青年団体・在郷軍人団体・小中学校団体を除いた数値しかなく、それによれば大正 11（1922）年 74,678 人、12 年 68,458 人、13 年 77,283 人、14 年 78,443 人、15 年 81,598 人となっている。団体客数が入っていないため明治期との比較はできないが、趨勢として大きく伸びてはおらず、明治期に客数を伸ばした後、大正年間の入客数は停滞気味であった可能性が高い。

明治期の和倉温泉の画期として行啓がある。明治 42（1909）年には東宮時代の大正天皇が行啓され、それに合わせて御便殿（ごべんでん）（皇族のための仮設の休憩所）が和倉西部丘陵の白崎山中腹（現：大観荘）に建てられた。和倉御便殿は、寝殿風総檜造り平屋の本殿御座所（約 53 坪）と供奉した人のための控室である供奉殿「清涼閣」（約 48 坪）の二つよりなり、大正天皇は、本殿で昼食を取られた後に源泉からの汲み湯で風呂をお召しになり、約２時間滞在された。東宮殿下は、行啓の際、湯元（旧湯島）の源泉もご覧になっており、現在、湯元の広場にはそれを記念した「台覧（たいらん）の湯」の碑が建てられている。その際、イルカ漁の様子や活魚の生け簀（す）も見学されたという。和倉御便殿本殿は青林寺に、和倉御便殿供奉殿は信行寺に移築されている[266]。

---

265 鉄道省編「日本鉄道史　中編」鉄道省　大正 10 年

266 移築時期については、本殿は昭和 50 年頃（青林寺へのヒアリングでは昭和 51 年、信行寺のヒアリングでは昭和 50 年）、清涼閣は昭和 30 年代（青林寺へのヒアリングでは昭和 39 年、信行寺のヒアリングでは昭和 35 年）である。大観荘の拡張工事が移築の契機になったと言われている。



青林寺に移築された和倉御便殿本殿の座敷部分。外の庭園の風景が手前の卓に反射している。



和倉御便殿本殿で湯殿が置かれた部分。東宮殿下がご使用された鏡台等の備品が地震のため臨時に設置されている。



信行寺に移築された供奉者が控えていた和倉御便殿供奉殿（清涼閣）の廊下



和倉御便殿供奉殿（清涼閣）の座敷

こうした中、「和倉鉱泉営業組合」は、源泉の管理や配湯、総湯の運営に止まらず、そこで得た利益を、運動場づくりや防火用の簡易水道設置など、地域づくり全体に投下していった。また、大正 10（1921）年頃には、各宿で湯量の不足があったことから、上総掘りにて初めての新規掘削も行っている。大正 12（1923）年にも、鑿井（さくせい）により、新たな源泉を確保した[267]。

中でも多額の費用が必要となったのが、上述した国鉄七尾線の延伸に関わる費用である。こうした事業展開に必要な原資の確保と、事業体としての運営の機動性を求め、和倉鉱泉営業組合は、大正 14（1925）年、103 名の出資による「和倉温泉合資会社」へと衣替えをすることになる。合資会社は、債務に対して無限責任を負う社員と、出資額までの有限責任しか負わない社員による営利会社法人であるが、和倉温泉合資会社では、主に温泉旅館を営業する事業者が無限責任社員（27 名）に、非営業者の住民が有限責任社員（76 名）になることで、温泉への関わりに応じて責任と権限のバランスを取る調整が行われている。結果、旅館営業

267 初めての源泉の掘削時期については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年、和倉温泉総湯ホームページ「あゆみ」https://www.wakura.co.jp/history.html（令和 7 年 1 月 28 日最終確認）などを参照。なお、北陸中日新聞七尾支局「わくら物語」中日新聞北陸本社　昭和 56 年 6 月では、最初の掘削について、大正 9 年に上総掘りで掘ったとある。湯島のもともとの源泉を含め、戦前の源泉は全て廃棄されている。

者が主導権を取りつつ、地域住民全体が権利を持つ温泉の共有体制が作られることになった。また、合資会社であるため、持分譲渡に当たっては無限責任社員の同意が必要であり、これによって地区外資本の導入も防止されることとなった。これに合わせて鉱泉浴営業者、鉱泉宿営業者による「和倉鉱泉営業組合」と「和倉温泉共同組合」（その後昭和 24（1949）年に合併して和倉尾温泉共同組合、昭和 35（1960）年より和倉温泉旅館協同組合）も発足している。なお、合資会社の社員は、令和 7（2025）年現在、若干増えて 120 人程度となっている。

和倉温泉合資会社の役割は、源泉の所有・管理と各旅館への配湯、及び、それまで湯番頭に請け負わせていた共浴場の管理である。共浴場の料金については、昭和 29（1954）年に総湯が建て替えられ、「さぎの湯」となるまで、組合時代と同様地域住民は無料であった（その後、合資会社社員とその家族のみ無料に変更）。一方、そこで得た収益（社員である旅館への配湯料金と外部顧客の共浴場の入浴料）は、配当金以外全て、水道事業（昭和 30 年代に七尾市に移管されるまで和倉の水道は合資会社が経営）、道路・橋梁の改修、公民館や学校・幼稚園の建築、祭礼への寄附、公園・運動場などの整備に投入された。組合時代と同じく、合資会社は、私企業であるとともに地方公共団体的な性格を強く有しており、それは第二次世界大戦後にもそのまま続いている。

こうした合資会社の投資もあり、大正時代の和倉温泉は、海水浴場、円山遊園地、和倉劇場（後に和倉座に改名）、競馬場などの遊行施設が整備され、置屋や玉突（ビリヤード）場なども林立する繁華な温泉街となっていった。大正 14（1925）年の「和倉鉱泉所全図」をみると、専門の玉突場が２軒、芸者の置屋が６軒掲載されている。ただし、他の温泉地に比べると物堅いとも評されており、歓楽性は、温泉地の規模に比して、必ずしも高くなかったと思われる。旅館数は 30 軒程度と増えており、現在和倉温泉を代表する旅館となっている加賀屋も明治 39（1906）年に創業している。

また、この 30 軒はあくまで食事を出す旅館であり、別途、宿泊費に食事が含まれない（自炊しても構わない）長期逗留客向けの木賃宿が存在していた。大正９（1920）年には、和倉温泉の温泉成分を「湯の花」として販売する会社も設立されている（製品自体はその前から発売されており、明治 36（1903）年の第５回内国勧業博覧会に入賞、明治 45（1912）年の帝国実業博覧会では一等賞を獲得している。なお、湯の花会社は、戦後昭和 37（1962）年に合資会社に買収され、工場は託児所用地となった[268]）。



大正時代の「和倉湯の花工場」
※和倉温泉観光交流センター展示資料

[268] 戦後の湯の花会社については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

この勢いは昭和初期まで続き、昭和５（1930）年には、旅館数 31 軒、うち内湯を持つ旅館が 22 軒となった。また、内湯がなく、総湯を使う旅人宿と呼ばれる宿泊業態も新たに生まれている。昭和 10（1935）年には総湯の建て替え、昭和 11（1936）年には和倉駅から温泉街までの大通りの舗装整備も行われた。なお、この間、昭和９（1934）年に端村は和倉町に改名、さらに昭和 14（1939）年には七尾市に併合されている。

しかし、昭和 16（1941）年になると戦時色が強くなり、温泉地経営は難しくなる。昭和 18（1943）年には和倉座が公会堂に転用、昭和 19（1944）年以降は、旅館自体が、学童疎開の受け入れ施設、海軍舞鶴病院分院、工場や船舶運営会の寮、将校の慰安所などに変わらざるを得なくなり、温泉地としての活動は休止状態となった。

＜第二次世界大戦後[269]＞

第二次世界大戦後の和倉温泉は再び発展の道を遂げることになる。和倉温泉共同組合加盟旅館の浴客数をみると、昭和 24（1949）年では 34,846 人と明治・大正期を下回る数値であったものが、昭和 30 年代に入ると、昭和 31（1956）年に 111,348 人と 10 万人を突破、昭和 36（1961）年に 217,856 人、昭和 41（1966）年に 339,741 人、昭和 45（1970）年に 512,624 人と急激に成長している。これに合わせ、加盟旅館数も、昭和 31（1956）年の 22 軒・収容人数 973 人から、昭和 45（1970）年の 35 軒・収容人数 3,062 人へと拡大している[270]。旅館の立地も、源泉からの引き湯技術の発展と、海岸部の埋め立ての進展に伴い、海岸線沿いに「朝日と夕日がともに見える」眺望が楽しめる施設が林立するようになり、旧来の立地の小型・家族経営型旅館と、海岸沿いの大型旅館へと二分していくこととなった。高度経済成長期、団体旅行を中心に一気に国内観光市場が拡大する中、和倉温泉でもその需要を取り込むことに成功したのである。

戦後の和倉温泉では、まず、昭和 29（1954）年の新共浴場「さぎの湯」を整備（従来、元湯の隣りにあった協浴場を温泉街中心部の現在地に移転）、昭和 31（1956）年の初の鉄筋コンクリート建て旅館が建設（銀水閣）され、昭和 33（1958）年には昭和天皇・皇后両陛下の加賀屋への行幸があった。また、昭和 30 年代は、昭和 32（1957）年に松竹映画「集金旅行」（井伏鱒二原作、佐田啓二主演）や和倉を含む能登半島一円をロケし能登観光ブームの火付け役となった東宝映画「忘却の花びら」（菊田一夫原作、池辺良、小泉博、司葉子、草笛光子出演／前年の昭和 31 年に、和倉温泉協会が原作者に働きかけ、NHK ラジオドラマとなって大ヒットしたのが映画化のきっかけ）、昭和 36（1961）年に松竹映画「ゼロの焦点」（松本清張原作、久我美子主演）などが公開されており、昭和 37（1962）年には石川県に NHK と MRO

269　この項は、七尾市史編さん専門委員会 編「新修七尾市史 16　通史編Ⅲ　近現代」平成 25 年、田川捷一「和倉温泉のれきし」能登印刷・出版部　平成 4 年 8 月及び現地調査ヒアリングを参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

270　入湯者数の数値については、和倉温泉旅館協同組合「和倉温泉旅館共同組合創立 100 周年記念　和倉温泉長期ビジョン　＜おかげさまの心を 21 世紀へ＞」平成 3 年 9 月を参照。

北陸放送が開局するなど、和倉温泉の映像が全国に広まっていった時期にも当たる。観光協会でも、テレビの開局に合わせてCMを展開するなど、積極的な観光客誘致を実施した。

その他昭和40年代半ばまでの和倉温泉の主立った事跡としては、昭和24（1949）年の和倉観光協会の発足と翌25年よりの観光イベントの開始がある。観光協会では昭和25（1950）年４月に「アイヌの熊まつり」を戦後初のイベントとして実施、同年夏には、それまで地元の少比古那神社の納涼祭であったものを、第１回の「温泉まつり」として大規模化し、夏恒例の観光イベントとした。「温泉まつり」は、昭和40（1965）年より「万葉まつり」、昭和47（1972）年より「かいかい祭」と発展、現在は「よさこい祭り」として、内容は異なるものの、大きな夏祭りとして継承されている。また、昭和40（1965）年には、「さぎの湯」を改装、総湯に加え、「温泉センター」を新たに建設している（温泉センターは、入湯施設に加えて演芸場などを整備したヘルスセンター的な施設。平成８（1996）年に閉館）[271]。



昭和29年設立の初代「さぎの湯」
※和倉温泉観光交流センター展示資料



昭和40年設立の「温泉センター」
※和倉温泉観光交流センター展示資料

こうした旅館自体の整備や各種プロモーションの結果、日本の高度経済成長期が終わる1970年代までには、海岸線沿いにオーシャンビューを楽しめる高層の旅館が並び、貸切バスが引切りなしに団体客を送り届けるという今に続く和倉温泉の姿が確立される。これに伴い、源泉への需要も拡大、和倉温泉合資会社は、昭和30年代以降、新規源泉の掘削を積極的に進めることになる。掘削年度を見ると、１号源泉と２号源泉が昭和29（1954）年、３号が昭和32（1957）年、４号が昭和34（1959）年、５号が昭和38（1963）年、６号が昭和40（1965）年、７号が昭和47（1972）年、８号が昭和49（1974）年、９号が昭和50（1975）年、10号が昭和52(1977)年となっており、高度経済成長期矢継ぎ早に源泉が掘削されたことがわかる。なお、このうち現在まで稼働しているのは５、８、10号の三つであり、後は廃棄もしくは休止となっている（掘削時から十分な湯量が得られず、利用されていない源泉も含まれる）[272]。

271 温泉センターについては、和倉温泉総湯ホームページ「あゆみ」https://www.wakura.co.jp/history.html（令和7年1月28日最終確認）を参照。

272 戦後の掘削については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成13年を参照。

この際、もう一つ重要であったのが上水の確保である。それまで合資会社が水道事業を実施していたが、設備も古く、時間給水となっていた。その後、七尾市が和倉の水道事業に乗り出し、まず昭和 37（1962）年に簡易水道を整備、さらに昭和 48（1973）年、手取川に水源を確保し、本格的な上水道の供給を始めた。温泉は豊富に出るものの、水資源に乏しかった和倉温泉は、これにより大規模温泉街としての発展の基盤を築くことができた[273]。

和倉温泉の成長は、高度経済成長が終焉し、観光旅行の趨勢が団体旅行から個人・家族旅行へと次第に変化していく 1970 年代後半以降もそのまま続いており、入浴客数の推移でみると、昭和 50（1975）年 714,208 人、昭和 55（1980）年には百万人突破の 1,098,957 人となっている。その後一旦停滞するものの、昭和 60 年代にバブル景気が始まると再び拡大を始め、平成２（1990）年には 1,470,000 人と 150 万人近くにまで入浴客数を伸ばしている[274]。また、こうした拡大に合わせ、平成３（1991）年に 11 号源泉、平成４（1992）年に 12 号源泉と 13 号源泉が掘削された。この４本のうち十分な湧出量を確保できたのは 13 号源泉のみで、令和７年現在の和倉温泉では、５、８、10、13 号の４源泉を混合して使用している[275]。

高度経済成長期以降も和倉温泉がこうした順調な拡大を続けられた要因としては、そもそも過度に歓楽的な性格ではなく芸者などを主な売りにしていなかったこと、その分、北陸の味覚や旅館のおもてなしなど、女性客を惹き付ける魅力が大きかったことが指摘される。また、新たな魅力の創造として、文化的なイベントも始めている。平成元（1989）年からは、モントレー・ジャズ・フェスティバル・イン・能登が、同年に完成した和倉温泉シーサイドパーク（ステージやウォータースライダーなどがある屋外淡水プール施設）を舞台に、年１回開催するようになった。同フェスティバルは、世界三大ジャス・フェスティバルの一つと言われる 1958 年よりカリフォルニア州モントレーで開催されているモントレー・ジャズ・フェスティバルの名前の使用が本家以外で許されている唯一のフェスで、国内外の数多くの有名ミュージシャンがジャズの競演を繰り広げてきた（フェスの会場は、平成 16（2004）年より七尾市街の七尾マリンパークに移転、和倉温泉シーサイドパークは平成 29（2017）年に閉園）。

だが、バブルの崩壊とともに、こうした和倉温泉の繁栄も陰りを見せていくことになる。和倉温泉の宿泊客数の推移をみると、昭和 58（1983）年の 997,708 人から平成３（1991）年の 1,483,192 人まで順調な拡大を見せた後に減少傾向に入り、平成 14（2002）年には NHK 大河ドラマ「利家とまつ」放映によって 1,161,795 人と、６年ぶりに年間 110 万人を超えたものの、翌年の平成 15 年には、958,991 人と、昭和 60（1985）年以降続いてた年間宿泊数 100 万人をついに割り込むことになる。加えて平成 18（2007）年３月 25 日には能登半島地震が発生、和倉温泉も旅館 29 軒のうち 22 軒が給湯管の破損などで休業を余儀なくされた。22 軒の

273 水道については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

274 入湯者数の数値については、和倉温泉旅館協同組合「和倉温泉旅館共同組合創立 100 周年記念　和倉温泉長期ビジョン　＜おかげさまの心を 21 世紀へ＞」平成３年９月を参照。

275 平成の掘削については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

うち 17 軒は一週間程度で再開したが、全旅館の再開までには一ヶ月程度掛かっている[276]。結果、この年の宿泊客数は 779,949 人と 80 万人を下回った[277]。

和倉温泉の不幸はこれだけに止まらない。平成 23（2011）年には東日本大震災の影響を受け、前年に 824,968 人にまで戻っていた宿泊客数が同年には 801,225 人にまで減少、その後平成 26（2014）年まで宿泊客数が年間 70 万人台に低迷することとなる。

こうした中、和倉温泉では、温泉地としての魅力を向上させるため、平成の半ばから様々な対策を実施してきている。ひとつは和の情緒を感じさせる景観の整備で、平成 23（2011）年に第七代となる総湯を木の素材を活かした和風の建築で整備、ここには和倉温泉の歴史を学ぶことができる温泉観光交流センターや足湯も付随している。同年には和倉温泉駅も改装され、平成 26（2014）年には七尾市和倉地区景観協定も結ばれた[278]。回遊強化の施策としては、和倉温泉の主要な観光名所を巡る「七福神福々めぐり」も始められた。これは、弁天島の弁財天に因み、各名所に七福神の石像を設置、観光客がそこを回ってスタンプを集めると、泊まっている旅館でちょっとしたプレゼントがもらえるというキャンペーンである。



総湯。左手に見えるのは足湯だが地震で破損


総湯の中にある温泉観光交流センター



七福神福々巡りの看板


「湯元の広場」の恵比寿


信行寺の福禄寿


青林寺の布袋

276 能登半島地震の被害については、東京読売新聞「能登半島地震　加賀屋に浴槽付きバス　置き薬協会「石原裕次郎号」を寄贈＝石川」平成 18 年 4 月 6 日、日本経済新聞「能登半島地震きょう 1 ヵ月――地場産業・観光、打撃なお、旅館の予約も伸びず。」平成 18 年 4 月 25 日を参照。

277 年間宿泊者数の推移については、七尾市総務部企画課「七尾市統計書」七尾市の各年版を参照。

278 景観協定については、七尾市ホームページ「七尾市和倉地区景観協定」
https://www.city.nanao.lg.jp/toshikenchiku/kurashi/sumai/machizukuri/keikankyoteininka.html（令和 7 年 1 月 29 日最終確認）を参照。

街廻りについては、有料ガイドのツアー「わくら湯ばんとガイド」も開発された。また、女性に強いという和倉温泉の強みをさらに強く打ち出すため、2000 年代から、観光協会のホームページやパンフレットでの女性訴求も強化している。こうした整備や施策の効果もあり、平成 27（2015）年の北陸新幹線の金沢までの延伸に際しては年間宿泊者数が 895,148 人にまで伸長している。

その他の動きとしては、各旅館の高付加価値化があり、客単価の向上に向けての改装などが順次行われていた。また、旅館が大きくなった分、地域が小さくなってしまったという問題意識から、景観整備だけでなく、泊食分離で宿泊客に旅館の外に出てもらう素泊まり型のプランも一部で始まっていた。これにより、令和元（2019）年には、人手不足の中で稼働率を上げることができ（全ての宿泊客に二食を提供するだけの人手がなかなか集まらなくなっていた）収益性の向上にも繋がっていた。加えて、インバウンド観光への本格対応も準備されつつあった。

しかし、こうした和倉温泉の活性化の動きも、令和２（2020）年以降激しくなった新型コロナウイルス感染症の影響により中断することになる。さらに令和５（2023）年５月５日には令和５年奥能登地震が発生、七尾市は震度４の揺れに終わったものの、珠洲市では震度６強を記録して大きな被害が発生、激甚災害法の指定が行われるに至った。そして、令和６（2024）年１月１日午後４時 10 分、和倉は自らも震度６強の地震に襲われることとなる。

令和６年能登半島地震[279]

令和６（2024）年元旦、和倉温泉の各旅館はどこも満員の宿泊客を迎えていた。そこを襲った震災であるが、幸いなことに人的な被害はほぼなく、津波警報も出る中、各旅館はまずは宿泊客の避難に追われることとなる。だが、避難所となった学校や公民館などは、どこも満員となり、水道も止まってしまっていた。そのため、宿泊客によっては旅館に戻って自分の車での車中泊を選択する人もいたという。各旅館では、避難誘導の後も、寝具や食料の提供、炊き出しをするなど、高台にある避難所に何度も通って宿泊客のケアを続けた。宿泊客の荷物も届けねばならず、客室から荷物を出す際には開かなくなったドアを蹴破ることもあった。

不安な夜が明け、次は宿泊客を無事に返さなければならない。和倉への主要動線となっている「のと里山街道」が分断され、勿論、鉄道の七尾線も止まっている中、どの道が使えるかの確認が重要だった。宿泊客の車が通れる経路を確認し、自家用車で来られている方は自家用車で帰宅していただき、そうでない方にはバスを仕立てたり、旅館の車を使ったりして交通が生きているところまで送り届ける。まずは宿泊客の安全な帰還が第一であった。

宿泊客を帰し、そして従業員の安全と生活を担保する。そこから復旧が開始される。まず復

279 この項は現地調査ヒアリングを参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

旧したのが源泉である。１月 16 日、源泉から湯が湧出していることが確認された[280]。幸いなことに、震度６を超える大地震があったにも関わらず、源泉への大きな影響はなかったのである。各旅館への配管の確認が始まり、再び旅館で湯が使えるようになったのは１月 31 日となっており、水道よりも早く温泉が開通している[281]。ちなみに総湯の復活は３月 26 日である[282]。

続いて交通基盤の復旧が始まる。高岡・氷見からの長距離バスが再開したのが２月 10 日[283]、七尾線が復活して和倉温泉駅まで復旧したのが２月 15 日[284]である。一方、水道についてはなかなか復旧せず、和倉温泉の水道管復旧は４月１日を待つことになった[285]。

だが、温泉やインフラの復旧がそのまま各旅館の再開に繋がるわけではない。最初の旅館が再開したのは５月だが、その後の再開はなかなか進まず、令和７（2025）年１月現在に至るも、和倉温泉の旅館 21 軒のうち営業再開にこぎ着けたのは僅か４軒、令和７年中に復旧予定の旅館を含めても７軒程度に止まる。温泉街全体の復旧は、現時点（令和７年１月）の想定では、令和９（2027）年の春頃になる可能性が高いという。これだけ復旧に時間が掛かっている背景には、和倉温泉特有の事情がある。

先に触れたように、和倉温泉の源泉はそもそも海中に湧出しており、それを湯島として造成したところから温泉利用が始まっている。そのため、現在の和倉温泉の旅館の多くが建つ土地、特に和倉ならではの湾に向かってのオーシャンビューが楽しめる海岸線は、基本的に、埋め立てで造成されている。結果、地盤が弱く、建物自体は地震に耐えていても、地下部分や基礎の部分に大きな影響が出た旅館が多かった。逆に早期に再開できた旅館４軒のうち３軒は、海岸沿いではなく、内陸に立地している。

地盤とともにもう一つ極めて大きな問題となったのが護岸である。和倉温泉の護岸は、明治からの古い石積みのものも多く、しかも、民有地と公有地が入り交じる複雑な土地となっている。今回の地震では、この護岸部分に大きな被害が発生しており、旅館によっては、護岸に穴が開いたため、温泉の濾過システムや建物の機械室が集まる地下部分全てが浸水してしまったところもある。先に述べた基礎部分の被害や護岸からの浸水の結果、建物自体は一見大きな被害を受けていないように見えても、実際には解体しての立て直しが必要となってい

---

280 源泉については、北國新聞「＜１．１大震災＞　湧き出る源泉を和倉温泉で確認　「第一歩」も再開は見通せず」令和６年１月 17 日参照。

281 配管の点検については、北國新聞「＜１．１大震災＞　和倉温泉で配管点検を開始　３月中の旅館供給目指す」令和６年１月 31 日、初めて旅館（宝仙閣）で湯が使えるようになったことについては、北國新聞「和倉、温泉出た！宝仙閣、震災後初めて　湯の町復活に一歩」令和６年２月１日、参照。

282 総湯については、北國新聞「和倉温泉総湯、営業を再開　常連客続々「やっぱり一番」」令和６年３月 26 日参照。

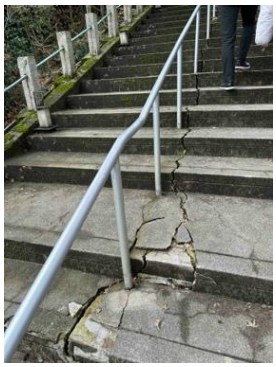
283 バスについては、北國新聞「＜１．１大震災＞　わくライナー運行再開　高岡、氷見－和倉の特急バス」令和６年２月 11 日参照。

284 鉄道については、北國新聞「＜１．１大震災＞　線路ＯＫ、１５日開通　七尾―和倉温泉」令和６年２月 15 日参照。

285 水道については、富山新聞「＜１．１大震災・９３日目＞　和倉温泉全域、３カ月ぶりに通水　配管の修繕可能に」令和６年４月２日を参照。

る施設が多い。しかも、土木・建築の分野の人手不足は広がるばかりであり、費用も高騰、先の見通しが非常に付けにくい状況となっている。ただし、幸い、護岸については、国が民有地を含めて復旧工事をすることとなり、令和８（2026）年完成を目指して工事が進んでいる[286]。





地震から１年経つが、道路の凸凹や階段のひび割れなど建物だけでなく街全体にもそこここに爪痕が残っている（左海岸近くの道路、右青林寺の石段）。



護岸は大きく割れており、土嚢を積んで海水を防いでいる。

和倉温泉の中長期の復興については、令和６（2024）年６月に「和倉温泉創造的復興まちづくり推進協議会」が、旅館経営者など地元の若者を中心に立ち上げられ、令和７（2025）年１月現在、同年３月の復興プラン案公開に向けて、討議が進められている状況にある。既に暫定的なビジョンは公開されており、「能登の里山里海を『めぐるちから』に。和倉温泉」をコンセプトに、下記の６つの基本方針が立てられている。

基本方針 01　景観：歩きたくなる動線や空間をつくる。

基本方針 02　生業：多様で洗練された湯治を提案する。

基本方針 03　共有：循環経済の温泉地モデルを実現する。

基本方針 04　連携：能登の里山里海の交流拠点となる。

基本方針 05　生活：温泉文化を未来につなぐ。

基本方針 06　安全：安全安心の防災を強化する。

令和６（2024）年は、こうしたたたき台を下に、和倉の子どもたちを含めた住民との集会（「和倉トーク」）が６回開催されており、和倉に住まう人々一人一人の意見を吸い上げながら未来に向けての合意形成が進みつつある。

令和７（2025）年１月 28 日、長年に亘って和倉温泉の繁栄を象徴する宿泊施設であった加賀屋の本館３棟については宿泊施設としての再建を断念するとの発表があった。既に取り壊され、更地となった旅館も複数ある。第二次世界大戦後、急激な成長を遂げた和倉温泉は、大きな転機を迎えている。かつてのような大量集客が望みにくい状況で、どのように付加価値を作り、収益の維持をしていくか。少子高齢化による人口減少が免れない国内観光客をどのようにインバウンド客で補填していくか。旅館単位ではなく、地域全体での魅力づくりをどう行っていくか。地震の復旧とともに、新たな和倉の未来づくりに向けての模索が進んでい

286　護岸工事については、北國新聞「＜１．１大震災＞　和倉の護岸復旧へ着工　海側から作業、建物修繕と並行　２０２６年度完成へ」令和６年 12 月 21 日を参照。

る。

和倉温泉の湯の管理[287]

＜源泉と集中管理＞

先も触れたように、和倉温泉では、和倉温泉合資会社が全ての源泉を所有・管理し、各温泉に配湯する集中管理システムを取っている。合資会社では総湯も所有・管理しているが、配湯については、総湯より各旅館の内湯を優先すると定められており、地震の際も、源泉の確認後は、まず各旅館への配管の確認から業務を開始している。

和倉温泉では、もともと海中に湧いていた源泉と戦前に掘削された源泉２本は既に供用されておらず、戦後に掘削された 13 本の源泉のうち、５号、８号、10 号、13 号源泉を利用し、混合して配湯している。なお、泉質は、全てナトリウム･カルシウム-塩化物泉（高張性弱アルカリ性高温泉）である。

１～13 号源泉のうち、現在利用していない源泉については、枯渇したものもあるが、休止しているだけのもの、60 度程度で和倉の源泉としては低温であったためそもそも使用しなかったものもある。また、７号源泉については、和倉温泉の湯としては成分が薄いという理由で、使用していない。和倉の源泉の水源は、半分が古来からの化石水、もう半分が海水で、それが地下の軽石状の無数の穴のあいた花崗岩槽で熱されていると考えられている。

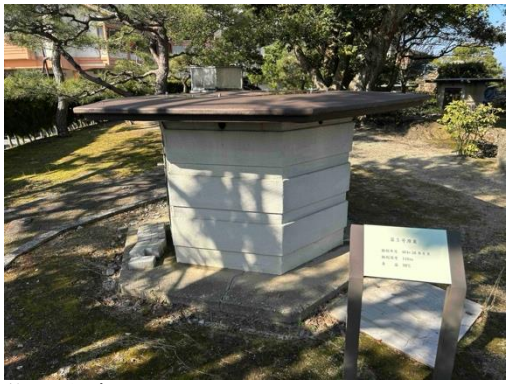
現在供用している各源泉（全て動力泉）は下記の通りである。

５号源泉
　掘削時期：昭和 38（1963）年　　泉温：95.8 度（測定時気温 32.0 度）　pH ：6.9
　湧出量：1,000 リットル／分
８号源泉
　掘削時期：平成３（1991）年　　泉温：85.0 度（測定時気温 18.8 度）　pH ：7.82
　湧出量：402 リットル／分
10 号源泉
　掘削時期：平成３（1991）年　　泉温：91.4 度（測定時気温 18.8 度）　pH ：7.42
　湧出量：563 リットル／分
13 号源泉
　掘削時期：平成４（1992）年　　泉温：88.9 度（測定時気温 14.5 度）　pH ：7.72
　湧出量：672 リットル／分

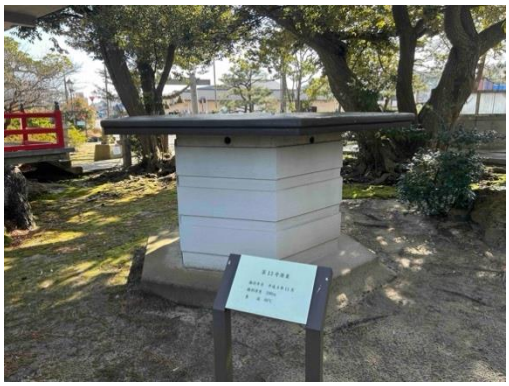
287　この項は現地調査ヒアリング及び現地資料を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。



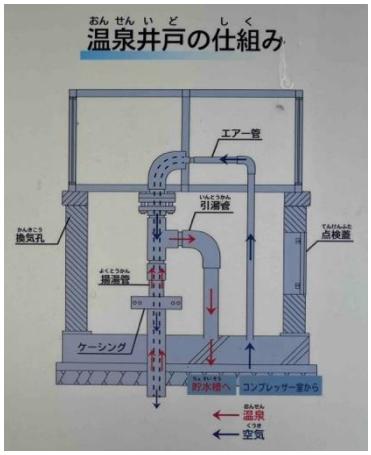
弁天崎源泉公園地図。赤い印が源泉でそこから中央四角の集中管理システムに引き湯されている。


第５号源泉


第 10 号源泉


第 13 号源泉

各源泉は弁天崎公園付近（５、10、13 号源泉は公園内、８号源泉は公園のすぐ外）にあり、公園内にある集中管理用の設備に源泉から引き湯されている。源泉からの揚程は、通常のポンプを使っているとすぐに壊れてしまうため、圧縮空気を送り込むエアリフトで実施している。



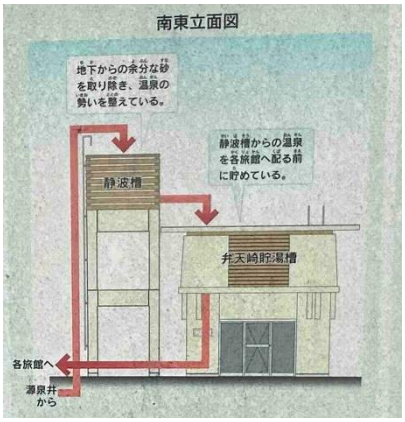
エアリフトをして揚程する仕組み


揚湯管と引湯管（現在使用休止中の６号源泉のもの）

引き湯された源泉は、まず、「静波槽」と呼ばれる高い場所にあるタンクに揚程し、そこで余分な砂やパイプから出た錆などを沈殿させて除去し、その後、「弁天崎貯湯槽」に下ろし、そこから各旅館に分湯している。温泉資源の維持のため、源泉からの配湯量は、汲み上げが可能な量の５～６割に抑えている。



集中管理装置



集中管理装置の簡易図面

沈砂層や貯湯槽の材質は FRP で、配湯用のパイプは富士保温パイプが使われている。富士パイプに変え始めたのは 40 年程前で、当時利用していた６号源泉の配管に使用してみたところ、スケールが殆ど溜まらなかったため、採用した。ただし、エアリフトの管は、径が細いため、富士パイプでもスケールが詰まり易い。そのため、源泉のうち２本については、単価の安い鉄管を清掃、年１回交換しながら使っている。なお、鉄管については、そのまま使用すると一ヶ月もしないうちに穴が開いてしまうため、和倉では、亜鉛メッキを施してから使用している。継ぎ手の部分が弱くなりがちなので、継ぎ手を繋いでから再度メッキを掛けている。蛇口などは合金を使用している。

各旅館への配湯用配管は、道路下に埋設されており、埋設されている道路は他に比べて暖かくなっている（和倉では積雪が少ないが、積雪した時には、配管のある道路から溶けていく）。かつて配管は貯湯槽から各旅館一つ一つに直接繋げる「たこ足」型であったが、現在では、共同管を作り、そこから分岐する形式に変更している。また、富士パイプの使用前は、配管を代えやすいよう浅い場所に埋設していたが、スケールが溜まりにくい富士パイプにしてからは交換の必要が殆どなくなったため深い場所への埋設に変えている。

＜旅館、総湯での利用＞

各旅館の内湯や総湯へは、90 度近い温度が保たれたまま混合泉が配湯されている。高温の湯の利用方法としては大きく二つある。一つは大浴場など豊富な湯量が必要な場合の利用方法で、上水での加水を行って温度を下げてから、循環濾過を行っている。もう一つは源泉そのままの利用である。なお、江戸時代、島で入湯していた時には、海水を入れて冷まして入っていたと伝えられている。

和倉温泉の源泉は、極めて塩分濃度が高いため、そのまま利用すると肌にきつく感じる入湯客がいる反面、地元の利用客を中心に、加水では「薄い」と感じる入湯客もいる。これに対応するため、旅館の小規模な浴槽や個室用の風呂では、源泉を少量ずつ流し、湯船で冷まして適温にしていく源泉掛け流しでの給湯が行われている。また、総湯では、使う湯量が多いため、熱交換器を利用して温度を下げている。総湯では、循環濾過を行っているが、一日一回全ての湯を取り替え、できるだけ源泉に近いそのままの状況を楽しめるようにしている。なお、熱交換をする前の総湯では、浴槽を二つ用意し、交互に湯を入れ替えて利用していた（片方を利用している間、もう片方の浴槽で源泉を適温まで冷ましていた）。

旅館等で揚程に使用しているポンプについては、塩分濃度が高いため、かなりの頻度で修理、交換が必要となっている。

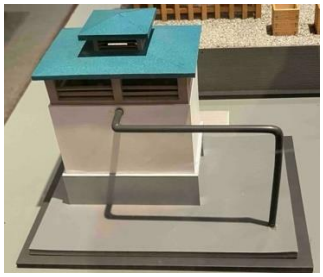
＜湯の管理技術の変遷[288]＞

明治初期までは、自然湧出している源泉から、「ツブレ」と呼ばれる長い棒の先に桶を付けたもので湯を汲み、手桶に移して天秤棒で担いで各旅館の内湯まで運んでいた。その後、各旅館で「自家井戸（地下の貯湯槽）」を作り、源泉が湧出している井戸から自然流下で自家井戸まで木樋で引き湯し、自家井戸から長柄杓で湯を汲み上げて使用するようになった。大正３～４年には鉄製のポンプが普及し、自家井戸からポンプで揚程し、そこから竹樋で各浴槽に給湯することも始められた。

現在に繋がる集中管理が始まったのは大正 12（1923）年頃となる。掘削により高さ３m 以上に自噴した新規源泉を木製の胴体で囲み、脇に木製の高床式のタンクを造ってそこに引き湯し、高さ２m のところから亜鉛引きの鉄管で 16 軒の旅館に配湯を行った。高床式の貯湯槽については、その後、木製からコンクリート製、さらに現在の FRP 製へと変更されている。



大正時代の最初の集中管理装置。
右下の高い塔が源泉を囲ったもので、奥が高床式の貯湯槽。
左にあるのは後から配湯対象になった２軒の旅館に分湯するための貯湯槽。
※温泉観光交流センター展示資料







左上が昭和 29 年、上が昭和 39 年、左が昭和 51 年建設の貯湯槽
※温泉観光交流センター展示資料

288 この項については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

配管用のパイプについても、スケールが溜まりにくく、耐久性の高い素材へと逐次変更されており、当初の木管や鉄管から、バーモライト（雲母の一種）製パイプ、高圧石綿石層管、化学合成素材の東洋パイプを経て現在の富士保温パイプとなっている。また、パイプのバルブについては、当初の木製ノッチから、一般のパイプ用バルブを経て、現在では、PVD ボールバルブへと変更されている。ボールバルブとは、孔の開いた球（ボール）を弁として使用するバルブで、孔の向きを管路に合わせれば流体が通りぬけて、くるっと向きを変えれば流体を止めることができる。PVD とは、バルブ表面へのメッキ手法の一つ（物理蒸着）である。



最初に使われた木管と次に使われた亜鉛引き鉄管。
※温泉観光交流センター展示資料



右から、高圧石綿石層管、バーモライト、高圧石綿石層管、東洋パイプ、富士パイプ。※温泉観光交流センター展示資料



バルブの変遷。右から３つは板状の弁で開け閉めをするスルースバルブ（ゲートバルブとも言う）で、右に行くほど古い、左端は現在の PDP ボールバルブ。
※温泉観光交流センター展示資料



下にある円盤は、旅館に引き湯するパイプの径を示している。10.5㎜で一日 300 石、12㎜で 400 石、25㎜で 600 石の契約となる。一石はおおよそ 180 リットル。※温泉観光交流センター展示資料

＜令和６年能登半島地震の影響＞

今回の地震で源泉自体の湧出には大きな影響は出なかったが、護岸の破損により、海水の浸入が心配される状況である。５号源泉については、現在 80 度程度まで温度が下がっているが、これは古いケーシングから海水が浸入したためと考えられる。海水が多く入ると、泉温低下だけでなく、飲泉ができなくなるリスクがある。上記の懸念を踏まえ、８号、10 号、13 号源泉については、かなり下の方までコンクリートを入れて海水が入らないように修理を行った。

また、今回の地震で旅館への配管工事を行って一部を交換しているが、富士パイプにしてから 30 年程度経っていたものについては、径の半分程度がスケールで詰まっていたことがその際判明している。

和倉温泉における「おもてなし」[289]

令和 6 年能登半島地震において、最初に発揮されたのは、和倉温泉各旅館の顧客への対応力であった。大きな揺れが起こった時、避難所で不安な夜を過ごした時、翌日、それぞれのお客様が帰路につく時、各旅館の従業員は、自らも被災者であるにも関わらず、精一杯の努力を続けた。普段の華やかな時とは異なる、しかし、お客様に寄り添うという点では、もっとも重要で、基本的なおもてなしの姿がそこにあった。

こうした和倉温泉の「おもてなし」を代表する宿として加賀屋グループがある。加賀屋では、令和６年能登半島地震の発生まで、和倉温泉で、「加賀屋」(「能登客殿」、「能登本陣」、「能登渚亭」、「雪月花」の４棟の計 232 室）、「虹と海」（49 室）、「あえの風」（106 室）、松之碧（29 室）の４軒を経営する他、金沢の料理茶屋「金沢茶屋」をはじめ全国にレストランやカフェを展開、石川県発の料理や食材などを広く発信してきた。

加賀屋の歴史は、明治 39（1906）年、加賀の津幡（つばた）で農業をやっていた小田與吉郎が、ほぼ営業停止状態であった和倉温泉の旅館の一つを買い取ったことから始まる。和倉温泉では 16 軒目と後発のスタートであり、当初は 12 室、昭和初期になっても 20 室と、比較的小規模であった。現在に繋がる発展を見せるようになったのは、第二次世界大戦後である。

戦時中、和倉の旅館の多くが傷病兵の療養所への転用されていく中、加賀屋は、陸軍将校向けの特別利用施設に指定されたことから、一般客への対応も可能な旅館として細々ながら営業を継続することができた。このため、終戦後、進駐軍が来た時も、加賀屋は、進駐軍将校の宿泊施設としてそのまま利用されている。こうした経緯から、いち早く復興の流れに乗ることができた加賀屋は、その後、昭和 25（1950）年には呼帆荘、昭和 32（1957）年には龍宮閣を建築するなど、施設面でも拡充を進めている。この中で、加賀屋は、二代目女将の小田孝さんを中心にサービス面、温泉旅館らしい「おもてなし」についても発展を進めていった。

起点となったのは、進駐軍の接待において石川県知事自らがひとりひとりにお酌をしている姿を見たことだという。この姿に衝撃を受けたことが、どんなにお客さんの数が増えても、部屋を訪れて個別に挨拶し、食事の際はお酌をするという今に至る加賀屋のおもてなしの流儀を作っていくことに繋がった。また、昭和 30 年代初頭には、金沢駅までおしぼりを持って迎えに行くなどのサービスも実施している。収益を度外視してでもお客さまの望みに応じ、それにより、お客さまがお客さまを呼び込むだけの評判を作っていく。加賀屋のおもてなしを軸としたビジネスの確立である。

もう一つ重要であったのが、接客の主役となる女性従業員の育成である。「女中さんは宝」を信条として、それぞれの従業員の資質や気持ちに添った教育をすることに加え、新橋で芸者をしていた人が故郷の田鶴浜（たつるはま）に帰り、加賀屋に入ったことから、彼女を女中頭として登用、

289　この項は現地調査ヒアリング、小田真弓「加賀屋　笑顔で気働き　女性が育んだ『おもてなし』の神髄」日本経済新聞出版社　平成 25 年９月、加賀屋ホームページ「おもてなし」
https://www.kagaya.co.jp/omotenashi/appeal.php（令和７年２月６日最終確認）を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

加賀屋で接遇に当たる女性従業員に、着物の着方から所作から言葉遣いに至るまで、一流の接遇を教え込んだ。これにより、高級料亭の接遇のわざ、文化が導入されてくこととなった。

エポックとして、龍宮閣建設の翌昭和 33（1958）年、昭和天皇・皇后両陛下の能登ご視察に当たって宿泊を賜ったことも大きい。この際には、竜宮閣に総檜造りの浴場を設けるとともに、食器については、輪島漆器は人間国宝前大峰（まえたいほう）氏に、九谷焼は芸術院会員の浅蔵五十吉（あさくらいそきち）氏に依頼するなど、石川県を代表する工芸品を使用した。この際、二代目の主人自らがモーニングを着て三助を務め、湯加減を常に適温に保つとともに、浴室の清掃まで自らが行うなど、気配りを徹底している。

こうした「おもてなし」やその舞台としての施設拡充の伝統はその後も代々受け継がれている。施設については、昭和 56（1981）年に建設された「能登渚亭」で、12 階という高層建築に挑むとともに、いちはやく女性をメインターゲットに据え、若手建築家を登用し、内装は数寄屋造りの純和風、輪島塗や九谷焼、加賀友禅といった石川県の工芸品を並べるなど、ハレの空間に相応しい和の情緒あふれる室内空間を提供した。また、平成元（1989）年にオープンした「雪月花」では、アメリカでのホテルの視察を踏まえ、和風のテイストを維持しつつ、大規模な吹き抜け空間、ガラス張りのエレベーター、コンベンションホールなど国際的な最新のホテル建築の手法や設備を取り入れている。

女性従業員の育成については、「従業員は家族」という考えの下、丁寧な人事管理や人材育成を継続するとともに、能登渚亭、雪月花のそれぞれのオープンの際には、客室係において最も重労働であった各室への配膳について、調理室から各階のパントリーまで料理を自動で運ぶシステムを導入、体への負担が極めて大きかった配膳の労力を大きく削減している（加賀屋では食事は部屋出しが基本のため、ひとつひとつ配膳する必要がある）。また、昭和 56（1981）年には企業内保育園「カンガルーハウス」を設立、女性従業員が安心して働ける環境を整えた。平成 19（2007）年に地震で１ヶ月休業した時には、その間を利用して積極的に社員の出張研修を行うなど、危機を次の成長に繋げる施策も実施している。

石川の文物・文化の活用も発展を続けている。能登渚亭に続き、雪月花も、石川県の工芸品・美術品が館内に溢れるまるで美術館のような設えとなった。平成 17（2005）年には、輪島の漆工芸家、角偉三郎（かどいさぶろう）の美術館（加賀屋別邸「松乃碧」内）も開館した。こうした文化の活用は伝統的なものだけではない。平成 18（2006）年には、石川県七尾市出身の著名パティシエ辻口博啓（つじぐちひろのぶ）氏の協力を得て、北陸の食材をふんだんに使ったスイーツ店「辻口博啓美術館 ルミュゼ ドゥ アッシュ」を開業させ、その後店舗展開を行っている。

加賀屋では、バブル崩壊後も、コストカットに走らず、こうした高品質なおもてなしを続けることを選択した。この中で、平成７（1995）年から台湾企業の報償旅行の受け入れも始めている。台湾のお客さまへの加賀屋流のおもてなしは高く評価され、李登輝元総統の加賀屋宿泊とその後の加賀屋との交流にも繋がった。こうした流れを受け、平成 22（2010）年に台湾の北投温泉（ペイトウ ウェンチュエン）で開業したのが「日勝生加賀屋」である。台湾の不動産企業である日勝生活科技グループからの協業の申出で始まった台湾進出は、同グループからの「日本の加賀屋のサ

ービスをそのまま持ってきて欲しい」という要望を受け、加賀屋そのままのおもてなしを展開している。従業員育成も、日本語が話せる人を集め、日本語で加賀屋のサービス方針を唱和して育成、着物を着て、正座し、日本語でお客様に挨拶をしている。また、お出しする料理も、石川県を中心に北陸から直送した食材を使ったものとなっている。「日勝生加賀屋」は、そうした日本そのまま、加賀屋そのままのおもてなしで、台湾現地で大きな成功を集め、新型コロナウイルス感染症が蔓延した時期には、日本に観光旅行に行けない代わりということで、かえって過去最大の集客を記録することになった。

ここに襲ってきたのが令和６年能登半島地震である。元旦のハレの日を加賀屋で過ごそうと来られていた 1,000 人以上の宿泊客は、幸いなことに、怪我もなく、エレベーターに閉じ込められることもなかった。また、従業員の必死の努力により、避難所への誘導やその後の炊き出しや寝具などのお世話、そして翌日の道路の状況を調べながらのバス手配を含む帰路へのお手伝いもこなしきった。しかし、施設の被害は甚大であった。

加賀屋本館の４つの棟の躯体自体には大きな被害はなく、雪月花の吹き抜けのエレベーターやガラス張りの手すり、舞台もそのままで、実質的には各棟を繋ぐ接合部分が損傷を受けるに止まった。だが、問題は護岸であった。加賀屋本館の立地する海岸線の護岸は埋め立てが古く、石積みで作られていた。それが大きく破壊され、そこから地下全面に海水が入ってしまったのである。機械室、温泉の循環濾過システム、バーなどの一部施設など、地下にあった全てが完全に水没、復旧の大きな妨げとなった。結局、加賀屋では、既存の本館の再建を諦め、本館と「松乃碧」の二つの建物を公費解体、令和９（2027）年度末に、「松乃碧」跡地と隣接地を合わせた土地に新たに地上５階建て 40 室程度の施設を建設するとともに、「あえの風」、「虹と海」については既存の建築物を利用した再開を目指すこととなった[290]。

地震により、加賀屋は雌伏の時期を迎えることになった。和倉温泉の４施設、全館閉鎖という厳しい状況ではあるが、おもてなしの更なる進化に向けての模索も続けられている。例えば椅子の使用をどうするかという課題がある。この頃、若い人を中心に、椅子の方がくつろげるため、客間ではなく広縁で長い時間を過ごす人が増えているという。布団を敷いて寝るのではリラックスできないという声もある。こうしたライフスタイルの変化やインバウンド客などそもそも生活習慣が異なるお客様への対応をするためにはどのように設備を変えていけばいいか新たな課題が生まれている。

サービスも同様である。加賀屋では食事は部屋出しが基本だが、お膳を変える度に何度も部屋を従業員が出入りするのは止めてほしいとの声が聞かれるようになった。インバウンド客中心に連泊も多くなっており、そうすると料理のバリエーションも増やしていかなければならない。これまで以上の高付加価値を目指しながら、一方で、加賀屋が大事にしてきた県内の企業などの地元のお客様に、これまでと同様に気兼ねなく利用していただくためにはど

290 再建の予定については、2025 年８月１日のプレスリリース「復旧から復興へ 進化から新加へ　加賀屋グループ営業再開について」（https://www.aenokaze.jp/datas/news/pdf/020250801154232_WVDML.pdf）、日本経済新聞電子版「和倉温泉「加賀屋」が既存旅館を公費解体、再建方針転換　地震で被災」令和７年９月１日、北國新聞「加賀屋新館でにぎわい創出　「まちと相乗効果」　隈研吾さんが視察」令和７年８月 17 日朝刊を参照。

うすればいいか、そのあり方も検討の必要がある。加賀屋らしい「ハレ」の気分を味わって頂きつつ、その提供のあり方については、時代に合わせた変化が求められている。

地震により、全館閉鎖となった加賀屋であるが、現在は再開に向け、近年のライフスタイルの変化やインバウンド客の増加に伴う異なる生活慣習への対応のあり方や、石川や日本の文物・文化の発信力のさらなる強化など、次への進化を模索している。例えば、北陸の寿司を牽引する「小松弥助」に金沢茶屋のテナントに入ってもらったり、地震後、長年石川一のステーキの名店として知られていたビーフステーキ専門店「ひよこ」（令和４（2022）年に閉店した）に技術を習うなどを既に開始した。また、お茶など、日本の伝統文化をさらに幅広く取り入れていくかについての研究も進めている。加賀屋のおもてなしは、またひとつ上の段階を目指しているのである。

伝統的な料亭文化も取り入れた高い接遇のわざとそれを支える人材教育・人的資源管理、食文化から美術工芸品に至る和の文化の提供、そしてこうした優れたおもてなしの場となる優れた施設空間の提供。加賀屋のおもてなしの具体内容を見ていくと、こうした要素を列記することができる。これは、全国の温泉旅館における「おもてなし」のあり方のひとつの代表例ともなっている。

＜寺社[291]＞

温泉に関わる神社としては、少比古那神社がある。同社は、「能登名跡志」によれば、近世まで「湯の薬師堂」とされていたが、明治の神仏分離令に伴い、明治 28（1895）年、薬師如来からその垂迹の少比古那に祭神が変更され、名称も変更された。明治 40（1907）年に市杵島神社（弁天島の弁天社。祭神は弁財天と宗像三女神の市杵島姫神が習合している）を合祀している。大同年間（806～809）年に薬師岳の西の湯谷に温泉が湧出したことを神恩として勧請したが、永承３（1048）年湯元が海中に移動したことで現在地に遷座したという縁起がある。



少比古那神社の拝殿



ここにも七福神福々巡りの毘沙門天がある。

昭和 10（1925）年、老朽化した神社の再建のため、社殿を一時裏山に移すとともに、もともとの縁起の地である湯谷に奥の院を建てた。移転した当時の社殿は、昭和 49（1974）年、豪雨により神輿保管庫が破損、神輿も壊れてしまったため、翌昭和 50（1975）年に現在地に新たに建て直されている。同神社では、現在、和倉地区の氏神として、地域の氏子組織主体に、神輿が出御する秋季例大祭を行っているが、温泉に関わる行事ではない。

薬師如来については、弁天崎源泉公園の集中管理装置内に「温泉かけ薬師如来」がある。これは平成９（1997）年に和倉温泉合資会社が建立し、その後も管理を続けている。本尊とされているものについては、海中に温泉が湧いた際に浮かんできた薬師如来像であるとの縁起があり、保存していた家から合資会社が引き取って安置している。

弁天崎源泉公園には弁天社もある。これは、そもそも沖の弁天島にあった神社であるが、弁天島の埋め立てに伴い、明治 40（1907）年に少比古那神社に合祀され、一時社殿がなくなっていた。その後、旧弁天島の地で新たな源泉が掘削されたことを記念し、昭和 39（1964）年に現在地に再建された。

和倉には寺院が二つある。このうち曹洞宗の白厳山青林寺は、明治 25 年頃羽咋市酒井町の古刹永光寺の末寺として、当時永光寺別院として建立、明治 43（1910）年には本堂を建立、薬師如来を奉安、寺号を静岡県より譲り受け青林寺と改称された。先に述べたように、境内地に移築された和倉御便殿本殿の御座所には当時東宮殿下がご利用された鏡台等 10 数点の備品が展示されているが、現在地震のために臨時に設置場所を設けている。もう一つの浄土

291 この項については、大井昭平著、児玉弘毅編「『末代に栄え　末代に伝える』～和倉温泉史」平成 13 年を参照。

真宗大谷派渓雲山信行寺は、もと田鶴浜にあり真言宗法興寺と称していた寺院が、貞享２（1685）年、年に浄土真宗に改宗して信行寺（しんぎょうじ）と改称した。明治 22(1889)年に和倉に移転している。敷地内に和倉御便殿供奉殿の清涼閣が移築されている。また、信行寺には、和倉温泉合資会社の持つ薬師如来像があり、合資会社の法要が行われる際には、信行寺がその薬師如来像を御開帳して行うこととなっている。



弁天社。社殿の右側に七福神福々巡りの弁財天がある。



青林寺。地震の爪痕が残る。



信行寺



信行寺にある法要のための薬師如来と温泉関係者の位牌

＜特産品[292]＞

和倉温泉といえば、能登をはじめとした北陸の海産物や里山の食材、あるいは石川県の工芸品が有名であり、和倉に限った目立った産品があるわけではない。ただし、歴史を振り返ると、明治半ばから昭和 30 年代までは「湯の花」を生産、また、大正時代には、湯の花を使った落雁・飴・餅・羊羹なども売られていた。その他、安価な竹細工や貝細工、和倉で取れた貝の佃煮などもあった。

和倉の名を冠した工芸品としては焼き物があった。明治 31（1898）年から同 33 年の間、和倉陶器合資会社が営まれ、和倉焼きが温泉土産を目的に生産されていた。和倉陶器合資会社は、温泉関係者を含む七尾及び和倉の有志が発起した会社で、灰釉（はいゆう）の壷その他の雑陶を製作していた。また、大正４（1915）年から同 10（1921）年までの７年間、現志賀町の甘田（あまだ）で焼かれていた甘田焼が、「和倉名物甘田焼」として和倉温泉で売られている。製品としては茶碗・湯呑・徳利・鉢・刺身皿などがあった。

温泉を使った料理もある。温泉卵については、和倉温泉の「湯元の広場」にある開湯伝説の白鷺の像がある「涌浦（わくうら）の湯壺」で作ることができる（生卵は近隣の店舗で購入）。塩分濃度の高い温泉のため、やや塩気を感じるでき上がりとなる。また、海水に近い成分があるため豆腐のにがりとしても使用可能で、旅館によっては自家製で温泉にがりの豆腐を出している。



「湯元の広場」の湯壺では、温泉卵を作ることができる。15 分ほどで茹であがる。



茹であがった卵

これまで見てきたように、和倉温泉は、海中に湧いた湯で、島を作り、さらには埋め立てして利用してきた温泉である。今では元の源泉は涸れてしまっているが、現在も、かつて海の中の島であった弁天崎源泉公園に源泉が集中しており、そこから各旅館へと集中管理装置によって配湯されている。江戸期、所口町から派遣された湯番頭に温泉の管理を抑えられていたこともあり、明治になってそれを自らの手に取り戻した地元の人々の温泉への思いは強い。この思いが形となっているのが、和倉の地区の人が合同で出資している和倉温泉合資会社であり、合資会社は、温泉の集中管理だけではなく、和倉のまちづくりそのものにも大きく関与してきた。今も主な温泉関係者は合資会社の社員であり、毎週のように合資会社で会合をしている。こうした結びつきの強さが和倉温泉の一つの大きな特徴であり、バブル崩壊後における地域全体としての新たな魅力作りの基盤ともなってきた。

292 この項は田川捷一「和倉温泉のれきし」能登印刷・出版部　平成４年８月、及び、現地調査ヒアリングを参照。

もう一つ、和倉の対外的な代名詞となっているのが、和倉21軒の旅館のうち４軒を経営し、客室数ではそれ以上のシェアを持つ加賀屋であり、加賀屋のおもてなしである。加賀屋のおもてなしは、徹底した個別対応のサービス提供はもとより、それを支える先進的な施設・設備、接客を主に担う女性従業員の人材育成、おもてなしの文化的な基盤となる石川・北陸・日本の食文化・伝統文化の活用といった複合的な要素に支えられ、国内は勿論のこと、台湾などの海外の顧客にも高く評価されてきた。

令和６年能登半島地震は、こうした和倉温泉の営みに甚大な被害を与えることになった。地震から１年が経った令和７（2025）年１月になっても、再開した旅館は21軒中４軒に過ぎない。幸いなことに源泉への影響は限定的であったが、埋め立て地で脆弱な地盤であること、古い護岸が多いことが、見た目以上の被害を各旅館に与えており、本格的な復興は、現在のところ、令和９（2027）年になってからとされている。

それまでの間、和倉は、次の発展に向けての雌伏を続けることになる。バブル崩壊後、進められてきた地域の魅力づくり、街の回遊力の強化をどう展開していくのか。日本人のライフスタイル変化やインバウンド客の拡大の中、おもてなしをどう進化させていくべきか。能登や石川県全体の繋がりをどう発展させ、地域の文化を深化させていけばいいか。各旅館で、また、合資会社や和倉温泉創造的復興まちづくり推進協議会を舞台に、地域で、様々なプランが検討され、具体化されつつある。和倉の温泉がいかに復興していくか、日本の温泉文化を牽引するものとしてどう復活するのか、その行き先が期待される。

（８）山中温泉

山中温泉は、大聖寺川の渓谷沿いに広がる温泉地で、一帯は鶴仙渓（かくせんけい）という景勝地となっている。江戸期より第二次世界大戦後の高度経済成長期半ばまで、加賀最大の温泉地として大きく発展、現在も総湯「菊の湯」や山中節、山中漆器など、長い歴史を活かした文化的な魅力溢れる温泉地として発展している。

ここではそうした山中温泉の特性と、総湯を中心とした湯の管理の技術を概観する。

山中温泉の歴史[293]

＜近世まで＞

温泉の開湯伝説は行基（ぎょうき）によるものである。文化９（1812）年の「山中温泉縁起絵巻（やまなかおんせんえんぎえまき）」によれば、行基が老僧の教えに従ったところ湯が湧き出した。老僧が夢枕に立ち、薬師如来の化身であったことを明かしたので、その後、医王寺を建立し、薬師尊像を自ら彫って奉納したという。温泉は、承平の乱の頃から荒れ果てたが、建久年間（1190～1199 年）鎌倉幕府の武将、長谷部信連（はせべのぶつら）は白鷺が足を湯に入れているところに出くわした。そこに女性が現れ、自分は薬師如来の化身であり、出湯を再興して欲しいと言われた。信連が湯を再興すると、かつて行基が彫った薬師尊像が見つかったと伝えられている[294]。



山中温泉縁起絵巻、医王寺所蔵。加賀市の指定文化財になっている。

史料上の初見と考えられるのは文明５（1473）年の蓮如（れんにょ）の「御文」で、山中温泉に湯治をした際に書いたと記されている。当時、蓮如は、延暦寺からの迫害を逃れ、越前・加賀の地を新たな拠点とするため、吉崎（現：福井県あわら市）を拠点に各地を回っていた。蓮如が湯治をしたという故事から、山中温泉には「腰掛け石」、「虎斑の名号（とらふのみょうごう）（蓮如の墨跡）」、「せり清水（蓮如が掘らせたという湧き水）」など蓮如の足跡が多数残っている。また、「蓮如上人仰条々」という史料には、蓮如が加賀の山中の湯が痛風にいいと人に勧めたという記載があ

293 この項は、他に脚註がない限り、若林喜三郎編「山中町史」山中町史刊行会　昭和 34 年と西島明正編集「山中町史完結編」平成 18 年３月に基づく。

294 この段落は鈴木堅弘「『山中温泉縁起絵巻』から読み解く霊場と信仰　寺社縁起・温泉霊場・白山信仰」佛教藝術 338 号　平成 27 年１月　P41-P70 を参照。

る。

その後、山中温泉を含む江沼郡一帯は、戦国時代、一向宗（浄土真宗）教団の治める土地となった。しかし、天正３（1556）年織田信長に敗北、越前の領地は柴田勝家に与えられることとなる。この時代、勝家は山中温泉の保全のため制札を出すなどしている。だが、勝家は、天正 11（1583）年、豊臣秀吉に賤ヶ岳の戦い敗北、滅亡してしまう。その後、江沼郡は秀吉配下の武将に与えられるが、慶長５（1600）年の関ヶ原の戦いに際して前田利長に攻め落とされ、利長の領地となった。ここに加賀の前田家支配が始まる。このころから名前が出てくるのが山中の湯を管理する湯本衆で、慶長７（1602）年には既に利長に湯本十軒衆が湯税を納めたという記録が残っている。

利長の領地は、寛永 16（1639）年、三つの藩に分けられ、山中温泉はそのうちの一つ大聖寺藩の治めるところとなった。この間も山中温泉の発展は続いており、延宝６（1678）年の「湯方品々留書」では山中の湯宿が金子５枚を湯税として納めたと記録されている。この金額は加賀ではもっとも多く、また宿屋の数も 50 軒に上っていた。山中村は、湯治客に販売する米・味噌・酢・醤油・豆腐・酒・肴についても税金を払っており、多くの食材が湯治客に販売されていた様が窺える。また、江戸中期には、現在に繋がる山中漆器も、山中温泉で生産され始めている。同時期、山中温泉に隣接する九谷村では古九谷の製造が始まっていた。

正徳５（1715）年に山中温泉で三廻りで計二一日の湯治を行った加賀藩士の記録や同年の「六用集」の絵図をみると、共同浴場（湯ざや／惣湯）が一つあり、その周りを宿屋が囲むように立地していることがわかる。また、湯治に合わせて、医王寺に参詣し、紙漉きや木地挽き方を見学し、楊弓場に赴き、黒谷橋下で釣りをし、などと精力的に街中や周囲を巡っている様子が窺える。帰る際には土産物として高坏や煙草入などの山中漆器も買い求めている。大聖寺藩の藩主の湯治の記録も残り、村を挙げて歓迎している様が記載されている。

「湯方品々留書」の記事によれば、惣湯（湯ざや）が本格的な建屋となったのは元和７（1611）年頃の可能性が高い。元禄 10（1697）年の古地図では、惣湯の周りに 10 軒程度の宿屋が並び、さらにその周りに 30 軒以上の小さな宿が立地していることがわかる[295]。また、先に挙げた正徳期の絵図をみると、江戸中期には既に男女別、身分の上下別となっており、別に瘡の患者のための湯が区分けされていた。明和４（1767）年の湯座屋修復の際の記事では、源泉は湯座屋西側の女湯の下にあり、男女とも上湯・下湯・三番湯に分けて湯壺からカケヒ（懸樋）で湯を導くとある。入り口も男女身分の差に応じて別々となっており、廊下は石づくり、建屋は杉であった。

上述した惣湯を囲繞する町構造は「湯の曲輪」と呼ばれ、宿の経営者、湯持ちは、総湯の管理にも携わっていた。こうした管理の下、地域住民たちは日々自由に惣湯を利用することができた。湯持ちの中の有力者層である十軒衆は、その後十二軒衆に増え、湯持ちの中でも特に多くの湯税を納めていた。村の支配は、十二軒衆から入札によって選出される湯番頭が担

295 元禄期の古地図については、郷土の歴史研究グループ編「郷土史資料」山中町公民館　昭和 29 年８月を参照。

っていた[296]。



享和３（1803）年「（加州江沼郡山中之繪図」医王寺所蔵（左全体、右部分）。男女別の湯ざやの周りに宿が集まって立地していることがわかる。また、左上に医王寺があり、そこに向けての薬師道にも家屋（漆器屋や漆器屋など）が並んでいる。

惣湯の管理人役として湯女が二名湯持ち衆に雇われており、かなりの高給取りであったという。惣湯では、浴衣を置く場所もなかなかなく、置いても紛れてしまうため、１４、５歳までの少女が「ユカタベー（浴衣女と表記）」として各宿から惣湯前に出ており、湯を上がる浴客に浴衣を渡していた。そのため、何枚浴衣を預かっても間違いなく渡す技量がユカタベーには求められた。宿が流行り、担当の入浴客があまりに多い時には、惣湯の前に縄を張って浴衣を下げることもあり、それがその宿の人気を宣伝することにもなっていたと伝えられる。ユカタベーの多くは、16 歳以上になると、そのまま宿の女中となった。女中は、行儀作法見習いとして周辺の農村から勤めに来ることも多く、躾は厳しかったが、給金は低かった。そのため、湯治客は、女中に心付けを渡すことが求められていた。下男もいたが、湯治客の世話以外にさほど雑用があるわけではなく、宿の主人が持つ田畑の手伝いなどをすることが多かったという。山中温泉の宿は、専業はなく、18 世紀前半までは農業との兼業で、それ以降は農業だけでなく漆器業との兼業も多くなった[297]。

湯治客の多くは町人、農民であり、農閑期などの骨休めに利用していた。宿の料金は畳一枚いくらとなっていたが、お金がない客については、畳を上げて筵を引き、筵一枚での商売をした。大きな宿では繁忙期百人を超える客が泊まっており、仕切りもなく、雑魚寝状態となっていた。ちなみに、当時の大旅館「扇屋」（現在、その別荘が「芭蕉の館」という展示施設

296 この段落、福嶋啓人「共同浴場を中心とした温泉町の空間変容過程について　加賀山中温泉を事例として」日本建築学会計画系論文集　第 80 巻　第 711 号　平成 27 年５月　P1223-P1231 を参照。

297 宿の兼業状況については、郷土の歴史研究グループ編「郷土史資料」山中町公民館　昭和 29 年８月を参照。

になっている）でも、間口四間半（約 8.2m）、奥行き十二間半（約 22.7m）とあり、決して大きくはない[298]。畳、筵（むしろ）以外の費用としては、湯銭、寝具や炭貸の損料、食材費などがある。米、味噌、酒だけでなく、鯖や鰈（かれい）などの海産物も普通に売られており、自炊だけではなく、宿で食材を代わりに料理することも多く行われていた。湯宿の間を髪結いの職人が歩き回り、医王寺の開帳に合わせて歌舞伎、糸人形、浄瑠璃、物真似など様々な興行が行われ、賭博も横行するなど、山中温泉の賑わいは大きなものであった。

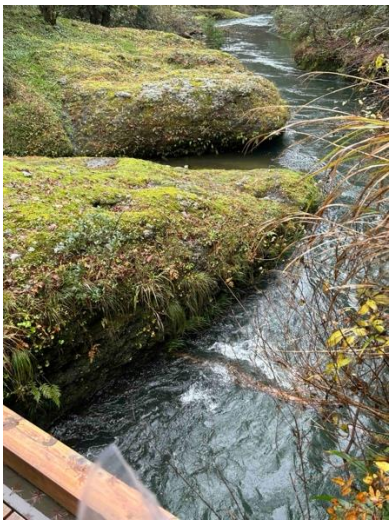
現在でも名勝が多い山中温泉であるが、先にも触れたように、江戸時代にも多くの名所が紹介され、湯治の際の行楽の場となっていた。既に宝暦年間（1751～1764）年に堀麦水（ほりばくすい）が加賀・能登・越中の奇談を集めた「三州奇談」に「山中十景」が紹介されており、文政４（1821）年にも漢詩人大窪詩仏（おおくぼしぶつ）が「山中八景」を著している。八景には、現在でも多くの人が訪れる医王寺（医王山として紹介）、高瀬、こおろぎ橋（こおろぎの古名、促織橋で紹介されている）、采石巌（さいせきがん）、道明が淵、黒谷（味谷として紹介）、桂清水（桂泉として紹介）などの名が見える。なお、周囲が鶴仙渓という名前で呼ばれるようになったのは昭和に入ってからである。



こおろぎ橋。木造なので 20 年に１回の架け替えが必要だが、架け替え回数を減らすため、車通りがあまりないようにしている。



黒谷橋。現在は石造りの橋になっている。



道明が淵を上に掛けた木製の小さな橋からのぞき込んだところ。



道明が淵近くの芭蕉の「やまなかや・・」の句碑。山中では至るところに芭蕉に因んだ句碑が建てられている。

298 扇屋の大きさについては、郷土の歴史研究グループ編「郷土史資料」山中町公民館　昭和 29 年８月を参照。

山中温泉の江戸期の有名な湯治客として松尾芭蕉がいる。芭蕉は、元禄２（1689）年、「おくのほそ道」の復路に山中温泉を訪れている。同行した曽良の「曽良旅日記」によれば、芭蕉は、湯本十軒衆の宿屋の一つに泊まり、そこを拠点に医王寺薬師堂を参詣、また道明が淵、黒谷橋など周囲の名勝を巡った。湯治を終え、旅立つ際、宿に「やまなかや　菊はたおらじ　湯のにほひ」との句を送ったことが有名である。これをきっかけに、近世の山中温泉は、芭蕉を慕って多くの俳人が訪れる場となった。中でも芭蕉が逗留した山中温泉の宿屋和泉屋の主人で、芭蕉から俳号として桃の一文字をもらった長谷部桃妖が有名である。





平成 16 年にかつての旅館「扇屋」の別荘を改装して作られた「芭蕉の館」には、松尾芭蕉や長谷部桃妖に関する様々な資料が展示されている。

＜明治・大正・昭和戦前期＞

明治に入ると、土地の売買が認められ、地租が設定されたことから、山中温泉でも惣湯の所有者を決定する必要に迫られた。これに伴い、源泉地は山中村の村有となったが、それまで惣湯を管理していた湯本十二軒衆を中心とした湯持ち衆は、村と惣湯の営業権契約を結ぶとともに、江戸期と同様、住民の無償での入浴を認めさせた。住民の無償利用という契約は、大正２(1955)年に山中町となった後も継続し、平成 17（2005）年、山中町が加賀市に合併されるまで続くことになる。

山中温泉の湯治客の増加は既に明治初期から始まっており、明治 27（1894）年にはその対応のため新館である上等湯「芦（あし）の湯」を建設、合わせて従来の惣湯を「菊の湯」の名称に改めた。「菊の湯」については明治 40（1907）年に改築、翌 41 年には新たに掘削した源泉を用いて貸切湯（家族風呂）である「白鷺の湯」も建設している。こうした施設拡張もあって山中温泉の湯治客は大きく増え、明治 43（1910）年には年間 146,306 人にも達している。ただし、旅館の数は、江戸時代の 40～50 軒から明治期には半減し 30 軒を下回る。これは、そもそも江戸期から競争が激しく宿屋の入れ替えが多かったことに加え、明治になると、二階建て、三階建ての大型旅館が登場､そこに宿泊客が集中するようになったためである｡明治 19(1886)年には料亭も建設されている（それまで芸者は宿に呼ぶものであった）。

こうした集客を支えたのが交通機関の発達である。明治 30（1887）年北陸本線が開通すると、その２年後、山中馬車鉄道が北陸本線の大聖寺駅と山中を結ぶようになった。馬車鉄道

は一頭建ての８人乗りと輸送力に限界があったため、大正２（1913）年には全線電化がなされ、山中電軌に改名された（昭和 18（1943）年北陸鉄道となり、昭和 46（1971）年全線廃止）。大正中期にはタクシーの営業も始まっている。この結果、山中温泉の活況は大正になっても続き、大正７～８（1918～1919）年には年間浴客数が 16 万人を超えている。

旅館の内湯がなかった山中温泉では、多くの入湯客が無料の「菊の湯」に集まり、そのため中はぎゅう詰めで、鼻歌などを歌う浴客も多数おり、大変うるさかった。これを避けたい客は有料の上等湯「芦の湯」を利用した。江戸期と同様、各旅館から一人ずつユカタベーが出ており、５～６枚から、多い時は数十枚の浴衣をもって客の風呂上がりを待つ姿が山中温泉独特の風情を醸し出していた。ただし、この風情も、後述する内湯化と大火により、昭和８（1933）年頃にはすっかり廃れてしまった[299]。

山中温泉の浴客数は、大正終わりから昭和初めにかけては 10 万人内外に低迷し、県内の山代温泉、片山津温泉に客数で追いつかれていく。この際の最大の課題が旅館の内湯化の遅れであった。こうした状況の中、昭和初期、内湯化が始まった。内湯化は、共同浴場を「菊の湯」一つに絞り、残りの湯を、地元の旅館の組合が作った山中鉱泉合名会社を通じて各旅館に配湯するという手法により行われた。これに合わせて「菊の湯」の経営も町に移った。こうした手法がとられた背景としては、先に述べたように、当時そもそもの源泉が２カ所（江戸期からある「菊の湯」内のオニブタと呼ばれていた源泉と「白鷺の湯」に利用している源泉）しかなかったことが大きい（町営「菊の湯」新設の際、新たに一つ見つかったが、そこから汲み湯を行ったところ、「菊の湯」の元の源泉からの湧出量が著しく減少したため、供用できなかった）[300]。

コンクリート建て天平様式の新たな町営「菊の湯」が建設され、旅館に配湯されるようになったのは、昭和５（1930）年である。この時には、山中鉱泉合名会社がコンクリート製の配湯室（５坪程度）を現在の山中福祉センター裏に作り、そこに貯湯槽を構築、貯湯槽の上に同じ大きさの三角の切れ目を作って、一つの切れ目に流れ落ちる量を各旅館への一契約とする仕掛けを設置した。各旅館へは松の木材をくり抜いたパイプを地中に設置し、引き湯をしている。昭和４（1929）年から翌５年にかけては各旅館でこのための工事が盛んに行われ、合わせて内装も一新された。また、この時点では、そもそも貯湯槽に貯められている時点で源泉の温度が 43 度程度であったため、旅館に来たお湯の温度はかなり低くなっており、各旅館ではボイラーを焚いて加熱することとなった[301]。この時、「芦の湯」、「白鷺の湯」も新設の「菊の湯」に合併され、山中の共同浴場は「菊の湯」の男風呂、女風呂だけになる。この後、山中温泉の浴客数は、大火のあった昭和６（1931）年とその翌年の７年を除き、第二次世界大戦が

299 ユカタベーの衰退については、名古屋控訴院「石川縣に於ける温泉の研究」名古屋控訴院司法資料第九號　昭和８年７月を参照。

300 この間の源泉の状況については、名古屋控訴院「石川縣に於ける温泉の研究」名古屋控訴院司法資料第九號　昭和８年７月を参照。

301 配湯室、引き湯、ボイラー加熱などについては山中温泉旅館共同組合あゆみ編集委員会「あゆみ」昭和 59 年４月を参照。

激化するまで、山代温泉や片山津温泉に浴客数で抜かれることはなかった。

ちなみに内湯化は旅館の立地にも大きく影響を与えている。各旅館は、江戸時代以来、共同浴場の近くに集まって立地せざるを得ず、そのため大聖寺川沿いの景勝地への立地はできていなかった（各宿の「別荘」として離れをつくるのみであった）。それが、内湯化と大火の後、河岸へと急激に移転を始めたのである。結果、現在では、「菊の湯」周辺に旅館は一軒も立地していない。

＜第二次世界大戦後、加賀市への合併まで＞

戦況の悪化に伴い浴客数が７万人台まで減っていた山中温泉であるが、昭和 21（1946）年には早くも宿泊客数 15 万以上（153,846 人）へと回復、その後は落ち着き、昭和 30 年代まで、宿泊客数８万から 10 万の間で推移する。集客も広域となり、広く京阪神地域から観光客を集めるようになった。また、新たな源泉のボーリングにも成功し、昭和 31（1956）年までに源泉数は６本にまで拡大（うち１本は停止）、昭和 33（1958）年時点で旅館 28 館のうち 13 館が内湯化している。各旅館も近代化を進め、団体客への対応を強めるとともに、工夫を凝らした大浴場の設置や、喫茶、ホール、売店、ビリヤード、卓球などの設備の充実などの設備拡大を進めていった。なお、山中温泉におけるボーリングによる新規源泉掘削は、昭和 13（1938）年の１号を皮切りに、昭和 16（1941）年２号、昭和 19（1944）年３号、昭和 24（1949）年４号、昭和 28（1953）年５号、昭和 31（1956）年６号、少し間を開けて、昭和 56（1981）年７号と行われている[302]（源泉の掘削はその後も実施。後述「源泉」の項参照）。

惣湯の改装としては、昭和 30（1955）年の温泉会館の建設がある。温泉会館には、女湯が設けられ、「菊の湯」は男湯専用となった。また、貸切湯（かつての「白鷺の湯」に相当するもの）、男女それぞれの高等湯（芦の湯）も温泉会館内に復活した。温泉会館は、その後、昭和 52（1977）年に山中町社会福祉協議会の山中温泉総合福祉センターとして建て替えられている。この際も、女湯、家族湯、高等湯（芦の湯）が設置され、また新たに体に不自由がある人向けの福祉湯が追加された（平成 16（2004）年、福祉湯以外はなくなっている）[303]。「菊の湯」をはじめとする共同浴場は、地元住民にとって必須の入浴施設であり、そのため、旅館の内湯化が進んだ後も、住民向け施設として重視されていたのである[304]。

山中温泉の観光客数はその後も順調に拡大し、昭和 39（1964）年には宿泊客数 50 万人を突破、石川県下最大の温泉地としての地位を堅持した。しかし、山中温泉の勢いはここで止まり、昭和 40（1965）年には片山津温泉、昭和 45（1970）年には山代温泉に宿泊客数で追い抜かれてしまう。片山津温泉が団体旅行に特化して業績を伸ばし、山代温泉が豪華な大規模旅

302 源泉のボーリングについては、山中温泉旅館共同組合あゆみ編集委員会「あゆみ」昭和 59 年４月を参照。

303 温泉会館、総合福祉センターについては現地調査ヒアリング。

304 共同浴場の地域における意義については現地調査ヒアリング参照。現在でも「菊の湯」の入湯客の８割は地元客と推定されている。かつて山中では家にお風呂がないのが当たり前であり、今でもおそらく３割程度はないままであるという。

館の開発で多様な宴会・レジャー需要の取り込みに成功したのに対し、山中温泉は、土地が狭隘で新規施設の開発が難しかったこと、長い歴史と格式の高さが大きな転換を難しくしたことなどにより、高度経済成長期後半の国内観光市場拡大の波に乗りきれなかったのである[305]。

1970 年代後半以降の山中温泉の宿泊客数推移をみると、昭和 51（1976）年に 454,875 人で、昭和 39（1964）年を下回っている。一方、この時点で山代温泉は 1,160,832 人、片山津温泉は 1,368,060 人となっており、高度経済成長期後半を経て、規模に倍以上の差がついていた。ただし、宿泊客数の伸びについては、片山津温泉が昭和 55（1980）年をピークに減少に転じ、山代温泉も昭和 61（1986）年から右肩下がりとなっているのに対し、山中温泉では、バブル崩壊の年に当たる平成３（1991）年の 849,671 人まで、ゆるやかではあるが、宿泊客数を伸ばし続けた。だが、その後は、他の温泉地と同様に山中温泉も宿泊客が減少傾向となり、新型コロナウイルス感染症の流行する直前、令和元（2019）年には、宿泊客数 443,271 人と、結局また昭和 30 年代の数値にまで戻ってしまっている[306]。

こうした中、山中温泉では、地域の商店主などの活動がきっかけとなり、歴史を踏まえた施設や景観の整備などにより地域としての魅力を高める事業が平成初期より次々と行われてきている。平成３（1992）年には、惣湯「菊の湯」が、昭和５（1930）年に建てられた時と同様の天平様式で再建され（男湯）、平成 13（2002）年には、今度は「菊の湯」の女湯が、男湯と隣接していた旅館の廃業跡地に、山中漆器をモチーフに建設された[307]。



「菊の湯」の男湯。昭和５（1930）年に建てられたももともとの「菊の湯」の跡地に、同じ天平様式で、新しい「菊の湯」が建てられた。



「菊の湯」の男湯の内部
※（一社）山中温泉観光協会提供

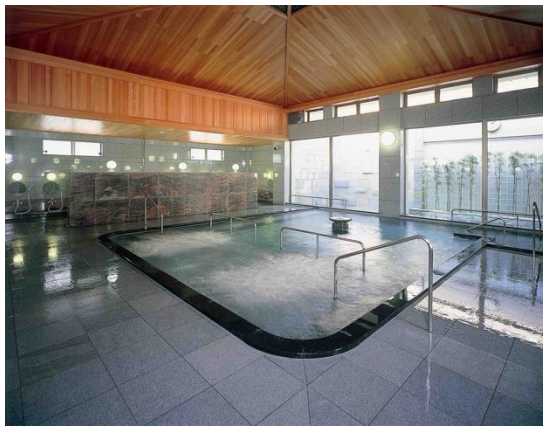
305 この段落については、北陸経済研究所「調査　北陸における観光の現状」北陸経済研究 昭和 53 年 7 月　P40-P51 を参照。

306 宿泊客数の推移については、加賀市ホームページ「加賀市観光統計」https://www.city.kaga.ishikawa.jp/soshiki/sangyoshinkou/kankousyoukou/kankokouryu/kankoudata/1845.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

307 この段落以降の３段落は、井上晶子、内田彩「加賀温泉郷における温泉地の再生　再生方法とその意義」温泉地域研究　第 22 号　平成 26 年３月　P1-P12、山中温泉ホームページ「山中温泉の名所旧跡」https://www.yamanaka-spa.or.jp/highlights/landmark（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。山中座の運営、川上流の回遊路、あやとりはし、花回廊については現地調査ヒアリング。



「菊の湯」の女湯。隣に経つのは同時に建設された山中座。



「菊の湯」の女湯の内部
※（一社）山中温泉観光協会提供

「菊の湯（女湯）」の隣には漆塗りの柱や格子戸風の壁面、蒔絵（まきえ）を施した格天井（ごうてんじょう）など山中漆器の粋を集めた格調高い造りの「山中座」もオープンし、山中節の定期公演を実施するなど、山中温泉の文化を発信する場となった（山中節については後述）。なお、山中座は、設置は旧山中町（現：加賀市）で、指定管理は山中温泉旅館協同組合である。この他、平成 16（2005）年には、明治 38（1905）年築の歴史的建造物（旅館「扇屋」の別荘）を改築した「芭蕉の館」も開業された（施設内では山中漆器の名品などを見ることができる）。高度経済成長期における団体集客では加賀温泉郷内で不利な競争を強いられた山中温泉だったが、歴史を踏まえた地域の魅力づくりという点では、一歩先んじた展開となった。



山中座のホール。温泉を主題にした緞帳がある。
※（一社）山中温泉観光協会提供



椅子の肘置きにも山中漆器の技術が使われている。



山中座漆器の技術を活用した格天井
※（一社）山中温泉観光協会提供

また、平成９（1998）年から平成 15（2004）年にかけては、「街なか再生・目抜き通り整備事業」として、温泉の祖・長谷部神社を中心に、菊の湯からこおろぎ橋付近まで約 600 メートル続く山中温泉の目抜き通りである「ゆげ街道」の拡幅、歩道整備、電線地中化を行い、南町商店街の景観を一変させた。この事業は平成 16（2005）年、国土交通省都市景観大賞の「美しいまちなみ大賞」を受賞しており、石川県における地域づくりのモデル事業ともなっている。これにより、「菊の湯」を起点に、ゆげ街道を「こおろぎ橋」まで歩き、そこから鶴仙渓遊歩道を歩いて「あやとりはし」まで行き、また「菊の湯」方面に戻るという大聖寺川の上流部分の回遊路ができることとなり、歴史的な情緒を楽しみながらのそぞろ歩きが増え、若い観光客の集客にも成功した。平成３（1991）年に竣工した「あやとりはし」は、いけばな草月流三代目家元の勅使河原宏（てしがわらひろし）デザインになるもので、綾取りに似せた鉄骨トラス状の橋となっており、袂に石のモニュメントが設置されている。山中温泉では、あやとりはし竣工後、草月流の協力の下、毎年 11 月上旬の一週間「山中花回廊」という街の商店や旅館の軒先などに生け花の作品を飾るイベントも実施している。



ゆげ街道。もとはＳ字に曲がった狭い道で交通面でっも危険だったが、セットバックして道の曲がりをなくし、広い歩道を確保した。また景観条例も作り、歴史情緒あふれる街並みに変身した。



あやとりはし。複雑な曲線を描くトラス構造が、山中の風景に新たな魅力を与えている。

この中で旅館の女将も活躍している。昭和 27（1952）年設立と長い歴史をもつ山中の女将の会「ぼたん会」では、バブル崩壊後の客足の衰えに危機感を抱き、2500 本以上の桜の木の植樹による景観づくり、独自のタウン誌の発行、「湯治飴」や「湯宿の朝粥」などの商品開発などを実施している[308]。

308 女将については、公益財団法人あしたの日本を創る協会受賞団体紹介ページ「＜企業の部＞ふるさとづくり賞　内閣官房長官賞」http://www.ashita.or.jp/publish/furu/f2005/45.htm（令和６年 12 月 13 日最終確認）、朝日新聞「山中温泉ぼたん会、町長迎え５０周年感謝する集い／石川」平成 15 年２月 14 日を参照。なお、現地調査ヒアリングによれば、令和６年現在、世代交代の端境期にあり、活動量は減少している。

＜加賀市合併以降＞

旧山中町は、平成 17（2005）年、加賀市と合併した。これにより、「菊の湯」や「山中座」をはじめとする施設は、加賀市の公共財産となった。一方、源泉については、加賀市ではなく、新たに設置された加賀山中温泉財産区[309]に移管された。財産区の管理者は加賀市長で、管理委員には旅館業者３名、その他市民や有識者が任命されている。財産区の財産は、源泉と山中総合福祉センターの駐車場などである。財産区では、源泉管理と配湯事業を自らの事業として実施する一方、「共同浴場菊の湯」については、指定管理業者を務めている。合併後の大きな変化としては、「菊の湯」などの入浴料金が、それまで旧町民が無料であった（ただし、中途から共通利用券の発行手数料が取られるようになり、最終的には年間 2,000 円となっていた）のに対し、有料となったことがある。現在の料金は、財産区民であるかどうかに関わらず、年間の定期利用券が３万円で、一般利用料金一回大人 500 円中人 150 円小人 70 円、回数券は 11 枚綴り大人 5,000 円となっている[310]。

温泉を中心とする観光の振興については、これまでのあり方を基本的には踏襲しつつ、様々な検討が行われている。変わらないのは、山中温泉の地域経済を支えている旅館業の一泊二日型の集客の強化であり、宿泊分離施策や連泊促進型施策、外湯巡り施策などは行われていない（ただし、宿泊客の「菊の湯」入浴料は割引されている）。一泊二食付きを基本としつつ、その枠組の中で街への滞在を楽しんでもらうという方向性である。令和７年現在山中温泉旅館業協同組合には 18 軒加盟しているが、うち１軒は休業している。既に廃業した大型施設も複数あり、空きビルとなっている。幸いなことに、廃業・休業施設は基本的に川の対岸に立地しているため、表通りの景観には影響していないが、いずれにせよ早急に何等かの対処をしていく必要がある。

こうした状況に対する取り組みとしては、まず、ゆげ街道に続く大聖寺川下流部分の商店街の景観整備が検討されている。これが実現すれば、現在街の半分（上流部分）しか回遊していない観光客の回遊動線が大幅に拡大できる。ただし、この実現のためには、立地する商店等の全面的な協力が必要であり、まだ見通しはたっていない（下流部分の商店街は、かつて北陸鉄道の山中駅があった時の駅前商店街であり、現在もスーパーがあるなど、観光型というより生活型の商店街となっている）。既存の街や鶴仙渓の回遊の強化については、これ以外にも、「鶴仙渓川床」（鶴仙渓の渓流に面した川床でスイーツが楽しめる）、「灯す　やまなか」（宿泊している旅館でレンタルできるオリジナル提灯を持ってもらい、夜間にバー、料亭、飲食店などに行くことを促すキャンペーン）、「Kakusenkei Light」（あやとりはしやそこに続く鶴仙渓のさくら公園のライトアップ）、「山中温泉スイーツめぐり」（クーポン券施

309 第二次世界大戦以前の財産区に当たる制度（旧来の慣習の存置を認めただけで特段の名称はない）は、明治 22（1889）年の市制・町村制の施行に伴い、それまで村の惣有となっていた山林などの財産の扱いを円滑に移行させるため、当該財産の所有権を新たにできた行政村に移行させず、当該行政村に吸収されたかつての集落共同体に引き続き管理させることを認める制度として発足した。昭和 22（1947）年、財産区という名称で、特別地方公共団体の一種となり、現在では、旧慣の維持に加え、市町村合併の際、関係地方公共団体の財産処分に関する協議に基づいて新たに設置されることも多い。

310 この段落以降の現在の状況については現地調査ヒアリング。

策）、「山中温泉アイスストリート」（石川県金沢市のアイスクリーム・シャーベットの一世帯当たり年間消費額がトップになったことを契機に始められた宣伝キャンペーン）などのイベントが実施されている。また、昭和天皇がご宿泊されたこともある老舗旅館「よしのや」が持っていた第二別荘を移設・リノベーションし、日本庭園が楽しめる資料館とした「加賀依緑園（かがいりょくえん）」が令和６（2024）年に開館している。

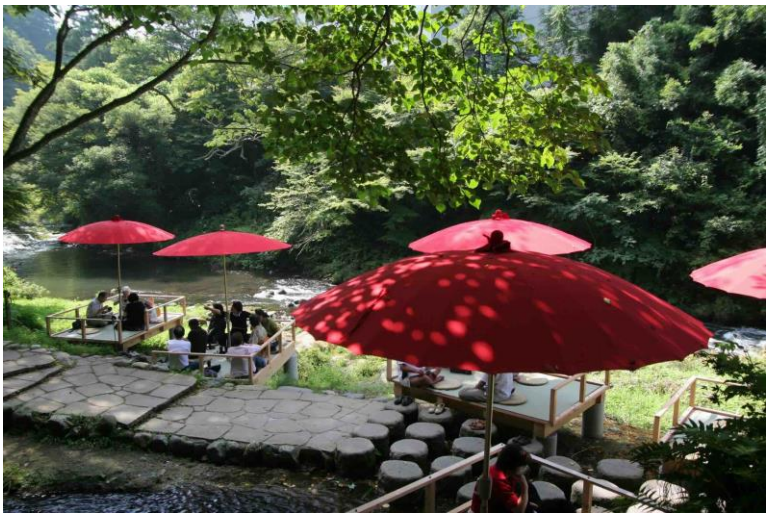




昭和天皇がお使いになった食器の展示



加賀依緑園の外観と室内。外観は近代和風建築と庭園となっているが、室内はアンティークな洋風の設えの部屋もある。
また、多くの美術品が調度として飾られている。



大聖寺川、鶴仙渓の川床。川の絶景を眺めながらスイーツが楽しめる。
※（一社）山中温泉観光協会提供

一方、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、夏祭りの休止など、大型の観光イベントについては選別の動きがある。この中で、地域の魅力を新たに作り出すべく、若手を中心に、アートフロントギャラリー（越後妻有（えちごつまり）「大地の芸術祭」、「瀬戸内国際芸術祭」、「奥能登国際芸術祭」など、地域に世界的な現代アーティストを呼び作品を制作させるトリエンナーレ形式の芸術祭を次々と成功させてきた北川フラムの所属会社）と協働で、山中でのアートイベ

ント実施の検討も行われている。山中には、温泉地区とは離れるが、加賀東谷（山中温泉大土町など）に伝統的な山村農家などが残る国の重要伝統的建造物群保存地区（平成 23（2011）年指定）もあり、中心の温泉地区や鶴仙渓だけでない魅力が、山中には、まだ多く残されている。こうしたポテンシャルをどのように活かしていくか、令和７（2025）年３月に予定されている最初のアートイベントに向け、準備が始まっている（令和７年３月 20 日から 23 日にかけて、「新山中温泉文化絵巻－小さな、はじまりの芸術祭」という名称で実施された。主な催しとしては、医王寺、長谷部神社、鶴仙渓、山中座広場など、山中温泉の結節点となるポイントに、金沢美術工芸大学の芝山昌也が率いる美術家チームによる現代美術作品を展示した「アート散歩」、舞踏家/民俗学者の森繁哉を迎え、山中座芸妓衆と行った「舞踊劇」、映像人類学を学んだカン・タムラが撮り下ろしたドキュメンタリー「YAMANAKA」などを上映する「エナジー風呂フィルムフェスティバル」、「温泉文化シンポジウム」などがある[311]）。

令和６（2024）年には、北陸新幹線の金沢駅 － 敦賀駅間延伸開業に伴い、新幹線加賀温泉駅が開業した。未だ残る新型コロナウイルス感染症の影響から抜けだし、次の発展にどう繋げていくか、山中温泉の未来に向けた動きが進んでいる。

311 アートフェスについては、山中温泉ホームページ「新山中温泉文化絵巻－小さな、はじまりの芸術祭」https://www.yamanaka-spa.or.jp/event/3187（平成７年３月 24 日最終確認）を参照。

山中温泉の源泉[312]

山中温泉では、現在まで、11 本の共同源泉が掘削されており、うち６本の源泉が温泉として利用されている（３号、７号、８号、９号、10 号、11 号）。このうち３号、７号、８号、10 号、11 号が混合され、山中温泉地区の各施設に供給されている（９号は、山中温泉の中心部から少し離れた長谷田地域にあり、河南地区会館・公民館に設置されている「菊の湯　第２」に配湯されている。住民用の共同浴場である）。全て現在は加賀山中温泉財産区（加賀市と合併するまでは旧山中町）の所有である。配湯先は、共同浴場（「菊の湯」男女、「菊の湯第２」、「山中温泉ゆけむり健康村」。ただし、「山中温泉ゆけむり健康村」は令和６年現在休業している）や福祉施設（「山中総合福祉センター」、「山中温泉ぬくもり診療所（旧：国立山中病院）」）などの公共施設、山中温泉旅館協同組合所属の旅館である（山中温泉旅館協同組合に所属していない宿泊施設が山中温泉地区内に１軒あり、かつてはそこにも配湯していたが、現在は配湯していない。当該の宿泊施設は外部の温泉から汲み湯をしている）。

これ以外に、平成になってから自家源泉が２本掘削され、一時供用されたが、１本は泉温低下により、１本は湧出量の低下により、現在は供用されていない（掘削した１軒の旅館は休業中）。また、自家源泉を掘削した際、共同源泉への影響はなく、源泉については探せばまだ利用できる湯脈がある可能性が高い。なお、掘削工事・温泉分析などは金沢本社で全国展開しているエネオックス社に依頼している。

下記に財産区所有の共同源泉の状況を示す（令和６(2024)年調査。温泉として供用していない４号源泉のみ平成 16（2004）年調査）。

①１号源泉、２号源泉

概要：菊の湯（現：男湯）の下にあったとされる源泉。かつて自然湧出していた近世以前からのそもそもの源泉であったと推測される(現在はどこにあったかわからない)。第１号源泉については昭和 14（1939）年、第２号源泉については昭和 16（1941）年に掘削の記録が残る。現在は涸れている。

②３号源泉

概要：昭和 19（1944）年掘削（台帳上の深度 365m、町史では 303m。既存ケーシングに穴あき箇所が認められたことから、平成 14（2002）年に内挿管を設置し、二重管構造となっている。深度 237.55m より深いところは落下物や不純物で閉塞している）、動力揚湯。

泉質：単純温泉（低張性、弱アルカリ、高温泉）pH 値　8.38

泉温：42.4 度（調査時における気温 31.1 度）　湧出量：354.0 リットル／分

③４号源泉

概要：昭和 24（1949）年掘削（台帳上の深度 260m、町史では 242m）、動力揚湯。温泉とし

312　この項は、現地調査ヒアリング、加賀山中温泉財産区資料、加賀市加賀山中温泉財産区温泉条例による。

て利用していない。

泉質：単純温泉（低張性、弱アルカリ、低温泉）pH 値　7.8

泉温：26.3 度（調査時における気温 25.0 度）　湧出量：154.0 リットル／分

④５号源泉

概要：昭和 28（1953）年掘削（台帳上の深度 300m、町史では 303m）。昭和 36（1961）年北美濃地震の影響で破損し、廃泉。





５号源泉跡。現在も少し水が湧いており、「大生水」というお堂となって後ろに地蔵尊が祀られた（廃泉になってから祀られたもので、もともと祀られていたわけではない）。地蔵の洞の横に源泉であった時の残骸が残る。

⑤６号源泉

概要：昭和 31（1961）年掘削（台帳上の深度 400m、町史では 409m）、動力揚湯。泉温が温泉法の規定より下がったため廃泉。現在は井戸水として使用。

⑥７号源泉

概要：昭和 56（1981）年掘削（511m）、動力揚湯。

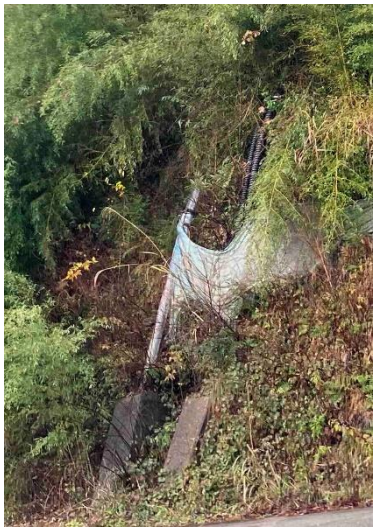
泉質：アルカリ性単純温泉（低張性、弱アルカリ性、温泉）pH 値　8.52

泉温：37.4 度（調査時における気温 26.5 度）　湧出量：232.2 リットル／分



７号源泉（左）と 10 号源泉（右）。
以前町役場があった駐車場のマンホールの下にある（町役場があった時も同じように使われていた）。







７号、10 号源泉からの温泉は、ポンプで揚湯され、左に見えるパイプで上に上げられていく。
その後、温泉は、上に見えるフェンスの先にある紙谷用水路沿いに設けられた配管を伝って混合槽のある配湯所まで運ばれていく。

⑦８号源泉

概要：平成元（1989）年掘削（1,000m）、動力揚湯。

泉質：カルシウム・ナトリウム-硫酸塩温泉（低張性、弱アルカリ性、温泉）pH 値　8.18

泉温：35.9 度（調査時における気温 28.1 度）　湧出量：152.7 リットル／分



８号源泉と分湯槽外部。かつてはコンクリートむき出しだったが対岸からの眺めが悪いということで外を木材で囲った。



８号源泉の内部。奥の傘の後ろに源泉から来ているパイプがある。残りの配管は分湯用のものである。傘があるのは雨漏りしているため。

⑧９号源泉

概要：平成５（1993）年掘削（864m）、動力揚湯。

泉質：カルシウム・ナトリウム-硫酸塩温泉（低張性、アルカリ性、高温泉）pH 値　8.9

泉温：52.1 度（調査時における気温 26.5 度）　湧出量：161.7 リットル／分

⑨10 号源泉

概要：平成 14（2002）年掘削（351m）、動力揚湯。

泉質：単純温泉（低張性、弱アルカリ性、高温泉）pH 値　8.51

泉温：43.2 度（調査時における気温 26.5 度）　湧出量：361.7 リットル／分

⑩山中温泉芭蕉の湯（11 号源泉）

概要：平成 17（2005）年掘削（1,380m）、動力揚湯。

泉質：カルシウム・ナトリウム-硫酸塩温泉（低張性、アルカリ性、高温泉）pH 値　8.86

泉温：67.5 度（調査時における気温 26.9 度）　湧出量：377.0 リットル／分



11 号源泉は、「芭蕉の館」近くの駐車場にある。マンホールの下に汲み上げ用のポンプが入っているため、駐車禁止措置が取られている。



ポンプの制御盤

なお、山中温泉への配湯用に用いている３・７・８・10・11 号の混合泉は、カルシウム・ナトリウム-硫酸塩泉（低張性、アルカリ、高温泉）pH 値　8.5 で、泉温 49.8 度、湧出量 1,477.6 リットル／分となっている。

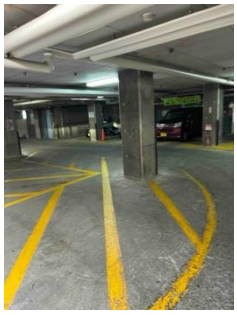
山中温泉の湯の管理の技術[313]

＜源泉の集中管理＞

山中温泉で使用している源泉は、「菊の湯　第２」に使用されている９号を除き、全て山中温泉の中心部近くに集まっている。各源泉からポンプで揚湯された温泉は、まず、山中総合福祉センターの地下から繋がる集中管理のための配湯所に運ばれる。

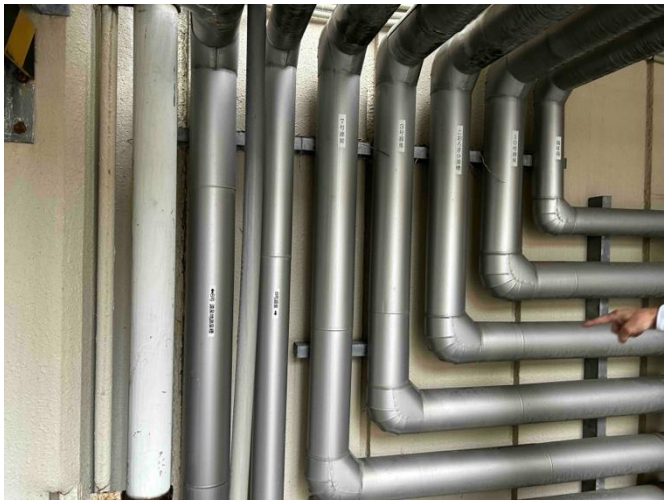


山中総合福祉センターの地下駐車場に入るアプローチ。上の建物は社会福祉協議会管理。



山中総合福祉センターの地下駐車場。ここは財産区の財産で、この反対側に配湯室への入り口（福祉センターと「菊の湯」の間の地下）がある。

313　この項は、現地調査ヒアリングによる。



源泉からのパイプ。保護管の下に温泉が流れる塩ビ管と保温材がある。



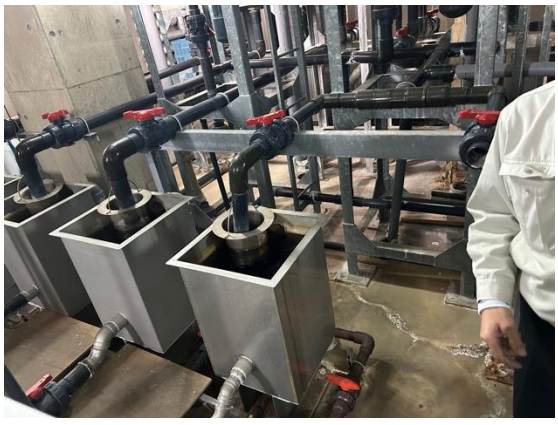
継ぎ手部分は３年に１度取り替えて清掃。

配湯所までのパイプは、塩ビ管に保護管が掛けられたものとなっている。配湯所に入った部分のパイプは、塩ビに保温材を巻いただけで保護管はない。うち一カ所だけ継ぎ手の部分があり、ここについては３年に１度取り替え、内部を清掃する。それ以外のパイプは設置以来数十年清掃していないが、特にスケールが溜まって詰まるようなことはない。

各源泉からの温泉は、それぞれの源泉貯湯槽に入る。各源泉貯湯槽から分湯枡に繋がるパイプは基本的に背後の源泉混合用の槽に入るが、分湯枡に繋がるパイプも設けられている。枡では分湯量が水位で目視できるため、枡の上のバルブで調整し、契約された量が流れるようにする（※源泉の揚湯料が変化するため、契約数値の１割増しくらい流す）。一部の枡ではストレーナーをかませて細かな析出物やゴミなどを取っている。源泉の泉質により析出量は違うが、８号は析出量が多い。各枡からは、ポンプアップされて、菊の湯や各旅館等に直結で運ばれるか、外部３カ所ある分湯槽にいく。



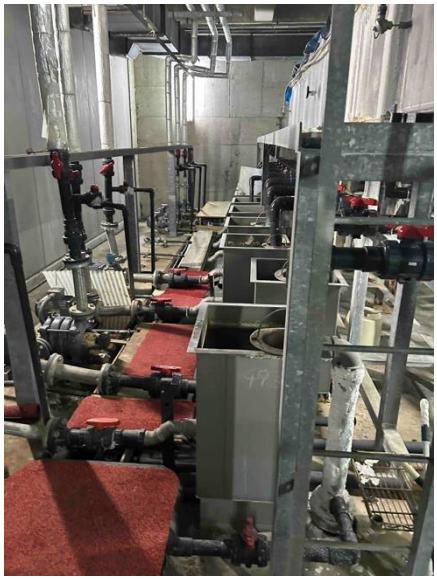
各源泉からの温泉はまず源泉ごとの貯湯槽に入り、そこから源泉混合用タンクにいき、その後、分湯用の枡にいく。後ろに混合用タンクが見える。



分湯の状況が水位で目視できる混合枡。ゴミを取るためにストレーナーをかましている。



「菊の湯」など、分湯量が大きいところにいく枡は温泉の流れが激しく析出が多い。ストレーナーもかませられない。



写真左手の上に伸びるパイプで旅館や分湯所に向かって温泉水を揚げている。



各施設に送る送湯ポンプ



分湯枡からのパイプには行き先表示がある。これは８号源泉の小屋にある分湯所行きのパイプ。

各枡には混合された温泉水が流れており、各源泉からの直結はない。ただし、冬に温泉の温度が下がり過ぎた場合は、温度の高い 11 号源泉から枡に直結させて流すこともある。逆に、夏、あまりに熱くなり過ぎた場合は加水することもある（６号源泉が井戸水として使える）。

この配湯所では、上記の配湯以外に、温泉卵も作っている。以前は、こうした経済的な利用を配湯所で行うことは避けられていた（財産区の温泉は住民利用のためとされていた）が、ここ 10 年くらい、ある程度できるようになった。朝３時から 10〜20kg 作っている。茹でる温度は 63 度である。温泉卵については山中座の売店でのみ販売されている。



配湯所の中にある温泉卵用の籠。茹でるための枡も用意されている。

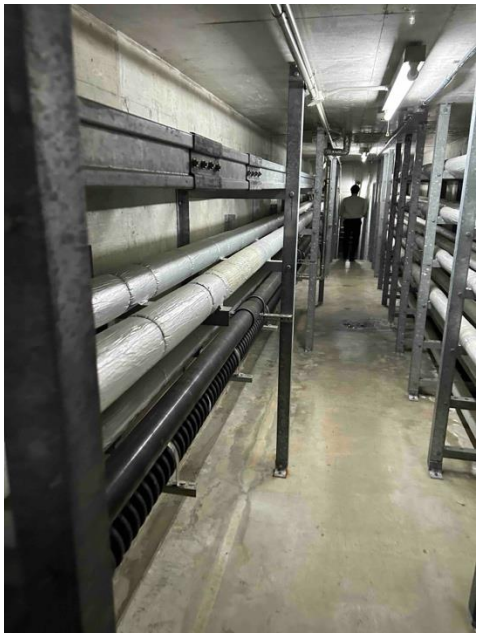


山中座で販売されている温泉卵。卵かけ醤油やエッグカッターも売っている。その場でも食べられる。

＜「菊の湯」の湯の管理＞

配湯所から「菊の湯」の温泉管理を行っている場所には地下通路で繋がっている。地下通路には、「菊の湯」への配湯管だけでなく、各旅館や分湯所に向けた配湯管も多数配管されている。

「菊の湯」では、送られてきた混合泉を、男湯用の巨大なコンクリート製のタンク（30 トン）にまず入れる。女湯のタンクへは男湯用のタンクから半分の 15 トンを送っている。このタンクは、年１回清掃で、高圧ジェットで汚れをとる。カルシウムなどの析出物がかなり溜まっている。

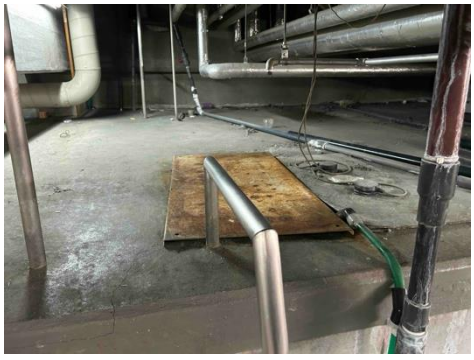


配湯所から「菊の湯」に向かう地下通路。両側に配管が並んでいる。

「菊の湯」の男湯のコンクリート製の巨大タンク



上部にある清掃時中に入るための蓋



菊の湯では男女とも循環濾過をしている。濾過タンクの中の砂は10年に一度の交換である。塩素は濾過機に入る前の配管に注入し、温泉のタンクには直接入れない。二時間ごとにDPD法で塩素濃度を測り、その数値から装置によって塩素を注入する頻度を変えていく。入浴者が多数いると塩素が減りやすいので、そういったことを加味して調整する。男湯のシャワーは源泉と上水を混ぜて使っている。一方、女湯については、混合源泉だけでは熱量が足りず、灯油ボイラー設備を入れて浴槽の昇温と給湯加温している。シャワーは源泉を使っていない（女湯はシャワーの使用量が極めて多いため、６号源泉を使わないと対応できない）。



「菊の湯」男湯の濾過機。塩素はここに注入する。


左側の白いボックスが塩素注入装置。右の銀色の筒はかつて蒸気で加温していた時のドレン装置が残置されているもの。


温泉の塩素濃度をDPD法（ジエチルパラフェニレンジアミン法）で検査している様子。温泉水に浸すと試薬の色が変わるので、それを表と見比べて塩素濃度を判定する。

写真上部の白いボックスの下部にある調整用の装置。
これを操作することで塩素投入の頻度を調整することができる。
手で持っている細いパイプが、濾過槽に繋がっている塩素投入用の管。




検査用の浴槽水を採取する箇所。



女湯の加温用ボイラー。温度は自動調整。



女湯の濾過機と塩素の注入装置

なお、「菊の湯」男湯の管理室の奥には、昭和 20 年代のボイラーがある旧配湯室があり、かつてはそこで加温をしていた。平成 14(2002)年以降、高温の 11 号源泉が供用されたため、現在では使用していない。ここに以前の配管なども残っている。

＜分湯所＞

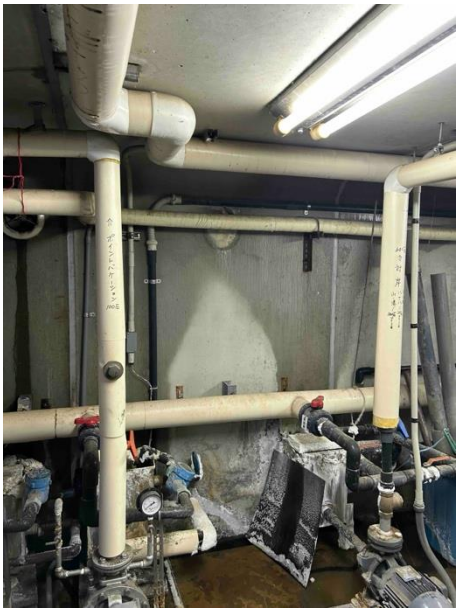
分湯所や旅館への引き湯管は、先に触れたように、当初は松の丸木をくり抜いた管をつなぎ合わせたものであったが、損壊が続いたため、鉄管もしくは鉛管に変更した。しかし、これもすぐに腐食して長続きせず、結局、昭和 26（1951）年頃に一斉に銅管に代えることとなった。施工については、道路にコンクリートの溝を作り、そこに保温のため銅管に炭化コルクを巻き、その上を杉皮で包みアスファルトを塗ったものを設置した[314]。現在は、既述のように、塩ビ管又はポリエチレン管に変更になっている。


長谷部神社近くの紙谷用水路の脇にある配湯管。
分湯所に向かっている。

314 引き湯管の交換については、山中温泉旅館共同組合あゆみ編集委員会「あゆみ」昭和 59 年４月を参照。

分湯所のうち、こおろぎ分湯所では、二重の円筒状の分湯枡を使っている。真ん中の円筒に下からポンプアップされて混合泉が入り、そこから外側の均等に 12 の区画に分かれた円筒部分に湯が流れていく。各区画に配湯先が決まっており、そこに流れ落ちた湯が配湯先の旅館に引き湯されていく構造となっている。

８号源泉にある分湯所は、もともとゆけむり健康村と川の対岸にある施設への配湯が主であった。今はゆけむり健康村が休業中、対岸にも休業・廃業旅館が多くある。一部の休業施設は、設備を守るために通湯している。そのため、現在では、大聖寺川にかなりの量を廃湯している。



８号源泉の分湯所内部。配湯先にポンプアップしている。



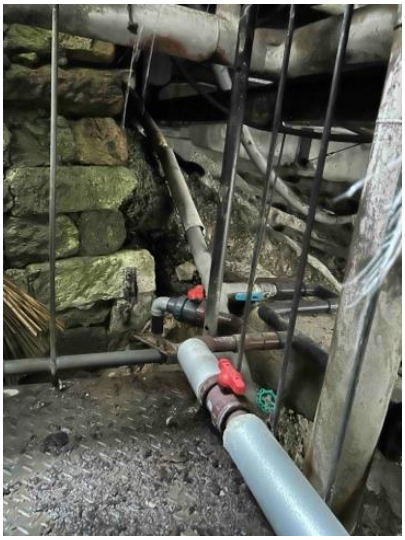
川に放流された湯が湯けむりを上げている。背景には廃業した旅館が見える。

＜旅館「たわらや」の湯の管理＞

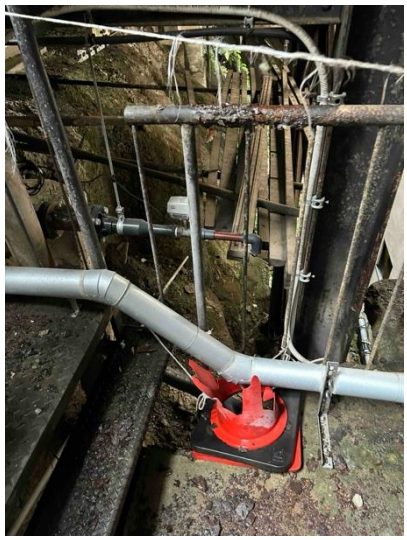
「たわらや」は、山中温泉の中興の祖、長谷部信連の部下であったという縁起のある湯本十軒衆の宿屋のうちで今も残る最後の一軒である。先に触れたように、湯本衆については、近世当初から史料上に名前が見え、「たわらや」についても、元禄 10（1697）年の古図に記載されている。浴場としては、大浴場、渓流露天風呂「鶴仙」・「河鹿」（ともに時間で男女交代）と貸切大浴場「菊香」があり、日帰り入浴の受け入れもしている。また、露天風呂付きの客室もある。

供給されているのは、財産区の３・７・８・10・11 号の混合泉であり、「たわらや」への供給量は 105 リットル／分となっている。これは、山中温泉の旅館の中でももっとも多い（財産区との契約口数が７口で最も多い。契約に際しては、温泉加入金と毎月の配湯料がかかる。ただし、いきなりお金を出して契約するというわけにはいかない）。財産区からの源泉は、42～43 度程度の適温で、50 年程前に作った管（灰色のアルミ管のカバーがついたもので、おそらく中身は塩ビ管）を通じて、たわらやに供給されている。錆びたり、詰まったりしたことは

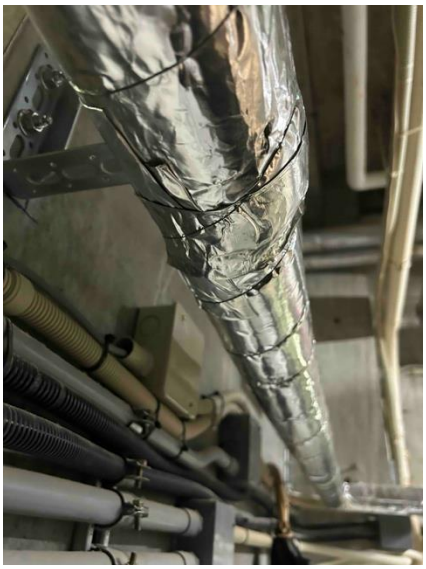
ない。配湯時間は 20 時間で、23 時から午前３時までは止まっている。



アルミ管で覆われた源泉からの引き湯のパイプ。
左の写真の奥から引かれており、右の写真に見えるように、地下の管理施設に向けて湯が自然流下している。
財産区の配湯所からポンプで圧力をかけて流れてくるので、勢いがある。



たわらやの中では塩ビ管で館内に配湯している。保温のため、塩ビ管の多くは断熱材で被覆されている。渓流露天風呂の二つと貸切の大浴場については、循環濾過を行っている。一方、客室についた露天風呂については、循環せず、掛け流しになっている。共同源泉からは圧力をかけて温泉が流されてくるので、たわらやの中では、循環にはポンプを使っているが、循環以外については自然流下で源泉がそのまま流れていく。11 時のチェックアウトの後、客室の露天風呂を空にして清掃し、清掃後に湯をためる際には大浴場にいく源泉をバルブで止めて、客室露天風呂の湯を集中的にためる。客室露天風呂の湯がたまると自動的に大浴場へと配湯が切り替わり、客室には適量がかけ流しされる。



左の写真に見られるように、館内では、塩ビ管に直接保温材を巻いて温度低下を防いでいる。



右の写真の右奥の壁に直接入っている茶色い塩ビ管は客室の露天風呂にいくもので、循環濾過ではない。

循環に当たっては、３つの浴場ごとに、濾過槽を通すとともに、レジオネラ菌対策として、塩素を注入している。浴槽の大きさに対しどの程度源泉を掛け流すかは旅館次第であるが、源泉の掛け流し量を少なくするとレジオネラ菌のリスクが高まるため、注意を要する（「たわらや」は、毎分 105 リットル来るため、毎分 105 リットルは廃湯しており、かなり入れ替わっている）。濾過槽の中には砂が入っており、それで濾過する。濾過槽の中の砂は設置以来取り替えていないので、古いものでは 50 年程度そのままである。そのため、濾過槽や濾過槽の配管（古いものは鋼管、比較的新しいものは塩ビ管）には、温泉が染み出て、カルシウム等の温泉の成分が大量に析出している。析出した成分を取ると管のヒビからまた多く析出してしまうため、そのままにしている。これを交換するとなると数百万単位でお金がかかる。

循環の経路となっている配管の中途に昇温のための装置（電気で熱する）が付いており、温度が下がった場合には自動的に加温して適温に戻す。設定温度は、冬は高め、夏はぬるめとなるが、どの程度の温度に設定すればいいかは人が経験により塩梅（あんばい）で決める。設定は季節ごとで毎日いじるようなことはない。一方、どの程度の量の源泉を掛け流しにするかは、バルブで人が調整している。

塩素の投入についても自動化されており、これも配管の中途に塩素濃度を自動測定し、濃度が低下すると塩素が必要量投入される装置がついている（浴槽自体の塩素濃度がフィードバックされているわけではない。そちらは年に１度の検査で確認している）。また、配湯が止まっている時にはパイプに空気が入るため、空気抜きの作業をしなければならない。以前は午前３時にその作業を人力でしていたが、現在は空気抜きも自動でできるようになった。

設備の整備については、菱機工業株式会社に依頼している。同社は、金沢出身の企業ではあるが、現在では全国展開をするメーカーとなっている。

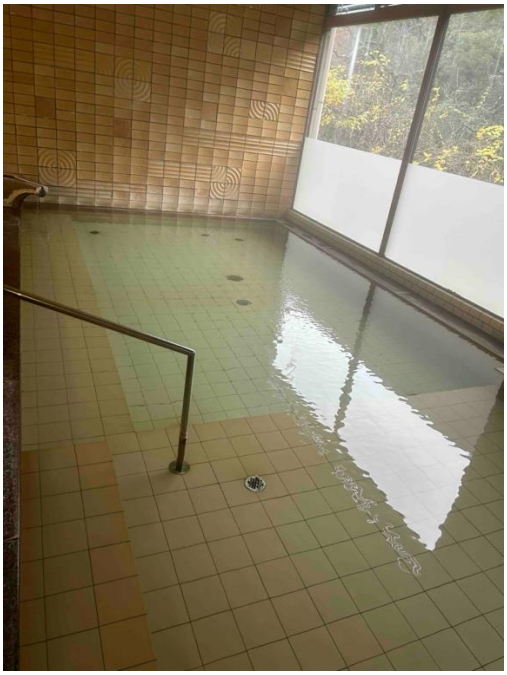


左の写真は濾過槽。鋼管にヒビが入っているため温泉成分が析出している。



右の写真は塩素タンク。塩素を自動的に注入する。

露天風呂や貸切の大浴場の浴槽には、底に、源泉からと濾過槽から来る湯が出てくる口が開いている。温泉は浴槽だけで、シャワーなどは水道水を沸かして使っている（もともと温泉の温度が高くないので、熱交換で湯を作るようなことはしていない）。



貸切湯の湯船。一番手前の穴から源泉が、奥にある複数の穴から濾過した温泉が出てくる。



たわらやでは、飲泉ができる源泉も提供している。

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

＜信仰・伝承＞

温泉に関わる神社[315]としては、白山神社がある。同社は、明治 18（1885）年まで白山社と呼称されてきた。近世までは江沼一円に分布する白山宮の末社の一つで、現在の祭神も菊理比売大神である。この菊理比売大神は白山比咩神と同一の神とされ、泰澄が養老元（717）年に登拝したという縁起を持つ白山信仰の中心、白山比咩神社の主神として祀られている[316]。この神社は、もともとは医王寺の鎮守であり、開湯伝説に出てくる長谷部信連が浴場の二階に安置したという観音菩薩の石像を霊代としていたが、明治５（1872）年、神鏡に改められた。現在の地に遷ったのは昭和 14（1939）年である。５月に春の祭礼があり、神輿の巡行などが実施される（大正時代までは３月実施）。また、昭和 36（1961）年よりは、白山神社の秋期例大祭として、９月下旬に「山中温泉　こいこい祭」が実施されており、山中温泉最大の観光イベントとして、獅子舞、神輿巡行に加え、新山中節の披露や大規模な盆踊り、パレード、みこし入湯の儀などが華やかに行われている[317]。



白山神社



こいこい祭　大獅子
※山中温泉観光協会提供



長谷部神社　湯立ち神楽
※山中温泉観光協会提供



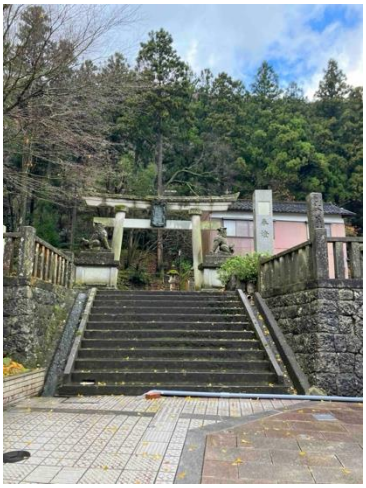
長谷部神社　湯立ち神楽
※山中温泉観光協会提供

315 神社・仏閣については、別注がない限り、若林喜三郎編「山中町史」山中町史刊行会　昭和 34 年を参照。

316 菊理比売大神の説明は白山比咩神社ホームページ　https://www.shirayama.or.jp/hakusan/history.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

317 「こいこい祭」については、山中温泉ホームページ「こいこい祭／チラシ」https://www.yamanaka-spa.or.jp/wp-content/uploads/2024/08/1_2_merged.pdf（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

温泉に関わりの深い神社としてはもう一つ長谷部神社がある。これは、もともと医王寺本堂に祀られていた長谷部信連（のぶつら）の肖像を、文政５（1822）年に武建霊神（たけみかづちのかみ）として奉称したものであったが、明治５（1872）年に神体を神鏡に改め、明治９（1876）年、長谷部神社と改称した。その後一時白山神社の相殿となったが、昭和 19（1944）年、独立して現在地に遷座した。かつては６月５日に菖蒲祭、10 月 10 日に温泉祭があったが、現在では、６月４日に「菖蒲湯まつり」が小規模に実施されているのみとなっている。このまつりでは、長谷部神社で白山神社宮司による春季温泉例祭・菖蒲入湯修祓（しゅうばつ）式が執り行われる。この日、共同浴場である菊の湯は菖蒲湯になる。かつては各旅館の湯がみな菖蒲の湯になっていたが、今菖蒲湯を行っている旅館は半分程度である[318]。



長谷部神社鳥居。ゆげ街道からすぐのところにある。



長谷部神社本殿

俗称薬師山の麓にある国分山医王寺（いおうじ）は、近世まで「お薬師さん」の通称で知られ、山中に湯治に来る客は必ず参詣していた寺院である。本尊は薬師如来と観音菩薩であるが、年１回のご開帳の時しか拝観できない。先に触れた開湯伝説がそのまま開山と中興の縁起となっており、天平年間（729～748 年）に行基が創設、承平年間（931～937 年）に兵火に焼かれたが、建久年間（1190～1198 年）に長谷部信連が再興したとされる。なお、堀麦水（ばくすい）の「三州奇談」所収の「加州山中村湯縁起」には、行基の開山のおり、湯が湧いた場所の隣に白山妙利社（はくさんみょうりしゃ）があったこと、長谷部信連を導いた白鷺が白山妙利権現（はくさんみょうりごんげん）の化身であったことが記され、白山信仰との繋がりが窺えるものとなっている[319]。

医王寺は、江戸期には広い寺地を持ち、多くの木地師、漆器師を含む地内の住民は、医王寺支配とされ、寺社奉行の管理下に置かれた。このため、麓から医王寺に向かう道（薬師道）には、近世、多くの木地師の店が軒を連ねた。また、先に触れたように、江戸時代、本尊薬師如

318 「菖蒲湯まつり」については、現地調査ヒアリング、及び、山中温泉ホームページ「６／４は温泉に感謝する「菖蒲湯まつり」の日。」https://www.yamanaka-spa.or.jp/news/2927（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

319 白山信仰との関わりについては、鈴木堅弘「『山中温泉縁起絵巻』から読み解く霊場と信仰　寺社縁起・温泉霊場・白山信仰」佛教藝術　338 号　平成 27 年１月　P41-P70 を参照。

来のご開帳、観音像のご開帳の際には、境内で、芝居などの出し物が多く行われている。温泉に関わる行事としては、２月２日の行基会、３月 15 日の涅槃会、５月４日・５日の甘茶祭り（薬師如来の縁日であるが、現在は甘茶祭りという名で行っている。かつて前田利家が大阪夏の陣のため湯治をしていた家臣に武運長久を祈らせたことを縁起とした大般若会として行われていたこともあった）、11 月 27 日の長谷部信連公忌、12 月 31 日の湯祈祷がある。寺内には宝物殿があり、国の重要文化財に指定されている「陶製金剛童子立像」（明治 33（1900）年に古社寺保存法により国宝に指定。現在の文化財保護法では重要文化財）、加賀市指定文化財の「山中温泉縁起絵巻」（昭和 34（1959）年指定）、「木造大日如来座像」（平成 21（2009）年指定）がある。

医王寺には、「まず湯に入るときは、手ぬぐいを湯に浸し頭をうるおし、うす湯（湯の湧き口）で口をそそぎ、薬師瑠璃光如来を念じて心静かに入ること」という山中温泉における入浴の作法も伝わっている[320]。



医王寺の門。人が通ると山中節の放送が流れる。



医王寺の本堂



国指定重要文化財　陶製金剛童子立像



加賀市指定文化財　木造大日如来座像

320　ここまで現地調査ヒアリングによる。

＜芸能＞[321]

近世から続く芸能としては山中節がある。確かな起源は不明だが、上客であった船頭客などが持ち込んだ追分調の歌曲が転嫁したのではないかという通説がある。昭和 15（1940）年には早くも保存会ができ、昭和初期に芸妓「初代米八」が、それまでの唄に三味線を付け、正調山中節を確立している。三味線がついてからは、山中温泉で芸妓が芸を披露するときは必ず山中節を一曲入れることとなり、この結果、山中節の名が次第に全国に知れ渡るようになった。また、米八も、多くのレコードを録音し、NHK のラジオでも活躍した。



初代　米八


現物のレコード

山中節は大正期から映画の題材にもなり、梅村容子主演「山中小唄」（大正 12（1923）年松竹配給）、嵐寛寿郎主演「旅の者心中」（昭和２（1927）年マキノ・プロダクション製作）などが撮影された。戦後も龍崎一郎・若山セツ子「さすらいの旅路」（昭和 26（1951）年新東宝配給）、島倉千代子・若山セツ子「いで湯の姉妹」（昭和 31（1956）年東宝配給）などで山中節が取りあげられている。また、「いで湯の姉妹」に出演した山中温泉の芸妓、柳香は、公開年の昭和 31（1956）年に歌手デビューし、浅草ゆめ子として「山中節」のレコーディングを行っている[322]。

第二次世界大戦直後、昭和 20 年代から 30 年代初め、山中温泉には 60 軒もの芸妓の置屋があり、各置屋に 10 人内外の芸妓が所属していた。検番もあり、置屋の取りまとめをしていた（検番は、山中座が竣工する少し前まであった）。当時置屋では、曜日ごとに長唄や三味線を教えるところも多く、山中節もその中で芸妓が学んでいた。米八が存命の間は米八が所属する置屋である可奈津屋に山中節を学びに来る芸妓も多かったが、段々と芸妓というよりコンパニオンが増えていくと学ぶ人も減っていった。山中節が流行るに連れて芸妓以外でも山中節をやる人も増えたが、米八の正調山中節を継承しているのは芸妓だけである。

唄と三味線だけだった山中節に踊りがついたのが昭和 45(1970)年の大阪万博の時である。日舞の藤間流６代目宗家が振付をした。手ぬぐいを使う理由は伝わっていないが、温泉とい

321　この項は現地調査ヒアリング。

322　映画、戦後の歌手デビューなどについては若林喜三郎編「山中町史」山中町史刊行会　昭和 34 年を参照。

うことで振りに取り入れたとも考えられる。山中節を習うには、まず踊り、ついで三味線、最後に唄となっている。唄が一番難しい。

山中温泉で芸妓が栄えたのはバブルの頃までで、その後は次第に数を減らし、現在では、置屋が３つ、芸妓が５人となっている。うち、「千鶴の家（ちづのや）」に３人（うち１人は令和４年に弟子入りしたばかり。踊りが好きだということで入った）、あと置屋が二つあり、それぞれに一人ずつ芸妓がいる。置屋も、この頃は、主人がいるわけではなく、芸者をやっている人自身がやっている。

昭和 59（1984）年、山中温泉観光協会により、山中節全国コンクールが始まり、北陸三県を中心に名阪などから毎年９月の第一日曜日に多くの人が集まって山中節を披露している（唄のみ）。もっともコンクール参加者が多かった年は 150 人くらいおり、近年でも 80 人くらい集まる。山中節振興会は、山中節保存会がなくなった後にできた団体で、山中温泉の旅館業界の有力者が立ち上げた（山中節保存会自体も、芸妓だけではなく、旦那衆や町民が参加していた）。芸妓は参加しないが、踊りの披露などで協力している。その他、山中節振興会では、６月の第２日曜日に山中節認定審査会（審査に通ると３級～１級、初伝・中伝・奥伝が認定される）、11 月に「唄（うた）いやんこ」（好きな人が 20～30 人集まり、一人ずつ山中節を唄い続ける催し）を行っている。一般市民向けには山中座がやっているカルチャー教室があり、山中節を学べる。金沢にも幾つか民謡教室がある。

現在、山中節は、山中座の上演「四季の舞」が土日祝日に一公演ずつあり、１月２日に「舞初め」が実施されている。「四季の舞」では、山中節・山中小唄・山中祭り獅子踊り・こいこい音頭が常に演じられ、これに季節の長唄、小唄が付く。公演時間は 40 分程度である。出演するのは芸妓と山中座の座員となっている。座員は９名いる（芸妓ではない）。獅子踊りも宗家藤間流の振付である。



初代　米八　晩年の弟子、千鶴の家のぼたんさん



手ぬぐいを使う山中節の踊り
※山中温泉観光協会提供

この他の披露の場としては、特定の旅館で「山中節の夕べ」として、毎週火・木・土・日に定期的に踊りの上演を行い、月・水・金に唄の上演を実施している。山中座の貸切上演も 10～12 月にかけて年間 10 数回ほど実施されており、他の温泉地に泊まってバスツアーで貸切公演だけ観る客もいる。料亭や宿のお座敷に呼ばれることもあるが、近年は少ない。また、中

学校にも山中節（唄・三味線・舞踊）を教えにいっており、先般は、教科書に使う映像資料としても取りあげられた。

平成 22（2010）年には、山中節を山中漆器と合わせて観光振興に役立てるプロジェクトが実施され、山中節を道中流しとして再構成するとともに、そのための楽器として山中塗技術による三味線と胡弓の制作が行われた。三味線奏者で作曲者の本條秀太郎氏（紫綬褒章も受賞している三味線界の著名人）のプロデュースで、正調山中節を取り入れた新曲である。この道中流しは、新型コロナウイルス感染症の影響が大きくなる前まで、９月初めの日曜日に年１回継続実施されており、東京にも公演にいったことがある。ただし、現在は休止している。山中漆器の楽器は商工会に保存されている[323]。

＜特産品＞[324]

現在、山中温泉を代表する特産品となっている山中漆器は、山中温泉の奥に位置する旧真砂（まなご）町に永禄２（1559）年頃に越前から木地師が移住して作り始めたものが、元禄年間（1688～1704 年）に山中温泉に伝わってきたことを起源とする。天保９（1838）年には会津若松より蒔絵の技術が入り、安政年間（1854～1860 年）には糸目引きの技法（轆轤（ろくろ）を回しながら木地に刃物を当て模様を付ける手法のひとつ。山中漆器の特徴となっている）が開発され、幕末には山中漆器は温泉と並ぶ大きな産業として確立された。品目としては、籠、茶道具、菓子箱、盃、酒器、手塩皿、盆、椀など食器類、煙草入、仏具、花器、コマなどの玩具など多種多様なものが作られていた。

幕末頃には江戸や長崎へも進出を図っていた山中漆器であるが、明治維新前後の混乱により一時停滞、その後、東北地方への拡販や海外への輸出を始め、明治中期には江戸期を上回る隆盛となった。明治後期になると、大量生産による品質低下、その結果としての売上不振に悩む。しかし、その後復調し、明治末期からは轆轤の電動化が始まったこともあり、大正期には、家具の輪島、宗教具の金沢に対抗する食器・玩具等の山中として北陸三大漆器産地のひとつとなった。その後、第二次世界大戦が始まると民需の不調、漆の不足から停滞したが、戦後は庶民に手の届く日用品を主体としていたことから急激に復興、昭和 30 年代前半まで大きく繁栄した。

漆器産業は、昭和 30 年代以降、プラスチック産業の発展により大きな影響を受けることになる。この中で、山中漆器は、昭和 28（1953）年頃からいち早くプラスチック化にも取り組み、プラスチック漆器への転換を進めた。結果、山中のプラスチック漆器は順調に市場を拡大、大きく輸出を伸ばし、1980 年代に中韓との競争が激しくなるまで、山中の主力産業として成長を続けることになった。

国際的な競争環境の変化に対応し、1970 年からは伝統的な製法の山中漆器の強化も図られ

323 道中流しと楽器制作については、山中商工会・経済産業省中部経済産業局「山中温泉伝承音楽と伝統工芸による元気再生プロジェクト報告書」平成 22 年３月を参照。休止については現地調査ヒアリング。

324 山中漆器については西島明正編集「山中町史完結編」平成 18 年３月を参照。

るようになり、昭和 50（1975）年には国の伝統的工芸品にも認定された。また、1990 年代からは、先に触れた山中温泉自体の歴史性を活かしたまちづくりとも強く連動、山中節の道中流しへの楽器提供、山中漆器をモチーフとした山中座の開館、山中漆器が展示されている芭蕉の館、隣接する菅谷町の工芸の館（ろくろの里）の木地挽きろくろ体験の実施などが行われている[325]。



芭蕉の館に展示されている山中漆器の名品



人間国宝、川北良造氏作の山中漆器

また、山中温泉の代表的な銘菓としては、「娘娘（にゃあにゃあ）万頭」がある。これは、山中弁で若い女性のことを「にゃあにゃあ」ということに因んで名付けられた名称の温泉まんじゅうとなっている。発売元の「山中石川屋」は、山中温泉に本店を置く明治 38 年創業の地元の老舗で、商品自体は昭和初期に開発されたものである[326]。



娘娘万頭

山中温泉は大聖寺川沿いの鶴仙渓という景勝地に囲まれた温泉地で、湯と景色に引かれ、松尾芭蕉をはじめ長年に亘って多くの湯治客を呼んできた。江戸時代、惣湯（湯ざや）を中心に発展してきた湯治文化は、ユカタベー等の風習や、今も繋がる山中節、山中漆器などの豊

325 この段落は現地調査及び加賀温泉郷ホームページ「工芸の館（ろくろの里）」 https://www.tabimati.net/spot/detail_225.html（令和６年 12 月 19 日最終確認）

326 山中石川屋ホームページ https://www.yamanakaishikawaya.com（令和６年 12 月 19 日最終確認）

かな芸能・芸術をも生み出してきた。山中の総湯「菊の湯」は、観光のシンボルであるとともに、今でも地域住民にとって欠かせない生活インフラであり続けている。

高度経済成長期、団体旅行客対応に一歩出遅れた山中温泉は、それが故に過剰な開発に晒されることも少なかった。結果、バブル崩壊後、地元主導での景観づくりなど先んじて次の一歩に踏み出すことができ、その代表的な成功例である「ゆげ街道」は、鶴仙渓と表裏をなす歴史情緒溢れる街並みを生み出している。こうした山中温泉の歩みを支えてきたのが、昭和５（1930）年という早い時期に始まった温泉の集中管理システムである。

温泉の集中管理を継続させている地域の繋がりは、また、温泉や観光施設の乱開発も緩やかに抑え込んでいる。山中温泉が美しい景観と歴史情緒を魅力とし続けていられる背景には、こうした地域の連帯がある。

（９）野沢温泉

野沢温泉は、長野県北部の山間にあり、坂道の多い街並みに多くの宿屋や民宿、共同浴場、商店が密集して立地し、多くの外国人も行き交う特有の賑わいのある温泉地である。すぐ近くに日本有数の規模を誇る野沢温泉スキー場があり、冬季は多数のスキー客が行き交う。

温泉地は、旧野沢温泉村であった中心地区の大湯地区、北よりの麻釜（おがま）地区、北東の山麓にある湯入り地区の３地区と、昭和 31（1956）年の合併まで旧市川村であった地区に分かれている。野沢温泉の大きな特徴として、旧野沢温泉村の３地区の温泉管理について、野沢組という江戸時代からの歴史を引き継ぐ村の組織が大きく関与していることがある。ここでは、これを踏まえた上での野沢の温泉地としての特性と、湯の管理の技術のあり方を概観する。

野沢温泉の歴史

＜近世以前＞

野沢温泉の開湯伝説として流布しているものとしては、現在、共同浴場となっている「熊の手洗場」において熊が怪我を癒やしていたのを村人が見つけて湯を発見したというもの、聖武天皇の頃に行基が発見したというもの、修行中の山伏が見つけたというものなどがある[327]。

文献としては、寛弘２（1005）年から寛弘４（1007）年の間に成立した拾遺（しゅうい）和歌集の高井郡（現在野沢温泉村がある下高郡を含む土地の名称）の項に「犬養（いぬかい）の湯」を詠った和歌が掲載されており、これを野沢温泉に比定する説がある（小菅（こすげ）神社の近くに犬飼の地名も残っている）。「犬養の湯」については、13 世紀初めに順徳天皇が著した歌学書「八雲御抄（やくもみしょう）」にも出てくる。同書には、歌枕の解説として、９カ所の温泉が掲載されているが、「ゆ」ではなく、「みゆ（御湯）」と呼ばれているのは、犬養の湯を含めた３カ所のみである。このため、野沢温泉は、日本三御湯ともされている。また、鎌倉時代には「湯村」という地名が見えており、温泉の存在を窺わせるものとなっている[328]。

野沢温泉の史料上の初見は、弘治３（1557）年の上杉謙信の小菅神社への願文、及び、同年の武田信玄の書状であり、ここでは野沢の名前で温泉のことが触れられている。残念ながら、これ以上の史料は発見されておらず、中世における野沢温泉の実情について詳しいことはわかっていない[329]。

上杉と武田の攻防が幾度も行われた北信濃四郡は、慶長５（1600）年、関ヶ原の戦いの直前、徳川方の森忠政の支配に入った。忠政は、関ヶ原の戦いの後、徹底した検地を実施、一揆を弾圧して、その後に繋がる社会体制を構築した。この慶安の総検地により、現在の野沢温泉村の原型となる野沢村の土地や石高が把握され、また、年貢に責任を持つ村役人（村内自治を行い、藩や幕府代官に対して予め定められた年貢を納める責任を負う村民。東日本では、

327 この段落は、現地調査ヒアリング及び野沢温泉観光協会「十二神将外湯めぐり」パンフレットを参照。

328 この段落は野沢組資料（郷土史家富井盛雄氏が書いた新聞記事のスクラップ、拾遺和歌集コピーなど）を参照。

329 この段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

名主・組頭・百姓代の三役である場合が多い。世襲もしくは本百姓による札入れなどで選ばれる）が定まった。その後、藩主は松平忠輝となるが、慶長 15（1610）年に忠輝の本拠地が越後に移ると、野沢を含む地域は忠輝の他の所領から分けられ、飯山藩として独立した。野沢が飯山藩の支配下にあったのは、享保２年（1717）年までで、その後は明治維新まで幕府直轄の天領（てんりょう）となっている[330]。

多くの史料が現れるのは野沢が飯山藩の支配下になって後である。最初期のものとしては、寛永９（1632）年の通行手形への記載があり、上杉謙信が開いた越後より続く関田峠（せきだとうげ）を越えて、女性客が、新潟より野沢に湯治に来ていたことがわかる。女性のみでの湯治は珍しくなかったらしく、同様の史料は他にも複数残る。ただし、道中が必ずしも安全とは限らず、支配が飯山藩から幕府直轄の天領になった後の安永３（1774）年のものになるが、野沢峠越えで野沢を目指したおびんとおきちの二人が、道中賊に襲われ、おびんが殺されてしまった記録もある[331]。

寛永 16（1639）年、松平忠倶が飯山藩主となる。忠倶は、元禄４（1691）年、湯治用の別荘（御殿）の設置を命令、総湯（そうゆ）の一つと薬師堂があった周辺の地を接収した（御殿の地は、現在共同浴場「大湯（おおゆ）」のある地のすぐ近くの林業センター周辺）。御殿は、その後、飯山藩主が松平家から永井家、青山家と変わって行く中でも維持され、青山家が転封された享保２（1717）年まで継続する。転封後は、天領となったため、御殿は建て壊され、土地は元の地主に返された[332]。続く天保の頃の記録をみると、当時の共同浴場は、総湯（現在の大湯）など６カ所であった。まだ内湯がなかった当時は、湯に通いやすいよう、周囲の宿から総湯に通路や廊下を設けていたと申し伝えられている[333]。

江戸時代の湯治客の客数の記録はないが、ほぼ同じ状況であった明治２（1869）年～４（1871）年の記録では年平均 8,000 人内外、７月・８月が 1,000 人超えで最も多く、雪に閉ざされる 12 月、１月は 100～300 人と僅少であった[334]。

宿は農地を持つ農民が運営する兼業のもののみで、湯治客は米・味噌その他の食料品を持参し、宿では薪や漬物のみを無料で提供、宿賃や寝具などの損料（そんりょう）を取るという自炊型の湯治場であった。湯治場として栄えてはいたものの、湯銭を負担するようになったのは、明和８（1771）年以降であり、それまで野沢村は、幕府行政的には、温泉地ではなく、農山村の扱いであった。江戸時代も終わり近く、天保８（1837）年になると、宿数は 24 軒あり、兼業ではあったものの、二階建てで、通常の農民には許されない造りとなっていた。

---

330 この段落は長野市誌編さん委員会編集「長野市誌　第三巻　歴史編　近世 1」長野市　平成 12 年を参照。

331 この段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

332 忠倶の別荘建設の経緯は野沢組総代「野沢温泉薬師堂縁起」平成４年 11 月を参照。

333 天保の記録は野沢温泉旅館ホテル事業協同組合有志一同「野沢温泉研究誌」野沢温泉旅館ホテル事業協同組合　平成 22 年 10 月を参照。

334 この段落と次の段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

＜明治・大正・昭和戦前期＞

明治政府が地方の行政体制の整備を本格的に始めたのは、明治４（1871）年の廃藩置県の後である。同年に布告された戸籍法により、戸籍を編成するために新しく「区（この時点では県の下に区しかないので単一区と呼ぶ）」とそこにおいて戸籍を管理する「戸長（こちょう）」「副戸長」を設けることとなった。この単一区の大きさや、それまでの名主・庄屋などの村役人と戸長をどう関係づけるかなどについて明確な規定はなく、そのまま村役人を戸長にしてもしなくても構わないというものであった。この結果、戸長と村役人が併置され責任が分からなくなるなど混乱が起こったため、翌５（1872）年には、それまでの村役人は廃止という太政官布告が公布された。また、この年、従来５（1872）年だけであった区分けを「大区」と「小区」の二段階としている。このうちそれまでの村にあたる小区には 100 戸に１名の用掛（ようがかり）、50 戸に１名の代議員を置くこととなった。用掛は江戸時代の百姓代に当たる役職である[335]。

筑摩（ちくま）県（明治９（1876）年に長野県に統合）では、これに対応し、まず明治５（1872）年段階では、県下の単一区に対し、江戸時代の村における名主を戸長、組頭を副戸長とし、それまで一時的に戸長と呼ばれていた当初の単一区の長を区長、副戸長と呼ばれていたその補佐役を副区長と呼ぶこととした。この時点では、江戸時代の村方三役のうち、名主と組頭（名主の補佐役）が、そのまま、戸長・副戸長に横滑りすることとなったのである。続いて、明治７（1874）年、単一区を大区（5,000 戸相当）と小区（500 戸相当）の二段構造とし、明治８（1875）年から９（1876）年にかけて、大区小区の統合整理を進めた。この結果、江戸期以来の村は、小区同士合併してその規模を拡大させることになった。この大区小区制度はうまくいかず、直後の明治 11（1878）年に郡区町村制に、さらに明治 21（1888）年に町村制に変更され、区の名称はなくなることとなった。

慶安の総検地でできた野沢村やその他の村も、上記の流れに沿って整理されている。野沢村では、明治６（1873）年、まず、旧名主が戸長となった。次に大区小区制の施行にあたっては、明治８（1875）年、旧野沢村に柏尾・北原新田・重地原が合併され、翌９年の筑摩県の長野県への合併に際し、長野県北大 21 大区４小区となった。昭和 31（1956）年に旧野沢温泉村に合併することとなる市川村は、この時、北大 21 大区５小区となっている。その後、町村制の施行とともに、北大 21 大区４小区から柏尾・北原新田・重地蔵が分離（瑞穂村に）、逆に５区（市川村）から坪山が編入され、豊郷村となる。この豊郷村がその後の野沢温泉村の中核となる地域である[336]。

こうして行政上の整理が進んでいくなか、少しずつ、地域の発展も進んでいく。まず問題となったのが交通基盤である。野沢温泉は、奥信濃とよばれた古来交通の便の悪い土地であった。近世、野沢温泉に至る主要街道は、江戸と善光寺や佐渡金山を結ぶ北国街道の脇街道に当たる野沢街道で、南方の瑞穂村から野沢に繋がっていた。その他、飯山から越後に向かう

335 この段落と続く段落は、井戸庄三「明治初期の大区小区制の地域性について」歴史地理学　123 巻　昭和 58 年 P12-P27 を参照。

336 この段落を含む３段落は、野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

谷街道、上越から繋がる平丸峠・富倉峠・関田峠、飯山から善光寺に向かう飯山街道など、各方面からの街道筋も開かれていたが、いずれも険しい山道であった。明治初期の入湯客が年平均 8,000 人程度にとどまっていたのも、このような交通の便の悪さが大きく影響していたと考えられる。

本格的な道路の拡幅が始まったのは明治 19（1886）年からである。この年、飯山・瑞穂方面から野沢に繋がる里道が改修され、漸（ようや）く車馬で野沢まで行けるようになった。これを皮切りに、明治から大正初期にかけ、野沢と外を結ぶ街道に加えて、野沢温泉内の各湯を結ぶ道路についても改修が逐次実施され、大正３（1914）年には野沢街道が県道に、北西の坪山地区に向かう里道が郡道となり、人力車・馬車などでの移動が容易となった。

結果、大正６（1917）年の浴客数は 13,618 人へと伸びている。滞在日数は 48,545 泊となっており、平均滞在日数は 3.56 日である。大正 13（1924）年になると、浴客数は 16,274 人、滞在日数は 64,240 泊、平均滞在日数 3.95 日となっており、客数も平均の滞在日数も少しずつ拡大していったことがわかる。ただし、この年の旅館数は 24 軒であり、江戸時代と軒数的には変わりはない[337]。

鉄道の整備が飯山まで伸びてきたのは大正の後半になる。現在の JR 飯山線の前身である飯山鉄道（昭和 19（1944）年に国鉄に吸収され、飯山線に）が豊野駅と飯山駅の間で開業し、長野方面から飯山まで鉄道で繋がったのは大正 10（1921）年である。飯山鉄道の上境駅は大正 12 年開業、昭和４（1929）年には新潟の十日町まで開業し、長野方面と新潟方面双方から上境までは鉄道、その後は人力車、馬車などを利用してのアクセスが可能になった。また、昭和５（1930）年には長野電鉄で木島駅（現在は廃駅となり、長電バスのターミナルに）に来られるようになり、そこから乗合バスというルートも出来た[338]。

明治後半から大正期は、野沢でスキーが始まった時期でもあった。明治 44（1911）年にオーストリア＝ハンガリー二重帝国の軍人、レルヒ少佐が、新潟県の高田（現在の上越市）で、日本で初めてスキー技術の訓練を行った。翌明治 45（1912）年、飯山中学の教師が、校費でスキーを調達して高田でスキーの講習を受け、技術を飯山に持ち帰る。その直後、飯山中学でスキーを学んだ生徒たちが野沢に帰省し、スキーを滑ったという記録がある。これが野沢における初スキーである[339]。

大正 12（1923）年には、野沢スキー倶楽部（現：野沢温泉スキークラブ）が創立され、スキーの本格的な普及が始まった。翌 13 年には野沢スキー場が開場、14 年には、野沢シャンツェ（スキージャンプ場）が造られるとともに、野沢温泉第１回スキー競技大会が実施されている。

昭和には海外との人的交流も始まった。昭和４（1929）年に、シャンツェの世界的権威であ

337 この段落は野沢温泉マウンテンリゾート観光局提供資料を参照した。

338 この段落は、野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

339 この段落を含む３段落とスキーマン人夫制度は、ウパシプロダクション製作「NOZAWA ONSEN SKI CLUB 100th Anniversary」野沢温泉スキークラブ　令和５年を参照。

るノルウェーのオラフ・ヘルセットが来村、野沢のシャンツェを改造し、ジャンプ技術を伝授した。翌５年には野沢最初の全国スキー大会である第５回明治神宮スキー競技会が開催されるとともに、オーストリアのハンネス・シュナイダーが野沢を訪れ、自らが開発したアールベルク・テクニックを教授している。アールベルク・テクニックは、現在でも広く使われているスキーの指導技術で、シュナイダーはこの技術の解説する映画「スキーの驚異」（1920 年製作、大正 11（1922）年日本公開）とその書籍版で世界中のスキーヤーを魅了しており、現在でも「アルペンスキーの父」、「スキー術の革命児」として知られている。

野沢のスキー客が大きく増え始めたのは、翌昭和６（1931）年のことである。当時は飯山線上堺駅から野沢までスキー客の荷物を運ぶスキーマン人夫制度もあった。また、スキー客対応の民宿もこの頃から始まっている[340]。

こうした中で出てきたのが、各旅館へ源泉を開放すべきという議論であった。それまで野沢の主要な源泉は、野沢温泉の自治組織である野沢組が管理し、共同浴場もしくは素材加工（麻、アケビの蔓、細工物用の竹など）や調理など、村民の共同利用に供されていた（野沢組については後述）。これを開放し、各旅館が内湯で使えるようにしようという動きである。結果、昭和４（1929）年より、竹ノシ釜、下釜、茹物釜の３つの源泉から引き湯が行えるようになった。源泉から引湯配湯槽までが野沢組、それ以降は需要者である旅館が工事を負担した。野沢組の資料をみると、昭和６（1931）年より温泉貸付料金を収受しており、旅館への引き湯が開始されたことがわかる。またその後も分湯のための設備工事の記録が残り、引き湯が拡大していったことが窺える[341]。

昭和戦前期、殆ど毎年のように野沢ではスキーの全国大会が開かれており、それまでは厄介者でしかなかった冬季の積雪を、村に新たな産業をもたらす恵みに変えつつあった。しかし、こうした野沢温泉の発展も、第二次世界大戦の激化に伴い、一旦の停止を余儀なくされる。楽しむスキーは禁止され、できるのは「戦技スキー」の訓練のみとなった。昭和 19（1944）年には、学童疎開の受け入れも行われている[342]。

＜第二次世界大戦後＞

明治維新後と同様、第二次世界大戦後も、野沢温泉では、行政区画の変更・拡大が行われている。まず、昭和 28（1953）年、豊郷村から野沢温泉村に名称が変更された。昭和 30（1955）年には当時飯山市であった前坂、重地原地区を編入、翌 31（1956）年には市川村と合併している。以降、野沢温泉は、ここで拡大した地域を前提に進んでいくことになる[343]。

戦後の野沢温泉の復興の大きなきっかけとなったのは、昭和 23（1948）年の野沢での第３

340 民宿の開始は、野沢温泉村「野沢温泉村 100 年の歩み」昭和 61 年 11 月を参照。

341 この段落は、野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月及び野沢組資料を参照。

342 この段落は、ウパシプロダクション製作「NOZAWA ONSEN SKI CLUB 100th Anniversary」野沢温泉スキークラブ令和５年を参照。

343 この段落は、野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

回国民体育大会スキー競技会兼全日本スキー選手権大会の開催である（前年に第２回国体のスキー競技会として計画されていたが、輸送事情によって中止となり、北日本スキー選手権大会として開催されていた）。その後も昭和 24（1949）年第 22 回全日本学生スキー大会、昭和 29（1954）年第９回国民体育大会スキー競技会、昭和 32（1957）年第 35 回全日本スキー選手権大会ノルディック部門、と次々と全国大会が実施され、その他２回も全日本学生スキー大会が開催されるなど、野沢は国内スキー競技の中心地として再び活況を呈するようになった[344]。

これに合わせ昭和 24（1949）年からは温泉利用の拡大も強く求められるようになり、昭和 28（1953）年には、大規模集客施設として、温泉プールも竣工した。また、新規源泉の掘削も、昭和 36（1951）年まで積極的に実施された。民宿が拡大したのも、スキー客が大きく増えた昭和 25（1950）年頃である。昭和 32（1957）年には保健所から営業許可を取る本格的な民宿営業も始まった。当初は農家の副業的な位置づけであり、建物も囲炉裏のある茅葺きのものが多かったが、客数の急激な拡大を受けて建て替えが急激に進んだ。結果、野沢では薪の使用がなくなり、プロパンガスに代替されるなど現代化が一気に進んだ[345]。

なお、温泉に訪れる民宿客は、この当時、村内の共同浴場を利用していた。民宿に温泉が引かれるようになったのは、それまで旅館にしかなかった引き湯の権利を民宿でも抽選で持てるようになった昭和 39（1964）年からとなっている[346]。

こうした成長の様は、観光客数にも如実に表れている。野沢温泉への観光客の入込数は、昭和 29（1954）年の 96,500 人から、昭和 35（1960）年には 137,400 人、昭和 40（1965）年の 459,500 人へと、10 年強で４倍以上の伸びを見せた[347]。

昭和 40 年代に入っても、スキーを中心とした野沢の観光の急拡大は続いた。入込数をみると、昭和 45（1970）年には 789,700 人、昭和 49（1974）年には、前年にオイルショックが世界を襲ったにも関わらず、1,034,400 人とついに 100 万人を突破している。100 万人越えはその後も続き、バブル直後の平成４(1992)年には現在(令和６年)までのピークである 1,391,100 人に達している。こうした急拡大の中、野沢が他の温泉地と異なっていたのは、上記のような急成長の中、土地が狭隘であり、また道路も険しいままであったことから、宿泊施設の巨大化や団体バスの大量受け入れが行われなかったことである。代わりに野沢では、小規模な民宿が急激に増えることとなり、多くの民家が民宿に転向、昭和 55（1980）年には 388 軒にまで増えている。また、観光客の殆どがスキー客（平成２（1990）年には約 88%がスキー客）となり、スキー客目当ての土産物店、飲食店などが大きく増加し、街中は非常に賑わいを見

344 この段落は、ウパシプロダクション製作「NOZAWA ONSEN SKI CLUB 100th Anniversary」野沢温泉スキークラブ 令和５年を参照。

345 この段落は、野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

346 この段落は、名倉一希・甲斐宗一郎・小泉茜彩子・王 汝慈・呉羽正昭「野沢温泉村におけるスキー観光の変容 －インバウンド・ツーリズムの展開に着目して－ 」地域研究年報 39 巻 平成 27 年 P65-P89 を参照。

347 観光客数の推移は、野沢温泉村役場企業課「村から世界へ　野沢温泉のスキー」野沢温泉村　平成５年 12 月を参照。

せた。しかし、こういった繁栄も、バブル崩壊後の全国的なスキー市場の縮小の中で、次第に陰りを見せていくことになる[348]。

バブル崩壊後の観光入込の推移をみると、平成 15(2003)年には 758,700 人、平成 20(2008)年には 638,600 人と右肩下がりが続き、平成 23（2011）年には、571,800 人と、新型コロナウイルス感染症が蔓延する以前で最少の数値になっている[349]。

この間の野沢温泉の動きとしては、まず国際イベントへの対応がある。平成７（1995）年には第 15 回インタースキー大会（４年に一度、世界中のスキー関係者が集まる国際会議）が野沢で実施され、平成 10（1998）年には長野オリンピック＆パラリンピックが開催、野沢ではバイアスロン競技が行われた。こうした国際イベントを主催するため、野沢では、平成６(1994)年に国際会議場やスキーのトレーニング施設を持つ温泉施設「野沢温泉スパリーナ」、中心街とスパリーナを結ぶ動く歩道「遊ロード」、オリンピックに合わせて「ふれ愛公園」が整備された。合わせて外国人宿泊客に向けた旅館や民宿の改良も多く行われた[350]。

しかし、オリンピック終了後、客足はますます遠くなる。このためコストダウン施策として平成 17（2005）年に村営スキー場が民営化され、野沢温泉村出資の第三セクター野沢温泉株式会社に移行する。この結果、リフトの整理など、合理化が実施された。また、宿泊施設数も、平成５（1993）年の 401 軒から、平成 16（2004）年の 344 軒へと大幅に減少し、相当の淘汰が行われることになった。

こうした不振に対し、野沢温泉は、平成 16（2004）年の観光協会の改組（それまでの任意団体を解散し、一般社団法人化）を皮切りに組織体制を強化、旅行代理店に頼らない独自の旅行商品の開発や、オーストラリアなど海外を含む積極的なプロモーション活動を展開した。また、温泉街自体でも、外国人スタッフの雇用拡大や一泊二食付きに慣れていない外国人客の夕食難民化への手当、日本文化を体験出来るバスツアーの開発など、多くの対応を実施している。今では外国人が野沢に移住し、サービスを提供する側になったり、施設のオーナー側になることも珍しくない。結果、2010 年代から顕著にインバウンド観光が拡大し始め、今や日本人観光客が少ない冬の平日などは、町の殆どが外国人ばかりという風景が当たり前のものとなった。

こうした対策を受け、野沢温泉の観光入込客数は平成 23（2011）年を底に再び増え始め、新型コロナウイルス感染症からの復帰後、令和５（2023）年には、714,600 人まで回復している[351]。

---

348 現地調査ヒアリング及び名倉一希・甲斐宗一郎・小泉茜彩子・王 汝慈・呉羽正昭「野沢温泉村におけるスキー観光の変容 - インバウンド・ツーリズムの展開に着目して- 」地域研究年報 39 巻 平成 27 年 P65-P89 による。

349 観光客入込数の数値については、長野県ホームページ「観光地利用者統計調査」
https://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangyo/kanko/toukei/riyousya.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

350 ここから３段落は、名倉一希・甲斐宗一郎・小泉茜彩子・王 汝慈・呉羽正昭「野沢温泉村におけるスキー観光の変容 - インバウンド・ツーリズムの展開に着目して- 」地域研究年報 39 巻 平成 27 年 P65-P89 を参照。また、現地ヒアリングの結果を参照。

351 長野県ホームページ「観光地利用者統計調査」
https://www.pref.nagano.lg.jp/kankoki/sangyo/kanko/toukei/riyousya.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

＜野沢組の体制と活動内容＞

野沢温泉の源泉は、一般財団法人野沢会が保有している源泉が 17、自家源泉が 22 の計 39 本ある。先に述べたように戦後昭和 36（1961）年まで積極的に掘削が行われていたが、その後は少ない。また昭和 59 （1984）年、野沢温泉村地下水資源保全条例が施行されており、勝手な掘削は禁じられている。

以下、野沢会保有の源泉を中心に源泉の管理状況を見ていく。この理解のためには、まず、野沢温泉村においてどのような自治が歴史的に行われてきたのかを押さえておく必要がある。

現在の野沢組は、平成 12（2000）年に認可地縁団体として法人化されており、惣代１名と副惣代２名、約 20 名の協議員で構成されている。認可地縁団体とは、地域における自治活動の維持・強化を目指し、平成３（1991）年、地方自治法の改正により作られた制度で、認可は、市町村長が行う。認可の要件は「良好な地域社会の維持及び形成に資する地域的な共同活動を行うことを目的」としている団体であり、現に活動していること、対象となる区域（町や字など）が明確であり、その地域に住む人が構成員になれる（現に相当数がなっている）ことである。令和５（2023）年４月における認可数は 295,838 団体であり、内訳としては「自治会」が 44.1％と最も多く、ついで「町内会」（22.8％）、「区、区会」（12.6％）などと続く。なお、ここにおける「区」は、多くの自治体で自治体内の旧集落の呼称として戦前より使用している「区」である[353]。

野沢組の特徴は、上記で示したように全国では、「町」や「区」単位での団体が殆どを占めるのに対し、市川村と合併前の旧野沢温泉村全域を対象とした広い範囲を対象とする地縁団体となっていることである。現在、野沢温泉村では、全体を 20 の地区に分けているが、そのうち 12 区が市川村との合併前からの旧野沢温泉村で、野沢組はこの 12 区全体を代表する団体となっている。また、業務内容についても、「惣代の文書蔵（郷蔵）に長年保存されている古文書の管理や研究」、「湯澤神社など寺社に関すること、燈籠祭りや野沢温泉の道祖神祭りの運営執行」、「野沢組が所有する山林原野の管理、道路管理」、「堰、用水の管理、近隣各区との用水の問題対処」、「外国人と共生できるよう外国人の居住実態・調査等の諸問題への対処」など、通常の自治会業務のレベルを遙かに超える範囲を扱っている。中でも大きなものが、「野沢組が所有する温泉源の管理運営と、共同浴場の管理支援」である。なお、野沢組の活動原資は、スキー場への土地の貸出料と、この源泉の使用料が主なものとなっている。

上記の活動のうち、温泉管理については、認可地縁団体としての野沢組ではなく、一般財団法人野沢会が実施している建て付けとなっている。この背景には、昭和 31（1956）年市川村と合併するに当たり、温泉管理を旧野沢温泉村の範囲で確立する必要があったことにある。そのため、その当時法人化しやすかった部分を先行して財団法人野沢会（現在は一般財団法

352 この項は現地調査による。別途典拠がある場合は脚註を付けている。

353 総務省自治行政局市町村課「地縁による団体の認可事務の状況等に関する調査結果」令和６年３月を参照。

人）として、昭和 36（1961）年、法人化させている。見た目上の法人は二つあるが、役員等は全く同じであり、実態は一つの組織である。



野沢組惣代事務所。野澤会（野沢会）と連盟となっているとともに、湯澤神社、道祖神神社の社務所ともなっている。

旧野沢温泉村の 12 の区の選挙で野沢組の惣代（そうだい）が選ばれる。任期は一年で再選はない（引退して暇が取れるようになった人に事前に選挙の根回しがある。また任期が短いのは、基本的にこれまでの事業の継承を行うことが中心業務となっているためと言われている）。ちなみに、区の分けは、昔の住居や親戚関係などが影響するため、今は地理的にきちんと定まっているわけではなくなっている。全 12 区が、総計 90 個の伍内（５戸程度の組）に分かれており、総戸数は 629 戸である。戸数には区ごとに大小のばらつきがある。ちなみに野沢組の持つ山は、各区に貸し出され、区で利用している。水路の管理については、今は９割を村が、５％を野沢組、残る５％を各区が担当している。村の消防団や防犯組織にも野沢組でまとまって参加している。

野沢組が、旧村一円を対象とし、多くの財産・権限を持つ組織となっている背景には、江戸時代から続く歴史的な経緯がある。野沢組代々の惣代の資料をみると、初代は寛文６（1669）年の名主から始まっている。その後も、江戸期における惣代の名称は、名主・組頭・百姓代などの村方三役の肩書きとなっており、野沢組の伝統がそもそも慶安の総検地でできた旧野沢村の村方による自治から繋がっていることがわかる。その後、明治に単一区制度が始まると肩書きは戸長、副長となり、さらに大区小区制度となると戸長、用掛に変わる。地域の公的な役職名がそのまま野沢組の代表の名称となっているのである。惣代という肩書きになったのは町村制が施行された後となる（町村制施行以降、村長が公選制となったため、ここで行政村と、江戸期以来の地縁組織である野沢組との間に一定の距離ができたと思われる）。

幕藩体制が間接統治を旨としていたこともあり、近世までの村では、山林等の土地や財産を、村民で惣有し、共同利用することが普通であった。また、道路や堰、水路についても、大工事を除き、藩や幕府ではなく、村がその管理の責を負っていた。神社仏閣等の祭礼につい

ても同様で、僧侶等が常駐する比較的規模があるところを除き、村の氏子組織がその管理を実施していた。野沢の特徴は、行政村が確立された後も、こうした業務を行う村方の組織及び村での財産の惣有の制度がそのまま残り、現在にまで繋がっていることにある。その一つの現れが、源泉の共有であり、また共同浴場の管理運営支援となっている。

＜野沢温泉の源泉＞

野沢の主要な源泉は近世からの自然湧出が多い。泉温や湧出量についてはそれぞれ異なるが、泉質についてはほぼ同一で、アルカリ性単純硫黄温泉（低張性アルカリ性高温泉）、pH は 8.0～8.7 である。源泉からの配湯は、各源泉から混合されたり、分岐したりして極めて複雑である。より合理化された配湯に切り替え、集中管理をすることで、効率化して多くの湯を適温で使えるようにしようとする計画があり、集中管理設備を置く土地まで購入したが、地形が複雑で険しく、配湯経路を整理することができなかった。そのため、未だに、配湯経路は非常に複雑なままである。



麻釜地区に集中管理設備を設置する予定で購入した土地。現在は、足湯として活用されている。

下記、野沢会の持つ源泉について、令和６（2024）年測定の泉温と湧出量を示す（気温 4.4 度）。なお、個別計測が難しい源泉については、分湯先などからの推計となっている。

向林源泉（スパリーナ等に配湯）　泉温　26.8 度　湧出量　109.4 リットル／分
湯の宮十王堂源泉（十王堂の湯等に配湯）泉温　64.5 度　湧出量　18.0 リットル／分
新田第１/２＆十王堂源泉（旅館等に配湯）泉温　82.2 度　湧出量　39.0 リットル／分
※新田第１/２と十王堂はまとめて配湯されており、個別の計測ができない。
大湯源泉第１・２（大湯に配湯）　泉温　64.8 度　湧出量　64.6 リットル／分
河原湯源泉（河原湯等に配湯）　泉温　59.9 度　湧出量　44.0 リットル／分
熊の手洗い場源泉（熊の手洗い場等に配湯）泉温　42.0 度　湧出量　323.5 リットル／分

※泉温は令和５（2023）年の測定値

下釜源泉（旅館等に配湯）	泉温　80.9 度	湧出量　96.0 リットル／分
丸釜源泉（旅館等に配湯）	泉温　84.3 度	湧出量　67.7 リットル／分
茹釜源泉（旅館等に配湯）	泉温　84.2 度	湧出量　73.2 リットル／分
麻釜てらゆ源泉	未測定	
大欅源泉（旅館等に配湯）	泉温　55.8 度	湧出量　3.9 リットル／分
竹のし釜源泉（旅館等に配湯）	泉温　78.0 度	湧出量　69.1 リットル／分

※泉温は令和５（2023）年の測定値

御嶽釜源泉（分湯槽等に配湯）	泉温　57.1 度	湧出量　69.1 リットル／分
大欅源泉（分湯槽等に配湯）	泉温	湧出量　168.8 リットル／分

※複数源泉から分湯されている枡から湧出量を計算しているため泉温測定ができない。
もっとも多く分湯されている枡の泉温は 80.8 度

麻釜漏れ湯	泉温	湧出量　3.6 リットル／分

※複数源泉を足し合わせているため泉温測定ができない。最も多い源泉の泉温は 85.6 度

一号井源泉（分湯槽等に配湯）	泉温　65.0 度	湧出量　12.3 リットル／分

※同源泉の総代所有分。常磐屋所有分が別に 4.6 リットル／分ある。

真湯３号井源泉（真湯等に配湯）	泉温　67.0 度	湧出量　24.0 リットル／分

野沢温泉の共同浴場[354]

共同浴場は 13 カ所あり、うち２カ所を野沢組配下の「区」が、11 カ所を「湯仲間（ゆなかま）」が管理している。この湯仲間は野沢組とは異なる各地域の集まりで、野沢組とは独立の組織となっている。野沢組と湯仲間の関わりは、野沢会として各共同浴場に配湯の契約をすることと、共同浴場の修繕・建て替えの際に費用の 20%（村が別に 20%）を支援することのみで、後の管理は湯仲間が行っている。源泉については、「大湯」、「滝の湯」など、古くからあるものについては湯仲間で持っているが、他は基本的に野沢組所有のものを使っている。水道代、電気代は湯仲間の自前で、維持費が年数十万円かかっている。そのため、観光客が大量に加水をすると水道代が嵩（かさ）み、問題となる（共同浴場の湯は温度が高めなことが多い）。

共同浴場の清掃は、金曜日を中心に、週２回が多く、月６回のところや毎日行っているところがある。どこの共同浴場も、担当の数人（もっとも大きい大湯で６人）が、朝６時から 30 分ほど掛けて掃除をする。掃除については、区が管理しているところは区内の当番制、湯仲間が管理しているところは湯仲間内での当番制である。区が管理する共同浴場の掃除については、当該区の伍内の輪番となる。輪番のスケジュールについては野沢組で決めている。

354　この項は現地調査による。



湯仲間の管理の輪番の札が掛かっている（十王堂の湯）。



維持費寄付者の札を掲げる所もある（滝の湯）。

この他、共同浴場ではないが、旅館以外で使える温泉として、村有のスパリーナ、福祉センター、特別養護老人施設、小学校などがある。また、麻釜の源泉では、区民に限って、茹で物が認められている（以前事故があり、観光客の立ち入りを禁止した）。使っているのは、茹釜や大釜（野菜など）、丸釜（アケビの蔓細工をする人が毎日のように使用）、竹ノシ釜（温泉卵）である。

利用する人は、温度計をみて何分くらい茹でるかを把握しつつ、食材を湯に入れている。食材を茹でることは昔から行われていたが、卵については、第二次世界大戦戦後しばらく経って、みなが卵を気楽に買えるほど豊かになってから普及した。こうした釜に加え、茹でたものを冷やすための水槽もある。茹で物に利用している源泉も、野沢組が、輪番で掃除の担当を決めている。

また、熊の手洗場などには、共同浴場の他、洗濯場が付随しており、洗濯などに利用することができる。野沢菜を漬けるシーズンには、時間限定で、共同浴場を野沢菜の洗い場として提供することも行われている。


茹で釜


大釜で野菜を茹でているところ。



竹ノシ釜で温泉卵を茹でているところ。



温度計があるため、必要な茹で時間がわかる。



茹でた後は水釜で冷やす。



季節によっては蓋をしてゴミが入らないようにする。



備え付きの清掃用具。ゴミを熱湯の中から拾う。



熊の手洗い場の横の洗濯湯。

以下、野沢温泉村の共同浴場のリストを示す。

中尾の湯	区管理	昭和 21（1946）年開湯	毎日掃除	野沢会配湯
新田の湯	区管理	昭和 22（1947）年開湯	月金掃除	野沢会配湯
十王堂の湯	湯仲間管理	天保 10（1839）年開湯	週２回掃除	野沢会配湯
秋葉の湯	湯仲間管理	昭和 55（1980）年開湯	月６回掃除	野沢会配湯
松葉の湯	湯仲間管理	昭和 35（1960）年開湯	月６回掃除	野沢会配湯
大湯	湯仲間管理	江戸時代以前開湯	月・金掃除	湯仲間配湯

河原湯	湯仲間管理	江戸時代以前開湯	毎日掃除	野沢会配湯
麻釜の湯	湯仲間管理	明治２（1869）年開湯	月６回掃除	野沢会配湯
滝の湯	湯仲間管理	天保 10（1839）年開湯	週１回掃除	湯仲間配湯
真湯	湯仲間管理	天明６（1786）年開湯	月６回掃除	野沢会・湯仲間配湯
上寺湯（じょうでら）	湯仲間管理	大正 12（1923）年開湯	週２回掃除	野沢会配湯
熊の手洗場	湯仲間管理	大正 12（1923）年開湯	週２回掃除	野沢会配湯
横落（よこち）の湯	湯仲間管理	明治４（1871）年開湯	毎日掃除	野沢会配湯



中尾の湯



新田の湯



十王堂の湯



秋葉の湯



松葉の湯



大湯



河原湯



麻釜湯



滝の湯



真湯



上寺湯



熊の手洗湯



熊の手洗湯には野沢温泉の縁起も掲げられている。



横落の湯

野沢温泉の共同浴場の湯温は高めに維持されており、多くの共同浴場ではあつ湯・ぬる湯２種類の浴槽がある。加水用の水道がある場合もあるが、かけ流しの源泉をパイプや樋で浴槽外に流すことで湯温を調整する工夫も見られる。



熊の手洗湯の湯口。源泉かけ流しの湯の量を２本の樋で調整している。湯口から真下に落ちている温泉はあつ湯に、向かって右側の樋はぬる湯に、左側の樋は浴槽外に流れる。



湯口の左側の樋は浴槽外の溝につながっており、浴槽の湯温が熱すぎる場合は浴槽外に出す湯を増やすことで温度調整をする。熊の手洗湯では地元の浴客が樋を調整していた。

上記の共同浴場のうち、「大湯」については、伝統的な湯小屋作りの建物となっている。現在の建物は平成６（1994）年に建て替えたもので、地域の宮大工が建造した。その前の大改築は昭和 22（1947）年で、今と同様の姿の写真が残る。そのさらに前の大改築は明治 21（1888）年である。明治 21 年に大湯を越後の宮大工が建造した際の資料やその後の改築の資料が残されており、平成６年の建て替えでは、そうした資料を利用し、伝統的な姿を再現している（江戸期については天保９（1838）年の浴槽の絵図が残されている）[355]。

大湯は、明治 19（1886）年刊行の「日本鉱泉誌（にほんこうせんし）」において「総湯（惣湯）」という名称で記されている。野沢に於ける「惣湯」という名称の史料上の初見は、宝永３（1706）年の御用邸存廃に関わる文書で、少なくともこの頃から明治までは「惣湯」と呼ばれていた。惣、とは村人皆という意味であり、大湯が、長らく、野沢を代表する、野沢村の人全ての共同浴場でとして存在していたことがわかるものとなっている。



大湯の内部の様子。外見だけでなく、内部構造を含め、かつての湯小屋づくりを宮大工が再現している。
左側の壁は、大湯内部の男湯、女湯の仕切り（この写真は女湯側）。手前の湯船はぬる湯、奥はあつ湯となっている。



高い天井から光が取り入れられている。

355 この段落と次の段落は、石川理夫「共同湯の原点『惣湯』としての長野県野沢・渋温泉『大湯』の成立」温泉地域研究　第９号　平成 19 年９月　P11-P21

野沢温泉の湯の管理の技術[356]

＜野沢温泉の源泉管理＞

野沢組（野沢会）では、所有している源泉と、そこから分湯槽までの配管の設置と管理をしている。野沢温泉の湯は、さほどスケールが析出するものではないので、上述した共同浴場や茹で物をする源泉の清掃と、年３回の湧出量調査に伴う分湯槽の清掃などが主なものである。この他、湯の出が悪くなったなどの連絡があった時には緊急で確認し、必要な清掃などを行う。

分湯槽の清掃で大変なのは、道が狭く、交通量が多いので、交通誘導をしつつ安全を確保しながら作業を行うことである。清掃においては、分湯槽の蓋を開け、各配湯先に流れている枡の口をブラシでこすってゴミや付着物を除去する。



分湯槽の清掃をする様子。車通りがある場合は、交通誘導をしながら実施しなければならない。

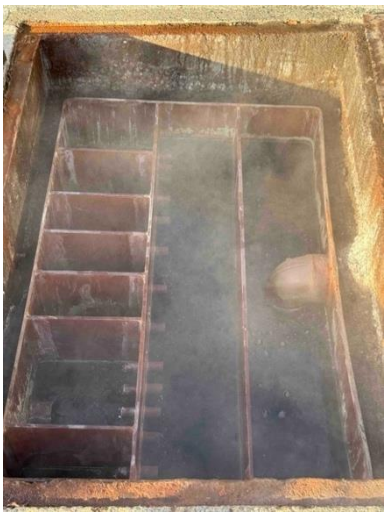
左：重い蓋を取り外す。
右：断熱材を外す。



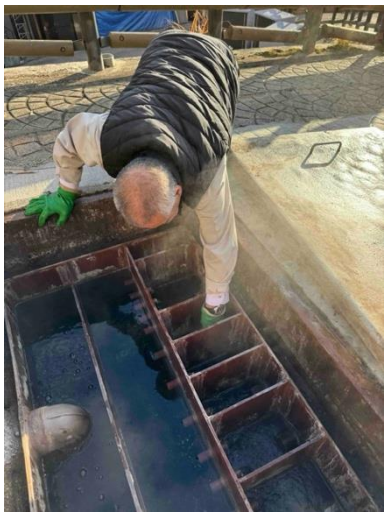
分湯槽の中の仕切りについては基本的に木材で作っているが、15 年程で腐食してしまい、取り替えが必要となるので、現在最新のものは FRP 製に取り替えた。蓋の上にはスタイロフォームを敷き、中の温泉が冷えないようにしている。地中を通っているパイプは塩ビ管であるが、現在までのところ取り替えには至っていない。使っているパイプは、富士化工株式会社の温泉用フジパイプの製品が多い。

ただし、細い管だと詰まってしまうため、径の太い管を使用している（融雪用に道路の下に入れてある管は、細いため、温泉を通すと詰まる危険性が高い。そのため、融雪には、ボイラーで湧かした真水を使っている）。

356 この項は現地調査による。



FRP 製の分湯槽の枠。かつては同じ形の木枠であった。右側から流れる温泉を左側に細かい枡に分けている。



枡には湯が流れ込む口がついており、そこに汚れやゴミが溜まる。径が決まった口の数で配湯契約をしている。



ゴミやスケールをこすりとるために使っているブラシ。



木製の分湯槽の枠。令和６年現在でも一つを除いて木製である。腐食が進むため、15 年程度で取り替える。
※野沢組提供写真

＜旅館「さかや」における湯の管理＞

「さかや」は、当主が 18 代目となる老舗の旅館で、旅館としての創業を明治元（1868）年としているが、これは切りをよくしただけで、いつからやっていたかはわかっていない。江戸時代は造り酒屋との兼業であり、明治２（1869）年、造り酒屋を辞めて旅館専業となった。「さかや」という屋号はそこから来ている。客室数は 29 室だが、大型バスが入ってこられず、団体客の受け入れがあまりなかった野沢温泉では最大である。

風呂としては、男性大浴場「鷹の湯」、女性大浴場「月の湯」、男女入れ替えの露天風呂「月見の谷」、貸切風呂「松の湯」がある。また、別館の寿命延（Jon nobi）に、水着を着て楽しむ露天スパ「亀の湯」が用意されている。

源泉は敷地内に３本あり、蓋は締め切りで、中をいじることはない。源泉の上に屋敷神が祀られている。

３本の源泉は混合されており、そこから直にポンプを通じて高い場所にあるタンクに上げ、各浴場には自然流下式で流している（貸切風呂については、タンクを経由せず、ポンプからタンクにいくまでの間から源泉を取っている）。ただし、うち一本については、「石の湯」で飲泉用に使うため、混合せずに「石の湯」まで引く配管がある。

敷地内にはもう一つ源泉があるが、これは大湯の湯仲間が持っているもので、共同浴場の「大湯」に使われている。「さかや」では手を触れることはできない。



「さかや」の源泉は鳥居の向こうの屋敷神を祀る二つの小さな洞の下にある。



大湯の源泉。「さかや」は手を触れられない。



源泉からのパイプ。ここから、タンクと「石の湯」の飲泉用にそれぞれポンプアップして流される。



旅館裏の高くなっているところに設置されているタンク。ここから自然流下して各浴槽に配湯。

男性大浴場「鷹の湯」は、大湯と同じ意匠の湯小屋作りで、同じように宮大工が建造した。ただし、大湯は男女の仕切りが小屋内にあるが、ここは湯小屋全部が男性風呂である（「大湯」の内部写真の左側にある仕切りの壁がない）。

浴槽は大まかに三つに区分されており（板を上に置いて区切っているが、浴槽として分かれているわけではなく、置かれている枠の下はそのまま繋がっている）、湯口に近い方は 43～44 度、真ん中は 42 度前後、湯尻の方は 40～41 度になるように調整する。湯尻の方には浴槽の縁が２㎜ 程度低くなっているところがあり、そこから溢れたお湯が流れていく。廃湯は川に捨てられている。



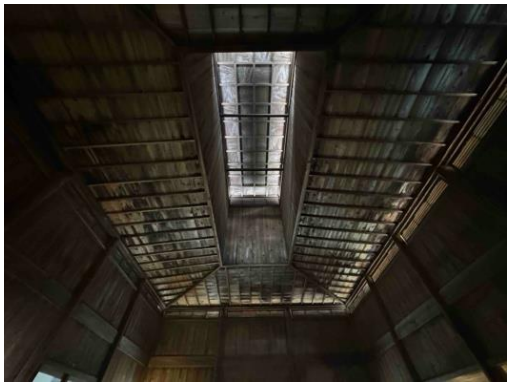
左側の湯口があるところは熱く、右側はぬるい。



枠があるが下は繋がっている。



外からみた「鷹の湯」。宮大工による湯小屋造り。



中から見た湯小屋造りの天井。大湯と異なり、仕切りの壁がないので、全体が見える。

湯船には、飲泉用を含め、３本の竹筒の湯口から源泉が流れ落ちている。飲泉用は飲泉用源泉からお湯が直接流れ、残り２本の竹の湯口は、まずタンクから来た混合された源泉のお湯を二つの枡に分けて貯め、そこからそれぞれの枡に繋がっている竹筒に繋げている。二つの枡には容積の大小があり、そこから竹の湯口に繋がる経路にも長短がある。容積の高い枡に入って長い距離を引かれたお湯は、そうでない方より、温度が低くなるため、浴槽の真ん中の仕切りのところに落とす。温度が高い湯が出る竹筒と飲泉用の竹筒から出るお湯は一番温度が高い仕切りに落とす。この三つの竹の湯をどこに落とすか、枡の蓋を開ける（開けると冷める）か開けないかで湯温を調整している。源泉から来るパイプのバルブもあるが、これでの調整はあまり行っていない。毎日の調整は竹筒の位置と枡の蓋がメインである。



竹筒の湯口。下が枡。



枡の蓋を開けたところ。

「さかや」で飲泉が出来ているのは、かなり以前に保健所の許可を取り、そのまま更新しているからである。新規に許可を取ることはまずできない。



飲泉用の竹筒



飲泉用の紙コップ

温度の調整は１日３回行う。まず、湯もみをして攪拌し、浴槽内の温度を均一にしてから温度を測り、それに基づいて竹筒の位置、枡の蓋の開け閉めを行う。冬は源泉を多く流し、夏は絞る。源泉掛け流しで加水は一切ないので、夏は湯温が下がり切らないことがある。その際には温度の低いところに入ってもらう。



湯もみの様子



金具は硫黄分でかなり痛む。

浴場内には水風呂もある。これは山から引いている清水を利用している。清水のための井戸は、近場で掘ると温泉になってしまうので、少し離れたところに掘っている。

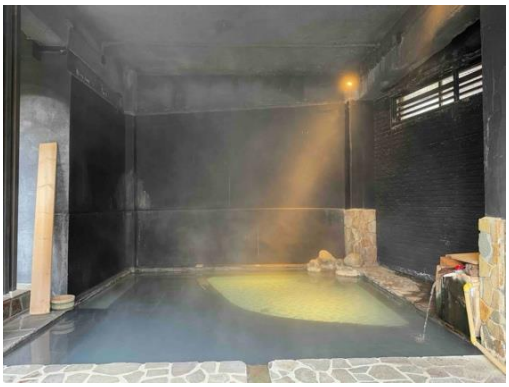
女性大浴場「月の湯」もほぼ同じ仕組みである。建築デザインも同じ湯小屋仕立てとなっているが、こちらの方がサイズが小さい。また宮大工ではなく、建築会社が施行している。貸切風呂については、客自身が加水して温度を調整する。

スケールは少なく、タンクから後は、空気に触れることもなければ機械設備を経由することもないので、パイプが詰まることは 10〜20 年に一度あるかどうかである。むしろ大変なのは、日々の温度調整と浴槽の清掃である。硫黄泉のため、金具などはすぐに黒ずんでしまい、維持に苦労する。

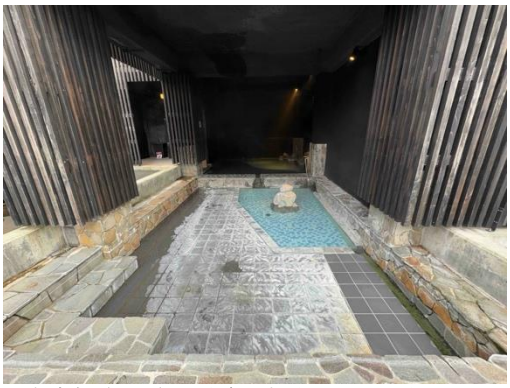
また、竹筒の湯口は 1 年程度で壊れてしまうので、定期的に交換する必要がある。かつては自分で竹を取っていたこともあるが、現在は、専門の業者に頼んでいる。源泉からタンクに上げるためのポンプについては、以前はさほど故障することがなかったが、新型に変えたところ、 1 年も経たずに壊れてしまった。業者が修理してみると、部品の中で溶けたものがあった、という。地元の業者が選定した、しかも新型なのにも関わらず、温泉にはそういったことがある。

寿命延は、50 年以上前の施設を近年取得し、外国人観光客を意識して改装したものとなっている。ここのスパが着衣で入るものとなっているのはターゲットが外国人であることを踏まえているからである。源泉が二つあり、一つは足下からの湧出、もう一つは麻釜源泉からの引き湯である。

足下から湧出する源泉は、53 度の泉温で、コントロールできない。引き湯はバルブでコントロール可能なため、それで湯温を調整する。麻釜からの引き湯は塩ビパイプで行っており、竹に見えるよう上に節がついた造形のカバーを付けている。夏場は熱くなるため、湯を張る面積を大きく広げる。それにより、湯が冷め、入り易い湯温になる。



浴槽右上隅の岩の下から足下湧泉している。



調査時点（12 月）は水色の部分しか湯を張っていないが、手前まで湯を張れば、それだけで大分湯温が下がる。

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

野沢温泉にある主な寺社としては、湯澤神社、健命（けんめい）寺、薬師堂があり、現在は全て隣接して立っている。このうち湯澤神社については創建年代や縁起は不明、現在の祭神は健御名方命（たけみなかたのみこと）である[357]。社務所は野沢組となっている。

毎年９月８日に夜祭り（灯籠祭り）、９日に例祭が行われる。祭礼の歴史は定かではない。戦前までは、後述する野沢温泉の道祖神祭りの三夜講（三夜講とは厄年に当たる 40、41、42 歳の年齢の男衆が作る組。５組あった）が実施していたが、昭和 20 年代に三夜講がなくなったため、野沢組が会計面の補助をする形で再スタートした。灯籠祭りでは、野沢組惣代事務所前から湯澤神社までの提灯行列（制札燈籠を先頭に御幣燈籠・花燈篭・鈴燈篭・奴燈篭・三十六歌仙燈篭などが火を灯して行列する）、猿田彦のシメ切りの舞や、獅子舞、子どもたちによる三十六歌仙の舞などが盛大に行われている。温泉に関わる神事、祭礼などはない[358]。



湯澤神社鳥居



湯澤神社本殿

357 この段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

358 この段落は地縁団体野沢組のページ「湯澤神社例祭・野沢温泉灯籠祭」https://www.nozawakai.or.jp/tourou-matsuri/　（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

その他、碑のみであるが、麻釜の近くに釜神が祀られている。祭神としては碑に大己貴命と少彦名命が刻まれている。明治 14（1881）年建立とあり、「温泉のあるところには必ずこの２神が祀られているので」という祭神選択の理由が記されている。近世以前どうであったかはわからない。

寺社としては、健命寺がある。薬王山健命寺は、小堺村（現：飯山市）にある曹洞宗弥勒寺の末寺で、傑湯山とも号する。天正 12（1584）年の開山で、後述するように野沢菜についての縁起がある。本尊は伝聖徳太子作の薬師如来像となっている。薬師如来を奉じているが、温泉に関わる法会などはない[359]。


麻釜近くの釜神の碑


健命寺

野沢において温泉に関わる信仰の対象となっているのが薬師堂である。正保２（1654）年の開堂の縁起では、飯山藩士小栗吉次が湯治に訪れ、惣湯最寄りの宿に止宿（ししゅく）したところ、その宿で密かに薬師如来を拝んでいることに気づいた。その薬師如来を広く皆が参詣できるようにするべく、村役を説得し、自らも鰐口（わにくち）を寄進して小さな堂宇を建て、薬師如来像を奉じた。すると惣湯や河原湯から湯上がりの湯治客が列をなして参詣したという。延宝２（1674）年には、藩主松平忠倶（ただとも）から薬師如来を温泉の本尊として守り伝えるべしという下げ文を得ている。下げ文の宛先は湯宿の主人であり、僧職ではなく、村方が薬師堂の管理を行っていたことがわかる。この頃までの立地場所は、現在の温泉ホテルの向かい側、林業センター辺りと考えられている。延宝４（1676）年には本尊１体、脇仏２体、12 神将の計 15 体の仏像が新たに設えられた。元禄４（1691）年、先に述べた忠倶の別荘（御殿）の建設が決まると、別荘予定地にあった薬師堂は一転立ち退きの対象となってしまう。結果、同年、薬師堂は現在地に移転することとなった[360]。

野沢が天領となり御殿が取り壊された享保２（1717）年、以前の薬師堂の地は村持ちとなったが、そこへの薬師堂の再移転は許可されなかった。そのため、寛保元（1741）年、元の薬師堂跡地に湯の宮が建てられた。明治維新後、湯の宮は湯澤神社に合祀されたため、現在同地には、湯の宮を記念した碑が建てられているのみである。また、江戸時代の史料を見ると、元

359 この段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

360 この段落と次の段落は野沢組総代「野沢温泉薬師堂縁起」平成４年 11 月を参照。

の薬師堂だけでなく、その他２つの薬師堂があったことがわかる。現在も、野沢温泉には、熊の手薬師堂など他の薬師堂もあるが、それぞれの縁起は不明である。



健命寺近くの薬師堂。瑠璃光殿との扁額（へんがく）がある。健命寺近く



旧御殿（「さかや」の坂上）近くにある湯の宮の碑。昭和 57（1982）年建立と裏面にある。

また、上記の薬師に関わる縁起を踏まえ、現在 13 カ所ある共同浴場（外湯）には、それぞれ一つずつ、薬師如来と 12 神将の像が置かれており、観光プロモーションとして外湯を巡る「十二神将外湯めぐり」が行われている[361]。



「大湯」の薬師如来



「真湯」の十二神将



「熊の手洗湯」の十二神将

温泉にまつわる祭礼ではないが、野沢には、「野沢温泉の道祖神祭り」として平成５（1993）年に国の重要無形民俗文化財に指定されているお祭りがある。道祖神祭りとは、どんど焼きや左義長と同じ、小正月の火祭りのことで、中部地方から関東地方にかけては、村境や辻に置いて災厄の侵入を防ぐ道祖神の祭としてこの祭礼を行うことが多い。野沢温泉の道祖神祭りはその中でも最も盛大に行われるものの一つとなっている。正確な起源は不明だが、道祖神の碑に天保 10（1839）年と記載があることから、江戸時代後期から盛大に行われていたことは確かである[362]。

先に触れたように、野沢温泉の道祖神祭りの主役は 40、41、42 歳の年齢の男衆が作る三夜

361 この段落は野沢温泉観光協会「十二神将外湯めぐり」パンフレットを参照。

362 道祖神祭りについては長野デザインセンター「重要無形民俗文化財　野沢温泉の道祖神祭り」平成 14 年を参照。

講と呼ばれる組織で、これが３年に亘って祭りを準備して実施していた。しかし、昭和 20 年代、組織維持が難しくなり、一旦途切れてしまう。復活したのは昭和 30（1955）年で、爾来（じらい）、従来の 40、41、42 歳に加え、25 歳の厄年も加えた組織となっている。

道祖神自体は、野沢では各家庭の神棚に祀っているもので、前年に切った材木を乾燥させて作る男女１対の神像である。道祖神には、１月 14 日から御神酒を供え、15 日には道祖神場（毎年、道祖神の神殿が建てられる場所。現在は街中を離れた馬場の原）に持って行って神殿の前にある平桶に納める。その時、既に納められている道祖神から出来のいいものを持ち帰ることもあり、これは良縁に結びつくとされている。また、野沢温泉の道祖神祭りに納めるものとしては、男児の初児が産まれた時に作る大きな初灯籠もある。

野沢温泉の道祖神祭りは、前年、神木として山から木（ブナ）を切り出すところから始まる。１月 13 日、酒を飲みながらそのご神木を会場まで引いていき、その後は一旦酒を抜いて、高さ７m、さらにその上にご神木が 10m 以上突き立つ巨大な社殿を作る。社殿は、ご神木の柱に、もえ草やボヤと呼ばれる枝木を括り付け、天井には各家庭で使った松飾りを敷き詰めて作成する。

社殿が出来、道祖神や初灯籠などの奉納が終わり、夜になると、まず火元を貰いに行く。火元は大正元（1912）年以来、寺湯の河野家が務めている。火元を会場にもっていって、会場の隅にあるボヤに移して火元とする。そこからオンガラ（麻稈）と呼ばれるたいまつに火を移し、それで社殿に火を付けようと動く。この時、社殿の周りには、男衆が集まって火を防いでいる。参加者全てが酔いどれになって行う火を付ける側と守る側の攻防をメインとした火祭りが祭りのハイライトである。１時間半ほども続くとオンガラもなくなり、祭りは手じまい、社殿も、初灯籠も全てが火に投じられる。

この野沢温泉の道祖神祭りの社殿は、平成 10（1998）年、長野オリンピック冬季競技大会の聖火台にも使われている。



街角に飾られている道祖神



野沢温泉の道祖神祭りの会場となる馬場の原

温泉を使用する野沢の代表的な特産物として、麻の生産やアケビの蔓の細工物がある。これらは、かつては積雪で動けない冬季の農家の重要な副業であった。このうち先行したのが麻布の精製である[363]。

麻を布にするには、採取した後に蒸し、その後冷水に浸して皮を剥ぐ。次に剥いだ皮を裂いて繋いで糸をつくる糸紡(いとうみ)を行う。その後、布へと織り上げられる。薪を必要とせず 90 度の温泉の蒸気を利用することができる野沢は、麻の生産には最適で、江戸から明治の初めにかけては農家の重要な副業であった。源泉の麻釜の名称もここから来ている。野沢では、作った布を冬季雪にさらし、４月になってから販売しており、雪に晒すことから「小白」と名付けられていた。毎年４月後半には小白市が立ち、村内は大きく賑わっていたという。しかし、小白の生産は、明治半ば以降、木通(アケビ)蔓細工の売上が急増したことにより、その地位を奪われることになる。

アケビの蔓細工が始まったのは、天保年間（1830～1844）年の頃と伝えられている。当時の野沢にはアケビが這い茂っており、たまたま村に来た六部（巡礼の僧）がそれを囲炉裏で裂き、細工物を作ったことがあった。それを見た家人が始めたことだという。また、その際、麻釜に浸してから裂いたところ綺麗に裂けたので、爾来、蔓の加工に温泉を使うことになったと言われている。簡単な玩具や籠を作ったところ、湯治客に売れたので、次第に作る人が増えていった。しかし、加工が難しく、量産ができないことがネックとなり、大きくは広がらなかった。

このネックを解決したのが河野安信である。河野安信は、弘化２（1845）年、にぎりかんなを発明、また蔓裂き機を開発し、細工の効率と精度を大きく高めた。これにより、アケビの蔓細工は、土産物のみならず、笠当て（かぶり笠の内側の、頭に当たる所につける小さなクッション）など実用品としても販売できるようになり、慶応年間（1865～1868 年）には大規模化を達成した。

明治になると、手間の割に売上の少ない麻や内山紙の製作から、アケビの蔓細工へと副業を変える農家が増え、また、明治８（1875）年に河野安信が内国勧業博覧会に出品して好評を博したことで市場も拡大した。しかし、流通経路の独占などの問題が次の壁となり、一時苦境に陥ることになる。これを打破するため、明治 23（1890）年から明治 31（1898）年にかけて数次に亘って組合の組織化が図られ、明治 33（1900）年には海外への輸出を開始、大きく飛躍することとなった。

その後、アケビの蔓細工は、好不況の波にさらされながらも産業として持続し、第二次世界大戦直後には代表的な商品である籠が一時的に大きなブームを起こすまでに至り、籠成金も生まれるほどであった。しかし、その後、スキーブームが拡大すると、細工を担っていた農家の多くが副業を民宿へと鞍替えし、蔓の細工物の生産量は大幅に減少していくことになった。結果、現在でもアケビの蔓細工を野沢で作っているのは実質的に「蔵の店　三久工芸(さんきゅうこうげい)」一軒

363 麻とアケビの蔓の歴史については野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

となっている[364]。以下、三久（さんきゅう）工芸によるアケビの蔓細工制作を概術する。

原材料のアケビは、野沢だけでは全く量が足りない（昔は炭焼きなどで山の手入れをしていたためアケビも多く生えていたが、今は山が荒れ、そもそも少なくなってしまった）ため、三久工芸では、長野県北信地方や新潟などへ採取を依頼している。中でも量が多いのは新潟からのアケビである。雪が多い地域では雑木林にアケビが生えてくるため、それを取ってきてもらう。毎年 10 月から 11 月半ばにかけ、翌年１年分のアケビを確保し、家の中に吊るして保存する。

アケビの蔓細工の作り方には二種類あり、一つは赤茶色の皮を剝かずに編む野趣（やしゅ）がある「赤棒（あかぼう）」、もう一つは皮を剝いて作る「製白蔓（せいはくづる）」である。皮を剝いた方が、表面がつるつるして肌触りがよく、緻密に編めるため、軽く強度も高い。そのため昔はみんな皮を剝いて作っていた。その後、東南アジアから籐が入ってきたため、それとの差別化として、赤い色が残る皮付きで編むことが増えた。



三久工芸の店舗外観



アケビの蔓細工。製白蔓は蔓の色が様々である。

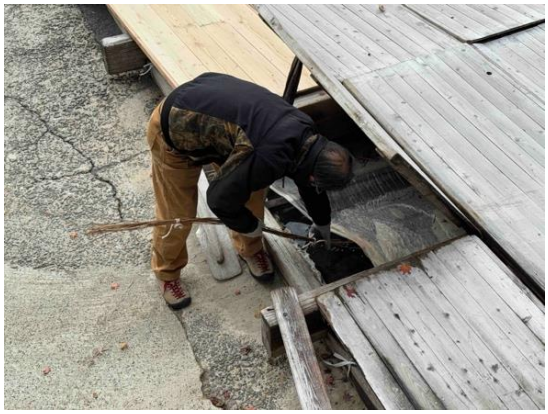
「赤棒」については、まず材料を選別・裁断し、編む直前の段階まで成形しておく。その段階で麻釜の丸釜に蔓を入れる。茹で時間は蔓の太さによって変わるが、長くても 40 分茹でていれば柔らかくなる。そのまま持ち帰って編み、蔓細工を作る。乾燥していると２日もあれば乾いてしまうのでそれまでに編み終わらなければならない。もし編み切れなかったらもう１回茹でにいく。２回目になるとすぐに柔らかくなる。編む際には、蔓の頭をちょっと切って、後は口で裂いて細くして編んでいく。

「製白蔓」については、まずアケビを一週間丸釜に入れる。丸釜から出したあと、今度は、融雪用の池にさらに一ヶ月半漬けておく。そうすると皮が腐って手と足だけでぼろっと取れる状態になる。皮は腐っているが、芯は問題ない。ただ、この時は臭気がひどい。それでまた丸釜に入れて１日煮て消毒する。出来た芯は、蔓そのものが持つ個性により、白いものもあれば、黒っぽいものまで色のバリエーションがある。その後乾燥させ、選別・裁断して編む直

364 これ以降のアケビの蔓制作については現地調査による。

前の状態まで成形し、また丸釜に入れて柔らかくして編み込んでいく。昔は、どこの地方でもこうして皮を剝いて作っていたが、今現在は、野沢温泉でしかやっていない。「製白蔓」の製品は年月を経ると飴色になり、独特の艶が出てくる。

昭和 59（1984）年に長野県の伝統工芸品に指定されている。



蔓をお湯で柔らかくする作業の様子。



作業場となっている丸釜。

アケビの蔓細工の商品の一つに、郷土玩具としてかつて全国的に大きな人気を誇った「はとぐるま」がある。これは、もともと、河野安信が弘化年間（1844〜1848）年に、善光寺の名物として生み出したもので、善光寺に鳩が多いことに因んでいる。この時の「はとぐるま」は、売れ行きが次第に減少、明治 10（1877）年頃、一旦販売中止となる。河野安信没後、河野虎之助が遺品から製作方法を研究し、河野為次郎と河野平作に引き継いだ[365]。

一時は年間５〜10 個程度しか売れていなかった「はとぐるま」だが、昭和 30 年代に入ると、日本郷土玩具の会に認められたことをきっかけに、大量の注文が入るようになる。その後、昭和 36（1961）年には長野市で開催された産業文化博覧会に出品すると、来訪していた当時の美智子皇太子妃のお目にとまり、献上品となった。

結果、昭和 40 年代に入ると、「はとぐるま」は大ブームとなり、また河野平作も「鳩爺」として著名となった（昭和 47（1972）年逝去）。当時、時折発表されていた郷土玩具番付でも常に東の横綱で、テレビでも紹介され、土産物としてだけではなく、しゃれたインテリア用品としても多く販売された。この中で、アケビではなく、より手に入りやすい籐を材料としたはとぐるまも多く作られた。しかし、ブームの終焉は早く、現在では作れる人は 10 人もおらず、皆高齢化している。そのため、現在では、「はとぐるま」はほぼ手に入らない状態になっている[366]。

---

365 この段落と次の段落は社団法人信濃路編集部「奥信濃野沢の話　その（１）　はとぐるま」住吉屋旅館　昭和 46 年を参照。

366 この段落は日本経済新聞電子版「野沢温泉の郷土玩具『はと車』　作り手が語る誕生秘話－吉越ます子（民宿経営）」令和５年１月 27 日、信濃毎日新聞朝刊「守る、つなげる―はと車　野沢温泉の郷土玩具　普及尽力の『鳩爺』没後５０年、特別展開催」令和４年４月 12 日、日本経済新聞「鳩車――昭和４０年代にブーム復活（信州の工芸品）」平成３年２月９日及び現地調査による。

食品としては野沢菜が有名である。健命寺の寺伝によれば、宝暦６（1756）年、浪速（なにわ）の天王寺に蕪菜（かぶな）の種を持って帰って蒔いたところ出来がよく、葉も茎も蕪も大きい野沢菜となった。特に寺領の保泉地のものが、出来が良かったため、雑種化しないよう、村では油菜や大根などを植えることを禁じたという。村明細帳などの江戸期の同時代史料には野沢菜を含む蕪菜の生産の記事は見えないが、明治 11（1878）年に県に提出された町村誌には、野沢で多くの蕪菜を生産し、飯沼などへ移出していること、また蕪菜の種を上越地方に移出していることが報告されており、江戸時代のある時期から名産品になっていたと思われる[367]。

野沢菜（秋菜）は８月末頃に種を蒔き、10 月まで何度か間引いて、11 月前半、雪が降る前に収穫する。間引いたものも、麻釜で湯がいて食べる。北信濃では、収穫した蕪菜は、漬け込む前に、水洗いをする。野沢菜の特徴は、この水洗いの際、温泉を用いることである。温泉のぬるま湯で洗った後はすぐに水で冷やし、樽に漬け込む。漬けて２週間で浅漬け、年末年始にはべっこう色の本漬け、３月になると酸っぱい古漬けになる。また、３月下旬から４月にかけても種を蒔き、春菜として収穫、浅漬けにする。かつては湯治客に野沢菜を無料で振る舞うのが慣習であり、その結果、全国に知名度が拡大したという[368]。

野沢菜は、平成 19（2007）年、「信州の伝統野菜」に選定されており[369]、野沢温泉村に加え、飯山市など長野県北部で広く栽培されている。長野県の野沢菜を含む漬け菜の収穫量は、21,700 トンと、日本一（シェア 64.4％）となっている[370]。

野沢菜の漬物への加工も、野沢温泉村だけでなく、安曇野市など多くの地域で行われている。この中で、野沢温泉村では、昔ながらの手法で漬け込んだ野沢菜漬け、健命寺産の種子を使った野沢菜漬けなど、伝統を活かして付加価値を付けた商品の製造を行っている。なお、健命寺産の原種は、江戸時代の農耕方法で栽培されており、寺から購入することができる。また、寺の山門前には「野沢菜発祥の地碑」が立っており、野沢菜の原種を育てる畑も広がるなど、その伝統を守っている[371]。その他の野沢温泉の特産物、土産物としては、温泉まんじゅう（中心街では製造工程を見学できるところがある）や長野県の名物の「おやき」がかねてより販売されている。また、近年ではクラフト・ジン（国際品評会で多くの賞を獲得[372]）、クラ

---

367 この段落は野沢温泉村史編纂委員会「野沢温泉村史」野沢温泉村　昭和 49 年３月を参照。

368 この段落は社団法人信濃路編集部「奥信濃野沢の話　その（２）　野沢菜」住吉屋旅館　昭和 47 年、及び、野沢温泉観光協会「湯　野沢温泉これいっさつ」パンフレットを参照。

369 長野県ホームページ「『信州の伝統野菜』～食べたら懐かしい風景がふんわり浮かびました～」
https://www.pref.nagano.lg.jp/enchiku/sangyo/nogyo/engei-suisan/yasai/dentouyasai.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

370 農林水産省「令和４年　地域特産野菜生産状況調査」を参照。

371 この項は現地調査による。

372 野沢温泉蒸留所ホームページ
https://nozawaonsendistillery.jp/?srsltid=AfmBOoqxi4FJu5kyDL7fE3sLEdB5L9p5Lea1Gdp8-k5y3TAs7EZmIQg4（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

フト・ウィスキーなども作られており、クラフト・ビール醸造の準備も進んでいる[373]。

温泉に関わる芸能としては、昭和５（1930）年、中山晋平（作曲）、時雨音羽（作詞）、藤間芳恵枝（振付）を招いて「野沢温泉小唄」を作っている。ただし、これ以降の野沢に関わる芸能・文化は、同年の「のらくろ」で有名なマンガ家田河水泡（たがわすいほう）の初スキー、昭和６（1931）年の「野沢温泉スキー小唄」作成、昭和 16（1941）年のマンガ家横山隆一（「フクちゃん」で有名）のスキー取材など、どちらかといえばスキーを中心にしたものが多くなっている[374]。



健命寺にある野沢菜発祥の碑。


健命寺に植えられている野沢菜の原種。

上記見てきたように、野沢における温泉の管理や共同浴場の管理は、行政村としての野沢温泉村というより、江戸以来の伝統を持つ自治組織である野沢組や住民内の湯仲間が大きな役割を担ってきた。近世まで険しい山道しかなかった奥信濃という立地、また村自体も山間にあり、道路整備がなかなか進んで来なかったため、外部資本が入りにくかったことも、こうした地元の結びつきの強さを後押ししてきたと考えられる。また、村内の祭礼も、僧侶や神官ではなく野沢組が仕切っており、野沢温泉の道祖神祭りの盛り上がりは、湯仲間や伍人組を通じた地域の結びつきとともに、上の世代からの継承、あるいは外からの移住者の地域に馴染んでいく際の大きな機会ともなっている。野沢菜やアケビの蔓を温泉で茹でる、温泉を洗濯に使うなど、入浴以外にも温泉を活用する野沢ならではの伝統も続いてきた。

ただ野沢は伝統ばかりの地ではない。野沢のもう一つの特徴として、日本有数のスキー場を有し、国内各地ばかりか、世界ともスキーを通じて結びついていることがある。かつて厄介者であった多量の積雪は、今や地域の恵みとなり、スキー観光は地域経済の最大の柱となった。野沢の雪を目当てに多くの外国人が訪れ、その一部は野沢に移住、サービスを提供し、施設を所有する側になっている。

野沢組に象徴される伝統的な地域における互助、協働のあり方と、スキーに代表される国際性、この２つが野沢の温泉文化に他にない魅力を与えている。

373 この段落は現地調査。

374 この段落は野沢温泉村「野沢温泉村 100 年の歩み」昭和 61 年 11 月を参照。

（１０）下呂温泉

下呂（げろ）温泉は、飛騨川（益田川）沿いに広がる温泉地であり、中世以来川原から湧出する源泉を利用してきた。このため、下呂では、昭和初期まで、水害によって幾度となく被害を被り、源泉を破壊されてきている。下呂温泉の歴史は、水害との闘いの歴史でもあった。その闘いの主役となったのが、江戸時代以来下呂温泉を管理してきた地域の繋がりである。下呂の人々は、幾度となく起こった水害への対応や源泉の不足を、時には外部資本を取り入れながらも、基本的には地区の問題として解決し、温泉地としての繁栄を維持してきた。

以下、こうした下呂温泉の特徴と、それを支えてきた湯の管理の技術を、特に現在の下呂温泉を支えている集中管理のあり方を中心に概観していく。

下呂温泉の歴史

＜近世以前[375]＞

下呂温泉の開湯伝説については、かつて山頂にあった湯脈が、ある日、川原に移ったこと、その発見に際しては足を痛めた白鷺が導いたこと、その場に薬師如来が見つかったことという「薬師伝説」、「白鷺伝説」がよく知られている。このうち湯脈の移動については、医王山温泉寺（おんせんじ）に伝わる「湯文之事（ゆぶみのこと）」に記載されている。それによれば、古来より湯ヶ峰の山中に温泉が湧出していた。しかし、文永２（1265）年に、薬師如来の効力か、一夜のうちに益田川の川原へ移り、山に登る難儀をすることなく温泉の薬効を得られるようになったという。薬師伝説については、享保年間（1716～1736 年）に飛騨国代官長谷川忠崇（ただたか）が編纂した「飛州誌（ひしゅうし）」で、天暦年中（947～957 年）に湯ヶ峰で発見されて文永２年に益田川河原へ移ったこと、移転の際に樹下に薬師如来が見つかったためそれを温泉薬師と称して堂宇を建てたこと、その温泉薬師のために寛文年間（1661～1673）年に医王山温泉寺が建立されたことが記載されている。一方、白鷺の逸話が載るのは、幕末から明治初期の温泉寺の史料と推測される「飛州下呂温泉畧（りゃく）縁記」となっている[376]。また、大正 10（1921）年発行の岡村理平「飛騨編年史要」では、湯ヶ峰の発見を延喜年中（901～923 年）と伝えている。

下呂温泉の史料上の初見と思われるものは、京都五山相国寺の詩僧万里集九（ばんりしゅうく）の「梅花無尽蔵（ばいかむじんぞう）」である。集九は、延徳元（1489）年と延徳３（1491）年に下呂温泉に入湯しており、草津温泉や有馬温泉と並ぶ名湯と評している。また、天文 18（1549）年には、明叔慶浚（みんしゅくけいしゅん）（今川義元や武田信玄とも交流があった飛騨の臨済宗妙心寺派の高僧）の入湯の記録がある。なお、この時期、戦国時代後半は、下呂温泉を含む飛騨地方は三木氏の支配下となっていた。しかし、三木氏は天正 13（1585）年、豊臣方の金森長近に攻め滅ぼされてしまう。その後、関ヶ原の戦いで東軍に付いた金森長近は、江戸時代になって、そのまま飛騨一国を支配、高山藩主と

375 この項は、下呂町史編集委員会 編「飛騨下呂．通史・民俗」下呂町　平成２年３月を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

376 飛州下呂温泉畧縁記については、菱川晶子「温泉発見伝説と動物 ―岐阜県下呂温泉の三つの祭りと伝説―」愛知大学綜合郷土研究所紀要 令和６年　P73-P102

して６代に亘って下呂温泉を統治した。金森長近の大きな功績として、飛騨高山と京・大坂を繋ぐ益田街道の整備がある。下呂温泉のあった湯ノ島村は益田街道の重要な宿場として位置づけられ、本陣も置かれるようになった。だが、元禄５（1692）年、金森家は出羽国に転封になり、下呂温泉を含む飛騨国は幕府直轄の天領に組み込まれた。

天領になった後も、下呂温泉は、飛騨代官所の案内書で「湯ノ島村（当時の下呂の村名）は名湯ゆえ湯治客も多く繁盛」と書かれるなど一定の繁栄を見せており、また、林羅山（はやしらざん）も、「梅花無尽蔵」と同様、有馬温泉や草津温泉と並べて評している（ただし、知名度は低いとしている）。明治期の記録になるが、明治８（1875）年の筑摩県への報告によると、天明年間（1781～1789 年）から文政・天保年間（1818～1844）年にかけては年間２万６千人から３万人の湯治客があったという。益田川の川原に湧出する源泉の周りに板囲いをして浴場としており、桶で宿まで持って行くこともあったと伝えられている[377]。また、湯講中という名の専門の宿屋も 12～13 軒を数えている。

江戸時代、下呂温泉の利用は、湯ノ島村内での差配に任されており、幕府の代官所は運上金を受け取るだけであった。村内では、湯番という温泉権についての株制度があり、湯ノ島村内の田畑とともに売買されていた。温泉を管理する湯屋仲間（ゆやなかま）という制度もあった。詳細についての史料は残されていないが、おそらくは湯ノ島村の本百姓は田畑とともに温泉への権利を持ち、そうした本百姓同士の寄り合いとして湯屋仲間があったのであろう。温泉場の修復などの費用は全て湯ノ島村が負っており、湯屋仲間で分担されていた。下呂の温泉は、山林などとともに、湯ノ島村の総有であり、温泉権は重要な入会権の一つであった。

ただし、総有といっても、正確には全村ではない。江戸時代の記録をみると、延享４（1747）年の日付で、益田川の西に位置する幸田（こうでん）組から東に位置する湯ノ島村本村へ、湯番が永代売渡されていることがわかる。この結果、下呂の温泉権（温泉を掘削し、管理し、湯宿を営んで利益を得る権利）は、明治維新後も長らく川東の湯ノ島地区の住民が独占することとなった[378]。利益を得るのも、そこから幕府代官に定められた運上金を支払うのも、温泉場が壊れた時にその修繕の費用を賄うのも、すべて、湯ノ島村の川東に居住する本百姓の権利であり、義務であった。温泉の管理は村方の自治に任され、代官が口を出すところではなかったのである。

この時期、下呂温泉の最大の課題は水害であった。記録が残っているものとしては、天明元（1781）年、文政８（1825）年、天保７、８（1836、37）年がある。文政８年の水害では益田川の川原にあった温泉場が全て流されてしまい、復興したのは、天保３（1830）年と、５年以上もかかっている。勿論、この復興の際も、幕府からは一銭も支援は行われていない。しかしその４年後の天保７、８年の水害で、再び温泉場が全て流出、結局江戸時代のうちには復旧することはできなかった。

---

377 桶については現地調査ヒアリングによる。

378 総有及び幸田の湯番の湯番売渡については、北條浩・村田彰「温泉権の歴史と温泉の集中管理」御茶の水書房　平成 25 年２月を参照。

＜明治・大正・昭和戦前期[379]＞

下呂温泉が天保の水害から復興したのは、明治９（1876）年、川原に再び源泉が発見されてからであった。この際、発見地が川の西川、幸田地区であったことから、江戸時代に温泉権を売り渡していた幸田区の住民が、河川に対して明治維新以降行政の管理権が大きくなったことを踏まえ、温泉場の設置を試みている。この際は、湯之島区側から二七大区町宛に願書が出されており、江戸以来の慣習がそのまま認められ、益田川（ましたがわ）の源泉は川東の湯之島区側がそのまま独占することとなった。

この時期までに下呂温泉のある地区は、幕府天領から明治元（1868）年に飛騨県（２週間で高山県に改称）、明治４（1871）年の第一次府県統合で筑摩県となっており、温泉が再興した明治９（1876）年には現在と同じ岐阜県所属となっている。明治５（1872）年には大区小区制が施行され、翌６年には飛騨地方にも大区小区が置かれた。これにより、後の下呂町の地域は、行政上、二七大区の 189 小区と 190 小区となる。これが行政村としての下呂村となったのは、明治 22（1889）年、町村制が施行された後である（大正 14（1925）年より下呂町）。

温泉再興の翌年、明治 10（1878）年には浴客数も年間５千人にまで戻り、下呂温泉は再び繁栄の道を歩き始めた。明治 14（1882）年には益田川に帯雲橋が架かり、渡し船を使わずに渡河もできるようになっている。しかし、明治 29（1896）年、湯之島区を再び水害が襲い、またしても川原にあった温泉場が、源泉ごと全て流されてしまう。

新規源泉の掘削が思うように行かない中、復興のため、下呂村の「湯之島区」は外部資本の導入に踏み切る。「湯之島区」は、上述したように、下呂温泉の温泉権を独占する湯ノ島村川東の湯屋仲間の枠組をそのまま引き継いだ住民組織である。明治維新の後になっても、湯之島区がある地域に引っ越してくるためには、区（住民組織）の申し合わせとして、湯ノ島区長に届け出た後、伍長及び区民の５分の１以上の出席者による協議が必要とされており、自由な新規居住はできない状況にあった（ただし、富裕層については例外的に新規居住を認める条項があり、これが外部資本導入の入り口になった）。この結果、江戸時代まで、幸田地区を除く旧湯ノ島村の温泉の総有体制がそのまま維持されていた[380]。明治年間の新規源泉の探索は、こうした旧来の体制（＝湯之島区住民の資金）を前提として行われていたのである。しかし、それだけでは十分な開発が行えない状況となっていた。

大正２（1913）年に岐阜市の実業家を招聘して始めた源泉開発は、翌３（1914）年には引き湯のためのパイプ設置まで含めた契約（川原の湧出地自体を温泉場にしていては、また水害が起こった時に流されてしまうため、パイプで引き湯し、浴場を川から離すことが構想された）も結ばれ、進められることとなった。この結果、大正８（1919）年、漸く下呂温泉は再興

379 この項は、下呂町史編集委員会 編「飛騨下呂．通史・民俗」下呂町　平成２年３月を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

380 新規居住の制限については、北條浩・村田彰「温泉権の歴史と温泉の集中管理」御茶の水書房　平成 25 年２月を参照。

にこぎ着けた。しかし、電力不足で夜間営業ができない等の不備が多く、湯治客の集客もままならず、結果、湯之島区側と実業家側の契約が決裂、大正 13（1924）年には湯之島区での独自経営となった（下呂温泉合資会社と薬師湯合資会社が設立され、それぞれ一つずつの共同浴場、「白鷺の湯」と「薬師の湯」を経営した）。この際、外部資本側と湯之島区側で法廷闘争も行われたが、外部資本側の訴えは裁判所により門前払いとなった。江戸時代以来の「旧来の慣習」に基づく温泉権管理のあり方が、明治維新後も、私法上の権利として実態を持つことが裁判所によって追認されたことになる[381]。

だが、地元だけの経営はすぐに行き詰まる。当時の源泉は 37～38 度程度しかなく、加温が必須であったが、その燃料費が経営を圧迫したのである。円滑な温泉経営のためにはより高温の新源泉を確保することが必要であった。結果、昭和３（1928）年に、今度は名古屋の実業家との間で温泉掘削と温泉利用についての契約が取り交わされ、結果、昭和６（1931）年までに４本の新規源泉が掘削された。ただし、外部資本の導入といっても、「大正 13（1924）年７月時点で区民名簿に記載されている者の了解なく、新規源泉の掘削は許さない」という申し合わせ（先述したように、明治以降新規住民は実質的にいなかったことから、これは江戸時代以来の湯屋仲間しか源泉掘削に携われないことを意味している）がなされており、湯之島区の住民が温泉権を共同で管理する体制は維持されている。ただし、大正 13（1924）年の独自経営の復帰、昭和３（1928）年の新たな外部資本の導入の決定の際には、幸田地区に、引き湯権や将来の源泉掘削の可能性など、一部の権利が認められることとなった[382]。

外部資本導入の結果、湯之島区の温泉には、湯量と湯温の安定に加え、もう一つの変化が訪れることになった。旅館の内湯化である。それまで下呂温泉では、当初は益田川の川原にある源泉近くの浴場、大正８年以降は川原の源泉から引き湯された共同浴場で入浴する外湯による温泉地であった。そこに、昭和６年、掘削を担当した事業者による内湯の旅館（湯之島館）が開業したのである。また、同年には、隣接する森区内にも外部事業者による内湯旅館（水明館）も開業している。なお、水明館用の源泉開発は、湯之島区外ではあるものの、湯之島区の源泉に影響が出たら中止するという約定を湯之島区と結んでの開発となっていた。

湯之島館、水明館の開業を受け、下呂温泉合資会社と薬師湯合資会社も、共同浴場に加え、旅館の内湯への配湯業務を開始した。昭和 14（1939）年までには区内で６号泉までが開鑿され、10 軒以上の旅館に配湯するに十分な湯量を確保するとともに、湯温についても、47 度から 57 度で湧出する各源泉を混合して提供できる体制を整えた。また翌 15（1940）年には、湯送場施設と源泉の保護施設も開設された。各旅館の改装、大型化も進み、収容人数は 500 人／日を超えることとなった。

上記に先立ち、昭和６（1931）年の六ツ見橋の整備、そして昭和９（1934）年の高山本線の整備と下呂駅の開業と交通インフラも整備された。本格的に温泉地として発展する基盤が整

381 裁判の経緯については、北條浩・村田彰「温泉権の歴史と温泉の集中管理」御茶の水書房　平成 25 年 2 月を参照。

382 昭和 3 年の幸田地区との交渉については、荒川晃「下呂温泉とともに」水明館　昭和 54 年 6 月を参照。

ったのである。しかし、1940 年代、既に戦火が激しくなっており、下呂温泉の本格的な発展は第二次世界大戦後を待つこととなる。なお、この間、昭和 12（1937）年には、増え続ける戦傷者に対応するため、名古屋陸軍病院下呂温泉療養所が、既存の旅館を転用して整備されている（現：岐阜県立下呂温泉病院）。

＜第二次世界大戦後[383]＞

第二次世界大戦後、下呂温泉は、まず温泉地発展に向けての体制を整えることとなった。初めに行われたのが、昭和 23（1948）年の下呂温泉合資会社と薬師湯合資会社の合併であり、その後、源泉管理と配湯は合併会社である下呂温泉株式会社の一社が担当することになる。また、同年は温泉法が制定された年でもあり、同法に基づいて温泉掘削申請が自由に出されることが強く懸念された。これに対応するために昭和 25（1950）年に作られたのが下呂温泉供給組合である。この組合には、昭和３（1928）年以前より湯ノ島地区に本籍を置くものしか入れず、またその継承も祖先の祭祀権を持つ卑属に限定された。ここでも、実質的に江戸時代の湯屋仲間による温泉権支配の継承が図られたのである。

ただし、個人の土地における自家源泉掘削については、戦前ほど強い拘束力をもった規制をかけることはできず、下呂温泉一帯における新規掘削の勢いは大きく増した。泉温の低下など、温泉資源枯渇への危機感が高まったこともあり、昭和 38（1963）年には岐阜県温泉審議会が「既存の温泉井戸から 100m 以内に掘削しないこと」「口径は 150㎜ 以下、掘削深度は 300m 以下とすること」などの規制を設けたものの、昭和 42（1977）年までに下呂温泉の源泉数は 70 本弱にまで拡大、自家源泉確保の勢いは止まらなかった。

上記の温泉資源の拡大と、昭和 39（1964）年に竣工した下呂駅と温泉街を直結させる下呂大橋や昭和 44（1969）年に完成した国道 41 号線の改良などの交通基盤の整備により、下呂温泉の集客は、この時期、大幅に拡大していくことになる。昭和 30（1955）年度に 113,817 人だった下呂温泉の宿泊客数は、その後急増、５年後の昭和 35（1960）年度には 395,700 人と３倍以上となり、昭和 38（1963）年度には 525,326 人と 50 万人を突破、昭和 43（1968）年度には 812,760 人、そして昭和 47（1972）年度には 1,009,069 人とついに 100 万人の大台に乗せている。これに合わせ、旅館の新規開業、増改築のラッシュが起こり、ビル化も進んでいく。旅館の数をみると、昭和 39（1964）年に 42 軒であったものが、昭和 47（1972）年は 84 軒と倍増した。また昭和 37（1962）年の労働争議に対応した労働環境の整備や昭和 41（1966）年のプロパンガスの集中配管の実現、同時期に実施されたリネンサプライの外注化など旅館経営・施設の近代化が次々に実現していった。旅館の食事に鮮魚が並ぶようになったのもこの頃である。ただし、こうした拡大の中でも、旧来からの地域秩序を維持していた下呂温泉では、昭和初期に参入し、既に地元資本の一部となっていた水明館、湯之島館の二つを例外

383 この項は、下呂町史編集委員会 編「飛騨下呂．通史・民俗」下呂町　平成２年３月を参照。別途典拠のある場合は注を付けた。

に、外部資本に取り込まれることはなかった[384]。

こうした宿泊施設の拡大とそれによる入湯客の大幅増を支えてきた下呂温泉の温泉資源も、決して無限ではなく、次第に泉温の低下などの問題が大きくなっていった。これに対し、下呂温泉では、昭和 42（1962）年から本格的な対策のための調査を行っている。既にこの報告書では温泉資源の集中管理への提言がなされていたが、湯温の低下がさらに著しくなり、温泉関係者の多くの合意が進んだのが昭和 45、46（1970、1971）年であった。結果、昭和 47（1972）年から昭和 49（1974）年にかけ、二期に分けて集中管理の工事が行われることとなった。対象となった源泉は合わせて 45 本あり、それまでそこから約 7,000 リットル／分が汲み出されていたものが、無駄を整理することにより、約 3,000 リットル／分にまで節約することが可能となった。なお、集中管理事業の実施は、昭和 47（1972）年に設立された下呂温泉事業協同組合（中小企業等協同組合法に基づく法人）が受け持つ（源泉を持つ事業者と、下呂温泉の配湯を受ける旅館・保養所などの事業者による組合）。一方、源泉の掘削と管理については、同年に設立され、昭和 56（1981）年に事業協同組合となった下呂温泉開発協同組合が担当している。これは源泉保持者のみによる組合である[385]。

集中管理の成果として、この温泉資源の節約の他、もう一つ大きく変わったことがある。それは、益田川を挟み、川東（湯之島区）と川西（幸田（こうでん）区）を繋ぐ長さ 584m の送湯管が整備されたことである。延享４（1747）年以来、200 年以上分断されてきた両地区が、同じ集中管理システムを共用することで再び繋がることになったのである[386]。なお、集中管理システムの温泉は、市内の温泉スタンドで販売されており、一般の住民もそこで購入して自宅で下呂温泉の湯に入ることが可能となっている。

集中管理によって温泉資源の危機を乗り越えた下呂温泉は、しかし、折からのオイルショックや 1970 年代になってからの団体旅行から個人・家族旅行への潮流の変化もあり、その成長に陰りを見せることとなる。宿泊客数をみると、集中管理システムが完成した昭和 49（1974）年に 1,153,813 人とピークを達成した後は足踏みを続け、再び集客が拡大していくのは、昭和 60 年代、バブル景気の波が全国に訪れてからとなる。実際の数値をみると、昭和 49 年のピークを越えたのが昭和 59（1984）年の 1,205,419 人、翌年、プラザ合意によりバブル景気が本格的にスタートすると集客拡大は本格化し、ピークの平成２（1990）年には 1,652,760 人にまで達している。だが、バブルが崩壊すると、この成長も止まり、次第に集客が減少、2000 年代以降は年 100 万人程度の水準で一進一退を繰り返すこととなった[387]。

平成 16（2004）年、下呂町、萩原町、金山町、小坂町、馬瀬村が合併し、下呂市が誕生し

---

384 旅館の拡大や近代化については、荒川晃「下呂温泉とともに」水明館　昭和 54 年 6 月を参照。

385 組合の構成等については、北條浩・村田彰「温泉権の歴史と温泉の集中管理」御茶の水書房　平成 25 年 2 月を参照。

386 集中管理に向けての動き、及び、送湯管については、荒川晃「下呂温泉とともに」水明館　昭和 54 年 6 月を参照。

387 平成以降の集客数値については、下呂市ホームページ「観光課」https://www.city.gero.lg.jp/soshiki/16/（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

た。この中で、下呂市は、下呂温泉旅館協同組合を中心とする地元温泉関係者の団体と密接に協力しつつ、平成 22（2010）年、初の下呂市観光計画を立ち上げ、市内５地域に眠っている観光資源を掘りおこし周遊による連泊を狙うこと、基盤としておもてなしの力を高めること、それにより最盛期の宿泊客数 150 万人を再び目指すこととなった。また、この際には、下呂観光のコンセプトともなり、おもてなしに直結する「ホスピタリティ都市宣言」を合わせて行っている[388]。

上記に基づいた下呂市の観光振興の主役となったのが、旅館協同組合や観光協会などの地元の地域の宿泊・観光団体である。こうした地元の大きな動きとしてまず上げられるのが、観光地域づくり法人（DMO）としての登録である。観光地域づくり法人（DMO）とは、地域の多様な関係者の合意を形成し、各種データに基づく客観性の高い戦略を策定、観光地としての着地整備やプロモーション等を行う組織で、平成 27（2015）年より観光庁で登録制度が始まっている。下呂市では、(一社)下呂温泉観光協会が制度発足直後の平成 28（2016）年に DMO として登録しており、以降、DMO の観点に沿った活動を行ってきている[389]。

下呂温泉観光協会の DMO としての活動は、マーケティングやプロモーションから、各種観光イベント・キャンペーンの実施、広域観光ルートの開発、住民や学生も参加した旅行商品開発、インバウンド観光推進、名所づくり推進など多岐に及ぶ。また、下呂における MICE の振興にも大きく携わっている。

こうした活動の中でも特筆すべきは、徹底してデータの活用に取り組んでいることである。きっかけは DMO 化するより前、平成 23（2011）年の東日本大震災で、この時、データを分析することで最も効果的なメディア・プロモーション手段を抽出、速やかな観光客数の復活に結びつけた。また、新型コロナウイルス感染症の際も、同様に、SNS の利用をデータに基づき最適化し、大きな効果を上げている。こうした実績に基づき、下呂温泉観光協会では、令和２（2020）年より、データ収集にデジタルのシステムを投入した。令和５（2023）年現在、域内の 100 スポットで日別に属性・目的地・周遊先を測定するシステム、GPS の位置情報をもとに属性別の行動記録と交通手段を月２回レポート化するシステム、域内の 20 のスポットで滞在時間と周遊先を日ごとに分析するシステムの３つが稼働している。これにより目標に応じた施策展開を、客観的なデータをもとに、機動的に実施することが可能となっている[390]。

こうした DMO の活動の主要目的のひとつが、地域固有の自然資源、文化資源を活用した着地型観光としてのエコツーリズムの確立である。これに対しては、平成 28（2016）年に下呂市エコツーリズム推進協議会が地元中心に立ち上げられ、エコツーリズム 8）年４月にエコツ

388 下呂市「市政ニュース」平成 22 年 5 月

389 この段落と次の段落については、国土交通省「(一社)下呂温泉観光協会関係」https://www.mlit.go.jp/kankocho/content/001736262.pdf（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

390 この段落は日本政府観光局「古湯・下呂温泉がエコツーリズム＋データマーケティングでバージョンアップ（後編）」https://www.jnto.go.jp/projects/regional-support/casestudy/3788.html（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

ーリズム推進法に基づく全体構想認定を受けている[391]。

下呂温泉の特徴として、温泉以外の大規模な集客施設が、ヘルスセンター的なものも含め、殆ど開発されてこなかったことがある。市域内に唯一の観光施設としては、下呂合掌村が昭和 38（1963）年に開発されているが、これは昭和 31（1956）年に国の重要文化財に指定された「旧大戸家住宅」と国登録有形文化財の「旧遠山家住宅板倉」を下呂に移転し開設したもので、その他の施設も、資料館や工房などの体験施設等となっており、娯楽施設というより文化施設としての性格が強い。また、先に述べたように、平成 16（2004）年の合併で下呂市となったことで、市域内に多くの自然資源・民俗資源（白雲座歌舞伎、鳳凰座歌舞伎など）を保有することにもなった。下呂市のエコツーリズム構想は、こういった地域性を踏まえ、下呂市の豊かな自然・文化資源を活用・継承することで、多種多様なエコツアー・体験プログラムを開発、市内各所を回遊する体験型観光を拡大していくものとなっている。

DMO としての活動やエコツーリズムの確立など、下呂市の近年の活発な観光振興を支えている最大の基盤として、地域の旅館やホテルなど同士の強い繋がり、協力関係がある。また、地域と下呂市も固く繋がっており、下呂市は入湯税を満額積立てて、客がいない時期でも観光事業に利用可能としており、廃業する旅館を壊す使途などに使われている。客が 100 万人きたら１億 5000 万円の積立てとなる計算である（下呂市では令和５（2023）年に 100 万人を達成している）[392]。こういった地域のまとまりの背景にあるのは、江戸時代以来の伝統を持つ地域の組織であり、その組織自体が、度重なる水害やその後の過剰な源泉開発による泉温低下などの問題を乗り越える中で、ある時は外部資本を導入し、ある時は 200 年に亘る分断に対峙しながらも、凝集性と活力をともに失わずにきた歴史的な蓄積そのものである。こうしたダイナミズムが現在の下呂を未来に推し進めてきている。

391 下呂市エコツーリズム推進協議会「下呂市エコツーリズム推進全体構想」平成 30 年 4 月、下呂市ホームページ「下呂市エコツーリズム推進全体構想の公表」https://www.city.gero.lg.jp/soshiki/16/2161.html（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

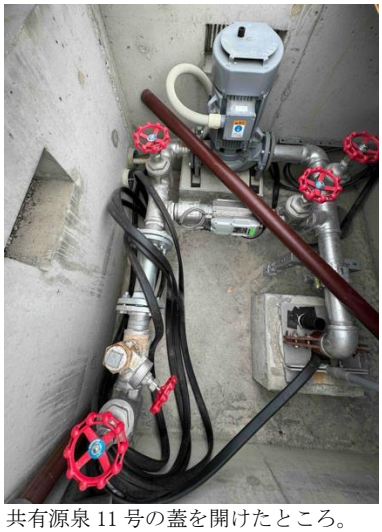
392 下呂市との連携については現地調査ヒアリングを参照。

下呂温泉の源泉[393]

下呂温泉では 12 本の源泉（１号源泉から 12 号源泉）を集中管理して各施設に配湯している。内訳は、集中管理が始まる前の既存源泉から引き継いだ質の良い源泉が４本、組合が新たに掘った源泉が８本となっている。地域別にみると、下呂温泉の中心を流れる飛騨川から見て南西側の幸田地区に５本、北東側の湯之島地区に７本の稼働源泉がある。源泉は基本的に地下埋設となっており、地上部分には構造物がないものが殆どである。



共有源泉 11 号



共有源泉 11 号の蓋を開けたところ。

温泉の成分は多少の数値の違いはあるもののほぼ同一で、すべてがアルカリ性単純泉である。12 本の源泉の深度は 300 メートル前後のものが多いが、平成 30（2018）年に 15 年ぶりに新規掘削した 11 号源泉は、深度 430m で、湯温 60 度、湧出量は最大 600 リットル／分を誇る。これは岐阜県の岐阜県温泉法施行細則に定められた掘削深度の限界が平成 15 年に 300m から 500m に引き上げられたことに由来する。

温泉の温度は 45 度～80.2 度と幅があり、これらを調整して配湯温度 55 度で旅館・ホテル等の各施設に配湯している。最大揚湯量 3,400 リットル／分である。なお、幸田地区の５源泉は温度 45 度～68.8 度で最大揚湯量 1,300 リットル／分、湯之島地区の７源泉は温度 50.3 度～80.2 度で最大揚湯量 2,100 リットル/分と、湯之島地区のほうが泉温・揚湯量ともに高い傾向にある。

下呂温泉の共同浴場としては、先に述べたように「薬師湯」と「白鷺の湯」があったが、前者は既に廃業し、現在は「白鷺の湯」のみとなっている。その他の日帰り入浴施設としては「クアガーデン露天風呂」と「幸の湯」がある。また、昭和 58（1983）年、益田川の川原に明治以前を思わせる囲いのない混浴温泉「噴泉池」が設けられたが、水着着用などのルールを巡ってトラブルが絶えなかったため、令和３（2021）年に足湯に変更されている。なお、組合に加入せずに自家源泉を所有している旅館もごく少数ながら森地区の山上に存在しており、

393 この項は、現地調査ヒアリングによる。

これらの旅館は組合からの配湯は受けていない。



益田川の川原にある「噴泉池」。
市有の温泉で、現在は足湯のみの利用。
温泉自体は集中管理システムから配湯されている（川原から湧出しているわけではない）。

下呂温泉の集中管理の技術[394]

＜集中管理の概要＞

先述のように、下呂温泉の源泉は下呂温泉事業協同組合が管理している。源泉は集湯管によって４カ所のポンプ所のタンクに集められる。各ポンプ所の貯湯量は、幸田ポンプ所 600t（300t 貯湯槽２基）・送湯ポンプ所 410t（205t 貯湯槽２基）・温泉寺ポンプ所 400t（200t 貯湯槽２基）・森ポンプ所 200t（200t 貯湯槽１基）である。貯湯タンクは景観に配慮し、それぞれの地域で異なる外観となっている。タンクの素材はステンレスタンクであるが、新しくできた温泉寺タンクは富士化工の FRP タンクである。



幸田ポンプ所（ステンレス製）



温泉寺ポンプ所（FRP 製）

タンクに集められた源泉はポンプ所から配湯管によって各旅館へと配湯され、利用されなかった温泉はまたタンクへ戻っていく円環状の配管となっている。ポンプ所を出発する際の配湯温度は 54 度前後に設定されており、旅館を経由してポンプ所に戻るまでの温度損失は１～２度の範囲に保たれている。戻ってきた温泉は源泉タンクに戻され、温度管理されてまた配湯されていく。配湯ポンプは予備を１台設置しており、作動音がおかしいと感じたら点検

394 この項は、現地調査ヒアリングによる。

整備を行っている。



幸田ポンプ所内部のポンプ



幸田ポンプ所制御盤

各ポンプ所の送湯状況や温度は幸田ポンプ所２階に併設された事務所でモニターされており、幸田地区では約 1200 リットル／分を送り出し、200 リットル／分の温泉が戻ってきている。各タンクには水位を検知するモニターがあり、タンク内の水位が１ｍを切ると配湯ポンプが止まってしまうため、水位が２ｍを切ると警報が鳴る仕組みとなっている。このため、湯量の不足が見込まれる時期には２基あるタンクの湯を１基のみにまとめて水位を稼ぐといった調整もしている。





左は幸田ポンプ所の送り出しの湯量を示す流量計。右は水位を検知し、水位が下がると警報を出すモニター盤。

揚湯量は季節によって替えており、通常時は毎分 2,500 リットル／分としているが、夏場は使用量が少なく、冬場は多くなる。また、客数も多く温泉使用量がピークとなる年末年始には最大揚湯量の 3,400 リットル／分を汲み上げ、安定した供給に努めている。温泉は限りある資源であることから季節に応じて必要最低限の量を汲み上げるようにしている。なお、大型旅館の多い幸田地区のほうが温泉の使用量が多いため、不足時には湯之島地区のポンプ所から送湯管によって川を越えて幸田ポンプ所に温泉を送っている。

配湯温度の調整は、ポンプ所のタンクのバルブで調整している。現在は電卓を用いて熱量計算で流量を決定し、タンクに入る源泉の流量計を見ながらバルブを調整しているが、バルブの調整自体は手動であり、どれくらい開くとどの程度流量が変わるかという点には経験的な感覚が要求される。特に幸田地区のタンクは 300 トンと大きいため、調整も大変である。現在使用しているモニターシステムは 20 年ほど前に東京の日親電機と作ったものであるが、令和８（2026）年頃には熱量計算とバルブ調整も自動化する方向で新しいシステムの開発を進めている。

現在配管はフジパイプの外装 EVA チューブ(7000 シリーズ)を使用しているが、古いものは 1000 番シリーズのものも用いている。一部クボタポリテックスの一本物のパイプも使用している。スケールがたまることはほとんどないため、配管掃除は必要ない。貯湯槽は年に１度空にして砂などを高圧洗浄している。この清掃は秋頃に１カ所ずつ順番に行っている。

漏湯調査は５年に１回富士化工と行い、漏れがありそうな配管は早めに交換している。配管の総距離は 10km ほどである。配管接合部の接着剤は耐用年数が 50 年であり、耐用年数を越える前に全体が交換されるように意識している。

旅館等の施設が温泉を利用する際の利用料は１トンあたり 330 円に設定されている。利用量は施設の浴槽の平米数をもとに算出される。１㎡の浴槽なら月あたり 44 トンが利用可能な最大量であり、そのうち 60%を基本料金として支払い、60%を超えて利用した分は使用料として追加で支払う形式となっている。

下呂温泉事業協同組合事務所の床には温泉の管を通しており、床暖房に利用している。ここで利用した湯は隣接するタンクに戻され、また配湯されていく。各施設への配湯管は地下 80～100cm に埋設されているため、融雪には利用していない。下呂温泉では積雪も少ないことから、融雪利用のニーズが低いという理由もある。

＜温泉スタンドの利用＞

下呂温泉事業協同組合の事務所脇には「温泉スタンド」が設置されており、一般の方が自由に温泉をタンクに入れて持ち帰れるようになっている。仕組みはガソリンスタンドと同様である。これは旅館等の施設での温泉の使用が少ない時間帯（主に午前中）に貯湯槽からオーバーして流出する温泉を有効活用する目的で一般給湯事業として昭和 58（1983）年７月に設置されたものであり、24 時間利用できる。設置当初は６ヶ月ほど利用者皆無の状態が続いたが、谷水や井戸水を利用していた人々が渇水期の水不足の際に温泉スタンドを利用し始め、これらの人々の口コミとタンクを積んで走る自動車に刺激されて利用者が徐々に増加した。現在では利用者は地域住民を中心に通常時で１日に 100～150 人、冬場には 200 人程度が利用する。多くは車に積んだタンクで持ち帰り、家の浴槽に張って家庭での入浴に利用される。自家用ポンプを配置し、自宅の浴槽までタンクからポンプで湯を引き上げる家庭もあるという。利用者に聴取したところ、ガス代の節約となるほか、体の不調への効果を期待し、毎日汲みに来ているという声もあった。



温泉スタンドの利用状況

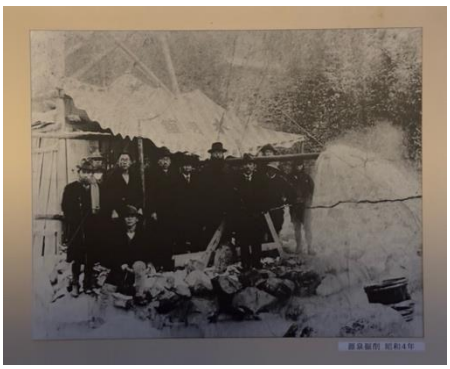


温泉はコイン式で自動販売されている。

水明館の湯の管理の技術[395]

＜旅館「水明館」の概要＞

水明館は下呂温泉で最も源泉使用量の多い旅館である。もともとは農具を納める商社であったが、昭和５（1930）年の高山線下呂駅開通に伴い下呂の発展を見通した初代が幸田地区の土地を購入し、翌６（1931）年に温泉を掘り当てたことから昭和７（1932）年の旅館開業に至った。現在では昭和 25（1950）年に完成した青嵐荘、昭和 35（1960）年の山水閣、昭和 45（1970）年の飛泉閣、平成元（1989）年の臨川閣の４棟からなり、全 264 室を擁する。先代の代に立てた臨川閣は特に建材にこだわっており、合成材を一切使用していない。



源泉掘削時の様子



現在の様子。川の右手に水明館飛泉閣・臨川閣が建っているのが見える。



水明館、各棟の立地

395 この項は、現地調査ヒアリングによる。

水明館の浴場は、臨川閣３階の「下留の湯」、飛泉閣９階の「展望大浴場」・山水閣１階の「野天風呂」の３カ所の大浴場と、臨川閣４階の２カ所の貸切風呂、各館にある温泉付き客室となっている。源泉の使用量は１日 400 トンであり、月に 500 万円程度源泉の利用料を支払っている。水明館の所有する源泉（水明４号泉・７号泉）を下呂温泉事業協同組合に貸し出すことで収入を得ているが、水明館の源泉で湧出している量より、水明館で利用する量のほうが多いため、温泉の売買に関しては赤字となっている。



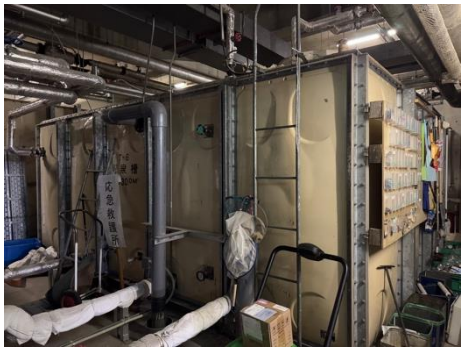
水明館の前にある水明４号泉。管理は下呂温泉事業協同組合にまかされており、水明館側では開けることはできない。７号線は社員寮の敷地内にある。

＜「水明館」の湯の管理＞

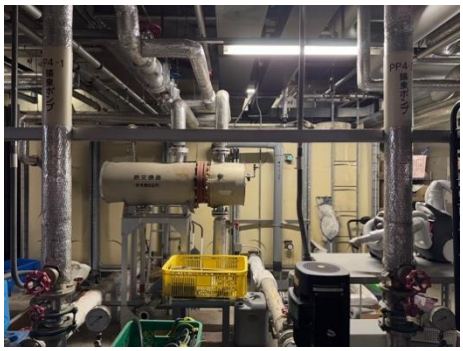
集中管理で配湯された源泉は 55 度の湯温で水明館まで届けられ、まず、２カ所ある地下のタンク（貯泉槽）に貯められる。そこから２台の揚泉ポンプでそれぞれの棟にある３カ所のタンクにポンプアップされ、各棟のタンクからは自然流下で各浴槽に配湯されている。

源泉が浴槽に届く際には 40 度後半から 50 度程度に湯温が低下するので、清掃後、空の浴槽に湯を張る際のみ、加水にて調整し、浴槽に湯が張られたあとは源泉の湯量の調整のみで適温を保っている（その後は追加の加水はしていない）。湯温の調整は自動化されており、浴槽の温度をモニターし、温度が下がると湯量を増やす。この自動温度調整の仕組みは令和４（2022）年 12 月に導入したばかりであり、それ以前は人の手と感覚で湯量変えて湯温を保っていた。

地下の貯湯槽のうち臨川閣のものは 30 トンあり、２台のポンプが交互に稼働している。熱交換によって温めた上水をシャワーの湯に利用し、また、冷えた温泉は夏場の加水に利用している。ポンプアップの量は自動管理されており、各棟のタンクの湯量が減ると地下タンクから自動的に送湯される。



臨川閣の地下にある 30 トンの貯湯槽



地下の揚泉ポンプと熱交換器



臨川閣の屋上タンク。手前が温泉で奥が上水のタンクとなっている。ここから各浴槽へは自然流下となる。

臨川閣の屋上タンクからは、臨川閣と青嵐荘の全客室に配湯されている。客室の浴槽は自動管理ではなくバルブ式で、お客様が自分で湯量や温度を調整できるようになっている。一方、大浴場の湯は機械室での管理となっている。臨川閣では、３階の機械室が同階にある大浴場「下溜の湯」に隣接して配置されている。



臨川閣３階の機械室



各浴槽への配管。左側に塩素濃度計が置かれている。

浴槽の自動温度管理では、浴槽の温度が下がると源泉を追加し加温しており、加熱は行っていない。湯温は高温風呂で 40.5～42.5 度、低温風呂で 39～41.5 度、ひのき風呂で 40～42 度の間で調整されている。客が多く湯量が減りやすい時間帯は、常に浴槽の湯が溢れていくように給湯する「あふれ運転」をタイマーで設定している。



浴槽自動制御盤



あふれ弁

下呂温泉の泉質はアルカリ性単純泉のため、消毒のための塩素の濃度調節が難しいが、水明館では観光庁の補助金を利用し、塩素の濃度調整も自動化している。各浴槽に配湯する管

に残留塩素濃度計を設置、濃度が下がると塩素が自動投入されることで一定の残留塩素濃度を維持している。自動化装置の導入以前は、タイマーで毎時３回程度、決まった時間に自動投入し、濃度確認は人力で行っていた。客が多いときは塩素消費を多くしなければならないため、入浴客数によって投入回数を調整する必要があったが、その塩梅の判断については経験則に基づく勘が重要であった。



各浴槽の塩素モニター



配管に設置されている残留塩素濃度計


塩素の自動投入装置


使用している次亜塩素酸ナトリウム（塩素）

循環ろ過は砂ろ過のタンクを使用している。夜間はろ過器の汚れを取るために逆流運転をし、汚れを下水に流している。


砂ろ過タンク



逆流運転のスイッチと停電時の注意書き

水明館では配湯・温度・塩素濃度の管理がすべて自動化されている。このため落雷等による停電が大きなリスクとなる。停電すると配湯がストップするため、浴場の利用はできない。なお、浴槽自動制御盤には停電時に時刻を再調整する旨の注意書きがなされている。

自動管理とは別に人の手でも浴槽の温度や塩分濃度を測定し、管理日誌で温泉の濃度や清掃状況を毎日記録している。まだデジタル化されたばかりなので、デジタルとアナログと両方で湯の管理をモニターしている状況である。管理日誌は自動化以前から記録しており、こういったアナログでデータの蓄積がどのようにデジタル化していくかの検討において非常に役立った。ちなみに、自動管理システムの開発は地元業者では難しかったため、JTB 商事と連携して行っている。

下呂温泉の泉質では湯の花（スケール）はほとんど出ないため、配管・設備の管理は比較的容易である。公衆浴場法に基づき、浴槽の清掃は週１回、配管の清掃は年１回行っている。浴室・ボイラーを含む旅館の施設管理に携わるスタッフは 24 時間体制で 15 名ほどおり、加えてフロントポジションに所属する人員にも各棟に男女一人ずつ風呂番の担当があり、浴場での接客や清掃を行っている。

タンクはすべて FRP 製である。配管は基本的にステンレスであるが、最近は塩ビ管も導入している。各素材は、配管のしやすさとコストパフォーマンスを考慮して使い分けている。ステンレス管はスタッフでは扱えず、その点では塩ビ管の方が利用しやすい。一方、塩ビ管は、温度変化で伸び縮みすることもあり、そのため継ぎ手の部分から温泉が漏れたり、継ぎ手が外れたりすることがある。そのため、水明館のスタッフで漏れや継ぎ手が外れた際のメンテナンスを行う必要が出てくる。一番長い配管は 12 階ある臨川閣の屋上タンクまでで、約 36ｍある。また、使用しているポンプの耐久年数は、10 年程度と長い。

水明館では浴場で使用したお湯は下水道に流している。下呂温泉の旅館によっては下水を介さず川に流しているところもあり、川や伊勢湾の汚辱に繋がる（温泉水の高アルカリ性やフッ素含有が問題を起こす可能性がある）ため、水明館では先頭に立って下水道利用を推進している。ただし、コストがかかるため、まだ下水利用をしていないところが３割ほど残っている。

水明館にみるおもてなしのあり方[396]

旅館スタッフに応募してくる人は、そもそも、お客と関わるおもてなしや料理をしたくて来てくれている。可能な限り無駄を削除することで、できるだけ本来やりたい作業に集中できるようにし、品質とおもてなしを両立させ、収益率も向上させていくというのが水明館の基本的な考え方であり、そのため、平成 30（2018）年よりトヨタ生産方式に基づく「カイゼ

396 この項は、現地調査ヒアリングによる。また、カイゼンについては、旅行新聞「下呂温泉・水明館の『カイゼン』現場から部署間、取引先へ　生まれた時間もてなしに」令和５年１月４日、及び「下呂温泉・水明館の『カイゼン』生まれた時間もてなしに　得意分野で生かす工夫も」令和５年 11 月５日を参照。

ン」の活動を取り入れ、岐阜協立大学大学院が専門知識を学ぶ社会人向けに開講している履修証明プログラム「トヨタ生産方式とカイゼンリーダー養成プログラム」を利用して社員の研修も行っている。

「カイゼン」による業務効率化は多様に行われている。客室清掃では、それまでの清掃員と客室セット係の分担をやめ、一人で全てを行うセル方式に変更、それに合わせた用具も用意することで時短と清掃の品質向上をともに達成した。食器洗浄では、手洗い・ラック洗浄・食洗機に予め分けて下膳するように変更して時間短縮を図った。フロントではハイカウンターとハイチェアを用意、それまで普通の椅子から立ち上がって対応しなければならず一拍遅れがちだった接客の時間の無駄をなくした。また、ホワイトボードや人づてといったアナログな業務連絡をなくし、基幹システムを整備、情報は大型モニターですぐ視認できるようにした。こうした業務ごとの無駄の削減を、水明館では、徹底して行っている。これにより、例えば、お客様の入れ替え時間（チェックアウトの 11 時から 14 時まで）についても、繁忙期に臨時職員を雇うことなく、社員数 280 人だけで、賄うことが可能となっている。

もうひとつ重要なのが、こうして生み出された余裕を、社員にマルチタスクを行わせて人手を節約することに使うのではなく、接客や調理、清掃など、各自が一番得意な部分に注力してもらい、社員の成長とそこから生まれてくる自発的な工夫に繋げていくことである。こうした業務改善の基盤が、近年の人手不足への適切な対応となるとともに、水明館のおもてなしを支えている。

こうした業務改善の一環として、個人客への対応強化や素泊まり対応なども実施している。ただし、水明館としては、個人客だけに専念するのも危険だと考えている。この考えに基づき、団体客の宴会を日本の温泉の文化の一部として守っていくべきと判断、会議ができるホールや宴会場も重視し、団体客対応にも継続して取り組んでいる。

もうひとつの重視点として日本の伝統文化を伝えていくことがある。具体的には、地元を描いた芸術家の作品を展示する、能楽堂を整備して公演を行う、茶室で着物を着ての茶席体験をするなどである。下呂温泉は、集中管理のため、温泉自体はどこも同じであり、それ以外での差別化が必要である。また、地元の旅館以外の企業が潰れないよう、地域の産業・人材に繋げていくという意義も大きい。



水明館内の美術品のマップ

館内に飾られている日本画家、中島千波（藝大名誉教授）の作品、下呂の「苗代桜」





水明館内の能舞台



水明館敷地内の茶室

＜温泉寺[397]＞

温泉にまつわる寺社としてはまず臨済宗妙心寺派の醫王霊山温泉寺（いおうれいざんおんせんじ）がある。本尊は薬師如来である。先に触れたように、下呂温泉の「薬師伝説」が開山の縁起となっており、伝説に出てくる薬師如来像を祀った湯島薬師堂をもとに寛文 11(1671)年に創建されたと伝えられる。歴史上の開山についての確かな史料はないが、薬師如来の周囲の十二神将には南北朝時代に修繕された跡があり、少なくとも中世半ばには薬師如来が祀られていたと考えられている。



温泉寺



薬師如来像と脇侍の日光、月光菩薩



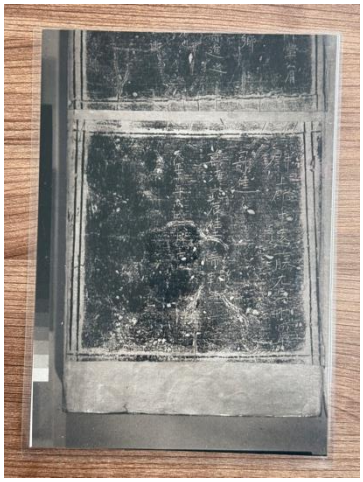
日光菩薩（右）と月光菩薩（左）の足下におわす十二神将像には、南北朝時代に手が入った跡がある。



薬師堂には永正４（1507）年の鐘銘が残っており、そこには尾州中嶋郡中野郷の祖父江五郎右衛門が飛州益田郡湯嶋薬師堂に寄進したと記載されている。追銘には、郡上郡遠藤左馬助盛数寄進とあり、これは郡上郡の遠藤家が三木（みつき）という豪族を倒して南飛騨を平定した際、戦利品として鐘を持ち帰り、武田家の北辰寺に寄進した際の銘と考えられている。

397 温泉寺については、現地調査ヒアリング及び醫王霊山温泉寺ホームページ「温泉寺の歴史」http://www.onsenji.jp/history/index.html（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。





左が当初の銘、右が追銘の拓本。銘が掘られていた梵鐘自体は現存していない。

開山縁起にあやかり、本堂前の湯掛け薬師には温泉が引き湯されている。温泉寺に湯が引かれるようになったのは、集中管理システムが出来て以降のことだが、かつて下呂温泉の後背の湯ヶ峰に湯が湧いていたという伝承も残っている。



境内の「湯かけ薬師」

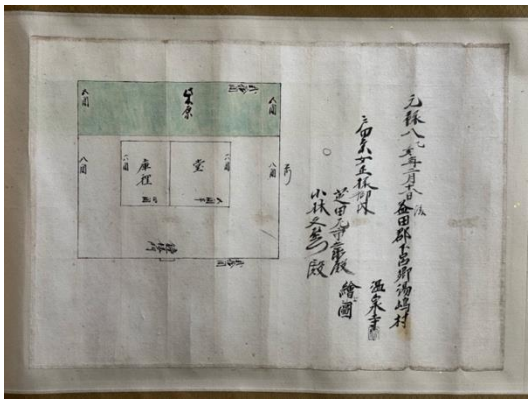


近世以前から昭和初期の頃まで、寺に泊まりながら川に湧いた温泉に浸かりに通っていた人が多くいた。寺には宿坊のような施設があったという記録はなく、湯治客は、本堂の中に雑魚寝し、昼は川に降りて無料で温泉に入って、夜は寺に戻って本堂で寝て、薬師如来を拝んでまた川に降りていくという形で長期滞在していた。また、川に降りることはできても山腹の寺まで登って帰ることが難しい方は、本堂の戸板を担架の代わりにして連れて上がっていたという。

昭和 10（1935）年頃までこうした風習は続いており、ご高齢の方の中には、小さいときには本堂のそこら中に人が寝ていたと話される方もいるという。当時は、河原の暖かい場所で石をちょっとどけると、お湯が湧いており、そこに入れたそうで、自分で温泉を作って入るような感じであったと伝えられている。



温泉寺と川の位置関係を示す明治初期の絵図。望川館・山形屋・小川屋など現存する旅館もあるが、現在の位置は川寄りに移っている。



元禄８（1695）年の本堂間取図。宿坊はないが、庫裡の表記があり、煮炊きの世話もしていたと考えられる。

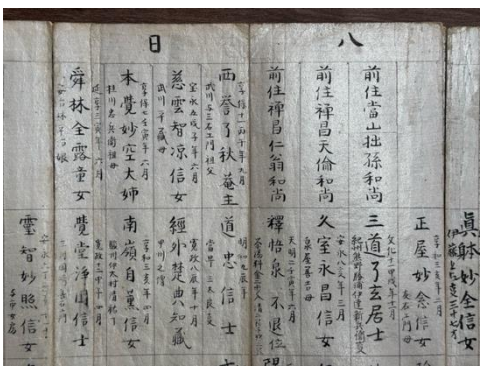
住職だけでなく、門前の檀家の方たちも湯治客のお世話のお手伝いをされていた。檀家さんの言い伝えで最近わかったことだが、寺に滞在する湯治客の病気療養のお世話をされていた檀家については、過去帳に記載された戒名が「庵主（あんじゅ）」など出家者向けのものとなっている。こうした例は江戸時代に多い。

過去帳には湯治客の名も残る。江戸時代から残されている過去帳を見ると、豊後佐伯（大分）や江州（滋賀）、紀州（和歌山）、遠州（静岡）、越中（富山）など各地の方が記載されており、病気療養に来て寺で亡くなられた方だと推測される。愛知・三重・岐阜など東海の湯治客が多いが、温泉がある地域から来られた人もいることから、他の温泉で治らなかった人が最後の望みをかけてくるような温泉地だったのではないかと思われる。家族などに別れを告げ終焉の地として下呂に集まっていた可能性もある。

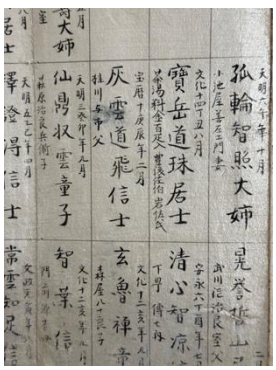
過去帳には御供料（ごくうりょう）として「茶湯料（さとうりょう）」も記載されており、病気療養の方が自分の亡くなったあとの弔い費用を収めていたことがわかる。温泉寺では今も訪ねてきた人が雨露をしのげるよう、夜に施錠しないように代々伝えられている。現在では本堂に寝泊まりすることは安全上認めていないが、自転車旅で一夜の宿を求めてきた方に本堂脇の観音堂を仮宿として提供することはある。



過去帳の外観



中程にある「庵主」とついた戒名が、湯治客のお世話をされた檀家。



右から２番目の戒名に、茶湯料、豊後・佐伯とある。


現在の本堂内部

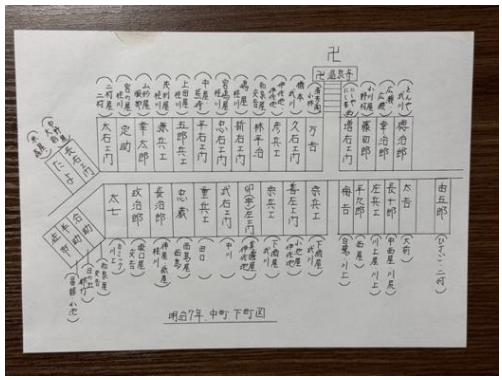

観音堂

亡くならず、下呂温泉で快癒した湯治客については、快癒祝いの絵馬が残る。本堂に奉納されている天保７（1836）年の絵馬には、伊勢国桑名の直七（なおしち）によるもので、旅館の二村屋（ふたむらや）にその逸話が伝わる。逸話によれば、直七は裕福な材木問屋の息子であったが、元服後、飲む打つ買うの遊興に耽り、性病（花柳病（かりゅうびょう））に罹患してしまう。そのため、父親が籠を仕立てて下呂温泉に向かわせた。しかし、直七は性格が横柄で、籠かきに文句ばかり言うので、下呂の寺の石段の下に置き去りにされてしまった。

倒れていた直七を二村屋の主人が助けて帰ったが、病でただれて汚いので座敷にはあげられず、土間に筵を敷いて寝かせ温泉をぶっかけていたところ病気が良くなり、性根も入れ替わった。１年後に父親が心配して籠を向かわせたところ、「こんなところまで来てくれてすまなんだ」と自分で歩いて帰る旅支度をして出発したので、籠かきがびっくりしたという。

絵馬には病が癒えた直七が下呂を旅立つ場面が描かれている。松の下の女性は見送りにきた二村屋の女将である。この絵馬は、直七が桑名に帰ってから店の材木で制作させたもので、天保７年９月、直七自身が下呂まで歩いてきて奉納したと伝えられており、この時、温泉寺の薬師如来にも参詣したと考えられる。


直七の絵馬


明治初期の下呂温泉の地図。左の方に二村屋が見える。

絵馬は他にも残っており、志州堅神村（伊勢国志摩地方）の湯治客が奉納した絵馬には、「入湯にて病治ると思うなよ　薬師如来の加護あればこそ」と、当時の薬師如来への信仰の深さが窺える文が記載されている。絵馬以外では、本堂の柱の墨の落書きがある。出身地や名前などが書かれており、絵馬を仕立てる金銭的余裕がなかった江戸期の湯治客が記念や願掛けに記したものと考えられている。愛知・三重・岐阜等の地名が見られる。



志州堅神（ししゅうかたがみ）村の湯治客が奉納した絵馬


本堂柱の落書き。「知多郡上半田村文政 11 年 6 月」とある。

温泉寺の祭礼としては３月８日に開催される薬師祭がある。薬師祭では、薬師如来にお湯が出続けている恵みに感謝するとともに、これからも恵みが続くよう願う。本堂で薬師如来の前に源泉の湯をお供えし、これを頂いて「ありがとうございます」と感謝する。参加者は地元の檀家さんや温泉関係者がほとんどで、お勤めをしたあとは酒など飲む。かつては３月の４、５日頃に桜が咲き、神社の祭りがあるのでみんなでご馳走を作っていたので、そのご馳走の残りを持ち寄って、温泉寺で８日にお祭りをしていたそうである（現在は神社の祭りは４月に変更されている）。

温泉寺の温泉にまつわる祭礼としては、この他に、昭和 22（1947）年に観光祭行事の供養として始まり、昭和 31（1956）年から現在の名となった「温泉感謝祭」（下呂温泉を有名にした恩人を記念し「万里集九・林羅山祭」とも呼ばれている）が８月上旬に行われている。温泉感謝祭では、JR 下呂駅から下呂大橋を通って温泉寺まで関係者（旅館関係者や住職など）が巡行し、温泉寺に着くとまず献湯の儀を行う。湯は、共同浴場の「白鷺の湯」と、温泉寺内の湯掛け薬師の湯を使う（かつては「薬師湯」の湯を使っていた）。次に野口雨情の下呂小唄を、芸妓をはじめ一同で奉納し、住職による 献茶・配膳の儀式、薬師如来・万里集九・林羅山への三拝、温泉守護祈願の薬師如来への読経、功労物故者への回向、一同による焼香と続き、薬師如来御真言を７回唱える。儀式、挨拶などの終了御は、別場所に移動し、御斎（おとき）を行う。

お釈迦様の誕生祝である花まつりは、本来４月８日であるが、温泉寺では５月５日のこどもの日に、お釈迦様と一緒に地域の子どもの誕生を祝うという形で実施、パレードなどを行

っている。この形になったのは、先々代の住職の頃、おそらく昭和の初め頃からである。その他には灯籠流し等を実施している。

定期的な祭りではないが、新たに源泉を掘る際には温泉寺に法要の依頼があり、現代でも工事前の安全祈願祭と工事後の完工式では薬師様の御経と御真言をあげている。高温で湯量豊富な良い源泉が出るかどうかは掘ってみないとわからないため、薬師様のお恵みがあるように真剣にお祈りしている。





11 号源泉の完工式の様子（左右とも）
※下呂温泉事業協同組合提供資料

＜神社＞

下呂温泉の下呂温泉神社は、平成元（1989）年に建立された新しい神社である。下呂温泉の旅館会館の建て替えの際、温泉への感謝を示すため、山形県湯殿山神社から分霊を受け、会館の一階部分に創建した[398]。湯殿山神社は、近世まで羽黒派修験道の本山であった出羽三山の１つであり、大山祇神の本地として大日如来を奉じていた。現在の祭神は大山祇神（おおやまつみのかみ）、大己貴命、少彦名命である。湯殿山域には、境内の湯殿山神社本宮御神湯（足湯）と、参籠所（さんろうじょ）の湯殿山参籠所丹生（にぶ）鉱泉御神湯風呂（源泉：丹生水上神社（にぶみなかみ）／祭神：丹生都比女神（にぶつひめのかみ））の２つの温泉がある[399]。

下呂温泉神社の例祭は毎年 10 月８日で、下呂駅から森八幡神社を経由して下呂温泉神社に巡行が行われる。巡行では、山伏や猿田彦衣裳の天狗をはじめ、白鷺舞、万里集九衣裳、林羅山衣裳など、下呂温泉ゆかりの様々な舞や衣裳が披露される。温泉神社につくと、修祓（しゅばつ）の後、献饌（けんせん）、祝詞奏上（のりと）、玉串奉奠（たまぐしほうてん）、撤饌（てっせん）等が行われ、終了後は直会（なおらい）となる。また、節目となる年には、

398 温泉感謝祭については、飛州下呂温泉畧縁記については、菱川晶子「温泉発見伝説と動物 ―岐阜県下呂温泉の三つの祭りと伝説―」愛知大学綜合郷土研究所紀要 令和６年 P73-P102 を参照。

399 湯殿山神社については、出羽三山神社公式ホームページ「羽黒派古修験道」
http://www.dewasanzan.jp/publics/index/75/、「湯殿山は温泉の宝庫」
http://www.dewasanzan.jp/publics/index/1/detail=1/b_id=3/r_id=74/（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

湯殿山神社から山伏装束の献幣使も訪れる[400]。

また、平成 22（2010）年には、「げろ」と「無事帰る」などの語呂合わせで「加恵瑠神社」も作られている。 祭神は「加恵瑠大明神」である。下呂温泉合掌村の歳時記の森には、「かえる神社」もある。



下呂温泉神社



加恵瑠神社

＜料理・食品[401]＞

下呂の源泉はアルカリが高いため飲食には不適で、基本的には料理や加工食品には使っていない。ただし、下呂温泉郷の小坂町にある湯屋温泉は炭酸泉で飲食が可能であり、飲泉や温泉粥・温泉水仕込みビールなどに温泉水を活用している。



炭酸泉を使ったビール

下呂市の郷土食としては、温泉を使ったものではないが、朴葉寿司・朴葉餅・あねかえし（よもぎ餅）・鶏ちゃん等がある。「鶏ちゃん」以外の郷土食は観光客向けとしてはこれまであまり意識されておらず、下呂温泉観光協会を中心に文化の掘り起こしが行われている。

鶏ちゃんは、鶏肉の味噌焼き鍋である。神岡鉱山の採掘現場で働いていた朝鮮系の労働者が牛や豚のモツをつかった「とんちゃん」の味を伝え、鶏を使う「けいちゃん」につながったという説がある。地域のスタミナ食として根付いており、おもてなし料理というよりは日常

400 温泉神社については、飛州下呂温泉畧縁記については、菱川晶子「温泉発見伝説と動物 ―岐阜県下呂温泉の三つの祭りと伝説―」愛知大学綜合郷土研究所紀要 令和 6 年 P73-P102 を参照。

401 この項は現地調査ヒアリングによる。

食の一部といった位置づけである。

朴葉寿司は５月末から６月下旬までの季節食として下呂全域で製造され、基本的には家庭で作る、地域住民にとって馴染みの郷土食である。混ぜ酢につけた鱒（鮭・鯖の場合も）の切り身を酢飯に混ぜ込み、紅生姜をのせ朴葉に包む「混ぜ込み式」と、酢飯の上に魚などの具材を彩りよくのせる「後載せ式」がある。過去には下呂市全域が混ぜ込み式であったようであるが、現在では中央部から南部、東部は後載せ式が多い。観光客や遠方への贈り物商品として送られる物も、圧倒的に後載せ式が多く、見栄えによって製法が変わってきたものである。地区によっては朴葉寿司をつくる際にうたう歌があり、この歌も地区によって違いがある。季節に限定があるためこれまであまり観光客向けにアピールされていなかったが、令和６年11月現在、「農泊」と絡めた展開が観光協会で検討されている。

その他、ねずし（下呂市を中心とした飛騨地域、中濃地域で古くからお正月料理として振る舞われてきたなれずしの一種）や、栃の実せんべい（明治25（1892）年に創業した養老軒が創製した飛騨銘菓）などがあるが、下呂温泉だけの名物料理、名産品としてはあまり取り扱われていない。

＜特産品[402]＞

下呂温泉には現在まで受け継がれている伝統薬として「奥田家下呂膏（おくだけげろこう）」がある。かつては病や不調の治癒を求めて下呂温泉を訪れる湯治客が買い求めることが多く、また高齢の地元の方にとっては子どもの頃関節痛などがあると親によく貼られていた薬であった。以前、岐阜県立下呂温泉病院で温泉療法によるリハビリが行われていた時には、病院の温泉リハビリに合わせて下呂膏を使用される方も多くいた（平成26（2014）年に病院が下呂市森地区に移転した後、温泉療法を中止している）。



現在販売されている「奥田家下呂膏」

奥田家下呂膏は、もともと下呂温泉の北、東上田地区にあった奥田又右衛門の接骨院で使用していた膏薬であった。正確にいつ開発されたかの記録は残っていないが、奥田又右衛門膏本舗によれば、江戸時代、二代目又右衛門の頃には今とほぼ同じ生薬を配合した貼り薬の

402 この項は現地調査ヒアリングによる。

使用が始まっていたという。

一般販売が開始されたのは、明治 30（1897）年に五代目又右衛門が家業をついでから後となる。五代目は「神業」と呼ばれる名医で、昭和初期には施術を求めて１日 200 人を超える患者が全国から集まり、あまりの多さに近隣の民家が順番待ちの患者のために民宿となったという逸話が残っている。下呂膏の市販もこの人気を受けてのものであり、昭和９（1934）年、奥田又右衛門膏本舗の全身となる「六合社」を設立、「東上田膏」という名称で認可を受けて販売を開始している。六合社は、昭和 20（1945）年、戦時統制令で岐阜県製薬に統合されて消滅、同年、五代目又右衛門も亡くなっている。昭和 47（1972）年、独立の会社として七代目又右衛門により再開され、株式会社「奥田又右衛門膏本舗」となった。その際、家伝の貼り薬も、現在の名称の「奥田家下呂膏」となっている。





奥田接骨院。左の写真（奥田又右衛門膏本舗資料）は、昭和 19（1944）年撮影のもの、右は現在の様子。



五代目又右衛門（大正 15 年撮影）
（奥田又右衛門膏本舗資料）



五代目又右衛門　頌徳碑



昭和 10 年代の「東上田膏」（奥田又右衛門膏本舗資料）



昭和 48 年の「奥田家下呂膏」（奥田又右衛門膏本舗資料）

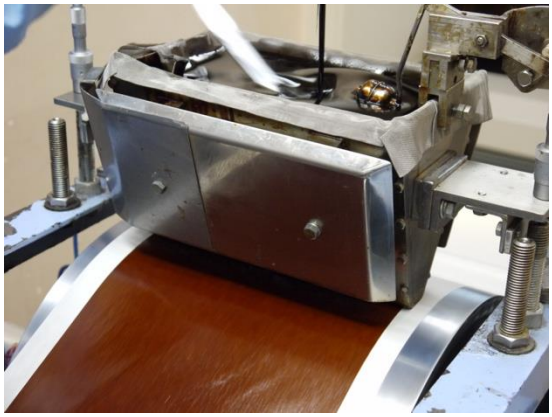
奥田家下呂膏は、黄柏（きはだ）、楊梅皮（ようばいひ）を主成分に、５～６種類の生薬を配合して作られており、美濃和紙に膏薬が刷り込まれた昔ながらの貼り薬である。この形の膏薬は、現在、奥田又右衛門膏本舗一社でしか製造していない。御嶽山（おんたけさん）嶺の岐阜県側に位置する下呂温泉は、地理的にキハダの入手が容易であり、岐阜の名産であった美濃和紙とともに、地域の物産を利用して開発された膏薬となっている。

下呂膏は、第３類医薬品として承認を受けており、薬剤師もしくは登録販売事業者から購入することができる（通販を含む）。第３類医薬品になるに当たっては、詳細な製造方法も承認の際の確認事項となるため、製造過程の厳格な管理が必要となる。現在の下呂膏の製造は、昭和の頃から使っている機械を用いて行われており、既に代替の製品も、修理を依頼できる職人もおらず、故障した場合には製造が止まってしまう状況にある。様々なメーカーに相談してみたが、気温や湿度で品質に影響が出る天然の生薬を 10 ミクロンのシートにしていく製造過程を再現するところが見つけられていない。

現在の機械の利用での下呂膏の製造は、シートの厚さを 10 ミクロンに保つため、重さで厚みを測りながら、ノギスを人の手で微妙に調整しつつ行っており、熟練の技が必要となっている。上述したように故障したら製造が終了してしまうため、壊れないようにメンテナンスしながら、細々と製造を継続している状態である。



生薬を攪拌する機械



生薬を和紙にすり込む機械

生薬の性質上、独特の香りがあり、皮膚に貼り跡が黒く残るため、現在では香りや色を調整した製品も販売されている（従来からの下呂膏である通称「黒の下呂膏」に加え、「白光（通称：白の下呂膏）」、「エースプラスター（通称：緑の下呂膏）」が販売されている）。膏薬以外の医薬品としては、塗り薬の「奥田家下呂膏 ID 液」（第２類医薬品）、薬用入浴剤の「下呂膏の湯」（医薬部外品）がある。また、医薬品は販売場所が限られるため、下呂膏を広く知ってもらうことを目的に、漢方成分を抑えた「なごみシート」や下呂温泉の成分の入った入浴剤「下呂膏物語なごみの美湯」など雑貨に相当する商品も開発している。

近年では中国や台湾からの訪日客が、奥田家下呂膏を指名買いしに、来店することも多い。その際、最も人気があるのは昔ながらの黒いオリジナルタイプの膏薬である。下呂膏を知った経緯を尋ねると、親や祖父母が下呂膏をよく貼っていたという話をされる方もいる。

現在、奥田又右衛門膏本舗では 140 年前から残る「若松屋」の建物を使用している。若松屋は、往時は呉服や薬問屋を営んでいた雑貨商で、花王の創業者が修行した店としても知られており、店内には、当時の花王の看板など、関連の文物も展示されている。



現在の下呂膏の直売店の様子（旧若松屋）


明治時代の旧若松屋（奥田又右衛門膏本舗資料）

＜芸能＞

芸能としては、昭和 44（1969）年から平成８（1996）年まで下呂合掌村で常設公演を行っていた「竹原文楽」がある。同文楽は、下呂町に生まれた洞奥（ほらおく）一郎氏が創始し、洞奥氏が一人で企画演出・人形や大道具などの制作・人形操作による公演を行っていたもので、たった一人の技により 100 体にも及ぶ文楽人形が歌舞伎を演ずるという他にない芸能であった。下呂町無形民俗文化財ともなっていたが、洞奥氏の健康状態に伴い休止、現在は合掌村内にある「竹原文楽記念館」に人形などが保存・展示されている（氏は平成 16（2004）年に逝去）[403]。

温泉感謝祭で歌われる下呂小唄（「新調下呂小唄」）は、昭和 13（1938）年、野口雨情が下呂温泉に来た時に書いた「下呂歌謡十四章」の巻物をもとに作成されたもので、下呂市内にはこの巻物に基づく歌碑も建てられている。現在、この巻物の現物は、市に寄贈されてい

403 この段落は、下呂町史編集委員会 編「飛騨下呂．通史・民俗」下呂町　平成２年３月及び　下呂温泉合掌村ホームページ「合掌の里」https://www.gero-gassho.jp/gassho/#sec4（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

る[404]。下呂小唄については、合掌村の演芸館「しらさぎ座」で定期的に公演されている芸妓の舞の中でも披露される。他に、「下呂さわぎ」などのご当地曲もある[405]。なお、下呂温泉の芸妓は現在２人まで減少しており、市が地域おこし協力隊職員として雇用し、合掌村での公演活動やお座敷遊び体験を提供、芸妓文化を保全している[406]。

下呂温泉は、益田川の川原に湧出する温泉により支えられる一方、同じ益田川がもたらす水害に幾度となく苦しめられてきた。この闘いを生き抜き、今に至る温泉街の繁栄を作り上げていく際の最大の力となってきたのは、なんと言っても、下呂温泉の地域でのまとまりの力である。長い歴史をみれば、下呂温泉においても、地区ごとの争いや、外部資本の導入に伴う法定闘争など、様々なトラブルがあった。しかし、下呂温泉の人々は、最終的にそうした軋轢を解決し、地域としての凝集力を発揮して、未来への発展に向けた力へと変えていった。現在の下呂温泉では、年間 100 万人以上の宿泊客を集めるとともに、DMO による徹底したデータマーケティングやエコツーリズムの展開など、一歩先の展開にも踏み出している。

こうした下呂温泉の地域のまとまりの象徴が、殆どの旅館が利用している温泉の集中管理システムである。地区内に立地する三つの巨大タンク、そして益田川を跨ぎ、湯之島地区と幸田地区を結ぶ集中管理システムのパイプ網は、物理的に各旅館に安定した湯を供給する役割を負っているのみならず、下呂温泉でいかに人々が協力し合い地域の成長に結びつけてきたかを目に見える形で示すものともなっている。温泉の権利といかに皆で分け合い、温泉資源をともに守り、継承していくか。そうした努力の歴史抜きに下呂温泉の繁栄を語ることはできない。

---

404 中部読売新聞「雨情の巻物　下呂市に寄贈　多治見の服部さん　温泉情緒漂う詩＝岐阜」令和 4 年 10 月 6 日を参照。

405 中日新聞「いいネ！岐阜　舞妓「まり華」デビュー　下呂の協力隊員　２３歳竹元さん　湯めぐり館完成式」中部読売新聞　令和 4 年 3 月 29 日を参照。

406 読売新聞「『公務員舞妓』が誕生、５０歳に続いて１８歳も…『下呂のために精いっぱい頑張りたい』」令和 4 年 4 月 2 日を参照。お座敷体験については下呂温泉合掌村ホームページ「団体様体験企画」https://www.gero-gassho.jp/group/geigi.html（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

（１１）有馬温泉

有馬温泉は、神戸市北部、六甲山地北側の紅葉谷の麓の谷間に位置する温泉地で、そもそもの源泉地の周辺に旧温泉街が集中し、周囲の高台に戦後立地した大型施設が並ぶ構造となっている。有馬は、飛鳥時代から記録が残り、古代・中世・近世と日本を代表する温泉地であり続けてきた。一方、有馬の源泉は、その管理が極めて難しいことでも知られている。

ここではこうした有馬温泉の特徴と湯の管理の技術について概観していく。

有馬温泉の歴史[407]

＜古代・中世前期＞

有馬温泉の史料上の初出は、日本書紀の舒明天皇３(631)年の「津國有間温湯」への行幸の記録と考えられている。舒明天皇 10（638）年にも「有間温湯宮」に行幸し、翌年正月８日まで約３ヶ月滞在している。また、孝徳天皇についても、大化３（647）年、「有間温湯」に、左右大臣群卿大夫を引き連れて行幸したとの記録が残る。鎌倉時代末期の釈日本紀に載る逸文であるが、「摂津国風土記」に、蘇我馬子が大臣であった時期（敏達天皇元（572）年から推古天皇 34（626）年まで）に発見されたとの伝承が記載されている。

上記の行幸の後、しばらく有馬への湯治の記録は途絶えるが、平安末期になると、寛仁３（1019）年に源頼定、万寿元（1024）年に藤原道長や大納言藤原斉信、長久３（1042）年に関白藤原頼通、大治３（1128）年に白河院、安元２（1176）年に後白河院・建春門院などと多くの院・貴族が湯治に来た記録が残っており、有馬が代表的な湯治の場として古代を通じて著名であったことが窺える。鎌倉時代に下るが、藤原定家は 10 回以上も有馬に訪れており、「明月記」には、有馬の温泉寺の上人湯（上人湯屋とも）に泊まり、湯治をしたという記録が残っている。

上述したように、有馬の歴史は飛鳥時代に溯る。そのため、有馬に近世以前より伝わっている開湯伝説は、開湯そのものではなく、有馬温泉の中興に関わる伝説となっている。こうした温泉中興の伝承は２つあり、１つは、13 世紀前半の「古今著聞集」などにも見えることから、中世前半には広く知られていたと思われる温泉寺の開山縁起で、７～８世紀の高僧行基が、山中の病人を介護したところ、それが薬師如来であったというものである。行基や薬師如来による開山縁起は、これまでも見てきたように、全国の多くの温泉地で見られるものだが、有馬のこの伝説（行基が温泉に関わったという史実はない）は、行基と薬師如来がともにあるものだけでなく、行基のみ、もしくは、薬師如来のみのものを含め、史料上、最古と考えられている[408]。

もう１つは、享禄元（1529）年に炎上した温泉寺の再興を図るために三条西実隆（さんじょうにしさねたか）が翌享禄

---

407 この項、近世までの歴史については、新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」平成 22 年、「新修神戸市史　歴史編Ⅲ　近世」平成４年を基本的に参照した。他の文献を参照した点については、別途脚註を設けた。

408 行基と薬師如来の伝承については、西尾正仁「御影史学研究会　民俗学叢書 13　薬師信仰−護国の仏から温泉の仏へ−」岩田書店　平成 12 年　を参照。

２（1530）年に書いた「温泉寺再建勧進帳」を初出とする伝承で、そこでは、承徳年中(1097～99 年)に大洪水で温泉寺と有馬温泉が荒廃したこと、それを仁西上人が熊野権現の霊夢を受け、熊野から有馬へと来訪し、再興したとのものである。また、天文 17（1548）年の奥書がある「湯山阿弥陀堂縁起」（中世から明治初頭にかけ、有馬は、湯山と呼ばれていた）では仁西を山伏と呼び、再興の時期を建久年中(1190～99 年)としている。なお、大きな水害が有馬に及んだという史料上の記録は発見されておらず、また有馬が衰亡していたとされる時期についても、上述したように、貴顕の来湯が複数記録されており、そのまま歴史上の事実と受け取ることは難しい[409]。

＜中世後期＞

有馬の隆盛は中世後半になっても変わらず、15 世紀後期の禅僧万里集九は、 日本の三重湯として、草津温泉や湯島温泉(岐阜県下呂温泉)とともに、有馬温泉を挙げている(「梅花無尽蔵」「続　前書類従」)。その他、夢窓疎石、赤松即祐（播磨・備前守護）、宗祇、蓮如、近衛政家（前関白）、足利義稙、足利義輝など、五山の禅僧を中心に、武家、公家、連歌師など多くの貴人が有馬に湯治に訪れていた記録が残されている。また文明 19（1487）年の「大乗院寺社雑事記」には、下層の僧職も多く湯治に来ていることが記載されており、来訪範囲も、京都、奈良を中心としつつ、播磨、丹波、紀伊、伊勢、美濃など広範囲に及ぶ。

当時の有馬への道は概ね三つの経路に分かれていた。一つは京都から大阪の瀬川まで山陽道を進み、そこから生瀬・船坂（双方とも現在の西宮市）を経て有馬に至る経路で、湯山街道（有馬街道）の東半分に当たる。二つ目は淀川下流から生瀬を経由する経路、三つ目は兵庫津経由の経路である。また、播磨からの経路もあった。

中世の有馬の湯治の様子は、享徳元(1452)年に来訪した瑞渓周鳳の「温泉行記」、季瓊真蘂の公用日記「蔭涼軒日録」の文正元（1466）年の記載に詳しい。それによると、当時の有馬温泉には一つの建物内に壁で仕切られた一の湯と二の湯があり、貴賤の別なく、町の南側に宿をとったものは一の湯に、北側に宿をとったものは二の湯に入った。各湯には広さ四間の脱衣場があり、そこから５、６段下ったところに浴室があった。浴室には横５～６尺、縦７～８尺の浴槽があり、南側の一尺余りを板で区切って入浴用とは別にし、灌頂や口をすすぐために用いたという。浴槽の材質は松で、一度に入れるのはせいぜい 10 人程度であった。

浴槽の底は細かな砂となっており、その上に方石が８～９個置かれていた。砂の下が源泉で、午前 12 時頃には必ず湧出があった。砂の底には薬師如来の石像が埋められていると伝承されていた。入湯は一日に早湯、午湯、晩湯の３回であった。上述したように入浴できる人数に制限があるため、入浴の順番を争い、各宿の奴婢僕従が言い争うこともあったという[410]。

応安４（1371）年の「祇園執行日記（京都祇園社の執行による公用日記）」によれば湯治の

409 仁西上人の伝承については、石川理夫「中世の史料に見る有馬温泉の「湯女」の成立と呼称」温泉地域研究　第 31 号　平成 30 年　P1-P12 を参照。

410 奴婢僕従については石川の上記論文参照。

日数は三廻りで計二一日が故実となっていた。また、湯宿には「湯治養生表目」と題する書が備えられており、有馬の湯の効能や入浴法などが示されていたという。有馬の町には、当時、上記の共同浴場と温泉寺を中心に、60〜100 戸ほどの家々があった。共同浴場のすぐ横には足利義満が休息したといういわれの息殿、西には義満が宿泊したという御所坊があった。

温泉寺は、有馬の信仰の中心地であり、湯治客全てが参拝した。本堂は薬師堂で、現在の温泉神社に当たる鎮守の社も建っていた。鎮守の祭神は女体権現で、毎月２日、巫女の舞が行われていた。鎮守の横には三輪明神、鹿舌明神の小廟があり、その他、熊野権現、天満天神、地蔵堂、如法堂などが立ち並んでいた。加えて、寺記の絵解きが、湯治客に対し一人 100 文で行われていた（絵解きに使われた鎌倉時代後期の「温泉寺縁起」の掛幅は、現在、京都国立博物館所蔵となっている）。加えて、温泉寺以外にも、施薬院、阿弥陀堂など寺院があり、滝川を溯ったところに鼓滝、船坂川上流に鎌倉谷という名所もあった。湯治客は、入湯以外の時間は、寺社を廻り、名所に赴き、寺僧や逗留していた貴人と茶話に興じ、詩会や連歌の会、宴会を催すなど交流を楽しんでいたと記録されている。

有馬は、轆轤（ろくろ）を使って木を挽き、器を作る挽物（ひきもの）の産地でもあった。湯宿では、二階を宿に提供し、一階では挽物を作るという兼業が基本であった。宿の主人の中には将軍家大工職に任命されるほどの挽物の名工もいたという。そのため、有馬の土産といえば、何より挽物で、薬器、食籠（じきろう）、香合（こうごう）、盃、印籠など多くのものが作られ、「湯山もの」として贈答品にも用いられていた。ひしゃくや楊枝も有名であった。有馬の産ではないが、当時高名であった播磨鍋も土産物として売られていたという。また、有馬では、行基の行いにより魚を食べることが許されたという伝承があり、湯治客向けの食材の行商では、魚売りが多かった。

しかし、戦国の世が拡大すると戦火は有馬温泉にも及び、享禄元（1528）年、有馬は焼かれ、温泉寺も焼失した。

＜戦国時代＞

中世以来、有馬はまず赤松家の支配下にあり、ついで赤松家流の有馬氏が有馬の守護となった。有馬の地が秀吉の支配下に入るのは、信長に中国攻めを命じられた天正５（1577）年以後である。既に天正７（1579）年には有馬を秀吉が実効支配していることを示す書状が複数発行されており、天正 11（1583）年までには完全に秀吉の支配下となった。この年、賤ヶ岳の戦いで柴田勝家を下すと、秀吉は有馬で湯治を行っている。また、天正 13（1585）年には、有馬での初めての茶会の記録が残り、天正 18（1590）年に北条氏を討伐し天下を統一した直後、後世に「秀吉の有馬茶会」として知られる千利休、津田宗及、小早川隆景や有馬の有力者を招いた茶会を阿弥陀堂で行っている。これを偲んで有馬・善福寺で行われているのが、昭和 25（1950）年に始まった「有馬大茶会」である[411]。

秀吉の有馬湯治はその後も続き、文禄３（1594）年までの間に実に９回を数える。同年に

411 有馬温泉観光協会ホームページ「お知らせ　第 75 回　11 月２日（土）、３日（日・文化の日）豊公を偲ぶ　有馬大茶会（表千家）開催」https://www.arima-onsen.com/27/2707/（令和６年 11 月 18 日確認）。

は、地元住民を立ち退かせ、湯治用の別荘も建築している。秀吉が湯治の際には、「ゆな、とうミやう坊主、湯うち坊（史料原文ママ）」などと呼ばれる世話役が多数付き、その費用は「地し方」と呼ばれた温泉からの運上より差し引かれていた。なお、ここで文献に残る「ゆな」が、江戸時代の有馬温泉における湯女と全く同じものであるかについては議論が残っている[412]。

秀吉については、文禄５年（1596)年の大地震に伴って新たな源泉が湧出したことから、そこに湯屋や馬屋などを造ったという記録が残り（源泉自体はその後湧出が止まっている）、その湯屋や庭園に関する遺構が極楽寺庫裏の地下から発見されている。湯屋の遺構には、源泉跡、引き湯のための木の樋、蒸し風呂、岩風呂などがある。唐津・備前・丹波・志野・織部・瀬戸・美濃など各地の日本各地の陶磁器のほか、唐物も多く出土しており、秀吉時代の繁栄が偲ばれる遺構である。遺構の上に立つ極楽寺・念仏寺は徳川将軍家と関わりの深い浄土宗の寺院であり、秀吉の湯殿は、幕府によって政治的な理由で破却され、その上に将軍家ゆかりの寺院が建てられたものと考えられている。





上：岩風呂遺構

左：蒸し風呂遺構

なお、有馬を含む摂津国は、秀吉から秀頼へと継承されたが、関ヶ原の戦いの後、慶長６（1601）年には有馬氏の所領となり、徳川幕府が出来た後も、福知山藩主となった有馬家が元和６（1620）年に久留米に転封するまで治めた。その後有馬は、幕府直轄領、三田藩領、大阪城代領が入り組む複雑な土地となる。このうち有馬温泉の地は幕府直轄領となり、幕府代官の支配下となった。

412 「ゆな」の解釈については、石川理夫「中世の史料に見る有馬温泉の「湯女」の成立と呼称」温泉地域研究　第31号　平成30年　P1-P12を参照

＜近世＞

近世中期、宝永７（1710）年の有馬温泉の状況をみると、人口は 2,530 人、560 軒の家が並ぶものとなっており、中世に比べ大きく拡大している。温泉としては、中世と同じく、一の湯と二の湯に区分された共同浴場一つを各宿の湯治客が使っていた。延宝３（1675）年の「有馬小鑑」によれば、一の湯に 10 坊、二の湯に 10 坊の、合わせて 20 の本坊（大規模な宿）が指定されており、各房には大湯女と小湯女の二人の入浴係が配置されていた。湯治客が込んでくると湯女が「あがれ、あがれ」といって杖を叩き共同浴場から上がらせていたという。また、天和３（1683）年の「迎湯有馬名所鑑」には、本坊の配下に計 35 軒の小規模な宿が付随していたことが記されている。

この二十の坊については、先に述べた建久年間の有馬温泉に復興にあたり仁西上人に付き従った十二の家の後裔だと、近世の有馬の地誌などでは、申し伝えられている。実際、二十坊は、江戸期を通じて湯山の町政に深く関わり続けており、特に織豊時代に善福寺とともに湯山町の代官を務めた池ノ坊の余田家と奥ノ坊の河上家は、文永 13（1830）年まで町年寄を代々務め続けていた。ただし、この十二坊の伝承自体については、史料上、主要な湯宿を「坊」と呼ぶようになったはじめが室町時代の「御所坊」であり、それ以前には見られないこと（鎌倉期に見える宿の名称は「上人湯屋」、「湯口屋」、「仲国屋」、南北朝時代では「谷藤五郎湯屋」）、室町時代も、「御所坊」の他に見える名称は「息殿」「一湯兵衛」「二湯兵衛」などとなっていることから、歴史的な根拠は薄いと考えられる。一方、16 世紀末頃には後の二十坊に繋がる各湯宿の事跡が見えており、二十坊の成立が江戸期以前に溯る可能性は高い。

元文２（1737）年の絵図、「摂州有馬細見図独案内江阿弥画」をみると、近世の湯山町は、一の湯・二の湯を中心にその周辺を二十坊が囲繞し、そのさらに周りを他の宿が取り巻くという構造となっていた。二十坊は、共同浴場への距離の近さと、先に述べた共同浴場において湯治客を差配する湯女を使用する権利を有することによって、他の宿との地位の違いを明確にしていたのである。なお、二十坊の中には近世没落したものもあるが、その際には、その土地家屋とともに、湯治客を泊める権利である「客屋株」、泊めてきた湯治客が記されている「客帳面」及び「湯女株」がまとめて売買されている。また、坊の建て替えや移転の際には、一の湯と二の湯のどちらかに属するかという南北の分離が維持されるように調整されている。二十坊が温泉地の南北を差配する社会構造・地理的な空間構造を支える制度が整えられていたのである。また、寺社としては、南方の高台に温泉寺薬師堂、極楽寺、念仏寺、清涼院が、滝川沿いに林渓寺、善福寺が見えている[413]（温泉寺薬師堂、念仏寺、善福寺は現在と同じ位置にある。また、極楽寺跡地は「太閤の湯殿館（ゆどのかん）」となっている）。

こうした中、江戸期の記録でも、有馬には、林羅山などの儒者、貝原益軒などの医師、尾張藩主徳川義直をはじめ多くの貴人・有名人が湯治に訪れており、紀行文や有馬の地誌を残している。紀行文には、中世までとは異なり、屋号を持つ商人と思しき人の著した書物も目立

413 二十坊の縁起と湯山町の構造については中村駿介「近世有馬温泉町の空間構造　有馬二十坊の社会的・空間的特徴について」日本建築学会計画系論文集 令和３年 86 巻 780 号 P657-664 を参照。

つ。宝永８（1711）年に開板された貝原益軒の「有馬湯山記」では、道中案内や名所紹介、温泉の効能の解説に加え、有馬に来られない人のために汲み湯が行われていたことが見える。また近世中期からは絵図などによって温泉を紹介する版本も増え、房とその湯女の名称が絵図の下に一覧されているもの、湯女自体を浮世絵にして土産物にしたもの、有馬近辺の名所図会などが残されている。

湯女の浮世絵が売られていることからもわかるように、近世後半、各坊の湯女は大きな人気を誇っていた。湯女の仕事としては、各坊の湯治客が日に３度円滑に入湯できるよう共同浴場への案内を行う、入湯している間、下男・下女とともに湯治客の衣類・浴衣・下駄などを預かり待機する、時間が来ると風呂から上がらせるなどの入浴の管理があった。湯治客が５千人にも及ぶ春秋の繁忙期など湯女の差配がなければ温泉場は回らなかった。また、装いとしても、白衣紅袴の装束を着け、歯を染め、眉を描き、高位高卿の湯治の際には、碁を囲み、琴を弾き、和歌を詠んだという[414]。秀吉の入湯の際にゆな代が経費として地し方から差し引かれていたこと、江戸期に入って湯女を抱えられる湯女株が売買されていたことからもわかるように、有馬の湯女は、温泉地を支える公的な役回りを担っていた。

なお、有馬温泉は、天明４（1784）年、浅間山の噴火の影響か、泉温が水のように下がってしまい、貴顕の湯治もなくなった。これについては、大和国高取藩の柘植彰常が復興を依頼され、泉源を掘り起こし、文化年間に源泉を復活させており（文化 13（1816）年、柘植彰常「温泉論」「温泉論附録」）、文化年間の諸国温泉功能鑑では、西の大関（一位）の位置を保っている[415]。

幕末期、天保の大飢饉と安政元（1854）年の大火により、有馬の温泉町（湯山町）は窮状に陥る。安政４（1857）年の願書では、最盛期 130 軒ばかりあった宿屋が近年 30 軒までに減少し、専業は４～５軒にすぎなくなったと惨状が訴えられている。また、二十坊による町の支配についても、町民からの度重なる不正の訴えもあり、年寄等の町役人の選定は、坊関係者による互選から、安政４（1857）年には、町民全てによる選挙へと変更された。また、この際には、湯女も減少し、仕事の内容も、共同浴場における入浴の世話から、宿における仲居のようなものへと変わってきており、結果、坊の地位も下がっている[416]。

なお、慶応２（1866）年、明治維新の２年前の様子を示す「有馬入湯入用記」では、湯治の際の支払いなどの状況が描かれている。まず、宿に到着すると、主人・湯女・下女に着祝儀（ちゃくしゅうぎ）を渡す。最初の一食は宿が提供するが、後は自炊になるので、米・味噌・酒等の買い物をする。また、一廻り目、二廻り目など七日ごとにまた祝儀を渡す。帰路には湯山町内の寺社や周

414 この段落の湯女の記述は樽井由紀「温泉民俗学の可能性 ―湯浴みをめぐる習俗と伝承を中心に―」佛教大学 歴史学部論集 第 10 号　令和２年３月　P43-P50 を参照。

415 東京大学デジタルアーカイブポータル「諸国温泉功能鑑（ページの題名は効能鑑だが史料画像は功能鑑）」https://da.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/portal/assets/6e7ee624-7914-4d9b-bf31-07310dcc6be9（令和６年 11 月８日確認）

416 湯女の減少については中村駿介「近世有馬温泉町の空間構造　有馬二十坊の社会的・空間的特徴について」日本建築学会計画系論文集 令和３年 86 巻 780 号 P657-664 を参照。

辺の名所を回っている。政情不安の中でも有馬への湯治は、周辺の行楽を含め、しっかりと続けられていたのである。

＜明治・大正・昭和戦前期＞

有馬温泉の共同浴場は、明治 10 年代に入り、大きくその姿を変えることになった。明治 14（1881）年には、近世までの温泉や銭湯の暗く風紀の悪い浴場を改善しようとする浴場改良問題が持ち上がり、翌明治 15 年から 16 年にかけて内務省衛生局のお雇い外国人による指導が入った。結果、明治 16（1882）年、一の湯と二の湯が一つにまとめられ共同浴場が洋風になった。また「温泉入浴 15 則」も制定され、現代の温泉入浴時における注意書きに近いものが示されるとともに、飲泉が禁止されている[417]。湯女もこの際に廃止された。ちなみに、有馬郡湯山町が、有馬温泉の全国的な知名度を踏まえ、有馬郡有馬町へと町名が変更されたのは明治 29（1896）年である。

洋風の共同浴場は、一般の好みに合わないということで、明治 24（1891）年の老朽化改修の際に和風の宮殿建築平屋建てに改められた。入浴方法は、１～２人ずつ湯船に立ってのものであったという。その後は明治 36（1903）年に三階建てに改修、さらに大正３（1914）年、大正 15（1926）年と改修を重ね（大正 15 年の改修では、男女別の浴場に加え、家族風呂が整備された）、戦後に至っている。なお、明治 32（1899）年の地震、六甲山鳴動により湧出量が増加したため、明治 36 年改修の際に別館として高等温泉が建てられたが、大正 15 年の改修に際して廃業している。

上記の江戸時代から続く共同浴場の他に、明治６（1873）年、鉱泉が発見された。それまでは「鉄砲水」と呼ばれ有毒ではないかと忌避されていたものだが、明治８（1879）年の検査により、頗る良好な炭酸水（泉温 16.8 度）であることがわかった。これを受け、明治 19（1886）年、旧清涼院の堂宇を移して建屋とし、翌明治 20 年に炭酸温浴場を設けた。大正 12（1923）年には有馬町から有馬霊泉土地開発（株）への賃貸となって、三階建て洋館での運営が始まり、昭和 40 年代まで営業が続いた。その後、老朽化により撤去され、現在は炭酸泉源公園となっている。

炭酸泉については、明治 33（1900）年に有馬鉱泉合資会社が設立され、「有馬炭酸水」、「有馬炭酸てっぽう水」という名のガス入りミネラルウォーターの販売を開始、明治 41（1908）年には甘味料や香料を加えた「有馬サイダー」も生まれている。ただし、これは短期しか続かず、大正 15（1926）年に有馬での生産は中止されている[418]。また、大正４（1915）年にはインドサラセン様式のラジウム温泉も開業しているが、こちらは昭和 13（1938）年の阪神大水害で流出し、再開はされなかった。

---

417 この段落ここまでは、新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史　歴史編Ⅳ　近代・現代」平成６年を参照。これ以降については、鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年を基本的に参照し、他の文献を参照した場合はその箇所に脚註を付けた。

418 炭酸水・サイダーについては、神戸新聞「昔『毒水』今「観光資源」　有馬温泉に湧き出る炭酸水　『サイダー』発祥の地」令和元年 10 月８日を参照。

明治以降の有馬温泉では、入浴客が多かったは３～４月頃から 11 月頃までで、繁忙期は７～９月の３ヶ月であった。明治 26（1893）年には７月 16,946 人、８月 25,986 人、９月 14,982 人の入湯客があったという記録が残っている。大正初めには宿屋 20 軒に加え、外国人が多く泊まるホテルも３つあったという。宿泊は、一泊二食付きの旅籠（はたご）型（相部屋なし）と、各坊にある山水の眺望がいい別荘を含む席（部屋）を貸し切る自炊（布団・食器などは宿から借り、食品・薪炭などは商人から購入する）、及び木賃宿（賄いなし、相部屋あり）があった。ただし、木賃宿であっても、他の温泉地に比べると外観内装ともに広く立派で、設備も整っていた。

大正末期からの投宿人員数と滞在延人員数をみると、大正 15（1924）年で、投宿人員数 15,353 人に対し、滞在延人員数が 52,104 人泊となっており、平均で３泊強しかしていない。しかも同年の夏期の内訳数をみると、内地人が４泊強程度であるのに対し、外国人が 10 泊以上しているのが目立つ。そのため、外国人の比率は投宿人員数で４％程度（内地人 4,856 人に対して 200 人）にすぎないが、滞在延人員数では９％（内地人 21,918 人人泊に対して 2,165 人泊）と１割近くに上っている。有馬は、明治から大正時代にかけて、既に、短期滞在型で、今でいうインバウンド客比率の高い温泉地となっていたのである。第二次世界大戦が既に始まっている昭和 17（1942）年には、この傾向はさらに高まり、投宿人員数 67,563 人に対し、滞在延人員数が 97,014 人泊と、一泊二日や日帰り客が相当数に上ることが想定される数値となっている。また、夏期の外国人の投宿人員数比率も、戦時下にも関わらず 1.4%程度おり、しかも人数自体が、大正 15（1924）年の 200 人から 206 人へと増えている。なお、投宿人員数の合計推移をみると、昭和４（1929）年に一旦 25,876 人まで伸びるものの、同年起こった昭和恐慌により、その後減少、昭和 10（1935）年には 25,886 人と再び盛り返し、その後昭和 14（1939）年には５万人を突破、昭和 17 年の 67,563 人に達している[419]。

入湯客数の推移をみると、大正 15（1924）年で合計 294,254 人、うち本温泉（江戸から続く共同浴場）が 167,503 人、ラジウム温泉が 33,391 人、炭酸温泉が 93,360 人となっている。このうち本温泉については、投宿人員数と同じく、昭和４年（1929）年までに 298,748 人と大きく伸びるも、昭和恐慌で失速、その後盛り返して昭和 14（1939）年に 30 万人を突破、昭和 17（1942）年に戦前のピークの 385,481 人を達成している。ラジウム温泉のピークは昭和５（1930）年の 87,109 人で、その後じりじり下がり、先に述べたように昭和 13（1938）年で終了となる。炭酸温泉のピークは昭和 14（1939）年の 96,860 人で、その水準まで盛り返すことはなかった。なお、芸妓数及び花代の統計も取られており、これも同様に、昭和４年（1929）年で一旦ピークを迎えた後低迷するが、昭和 11（1936）年以降盛り返し、戦前の最高売上は、旧日本軍による真珠湾攻撃の前年、昭和 15（1940）年となっている。

上記でみてきた明治半ば以降の有馬温泉の繁栄、短期滞在の行楽地への発展を支えたものとしては、京阪神という人口集積地からの交通基盤が、この時期、次々と整備されていった

419 この段落と次の段落は風早恂「有馬温泉資料集明治以降編」（有馬文庫所蔵）。

ことが指摘される。明治元（1868）年の六甲越の住吉道の開通、明治７（1874）年の有馬街道整備（現：県道神戸-三田線）、明治 11（1876）年の住吉道改修、明治 21（1886）年生瀬街道改修と、明治初期には街道整備が活発に行われ、人力車や駕籠での交通が発達した。また、明治７（1874）年には、大阪-神戸間で東海道線の仮営業が始まっている。明治 31（1898）年には、阪鶴鉄道（明治 40（1907）年に国有化、現在の福知山線）により有馬口と宝塚、翌明治 32 年には三田と結ばれた。また、明治 38（1905）年には有馬自働車が設立され、三田との間に乗り合い自動車が走った。ただし、これは１年弱で運営を終えている。有馬-三田間の乗り合い自動車としては、大正２（1913）年に東洋自動車も設立されたが、これも１年で運営を休止した。バスの運営が軌道にのったのは大正 14（1925）年の宝塚自動車商会の有馬への延伸からで、同年には神戸有馬乗合自動車も運営を開始している。また、昭和３（1928）年には裏六甲ドライブウェイが開通し、有馬から山上へのバスも運行を開始している。

有馬温泉まで鉄道が開通したのは、大正４（1915）年である。敷設は有馬鉄道株式会社であったが、国に貸し出され、大正８（1919）年には国有化された。この鉄道の駅は、温泉街の中心まで１km 程離れていたので、駅前には各宿に行く人力車が待機していたという。第二次世界大戦中の昭和 18（1943）年、不要不急の線として休業となり、その後復活せず、廃線となった。現在まで続く有馬への鉄道路線は、神戸有馬電気鉄道（株）（現：神戸電鉄（株））が昭和３（1928）年に開業したもので、湊川-有馬温泉を結んでいる。

上記の交通基盤整備により、有馬温泉は、阪神地域の大規模人口集積地とだけでなく、六甲山のリゾート地域とも強く結びつくことになった。神戸の居留地にほど近い六甲山は、明治 28（1890）年のイギリスの実業家アーサー・ヘスケス・グルームによる山荘に開発に始まり、明治 36（1903）年には日本最古のゴルフ場、神戸ゴルフ倶楽部がオープンしている。また、明治 38（1905）年以降は、阪神電鉄の開業に伴い、阪神が六甲山開発に大規模投資を開始、昭和７（1932）年には六甲ケーブルカーも開業した。この中で、神戸の居留地の外国人を最初のターゲットに、六甲山での登山、ゴルフ、ハイキング、スケートなどが盛んになり[420]、それが阪神地区の日本人にも普及していくことになる。有馬温泉はこうした日本最初期のリゾート開発地と強く結びつけられていったのである。

この結果、有馬温泉は、大正から昭和初期にかけて、六甲山のリゾート地と一体化した阪神地域のリゾート拠点として位置づけられ、阪神グループだけでなく、阪急グループの強い後押しを受けていくことになった[421]。上述した、短期滞在型で、しかも外国人客の多い有馬温泉の行楽地型の発展を支えるものとしては、こうした六甲山のリゾート地としての開発があったということができる。この結果、有馬は、多くの行楽客を集めるとともに、近世以前と同様、皇族や福沢諭吉、伊藤博文、蒋介石、幸田露伴、新渡戸稲造、竹久夢二、谷崎潤一郎、斎

420 この段落ここまでは、上垣 智弘，安島 博幸「六甲山における外国人別荘地の成立と展開」公益社団法人日本都市計画学会　都市計画論文集　25 巻　平成２年　P313-P318

421 笠井雅直 「戦前期温泉地間競争と交通網の革新(上)」名古屋学院大学論集 社会科学篇 第 49 巻 第 1 号 pp. 51―62　2012

藤茂吉など、数多くの貴顕が訪れる温泉地として繁栄を続けることとなった。

こうした有馬温泉の活況も、昭和 18（1943）年以降、戦況の悪化によって陰りを見せていく。有馬自体に空襲はなかったものの、神戸市をはじめ阪神地区は空襲で大きな被害を出し、有馬温泉でも、市域からの軍需工場の移転や旅館が海軍の療養所や市民病院の分院に転用されるなど、行楽地としての活動は難しくなっていった。

＜第二次世界大戦後＞

上述してきたように、戦前の有馬温泉は、近世以前から続く本温泉を中心とした共同浴場（外湯）による温泉地であり、各旅館に内湯は引かれていなかった。この中で、本温泉の湧出量が減少した場合への対応、及び、新たな大衆浴場や旅館・料理店・療養所・静養所や別荘地への内湯の確保が次第に強く求められ始めた。これを受け、有馬町と神戸電鉄が有馬温泉掘鑿（くっさく）有限会社（現：株式会社有馬温泉企業）を作り、掘削を始めたのは、昭和 16（1941）年で、まず既存源泉を掘削している（有明１号泉源／有馬では源泉ではなく泉源と呼ぶ）。

戦後の掘削は、昭和 22（1947）年に有馬町が神戸市に編入されて以降のこととなる。以降、同 22 年の銀泉を皮切りに、翌昭和 23（1948)年の天神泉源、昭和 26（1951）年の御所泉源、昭和 29（1954）年の極楽泉源、有明２号、昭和 30（1955）年には妬（うわなり）泉源の掘削に成功した。最初の銀泉が無色のナトリウム・塩化物-炭酸水素塩泉であることを除くと、他は含鉄・ナトリウム-塩化物強塩泉であり、空気に触れると伝統的な有馬温泉特有の赤い湯となる。有馬では、無色の銀泉に対して、こちらを金泉と呼んでいる。この他、上述したように、戦前から湧出しているラジウム泉と炭酸泉がある。

こうした源泉の開発を受け、昭和 20 年代後半から昭和 30 年代には、旅館の大型化やコンクリート化が始まった。源泉よりも高い位置にある高台の空地に大型施設を建設するため、タンクローリーを使った源泉の輸送も行われるようになった。本温泉の施設は、大正 15（1926）年建築のものが長く使われていたが、昭和 36（1961）年、鉄筋コンクリート造り地下１階・地上４階の神戸市営有馬温泉会館となる。また、翌 37（1962）年には、有馬ヘルスセンター（現：有馬ビューホテル「太閤の湯」）も建築された。鉄筋５階建て、大浴場、食堂、遊技場、虹鱒（にじます）釣り場、グリーンスライダー、プール等を擁する日帰り行楽の拠点である[422]。この他、昭和 30 年代には、昭和 31（1956）年に六甲有料道路の表六甲、昭和 37（1962）年に裏六甲、昭和 36（1961）年には芦屋と有馬を結ぶ有料道路である芦有道路が開通し、複数のバスルートも開通している。そして、昭和 39（1964）年、第１回東京オリンピックに合わせ、東海道新幹線の東京-新大阪間が開通し、名神高速道路も今津-小牧間で開通する。

旅館の大型化・コンクリート化と交通基盤の整備は、有馬に、多くの団体旅行客を呼び込むことになる。勢いはオリンピック後も止まらず、昭和 45（1970）年の大阪万博に向けてさらに加速、旅館の増改築が相次いだ。昭和 40（1965）年と 45（1970）年を比較すると、500 人

422 有馬ヘルスセンターについては鶴田多嘉子「観光温泉地帯についての一分析　有馬温泉の近代化」日本観光学会研究報告昭和 49 年 8 巻 P19-P24

以上の団体客受け入れが可能な施設が１カ所から３カ所に、200 人以上が４カ所から７カ所に、100 人以上が５カ所から 13 カ所に増えており、急激な増改築、団体客への対応が進展していることがわかる[423]。有馬は、共同浴場を中心に木造旅館が建ち並び、人々がそぞろ歩きをする街から、大型のコンクリート造の旅館・ホテルに団体客が吸い込まれ、飲食も、宴会も、もちろん入浴も、全て宿泊施設の中に取り込まれてしまうところへと変貌していったのである。旅館の経営という点だけでいえば、団体旅行客ばかりになっていたこの頃がもっとも華やかであったという[424]。なお、昭和 45（1970）年には六甲有馬ロープウェイも開通している。こうした開発の結果、昭和 52（1977）年には有馬の観光入込数は 146 万人に、昭和 56（1981）年には 165 万人に達している。

団体旅行客を相手とした大型旅館ばかりの有馬の状況に対して若手の経営者を中心に危機感が高まってきたのが 1980 年代半ばである。昭和 62（1987）年には、神戸市からの働きかけもあり、地元の若手経営者を中心に有馬町マスタープランが作られ、そぞろ歩きのできる温泉街の復活が掲げられた。しかし、バブル景気もあり、有馬の観光入込数は、昭和 61（1986）年に 177 万人、平成元（1989）年に 180 万人と着実に増えつつあり、平成３（1991）年にはこれまでのピークの 192 万人[425]に到達、目の前の客入りの多さから、抜本的な改革は後回しにされがちであった。そのため、新たな街作りが実質的に動き出すことになったのは、平成７（1995）年に阪神淡路大震災が起こってからとなった[426]。

死者６千人以上を出した阪神淡路大震災は、有馬温泉にも大きな被害をもたらし、死者こそ出なかったものの、建物の全壊・半壊が多数発生した。温泉地自体、また温泉地に訪れる人の多くが住まう阪神地区における大規模な被害は、有馬温泉に大きな危機をもたらすことになる。阪神淡路大震災前後の有馬への観光入込数の経緯をみると、前年の平成６（1996）年に年間 170 万人（日帰り観光客を含む）となっていたのが、翌平成７年、阪神淡路大震災の年には 102 万人と急激な落ち込みを見せる。なお、この年間宿泊者数 102 万人には復興作業員が含まれており、観光客の数としては、20 万人程度であったのではないかと推測されている（震災翌日の１月 17 日から観光客の受け入れが停止され、戻り始めたのは 11 月後半頃であり、通常の受け入れができたのは２ヶ月あったかないかであった）。有馬温泉への入込が再び震災前の 170 万人に戻るには平成 15（2003）年を待たなければならなかった[427]。

だが、こうした危機は、有馬温泉の再生の契機ともなった。マスタープランでうたったそぞろ歩きのできる温泉街への取り組みが本格化したのだ。爾来（じらい）、有馬では、団体客から個人客向

---

423 宿泊施設数については鶴田多嘉子「観光温泉地帯についての一分析　有馬温泉の近代化」日本観光学会研究報告昭和 49 年 8 巻 P19-P24

424 万博にかけての当時の状況については有馬温泉現地調査ヒアリングによる。

425 平成３年までの観光入込数については、五十周年記念誌編集委員会「有馬温泉観光協会五十年の軌跡」平成 11 年 P69-P75

426 この段落以降は、別途脚註があるところを除き、有馬温泉現地調査ヒアリングによる。

427 神戸市ホームページ「観光に関する統計・調査」とヒアリングによる。
https://www.city.kobe.lg.jp/a64051/shise/toke/sightseeing.html（令和６年 11 月 15 日確認）

けへの部屋数の減少を伴う旅館の改修、休業・廃業した木造の旅館・商店の再生による歴史情緒がある通りづくり、有馬玩具博物館などの文化拠点の整備、泊食分離型の新しい業態の開発、外国人向けの高級施設の展開、有機米や有馬山椒など地元産品の開発などが次々と進み、街の様相ががらりと変わってきた。神戸市も、平成 13（2001）年に、新たな共同浴場「銀の湯」（炭酸温泉とラジウム泉を混合した無色の温泉）を開設するとともに、翌 14 年には、それまでの市立有馬温泉会館を建て替えて新たに「金の湯」として開業させ、建物周辺には足湯も整備した。なお、有馬温泉だけの女将の会はなく、各旅館の女将は、平成 11（1999）年にできた兵庫県旅館ホテル生活衛生同業組合女将の会に所属している。

有馬は、令和２（2020）年、新型コロナウイルス感染症により、再び大きな打撃を受ける。しかし、令和６年現在、多くの個人客、外国人客が既に戻ってきている。そぞろ歩きのできる温泉街への歩みは未だ力強く続いているのである。

有馬温泉の源泉

有馬温泉は、火山性のガスが地下水と反応してできた温泉ではなく、フィリピン海プレートがユーラシア・プレートに沈み込んでいる南海トラフを起源としたものと考えられている。フィリピン海プレートの有馬を含む近畿方面への沈み込みは、九州方面が５千万年以上前となっているのに対し、2500 万年前と比較的最近のもののため、高温である。また、深度も、九州地方が 100～150km あるのに対し、60km 程度と浅い。そのため、プレート内に入り込んだ海水が、マグマにならず、そのまま絞り出されており、それが高温で塩分濃度の高い源泉となっている。これが、現在、「金泉」と呼ばれている、近世以前より利用されてきた空気に触れると茶褐色に変色する温泉である。このような過程でできた温泉は、世界でも有馬でしか見つかっておらず、「有馬型」と呼ばれている[428]。この他、第二次世界大戦後に掘削された雌雄泉源があるが、こちらは含鉄ではなく、空気に触れても無色のままである。


金泉


銀泉

428 有馬現地調査ヒアリング及び YouTube「プレートと地形が生み出す兵庫の恵み①有馬温泉の謎～火山がないのに何故温泉が出るのか？（神戸大学高等研究所アライアンス長巽好幸）」https://www.youtube.com/watch?v=M7lGj9k-Teg（令和６年 11 月 15 日確認）を参照。

有馬の源泉には、上記の「金泉」「銀泉」の他に、先に述べたように、炭酸泉やラジウム泉など他の泉質のものもある。平成 19（2007）年から平成 21（2009）年までに行われた調査では、有馬の源泉として 39 本が挙げられており、市有もしくは株式会社有馬温泉企業の源泉の他に、かなりの本数の自家源泉があることがわかる。ここでは、そのうち、市有もしくは有馬温泉企業の源泉について概要をまとめる[429]。自家源泉は今でも新規掘削が可能だが、新たな掘削を行うためには、半径 500m の源泉所有者全員に了解を取らなければならない取り決めとなっている。また、有明１号が掘削される前は、浅いところから湧出する湯のみを使っていたと思われる[430]。

①銀泉

概要：昭和 22（1947）年掘削（深度 67.4m）、掘削・自噴、市有

泉質：ナトリウム・塩化物-炭素水素塩泉、低張性、中性、高温泉（43 度～）

②御所泉源

概要：昭和 26（1951）年掘削（深度 182m）、掘削・動力揚湯、市有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物温泉（高張性、中性、高温泉）　pH 値　6.9

泉温：63.9 度（調査時における気温 12 度）　湧出量：8.0 リットル／分

③天神泉源

概要：昭和 23（1948）年掘削（深度 206m）、掘削・自噴、市有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物強塩酸泉（高張性、中性、高温泉）　pH 値　6.6

泉温：99.4 度（調査時における気温 27 度）　湧出量：53 リットル／分

④極楽泉源

概要：昭和 28（1953）年掘削（深度 223m）、掘削・自噴、市有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物温泉（高張性、中性、高温泉）　pH 値　6.6

泉温：98.5 度（調査時における気温 23 度）　湧出量：63 リットル／分

⑤妬泉（うわなり）源

概要：昭和 30（1955）年掘削（深度 185m）、掘削・自噴、市有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物強塩酸泉（高張性、中性、高温泉）　pH 値　6.7

泉温：100.5 度（調査時における気温 23 度）　湧出量：120 リットル／分

⑥有明１号

概要：昭和 16（1941）年掘削（深度 250m）、掘削・動力、有馬温泉企業所有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物強塩泉、高張性、中性、高温泉（90～98 度）

⑦有明２号

---

429 益子 保，大塚晃弘，高橋孝行「有馬温泉における泉源保護のためのモニタリング結果と温泉・鉱泉の特徴」温泉科学 62 号　平成 24 年　P144-P167 及び鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年、及び神戸市の保有する令和版「温泉分析書」を参照。銀泉、有明１、２号泉は「見て聞いて歩く有馬」記載の昭和 58 年調査によるもの。

430 有馬温泉現地調査ヒアリングによる。

概要：昭和 30（1955）年掘削（深度 270m）、掘削・自噴、有馬温泉企業所有

泉質：含鉄・ナトリウム-塩化物強塩泉、高張性、中性、高温泉（90～98 度）

⑧ラジウム泉源

概要：掘削・自噴、市及び神戸電鉄所有

泉質：単純放射能泉（低張性、中性、低温泉）　pH 値　7.0

泉温：26.4 度（調査時における気温 20 度）　湧出量：9.2 リットル／分

※ラドン（Rn）　1060Bq/kg

⑨炭酸泉源

概要：掘削・動力揚湯、市有

泉質：含二酸化炭素・鉄-単純冷鉱泉（低張性、弱酸性、冷鉱泉）

泉温：18.3 度（調査時における気温 21 度）　湧出量：12 リットル／分



御所泉源



天神泉源



極楽泉源



妬泉源



有明１号２号



炭酸泉源

有馬温泉の湯の管理の技術[431]

ここでは、歴史的に有馬温泉を支えてきた株式会社有馬温泉企業が管理している源泉（金泉）について、その管理の技術を整理する。先に述べたように、金泉については、中性ではあ

431　この項は有馬温泉現地調査ヒアリングによる。

るが、大量の塩化物が溶け込んでおり、それが空気に触れたり、流れが激しかったりすると析出し、バルブなどを固めてしまう。このスケールをどのように取り扱うか、また炭酸ガスの圧力により噴出する源泉を作業の際にどのように止めるかが、有馬では湯の管理において特徴的な点となっている。

＜株式会社有馬温泉企業による源泉（天神泉源）の管理＞

上述したように、各泉源では、200m 内外の掘削を行っているが、掘削した坑内に高圧で超臨界状態になっている温泉水が上がってきている。ここに鋼材のパイプ（縦管）が差し込まれ（構造としては上からぶら下げられている）、その内部に 100 度近い高温の温泉が吹き上がっている。縦管は、径 40mm 長さ４m のもので、それが 16 本くらい縦に連ねられて、坑の底に伸ばされている。なお、一番下のパイプは、長さが 1.2m のラッパのように下部がやや広がっており、径が 50mm くらいになっている。

上部に突き出た縦管の横から突き出すように横管が付けられており、そこを通じて一旦温泉を横の分湯槽に引き湯する。深海水が溶け込んでいる有馬の温泉水には、不純物がたくさん含まれているため、圧力が下がり、空気に触れるとそれが大量に析出してくる。分湯槽で析出した不純物を沈殿させてから、今度は分湯用の枡に入る。そこに各旅館に引き湯する塩化ビニールのパイプが繋がっている。分湯用の貯湯槽から先の配管の管理は各旅館の責任になる。



天神泉源の縦管と横管



横管につながる分湯槽と各旅館への配管



交換用の配管



配管についたスケール



バケツによる湧出量の測定

源泉から直接温泉が上がってきている縦管は、上述したように、溶解している不純物が極めて多いことから、スケールが極めて貯まりやすい。そのため、少なくとも週に１回は縦管を代える作業をしなければならない。取り換えのタイミングは、湧出量、湯の温度、導電率、塩分計による塩分の測定、湯の色の観察などで行っている。湧出量については、計器を付けてもすぐに壊れてしまうため、オーバー用のパイプから５リットル湯が出るまで何秒かかるかを計測し、そこから逆算するというアナログな方式で行っている。

縦管の取り替えの際には、まず、横管を外し、外した穴から噴出してくる高温の温泉を軍手の上にゴム手袋を重ねがけした手とタオルなどで止めながらバルブのついた管を挿入し、バルブを締めることで源泉を止める。この間 20 秒程度かかるが、源泉が 100 度近くなっており、極めて熱く危ない。タオルで穴を押さえるという原始的な方式を取っているのは、バルブを常時つけておくとスケールが付き、すぐに役に立たなくなるからである。横管のバルブを締めたのち、上部からホースを入れて、水道水を注水する。水の量は、気候や源泉の状態を踏まえた経験則や入れている際の音などから判断し、適切な量を投入する。通常は概ね２トン程度となる。炭酸ガスを専用コックで排出し、水の投入により、10 秒程度で源泉の温度が下がり、炭酸ガスが薄まり圧力が減少して、噴出が止まる。高温の温泉が急に噴出し、火傷を受けることもある。経験を積めば五感で察知できるようになるというが、最初のうちはこの洗礼を避けることは難しい。


横管へのバルブ挿入


縦管への注水

そこから泉源の上についている鉄塔に付けられた電動ウインチを用いて縦管を引き上げる。縦管は 16 本繋げてあり、連なって出てくる。次に打音検査などで、詰まっている管がどれか判断し、交換する。詰まっている縦管を全て交換したら、再び 16 本繋ぎ、電動ウインチで坑に差し込む。縦管を交換した後には、温泉の自噴を再開させる必要がある。縦管の根本にある別のガス抜き用の小さな穴の蓋を開け、そこから 50m 程の長さのホースを通し、コンプレッサーで空気を送り込む。コンプレッサーを止めると空気の圧力で湯が引き上がってくることになるが、この際もどの程度空気を入れるかは、湯の吹き出し具合、音を聞きながら判断する。空気を入れると湯が復活し、最初はぬるいがしばらくすると熱湯に戻る。空気を入れ始めてから熱湯に戻るまで 30～50 分程度だが、水の量や気候によって必要時間は変わる。場

合によって、なかなか戻らないことがあり苦労する。配管の取り替えから自噴の再開までの全体時間は２～３時間程度である。

この他の作業としては、泉源同士をつなぐ送湯管のスケール取りがある。これについては、木の棒に針金を巻いた自作のパイプ掃除用具等でスケールをこすり落とす。送湯管の清掃は３日に１回は必要であり、それ以上間隔が開くと送湯管の内径が細くなって送湯管が閉塞してしまう。



送湯管の清掃道具

鋼管は、縦管・横管ともに、使い捨てである。多数の鋼管を利用するため、泉源には、未利用の鋼管が数十本、利用済の鋼管が数十本貯められている。廃管が多くでるので何かにリサイクルできないか検討したこともあるが、今のところ有力なリサイクル先は見つかっていない。分湯用の貯湯槽に繋ぐパイプから取ったスケールと合わせ、産業廃棄物として処理している。

源泉部分でこれだけ不純物が多く、スケールが貯まりやすいことからわかるように、高温の金泉ではそもそもポンプの使用は不可能である。そのため、高温の金泉は自噴もしくは動力によるエアーリフトが導入されている。

＜各旅館への引き湯＞

上記の泉源からの分湯用の貯湯槽には、各旅館に、径が同じ引き湯用のパイプの口が、同量の湯が引けるように、同じ高度を保って開いており、そこから自然流下で各宿に流されている。ただし、実際には、宿までの引き湯の距離によって湯が流れる際の抵抗が異なるため、近い宿には多くの、遠い宿にはやや少ない量の湯が流れることになる。各宿への引き湯の段階で、60 度～70 度まで湯温は下がっていく。引き湯のパイプは、以前は鋼管を使用していた錆がすぐ付き、清掃が大変だった。その後、耐熱用の赤い塩ビのパイプになり、現在はより耐熱性の高い黄色い塩ビのパイプを使っている。



分湯槽


各旅館への湯量に応じて内部で分岐している。


分湯槽から伸びる各旅館への配管

現在使っている塩ビのパイプ自体は、耐久性が高く、10 年以上持つが、熱による収縮膨脹が大きいため継ぎ目が外れてしまうことが多い。継ぎ目に脱着可能な部品を付けている場合もあるが、それでも外れてしまう。また、空気に触れる、流れが強いなどの場合、スケールが析出し、固まってしまうので、スケール取りのための掃除をする必要がある。スケールが多く付く場合は、引き湯の管のジョイント部分を外して掃除をする。この際、以前は竹を繋いだ掃除道具を使っていたが、現在は泉源で使っているパイプ掃除道具を使用している。また、塩ビ管の上からゴムのハンマーで叩いてスケールを流し取ることも行われている。

自然流下での引き湯ができない高台の旅館や施設については、金泉をタンクローリーで運ぶか、あるいは、別途自家源泉を掘削してそこの湯を利用している。金泉を運んでいるローリー車は錆が付きやすく、すぐに汚れてしまう。

＜各旅館での湯温管理　①伝統的な管理＞

伝統的な湯温の管理をしている旅館「上大坊（かみおおぼう）」では、天神泉源からの引き湯のパイプが、旅館のステンレスの湯口に壁を挟んで直結しており、そこから 60 度～70 度の湯が竹を半分に割った樋に流されている。樋は湯船の上にあり、樋に数カ所開けられた穴には短い杭を刺してある。杭を抜くと湯が湯船に流れ落ちる仕組みとなっている（樋の反対側は湯船の外に出ており、余った湯はそのまま廃湯される）。湯温を上げたい時には、抜く杭の数を増やせば、高温の湯が落ちる量が増え、湯温が上がる。逆に下げたい場合は抜く杭の数を減らす。

気温、雨や雪が降るなどの気候、どれだけの人数が湯船を利用するかなどで湯温は変わっていく。そのため、日に数回、杭の数を調整する。また、湯船の中で上と下とで温度が変わってしまうので、これも入湯客が入る前、入った後などの時間で、攪拌（かくはん）しておく必要がある。湯温の急激な変化に対応するため、加水用の上水道の口やボイラーで湧かした湯を入れる口も用意しているが、基本的に源泉掛け流しで運用しており、それぞれの蛇口の栓は撤去してしまっている。

竹の樋については、温泉から析出したスケールがすぐにこびりつくので、定期的に作り直して交換する必要がある。


竹の樋による湯温調整


杭を抜くことで浴槽内に落ちる湯量を調整

＜各旅館での湯温管理　②機械による管理＞

金泉の温度管理について、機械による自動管理を行い、人件費の削減を行っている宿（「御所坊」）もある。ここでは、泉源からの引き湯についてもサイホン式としている。サイホンにしているのは、パイプを満杯にして空気を入れないようにすることで、スケールの析出が抑えられるからである。

引き湯されてきた湯はまず旅館１階の貯湯槽に貯められ、そこからポンプで屋上の貯湯槽に送られ、屋上のタンクから各浴槽にポンプで流されていく。貯湯槽の壁は、二枚の FRP の間に保温材を挟む構造となっており、70 度の湯温を保っている。大浴場（半露天の「金剛湯」）の場合、男風呂に２つ、女風呂に２つ、計４つの湯口が湯船の下にある。湯船にはエアーが多数の穴から吹き出るパイプが仕込まれており、ここから出るエアーで浴槽内の湯を攪拌し、湯船の中での湯温の差をなくしている。あふれた湯はそのまま廃湯される。

湯温の調整については、湯船の中に設置された温度計で湯温を測定し、コンマ何度かの湯温の変化に応じて、自動的に追加の源泉を送り、湯温が下がらないように電子制御している。これにより、源泉掛け流しでありながら、人が経験に基づく勘で行うのではない管理を実現している。

湯温の管理に人手がかからなくなった一方で、機器のメンテナンスはかなりの頻度で実施する必要がある。まず各所のバルブについては、スケールが析出して固まってしまうので、それを防ぐために毎日触れて動かす必要がある。これを少しでも怠ると、塩が大量に析出してしまい、交換になる。また、ポンプも、少しでも止めるとスケールがついて動かなくなってしまうため、常に電源を入れたまま稼働させている。ポンプ自体も不調に備えて２台を交互に使用し、２週間に１回分解して整備している。

この自動での湯温の制御システム自体、宿側と有馬の地元の水道設備業者が二人三脚で、試行錯誤を繰り返しながら、ようやく開発したもので、初号機は３日で壊れてしまうなど、

多くの失敗を重ねて来た。こうした開発にも、メンテナンスにも、有馬の温泉の特性を熟知した事業者の存在が必須である。しかし、現在、地元の業者で有馬専門にやっている企業は１社のみで従業員数も６名と少ない。



塩の析出したメーター。バルブは頻繁に動かす必要がある。



不調に備えて二台のポンプを備えている。

＜衛生管理＞

上記の２つの宿とも、循環はさせておらず、湯も高温のため、レジオネラ菌が繁殖しやすい環境ではない。対策としては、湯を抜いての清掃が行われている。

また、有馬の湯（金泉）は、次亜塩素酸を入れても鉄分と反応して効力を失ってしまい、塩素濃度も測れないため、レジオネラ菌対策を薬品で行う際には、モノクロラミン消毒を行う必要がある（pH５以上の温泉では、モノクロラミンの消毒がレジオネラ菌対策に有効であり、塩素臭もしない[432]）。

＜廃湯＞

浴場で使用した温泉は下水で処理、泉源からあふれた分については、雨水管で川に放流している。中性であり、また放流量も少ないので、環境問題になったことはない。泉源からあふれた湯が湯けむりを上げている情景は有馬の温泉情緒の一つともなっている。

ただし、高温であるため、側溝で低温やけどをすることがあり、注意喚起をしている。

---

[432] モノクロラミンとは、アンモニアの水素原子をひとつだけ塩素原子に置き換えた窒素化合物で、現在、レジオネラ対策としてその高い効果が確かめられており、各地の地方衛生研究所で推奨されるレジオネラ菌対策としての記載が進んでいる。ただし、酸性度が pH4 以上の温泉では使えない。研究代表者 泉山 信司「厚生労働科学研究費補助金　健康安全・危機管理対策総合研究事業　公衆浴場の衛生管理の推進のための研究　令和４年度 総括・分担研究報告書」令和５年３月など参照。



排湯による湯けむり



側溝の注意喚起

伝統的入浴法、信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

伝統的な入浴法は特に打ち出されていない。また、飲泉については、炭酸泉源での飲泉が可能である。金泉についても、以前は金の湯の敷地内にある「太閤の飲泉場」で飲泉ができていたが、現在は中止されている[433]。



炭酸泉源の飲泉場



飲泉

有馬の温泉に関わる寺社仏閣としては、まず温泉寺（江戸時代から無住であったため明治期に廃寺となり、現在は奥の院であった黄檗宗清涼院が寺名を継ぎ、黄檗宗温泉禅寺となっている）がある。同寺については、「温泉山住僧薬納記」（伏見宮家九条家旧蔵諸持縁起集）に行基による病人の救済と薬師如来を安置した堂舎の由来が述べられている。本尊は現在も薬師如来である。また、薬師如来の眷属である十二神将のひとつとして室町時代の波夷羅（はいら）大将の木像（国指定重要文化財）が伝えられている[434]。

433 この項は有馬温泉現地調査ヒアリング、視察による。

434 温泉寺についての記述は、新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」平成 22 年を参照。

寺には、文永８（1271）年の銘がある「依閻魔法皇勧進奉納温山如法経」（法華経典）が伝来している。これには閻魔王が「温泉山は日本無双の勝地で閻魔王宮の東門にあたる。女体権現を鎮守とする。本尊の薬師如来が人々の山居を救う」ので「法華経十軸と金紙に書いた種子の両界（曼荼羅）一鋪を、温泉寺に如法堂を建てて安置せよ」と清涼院の住僧尊恵に命じたという縁起が残っており（清荒神清澄寺蔵「冥土蘇生記」）、薬師信仰に加え、法華経信仰もこの時期から盛んになっていたことがわかる。室町時代には、平安期に制作された優美な黒漆厨子（国指定重要文化財）も納入されており、今に伝来するが、これも法華経を納めたものと考えられている。なお、尊恵は、「平家物語」の中で、地獄に行き、閻魔王から平清盛が叡山中興の祖である滋慶大師良源の生まれ変わりであると聞かされたと語られている著名な僧（二条天皇皇子）である。元禄 14（1701）年成立の地誌「摂陽群談」では、現在温泉寺となっている清涼院の開山を尊恵に帰している[435]。

温泉寺の歴史を絵解きするために制作された京都国立博物館所蔵の掛幅には、行基が山中の病人を介護したところそれが薬師如来であったという開山説話、温泉神である山の女体権現が出現する説話、上述した閻魔王に関わる説話などが描かれている。これらの説話は、13 世紀前半の「古今著聞集」とも共通しており、中世初めから広く流布していたものと判断される。



温泉禅寺

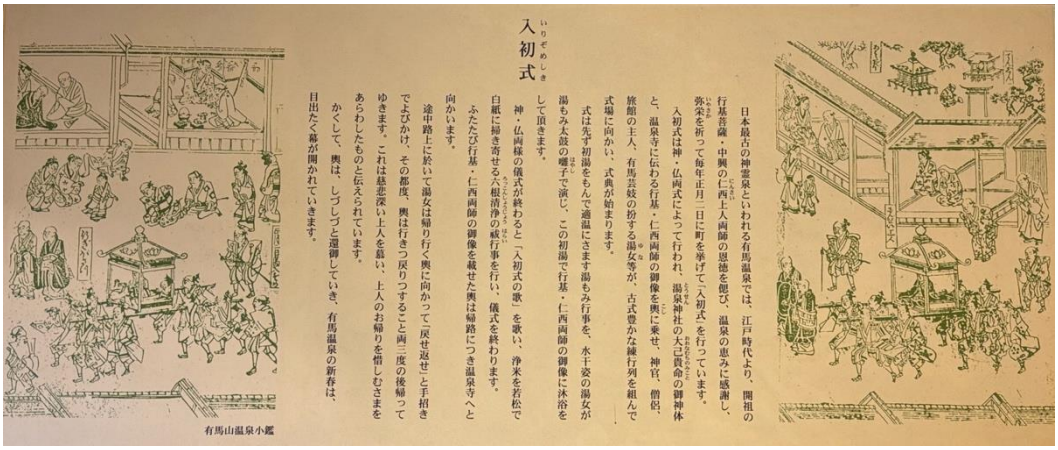


温泉寺縁起　※極楽寺　御祖師庵内展示資料

温泉寺が関わる江戸期から現在まで続く有馬の行事としては入初式がある。有馬温泉再興の伝承に関わる行基上人と仁西上人の木像を神輿に乗せて温泉寺から有馬小学校講堂にまで運び、湯を汲んで木像に注ぐもので、湯女姿の芸妓 12 人が入初めの歌を歌う。この 12 人は、当初、有馬の坊（主要な宿）が 12 家から始まったという伝承に因む。宝暦５（1755）年の「年寄下役年中覚書」にも入初式の記述があり、行基上人と仁西上人の木像を神輿に乗せて温泉寺から湯元まで運んでいたこと、その後、御所房で羅漢式を行い、酒食を提供していたこと

435　平家物語と清涼院の開山については、西尾正仁「御影史学研究会　民俗学叢書 13　薬師信仰−護国の仏から温泉の仏へ−」岩田書店　平成 12 年　を参照。

が確認できる。



入初式の様子　※極楽寺　御祖師庵内展示資料



入初式で行われる湯もみ行事の様子
※極楽寺　御祖師庵内展示資料

その他、温泉に関わりが深い寺院としては、光徳山善福寺がある。開基は行基、中興は仁西上人との伝承を持つ。先に述べたように中世末期には湯山町の代官を務めており、江戸時代には一の湯の灯明を善福寺から上げていたという。昭和 25（1950）年から行われている太閤秀吉を偲ぶ有馬大茶会の会場となっており、秀吉が造らせたという阿弥陀釜を蔵している[436]。

有馬の湯泉神社（温泉神社とも呼ばれる）は、現在愛宕山中腹に鎮座するが、この場所に遷座したのは明治 13（1883）年であり、それまでは温泉寺境内にあった。10 世紀の延喜式神名帳では大社とされ、月次祭・新嘗祭の官幣に預かっている。今日の祭神は薬湯の神としての少彦名命、大己貴命であるが、近世までは湯山三所権現とされていた（先に述べたように、有馬は、歴史的に湯山と呼ばれることが多かった。なお、三所権現は熊野に倣った呼称である）。12 世紀初頭の「伊呂波地類抄」では三神（三所）は大神、温泉、鹿舌三像大明神となっており、また同時期編纂の千載集の神祇歌では、大神は「三輪の神」とされる。なお、大三輪の神は有馬温泉の北方にある三田市の三輪の神、鹿舌は中世香下（寺）で知られる香下の神である。神社には 鎌倉時代末期の熊野曼荼羅図も伝存している[437]。

436　善福寺については、鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年を参照。

437　この段落は、新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」平成 22 年を参照。



湯泉神社参道



湯泉神社

先に歴史の項で述べたように、湯泉神社は、15 世紀には、女体権現が主神とされていた。「伊呂波地類抄」では、有馬の記述ではないが、諸社の項で温泉神は女体で出現するとの記載がある。また時代は下るが、鎌倉時代、度々有馬に逗留した藤原定家も、「明月記」に女体権現を祀ると記している。弘安２（1279）年の奥書がある「温泉山住僧薬納記」（伏見宮家九条家旧蔵諸持縁起集）では、温泉神である女体権現は、大和の三輪明神のわかれなりとし、「男神である三輪明神が女神である鹿舌明神に通ったところ、鹿舌明神が怒り、有馬に出た。その際、行基に会ったところ、温泉を鎮守し、病人を平癒すべく頼まれたので、そのまま有馬に遷座した」といういわれを伝えている。三輪大明神は毘盧遮那（びるしゃな）俗体、鹿舌明神は千手観音女体姿、女体権現は東方浄土薬師垂迹（すいじゃく）である。こうした史料からみる限り、少なくとも鎌倉時代前半には有馬の温泉神が女体権現であるという信仰は広まっていたものと思われる。三輪の神については、10 世紀の和名類従抄に三輪君の始祖を現在の兵庫県西端部にあった川辺郡の多太神社に祀るとあり、大和の三輪神社を祀っていた一族が摂津国にいたことがわかる。ただし、有馬に近い三田市の三輪神社の由来は不詳である[438]。

例祭は 10 月３日で、神幸祭御輿渡御が行われるとともに、有馬温泉街を獅子舞・子ども御輿・大人御輿が練り歩く。また入初式を温泉寺とともに実施している[439]。

芸能としては、華やかな温泉地の歴史を写し、既に江戸時代から「有馬節」という流行り唄が生み出されている。有馬節は、大阪、江戸でも流行し、近松の浄瑠璃や歌舞伎の戯作にも使われている[440]。その後も大正・昭和の新民謡、戦後の演歌と有馬を舞台とした流行り歌は多い。また、有馬節や小唄に繋がる芸妓文化については、「湯女を起源とする有馬芸妓文化」として、神戸歴史遺産に認定されている[441]。

---

438 この段落は、生沢栄太郎「有馬の鎮守社温泉神社について」甲子園短期大学紀要　第４号　昭和 59 年　P69-P80 を参照。

439 湯泉神社ホームページ「行事日程表」https://tousen.or.jp/schedule（令和６年 11 月 15 日確認）

440 鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年

441 神戸市ホームページ「神戸歴史遺産とは」https://kobe-rekishiisan.city.kobe.lg.jp/about/（令和６年 11 月 15 日確認）

近世の有馬の地誌や全国の名産物を扱う出版物などには有馬温泉の産物が多く記載されている。現在まで続く人形筆や竹細工に加え、温泉に付けて作る染楊枝も歯痛止めとして販売されていた。また、お椀やお盆などの挽物も中世に引き続き高名を馳せている。竹細工についても有名で、八代将軍吉宗公の頃までには全国に「有馬籠細工」として著名になっていた。また、江戸期までには鍛冶屋も増え、鉄器も土産物の仲間入りをしている。その他、白砂が、箱庭用の蒔砂やさび落としなどに使う磨砂として販売されている[442]。

有馬人形筆は、明治から大正にかけて大きく発展し、明治 22（1899）年には製筆工 321 人にも及んだという。しかし、その後衰退[443]、現在、有馬人形筆は、「有馬人形筆 灰吹屋 西田筆店」でのみ製造・販売されている[444]。兵庫県伝統工芸品である。また、有馬籠は、明治６（1873）年に開催されたウィーン万国博覧会で優秀賞を受賞するなど世界的な名声を獲得、明治時代には 70 名もの職人が働くまでになったが、第二次世界大戦後、安価なプラスチック製品などに押され、現在では 轡昭竹斎（くつわしょうちくさい）を代表とする工房のみの製造となっている[445]。こちらも兵庫県伝統工芸品に指定されている。



有馬籠



有馬人形筆

古くから有馬で知られている食品としては、有馬山椒と佃煮の松茸昆布がある。どちらも有馬に自生している山の幸を土産ものにしたもので、ともに江戸後期には既に販売されていたという記録が残る。永禄２（1559）年創業と伝えられる老舗、川上商店他で多く販売され、現在でも有馬を代表する土産物となっている[446]。

温泉に関わる商品としては、先に述べたサイダーの他に、炭酸煎餅がある。これは明治 40

442 この段落は、新修神戸市史編集委員会「新修神戸市史　歴史編Ⅱ　古代・中世」平成 22 年を参照。

443 鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年

444 有馬温泉 有馬人形筆 灰吹屋 西田筆店ホームページ　http://arimahude.com（令和６年 11 月 15 日確認）

445 有馬籠ホームページ「有馬籠の歴史」https://arimakago.jp/history.html（令和６年 11 月 15 日確認）

446 神戸新聞「湯の里有馬に息づく山椒文化　県内最古の佃煮店で脈々」令和元年９月 23 日、川上商店ホームページ「川上商店について」https://kawakami-shouten.co.jp/about.html（令和６年 11 月 15 日確認）

（1907）年頃三津森本舗の創業者三津繁松が開発した炭酸水を原料として練り込んだお菓子で、開発時には有馬の炭酸泉を用いており、これも現在有馬温泉の代表的な土産物となっている[447]。また、サイダーも、「ありまサイダー　てっぽう水」として復活し、平成 14（2002）年より、合資会社有馬八助商店から発売されている[448]。その他、昭和 20 年代までは、有馬の金泉に沈殿する湯の花（酸化鉄粉）を自然乾燥させたものを入浴剤として販売していたことが知られている[449]。



有馬山椒と松茸昆布の老舗、川上商店


炭酸煎餅

飛鳥時代より天皇の行幸の地であった有馬は、古代・中世・近世を通じて多くの貴顕が通った温泉地であり、近代には神戸居留地の外国人が多く訪れる日本最初のインバウンド観光地の一つともなった。中世には当時の特産品であった挽物が「湯山もの」として将軍家にも評価され、近世には、温泉番付で西の一位であっただけでなく、有馬節や湯女の浮世絵など、その華やかな文化でも広く全国に知られていた。

高度経済成長期に団体旅行型の施設開発が多く行われたものの、木造三階建ての和風建築や寺社建築、そぞろ歩きしやすい温泉街特有の道並み、そして何より周囲を取り囲む山々の自然の豊かさはそのまま残され、あるいは再生されている。また、古来からの薬師信仰が今に伝えられ、明治期には祭神の交代が行われたが、修験系の温泉信仰の跡も深く残り、温泉にまつわる江戸期以来の伝統行事も堅持されている。

先に述べたように、有馬は、阪神大震災以降、こうした分厚い歴史的な蓄積を活かした街づくりを推し進めており、伝統と現代ならではの快適さを兼ね備えた温泉街として、日本人はもとより、多くの外国人客を魅了している。有馬は、世界で唯一の「有馬型」の温泉とそれを管理するユニークな技術を土台に、都の近くならではの華やかさをまとった特有の温泉文化を継承し、発展させてきているのである。

---

447 元祖三津森本舗ホームページ「有馬温泉名物　炭酸せんべい」
http://tansan.co.jp/tansansenbei/#:~:text=炭酸煎餅は明治 40,なかなかうまくいかなかった%E3%80%82（令和６年 11 月 15 日確認）を参照。ただし現在炭酸泉を使っているかについては記載がない。

448 炭酸水・サイダーについては、神戸新聞「昔『毒水』今「観光資源」　有馬温泉に湧き出る炭酸水　『サイダー』発祥の地」令和元年 10 月８日を参照。ただし現在炭酸泉を使っているかについては記載がない。

449 鷹取嘉久「見て聞いて歩く有馬」平成８年

（１２）三朝温泉

三朝（みささ）は、古代よりの修験道の聖地で国宝三仏寺奥院（投入堂（なげいれどう））のある三徳山（みとくさん）への参詣の入り口に位置し、三徳山より流れる三徳川沿いに広がる温泉地である。三朝温泉は、こうした長い歴史と、大正時代から始まったラドン浴などの温泉の医療利用でよく知られている。この項では、こうした温泉地としての特性と、それを支える湯の管理の技術を概観する。

なお、三徳川の南部がもともとの三朝の温泉地で近世は湯村と呼ばれていた。一方、川の北側は、明治 22（1889）年、三朝村ができるまで、山田の湯という別の温泉地であった。

三朝温泉の歴史

＜中世・近世＞[450]

三朝温泉（旧湯村である三朝区）には白狼伝説と呼ばれる開湯伝説がある。それによれば、長寛２（1164）年、樟樹の根を白狼が枕にしており、追い払ったところ、狼が枕にしていたところから温泉が出たという。そのため、三朝の源泉は、株湯と呼ばれている。この伝承については、源義朝の家来である大久保左馬之祐が、三徳山に参拝の途中、年老いた白い狼を見かけ、そのまま逃がしたところ、その夜、夢枕に妙見大菩薩が現れて、出湯の場所を授けたという三徳山の信仰に絡めた伝承も伝えられている[451]。また、明治 13（1880）年の「三朝鉱泉取調書」には、正保元（1644）年、そもそもの源泉に加え、村の中央部からも温泉が湧出したとの古老の言い伝えが残されている。

同時代史料での初見と考えられているものは寛文４（1664）年の鳥取藩史料であるが、ここでは伯耆（ほうき）の湯として名前が載せられているのみである。また２年後の寛文６（1666）年の藩の史料では、三朝は、他の温泉地と比べ、湯治客が少なく運上金を納めていなかったが、漸（ようやく）く湯治客が増えてきたのでこれから運上金を出させると解釈できる文が記載されている。また元禄７（1694）年に三徳山参詣の途上に三朝温泉で歓待されたという米子の商人の記録も残る。

一方、三朝の川を隔てて反対側、明治以降三朝温泉の一部となった山田の湯についての古い伝承としては、天文８（1539）年、それまで岩の中から湧出して「石湯」と呼ばれていた温泉が三朝川の大洪水で埋まってしまったが、東側から新しい湯を掘り出したこと、それも享保 14（1729）年の水害で潰れると、もとの湧出場所から温泉が再び湧いたこと、寛延３（1750）年、また水害で温泉が埋もれたので、翌４年、今度は北側に新たに掘って再興させたことが残っている。

元文２（1737）年の藩の史料には三朝温泉についてより詳しい情報が載っている。そこでは、内湯があり、湯株が 18、湯の数が 23 あり、そのうち一つがお茶屋湯と呼ばれていること等が記されており、江戸中期には既に温泉地として栄えていたことがわかる。また、寛保２

---

450 この項は、基本的に、三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成２１年及び三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年を参照した。

451 白狼伝説の妙見大菩薩の話は、日本遺産ホームページ「三徳山 三朝温泉『六根清浄と六感治癒の地』」https://misasaonsen.jp/japan-heritage/（令和６年 11 月 26 日確認）。

（1742）年に藩士松岡布政が書いた「伯耆民談記」には、湯壺の数が 18～19、「一の湯、二の湯、入込み」という湯が三つ並んでおり、うち一の湯は御茶屋としてご公儀が修造したものであること、湯の数が多いので、鍵なく自由に入浴できること、砂原村の株湯が元湯であることが語られている。木食五行上人が、寛政 10（1798）年、諸国巡礼の途中で訪れたとの記録も残る。

＜明治・大正・昭和戦前期＞[452]

維新後の明治７（1874）年、それまで湯村などと呼ばれていた三朝温泉は、集落名を三朝とすることになった。さらに、明治 22（1889）年町村制が施行されると、三朝集落は、三朝村に５つある区のうちの第四区となる。この体制は、第二次世界大戦後の昭和 28（1953）年に三朝村を含む５村が合併して現在の三朝町が誕生するまで続くことになる。

維新で体制は変わったものの、明治初期の三朝は、江戸期と同様、交通の便が悪いままであった。浴客数も少なく、明治３（1870）年 42 人、明治 11（1878）年 1,857 人、翌 12（1879）年 2,336 人という数値が残っている。明治７（1874）年以前、三朝とはまだ分かれていた山田の湯では、明治３（1870）年 42 人、翌４年 38 人、翌々５年 40 人である。湯治場といっても近隣からの客を中心とした半農半商の状況が、江戸期と変わらず、続いていたのである。鳥取県全体で道路網整備が進み、三朝にも新たな橋が架かり、それに合わせて温泉街の道路も整備されたのは明治 18（1885）年から翌年にかけてのことであった。

明治 40（1907）年の「東伯郡誌」では、年間平均 35,000 人の湯治客があった記録されており、かなり増えていることがわかる。ただし、この数には三徳山行きの参詣者の入湯も少なからず含まれていたと思われる。この年は山陰線が鳥取から境港まで開通した年であり、さらに５年後の明治 45（1912）年には京都まで全線開通に至っている。これにより、出雲大社参拝を兼ねて遠方から観光客が三朝に来ることも次第に増えていくことになった。

同じ頃の記録をみると、９軒の旅館、４軒の貸間兼旅館が、内湯を持つ宿屋として名前が記載されており、本格的な旅館が増えてきたことがわかる。ただし半農半商の小規模旅館も未だ残っており、そのうち幾つかは昭和 40 年代まで続いていた。交通の発展をみると、山陰本線開通以後、三朝温泉へは山陰本線の上井駅から人力車で訪れることが増えてきている。これに伴い倉吉から三朝温泉に通う人も増え、合わせて芸者も三朝に来るようになった。大正６（1917）年には馬車も走り、翌７（1918）年には乗合自動車の運行も始まった。

三朝温泉がさらに大きく拡大していくもう一つの契機となったのが、大正３（1914）年の石津利作薬学博士の調査である。この調査結果をもとに、大正５（1916）年内務省「全国鉱泉調査表」で、三朝温泉のラジウム含有量が、国内はもとより世界でも２位、特に高温泉では１位と発表された。これを受けて大正５（1916）年頃から温泉地としての開発の動きが大きくなり、大正７（1918）年には大阪三越の「全国温泉土産展」に「三朝ラジウムサイダー」を出展・

452 この項についても、基本的に、三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成２１年及び三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年を参照した。異なる典拠による部分は別途脚註を付けた。

販売、大正 10（1921）年には村営ラジウム温泉療養所もできている（昭和５（1930）年に日赤病院長の松永秀一郎に経営譲渡、その後昭和 25（1950）年に岡山大学に譲渡。令和２（2020）年より後述の町営「すーは一温泉」）。

昭和７（1932）年出版の全国の温泉案内の書籍をみると、大正５（1916）年の内務省発表によりにわかにその名が高まったこと、各温泉宿（計 12 軒）には全て内湯があるが、それよりも村営の療養所の方に療養設備が整っていることが記されている。村営ラジウム温泉療養所の具体的な設備の内容も説明されており、男女それぞれの共同浴室では、浴槽からラジウム・ガスが蒸発しているだけでなく、壁上部に取り付けたじょうろ管から一定の温泉水を拡散させ、天井のプロペラで攪拌しているため、ラジウム・ガスが吸引できるようになっていること、貸し切り風呂も４室あり、密閉されているためさらに吸引効果が高いこと、服を着たままラジウム・ガスが吸引できる乾式の部屋もあることなどが記載されている[453]。

三朝温泉の賑わいを伝える記事も残る。明治から戦前期にかけては、土用丑の日に入浴すれば普段の数倍の効用があるという丑湯の風習があり、近隣から人が押し寄せるとともに、都会からも土用丑の日を中心に１～２週間の湯治を行うことが多くあったという。また、明治半ばまでは丑の日に賭博も広く行われていた。昭和になると、入湯客をより広く集めるため、村単位の青年団対抗相撲大会が丑の日に行われるようになり、第二次世界大戦中まで続いていた。

賑やかになりつつあった三朝温泉には多くの文人も訪れている。大正終わりには、与謝野鉄幹・晶子夫妻が三朝を訪れて歌を詠み、田山花袋（かたい）も歌を残している。また、昭和初期には島崎藤村や斎藤茂吉が訪れている。

三朝温泉の旅館の立地動向をみると、昭和５（1930）年には 16 軒の名称が見え、昭和８（1933）年には他の地方から大型旅館も進出と、順調に拡大していることがわかる。また、大正 12（1923）年田山花袋、昭和３（1928）年島崎藤村、昭和 10（1935）年と 11 年には皇族も来訪と昭和初期まで順調な拡大を続けた。同年には、日ノ丸自動車会社によるバス運行も始まっている。

昭和 14（1939）年に当時の岡山医科大学が三朝温泉療養所（戦後、岡山大学病院三朝医療センターとなったが、平成 28（2016）年閉院し、三朝温泉病院の寄附講座に）を、厚生省が傷痍軍人温泉療養所（国立三朝温泉病院を経て現在は公益社団法人）を設立しており、温泉医学の拠点としても発展を続けていた。しかし、第二次世界大戦の戦火が激しくなると、国内旅行が制限されて浴客数が激減、温泉療養所での傷病兵が増え、昭和 19（1944）年には学童疎開の受け入れを始めるなど、温泉地としては実質的に休業状態となった。

453 この段落は、松川二郎編著「療養本位　温泉案内」白揚社　昭和７年６月を参照。

＜第二次世界大戦後＞[454]

終戦後も、三朝温泉は、朝鮮戦争が勃発する昭和 25（1950）年まで、苦しい時期が続いた。その後、日本経済の高度経済成長が始まり、三朝も再度成長の軌道に乗っていく。朝鮮戦争開戦直後、急成長以前の昭和 26（1951）年当時の旅館数は 23 軒である。

昭和 28（1953）年、旧５村が合併し、現在の三朝町が誕生した。当初から観光拡大は町政の大きな目的であり、昭和 29（1954）年に三朝東郷湖県立自然公園ができ、昭和 30（1955）年には厚生省の保養温泉地に指定されている（昭和 44（1969）年に指定解除）。昭和 32（1957）年には、昭和初期に全国の小唄ブームの中で作られた「三朝小唄」につぐ新しい歌として「三朝音頭」も作られた。この結果、三朝町の観光客数は昭和 29（1954）年の 143,057 人から順調に拡大、昭和 33（1958）年には年間 350,893 人と 35 万人を突破している。

昭和 30 年代には、前半に定期バスルートが拡大、後半には観光バスの乗り入れも始まっており、昭和 34（1959）年に温泉の共同浴場を有する三朝温泉会館（三朝観光会館）、昭和 37（1962）年に町営ユースホステル（昭和 61（1986）年閉業）、昭和 38（1963）年にゴルフ場「三朝カントリー倶楽部」と立て続けに観光拠点施設も建てられた。旅館の数も、昭和 37（1962）年 37 軒、翌 38 年 44 軒と急激に増加している。また、こうした需要に対応するため、町と県で初めて公有の源泉の掘削を開始、昭和 39（1964）年から第１、第２、第３の三本の源泉からの配湯を始めている。一方、個人での掘削は禁止され、それまで 100 本近い自家源泉を開発し、内湯の旅館を作ることで発展してきた三朝に、初めて、公有の源泉とそこからの集中管理というシステムが加わることになった。

昭和 30 年代後半も観光客数は大きく伸びており、昭和 36（1961）年には 410,918 人と 40 万人を、昭和 39（1964）年には 536,498 人と 50 万人の大台を突破している。

続く昭和 40 年代には県営三朝高原有料道路が昭和 41（1966）年に開業、町道三朝高原線の延長とともに、町への自動車交通の便の向上が図られた。有料道路終点には、大型バス用駐車場、展望台が作られ、昭和 43（1968）年にはヘルスセンター型の娯楽施設「ラジューム・ガーデン」が開業した（平成 10（1998）年閉業）。ゴルフ場への連絡もよくなり、温泉地だけでなく、それを囲む高原地帯全体のレジャー拠点化が一気に進んだのである。これにより、三朝町の観光客数は大幅に増加、昭和 46（1971）年には 1,016,600 人と 100 万人越えを果たし、昭和 48（1973）年のピーク時には 114 万 6,500 人に達している。また、旅館数も 41 軒に拡大し、加えて国民宿舎が２軒整備された。

しかし、この年に起こった石油ショックを皮切りに高度経済成長が終焉し、国内観光旅行も、それまでの団体型から個人・家族型へと大きく性格を変えていくと、三朝温泉の観光客数は、昭和 60 年代にバブル景気が始まるまで、年間 100 万人内外で停滞することになった。

---

454 この項についても、基本的に、三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成２１年及び三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年を参照した。観光客数については　鳥取県ホームページ「観光入込動態調査」https://www.pref.tottori.lg.jp/70595.htm（令和６年 11 月 26 日確認）に依った。また、異なる典拠による部分は別途脚註を付けた。

昭和 50 年代、観光客数が伸び悩む中、三朝町では、昭和 53（1978）年に温泉会館を建て替えてラジウム温泉プールを新たに追加、観光振興のための郷土芸能として白狼太鼓を開発した。また、日本健康開発財団と温泉保養地システムの整備を進め、その一環として遊歩道の整備やガイドブックの刷新、湯治やトレーニング、医師の診断を含む健康増進保養旅行のツアーも始めた。ただし、客足が再び増え始めるのは、バブル景気が始まった昭和 61（1986）年からである。この年は国鉄（現：JR 西日本）が山陰路観光キャンペーンを開始、三朝町でも合わせて多数のイベントを実施しており、結果、観光客数が 1,289,700 人と初めて 120 万人を突破した。観光客数は、この後、統計基準が変わる平成９（1997）年の 1,825,800 人まで再び拡大を継続する。

バブル崩壊後も続くこうした伸びを支えていたのが、三朝温泉における様々な振興活動である。三朝温泉では、この頃から、健康路線に加え、新たな温泉地観光振興の試みを始めている。この一つが昭和 63 (1988) 年に女将キャラバン隊として始まった女将の会の活動である。これは当初女将たちが中四国や近畿地区にいってプロモーションを行うというものであったが、次第に温泉地自体の魅力向上へと展開、平成６（1994）年に始まった商店街の各店舗がお店の一角に三朝にまつわるあれこれを展示し、楽しい街歩きをプロモートする「湯の街ギャラリー」活動へと繋がって行くことになった。また、平成８（1996）年には三朝を含む県中部の４温泉地共同で「温泉フェスティバル in とっとり」が「世界温泉フェスティバル」をメインイベントに実施されている。

ただし、こうした動きにも関わらず、三朝温泉の入湯者（平成 10 年からは、観光客数は発表されておらず、入湯者数のみ）は、平成 10（1998）年の 469,806 人から漸減を開始、新型コロナウイルス感染症が拡大する前年の平成 31（2019）年には、35 万人を切る 347,330 人にまで減少している（翌年からは新型コロナウイルス感染症により大きく減少）。

こうした中、三朝温泉では、平成 27（2015）に、日本遺産への認定を受けるなど、温泉地にまつわる歴史や文化を活かした振興活動を始めている。日本遺産「三徳山 三朝温泉『六根清浄と六感治癒の地』」のうち、三朝温泉における構成文化財は、旅館大橋、三朝橋、さいとりさし、木屋旅館、木造薬師如来坐像、株湯、三朝のジンショ、南莞寺、三徳山参詣道沿いの石造物となっている[455]。

455 日本遺産ホームページ「三徳山 三朝温泉『六根清浄と六感治癒の地』」https://misasaonsen.jp/japan-heritage/ （令和６年 11 月 26 日確認）

三朝温泉の源泉

三朝温泉水は、無色透明、pH は弱アルカリ性もしくは中性で、飲用するとわずかに塩味を感じるが、臭気はない。浴用に当たって皮膚への刺激は少なく、浴用後もべとつかない。また、上述したように、37.5 度以上の温泉水では、世界的にもラドンの含有率が高い。泉温については 30 度台から 70 度以上までかなりのばらつきがある[456]。なお、三朝で含有量が多い放射線元素ラジウムが崩壊してできる気体であるラドンには、呼吸で体内に入ると、新陳代謝を促進し、免疫力や治癒力を高める「ホルミシス効果」を与えるとされている[457]。

三朝温泉集中管理協議会の調べによれば、平成元（1989）年現在で源泉数 81、うち自噴泉が 42、湧出量は全体で約 2,000 リットル／分。所有者は、町、区、個人とまちまちとなっている[458]。この中で、一部ではあるが、今回調査した源泉の泉質を示す[459]。

①株湯１号泉

泉質　　：単純弱放射能泉（鉱泉分類：低張性、中性、温泉）
泉温　　：源泉　37.9 度（気温 2.0 度）
pH 値等　　：pH 7.6　ラドン（Rn）143Bq/kg　（38.7×1010Ci/kg 10.8 マッヘ単位）

②株湯混合泉（株湯１号、株湯２号　２本の混合泉）

泉質　　：単純弱放射能泉（鉱泉分類：低張性、中性、高温泉）
泉温　　：源泉　49.2 度（気温 2.0 度）
pH 値等　　：pH 7.3　ラドン（Rn）130Bq/kg　（35.2×1010Ci/kg 9.67 マッヘ単位）

③三原町有混合タンク（１号泉、４号泉、６号泉、新１号泉）

泉質　　：含弱放射能・ナトリウム・塩化物泉（鉱泉分類：低張性、弱アルカリ性、高温泉）
泉温　　：源泉　65.6 度（気温 15 度）
pH 値等　　：pH 7.6　ラドン（Rn）277Bq/kg　（74.8×1010Ci/kg 20.5 マッヘ単位）

④鳥取県中部医師会立三朝温泉病院（１、２、３、５、６号５本の混合泉）

泉質　　：ナトリウム-塩化物・炭酸水素塩泉（鉱泉分類：低張性、弱アルカリ性、高温泉）
泉温　　：源泉　44.6 度（気温 28.0 度）

456 三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年

457 三朝温泉病院ホームページ「三朝温泉病院のお湯」
http://www.hosp.misasa.tottori.jp/about/onsen/senshitsu.html（令和６年 11 月 26 日確認）

458 三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成２１年

459 泉質については現地調査。

pH 値等　　：pH 7.7　ラドン（Rn）94.6Bq/kg　（25.6×1010Ci/kg 7.03 マッヘ単位）

⑤温泉資源活用施設　３号源泉

泉質　　：含弱放射能・ナトリウム・塩化物・炭素水素塩泉（鉱泉分類：低張性、中性、高温泉）

泉温　　：源泉　57.8 度（気温 6.0 度）

pH 値等　　：pH 6.9　ラドン（Rn）974Bq/kg　（263×1010Ci/kg 72.4 マッヘ単位）

⑥桶屋の湯

泉質　　：含弱放射能・ナトリウム・塩化物泉（鉱泉分類：低張性、中性、高温泉）

泉温　　：源泉　57.4 度（気温 10 度）

pH 値等　　：pH 7.2　ラドン（Rn）342Bq/kg　（92.5×1010Ci/kg 25.4 マッヘ単位）

⑦木屋源泉

泉質　　：含弱放射能・ナトリウム・塩化物泉（鉱泉分類：低張性、弱アルカリ性、高温泉）

泉温　　：源泉　75.0 度（気温 15 度）

pH 値等　　：pH 7.3　ラドン（Rn）62.7×1010Ci/kg

三朝温泉の共同浴場（外湯）

三朝温泉の共同浴場（足湯、飲泉場含む）としては、下記がある[460]。

①株湯

三朝温泉の起源縁起にある湯で現在は集落が運営する公衆浴場となっており、足湯・飲泉場が併設されている。足湯・飲泉場は無料で使える。



株湯　公衆浴場



株湯に併設された「株」型の無料飲泉場

460 三朝温泉公式サイト「温泉施設のご案内」https://misasaonsen.jp/sightseeing/onsen/（令和６年 11 月 26 日確認）



株湯の足湯。前に株湯の起源伝承である白狼と大久保左馬之祐の出会いの銅像があり、三朝温泉のシンボルの一つとなっている。



足湯の内部

②河原風呂

三朝温泉のシンボルとなっている河原にある混浴露天風呂。足湯が併設されている。

③薬師の湯

温泉街の神様「お薬師さん」が祀られている広場にある足湯と飲泉場。

④かじかの湯

三朝橋の下流にあるかじか橋の中央に設置された足湯。ここから聞こえるかじか蛙の声は三朝の名物のひとつでもある。

⑤三朝神社　神の湯

神社の手水舎に温泉を使っており、飲泉ができる。



薬師の湯　飲泉場、足湯



神の湯（三朝神社の手水が飲泉場になっている）

⑥天然ラドン熱氣浴泉「すーは一温泉」

ラドンの熱気浴ができる町営施設である。詳細については後述する。

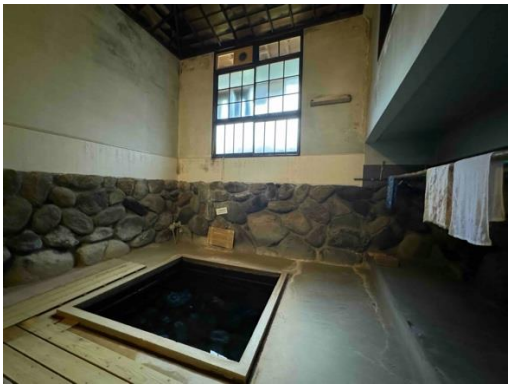
三朝温泉の旅館における湯の管理の技術[461]

＜大正期創業の旅館「桶屋」における湯の管理＞

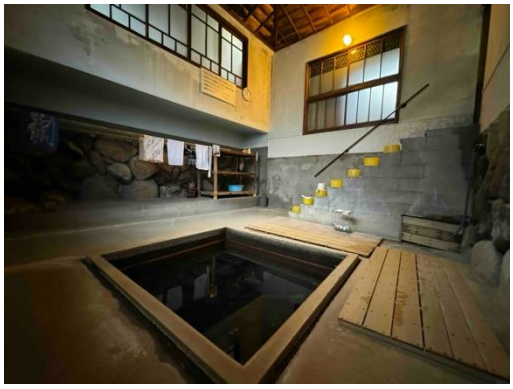
自家源泉の湯（「桶屋の湯」）と町からの配湯の湯（「新館の湯」）が二つある旅館で、大正２（1913）年の宿帳が残っていることから、そのあたりで旅館として開業したと思われる。現在のご主人は５代目になる。もともと桶づくりと農業をやっており、自家源泉については、明治４（1871）年に掘ったという記録が県に残っている。今の建物は昭和になってから建築したものである。

三朝温泉（歴史的にはこの旅館の立地は、三朝の湯村ではなく、山田の湯である）で療養的な色彩が強まったのは大正時代ラジウムの含有量が高いことが発見されてからで、それまでは農閑期にゆっくりする保養を主目的とした温泉地であった。そうした伝統を踏まえ、湯治客向けの宿を唱(うた)って運営しており、連泊する人が６割程度（2024 年は 58%）いる。また食事も、地元産の食材を使い、献立を可能な限り変えて連泊しても飽きないようにしている。ただし、自炊設備は用意されていない（昔から基本的に食事付きでやっており、自炊は伝統ではなかった）。以前は男女混浴の「桶屋の湯」だけであったが、それでは問題があるので、「新館の湯」を作って男女を分けられるようにした。現在は男女時間制にし、男女どちらも「桶屋の湯」を楽しめるようにしている。

自家源泉は、桶屋の湯の足下から湧出しており、60 度くらいある。地面も、浴場の床も暖かい。そのため、浴場には寝転がって暖かさを楽しめるスペースとして使えるところがある。寝転ぶための枕もあり、常連さん用のものは名前が入っている。飲泉も可能である。また、熱気があるため、タオルもすぐ乾燥する。



桶屋の湯。右手に乾燥させているタオルが見える。タオルの下のコンクリートの上に横たわって暖を取る（一種の岩盤浴）。コンクリートの下に源泉が流れている。



逆側から見たところ。掘り下げた位置にあるため階段で降りる構造となっている。
奥にタオルを乾かしている状況が見える。

461 この項は現地調査による。



飲泉用の湯。普段は蓋がされている。



飲泉用の湯の蓋を開けたところ。

足下からの湧泉ではあるが、浴槽の足下からだけ湧出しているわけではなく、実際は床下のあちこちから湧出している。栓もない完全な自然湧出なので、湯量による湯温の調整ができない。浴槽の段階で泉温は 44 度くらいあるが、冬に湯温が下がって 37〜38 度になる時もある。その際は、新館の湯に引いている町の共同源泉からの湯を追加して温めている。そのため、平成になってから、耐熱性のある茶色い塩ビ管で配管を追加した。浴槽に流れ込む湯の温度は約 60 度で一定しており季節による変動はないが、浴槽に溜まった湯の温度は冬に下がり、夏は上がる。また、大雨が降ると湯量が増えて熱くなる。ただし、昔に比べて湯量が減少しており、湯温が下がることが増えたのもそのためである。因果関係は不明であるが、20 年前の下水道工事と時期を同じくしており、工事の影響の可能性も考えられる。



浴槽の底。この石の間から源泉が湧出している。



共同源泉から引いている塩化ビニールのパイプ。



階段の下の蓋に昔からの排水口があり、水路から川に緩いこう配で流れる。



階段の下の蓋を開けたところ。

源泉の掃除をする時や保健所で湧出量を調べる時は、枡から真空ポンプで湯を汲み出して空にする。掃除は２～３日に一回、湯を抜いて行う。掃除の最中にも 60 度ほどの湯がすぐたまってきてしまう。昔は底にある石を浴槽から運び出して磨いていたが、現在は浴槽内で洗うにとどめている。

掃除後は 60 度の源泉が流入するため、湯温が上がる。湯が浴槽に再び溜まるまでは 10 時間ほどかかり、元の湯温に戻るには３日ほどかかる。夏は掃除後に湯温が下がりきらず、入浴できない日もある。一日２回温度を測ってはいるが、加水をしても熱い源泉が流入するためきりがなく、源泉かけながしを求める客も多いため、「桶屋の湯」では加水は行っていない。冬は逆に湯温を上げるために掃除をすることもある。また、湯殿の天井に換気用の湯抜き窓がある。外気を入れて冷ましたり、湿気を逃がすための伝統的な工夫だが、屋根に上って開けなければいけないので、現在は管理が難しく、湯抜き窓は閉め切っている。



「桶屋の湯」の天井の穴。これを開けることで外気を入れて湯を冷ますことができるが、屋根に上らなければならず、危険を伴う。

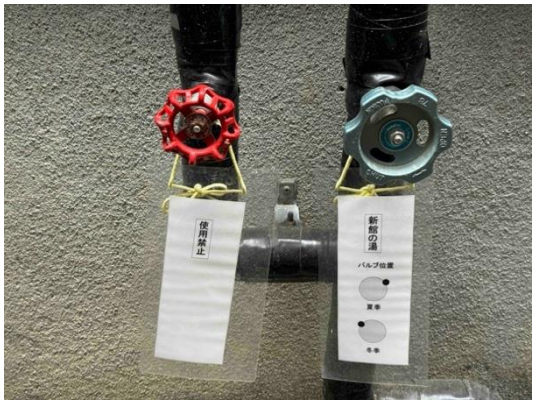


寝転ぶ時に使う木の枕。

「新館の湯」の湯は町有の共同源泉を引き湯して使用している。共同源泉の配管は道沿いに地中化されており、様々な旅館へと分岐している。各旅館ではメーターによって源泉の使用量を測り、料金を支払っている。温度調整は、バルブ操作によって共同源泉の湯量を調整している。この湯については茶色くなることがあるが、源泉が含鉄ということではない。共同源泉からの配管（鉄管）の定期清掃は行っていないが、バルブ内につまりが生じた際は湯を多めに流してつまりを流している。



「新館の湯」。共同源泉から引き湯をしている。



「新館の湯」の引き湯のバルブ。季節で開け方を変える。別の場所に「新館の湯」から「桶屋の湯」に湯を流すパイプのバルブもある。

＜江戸時代からの旅館「木屋」における湯の管理＞

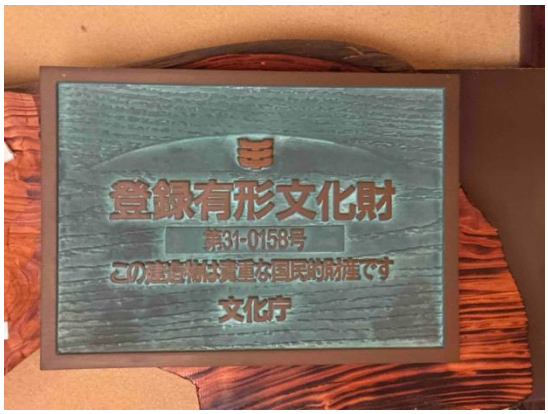
①木屋の概要

木屋は、江戸時代に三朝地区（湯村）の庄屋を務めていた家で、その時から宿屋を兼業していた。明治維新により庄屋ではなくなり、旅館専業となったことから、明治元（1868）年を創業の年としている。

木屋旅館の建築物は、江戸後半から明治時代に建てられた「明治の館」、大正時代に建てられた「大正の館」、昭和時代の「昭和の館」が、複雑に増改築しながら連続的に建てられて現在に至っており、迷路のような構造となっている。平成 22（2010）年に全館が国の登録有形文化財に指定されている。館内には、江戸時代に作られ大正時代に改築されてタイルが貼られた「楽泉の湯」（貸し切り／飲泉所あり）、大正時代に作られた「薬師の湯」（貸し切り）、昭和に作られた「川瀬の湯（男湯）」、「河鹿の湯（女湯）」の各浴室と、「温床（オンドル）」、「ミストサウナ　穴ぐらの湯」がある。源泉は、浴室用の自家源泉が３つ、殆ど流れてこない共同源泉が１つ、飲泉用の自家源泉が１つとなっている。「楽泉の湯」の湯に使われている大正時代のタイルは、神戸からわざわざ手に入れたもので、令和４（2023）年の日本のタイル百周年で製作者が紹介されているほど当時は貴重なものであった。



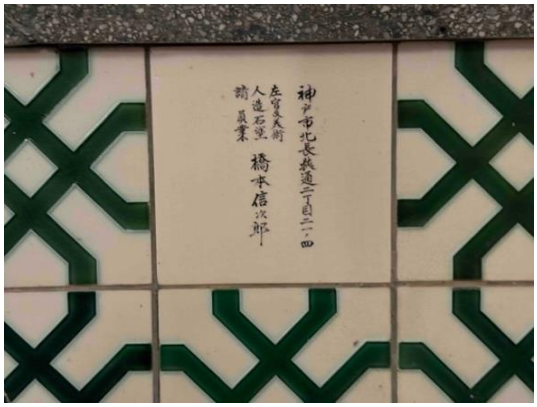
大正時代の木屋旅館の写真。木屋旅館は、近世末期から建て増しを続けて今の状態になっている。



木屋旅館は国の登録有形文化財となっている。



モダンなタイルを前にした賑わいの様子。



タイルには職人の名前が記されている。

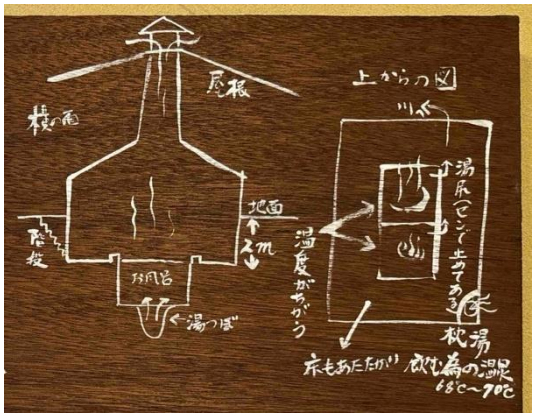
②「泉の湯」の構造と排水問題

三朝温泉街の真ん中を流れる三徳川の中途に中洲があり、その北側（旧山田地区側）は川が流れやすいようにされているが、中洲の南側（旧三朝地区側）は、堰を作って、段々にしてある。このそれぞれの段の水面の高さが、そこにおける源泉の高さとなっており、高さを合わせ、それ以上川床を浚渫（しゅんせつ）しないことで湯脈を保護している。

江戸期からあった「楽泉の湯」は、自然湧出の源泉を使っている。温泉は川面と同じ高さまで上がってくるため、浴室の床面を川面に揃えて掘り下げ、湯殿は川面より低く掘り下げて作っている。浴槽の周囲には檜を張り、底面に長い石がはめてあり、その下をさらに掘り下げた湯壺から源泉が自然湧出している。湯壺を横からみると飯釜のような構造であり、湯壺の底には石を積んでいる。源泉の温度は 80 度あり、浴槽に上がってきた湯が冷やされて 50 度になる。湯船は二つあり掘っている深さが違う。より深く掘るとより多く源泉が湧出し、熱くなる。また、川が増水しても、湯の上がる高さが高くなるので、源泉の湧出量が多くなり、熱くなる。そのため入浴にはどうしても加水が必要になる。湯船の端には湯尻と呼ぶ排水口があり、その閂（かんぬき）を外すと、排水量が増える（湧出量も増えるため、熱くなる）。



楽園の湯。二つに分かれており、枠は檜で作られている。



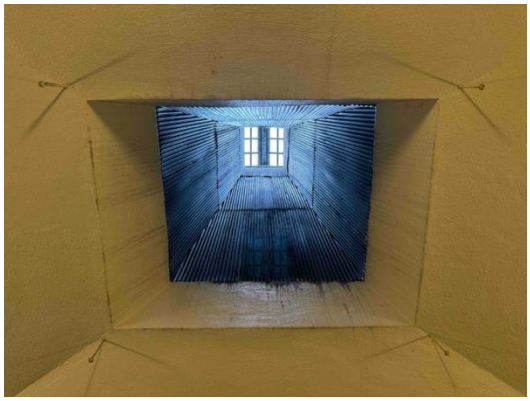
楽園の湯の構造。浴槽の下に自然湧出の湯釜がある。

浴室の隅に飲泉コーナーがあり、源泉から湧出する温泉をそのまま飲むことができる（湯船とは別源泉）。ヘリウムが含まれているため湧出時に泡が湧くさまが見られる。新型コロナウイルス感染症の蔓延以降、客の要望に応えて飲泉コップを紙コップに変更した。

また、以前は、浴室内に作り付けてある四つの棒に板を渡し、湿気を閉じ込めていた。高所作業が難しいため現在は行えておらず、昔より湿気が上に抜けてしまっている。



楽園の湯の飲泉用の湯。湧いている源泉からひしゃくで汲み出して飲む。



楽園の湯の天井。見えにくいが、四隅に板をかけるための棒がついている。

令和３（2021）年、山陰地方で線状降水帯による水害が発生した際、「楽泉の湯」からの排水ができなくなったため、修復工事を行った。それまで川の堤の内側にある側溝に湯船からの湯を排水していると考えていたが、実際に調査したところ、側溝に排水している土管は大正時代に作った洗面台からしか排水されておらず、湯船からの湯は、より古い時代の土管によって、調理場にあるピット（立坑）の底深くにある石積みに自然流下で排水されていたことが判明した（側溝ではなく、地下深くにそのまま流す構造になっていた）。古い土管の修復をするために地面を掘り下げると、歴史的建造物である本館自体が潰れる危険性があるため、洗面台を外してポンプを新たに設置し、湯船からの排水を、ポンプで 60cm 汲み上げ、洗面台の下から川岸の側溝に繋がる排水管に流すよう変更した。この時、土管の配水管を塩ビに取り替えた。

この工事の際課題となったのが、湯船の排水口回りからも源泉が自然湧出してしまうことであった。この湧出を止めて、排水だけを流す必要があるが、湧出を止めることが難しく、検討の末に県外の業者からトンネル止水用の特殊なボンドを取り寄せて使用することになった。また、汲み上げ用に設置したポンプが直ぐ壊れてしまうことも大きな課題であった。強い湿気と熱によって最長でも１～２ヶ月で壊れてしまい、安定稼働できるポンプを見出すまでの試行錯誤の過程で 10 台のポンプを潰すことになった。現在使っている工業用のグレードが高いポンプは１年間使用できている。



排水用に新しく設置したポンプ。後ろにあるのがもともとあった洗面台（今は排水用の口になっている）。

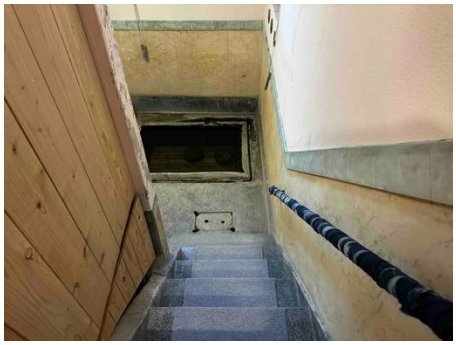


排水用に新たに設置した塩ビのパイプ。排水口の回りから湧出する源泉を止めることが大変だった。

こうした工事は、全て、歴史的建造物を傾かせず、地盤の崩壊を起こさないよう、銅製矢板（基礎工事や土木工事などで、土砂の崩壊や水の浸入を防ぐため、周囲に打ち込む板状の杭）を使用し、人力中心に行った。また、温泉熱によって作業環境が悪く、工事に際しては常に酸素測定が必要であった。

③薬師の湯など

大正時代に作られた「薬師の湯」は、当初は三朝区が持つ薬師堂の源泉からの引き湯であった。しかし、当時の木管は現在では使用されておらず、管理もされていないため、現在は薬師堂の源泉はほとんど流れてきていない。現状では浴槽の周囲から自然湧出している源泉が浴槽のひびから流入しており、また木屋の他の源泉から追加して湯を貯めている。このため、浴槽の修繕が難しくなっている。



薬師の湯も掘り下げてあり、階段の下にある。

浴槽の周りには多くのヒビがそのままになっている。



「楽泉の湯」以外の浴場の排水は、共同の排水口に流している。木屋の近くの今は飲食店になっている店も、以前は芸者の置屋で、温泉も湧いていた。そういうこともあり、６軒ほどの温泉の共同排水口が作られており、そこに流している。

④オンドル、ラドンミストサウナ「穴ぐらの湯」

木屋には、湯に浸かるタイプの入浴施設の他に、二つの温泉を使った施設、オンドルとミストサウナがある。オンドルは、昭和の時代に、川瀬の湯／河鹿の湯とともに作っている。地下1.5m を温泉が流れており、その熱がコンクリートを通じて上に伝わってくる。湯脈の位置が「楽泉の湯」より１ｍほど高いところにあり、地面に湯が湧き出してくるような場所にセメント粘土を詰め、コンクリートを流し込んで床を作っており、工事に工夫を要した。自然湧出の湯による熱なので室温調整の機構はなく、夏場は室温 42 度程度になる。着衣のままサウナのように利用し、時間の目安は 30 分程度となっている。作った当初よりオンドル（温床との漢字を充てている）と呼んでいるが、韓国のオンドルとは仕組みが異なっており、命名における関連性は不明である。

ラドンミストサウナ「穴ぐらの湯」は、以前、寝湯であったものを改造し、かけ流しの高温のラジウム源泉の上に簀の子をはって、温泉水中のラドンをミストとして拡散させ、「吸う

入浴」ができるようにした施設である。室温は加水の量で調整しており、年間平均室温 36.5 度、平均湿度 90%と低温多湿で、30 分程度利用すれば呼吸が楽になり、肌も潤う。



オンドルの全体像



ミストサウナ。簀の子の下に源泉が流れている。体を冷やすシャワーが写真右手奥に見える。

⑤ラジムリエ（入浴アドバイザーによる宿泊プラン）

現在、木屋旅館では、ラジムリエという宿泊プランを実施している。これは「本質美カルテ」というチェックシートに記入してもらい、その情報に基づいて、ソムリエならぬラジムリエが適切な入浴法（浸かる、飲む／飲泉、吸う／穴ぐらの湯、寝る／オンドル、顔／温泉水を活用した保湿術）をアドバイスするというもので、一般の宿泊より高いプランとなっている。

滞在型のテーマを明確にして、ナチュラルに健康づくりをしながら美しくもなろうというコンセプトで実施しており、明確なエビデンスがあってこそ効果が出るという考えの下、岡山大学の三朝医療センターの医学的な調査を元に開発した。あまり療養、医学にふっても、文化も情緒もなくなってしまうため、美と健康を前面に押し出して提供している。発想のベースは、昭和 50 年代に見て回ったヨーロッパの温泉保養地である。

温泉治療の状況とそこにおける湯の管理の技術[462]

＜三朝温泉病院＞

公益社団法人鳥取県中部医師会立三朝温泉病院は、先に述べたように、昭和 14（1939）年に設立された厚生省の傷痍軍人温泉療養所に始まる歴史のある病院である。また、平成 28（2016）年より、同じ昭和 14 年に設立された岡山医科大学の三朝温泉療養所を起源とする岡山大学三朝医療センターからの流れの受け皿ともなっており、現在も、岡山大学医学部と緊密な連携関係にある。

具体的な連携内容としては、岡山大学からの寄附講座に加え、三朝医療センターからの鉱

462 この項は現地調査による。典拠が異なる場合は別途脚註を付けた。

泥湿布の引き継ぎ（継続患者の引き継ぎを含む）、岡山大学医学部からの医師派遣３名である。うち一人は週４回勤務、残り２人は週１回の非常勤である。派遣されている医師の一人は温泉気候物理医学会に所属している。三朝病院の現院長も温泉気候物理医学会に所属しているので、今後はより温泉医療に力を入れていく見通しとなっている。

①温泉治療

▶運動浴

三朝温泉病院では、温泉を利用した医療活動として、後述する鉱泥湿布と運動浴を実施している。運動浴は、36 度（冬は 38 度）ぐらいの温泉プールを歩いてもらうもので、プールは、深さが１m～１m20cm 程度、長さ８m×幅３m となっており、その中をぐるぐる歩いてもらう。何周かで出てしまう患者もいるが、30 分から１時間歩き続ける患者もいる。医療的にはもう少し水温を下げて多く歩いてもらいたいが、それでは寒いという声が大きいため、現在は温度を高めに設定している。



運動浴用のプール



入退水の移動介助機器。車椅子の患者さんがこれで運動浴ができる。

運動浴の対象患者としては、神経障害性疼痛、ヘルニア、関節変性疾患、リウマチなどが多い。脳卒中の既往症がある方、脊椎疾患、脳性麻痺についても、麻痺の程度によるが、一定数おられる。後は手術の術前術後の方が対象となっている。このうち、術後の患者は、抜糸して感染症がないと確認されてからとなる。三朝温泉病院では脚の人工関節の手術が多いが、その際、術後、体重をかけることが禁止されている免荷期間の患者のリハビリに利用される。だんだん歩けるようになると、平行棒を利用したリハビリも行うようになる。温泉の運動浴は、術後の免荷期間のリハビリに加え、高い温熱効果による除痛への効用や、怪我をした患者への筋肉や傷の創傷治療という点で効用があると考えられている。患者の主な居住地域は近隣の１市４町が中心である。リハビリ医療なので健康保険対象となるが、温泉を利用しているということで診療点数が上がることはない。

禁忌症としては急性炎症期がある。また、認知症、歩行がままならない患者については、運

動浴の際、注意して見ている。

令和５（2023）年から、三朝町と共同で、町内在住の比較的元気な 60 代 70 代の方に向けた運動浴の事業を開始している。12 月、１月、２月の３ヶ月、８名の高齢者の方に、理学療法士が１～２名ついて、プールを歩くだけではなく筋トレを含めた運動浴をしてもらい、その効果を、体組成計や歩行スピードなどで測定していくもので、高齢者に成果を示し、健康習慣を付けてもらうことを一つの目的としている。

▸鉱泥湿布

鉱泥湿布は、粘土質の土と三朝の温泉水を混ぜたものを 80 度に加熱したものをタオルに包んで肩や腰、膝などに当てるという療法である。時間は 30 分で、寝台（12～13 台ある）に横たわりながら行う。通常病院で実施されているホットパックによる温熱療法に比べ、保温時間が長く、その分効果が高い。効能としては消炎鎮痛、血行がよくなることによる創傷治癒などがある。腰痛、五十肩、股関節痛、膝関節痛、関節リウマチなどの疼痛疾患の患者が利用する。また、喘息などの呼吸器系の患者さんも、胸に当てると痰が出やすいということで利用している。

鉱泥湿布は、温泉水と粘土を混ぜ、それを高温の蒸気で 80 度まで温めながら攪拌する機械に入れて作っていく。使用して冷えて固まると、また温泉水を入れて柔らかくし、同じように機械に入れて攪拌しながら加熱する。粘土は再利用可能であり、岡山大学から譲り受けたものを使用している。かつては人形峠の泥を使用していたそうであるが、現在使用している泥の産地については定かではなく、粘土質であれば使用に問題はないと思われる。



泥を攪拌している様子。下の釜は二重になっており、内部に通した蒸気パイプで加温する。



温泉水が抜けて乾いた状態になった粘土。これにまた温泉水を加えて練り上げる。

鉱泥湿布は、薄手の布（写真上）で包んだ後にタオルで二重三重に包んで造る。



鉱泥湿布は、患者だけでなく、三朝温泉観光協会経由での体験もできる。患者の場合は、消炎鎮痛の治療（温泉による医療ではない）ということで診療報酬が付き、健康保険対象となるが、体験の場合、費用は全て体験者負担となる。患者の居住地は近隣の１市４町が中心だ

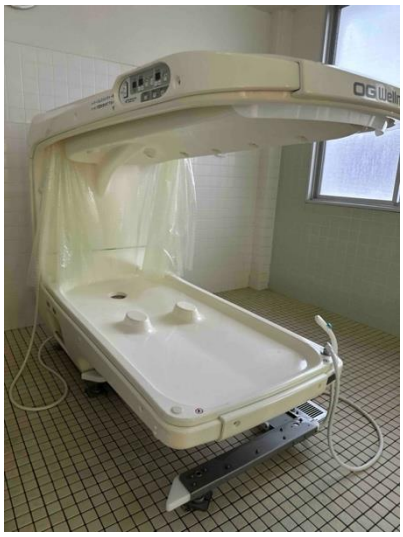
が、体験は県外からの方が多い。一日の利用者数は患者が 20 人程度で体験が 10 人強、日に 35 人が施設としては限界である。

▸その他

ラドンの吸入（熱気浴）については、三朝温泉病院では、まだ実施していない。ただし、岡山大学の方で効果についての論文が出ているので、検討しているところである。例えば、岡山大学の論文「総説　三朝ラドン温泉の健康効果に関する最近の研究動向」では、岡山大学が旧三朝医療センター分院（現「すーは一温泉」）で実施していたラドン高濃度熱気浴療法で、抗酸化機能を亢進させ酸化障害を緩和させること、組織循環を促進させること、末梢の血行を改善させて代謝をよくすることやβエンドルフィン値を向上させることで鎮静効果を発揮することなどの知見が得られていることが報告されている[463]。

そもそも温泉を用いた医療活動については、旧岡山大学三朝医療センターではより本格的に実施されていた。運動浴についてもプールがあったり、鉱泥の利用も、湿布だけでなく、鉱浴という泥を溶いた温泉に手足などの部分を入浴させたりしていた。上述したように熱気浴でのラドン・ガスの吸引もあり、利用者も遙かに多かった。

なお、三朝温泉病院には、上記の医療活動に用いる他にも、温泉を、職員や患者の入浴用に開放しており、飲泉もできるようになっている。患者用には、自ら入れる人用のお風呂（男性用、女性用）があり、介助が必要な人用には浅めの風呂がある。また、横たわった状態で上から全身にシャワーがかかる機械浴（全て温泉水だと機械が壊れるため、真水のお湯も使う）とミスト浴もある。飲泉もできるようになっている。その他足湯もある。これらは全て医療行為以外のサービスであるが、患者にも好評であり、新たに入ってきた職員が、肌が綺麗になったなど、温泉の効能を感じる場合が多い。



機械浴をするための装置



車椅子患者用の足湯

463 片岡隆浩、迫田晃弘、恵谷玲央、石森有、光延文裕、山岡聖典「総説　三朝ラドン温泉の健康効果に関する最近の研究動向」温泉科学 64 巻　平成 27 年　P380-P387 を参照。

② 湯の管理

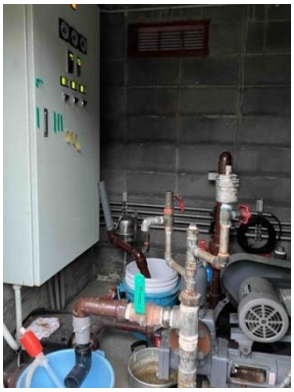
三朝温泉病院では、敷地内に２本、敷地外に３本の源泉を保有しており、それを混合させて使用している。湧出量はあわせて 250 リットル／分である。全てポンプで揚程している（揚程するポンプ数は６本ある）。泉温は源泉によって異なり、34 度程度から 63 度程度までである。混合する割合を調整して、平均 48 度程度のお湯が建物上にある貯湯タンクに貯まるようにしている。そこから各浴槽にいくまでに 41～42 度の適温になる。混合割合を同じにしていると、夏は高め、冬は低めになってしまうので、夏と冬で混合割合を変える。どこのポンプからどれだけ入れるかのスイッチングは感覚と経験則に頼る部分が大きく、温度管理に関する苦労は大きい。



敷地外の源泉から着湯しているタンク



三朝病院第一源泉外部



三朝病院第一源泉内部



湧出量測定用のバケツ



第一源泉のポンプ

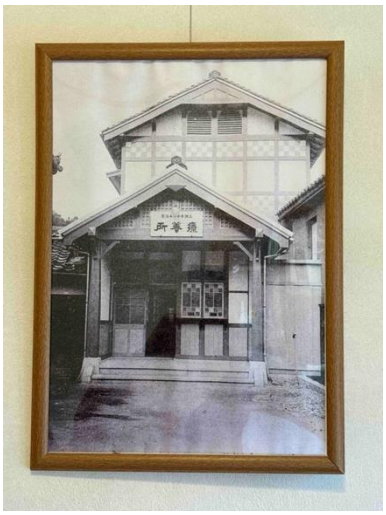
源泉掛け流しで一切循環もしていないので、レジオネラ菌の心配はなく、殺菌もしていない。ただし飲泉を行っているので２ヶ月に１回の定期検査の際にはレジオネラ菌についてもチェックしている。

配湯に関する苦労としては、温泉の成分が次第に配管に溜まり、突然まとまって流れてくるために湯の色が茶色っぽくなることがある。これを防ぐため、年に１回、全配管に薬品を通して清掃し、その後１ヶ月ほどは飲泉をせずに源泉を流しっぱなしにすることでスケールが過度に溜まることを防いでいる。地下の源泉については下手にさわって問題がでないよう一切手をつけていない。

＜天然ラドン熱氣浴泉「すーはー温泉」＞

「すーはー温泉」は、もともとは大正時代に建てられた村営の温泉療養所で、戦後、岡山大学が岡山大医学部付属病院旧三朝医療センター分室という形で保有していた施設である。以前から、三朝町が一部を借り上げ、平成 22（2010）年、NPO 法人みささ温泉（旅館組合・観光協会・商工会の三つの団体による三朝温泉まちづくり協議会が中心になって創設したまちづくり団体）に委託してラドン浴の体験ができるようにしていた。平成 28（2016）年の鳥取県中部地震の影響で建物が危険となったため、町で施設全体を買い上げ、令和２（2020）年、町営の施設として建物を大幅に改修、新規開館した。景観を維持するため、以前にあった建築物の写真に合わせ、昔と同じ建築デザインにしている。





「すーはー温泉」の外観。分院だった時代（右写真）とほぼ同じ建築デザインで建て替えをしている。

運営は、岡山大学時代から運営委託を受けていた NPO 法人みささ温泉が、現在は町の指定管理者として、そのまま継続して運営している。施設内には、温泉の蒸気を浴びる熱気浴室が地下に３室（最大４人が同時に入れる「不老庵」、２人の「恋泉庵」、２人の「蒸熱庵」）、ラドンのガスを浴びることができる乾式熱気浴室「ヴァポリウム」が２階にある。熱気浴室は、女性は作務衣かバスローブ、男性はバスローブに着替えて入る。「ヴァポリウム」は着衣のまま入る。また、岡山大学医療センターであった時からの蔵書も引き継いでおり、その閲覧も可能となっている。

なお、ラドン熱気浴とは、温泉熱を利用した熱気浴室に 30～40 分入り、ミスト状のラドン・ガスを吸入することで、新陳代謝を促進し、免疫力や治癒力を高める「ホルミシス効果」を得るものである。現在三朝では「すーはー温泉」のものと「健康づくりの湯治宿ブランナールみささ」の熱気浴室の２カ所で体験することができる[464]。

---

464 この段落は、三朝温泉公式サイト「Onsen Therapy 温泉を『吸って吐く』ラドン熱気浴」https://misasaonsen.jp/radon/ を参照（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

建物の構造としては床の下に泉温 42〜60 度（季節により変動）の源泉が３本自然湧出しており、床下からの温泉の熱と蒸気によって、地下の熱気浴室が暖められているようになっている。温泉の蒸気は、管を使って、２階にも誘導され、乾式熱気浴室で使われている。一回の熱気浴は、地下の熱気浴室が 30 分（冬季は 40 分）、２階の乾式浴室は１時間となっている。



地下の熱気浴室「不老庵」の内部。４名入室できる。



地下の熱気浴室「恋泉庵」の内部。こちらは２名。





左が以前から使われていた不老庵の源泉、右が新しい恋泉庵の源泉。



２階の乾式熱気浴室ヴァポリウムの内部

熱気室のうち、「不老庵」は、岡山大学分院の時代から熱気室として使われていたもので、もっともラドン・ガスの濃度が高い。残り二つは、そもそも浴槽があったが、分院時代は使われておらず、新規開館するに当たって熱気室に改造した。源泉は各熱気室の下にそれぞれ一本ずつあり、排煙窓がある室はやや室温が低くなるなど、各室で差がある。熱気室の室温は 30〜47 度位だが、源泉の湧出量には何の加工もしていないので、室温も自然に上下する。そのため、冬季に比べて夏は室温が上がる。そういった際、暑いのが苦手な人には、比較的室温が低い熱気浴室を使ってもらう。

各室には換気扇がついている。熱が逃げるのを防ぐため、熱交換換気扇（熱交換素子を用いて室内の熱で外気を暖めてから吸気する換気扇）となっている。廃湯は、排水口からそのまま川に流される仕組みである。人が入浴して体を洗ったりするわけではないので、下水処理の必要はない。

熱気室の清掃は、閉館時に毎日１回、水を出して磨いている。源泉の清掃は年２回である。清掃している間も自然湧出し続けるので、清掃は暑さとの戦いになる。

もう一つ大変なのが、常に温泉の蒸気が出ているため、湿度が非常に高いことである。そのため、電気系統／電化製品の故障が非常に多い。排煙窓もそもそもは自動で開け閉めができるタイプのものだったが、既に故障し、今は手動でやっている。換気扇も３年で音が非常にうるさくなり、替え時が迫っている。加えて、コンクリートの壁に温泉の成分が結晶となって染みだしてくる、壁にカビがはびこるなど、メンテナンスの手間が非常に大きくなっている。



熱気室内が痛んでくるだけでなく（左）、室内の壁もコンクリートが凸凹になり壁紙が浮いてくる（右）。

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等

温泉に関わる神社としては三朝神社がある。三朝神社は、大正 10（1921）年に、現在の三朝町の一部になった湯村の湯村神社と砂原の砂原神社、境内末社の外谷神社が合祀されてできた神社である。このうち、湯村神社は、そもそも白狼伝説の大久保左馬之祐を崇敬する神社として建てられたもので、明治初年に改名するまで大久保大明神もしくは午頭天王と呼ばれていた。そのため、合祀された三朝神社では、今でも三朝温泉の花祭りの際に祭事が行われている。

また、三朝温泉から南にいったところには白狼神社もあり、以前は５月８日の温泉祭の際にこの前で白狼太鼓が演奏されていた[465]。





三朝神社の鳥居（左）、と本殿（右）

温泉に関わる仏教の堂宇としては薬師堂がある。三徳山から移されたという縁起のある「湯薬師さん」と呼ばれる仏像が安置され温泉街に鎮座する。「株湯に祀られていた神様を、誤って湯の中に落としたため祟りが起きた。その悪霊を三徳山にて鎮め、薬師如来の木像の胸中に納めて三朝温泉の守護仏として祀ったところ癒やしの湯となった」という伝承が伝えられている。また薬師堂の横には杖なし地蔵があり、かつては杖が多数奉納されていた[466]。



薬師堂



杖なし地蔵

465　この２段落は三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年 10 月を参照。

466　この段落は日本遺産ホームページ「三徳山 三朝温泉『六根清浄と六感治癒の地』」https://misasaonsen.jp/japan-heritage/　（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

現在の位置に薬師堂が移ったのは明治 25（1892）年と伝えられている[467]。

薬師堂の縁起にも出てくる三徳山三佛寺は天台宗修験道三徳山法流の寺で、慶雲３（706）年に役行者が開山し、嘉祥２（849）年に慈覚大師が中興したという縁起がある。国宝、三仏寺奥院(投入堂)があり、一帯は国の史跡・名勝「三徳山」に指定されている[468]。本尊は金剛蔵王権現である。

この三佛寺には、明治期に取りまとめられたと考えられている「伯耆国河村郡美徳山並三朝温泉濫觴略記」という三徳山と三朝温泉の縁起をまとめた資料があり、そこでは、白狼伝説について、白狼が但馬山妙見菩薩の使いであること、古木の株のところだけでなく、そこから離れたもう一つの温泉が出る場所についても妙見菩薩から伝えられ、後者を掘ると、温泉だけでなく白い丸石（霊石）も出てきたこと、これに感謝して但馬山妙見菩薩を祀る社を建てるとともに、霊石のご神体として少名彦命とその本地である薬師如来、及び、淡島大明神を祀る二つの堂を建て、山伏を堂守としたことが語られている。淡島明神は、葛城入峰（かつらぎにゅうぶ）という修験道の峰入り修行の起点道場である紀伊半島の北西端の加太寺の守護神で、薬師如来とともに祀られることが多い。但馬山妙見菩薩の本山は、兵庫県養父市にかつてあった石原山帝釈寺日光院であったが、明治４（1871）年、明治政府により廃寺にされ、代わりに名草神社が新設された。妙見菩薩の本地は薬師如来とされている。この但馬山妙見菩薩への信仰は、江戸期の伯耆国の史料でも確認されており、三朝にも伝わっていたと思われる。帝釈寺があった養父市には、式内社である五社明神（現在の養父神社）もあり、その摂社の山野口神社では、流行病や憑物を落とす神として「山の口の神（狼）」が信仰されていた。

温泉に関わる祭礼としては、花祭りと三朝のジンショ（陣所、神緒）がある。国の「記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財」に選定されている三朝のジンショは、五月節供の綱引き行事で、藤蔓を材料にして綯（な）い上げた雌雄２本の大綱を結合させ、地区が東西に分かれて引き合い、その勝敗によって豊作等を占う行事である[469]。

ジンショは、陣所、神緒などの漢字が当てられているが、語源は明らかではない。江戸時代からあった旧暦５月の菖蒲に関わる行事を明治期に観光行事として三朝の薬師如来の縁日の祭である花湯祭りに取り入れたもので、旧暦４月８日（現在は５月３、４日）に行われている。浴客の逗留を促すため、夜間に行われるようになったとされる。大正６（1917）年に「花りょうらん」の歌が作られ、大太鼓の拍子で歌われている[470]。

花祭り自体は、初日のジンショで使う大綱を編む「綱からみ」から始まり、その日は大綱を所定の場所に移動させるところまで行う。二日目は朝に三朝神社での祭典と浦安の舞の奉納、薬師堂でのご詠歌、午後には小学生による稚児行列があって、夜になると本番の大綱引きと

---

467 堂宇移転時期については三朝温泉誌編集委員会「三朝温泉誌」鳥取県三朝町　昭和 58 年 10 月を参照。

468 この段落ここまでは、三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成 21 年を参照。以降、次の段落まで三朝町教育委員会「山岳霊場　三徳を読み解く」日本遺産三徳山三朝温泉を守る会　令和６年４月を参照。

469 この段落は国指定文化財等データベース「三朝のジンショ」
https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/312/721（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

470 の段落を含めた４段落は、三朝町史編纂委員会「新修三朝町史」平成 21 年を参照。

なる。

また、昭和 26（1951）年より、ラジウム発見者キュリー夫妻を記念しての祭を実施している。当初はキュリー夫人の命日の７月４日に行っていたが、梅雨と重なることから、昭和 46（1971）年より７月末から８月頭に変更された。キュリー夫妻がフランス人であることから、フランス大使館との連携があるイベントとなっている。

温泉に関わる芸能としては、三朝小唄がある。昭和３（1928）年、倉吉町（現：倉吉市）で開かれた夏期音楽大講習会に招かれた野口雨情（のぐちうじょう）が歌詞を発表、同行していた中山晋平に曲を、島田豊に振り付けをさせたもので、その後レコード化され、また昭和４（1929）年には無声映画にもなっている。



映画「三朝小唄」のロケ地にある解説版。昭和初期は、各地でご当地の小唄などが作られ、それをもとにして映画制作をすることがブームであった。マキノ・プロダクションの「三朝小唄」もそうした映画の一つである。
小唄映画のフィルムの殆どが散逸してしまった中で、「三朝小唄」はフィルムが現存する極めて珍しい例となっており、現在はデジタル化されたものを旅館などで見ることが可能である。

芸能としては、先に触れた大久保大明神（現三朝神社）の神前で古くから行われていたという謂れを持つ白狼太鼓もある。現在の白狼太鼓は、昭和 53（1978）年に観光行事として再興されたもので、三朝温泉ほっとプラ座で「あったか座」の出し物として不定期に公演されている。三朝温泉「あったか座」では、三朝に古くから伝わる郷土芸能（「さいとりさし」など）や山陰の芸能、地元演奏者による三味線・琴・太鼓演奏なども行っている。三朝の「さいとりさし」は、三徳山を舞台にした和尚との問答で楽しませる祝狂言である[471]。

また、特産品としては、「栃の実」を使ったお菓子（栃餅など）や、神倉大豆を使用した食品がある。近年では三朝温泉の源泉を 100％使用した濃縮温泉水や化粧水の「三朝みすと」なども開発され、人気になっている[472]。

---

471 この段落は、鳥取芸能アーカイブス「三朝温泉白狼太鼓」https://www.tottori-dentou.net/dantai_detail.php?id=194&search_mode=kouen
「さいとりさし」https://www.tottori-dentou.net/dantai_detail.php?id=122 を参照（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

472 この段落は、現地調査ヒアリング及び三朝温泉公式サイト「三朝温泉ならではのお土産はありますか？」https://misasaonsen.jp/ufaqs/ufaq-2034/ （令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。



栃餅を使ったぜんざい

三朝温泉は、上記見てきたように、三徳山の修験信仰と連なる縁起を持つ長い歴史のある温泉地であり、また、川沿いに多くの源泉が足下から湧出するという特性から、独特な温泉との付き合い方、湯の管理の技術を歴史的に築いてきた。そのための土木、建築上の工夫も多い。

もう一つの特徴が世界有数のラドンの含有量があることから来る療養泉としての活用である。大正時代に始まり、第二次世界大戦前には温泉病院も２つ設立されるなど、近代以降の三朝温泉の発展にはラドンの存在は欠かせないものとなっていた。現在でも、三朝温泉病院では運動浴、鉱泥湿布が行われており、ラドンの熱気浴を行う町営施設やラドンの効果を美容や健康に活かす宿泊商品の展開などが積極的に展開されている。

川床と同じ高度からの源泉の足下湧出、長い信仰の歴史、そして温泉医学との関わり。三朝の温泉文化は、独特な温泉文化と、それを支える湯の管理の技術を、今に伝え、そしてさらに発展させ続けている。

（１３）道後温泉

道後温泉は、松山市街地の北東部に位置する道後温泉本館を中心に広がる温泉地である。歴史は古く、飛鳥時代に遡る。その後も持続的に発展し続けており、近代初頭には夏目漱石の「坊っちゃん」で大きく注目された。一方、源泉の確保には苦労を重ねてきており、何度も湯が出ないという危機を迎えた他、内湯への移行も、昭和 31（1956）年以降と、他の温泉地に比べ遅い時期となっている。

以下、こうした道後温泉の長い歴史と特徴、及び、それを支えてきた湯の管理の技術を、源泉が限られている中での集中管理のあり方を、道後温泉本館を中心に、概観する。

道後温泉の歴史

＜近世以前[473]＞

温泉の起源縁起については、宝永７（1710）年の郷土資料「予陽郡郷俚諺集」に、白鷺による開湯伝説が載せられている。また、平野神社社務で正四位を賜っている卜部兼方が 13 世紀末に著した「釈日本紀」には、「伊予国風土記」の逸文として、伊予国で病になった少彦名命を、大己貴命が、大分の速見の湯を下樋で持ってきて癒やしたという説話が載る。病が癒えたのち、少彦名命は、側にあった石の上で舞ったという。現在も、道後温泉本館北側には、少彦名命が踊った縁起がある「玉の石」が置かれている。なお、同逸文には、景行天皇と皇妃八坂入姫、仲哀天皇と神功皇后、聖徳太子の行幸・行啓の伝承も記されている。

史料上の初見とされているものは、日本書紀の舒明天皇 11（639）年の行幸である。この時には翌 12 年までの長期の滞在となっている。また、斉明天皇７（661）年には、斉明天皇と中大兄皇子が、百済復興のための戦いのため筑紫に下る途中、道後と思われる場所（石湯の行宮）に泊まったとの記載がある。なお、万葉集には、天平年間（729～749 年）まで生きていたとされる山部赤人の温泉を詠み込んだ長歌が載る。道後温泉至近にあったと思われる熟田津を詠った歌も、額田王のものを含め、２首入れられている。この時期、律令制の施行に伴い、道後温泉を含む地域は、温泉郡という名称で郡が立てられており、地域における温泉の存在がいかに大きかったかがわかる。考古学資料としても、飛鳥池遺跡、平城宮東院跡、平城宮長屋王邸跡、長岡京跡から現在の道後温泉近くの地名が記された木簡が出土している[474]。

平安時代の道後温泉の事情を直接示す史料は残っていないが、源氏物語には伊予の湯について数の多さを例える言葉が出てくる（「とを、はた、みそ、よそなど数ふるさま、伊予の湯桁もたどたどしかるまじう見ゆ」「湯桁はいくつと問はまほしく」。湯桁とは、桁を渡して囲んだ湯船のこと）[475]。また、平安末期以降は、伊予国中部地域では豪族河野家が台頭、温泉館を設営して道後温泉の管理を行った。鎌倉幕府御家人となった河野家は、鎌倉時代後半、石

473 この項は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。別途典拠のある場合は中を付けた。

474 出土木簡については、橋本裕行「温泉考古学の視点」考古学ジャーナル　平成 29 年　P11-P14 を参照。

475 源氏物語については、愛媛県史編さん委員会「愛媛県史　文学」愛媛県　昭和 59 年３月を参照。

手寺の再建などを行ったが、元弘３（1333）年、後醍醐天皇による建武の新政の際、最後まで鎌倉幕府に従ったため、逼塞（ひっそく）を余儀なくされる。その後、足利尊氏が後醍醐天皇に対して立つと、それに味方して勢力を復活させ、建武年間（1334～1338 年）に道後に湯築城を築いて本拠をそこに移転、伊予国守護の地位を確保した。河野家が守護となった後、道後温泉は、石手寺の管理下に入り、石手寺と湯築城の間には市も開かれ、中予地域の中心地として大きく発展していく。

しかし、戦国期になると、河野家は家督相続に伴う内乱と細川家をはじめとする周辺の戦国大名からの侵略により弱体化、最終的には天正 13（1585）年、秀吉に降伏することになる。湯築城は、同年、小早川隆景支配となった。その後隆景の筑前への国替えにより、天正 15（1587）年には城主が福島正則に代わる。しかし、正則が本拠を越智郡に移したため、湯築城は廃城となり、建屋などは破却された。

文禄３（1594）年になると、伊予国は加藤嘉明配下へと代わった（福島正則は、同年、文禄の役で出兵後、翌４年に尾張国清洲に領地を与えられている）。嘉明は、正木（現：愛媛県松前町）に本拠地を置き、関ヶ原の戦いの後の慶長８（1603）年に勝山（現：愛媛県松山市）に移転し、道後の住民も松山に移された。この後、伊予の中心は、道後から松山に移行することになる。

加藤嘉明は、寛永４（1627）年、会津に転封となり、続いて蒲生忠知が松山城主となったが、嗣子なく 30 歳で夭逝したため、寛永 12（1635）年、徳川家康の異父母弟、松平定行が松山藩主を命ぜられた。道後温泉が再び大きく整備され、湯之町という名で発展するようになるのは、この定行の時代、寛永 15（1638）年からとなる。この年、温泉の共同浴場の周囲に垣根が設けられ、砌石（みぎりいし）などを行って浴槽を整備し、士人僧侶用の一の湯、婦人用の二の湯、下ざまの男子用の三の湯、士人の妻女のための十五銭湯、旅客雑人用の十銭湯・養生湯が置かれるとともに、下流に馬湯が作られた。共同浴場の管理は、初めは町奉行に所属する徒士目付（かちめつけ）格の役人、ついで定行が温泉入湯のために作った道後御茶屋の番人、元禄以降は修験道場の明王院院主の金子氏が担当し、明治維新まで金子氏が世襲で管理した。

共同浴場は、江戸時代の間、何度も立て直されている。構造は、一の湯、二の湯、三の湯については変わらないが、庶民向けの養生湯などについては、概ね男子向けの囲い３つ、女子向け２つではあるものの、囲いの数や名称などについては度々変更されている。当初は全てが一つの建物であったが、元禄の建て替えより、一の湯、二の湯、三の湯と養生湯は別棟になった。その他、浴場は建て替えの度に少しずつ大きくなっており、また脱衣場の整備も進んでいる。宿の数は明和年間（1764～1772）年の記録で 72 軒、文化６（1809）年で 53 軒であった。宿が営業するためにはまず株を買って営業権を取得する必要があり、営業に当たっては明王院に冥加金を支払い、また共同浴場の整備・建て替えに当たっては必要な金額が賦課された。

元禄 15（1702）年の案内書「玉の石（少彦名命の玉の石から取った書物名）」により江戸期の湯治の状況を見ると、まず道後温泉の由来として、少彦名命と大己貴命の伝承、各天皇

や聖徳太子の行幸・行啓、白鷺の開湯伝説、一の湯に置かれていた薬師如来の尊像がついた湯釜の謂れなどが述べられている。また、白鷺の伝説については、怪我した子馬を母馬が連れて湯に入ったところ忽ち治ったこと、人々がそれを見て奇異に思っていると、母馬が観音菩薩に変じて温泉の湧出を知らせ、霊場とするように言ったというもう一つの伝説が付け加わっている。当時の道後温泉には、この白鷺の伝説を踏まえた鳥越観音が祀られており、先に述べた玉の石とともに、湯治客の信心を集めていた。

次に湯治の作法についての項をみると、湯治に来た客は、まず明王院に証文を差し出した後、明王院の指示に従って宿に泊まる。また一廻り（７日）ごとに湯銭を明王院に支払い、宿代は宿の主人に相対で払う。必要なものについては、薪炭・油・蝋燭・白米・味噌・塩・酢・酒・醤油・湯茶・煙草・魚・鳥・野菜・麺類・時々の珍味などの食材、桶・鉢・ぶくり（下駄）・食器・墨筆紙・その他、細々とした物などの日用品、書物・呉服類・子どもの玩具・唐物などの必需品以外の品々に至るまで、道後や松山の商人が宿まで売りにくるとある。土産物も売られており、道後名産の木綿織、刀の柄用の糸、諸白（清酒）、素麺、もぐさ等の他、周囲の地域の名産が集められ、販売されていた。その他、寺社を中心とする周辺の名所が紹介されており、湯治の合間や行き帰りに行楽をし、帰りに土産物を買っていた状況が窺えるものとなっている。また、お遍路の途上に道後を訪れる人も多かった。お遍路は最初の三日まで湯銭を払わなくてもいいなど優遇されており、文化文政期（1804～1830 年）に四国八十八カ所巡りの風習が全国に広がっていくと、ますます多くのお遍路が道後温泉に訪れるようになった。

天保 12（1841）年には上人坂[476]に十軒茶屋が公設の遊郭（後の松ヶ枝遊郭）として組織され、街の賑わいも増している[477]。また、先に触れたように、温泉には、松平藩主の別荘、道後御茶屋（加藤嘉明の頃に原型が作られたとも言われている）があり、藩主が入湯していた。伊予藩主、徳島藩主など近隣の大名の入湯の記録も残っている。十返舎一九、小林一茶など多くの文人が道後を訪れた記録も残る。

＜明治・大正・昭和戦前期＞

明治以降、道後でも、温泉管理の主体は大きく変わっていく。江戸期松平藩が所有していた温泉の土地・建物は、明治維新後、国の所有、県の監督するところとなった。これに伴い明王院の管理は終了し、共同浴場の管理は、明治４（1871）年、江戸期から町方支配を担っていた湯之町の４つの組の組頭の合議によるものに移行している。管理主体は、その後、明治８（1875）年に町の代表者が組織する原泉社へと変わり、原泉社の温泉世話係が担当となった[478]。

476 上人坂という名称は、平成 22 年に、上人坂を登り切ったところにある一遍上人の縁起がある宝厳寺に因んで名付けられたもので、当時の名称ではない。人見佐知子「妓楼遺構の保存と活用をめぐる一考察」心の危機と臨床の知 / 甲南大学人間科学研究所 編 24　令和 5 年　P38-P52 参照。

477 公設遊郭については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻 3 号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

478 この段落と次の段落は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

温泉の管理体制が抜本的に近代化されたのは明治 24（1891）年である。明治 22（1879）年の町村制移行に際し、道後温泉は、道後村から独立、道後湯之町となった。これに伴い温泉の管理が原泉社から町に移行、当初は原泉社以来の温泉世話係に管理を委ねていたが、それが、明治 24 年、町議会の常設委員会によるものとなり、一般町民が選ぶ議員による管理へと切り替わった。なお、初代町長の伊佐庭如矢（いさにわゆきや）は、原泉社顧問も務めており、原泉社に集まる有力旅館とともに、道後温泉本館をはじめとする共同浴場の整備や鉄道の整備などを強力に推し進めた。これにより道後温泉の温泉観光の基盤が築かれた一方、旧来の住民の温泉利用についての権利（旧慣）は弱められ、道後は観光地としての性格を強めていくことになる[479]。

ただし、これ以降も、昭和 30 年代以降に旅館の内湯化が進むまで、道後温泉では共同浴場が唯一の温泉の入浴場所であった。明治維新の際には、天保５（1835）年建て替えの建物がそのまま使われていたが、まず、明治５（1872）年に、旧一の湯、二の湯、三の湯の建物が二階建ての「神の湯」として建て替えられる。資金を借り入れて建て替えをしたのは組頭の合議体である。ついで明治 11（1878）年、原泉社により、神の湯の東に「新湯」が追加された[480]。

温泉が町の管理になってまず手がけられたのが、明治 25（1892）年に行われた神の湯南側の養生湯の建て替えである。養生湯は、天保５年の建物のままであったため、利用に大きな困難を生じていた。これに合わせて、商店街を隔てた西側の地区（現在の「椿の湯」の場所）に「松湯」、「薬湯」という無料の共同浴場を設置している。ついで明治 27（1894）年には、神の湯も建て替え、現在に繋がる三層楼の建築物となった。その５年後の明治 32（1899）年には、新湯も建て替えられ「又新殿（ゆうしんでん）・霊の湯」となっている。大正３（1914）年には、霊の湯の東に隣接して「新湯（通称：神の湯第７・８室）を追加したが、これは昭和２（1927）年に、養生湯の南側に移転し、「鷺の湯」となった（鷺の湯は、昭和 38（1963）年、翌年開業される温泉センター開発のため、閉業している）。また、大正 11（1922）年には、「松湯」、「薬湯」が建て替えられ、「西湯」、「砂湯」へと改称した。なお、神の湯、又新殿・霊の湯については、大正 13（1924）年に南棟と玄関棟が作られた際に一つの建物として繋げられており、平成６（1994）年にまとめて国の重要文化財に指定されている[481]。

上記のような共同浴場の増設（施設の増設に加え、昭和９（1934）年には神の湯の浴槽を増やしている）が続く中、道後温泉の浴客数も増えていった。この中で多くの文化人が訪れ、道後温泉にまつわる文学作品を残した。まず、正岡子規がいる。松山に生まれた正岡子規は、道後に親しみ、多くの句や短歌、吟行の様子を記した「散策集」を残している。「坊っちゃん」を書いた夏目漱石が道後を訪れたのは明治 28（1895）年である（同年、松山の愛媛県尋常中学校に一年赴任している）。松山市湊町出身の高浜虚子も、この頃、漱石に道後で出会っている。その他、明治から戦前にかけ、道後には、徳富蘇峰、斎藤茂吉、伊藤博文、後藤新平など

479 伊佐庭如矢については愛媛県史編さん委員会 編「愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）」愛媛県　昭和 59 年３月を参照。

480 この段落と次の段落は、松山市「道後温泉活性化計画」平成 27 年５月を参照。

481 文化財登録については、文化庁「国指定文化財等データベース」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index（令和６年 12 月 13 日最終確認）参照。

多くの著名人が訪れている[482]。

浴客数の推移を見ると明治 36（1903）年には 484,064 人であったものが、明治 38（1905）年には 927,962 人へと急激に増加、その後一旦落ち着くが年間 70 万人を下回ることなく、大正元（1912）年には 883,692 人にまで再び増加している。これに伴い、道後に訪れる客層も、明治前半の味噌・醤油・漬物その他一切の食糧品、炊事道具などを携帯していたことから「味噌桶湯治」と呼ばれていた自炊型の客から、一般の観光客へと変わっていった。明治 42 年（1909）刊の『温泉郡誌』によれば、かつては藁葺きの農家や宿といっても狭隘（きょうあい）なものしかなかった街並みが、農家との兼業から宿屋専業もしくは宿屋と土産物商売の兼業になり、建屋も二層三層の大きなものに建て替えられ、道路も車馬が通れる広いものになったという[483]。この間、道後温泉は、明治 38（1905）年、日露戦争の際の傷病兵の転地療養地になり、日露戦争の俘虜のロシア人が明治 37（1904）年より松山に収容されたため、ロシア人俘虜の道後温泉入湯も定期的に行われた。

こうした入浴施設・入湯者増大の中で課題となったのが源泉の湧出量の拡大である。開湯以来明治末年まで、道後の湯の供給は、神の湯の男湯の下と養生湯の下（合わせて現在の第１号泉）の二つの源泉の自然湧出に頼っていた。この湧出量を拡大するため、まず行われたのが、大正２（1913）年の神の湯の源泉の動力泉化（ポンプによる汲み上げ）である。これにより、養生湯側の湧出量の減少が見られたものの、それを上回る湧出量拡大があり、増湯を進める第一歩となった（第１号泉については昭和 30 年代初頭に枯渇）。

一方、新源泉については、既に明治 44（1911）年より、道後公園北側の通称ドンコ壕と呼ばれる地点での掘削が進められ、昭和 14（1939）年には湧出を見ている。ただし、これについては、一時陸軍療養所（現在の子規記念博物館の辺りにあった道後公会堂を昭和 12（1937）年に転用して設置）に使用されたものの、湧出量が少なく、廃止されることとなった。最初の成功は、昭和 15（1940）年、道後公会堂前で掘削された第２号泉で、ついで昭和 17（1942）年に第３号泉、昭和 19（1944）年に第４号泉が掘削に成功した。ただし、このうち、現在でも供用されているのは第３号泉のみとなっている。

共同浴場の整備とそれを支える湯量の増加に加え、交通基盤の発展も、道後温泉の成長に大きく寄与した。明治 28（1895）年、松山市一番町から道後まで、道後鉄道が開業した。既に明治 21（1888）年には、伊予鉄道が三津浜（現：松山市三津浜地区。江戸時代からの松山の海の玄関口）と松山を結んでおり、明治 25（1892）年には高濱まで延伸した。明治 33（1900）年には道後鉄道は伊予鉄道に合併吸収され、伊予鉄道道後線となっている。電化されたのは明治 44（1911）年である。同じ 44 年には、松山電気鉄道も開業し、ほぼ同じ路線を走っていた伊予鉄道と激しく競合した（大正 10（1921）年に伊予鉄道に吸収され、会社解散）。

もう一つ重要な交通基盤となっていたのが、瀬戸内海を結ぶ航路網である。三津浜への定

---

482 この段落を含む５段落は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

483 噌桶湯治や街並みの変化については愛媛県史編さん委員会 編「愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）」愛媛県　昭和 59 年３月を参照。

期船の寄港は明治４（1871）年の大阪-関門航路が最初で、ついで明治６（1873）年の大阪-博多航路が続いた。ただし、この時点では、江戸時代の技術で作った木造船に蒸気機関を取り付けただけの船を利用しており、風任せではないため定期航路化はできたものの、輸送量は大きく増えていない。

海運が本格化するのは、明治 17（1884）年に中小の船舶会社が合同して大阪商船（現・株式会社商船三井）が設立され、三津浜へ６航路を設定し、さらに明治 20（1887）年に宇和島運輸が三津浜航路に参入してからである。また、明治 39（1906）年には高濱が本格的な港湾として整備された他、船舶自体も、500 トン内外の鋼鉄製のものに変更された[484]。これにより、明治後半以降、大阪商船を筆頭とする各商船会社は、道後に多くの観光客を送り込めるようになった。初めは三津浜、高濱が整備された後は高濱港までは商船で、その後は電車で道後温泉にという流れで広域から多くの観光客が流入してきた。

この結果、大正末期に 109 万人にまで増加した入浴客数は、昭和 14（1939）年には 140 万人まで増加している[485]。昭和 10（1935）年の土地利用図をみると、現在の上人坂にあった松ヶ枝遊郭も大きく繁栄していたことがわかる。当時の代表的な遊郭（明治５（1872）年のいわゆる芸娼妓解放令以降は「貸座敷」）である朝日楼夢之屋の図面を見ると、総二階建て、15 室ものお座敷を擁する豪華な建物であった。宝厳寺のすぐ手前にあった同施設では、客は参道から入り、帰りは裏道から出ていった[486]。なお、夢之屋の遺構は平成 19（2007）年に解体されている[487]。

その後、第二次世界大戦の戦火が激しくなるに連れ、国内観光市場は急激に縮小、道後も戦時への対応を図らねばならなくなった。昭和 19（1944）年には旅館を転用した呉海軍病院道後療養所が開かれ、昭和 20（1945）年には、木賃宿を含め、60 軒近い旅館が療養施設となった。また、阪神地区から道後温泉近隣に学童疎開に来ていた子どもたちも道後温泉を利用していた。なお、昭和 19（1944）年、道後湯之町は松山市に編入されている（温泉の管理は、旧湯之町が母体となった財産区に移管）[488]。

＜第二次世界大戦後＞

道後温泉は空襲を免れた[489]。しかし、第二次世界大戦敗戦後、松山市も英米軍の進駐対象となり、道後温泉の霊の湯などの各浴場も進駐軍兵士のために供出されることとなった。昭和

---

484 商船航路の拡大は松山市史編集委員会「松山市史　第３巻」松山市　平成７年５月を参照。

485 商戦航路による浴客数の増加は、笠井雅直「温泉地開発と鉄道網の革新　― 歴史的経験 ― 」名古屋学院大学総合研究所ディスカッション・ペーパー　109 号　平成 27 年 12 月を参照。

486 上人坂の遊郭については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻 3 号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

487 遺構の解体については人見佐知子「妓楼遺構の保存と活用をめぐる一考察」心の危機と臨床の知 / 甲南大学人間科学研究所 編 24　令和５年　P38-P52 参照。

488 この段落は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

489 空襲被害は松山市史編集委員会「松山市史　第４巻」松山市　平成７年５月を参照。

24（1949）年には返還がかなったが、代わりとして昭和 25（1950）年に、現在子規記念博物館がある当たりに進駐軍用として作られたのが「しらさぎの湯(英語名称:DOGO HOT SPRING)」である。このしらさぎの湯は、昭和 27（1952）年、浴室を増設、以後日本人も入浴できるようになる。

占領期、昭和 21（1946）年 12 月には、南海大地震の影響で一時湯が止まったが、翌 22 年初めから回復し始め、長期の停止は避けられた。また、同年には伊予鉄道城南線が道後温泉と国鉄松山駅を結び[490]、翌昭和 23（1948）年には、新温泉も作られている（昭和 54（1979）年廃業し、子規記念博物館の敷地になった）[491]。昭和 24（1949）年には松山-道後間で四国初のディーゼルエンジンの大型トレーラーバスも走っている。なお、海上交通については、既に昭和 21（1946）年に再開している[492]。

戦後の道後温泉は、先に述べた４本の源泉のみを利用している状況であり、一日１万人の利用が限界であった。そのため、昭和 20 年代後半、年間入客数が 300 万人を窺うようになると、温泉施設の限界が目に見え、源泉の新規掘削が求められるようになった。新規掘削のもう一つの契機となったのが昭和 28（1953）年に松山市で開かれた第８回国体である。同年、西湯を増設し「椿の湯」を新たに作って選手たちを迎えた松山市であったが、宿で入浴できず、共同浴場にまで行かなければならないことに選手たちから不満が出た。こうした状況を受け、市では昭和 29（1954）年から内湯化が大きく議論されるようになった[493]。

まずは新源泉の確保である。昭和 27（1952）年には、既に、戦後初めてとなる第５号泉の掘削に成功していたが、内湯化を進めるため、昭和 30（1955）年には６～10 号泉の５本を一気に掘削した。その後も新源泉の掘削は続き、昭和 30 年代に第 22 号泉まで、続く昭和 40 年代前半にさらに３本の掘削を行っている。昭和 31（1956）年には分湯所も完成、以降、昭和 30 年代は道後温泉の旅館の内湯化が進んでいくことになる（道後地区旅館 74 軒のうち、60 軒に温泉が引かれた[494]）。また、松山空港も開設された（もとは昭和 16（1941）年に作られた海軍の飛行場で、米軍の接収と返還を受けて昭和 35（1960）年に民間空港となった。大型ジェット機が離発着する空港になったのは昭和 47（1972）年）[495]。これに伴い神の湯、霊の湯を含む道後温泉の共同浴場の入客数は、昭和 38（1963）年の 392 万人をピークに、急激に減っていき、昭和 54（1979）年には新温泉の閉業に至った[496]（養生湯は、昭和 29（1954）年、神の湯の女子浴室として合体している）。

---

490 伊予鉄道城南線については松山市史編集委員会「松山市史　第４巻」松山市　平成７年５月を参照。

491 英米軍の進駐から南海大地震、新温泉については、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

492 バス（伊予鉄）、海上交通については松山市史編集委員会「松山市史　第４巻」松山市　平成７年５月を参照。

493 この段落と次の段落は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

494 旅館軒数については松山市史編集委員会「松山市史　第４巻」松山市　平成７年５月を参照。

495 空港開設については愛媛県史編さん委員会「愛媛県史　社会経済３　商工」愛媛県　昭和 61 年３月を参照。

496 共同浴場の浴客数の推移については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻３号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

道後温泉を管理していた財産区では、世のヘルスセンター・ブームにあやかり、昭和 39(1964)年、鷺の湯をなくし、その跡地に地上４階、地下１階の温泉センターを新築している。これは、広大な温水プール、大浴場、家族風呂に加え、大広間と演芸場、さらに屋上には遊園地があるという総合レジャー施設であった。しかし、客入りがよかったのは当初だけで、昭和 41（1966）年には経営破綻状態となり、他の共同浴場施設、温泉権自体とともに、財産区から松山市へと譲渡された。市に経営が移ってもセンターの再興はならず、昭和 44（1969）年には民間のホテルの手に渡った（その後廃業）。

温泉センターの失敗はあったものの、昭和 30～40 年代に入ると、道後温泉は内湯景気に沸き、宿泊客数は右肩上がりとなった。実際の数値をみると昭和 42（1967）年に 795,000 人であったのが、ピークであった昭和 48（1973）年には 1,245,000 人にまで達している[497]。一方、ピーク時の昭和 36（1961）年、年間 400 万人近くにまで達していた共同浴場の入客数は 100 万人台にまで落ち込んだ。道後温泉旅館組合所属の旅館数と収容人数をみると、昭和 31(1956)年 62 軒、収容可能客数 2,003 人であったものが、20 年後の昭和 51(1976)年には 84 軒 10,980 人にまで達しており、この間、内湯化とともに急激な施設の大規模化が進んでいたことがわかる。立地も、内湯化までは道後温泉本館周辺に集中していたのが、本館北方の山手の高台や平地の南街方面に広がった（かつての旅館は、今は土産物屋などになっている）。また、交通機関についても、大型バスの乗り入れなどの強化が進んだ[498]。

宿泊客数がピークであった昭和 48（1973）に起こったオイルショックを契機に、国内観光市場は冷え込み、また、質的にも、団体旅行から個人・家族旅行の時代へと転換していく。この結果、道後温泉の宿泊客数は減少、昭和 50（1975）年に 903,000 人と 100 万人の大台を割ると、その後は、昭和 63（1988）年に瀬戸大橋ができて 1,388,000 人を達成するまで、漸減を続けることになった[499]。宿泊施設の動向をみると、かつてお遍路さん相手に商売をしていた小規模な旅館が、1970 年代・80 年代を通じて大幅に減少しており、道後は大規模宿泊施設中心の観光地へと変貌していることがわかる。また、以前の松ヶ枝遊郭は、昭和 32（1957）年の売春防止法施行とともに衰退、1970 年代にはバーやスナックが林立するようになり、「ネオン坂」と呼ばれるようになっていた[500]。

＜高度経済成長期終焉後＞

高度経済成長期終焉後の行き詰まりを脱すべく、1980 年代から、道後温泉では、その長い

---

497 宿泊客数については梶原正秀「研究報告 1『道後温泉の現状と課題』」広島大学大学院社会科学研究科附属地域経済システム研究センター　第９回　研究集会報告書「地域の歴史・文化と観光」　平成８年９月を参照。

498 共同浴場、旅館数、旅館の立地、交通機関については、愛媛県史編さん委員会「愛媛県史　地誌Ⅱ（中予）」愛媛県　昭和 59 年３月を参照。

499 以下２段落は、梶原正秀「研究報告 1『道後温泉の現状と課題』」広島大学大学院社会科学研究科附属地域経済システム研究センター　第９回　研究集会報告書「地域の歴・文化と観光」　平成８年９月を参照。

500 小規模旅館の減少やネオン坂については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻 3 号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

歴史を活かしたまちづくりを展開してきた。昭和 56（1981）年には、新温泉としらさぎの湯の跡地に、市立子規記念博物館が開館、昭和 58（1983）年には「道後温泉地域活性化協議会」が作られ、昭和 62（1987）年にかけて、市との協力の下、街路灯の設置や湯神社周辺、道後駅、道後駅前などの景観整備を行っている。また、昭和 59（1984）年には椿の湯が改築された。

上記の動きが出てきた背景には、江戸時代の湯之町の組頭や明治の原泉社に端を発する道後ならではの地域のまとまりがある。大手の旅館を主体とした地域のまとまりは、財産区が昭和 41（1966）年に廃止された後も決してなくなったわけではなく、強い影響力と市との連携体制を維持し続けていた。



子規記念博物館。しらさぎの湯の跡地、道後公園の横に立地している。文学館としては日本有数の規模である。



道後公園。中世まで道後を支配した河野氏の居城、湯築城跡。国の史跡に指定されている。

結果、昭和 63（1988）年に一旦過去最高の宿泊客数を達成することに成功した。しかし、この集客は、道後そのものの力というより、瀬戸大橋の開通という外部環境の変化による部分の方が大きかった（当時、南紀白浜など、京阪神圏からの時間距離が縮められなかった温泉地に対し、道後は、瀬戸大橋で比較優位を得ることができた）[501]。そのため、その後、道後温泉の宿泊客数は再び低下、平成６（1994）年には 100 万人台に落ち込む。平成 11（2003）年には「しまなみ海道」の開通により再び 130 万人台を回復するが、その勢いは続かず、以降右肩下がりを続け、新型コロナウイルス感染症が蔓延する直前、令和元（2019）年には、762,606 人と、昭和 42（1967）年の数値を割り込むまでになっている[502]。旅館の数も平成 21（2013）年には 33 軒と平成３（1991）年の 68 軒から半減、ネオン坂のバーやスナックも殆どなくなり、駐車場に変わってしまった[503]（令和５（2023）年段階では旅館数はさらに１軒減って 32 軒）。

退潮の大きな要因は、団体旅行から個人旅行へ、画一的な快適性からそれぞれの地域ごと

501 地元のまとまりの強さと瀬戸大橋の開通の影響の大きさについては現地調査ヒアリングを参照。

502 この段落の宿泊客数は、松山市ホームページ「松山市観光客推定表」
https://www.city.matsuyama.ehime.jp/shisei/keikaku/kanko/suitei.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）参照。

503 旅館数の減少やネオン坂の衰退については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻 3 号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

の個性へ、という大きな流れに道後が十分対応できていなかったことである。この認識を受け、平成４（1992）年には、「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会」が、道後温泉旅館協同組合、道後商店街振興組合に加え、市内の個人・企業・金融機関、町内会、愛媛大学・松山大学の学識経験者などを集めて発足している。同協議会の目的は、「日本最古の歴史、豊かな伝統・文化資源を活かしながら、もう一度百年先を見据え、観光と生活環境の調和のとれた、地元の人が誇りを持てる湯の街情緒豊かで魅力ある都市型温泉郷づくりを推進する」ことにあり、これに沿ってビジョンの取りまとめ（平成６（1992）年、平成 14（2002）年、平成 18（2006）年、令和６（2024）年の４回）を行って、地元側から道後観光の将来像を提示、市を巻き込んだ上で、官民協働での事業展開を 30 年以上に亘って継続している[504]。

主な実績としては、平成 13（2001）年の「坊っちゃん列車」運行（かつての蒸気機関車のレプリカを伊予鉄道で運行）や足湯の開始（各旅館に随時拡大）、平成 18（2006）年の道後温泉歴史漂う景観まちづくり宣言 『道後百年の景』の策定とそれに伴う「ファサード整備協定書（街路の旅館などの全面を歴史的な景観にあうものにする）」、「景観まちづくりデザインガイドライン（屋外広告物の自主撤去など）」の策定、平成 19（2007）年の道後温泉本館周辺整備(道路付替え、東屋ほか)の完成、平成 21（2009）年の「ファサード整備事業」の完了（対象 49 物件のうち 39 物件で実施）、平成 25（2013）年の道後温泉駅～旅館街主要部の県道沿線電線類の地中化完了などがある。いずれも、市との連携は勿論、外部資本を含む地元の事業者の協力なくしてはできない事業であるが、推進協議会は「説得・納得・道徳」という方針の下、粘り強く活動を継続して実現した。結果、道後温泉本館に続く商店街（道後ハイカラ通り）には、派手な看板も、調和を乱すファサードの色使いもなく（コンビニの色も茶系に統一されている）、商店側前の坊っちゃんからくり時計（平成６（1994）年に道後温泉本館百周年を記念して設置）から道後温泉本館に至るまで、歴史的な情緒のある街の佇まいを実現している。結果、道後温泉本館周辺地区で、平成 26（2014）年には国土交通省都市景観大賞「都市空間部門」優秀賞を、平成 28（2016）年には国連 HABITAT アジア都市景観賞を受賞するに至った。また道後温泉本館は、ミシュラン・ガイドブックで三つ星評価も受けている。



ハイカラ通り。左に見えるキャラクターグッズのチェーン店もカラーコーディネイトされて目立たない。



坊っちゃんからくり時計。時間になると坊っちゃんの登場人物がでてくる。

504 この段落以降は推進協議会の「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会 31 年の歩み(抄)」令和６年４月、「道後温泉 2050 ビジョン」令和６年３月、及び現地調査ヒアリングを参照。

この中で一つの画期であったのが、平成 29（2017）年の新たな共同浴場「道後温泉別館 飛鳥乃湯泉」新築オープン（飛鳥時代をイメージした湯屋）である。道後温泉本館の改修がまったなしになった中、推進協議会では、「第三の湯」が必須となることを提言、また、女性、飛鳥時代をモチーフとした改修案を市側に提示した。これにより、飛鳥乃湯泉、平成 29（2017）年に改修された椿の湯、そして令和６年改修完了の道後温泉本館からなる道後の街の観光集客のコアが成立することになった。伊予鉄道城南線（路面鉄道）の道後温泉駅で降り、坊っちゃん列車を左手に、坊っちゃんからくり時計を右手に見ながら道後ハイカラ通りを経て、椿湯・飛鳥乃湯泉に至り、道後温泉本館に向かう。その後は、本館裏の冠山にある湯神社や平成 31（2019）年に出来た空の散歩道（足湯）、建造物全体が重要文化財の伊佐爾波神社、上人坂と一遍上人で有名な宝厳寺、子規記念博物館のある道後公園（中世まで道後を支配していた河野氏の湯築城跡）などを散策してまた駅に戻ってくる。古代、中世から江戸、明治、大正と道後温泉の歴史を体感できる回遊ルートが、道後温泉本館を基軸に、成立することになったのである。

回遊性の向上については、平成 26（2014）年から「最古にして、最先端。温泉アートエンタテイメント。」をテーマに、道後温泉本館をはじめとした温泉街の街並みを、蜷川実花や山口晃などのコンテンポラリー・アーティストとともに、アートで飾るイベントも市と共同で開始している。また、一遍上人と宝厳寺・上人坂の PR、圓満寺の開運アイテム「むすび」の作成など、歴史を用いた回遊のプロモートも実施されている。



上人坂の上、宝厳寺にある一遍上人のミニ美術館



園満寺に供えて開運を祈るグッズ「むすび」

同時に旅館側も努力を重ねている。瀬戸大橋開通などで一息つくことができた道後温泉では、事業者側に蓄積が残っており、新型コロナウイルス感染症蔓延前に大幅リニューアルをした施設が多い（平成 30（2018）年から令和２年にかけて５軒）。その際のポイントは、他の施設と同じものを作らないことで、ホテルを高度経済成長期の近代的なものから能楽堂を

備えた和のテイストを大きく取り入れたものにしたところもあり、完全にインバウンド対応に振ったところ、部屋に露天風呂がついた超高級路線にしたところ、逆に一泊１万円程度で泊まれるビジネスホテル風にしたところもあった。多様なニーズを取り込めるよう宿泊施設も進化していっているのである。昭和 40 年代までに強固に確立した一泊二食付きのあり方についても、これからのインバウンド時代には相応しくないということで固執はしておらず、泊食分離の動きも進んでいる。

以上の活動の結果、道後温泉ブランドの再構築が次第に進み、新型コロナウイルス感染症の影響がまだ残る令和４（2022）年の観光入込数は、761,914 人と前年の 434,442 人からＶ字回復、新型コロナウイルス感染症蔓延前の令和元（2019）年の 731,258 人を上回った。ハイカラ通りの商店の売上もよく、日販 400 万円を達成している店舗もある。

ただし、推進協議会では、以前のような年間 100 万人越えの大規模集客を目指しているわけではない。規模的には年間 80 万人を維持したまま、少子高齢化が著しく進む国内の現状を踏まえ、2050 年までにインバウンド比率を 50%にまで上げていこうというのが、「道後温泉 2050 ビジョン」で掲げられた目標である。このためには、道後温泉のブランドをさらに進化させ、海外にも通用するものにしていく必要がある。

これまでの道後の最大の売りは、夏目漱石の「坊っちゃん」であり、マドンナであった。飽きられたと思っても、その度に映画やドラマになり、道後温泉の認知拡大に繋がっていっていた（映画は令和６（2024）年までに６本製作されており、最後は昭和 52（1977）年。ドラマは 15 本で、最後は平成 28（2016）年）。しかし、外国人には、坊っちゃんも、マドンナも通用しない。これを踏まえ、同ビジョンでは、道後の歴史・文化を回遊を通じて伝えられるまちづくりの推進を提言しており、その拠点施設として「第四の外湯」や「道後温泉歴史ミュージアム」の整備、それによる歴史文化のコリドール（回廊）づくりを掲げている。

道後温泉の源泉[505]

道後温泉の源泉は、火山性ではなく、断層によるもので、新生代第三紀の初めに湧き出た花崗閃緑岩の割れ目から湧出しているアルカリ性単純泉である。地下の割れ目は３つ確認されており、現状の源泉はいずれもその割れ目に位置する。割れ目からの湧出のため、地震の影響を受けやすく、慶長 19（1614）年の地震では復旧に 68 日、嘉永７（1854）年の地震では復旧に 105 日、昭和２（1946）年の南海地震では完全復旧に３ヶ月を要した[506]。

道後では、先に述べたように、古代より利用されていたと考えられているそもそもの源泉（１号源泉）は既に枯渇しており、戦前より新源泉の掘削が進められてきた。最後に掘削された源泉は、平成 25（2012）年の第 29 号源泉である。道後温泉の源泉は全て松山市市有であり、自家源泉はない。また、現在稼働している源泉は 18 カ所となっている（２号源泉は掘削当初から湯量の減少傾向があり、４号源泉は３号源泉に影響があるため現在は使用されていない。10、16、18、20、22、23、27 号源泉については、掘削はされたものの、そもそも利用されていない[507]）。泉質は全てアルカリ性単純泉であり、混合されて利用されている。

以下、現在稼働している各源泉の湧出温度及び湧出量を示す。全て掘削・動力泉である。

＜道後温泉の源泉＞

源泉名	湧出温度	湧出量	備考
第 3 号源泉	45.3 度	133.3 リットル／分	
第 5 号源泉	40.1 度	46.7 リットル／分	
第 6 号源泉	48.6 度	100.0 リットル／分	
第 7 号源泉	42.8 度	91.7 リットル／分	
第 8 号源泉	50.0 度	133.3 リットル／分	
第 9 号源泉	47.0 度	133.3 リットル／分	
第 11 号源泉	46.1 度	55.0 リットル／分	
第 13 号源泉	46.0 度	100.0 リットル／分	
第 14 号源泉	49.5 度	83.3 リットル／分	
第 15 号源泉	28.8 度	83.3 リットル／分	
第 17 号源泉	30.5 度	73.3 リットル／分	
第 19 号源泉	23.6 度	40.0 リットル／分	
第 21 号源泉	20.9 度	30.0 リットル／分	
第 24 号源泉	55.0 度	316.7 リットル／分	
第 25 号源泉	50.1 度	175.0 リットル／分	
第 26 号源泉	52.0 度	115.0 リットル／分	
第 28 号源泉	49.8 度	83.3 リットル／分	揚湯した源泉は第２６号源泉を経由して第４分湯場に送られている。
第 29 号源泉	24.9 度	91.7 リットル／分	冷温泉として開発された常時揚湯源泉。

505 この項は、別途脚註が付いている段落を除き、松山市 産業経済部 道後温泉事務所「松山市道後温泉事業経営戦略」令和 3 年 3 月を参照（源泉の状況については変化がないことを現地調査ヒアリングで確認）。

506 この段落は松山市史編集委員会「松山市史　第１巻」松山市　平成４年 10 月を参照。

507 源泉の非使用理由については、芝原貴史・羽藤英二「道後地区に於ける都市構造と建築組成の更新が都市組織の変容に与える影響」日本都市計画学会都市計画論文集　第 50 巻 3 号　平成 27 年　P531-P538 を参照。

道後温泉の共同浴場

＜道後温泉本館＞

道後温泉本館は、先に述べたように、平成６（1994）年に国の重要文化財に指定された建造物である。うち神の湯本館は明治 27（1894）年、又新殿・霊の湯棟は明治 32（1899）年、南館と玄関棟は大正 13（1924）年の建築である[508]。

道後温泉の神の湯本館を造った棟梁坂本又八郎は、松平定知の松山転封に付き従った世襲棟梁の十代目に当たる。神の湯本館は、藩政時代の一の湯、二の湯、三の湯の構造を引き継ぎ３室に区画され、それぞれに唐破風が付いた入り口が設けられている。また、入り口や窓には当時まだ極めて珍しかった舶来品のギヤマンを利用していた。三階建ての屋根の上には白鷺伝説をモチーフとした振鷺閣（しんろかく）という小塔が設けられている。又八郎は松山城の居館や松山藩の江戸屋敷などを手がけてきた棟梁であり、神の湯本館の建築には、そうした和風建築の技術の粋を基盤に洋風の工夫が随所に取り入れられている。同じく又八郎設計になる木造二階の又新殿（ゆうしんでん）は、お召し湯として造られたもので、桃山時代の建築様式を模している[509]。

入浴施設としては、神の湯として男女各１室、霊の湯として男女各１室ずつあり、皇室専用の風呂として又新殿がある。ただし、又新殿については、皇室のお召しが近年ないため、昭和 27（1952）年を最後に利用されていない。



道後温泉本館正面
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉本館裏側。真ん中に振鷺閣が見える。



神の湯／男子。湯釜の形は江戸時代から継承されている。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



神の湯２階休憩室。３階には豪華な個室休憩室もある。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



木製暖簾。それまでの和風建築の粋を受け継いでいる。
※道後温泉公式サイト　PR 素材

508 文化庁国指定文化財等データベース https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/searchlist（令和６年 12 月 13 日確認）。

509 道後温泉本館の建築については道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。



江戸時代からあった源泉の跡地。神の湯男子湯の一角にある。上部に銘板がついている。
※道後温泉公式サイト　PR 素材／道後温泉事務所提供資料



皇室お召し専用の又新殿の内部。見学ができるようになっている。
※道後温泉公式サイト　PR 素材

＜椿の湯＞

先に触れたように、昭和 28（1953）年に松山市で開かれた第８回国体の際に選手たちが利用する共同浴場として整備され、その後、市民利用を主体とした施設として利用されてきた。昭和 59（1984）年に改築され、さらに平成 29（2017）年にリニューアルオープンして、蔵屋敷風の歴史情緒ある施設に生まれ変わった（ただし、現在道後周辺に住む住民で風呂がない家は殆どなく、住民利用用途は限られる）。

男女それぞれの大浴場がある。



椿の湯の入り口
※道後温泉公式サイト　PR 素材



椿の湯の大浴場（女子）
※道後温泉公式サイト　PR 素材

＜道後温泉別館 飛鳥乃湯泉＞

平成 29（2017）年開設の本館、椿の湯に次ぐ第三の共同浴場である。道後温泉の修復が待ったなしになる中、新たな共同浴場を造ることが必要ということで建設された。建設のコンセプトは「道後温泉誇れるまちづくり推進協議会」が主導し、神の湯に対して女性をイメージしたもの、歴史を感じさせるものにしようと議論を重ねた末、斉明天皇の行幸を彷彿とさせる飛鳥時代をモチーフにしたものとなった。砥部焼（とべやき）、伊予絣（いよかすり）などの愛媛の伝統を踏まえた作品による演出がなされている。

一階に露天付きの大浴場（男女各一つ）があり、二階に大広間の休憩室と又新殿を模した特別浴室、個室休憩室５室がある。



道後温泉別館　飛鳥乃温泉
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉別館　飛鳥乃温泉の男子浴場。砥部焼が使われている。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉別館　飛鳥乃温泉の女子湯露天。愛媛の檜のパネルがある。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉別館　飛鳥乃温泉の休憩室白鷺。伊予水引のパネルがある。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉別館　飛鳥乃温泉の休憩室椿。今治タオルのパネルがある。
※道後温泉公式サイト　PR 素材



道後温泉別館　飛鳥乃温泉の特別浴室。又新殿を模す。
※道後温泉公式サイト　PR 素材

道後温泉の湯の管理の技術[510]

道後温泉の源泉 18 本は、集中管理され、混合泉として共同浴場３カ所と内湯施設 37 軒に配湯されている。このため、第１、第２、第４、第５の４つの分湯場が設置・運営されている（かつてあった第３分湯場は第１分湯場に統合されている）。第５を除く３つの分湯場は相互に温泉をやりとりしており、３分湯場合わせて、全体の湯量や泉温の異なる各源泉の混合による温度調整に関わっている。

アルカリ性単純泉である道後の温泉は、スケールが殆どなく、スケールを取るための特別な清掃は必要とされていない。また、比較的高温の源泉と低温の源泉があり、これを混合させて 41～42 度程度の湯温として共同浴場に配湯しており、加水や加温は行われていない。

各分湯場の概要は下記の通りである。

＜第１分湯場＞

道後温泉北西にある松山市の祝谷地区にある４つの源泉（第 17、19、21、29 号）と第１分湯場敷地内の第７号、第 13 号、道後喜多町（道後温泉地区の西側）にある松風寺の西隣の３つの源泉（第 14、15、24 号）、第４分湯場を経由する６つの源泉（第６、８、９、25、26、28 号）を管理する分湯場で、椿の湯の近くに立地する。椿の湯、別館 飛鳥乃湯泉及び旅館の内湯へ配湯している。

飛鳥乃湯泉への配湯は、屋上に設置の源泉槽から高温泉と冷温泉が直接送り出され、飛鳥乃湯泉地下の設備機械室で混合し温度・湯量調整と滅菌が行われている。椿の湯への配湯は、分湯場１階の混合槽で温度調整がなされ、椿の湯にある機械室で滅菌と湯量調整を行っている。

＜第２分湯場＞

道後温泉本館の東にある丘の上、湯神社の隣に立地している。道後温泉本館、空の散歩道の足湯、放生園の足湯、旅館の内湯への配湯を担っている。直接流入する源泉は第３号、第５号の２本であるが、第１分湯場と第４分湯場から中継されており、第 11 号を除く全ての源泉が集約されている。源泉を管理する汽缶士の詰め所も設置されている。

源泉から流れてきた湯は、高温泉については枡で混合され、地下の温水槽に流入する（温水槽は北と南の２つ）。低温の源泉については、別途、地下の冷温槽に入る。源泉からの配管はステンレス製で、分湯場の中ではむき出しだが、外部においては保温材でカバーされ、湯温が低下しないようになっている。また一部白ガス管（亜鉛メッキ鋼管）が残っているところ、HT 塩ビ管を使っているところもある。集まってきた源泉（他の分湯場経由のものを含む）については、利用先に配湯されるだけでなく、必要に応じて他の分湯場に戻される（第１分湯

510 この項は、現地調査及び道後温泉事務所「道後温泉源泉井戸及び配湯施設等の改修実施計画（令和 2 年度～13 年度）」を参照。

場とこの第２分湯場では温泉の行き来がある。一方、第４からは第１に来るだけで、第２からの返りはない。第５へは第２分湯場から流すだけである。第１に戻す温泉については「返り」の表示が配管に付けられている）。



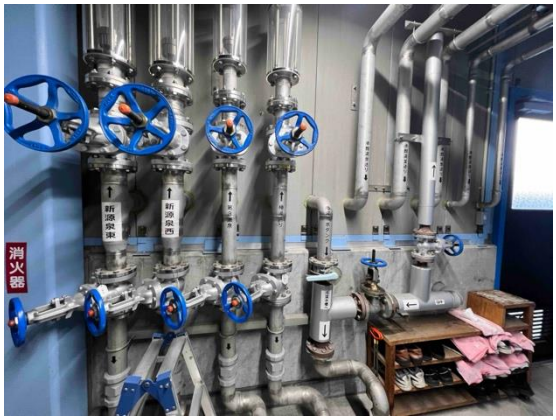
第２分湯場の建て屋。「空の散歩道」（足湯付きの展望路）のすぐ近くにある。


第２分湯場の内部。手前に混合槽が、奥に本館への配湯のための仕掛けなどが並んでいる。


各源泉及び他の分湯場から来た源泉の配管。付いているメーターは温度計。


源泉の入る枡。高温泉の配管のみここの枡で混合される。冷温泉はここでは混合されない。


源泉が混合される枡からは、地下の二つの温水槽（北と南）に流下している。



画面左に並ぶのが返り用の配管。真ん中に中途からあるのが第１からの冷温槽への配管。右は本館への配管。

道後温泉本館の「神の湯」「霊の湯」（それぞれ男女）については第２分湯場で高温と低温の温泉を混合した上で、分湯し、出荷（配湯）をしている。混合については地上部にある大きな本館向けの温泉の混合用のタンクで実施されている。汽缶士の詰め所から、地下の高温泉の貯湯槽（温水槽）と混合槽の湯温をそれぞれモニターできるようになっており、それをみて高温泉と低温泉の混合の割合を調整し、混合した段階での湯温（出荷時の湯温）を目標に合わせる。出荷後、本館の浴場に着くまでは若干（１～２度）の温度低下があるため、出荷時の湯温は、浴槽の適温よりやや高めとなっている（令和６年 12 月の調査当日は 44.3 度。温水槽は 47.0 度と 47.7 度であった）。地下の温水槽、低温槽からはポンプで混合槽まで揚程されている。出荷時の湯温については季節によって調整している。

各浴場への配湯の量は、湯量計で確認し、送る量を調整する。また、この段階で塩素を加えて殺菌処理を行っている。塩素は塩素剤の自動投入ポンプユニットからタイマー制御で自動的に注入される。DPD 検査は各浴槽で実施しており、0.4 から 0.9 の濃度を保っていることを常に確認している。大量に入浴した際には塩素の濃度が下がるが、今まで 0.4 以下になって塩素投入量を調整することが必要になったことはない（公衆浴場法施行細則第５条の３により、浴槽水の残留塩素濃度は 0.4mg/リットル以上を保つ必要がある）。

第２分湯場は冠山（かんむりやま）という道後温泉本館を望む小高い丘の上にある。この高度差を用いて、分湯場から道後温泉本館までは自然流下で配湯がなされている。

先に述べたように、道後温泉では泉質からスケールが溜まることはなく、日常的な配管やタンクの清掃は行われていないが、年に１回、配湯を止めて、各槽を清掃している。この際もスケールなどが沈殿・蓄積していることはない。



本館に送る湯の混合槽。地下から高温と低温の源泉をポンプで上げ、混合。



下に見える太い管が左記混合槽から出ているもの。そこから透明の管（湯量計）を経由して各風呂に分湯している。



左の白いタンクに入っている塩素を左下にあるオレンジの自動注入器で一定時間ごとに各湯への配湯に注入する。



本館の各浴場にいく管は一回上げられてから建て屋の外にいく。



上の白い建て屋が第２分湯場。右側の崖にへばりついている黒い保護板の下に配管があり、自然流下で、本館（写真左下の方向にある）に向かう。

＜第４分湯場＞

第１分湯場、第２分湯場へ源泉を送る中継地としての機能に加え、２軒の旅館の内湯へ配湯している。分湯場の敷地内に第６、８、９、25 号の４源泉があり、敷地外の第 26 号、第 28 号を含めた６源泉が集まっている。道後温泉が所管する源泉のなかでも、特に高い温度の源泉が集まる、１日に使用する高温源泉の半量を担う主力分湯場となっている。

また、分湯場の中が見えるようにするとともに説明掲示版を付け、観光施設としての性格も持たせている。



第４分湯場の外観。和風の建て屋の中に掲示板も置かれており、観光拠点にもなっている。



第４分湯場の源泉と源泉が混合される枡。ガラスを通して誰でも見学することが可能。



横からみたところ。混合された源泉は後ろの壁から外に出て行く。



敷地内にある８号源泉。マンホールの右上に源泉名が記載されている。

＜第５分湯場＞

史跡である道後公園内に立地している。第 11 号源泉と第２分湯場から供給を受けて旅館の内湯６カ所に配湯している。唯一、歩道からは換気塔が見えるのみの地下構造となっている。

＜寺社と祭礼＞[511]

温泉にまつわる神社としてはまず湯神社（ゆじんじゃ）がある。松山市道後湯之町にある湯神社は、10 世紀までに成立した延喜式神名帳に名の見える式内社で、祭神は大己貴命と少彦名命である。建立当時は別場所（鷺谷）にあったが、一時衰微し、同じ式内社であった冠山の奇稲田姫（くしなだひめ）を祭神とする出雲岡神社（いずものおかじんじゃ）に合祀された。その後、今度は出雲岡神社が衰微したため、本殿が湯神社となり、出雲岡神社は境内の小社に遷座したという謂れがある。

湯神社の歴史としては、宝永４（1707）年に起こった地震で道後温泉の湧出が止まった際の逸話が有名である。この時、湯神社と伊佐爾波神社で湯の再開を祈念した祈願が行われた。翌５年、その祈願が実ったか湯が再開し、道後湯之町町民は湯神社に松桜など千本を植えたという。これ以降、少なくとも天保９（1838）年まで、湯祈祷が継続的に行われていた。なお、松山市桜谷町にある伊佐爾波（いさにわ）神社も、湯神社と同様、延喜式内社で、祭神は武家の神、八幡神である。湯築城の際に現在の地（湯築城跡の北東）に遷座し、城の鎮守とされていた。湯築城廃城後、寛永 12（1635）年、松平藩主により再興されている。なお、道後温泉の湯は、嘉永７（1854）年にも止まり、この時も湯神社、伊佐爾波神社の両社へ祈祷が行われ、翌安政２（1855）年に湯が再開した。



湯神社外観



湯神社内部







伊佐爾波神社の外観、内部と、道後の街をまっすぐ貫き長い石段を登る参道。寺社の縁起では神功皇后・仲哀天皇ご来湯の際の行宮後に建てられたのが最初であるという。昭和 31（1956）年本殿が国指定重要文化財、昭和 42（1967）年全体が追加指定されている。

511 この項は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。別途典拠はある場合はその カ所に脚註を付けた。

湯神社にまつわる道後温泉の大きな祭礼行事としては、毎年３月中下旬に行われている道後温泉祭がある。この起源は、宝永４（1707）年、安政２（1855）年、昭和 21（1946）年の地震の際に道後温泉の湯が止まり、その再興を願って行われた湯祈祷にある。湯祈祷は、安政２年以来、毎年実施されてきており、道後温泉本館の玉の石で神輿の渡御や神楽などを舞い、温泉に感謝を捧げていた。大正から戦前にかけては規模も大きくなり極めて盛んであったという。

戦後は、南海地震の後の温泉湧出の再開を祝って、昭和 22（1947）年、湯祈祷と祝賀行事が行われたのが始まりであり、昭和 25（1950）年、昭和天皇の愛媛ご来県と道後へのご入湯があったこともあって「温泉祭」として例年の行事となった。昭和 31（1956）年からは、内湯化を祝って、各旅館が内湯の湯を竹筒に入れて湯神社に捧げる献湯祭も始まっている。現在は、道後温泉本館北側「玉の石」前での湯祈祷と祝い餅まき、湯神社での献湯祭などの祭事を中心に、道後温泉おどり、和太鼓や郷土芸能の大会、楽市楽座（屋台）、その他ブラスバンドやサンバなどが実施されている[512]。

また、嘉永７（1854）年に湯が止まり、翌安政２（1855）年に再湧出したことについては、圓満寺（松山市道後湯月町）にも縁起がある。同寺には、行基作という伝承がある地蔵菩薩像があり、この地蔵に祈願したところ再び湯が出るようになったという[513]。



湯の大地蔵。たくさんの「むすび」が奉納されている。



圓満寺本堂

道後温泉の東方、松山市石手２丁目にある熊野山石手寺は、本尊が薬師如来で、中世、河野家支配の時代、道後温泉の運営に関わっていた温泉にゆかりの深い寺院である。「今昔物語集」に触れられており、平安後期には既に著名であったと思われる。四国遍路の第 51 番札所である。寺伝によれば、開山は神亀５（728）年、当初は安養寺といった。石手寺になった縁

512 現在の祭礼の様子は松山市ホームページ「道後温泉」https://www.city.matsuyama.ehime.jp/kanko/kankoguide/kankomeisho/dogoonsen/index.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

513 圓満寺については松山市公式観光 WEB サイト「圓満寺」https://matsuyama-sightseeing.com/spot/54-2/（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

起としては次の伝承が伝えられている。天長年間（824～833）年間、地元の富豪、衛門三郎が弘法大師空海に無礼を働いたところ、子息８人が次々と亡くなるという仏罰を受けた。深く悔いた衛門三郎はその後仏道に帰依して亡くなった。その後、河野家に子が生まれた時、左手に衛門三郎と書かれた石を持っているという奇瑞（きずい）があった。人々はこれをもって熊野権現の申し子、衛門三郎の生まれ変わりと感激し、寛平３（891）年、安養寺を再建した時に熊野十二社権現を勧請するとともに、その石を玉の石として宝物殿に納め、寺院の名を熊野山石手寺に改めたという。鎌倉時代後半から室町時代にかけて河野家により多くの堂宇が建てられた。鎌倉時代後期建立の仁王門が国宝、同時代の本堂、三重塔、五輪塔、訶梨帝母（かりていも）天堂が国重要文化財、室町時代前期建立の護摩堂、鐘楼が国重要文化財に指定されている。

石手寺は、松山七カ所薬師のひとつとしても知られる。他の６寺は、松山市浄瑠璃町の医王山浄瑠璃寺（46 番札所／伝・行基開山）と熊野山八坂寺（47 番札所／伝・役小角開山）、松山市高井町の清滝山西林寺（48 番札所／伝・行基開山）、松山市畑寺町の東山繁多寺（50 番札所／伝・行基開山）、松山市谷町の室岡山蓮華寺（番外札所／伝・行基開山）、松山市和気町の須賀山圓明寺（53 番札所／伝・行基開山）である。


石手寺仁王門（国宝）

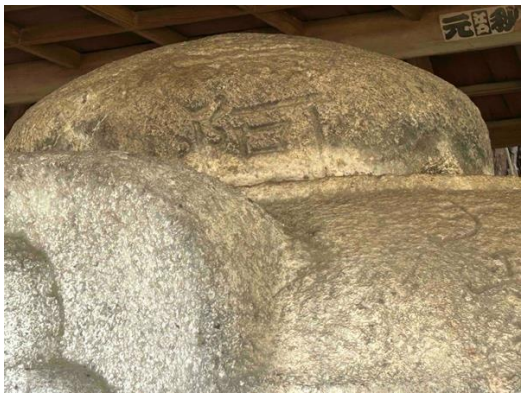

石手寺本堂（国重要文化財）

現在、道後温泉公園に湯釜薬師として鎮座している石製の湯釜は、道後温泉本館が出来る前、明治 27（1894）年まで浴槽内の湧出口に設置されていたもので、最上部の宝珠に、正応元（1288）年、一遍上人が南無阿弥陀仏の名号を書いたとされる。一遍上人は、伊予国出身で、河野家の係累と伝えられている。道後には、延応元（1239）年、一遍が生誕したという宝厳寺もあり、元弘４（1334）年、得能道綱（とくのうみちつな）（河野氏の一族であるが南朝側に付いた武将）によって「一遍上人御誕生旧跡碑」が建てられている（現在地に碑が移転したのは大正 15（1926）年）。また、湯釜本体には、湯築城にいた河野通直が、享禄４（1531）年、僧徳応の選した温泉記を刻することを命じている。湯釜には薬師如来の尊像も彫り込まれており、刻文の温泉記には、大己貴命と少彦名命に始まり、孝霊天皇、伊予親王、聖徳太子の名が見える。昭和 29（1954）年に愛媛県の文化財に指定されている[514]。

514 文化財指定については松山市史編集委員会「松山市史　第５巻」松山市　平成７年５月を参照。



湯釜薬師



一遍上人が彫ったとされる上部の名号

＜特産品＞

道後温泉の土産・特産品としては、先に触れたように、江戸期は道後もめん織物、刀の柄用の糸、道後諸白（清酒）、道後素麺、もぐさなどに加え、周辺の特産品が販売されていた。また、唐飴、道後まんじゅう、道後せんべい、桜ようかんなどの菓子類もあった[515]。

道後もめん織物とは、当時松山地方の特産品であった伊予縞（木綿の縞柄の織物）のことで、天正年間（1573～1592 年）に九州飫肥（宮崎）から伝わり、道後で売り出されたのが始まりであると言われている。そのため、道後縞とも呼ばれていた。その後、野間郡小部村（現：今治市）の人が、京都西陣地方の絹織に使われていた花機を取りよせ、それを改造して木綿用の高機を創作、大量生産に成功した。道後縞（伊予縞）の生産は、この発明により、文政元（1818）年の 900 反から文政 7（1824）年には 22,000 反にまで伸びている。その後、文様を織り上げる技術が発展、明治 25（1892）年を境に伊予縞より、伊予絣としての生産が中心となった[516]。

伊予絣は綿のもつ独特の柔らかさ、吸収性、通気性のよさから、農作業時の作業着として全国の農家に広まり、また、藍で染めることで布地が強くなるため、何回も洗濯に耐え、加えて藍特有の香りには虫喰いを防ぐ効果もあったため、作業着として重宝された。「井桁」や「十字」、「玉文様」、お城や椿など地域色のある「絵絣」など、手の込んだ絵模様など独特の柄があり、藍一色ではなく濃淡で絶妙な色彩を表現したり、白地の部分に赤や黄色など別の色を挿した色入りかすりも織られるなど、デザイン的にも優れていた。このため、戦前には大きく売上を伸ばし、明治 32（1899）年には全国の絣生産の 26.5%を占めていたという。昭和 50（1975）年、愛媛県伝統工芸品に指定されている[517]。現在、松山城ロープウェイ駅舎前の「Art Labo KASURI」（旧：伊予かすり会館）で、伊予絣の藍染め体験や姫だるま製作体験が

515 この段落ここまでは、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。

516 道後もめん織物、伊予絣の歴史については愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史　社会経済３　商工」愛媛県　昭和 61 年３月を参照。

517 伊予絣の詳細については NPO 法人日本伝統文化振興機構ホームページ「伝統工芸品　伊予かすり」 https://www.jtco.or.jp/japanese-crafts/?act=detail&id=252&p=2&c=16（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

できる[518]。姫だるまは松山の伝統的な郷土玩具で、オキャガリサンとも呼ばれ、神功皇后が仲哀天皇とともに九州に下られる際、伊予に入浴したことを縁起としたという伝承が残っている。古くは享保６（1721）年の記録がある[519]。ただし、現在絣の需要は低く、道後地域で多く売られているわけではない。

明治になると、湯桁飴（唐飴）、湯ざらし団子や坊っちゃん団子、湯ざらし艾、五色素麺、温泉石鹸、竹細工などが土産物として資料に見られるようになり、団子、竹細工が品目に出てくる。綿製品については湯染タオルなどが売られている。竹細工は松山藩に古くから伝えられた特産品で、道後の奥にある湯山で作られていた。もぐさについては、お遍路さんによる灸治療の普及が近世より四国各地で進んでおり、道後のもぐさもその一つとされている。天保４年（1833 年）の遍路記「四国順禮道中記録」の手扣（てひかえ）の末尾の土産一覧に、「大師御影」と並んで、「道後もぐさ」・「艾（もぐさ）」・「もくさ」が見られる[520]。

現在でも、道後では、五色そうめん、坊っちゃん団子をはじめとした多くの食品・菓子類、もぐさ、タオルなどの綿製品（現在は今治タオルが多い）などが販売されている。中でもスイーツ類が多く、特に有名なのは松山の一六タルトである。食では、宇和島の鯛飯が道後周辺で盛んになってきており、特色が出てきた。伝統的なものとしては明治 15（1882）年創業の玉泉堂が煎餅を販売している。竹細工も、道後温泉の外湯めぐりの際に手荷物を入れる「湯かご」として利用されており、近隣で製作された商品が土産物として販売されている。ただし、旅館で貸出をしている湯かごはベトナムに委託生産したものとなっている。いずれにせよ、道後温泉は、歴史的にも道後で作ったものだけを特産品としてきたわけではなく、周囲の産品を売る役周りであり、それは現在でも変わらない[521]。

このうち、五色そうめんについては道後素麺の老舗「五色そうめん株式会社」で由来が解説されている。寛永 12（1635）年、藩主松平定行の国替えに従って伊勢桑名から移り住んだ初代店主が松山で創業（現在の会社所在地は東温市）、五色となったのは、享保７年(1722 年)、椿神社（松山市の式内社、伊豫豆比古命神社の現地での通称）に参拝のおり、美しい五色の糸が下駄に絡みついたのを見た娘が八代目店主にそうめんの色付けを薦めたのがきっかけという。その後、松山藩主が八代将軍徳川吉宗に献上し、「格別上品至極」と賞賛され、名産となった[522]。また、「つぼや菓子舗」では、創業した明治 16（1883）年から、「湯晒団子」やお茶、煙草を商っており、小説「坊っちゃん」発表後に、漱石が口にしたという「湯晒団子」を

518 Art Labo KASURI ホームページ http://e-hime.jp/kasuri/（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

519 この段落の姫だるまから次の段落の竹細工までについて（現状の絣の売れ行きを除く）は、道後温泉編集委員会「道後温泉　増補版」松山市　昭和 57 年３月を参照。現状の売れ行きについては現地調査ヒアリング。

520 もぐさについては、愛媛県生涯学習センター「遍路のこころ」平成 14 年度を参照。

521 主な土産物については、現地調査及び道後温泉公式エリアガイド　https://www.dogo.or.jp（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

522 五色そうめんの由来については五色そうめん株式会社ホームページ「五色そうめんの歴史」https://goshiki-soumen.co.jp/history/（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

もとに３色の「坊っちゃん団子」を考案して発売している[523]。



ハイカラ通り最古の店舗。現在煎餅は予約販売。



坊っちゃん団子の「つぼや」。元は松ヶ枝町にあった。



夏目漱石が松ヶ枝遊郭の入り口にあった「つぼや」で食べた湯晒し団子。



「坊っちゃん」のヒット後に、「つぼや」が考案した坊っちゃん団子。

道後の芸能としては伊予節がある。現在、松山の花柳界の座敷唄となっている伊予節は、もとは伊勢神宮のある伊勢の古市辺りの花街でうたわれてきた「宮参り」という端唄が、全国に広まり、様々な替え歌が作られるうちに幕末にできたと考えられている。ただし、現在の、松山の名物名所を折り込んだ歌詞は明治時代以降のものである[524]。今でも松山市には芸者の検番があり、伝統的なお座敷体験を提供している[525]。道後でも、近年、御茶屋「華ひめ楼」がハイカラ通りから一本曲がった裏路地に、伝統的な建て屋を利用して、令和２（2020）年新たに開業、芸者の日舞や長唄・三味線やお座敷遊びを気軽に体験できるようになった。

また、永正９（1512）年に豊原統秋が編んだ雅楽書「體源抄（たいげんしょう）」に「伊予湯サウケイサイバラ（雑芸催馬楽）」として４首道後温泉についての催馬楽が掲載されている。そのうちの一首は、源氏物語でも言及されている「伊予の湯桁」の数を問うもので、歌の起源の古さを窺わせる。この歌については、昭和 48（1973）年、編曲され、楽譜化されている[526]。

---

523 坊っちゃん団子の由来については道後温泉の和菓子店「つぼや菓子舗」ホームページ　https://tsuboya-kashiho.com（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

524 伊予節については NHK アーカイブス「伊予節」https://www2.nhk.or.jp/archives/movies/?id=D0004380082_00000（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

525 検番については（一社）松山検番／NPO 法人松実会ホームページ https://geisha-matsuyama.jp（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

526 催馬楽については松山市史編集委員会「松山市史　第４巻」松山市　平成７年５月を参照。



お茶屋「華ひめ楼」。松ヶ枝遊郭も、ネオン坂もなくなった道後では、夜の楽しみの拡充が試みられている。



お茶屋の向かいには昔懐かしい射的の店もある。

飛鳥時代から続く道後温泉は、近世、松山藩の下で温泉地として整備され、共同浴場を中心とした宿屋街が確立した。かつてはお遍路さんや味噌桶湯治なども多かった道後であるが、明治半ばに道後湯之町が出来、初代町長の伊佐庭如矢が、地元の大手旅館業者とともに、路面電車の整備や道後温泉本館の改築（現在の重要文化財に指定されている建造物）など観光地としての近代化を本格的に始めると、急激にその客足を伸ばしていく。源泉の不足から内湯化がなかなか進まなかった道後であるが、それも積極的な新規源泉の掘削と集中管理システムの整備により乗り切り、昭和 30 年代からは内湯景気に沸いた。また、旅館街も、道後温泉本館を中心とした狭い地域（現在のハイカラ通り周辺）から北方の山手に大きく広がり、施設自体も大規模化、近代化した。

しかし、高度経済成長が終わり、バブル景気が崩壊すると、道後も、他の温泉地と同様、団体客の大量集客依存の後遺症に悩むことになる。この時、道後の強みとなったのが、伊佐庭如矢の時代と同様の大手旅館を中心とした地元のまとまりの強さであり、それを基盤とした官民一体での事業の実施力である。その力を結集し、道後では、本館を中心とした地域の歴史情緒を活かす施設整備、景観づくり、アート事業などのイベントを次々と行い、多くの賞を獲得する街並みづくりに成功した。

現在、道後は、外国人客比率 50%という次の目標に向けて歩み出している。その際のキーワードも、また、歴史と文化である。日本最古の温泉地が、その古さをもって、一歩先の未来に進んでいこうとしている。その動きの核として提言されているのが、「第４の外湯」づくりである。この実現には、観光面での様々な施策とともに、外湯の拡大を支える湯の管理の技術が必要となる。道後の未来も、また、湯の管理に支えられているのである。

（１４）杖立温泉

杖立(つえたて)温泉は、杖立川の川沿いに広がる温泉地で、熊本県阿蘇郡小国町と大分県日田市の境に立地し、杖立川によって北東側の「湯鶴(ゆづる)」地区と南西側の「杖立」地区に分かれている。高温の源泉から立ち上る湯けむりの風景と、蒸気を利用した独特の入浴法「蒸し湯」で知られている。

ここではそうした杖立温泉の特性と湯の管理の技術を概観していく。

杖立温泉の歴史

＜開湯伝説＞

杖立温泉には幾つもの開湯伝説がある。18 世紀後半、熊本藩校時習館(じしゅうかん)で教えた儒学者、藪孤山(やぶこざん)の「植杖温泉記」によれば、杖立の名は、足が悪く杖をついていた人が、湯治により足が治り、ついには持っていた杖を植えて去ったことから付いたという。また、この温泉記には、「神功皇后が応神天皇を産んだ際、産湯を求めて廷臣がこの地に来たところ童子に会い、川の源に霊場があってそこの水を使ったところ寿命が延びたという話を聞いた。それを探そうとしたところ白い猿が指をさしたので見つけることが出来た」、という開湯の伝承が記されている。応神天皇はその水を使った結果、百歳を超える寿命を手に入れた。また、その後の話として、宝亀２（771）年、光仁天皇が天下に温泉を求めた時、上記の伝承が奏上されたとある[527]。

寛政５（1793）年写しとの奥書がある「杖立湯胥」にも応神天皇と光仁天皇についてほぼ同じ伝承が載せられており、さらに、この故事を憚(はばか)り、杖立では最初の７日間は産湯に湯を使わないこと、また、斉明天皇の御代に疫病が流行った時、紫宸殿の庭に翁が来て、杖立の湯を使えば病が治ると告げたという話が追加されている[528]。

この他、史料不明であるが、弘法大師空海が杖立温泉に訪れて杖立を霊泉として讃えたこと、その際、持っていた杖を立てたところ、芽が出て、枝も出した。そこから杖立の名前ができたという謂れも伝えられている。なお、空海は唐から大同元（806）年に博多津に帰国した際、大同４（809）年まで太宰府に止められており、そのため九州一円には空海の伝承が広く残されている。

昭和 35（1960）年の杖立温泉観光協会の資料には、応神天皇の産湯について、童子を白髪の翁に、廷臣を武内宿禰(たけのうちのすくね)とした伝承が載る。この時発見した源泉が杖立川に面する竜頭窟の元湯である。元湯は岩湯であるが、そこに竹を挟むような溝が残っている。江戸前期に杖立温泉を訪れた貝原益軒によると、竹で仕切った上の湯が客用、下の湯が地元の人用として使用されたという[529]。

---

527 この段落は熊本県教育会阿蘇郡支会編纂「阿蘇郡誌」大正 15 年５月 20 日、昭和 61 年８月５日復刻、株式会社臨川書店を参照。

528 以下２段落は禿迷慮「小国郷史」昭和 35 年を参照。

529 杖立温泉現地調査による。

斉明天皇の謂れは同じであるが、光仁天皇の御代の話は、空海の逸話と合わさり、空海が龍頭山雲泉寺（うんせんじ）を建立し、医王の仏像（薬師如来）を自ら彫り、祀った。その時誓約の印として竹杖を建てたところ、そのまま根付き、逆さ杖となったという話となっている。この伝承にいう龍頭山雲泉寺が現在の杖立薬師堂である。弘法大師の謂れにある竹は、布袋竹（ほていちく）という種の竹で、根元のところに節が詰まっているため、切り出して根元を上に持つと杖にしやすい。この布袋竹は今でも杖立に少し残っている。また、大見貴命（おおなむちのみこと）が現れ、杖立川を挟んだ二つの湯脈の守護神となると言ったという伝承が追加されており、その奇瑞に感激した村人が建立したのが東林瑠璃堂（お薬師）、また大見貴命を祀ったのが湯大明神とされる。

伝承以外の史料としては、杖立温泉そのものではないが、杖立の白糸の滝について、遣唐使の乗船拒否の罪により隠岐に配流されていた小野篁（おののたかむら）が、承和７（840）年、配流を許された後、阿蘇神社に拝礼する途中詠んだとされる歌が残されている。また、白糸の滝については、平安末期頃の西行法師の和歌もある。これも温泉についての歌ではない[530]。

＜近世＞

上述したように、多くの伝説はあるが、杖立に続く主要な道である日田往還道（ひたおうかんどう）ができたのが 600 年程前とされていること、またそもそもの人口数から考えて、近世に入るまで温泉地として多くの人が訪れていたとは考えづらい[531]。



旧日田往還道。日田は江戸時代幕府の天領となり、北部九州の中心地の一つとして栄えた。杖立温泉には日田代官も湯治に来ている。

実際、杖立温泉自体についての確かな史料が多数出てくるのは江戸時代になってからである。まず、貝原益軒の杖立への訪問がある。筑前黒田藩の藩医であり、「養生訓」で温泉について記したことでも有名な益軒は、延宝７（1679）年、江戸時代の前半に杖立温泉を訪れ、「杖植紀行（じょうしょくきこう）」を著しており、湯治だけでなく、付近の山にも登ったことなどを記録に残して

530 この段落は禿迷慮「小国郷史」昭和 35 年を参照。

531 この段落は現地調査ヒアリングによる。

いる[532]。

寛永９（1632）年以降廃藩置県まで、杖立温泉を含む地域は、細川家の熊本藩政下にあった（慶長５（1600）年の藩成立から寛永９（1632）年までは加藤清正及びその子忠広）。熊本藩の史料をみると、杖立に温泉見取締役という村方の役目が見えており、杖立温泉から湯役が徴収されていたことがわかる。この温泉見取締役は安政年間より士分を賜っており、村方として重要な役割を果たしていた[533]。

江戸時代半ばになると、杖立温泉には御客屋と呼ばれる貴顕用の宿（宿駅における本陣に当たるもの）が整備され、３間×４間と３間×５間の竹瓦の浴場があったとの記録が残る。兵庫屋という宿屋が御客屋番を代官から申しつけられており、御客屋附御道具預りも一人指名されていた。この御客屋には、日田代官や長崎代官などの幕府の重要人物、寛政の三奇人の一人として知られた尊皇思想家の高山彦九郎、和歌「二葉集」を残し歌人として知られた阿蘇大宮司維典、日田の高名な儒学者・漢詩人の広瀬淡窓、熊本藩家老長岡監物（是容）などの宿泊記録が残る。このうち、高山彦九郎については２ヶ月に亘って杖立温泉に湯治し、杖立八景の歌を詠み、その書を額として杖立薬師堂に奉納したという話も伝わる。額は、幕末頃まではあったというが、現在は残っていない。また、御客屋になる前であるが、兵庫屋には松尾芭蕉の高弟、蕉門十哲の一人として知られる各務支考など多くの俳人も投宿していた。

江戸後期の杖立温泉には、宿屋と思しき住人が酒造を許されたこと、庶民には到底手が届かなかった魚類の購入が行われていたことなど、酒食が行われていたことがわかる記録もある。俳句や和歌も多く残っており、文人墨客が賑やかに交流していただろうことが窺える。

杖立温泉に藩外から日々多くの人が湯治に来ていたことを示す逸話が残っている。「小國郷土誌」に載る柳川藩士安達八郎と佐賀藩士との刃傷沙汰「杖立騒動」である。安達八郎が老母を連れて訪れた宿に佐賀藩士が多数連れだって湯治をしていた。囲碁をやろうと、将棋をやろうと、佐賀藩士側は安達八郎に連戦連敗で、それを恨んで、刀が盗まれたと言いがかりを付け、安達八郎が湯に入っていたところを多人数で襲いかかった。安達八郎はなんとか難を逃れたが、小国郡代の監督下、果たし合いで雌雄を決することとなった。結果、景流居合の達人、安達八郎が佐賀藩士多数を果たし合いで退けたという。果たし合いの場は白糸の滝の上の方だったと言われ、現在そこに碑が立っている[534]。

杖立騒動は、山口白陽[535]によって、昭和７（1932）年に「異説　杖立騒動」として小説化さ

---

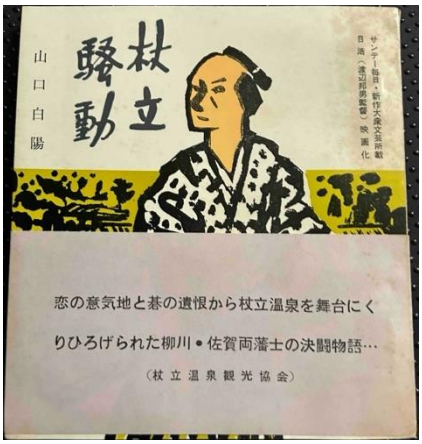
532 この段落は板坂耀子「貝原益軒の紀行文その製作状況と個々の作品について」九州大学国語国文学会 語文研究 34 号　昭和 47 年 P32-P41 を参照。

533 この段落含め４段落は禿迷慮「小国郷史」昭和 35 年を参照。

534 この段落は、熊本県教育会阿蘇郡支会編纂「阿蘇郡誌」大正 15 年５月 20 日、昭和 61 年８月５日復刻、株式会社臨川書店、及び、現地調査ヒアリングに基づく。なお、浅川漏泉「柳川藩叢書第三集　武士道亀鑑足達八郎」では、安達八郎ではなく足達八郎となっている。また、杖立にある碑も「足達八郎奮戦の記」である。

535 山口白陽は熊本の多くの学校の校歌を作曲した詩人、文筆家で、熊本方言の研究なども行った。ウェブサイト「-愛とユーモアの詩人-山口白陽文学館」http://hakuyoh.client.jp（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

れ、サンデー毎日増刊誌上に掲載された[536]。また、これを原作に、同年、日活で映画化されている（内容は小國郷土誌と異同がある）。白黒の無声映画で監督は渡辺邦男となっている。





杖立温泉観光協会が昭和 35 年に発行した山口白陽の「杖立騒動」。作品や杖立温泉についての若干の解説も付記されている。

＜明治期＞

明治に入ってまず杖立を襲ったのは大水害であった。明治２（1869）年の水害では、戸数 24 軒のうち、実に 13 軒、半分以上が流出している。明治４（1871）年にも水害があり、橋が流出、明治 11（1878）年、15（1882）年にも水害に襲われている。明治 34（1901）、35（1902）、36（1903）年にも立て続けに水害があり、ここでも家屋が流出した。この中でも杖立温泉は少しずつ再興、発展していく。その基盤となったのが道路の整備である[537]。

江戸時代から杖立温泉にいくには宮原（現：八代郡氷川町）から迂回しながら杖立にいく道を使うしかなかったが、険しい上に積雪風雨での途絶が多く、極めて不便であった。明治 11（1878）年、この便を改善するため、川沿いに日田と直結させる杖立川筋道路を開鑿した。これにより、大分・福岡方面からの入湯客が増加、明治 22（1889）年の所得税についての資料には、杖立温泉の木賃宿経営者が高額納税者として記載されており、温泉地の経済も相当に潤っていたと思われる。明治 39（1906）年には、熊本県内で、山鹿（やまが）温泉、日奈久（ひなぐ）温泉に次ぐ三番目の売上を上げるまでになっている。一方、杖立と宮原を結ぶ県道については、資金分担等の問題が決着せず、なかなか整備が進まなかった。しかし、大正３（1914）年ついに改修が実現、その後、馬車、さらには自動車での交通が盛んになった。当時の有名な来訪者としては外交官で漢学者でもあった竹添井井（たけぞえせいせい）（進一郎）などがいる。他、複数の文人の漢詩が残る。

明治後半、熊本の他の温泉では、自炊の湯治場としての性格が強く残っていた。このことから考えると、杖立も、同様の性格を有していた可能性が高い。明治６（1873）年、杖立温泉の効能と浴場についての県への報告資料が残されているが、それによると、浴場は、龍泉窟、薬師湯、御前湯など 13 あり、内訳は湯床（浸かる湯）が８つ、箱湯が４つ、蒸し湯が１つであった。入浴客の年平均数は 1,400 人であり、まだまだのんびりした温泉地であったと思われ

536 サンデー毎日新作大衆文芸（昭和７年５月５日号）にサンデー毎日大衆文芸佳作作品として掲載されたが、出版はされていない。昭和 35 年 10 月 10 日に、杖立温泉観光協会が非売品として発行している。

537 この段落含め３段落は禿迷慮「小国郷史　続」昭和 40 年を参照。

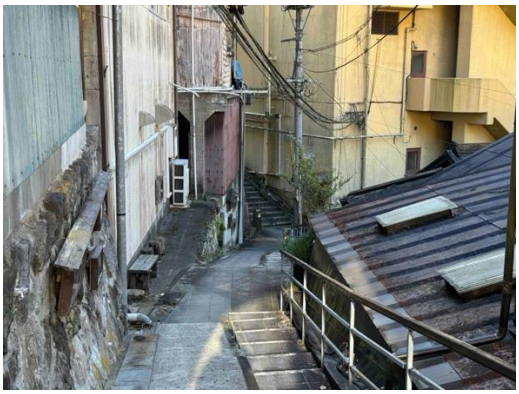
る。一方、明治 32（1899）年の県への報告では、８軒の主要旅館の名が掲載され、一泊料金は昼食付きで示されており、必ずしも自炊だけではなかったことが窺える。宿泊料の他に湯銭を払うことになっており、産物は、茶・蒟蒻・川魚・麻苧（カラムシ）・竹細工・櫛・こぶし、名所は白糸の滝、龍頭泉（現在の竜頭窟）、高山彦九郎詠杖立十景等と記され、温泉地としてかなり栄えてきている様子が見える。なお、茶については、明治になってから殖産興業施策の一環として小国郡全体で振興されていたものである。

＜昭和初期から現在＞

杖立温泉は、昭和の初期から「九州の奥座敷」と呼ばれるようになり、歓楽街として急激に発展する。羽振りのいい福岡（筑豊炭田）から炭鉱マンらが大勢やって来てはどんちゃん騒ぎをしていたという[538]。

福岡からは博多の商工会の人も多く来ており、どんたくや山笠が終わった後、博多から芸者を連れて来訪することも多かった。また、柳川やその近隣の有明海からの湯治客は海苔業者が多く、収穫が終わった後に１週間ぐらい逗留していた。佐賀からの宿泊客も多かった。一方、熊本からは、大観峰があるため、交通の便が意外に悪く、比較的数が少なかった。杖立には、多い時には 100 人以上芸者もおり、赤線もあり、享楽的な観光が中心であった。そのため、自炊ではなく、食事は宿が基本となっていた。団体客が多く、今のような一部屋１人、２人ではなく、５人、６人と詰め込まれていた[539]。

この中で旅館の拡張も進んだ。狭い土地で増改築を繰り返す中、「背戸屋」と呼ばれる迷路のような路地裏街ができていった[540]。





川から一本奥に入ると、高度経済成長期までにできた「背戸屋」と呼ばれる迷路のような路地街が広がっている。

538 この段落は、熊本日日新聞「熊本豪雨１年＝復活温泉街、コロナの影　全旅館再開、小国町の杖立　誘客に腐心、後継者不足も　新型コロナウイルス」令和３年７月８日、熊本日日新聞「小国支局長・杖立伝承芝居体験記（２）＝「九州の奥座敷」　昭和の栄華、刻む舞台　［連載］」平成 27 年５月 25 日、熊本日日新聞「小国支局長・杖立伝承芝居体験記（３）＝衰退する温泉街　応援したい住民の熱意　［連載］」平成 27 年５月 26 日 を参照。

539 この段落は現地調査ヒアリングによる。

540 この段落は杖立温泉ホームページ「杖立について」https://tsuetate-onsen.com/about-tsuetate　（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

第二次世界大戦後の高度経済成長期には、川辺の宿屋街の上の路地に 50 軒くらい商店も立地していた。魚屋も２～３軒、肉屋も２軒、旅館に卸す問屋も、医院も歯医者もあり、薬局も時計屋も、スマートボール（ピンボールのような観光客向け娯楽台で景品がもらえた）の店も、文具からお酒から煙草から下着まで販売する小さな百貨店もあった。焼却炉も火葬場もあって、昭和 50（1975）年頃までは、杖立から外にまったく出ずに生活ができた[541]。

こうした温泉地の繁栄の一方、水害も続いていた。戦後では、昭和 28（1953）年（昭和 28 年西日本大水害）、昭和 57（1982）年、平成５（1993）年、令和２（2020）年などに大きな水害があった。ただし、杖立川の掘削を進め、川面を 1.2m 程下げたことなどにより、令和２年を最後に大きな水害は起こっていない。水害からの解放は杖立の長年の夢であり、工事をさらに進めていく必要がある。ただし、川床の掘削については、余り掘りすぎると湯脈に影響する可能性があり、現在は拡幅へと方針を変えている。拡幅の際には橋の付け替えなど大きな工事が必要となる。

杖立温泉の集客の最盛期は昭和 30 年代で、宿泊者数が年間約 40 万人以上にも上った。それが昭和 45（1970）年には約 16 万人へと急激に減少、その後も右肩下がりは続き、令和元（2019）年度には約 12 万人まで落ち込んでいる[542]。結果、昭和 35（1960）年に 26 軒あった旅館も、令和６（2024）年現在、12 軒と半分以下になってしまった。商店も、昭和 50 年代以降次々と減っていった[543]。

こうした急激な退潮の背景の一つとして、主要顧客であった石炭産業の凋落が指摘される。筑豊炭田の状況をみると、戦前の 1930 年代に生産量がピークを迎え、戦後は復興したものの昭和 30（1955）年に戦前の半分程度の生産を達成した後は急激に縮小、昭和 50（1975）年の閉山を迎えている[544]。一方、佐賀の炭田も、昭和 35（1960）年に生産量がピークとなった後、急激に縮小し、昭和 47（1972）年には最後の炭鉱が閉山している[545]。九州北部の景況の変化が、杖立の成長と衰退に大きく影響していた。

昭和 30 年代後半から始まる需要の減退に対し、杖立温泉では、積極的にイベント実施など観光振興の活動に取り組んできている。代表的な活動が温泉祭（杖立伝承芝居観劇会）と鯉のぼり祭である。温泉祭は毎年５月 27、28 日の２日間に亘って開催され、全盛期には杖立温泉を挙げての祝賀行事が昼夜行われた。日中は落下傘（らっかさん）花火が上がり、落ちてきた落下傘に記された宿や商店に持っていくと菓子をもらえるほか、地元の人々による仮装と踊りの道行き

---

541 この段落と次の段落は現地調査ヒアリングによる。

542 集客数値は、熊本日日新聞「熊本豪雨１年＝復活温泉街、コロナの影　全旅館再開、小国町の杖立　誘客に腐心、後継者不足も　新型コロナウイルス」令和３年７月８日、熊本日日新聞「小国支局長・杖立伝承芝居体験記（２）＝「九州の奥座敷」　昭和の栄華、刻む舞台　［連載］」平成 27 年５月 25 日、熊本日日新聞「小国支局長・杖立伝承芝居体験記（３）＝衰退する温泉街　応援したい住民の熱意　［連載］」平成 27 年５月 26 日 を参照。

543 現地調査ヒアリングによる。

544 田川市ホームページ「筑豊炭田を探る」
https://www.joho.tagawa.fukuoka.jp/kiji0033241/3_3241_2_up_rhdij743.pdf（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

545 佐賀県「佐賀県政史」昭和 54 年３月。

があり、杖立温泉内に複数設置される演舞場での踊りの披露、温泉マークのついた神輿の登場、各地区のにわか組による演劇隊による芝居の上演、地元の宿や商店の男衆が演じる伝承芝居などでたいへんな賑わいを見せていた。



昭和 23 年の温泉祭の様子
※大学堂薬店提供資料



昭和 34 年の温泉祭の演舞場。湯鶴下組と記載されており、各地区のにわか組ごとに設置された。※大学堂薬店提供資料

この伝承芝居は明治から第二次世界大戦のさなかでも途切れることなく昭和 30 年代中頃まで実施されており、一時中断したのち昭和 41(1966)年に再開している[546]。その後令和元（2019）年まで継続されたが、新型コロナウイルス感染症をきっかけとして現在は休止している[547]。

上演に際しては日田の橘菊太郎劇団に指導を請うており、昭和 41 年から初代橘菊太郎師匠に、座長の代替わり後も同劇団の指導のもと練習していた。台本は 100 本以上残っており、チャンバラもの、人情もの、滑稽ものなど題材は多彩である。そこから毎年４本選んで、一日２本ずつ芝居を掛けていた。

演目は師匠や劇団との打ち合わせのうえで決め、台本が１月前にみんなに届けられるので、台詞を覚え、２週間程前から劇団の人に監督してもらって練習し、最後の３日で仕上げる。芝居小屋も、自分たちで泉屋旅館前の桜橋の下に舞台をつくり、屋根をかけて 500 人ほど入る会場を用意していた。昭和 58 年以降は水害で流された公民館の跡地にできた多目的広場に舞台を移した。昭和の時代は来客や住民、旅館従業員などを含めた観覧客で 500 人の会場が満席で、平成の一桁頃までは 400 人くらい入ることもあった。温泉祭が縮小していったのちも伝承芝居は杖立伝承芝居観劇会として地元の宿や商店の男衆がよって続けられたが、残念ながらコロナ禍による中断の後、人手不足のため、令和６（2024）年現在、再開の見通しは立っていない。

546 伝承芝居は昭和 30 年代中頃までは杖立青年団、昭和 41(1966)年に再開されてからは杖立温泉協会青年部、昭和 43 年から杖立青年協議会、平成 3 年からは青年協議会メンバーと OB 有志による友芸会と実施母体を変えつつ実施されていた。

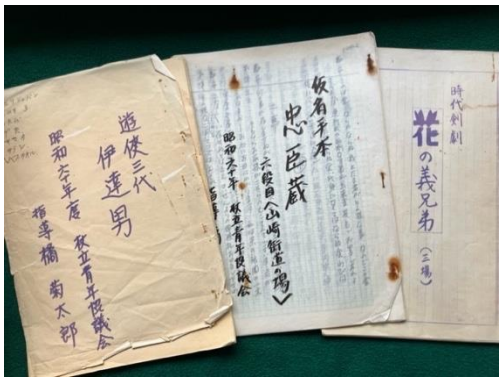
547 この段落含め３段落は現地調査ヒアリングによる。



昭和 39 年の舞台での舞踊の様子
※大学堂薬店提供資料



小国町立下城小学校杖立分校の生徒らの手による木版画に見られる昭和 43 年の伝承芝居の舞台。※大学堂薬店提供資料



昭和 60 年に使用された伝承芝居の台本。かつては日田の劇団を訪ねて台本を聞き書きしていた。
※大学堂薬店提供資料



杖立伝承芝居観劇会の様子。屋外に仮設会場を設け、多くの観覧者が訪れた。
※大学堂薬店提供資料

もう一つの大きなイベントが、昭和 54(1979)年から始めた鯉のぼり祭である。３月に始まり、５月まで、3,000 尾以上の鯉のぼりが杖立川の上を泳ぐ。当時の観光協会長が佐賀の川上峡に行った時、鯉のぼりをロープで橋に渡してあったのを見たのが始めたきっかけとなっている。最初は旅館と旅館の柱同士をロープで結んで鯉のぼりを吊るしていた。ところが、旅館の建物が古いため、風が吹くと、柱だけでなく、旅館の建物までギシギシいう。これは危ない、ということで、ポールを川に立てる今の形式に変更した。最盛期には 3,500 尾だったが、現在はやや減っている。一方、かつて杖立温泉によく芸者を連れてきていた博多の川端通商店街では、その縁から、杖立から鯉のぼりの提供を受けたイベントをやるなど広がりも出てきている。

この２つの他にも様々なイベントを杖立では実施してきており、最近では、「癒やしのマルシェ」という催し物も始めている。令和６（2024）年 12 月１日開催の２回目の開催では、杖立温泉水と小国杉精油を使ったオリジナルの入浴剤「湯気の森」の発売イベントと同時開催として、ジビエやハーブティーなどの飲食、アクセサリーなどの物販、ハーブ蒸しやマッサージ、占いなどの体験コーナーと様々な催しを実施した。また、平成 26（2014）年からは、

偶数月の第一日曜の朝７時から、「杖立温泉みちくさ市」が開催されており、小国（おぐに）の物産の販売に加え、バイキング形式で温泉を使った蒸し料理も体験できる「杖立ほっこり朝定」を楽しめる[548]。

この他、「杖立夏の温泉祭」が例年実施されており、平成９（1997）年から平成 23（2011）年、平成 28（2016）年、平成 29（2017）年には、杖立の路地裏である背戸屋に竹灯籠やキャンドルを点し、薄明かりの中で鯉濃などの杖立名物の料理を楽しむ「背戸屋まつり」も実施されていた。

こうした種々の活動を支えているのが、杖立温泉旅館組合と杖立温泉観光協会というメンバーがほぼ重複する組織である[549]。

杖立では、そもそも歴史的に独立性が高く、例えば水道事業も、小国町の水道企業ではなく、杖立簡易水道組合という組織が担っている（下水はなく、トイレ等の排水は浄化槽で処理する）。水道組合のトップは観光協会の会長である。観光協会は、山林も所有しており、その管理も行う。また、杖立の住民は、観光協会に会費月 150 円を支払っており、これを原資に観光協会で町の清掃、ゴミ処理を行うとともに、街頭の電気代などを支える。消防団もメンバーは旅館組合、観光協会とほぼ被っている。公益事業の多くを、小国町に頼ることなく、杖立だけで行っているのである。

祭礼などについても、昔からある地域の集まりが主役となっている。杖立は、川の北東の観光協会がある側の湯鶴地区（湯いづる、で湯鶴）、杖立薬師がある側の杖立地区の２つからなっている。このうち湯鶴地区には８組、杖立地区には４組の集まりがあり、神社等の祭礼はこの組が持ち回りで実施している。共同浴場も、杖立地区の「御前湯」は観光協会で所有しているが、湯鶴地区については、地元の集まりで管理されている。小国町に行かずとも村の中で生活が完結していたという歴史、人口が少なく、住民同士が全て顔見知りという地域の状況に加え、こうした杖立ならではの半独立的な運営体制が、温泉地を支える強い凝集力を産んでいる。

杖立温泉の源泉[550]

杖立付近の地形は、古い亀石山溶岩の上に、９万年前に大規模噴火した阿蘇山の火砕流が被さってできている。亀石山溶岩は水を通さず、阿蘇山の火砕流は水を通す。この二重構造を筑後川の源流が削って、今の杖立川沿いの地形が作られていった。火砕流の地層に染み入った水が、溶岩流の上に貯まるため、極めて保水力が高い。そのため、杖立の山は、どこを掘っても大量の水が出てくる。こうした豊かな水源が、杖立の温泉を支えている。

548 この段落と次の段落は、杖立温泉ホームページ https://tsuetate-onsen.com（令和６年 12 月 13 日最終確認）を参照。

549 この段落含め３段落は現地調査ヒアリングによる。

550 この項は現地調査による。



杖立温泉の情景。川に張り付くように旅館が立っている。
この川が幾度となく氾濫し、杖立温泉に大きな被害をもたらしてきた。一方、この地形こそ、杖立に、豊富な水と温泉ももたらし続けてきたものでもある。

また、江戸時代以来、杖立温泉の崖の部分は全て石垣になっているが、それは山肌から出てくる水を止めるためである。狭い土地の中、各家は、崖の石垣にへばりつくように立っている。温泉も、町の構造も、杖立の自然と地形が長い年月をかけて生み出したものなのである。





杖立温泉のあちこちにある石垣（左、右とも）

源泉は 23 本ある。杖立の源泉は、大正時代までは、生えている竹で掘っていた。鉄管の自重で穴を掘り、竹のしなりでそれを持ち上げて、また打ち下ろすやり方である。その後近代的なボーリングとなった。現在、半径 300m にある他の源泉所有者との合意がなければ新規掘削はできない申し合わせになっている（各源泉から半径 300m 取ると、杖立の土地全てが対象となってしまうので、実質的に新規掘削はできない。またかつては許されていた元の源泉から 1.8m 以内の代替掘削も禁止されている）。そのため、新規の源泉確保を前提に外部資本が入ってくることもない。杖立の各源泉は、1 本当たり平均湧出量が 100～170 リットル／分で、100 リットル／分を超えて引き湯をしてはならないことになっている（後述の地熱発電をしている源泉のみは 230 リットル／分ある）。源泉 23 本の殆どは個人所有だが、旅館で一つ持っている場合もあれば、数軒でひとつの源泉を共同所有している場合もある。また、観光協会で持っている源泉（ひごや泉源、北里泉源）もあるが、それは各所に配湯している。

泉質は弱食塩泉で、温度は 90～100 度である。硫化水素を含まないので、蒸し湯や飲泉が

可能になっている。飲泉については、杖立では、病院には来ず温泉でうがいをしろと昔から言われていた。また、あくまで体感的であるが、花粉症などにもよく効くという。

杖立温泉の共同浴場（外湯）[551]

共同浴場としては、湯鶴地区に、東林瑠璃堂下にある「薬師湯」（山本泉源）、かつて穴湯とも呼ばれていた応神天皇産湯の伝承がある「元湯（混浴）」、杖下川の川原に「足湯」（一般の足湯だけでなく、砂蒸し足湯も楽しめる／山本泉源）の３カ所、杖立地区に藩主ゆかりの「御前湯」（ひごや泉源／観光協会管轄）１カ所の計４カ所がある。「元湯」の源泉は、今は涸れており、広場の近くにある蒸し湯の源泉から持ってきている。「足湯」はかつて川の中に囲いと着替えの場所を組み立て式で作って利用する共同浴場（龍泉湯）だったが、水害の際、解体して避難させる前に流れてしまったので、その後、足湯として新たに作ったものになっている。



薬師湯



薬師湯の内部



元湯



御前湯



足湯（通常の湯）



足湯（歩行浴）

551 この項は現地調査による。

杖立温泉の湯の管理の技術[552]

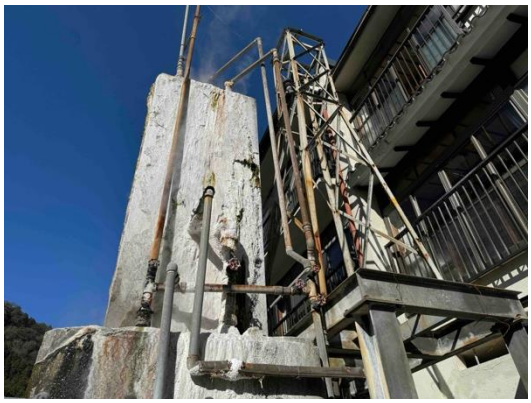
＜旅館「泉屋」における湯の管理＞

旅館「泉屋」は創業明治年間の老舗の旅館である。浴室としては、男女入れ替え制の大浴場「石の湯（石庭風呂）」（内湯部分と露天部分あり）、凝灰岩を使用した露天の大浴場「岩の湯」、貸切風呂、蒸し風呂（座って首だけ出す「箱蒸し」型と寝て入る「蒸し湯」型）を備えている。

① 源泉

泉屋では、自家源泉から 98 度の温泉が自噴している。源泉には鉄管の縦管が差し込まれており、もともとは 100m の深度まで刺さっていた。しかし、その後、地下 15m で鉄管がねじ切れてしまったため、今はそこから上だけの縦管となっている。スケールが多く付いているが、縦管の交換はできない状況である。その後の引き湯の配管も、塩化ビニールは基本 90 度までしか持たないため、鉄管である。温泉が漏れたりすると急激に腐食するが、そういうことがなければ 15 年程度はもつ。また、スケールが溜まるため、年４回程度鉄管の詰まりを取っている。その際には、上の蓋を開け、そこから別の鉄管を縦管に回しながら入れていく。冬、11 月～12 月に詰まりが多い。源泉の量が気候、天候によって左右されることはなく、主に詰まり具合に影響される。

源泉から出てきた温泉のうち、湯の部分は、一旦大きなタンクに入れ、そこから旅館全体に引き湯をしている。蒸気の部分（タンクの上には蒸気が集まる）はシャワーやバブルスター（後述）等に使う真水のお湯を熱交換で作るために利用している。熱交換タンクの中に水が通る細い管があり、その回りに温泉からの蒸気が入って水を熱していく構造である。熱交換用の水は旅館の持つ山からの山水で、300m ほどの距離を引いている。



泉屋泉源。パイプの鋼管が腐食している。



熱交換用のタンクと熱交換用のパイプ

552 この項は現地調査による。

②箱蒸し湯

泉屋旅館の「箱むし湯」は、扉を開いて木製の箱の中に座り、上部の窓から首を出す蒸し風呂である。箱の 20cm くらい下に鉄管が通っており、そこに源泉から 98 度のお湯が流れ、鉄管に開けてある穴から蒸気が箱の中に上がってくる。お湯が高温のため、HT ポリプロピレンなどの高熱に対応できる素材も、曲がってしまって、使えない。

箱自体は地元の大工が工夫してデザインしたものとなっている。箱蒸しの箱は、木材部分が腐り、ステンレスの金具が外れてしまう。そのため、少しずつ部分的に木材の張り替えをやっている。箱全体の取り替えは、平成元年に箱蒸しを旅館に設置してから、２～３回程度（10 数年に１回）である。

メンテナンスとしては、鉄管にゴミなどが溜まり、湯量が減ってくるので、年２回ほど底を外して鉄管の清掃を行っている。周囲のコンクリートも壊れてくるので、その修復も必要である。数年に一回程度は配管の穴自体が詰まってしまうため、配管の別の場所に穴を開ける必要がある。また、湿気が多く、鉄管が腐食してしまうため、定期的に交換する必要もある。



箱蒸し湯



扉を開けたところ。中に椅子があり、上から首を出す。



金具の周辺が腐食しやすい。



ネジ自体も痛みやすい。

③蒸し湯

下に 98 度の温泉が貯まっている枡（浅めの浴槽のようなもの）があり、その上に木の板が貼ってあって、マットが敷かれている。その上に寝て蒸気を浴びる。大人２人が入るのが限界で、枕が２つ用意されている。温度は、扉の開閉や、中で水を打つことによって調整する（扉を開ければ冷め、閉めれば暑くなる。水を打てば温度は下がる）。伝統的な杖立の蒸し湯はこの形であった。こちらの方が必要なメンテナンスは少ない。



蒸し湯の入り口。温度調整方法が書かれている。


蒸し湯の中。天井が低く、枕が二つある。

④石の湯（石庭風呂）、岩の湯、バブルスター（超音波風呂）

入り湯である「石の湯」と「岩の湯」については、98 度の源泉に、山水を加水して 60 度くらいに下げ、そこから湯船に入れている。湯船の段階で 40～43 度の適温になるように加水量を調整する。温泉の方の量の調整はしておらず、源泉からの湧出量そのままである。

温度調整のためのレバーで加水する山水の量を変えるのは深夜と昼ごろの２回くらいとなっている。深夜に温度を上げておくと朝には丁度いい温度となる。その後、気温が上昇すると熱くなりすぎるので、また午前９時から 12 時の間に調整する。温度を１～２度変えるのに４～５分かかる。それで熱すぎたり、冷たすぎたりすると、また再調整に時間がかかる。そのため、各浴場の湯温を調整するのに深夜 30 分から１時間も作業をすることになる。その際のレバーの調整量は見ていてもわからない程度の微妙なものである。なお、岩の湯については、湯口が一カ所しかなく、温度の不均衡が発生するため、湯を循環させ、湯温を均一化させている。温度均一化のため攪拌をしているだけで、濾過などをしているわけではない。

湯船を清掃する際には、レジオネラ対策として、漂白剤を使っている。また、ぬめりなどを取るため、ケルシャーの高圧洗浄機を使っている。



石の湯



岩の湯

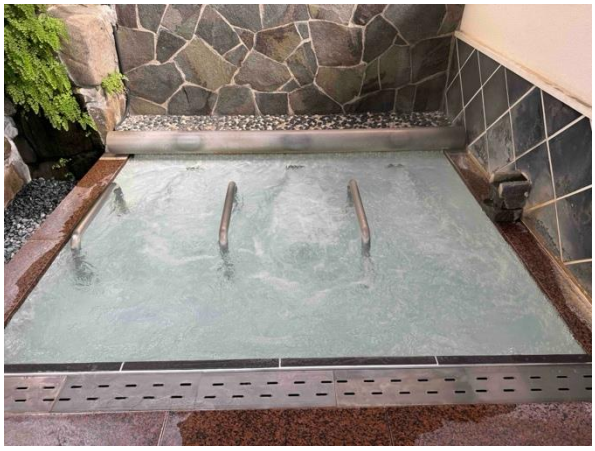


バルブをわからないくらい調整しながら、加水のレベルを変え、温度調整を行う。



バルブは湯が漏れるところなので、塩分が析出し、固まってしまう。

石の湯には、バブルスター（超音波風呂）も置かれている。これは熱交換で作った 40 度のお湯をタンクにため、38 度程度に調整している。温度計などはないので、手で大体の温度を測って、湯量を調整し、適温にしている。



バブルスターは、温泉ではなく、温泉で作ったお湯を用いたもの。シャワーも熱交換のお湯を使っている。



山の清水の水風呂もある。

⑤廃湯

大浴場、岩の風呂、バブルスターであふれた湯はそのまま川に流している。川の環境に影響は出ていない。下水道はないので、トイレなどを含めた下水処理については、小国町の管理する浄化槽で処理をしている。

＜源泉、旅館の設備管理＞

①　体制、源泉の管理

各旅館の配管・設備管理については、敷地が大分県に跨がっている旅館１軒（源泉６本を所有／50 度～60 度の低温でスケールなどが付かず管理がしやすい）を除いて基本的に大進工業の 80 代の技術者が一人で管理しており、この技術者だけで源泉 10 本分（100 度近い高温で管理がしにくい）を見て回っている。他の地区の事業者は、杖立の湯の管理の事情がわからないので仕事を受けてくれない。最近、ようやく 40 代の人がサポートに来てくれるようになったという状態である。

河川工事をする場合などは源泉の湧出量の測定（70 リットルや 25 リットルのバケツがどの程度の時間で一杯になるかで測定）や成分検査のために源泉の湯を福岡に送る必要がある。大進工業では、こうした作業の監督も実施している。ただし、源泉の縦管については、ボーリング業者（地元の小規模事業者）が清掃を行っている。

ボーリング業者では、４名の作業員が７m 強くらいの足場を４本組んで源泉に刺さっている鉄管の清掃を行う。昔、丸太で組んでいたときはもっと高かったが、今はクレーンで引き抜けるので、それほど高くせずに済んでいる。源泉の多くは 100m～130m 程度まで掘削して鉄管を入れてある。杖立では、地下 30m～40m くらいのところに水に触れている層があり、そこで冷やされている。冷やされるところでスケールが多く溜まる。

杖立では、ポンプのない時代から源泉を利用しているので、源泉を貯湯する場所を高くし、そこから自然流下で湯を回している（各源泉からは温泉が 25m くらい上に噴出している）。現在でもポンプを使っているところは殆どないが、使っている場合、源泉が 100 度近くあるため傷みが激しく、２年に１回はポンプを交換する必要がある。



吹き出した源泉は高い場所に置かれた貯湯槽に送られ、そこから自然流下で引き湯される。



源泉からのパイプにはスケールがびっしり張り付いている。

②配管の管理

杖立温泉の源泉は、塩分を含むために、引き湯用をしている鉄管や蒸気を逃がすための煙突用の鉄管などが腐食してしまう（蒸気を逃がさないとタンクに無理が生じるため、貯湯タンクには煙突が付いている）。そのため、腐食部分を切って、新しいものに変える必要がある。煙突の場合、高い場所にあるため、最大７m 半も梯子で登って、タンクの上で煙突を解体して、腐食部分を切り取って新しいものに取り替えて、また付けている。特に湿気が多いところは塩分が付きやすく、半年に１回は交換が必要である。逆によく乾燥しているところでは 60 年持つ場合もある。

鉄管には、湿気が付くのを防ぎ、温度低下を緩やかにするため、配管があるところに雨よけのトタン屋根を付けたり、カバーを付けたり、テープなどを巻いて養生しているが、テープ自体も２～３年で駄目になってしまう。しかも、ここ最近は塩分が多くなる傾向があり、腐食の勢いが強い。源泉に入っている縦管には 100 年近く経過しているものもあるため、源泉が漏れ、その結果、塩分濃度が濃くなっている可能性もある。



貯湯槽からは蒸気が噴き出し、中の圧力をさげている。これが杖立ならではの風景にもなっている。



塩分が高いため、配管は腐ってしまう。右は腐った鋼管。

配管を取り替える際にはバルブで一旦蒸気を止めて行う。バルブが痛んでいると、中に溜まっている高温の湯が吹き上げてくることがあり、大やけどを負う危険性がある。また、配管の地面に近い部分を取り替える時など、源泉から蒸気が吹き上げてくるパイプを寝転んで見上げながら取り替えなければならないこともある。タンク自体も清掃が必要である。お湯が出なくなってタンクを見ると、塩が 30cm も溜まっていたことがある。タンクの清掃の際には、酸欠にならないよう、一旦全ての水を抜いてから作業する。

近年は、一部の配管が、高温に耐え、スケールが付きにくい HT ポリパイプに変更され、１年は持つようになった。ただし、このパイプでも、源泉近くや蒸気が通っているところには使えない。




用意されている大量の部品類。腐食や塩分の析出により、日々、大量の部品を交換することになる。

信仰・伝承、伝統芸能や風習、歴史的に継承されてきた特産品等[553]

温泉に関係する神社としては、杖立温泉神社があり、祭礼は５月 25 日となっている。平成５（1993）年の水害で一回流されており、その後発見されて温泉会館（旧：下城小学校杖立分校）の奥に再度祀られた。祭神は不明である。地域全体の氏神は、湯鶴地区の長い石段の上にある皇大神宮で、住民はこの氏子となっている。祭神は菅原道真である。現在の社殿は昭和 61（1986）年、大雨の被害を受けて遷座、再建されたものとなっている。明治 11（1878）年の寺社の存置願では、皇大神宮について、延享３（1746）年勧請とある[554]。



杖立温泉神社



杖立皇大神宮鳥居

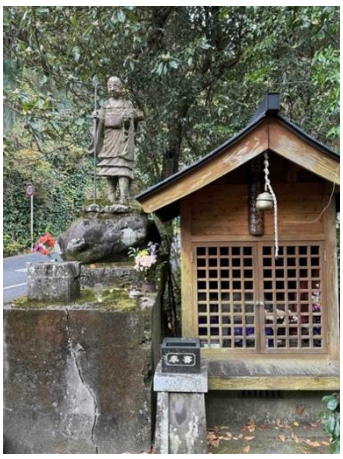
その他、「足湯」の近くに、水天宮と杖立稲荷があり、水天宮には水害が治まることを祈念する水神様が祀られている。また、火伏せの神様である秋葉神社が杖立薬師堂の横にある。こうした神社については、温泉神社を含め、小国両神社の神官に来てもらい、それぞれの祭日に祭事を実施している。独自の祭礼が残っているところとしては、杖立地区の山の中にある宇津尾権現（うつおごんげん）がある。能楽の神様と言われており、集落の住民を招いて接待するような祭で

553 この項は現地調査による。別途典拠がある場合は都度脚註で示す。

554 勧進の年は禿迷慮「小国郷史　続」昭和 40 年を参照。

ある。

温泉に関わる仏閣としては、温泉の入り口にあるお大師像（弘法大師像）、杖立地区の杖立薬師堂（雲泉薬師堂、横に目の病気に効験があるという生目八幡がある）、湯鶴地区の東林琉璃堂（薬師堂）がある。明治 11（1878）年の寺社の存置願をみると、杖立薬師堂には宝暦 11（1761）年再建という申し伝え（開山は空海の伝承である）、湯鶴の東林琉璃堂には享保４（1719）年勧請という申し伝えがある[555]。これらの仏閣については３月８日に八日祭が実施されている。八日祭は、小国町の曹洞宗の瑞龍寺から僧侶を迎えて実施しており、二つの薬師堂と、お大師像、地区ごとにある地蔵尊全て併せてやってもらっている。その他、湯鶴地区の奥にあるかつての街道に、街道で落ちたり、落石でなくなったりした馬の慰霊のため馬頭観音が祀られている。



杖立の入り口にある弘法大師像。



杖立薬師堂



生目八幡



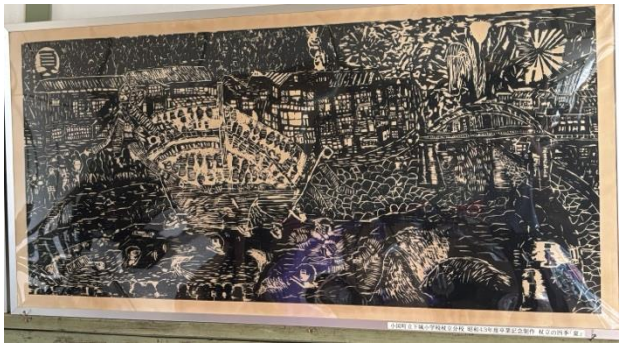
東林琉璃堂

555 勧進、再興の年は禿迷慮「小国郷史　続」昭和 40 年を参照。

各神社や仏閣の管理は、地区で世話人が決められており、賽銭や堂宇の管理を行っている。両薬師堂などは世話人が複数いる。なお、40 年程前には、杖立の寺社 12 カ所を巡る 12 カ所名所巡りというスタンプラリー的なものも行われていた。全て回ると湯飲みがもらえた。

温泉に関わる祭礼としては、昭和 55（1980）年から、小正月のどんどや火祭りが再開・実施されている。どんどや火祭り自体は、杖立川の河川敷に組んだしめ縄や門松などを納める高さ約５メートルと約２メートルのやぐらを立て、そこに点火するお焚き上げの行事だが、昭和 55（1980）年の再開からは、温泉街を流れる杖立川の右岸に祭壇を設け、玉串を奉納し、供えた源泉の湯を榊で来場者に振りかける「湯かけ神事」を合わせて実施している[556]。

また、20 年以上前までは、夏祭りが８月 15、16 日に開催されていた。夏祭りでは花火と大型精霊舟流し大会の他、屋台もあり、鯉濃や鯉のあらい、鮎の塩焼きなど地元の味覚を提供していた。大型精霊舟流し大会では、杖立地区に２組（杖立上組・下組）、湯鶴地区に３組（湯鶴上組・中組・下組）という５組のにわか組という集まりがあり、この５組のそれぞれ長さが３ｍから５ｍある大型精霊舟を作成して出来栄えを競い、川に流していた。40 年代までは枯れたヨシの茎を束ねて船体につけ、提灯に火を灯して流していたが、様々な素材で意匠を凝らすようになり、後年は発泡スチロールを削って作成した長崎の平和祈念像（昭和 60 年）、独眼竜正宗（昭和 62 年）などの話題性を意識した飾り付けと花火によって観光客を楽しませた。しかし、谷間に花火の音が響くため岩盤への影響が危惧されるのではないかと警察から指導が来たこともあり、中止されてしまった。ただし、その後も、住民有志でつくる杖立舟流し保存会が何度か復活させている[557]。



小国町立下城小学校杖立分校の生徒らの手による木版画に見られる昭和 43 年の夏祭りの様子。　※大学堂薬局提供資料



昭和 50 年頃の精霊流し
※大学堂薬局提供資料

江戸時代から続く杖立ならではの料理としては鯉の洗いや鯉濃、鮎の塩焼きなどの川魚の料理がある。鯉や鮎は川で取れるものを使っている。鮎は養殖もしているが、鯉は天然もののため、安定供給はしにくい。その上、この頃、特に若い人に川魚の人気がなくなっている。捌く時には一尾単位となるため、余ってしまうと後で使えない。そのため、献立に載せにくくなった。

556　この段落は熊本日日新聞「どんどや、杖立温泉に歓声　小国町で４年ぶり」令和６年１月 18 日を参照。

557　保存会については熊本日日新聞朝刊「小国町・杖立温泉で精霊舟流し　水面を包む煙火」平成 30 年８月 17 日を参照。

もう一つあるのが蒸し料理である。昔から地元では蒸し湯を使ってご飯を炊いたり、晩ご飯の食材を蒸していた。現在は、観光客も、「足湯」の近くの自販機で食材を購入して気軽に蒸し料理を体験することができるようになっている。また、杖立では、砂糖が貴重な時代からおもてなしの甘味としてプリンを蒸し料理で作ってきており、現在では、定番のたまごプリンの他、ティラミス風、杏仁入り、あんこ入りなど多種多様なプリンが開発されている[558]。




食品が蒸せる蒸し湯が杖立温泉地内の複数箇所にある。食材は自動販売機で購入することができる。

名産品としては、これも江戸から続く竹細工があり、現在では宿を辞めた人が「ふるや工房」を建てて様々な竹細工を作っている。ここは、鯉のぼり祭の際に橋の下に飾る絵馬ならぬ絵鯉を開発したところでもある。竹細工としては、他に、80〜90 歳の職人で、曲げわっぱを作っている人も残っている。

また、温泉の利用として、杖立では、地熱発電も行われている。100 度未満の温泉水でタービンを回すため、水より沸点の低い媒体を使う温泉バイナリー発電が、平成 30（2018）年より、稼働している。個人所有の源泉を利用した小規模なものである。また、温泉の熱を用いてビニールハウスでコーヒーを育てているところもある。


もみじ橋（屋根付き）に飾られている大量の絵鯉


温泉の熱で育てられているコーヒー

558 プリンについては杖立温泉ホームページ https://tsuetate-onsen.com（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。

杖立は、溶岩流と火砕流が重なった地形を杖立川が何万年もかけて削り取った自然から生まれた地である。その自然は、温泉という恵みをもたらすとともに、幾度なく水害という禍をももたらしてきた。杖立温泉、湯鶴地区と杖立地区は、そういった歴史の中で、空海の伝承や薬師信仰を育み、そして、極めて温度が高く、また塩分濃度も強い蒸気や湯の管理の技術を磨いてきた。杖立ならではの箱蒸し湯や蒸し料理も、こうした伝統の上に生まれたものである。

炭鉱景気も遙か昔となり、杖立温泉には一時の賑わいはない。しかし、厳しくも恵まれた自然に育てられ、温泉を守ってきた杖立の人々の強い凝集力は未だに続いている。その中で、鯉のぼり祭に代表される新たなイベントやプリンなどの名産品も産まれている。杖立の温泉文化はまた新しいステップを刻みつつある。

（１５）別府温泉郷（鉄輪、明礬）

別府温泉郷は、別府八湯と呼ばれる別府温泉、浜脇温泉、観海寺温泉、堀田温泉、明礬温泉、鉄輪温泉、柴石温泉、亀川温泉の総称である。このうち、鉄輪温泉、明礬温泉、柴石温泉の３カ所が環境省の国民保養温泉地に指定されている。

本稿では、別府温泉郷全体の概観を押さえつつ、その中でも伝統的な温泉文化が多く保持され、平成 21（2009）年に「別府の地獄」が国の名勝に、平成 24（2011）年に「別府の湯けむり・温泉地景観」が国の重要文化的景観に指定[559]されている鉄輪温泉、明礬温泉についてその具体的な湯の管理の技術を見ていくこととする（「別府の地獄」の一部は柴石温泉にある）。

別府温泉郷の歴史[560]

＜近世まで＞

別府温泉についての史料上の初見は、奈良時代に成立した風土記のうち現存する一書である「豊後国風土記」である。同書には、赤湯の泉（現：柴石温泉、血の池地獄）や玖倍理湯井について記されており、「赤湯の泉、郡の西北のかたにあり、此の湯の泉の穴は、郡の西北のかたの竈門山にあり、其の周りは 15 丈ばかりなり。湯の色は赤くして涅あり、用ゐて屋の柱を塗るに足る、涅、流れて外に出づれば、変りて清水となり、東を指して下り流る、因りて赤湯の泉といふ」とある。赤湯の泉については、その後しばらく記録はないが、元禄７（1694）年の貝原益軒の「豊国紀行」他、江戸期の多くの文献に見られる。玖倍理湯井については「玖倍理湯井、郡の西にあり、此の湯の井は、郡の西の河直山の東の岸にあり、口の徑は丈餘なり、湯の色は黒く、涅、常は流れず、人、竊かに井の邊に到りて、聲を發げて大声へば、驚き鳴りて涌き騰ること二丈餘りばかりなり、其の気、熾りて熱く、向ひ昵くべからず、の草木は、悉皆枯れ萎む、因りて慍湯の井といふ、俗の語に、玖倍理湯井といふ」とある。確実な比定はないが、鉄輪温泉のどこかと言われている。

また、日本三代実録の巻十四には、貞観９（868）年に噴火の記録が残されている。それによると、鶴見山（別府の鶴見岳）の上には従五位上の火男神と従五位下の火売神の二社があること、噴火によって大きな被害が出ており、温泉が川に入り魚が多数死んだことなどがわかる。噴火に対し、朝廷は、二神に対し大般若経転読をさせるとともに、火男神を正五位上に、火咩神（火売神）を正五位下に昇格させている。

続く史料は、かなり時代が空き、天文 19（1550）のもの[561]となる。この年の大友宗麟についての記録に、宗麟が別府の浜脇温泉に湯治に来ており、そこから出兵したと書かれている。

---

559 文化庁　国指定文化財等データベース「別府の湯けむり・温泉地景観」
https://kunishitei.bunka.go.jp/heritage/detail/412/00003778（令和６年 12 月 13 日最終確認）。

560 別府市誌編纂委員会「別府市誌」別府市　昭和 60 年２月を参照。異なった典拠がある場合は、当該カ所に別途脚註を付けた。

561 大友宗麟の入湯については上述の「別府市誌」P150-P151 に、田北学編「大友資料」金洋堂　昭和 12 年からの原文を引いて記載されている。

中世末期には別府の浜脇温泉が既に著名な湯治場となっていたことがわかる記録である。浜脇の地は、海上・陸上双方から交通至便であり、湯治は勿論のこと、出兵の拠点としても望ましい立地であった。大友氏は、建久７（1196）年、豊後国守護職に任じられてから長らく別府を含む大分県を支配しており、宗麟の息子義統が文禄２（1593）年に改易されるまで続いていた。大友家改易後現在の別府市は、一時豊臣秀吉の蔵入り地となり、日田毛利家預かり、その後細川家の所領となった。江戸時代になってからは、所領の細分化が進んだが、17 世紀後半から 18 世紀にかけては多くが幕府直轄領となり、19 世紀に入ると島津藩預かりとなった。以下、この時期の別府温泉郷各温泉の状況をみる。

浜脇温泉については、江戸後期の記録が残っており、湯が夥（おびただ）しく出るため村が大変賑わっていること、砂浜の下に湯があり、手で砂を掘り、そこに体をはめて上から砂を掛けて体を蒸す「砂湯」があることなどがわかる。また寺社も八坂神社、八幡朝見神社などの諸神社、薬師堂を含む多数の寺院が建ち並んでおり、参詣者も数多く、線香箱・ローソク・割竹簾・篠竹簾・生姜・芽生姜などが名産となっていた。浜脇は、当時商業的な中心地でもあり、浜脇村と大分の城下町の中間点では、江戸期、浜之市という近隣最大の市が開催されていた。この市では茶屋・芸子商売も認められていた[562]。

別府温泉には貝原益軒の「豊国紀行」（元禄７（1694）年）他、元禄年間（1688～1704 年）からの記録が残る。「豊国紀行」には別府に民家が 500 軒ほどあること、庄屋を含む宿 10 軒に温泉があること、その宿に泊まっている人以外は宿の温泉を使わないためいつ入湯してもよく、また、他の外湯の温泉地と違ってうるさくないこと、脇に冷水があり、温度を調整できることなどが書かれている。また、薬師堂の傍らの熱湯で乾浴ができること、川の下流や海辺にも温泉が湧いており、男女多数が入浴していることも記されている。なお、元和８（1620）年の小倉藩人畜改帳には別府村の戸数を 109 軒としており、500 軒はいささか過剰な表現であったと思われる。正徳２（1712）年の「和漢三才図会」にも別府は掲載されており、満潮の時は湯が海中となること、家ごとに温泉があることなど益軒と同様のことを述べている。文化年中（1804-1818 年）の記録では湯宿の株を 18 軒が所有していることが記されており、内湯を持つ宿では、株を持ち、冥加金を納めていたことがわかる。この頃、日田咸宜園（かんぎえん）の広瀬淡窓が湯治に来ていた記録も残っている。

観海寺（かんかいじ）温泉も益軒の「豊国紀行」に触れられている。ただし、別府より道が悪いとも記されており、交通の便は悪かった。享和３（1803）年の「豊後国誌」には、湯色清潔、硫気なしとある。文化４（1807）年には現在の大分市鶴崎で塾を開校していた儒学者脇蘭室（わきらんしつ）が訪れており、道の険しさを嘆く一方で、湯の効用は名高き湯平（ゆのひら）温泉に並ぶと賞している。そのため、観海寺温泉は療養の地としても利用され、宝永年間（1704～1711 年）には病気平癒により観海寺を再興したとの記録も残る。

堀田温泉も益軒が観音寺とともに道が険しいと記している温泉である。山の麓近くにあり、

562 浜之市と芸者については、松田法子「大分県別府温泉における芸娼妓の社会と空間　旧浜脇村の貸座敷と娼妓を中心に」日本建築学会計画系論文集　第 83 巻　第 747 号　平成 30 年　P979-P986 を参照。

湯の色は淡泊で蛤の汁のよう、硫黄臭は少ないと書いている。湯つぼは 2.5m四方程度で、湯も水も樋から入っていた。観音寺温泉、堀田温泉のある立石村（現：別府市南立石）は明礬を特産としていた。

鉄輪温泉について益軒は「熱泉所々に多し、民俗是を地獄と称す」としており、当時から源泉も湧出量も多かったことがわかる。熱湯の上に構えた蒸し風呂や滝湯があることや、地獄と呼ばれるところが複数あることが記されている。また、寛政７（1795）年の脇蘭室の記録では、蒸し風呂では、木材を構え草土で覆って窟のようにし、薬を敷き、石を枕にしていること、地獄だけでなく蒸気を噴出しているところが多くあり、蔬菜（そさい）や苧麻（からむし）を蒸すのに便利であることが述べられている。寛政 11 （1799） 年史料では、北鉄輪村について「出湯六ヶ所 湯治人あり、石風呂一ヶ所 諸病によし、地獄五ヶ所 麻・いちび・赤米抔蒸物致候」、南鉄輪村について「時宗松寿庵　是ハ除地高外之空地也 藤澤遊行之古跡　湯瀧山松寿寺と申伝候　石風呂 遊行一遍上人開基と申伝候 所々ヨリ湯治人あり 八月廿三日上人之御忌と申薬師庵ニ而仏事供養あり　出湯四ヶ所あり」とあり、湯治客が各所から来ていること、松寿寺（現在の永福寺）が松寿庵としてあり、一遍上人開基の縁起がある石風呂があったことなどがわかる。「藤澤遊行之古跡」とは、時宗の総本山清浄光寺の法主の名称である藤澤上人（引退後は遊行上人と呼ぶ）の訪れた跡ということで、50 世快存（享保 18（1733）年）と 57 世一念（嘉永７（1854）年）の二人の遊行上人が松寿庵を訪れた記録がある[563]。

明礬温泉は、天領と久留島家の森藩に跨がっており、幾つもの共同浴場（伝えられているところでは江戸期に地蔵湯、鶴寿泉、神井泉、鳶温泉の４つ）がある湯治場であるとともに、特産の明礬で知られていた。弘化２（1845）年の「鶴見七湯廼記（つるみしちとうのき）」では、大変渋い味だが、よく諸瘡を直すと書かれている。また、同記には、明礬山にある登備（とび）の尾の湯について、硫黄分が強く口には入れられないが効能は神の手のごとしとある。鉄輪も明礬も遠方からの湯治客は少ない鄙びた温泉で、主に村人が野良仕事の疲れを癒やすのに利用していたという[564]。

現在の別府市の中央部西側（実相寺中央公園の西隣）に当たる鶴見村には、照湯があった。鎌倉時代の弘安 10 年（1287）に源泉が発見されたとの伝承があり、江戸時代初頭の元和年間（1615～1624 年）には、森藩２代藩主久留島通春が入湯したと言われている。「鶴見七湯廼記」によれば、天保　13（1842）　年に再整備された照湯には、一の湯、二の湯、三の湯、 蒸湯、飛泉（打たせ湯）と様々な入浴施設が並び、地獄蒸しの釜があり、薬師院、お茶屋、築山、庭園が造られており、絵図には藩主用の風呂と思われる建物も描かれている。料理屋や二階建ての宿屋と思しき建物もあり、当時の賑わいが想像される。嘉永５（1852）　年の春木川の氾濫で絵図に描かれていた施設は流されてしまい残らない。現在の照湯温泉は、平成 15（2003）

563 寛政 11 年史料、遊行上人については、小泊立矢「江戸時代の別府温泉」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P74-P83 を参照。

564 この段落「鶴見七湯廼記」以降の記述は、小泊立矢「江戸時代の別府温泉」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P74-P83 を参照。

年の建設だが、石造湯槽に殿様湯(御前湯)の古い石材を用いている[565]。

春木川の照湯の対岸には宮路の湯があり、居室と障子で隔てられた上流階級用の湯と、四方が開いて屋根だけついた庶民も入れる湯があった。今は宅地化されている。春木川の南方、現在の今井温泉の場所には伊麻井の湯があった。当時この周辺はどこを歩いても噴気が出るような土地で草木も生えていなかったと記されている。また、鉄輪の近くには壷の湯があったとされるが、どの地か比定できない。

柴石川に沿って源泉が湧出する柴石温泉は、江戸期、長泉寺周辺などに温泉地の発展が限られていた。一方、海辺にある亀川温泉は、小倉街道が通じていることなどから江戸期から栄えており、益軒や蘭室も訪れている。蘭室は潮が引いた時砂浜を掘ると、湯が湧出し、そこに浸かれること、冷めてきたらまた掘れば湧出するので再び熱くできることなどを記している。古市、八幡宮下（湯の森）、四の湯、蕩邪泉などの共同浴場が栄えていたことが知られており、中でも蕩邪泉については、天保５（1834）年の記録に、新築されたばかりであること、遠近から一日数十人の入浴があることなどが残されている。

江戸期に別府に訪れた主な有名人としては、上述した益軒や蘭室に加え、田能村竹田、広瀬淡窓、木食五行などがいる。

＜明治期＞

明治元（1868）年、別府は新たに設置された日田県の一部となり、翌２（1869）年には県役所が、天領時代の代官所があった高松村（現在は大分市の一部）から別府に移転した。また、同年から、殖産興業を目指し、別府港の築造が始まった。港は明治４（1871）年に開港、その後も拡張を続けている。明治６（1873）年には大阪との間に定期航路が開かれ、同じ頃人力車も走り始めた。別府航路については、多数の商船会社がすぐに参入、激しい競争が起こり、その中で京都への今でいうパッケージ旅行商品なども開発され、販売された。明治 17（1884）年に過当競争を避けるため中小の船会社が合同して大阪商船が設立されたことから、一時競合は小康状態になったが、数年後すぐに競争が再燃、明治 45（1912）年にはドイツから購入した豪華客船（「紅丸」）まで別府航路に投入された。

行政区域としては、明治 22（1889）年の町村制施行時点で別府村、浜脇村、石垣村、朝日村、御越村が成立（それまでは区制度であった）、明治 26（1893）年には別府と浜脇が村から町に昇格する（明治 39（1906）年、合併して別府町に）。明治 18(1885）年頃には大分から別府間を客馬車が走り始めており、明治 33（1900）年には別府町字南町～大分町字堀川間に豊州電気鉄道（現：大分交通）が路面電車を開通させた（昭和 47（1972）年廃線）。この結果、馬車の需要は次第に減り、明治末年までには姿を消す。また、明治 44（1911）年には九州鉄道（現：JR 九州）の別府駅ができ、小倉から鉄道で繋がった。

上述したように、別府温泉郷では、別府温泉で江戸期から内湯があったことを除くと、各地

565 「鶴見七湯廼記」による鶴見の温泉地の記述については、段上達雄 「鶴見七湯廼記-その内容と復元の試み-」別府市教育委員会 べっぷの文化財 No.53　令和 5 年 3 月を参照。

とも共同浴場が多く整備され、湯治客に利用されていた。明治 17（1884）年、別府、浜脇、鉄輪などの旅館数は、自炊の木賃宿を含めて 142 軒ほどあったが、３年後の明治 20（1887）年頃になっても、内湯のある旅館は 14 軒程度であった。一方、浴客の殆どが利用していた共同浴場は、明治初め、竹の瓦で屋根を葺いたかろうじて雨をしのげるものに過ぎなかった。このため、明治５（1872）年の清華泉（西の湯）の整備を皮切りに、共同浴場の改善・新設が積極的に進められた。その結果、別府、浜脇、鉄輪など別府地域の共同浴場の入浴客数は、明治 12（1879）年の 24,193 人から、明治 17（1884）年には 162,310 人へと大幅に増えている。その後も共同浴場の整備は進められ、明治 35（1902）年に改築となった「不老湯」は、１階と２階は各 90 坪、３階は 75 坪という主屋を中心に７棟もの建屋があり、休憩室は勿論のこと、商品陳列所まである壮大なものとなっている。

共同浴場整備と並んで進められたのが新規源泉の開発である。明治前半、別府に上総掘りが導入されると、突湯（源泉掘削）が急激な勢いで進められることとなった。上総掘りとは、先端を掘削用に加工した棒で衝撃を加えながら連続して落下させて掘り抜き井戸を掘るパーカション・ボーリング法という技法の一種である。日本では 19 世紀初頭より、「大阪掘り」という人力で鉄棒を持ち上げるやり方が普及していたが、掘れる井戸の深さが 27～36m 程度に止まっていた。この限界を突破し、人力のみで 360～540m も掘削できるようにしたのが上総掘りの手法である。別府では、まず明治 12（1879）年におそらくは大阪掘りで突湯が始められ、ついで明治 22（1889）年に完成途上の上総掘りが導入されたと考えられる。この結果、明治９（1876）年では、別府の温泉は、湧出泉が 31 カ所のみであったのに対し、明治 44 年(1911)末には、町営温泉の源泉が自然湧出７カ所・突湯 17 カ所、自家源泉が自然湧出 10 カ所、突湯 59 カ所へと急増している。その後、上総掘りは別府特有の発展を遂げ、別府では昭和 24（1949）年までに、源泉数が 4,001 孔（枯渇孔と廃孔を含む）にも拡大することとなった（昭和 28（1953）年以降、機械式ボーリングに代替される）[566]。こうした源泉の拡大の結果、明治 35（1902）年には 140 軒もの旅館が内湯化している。

交通基盤と共同浴場の整備、新規源泉発掘による内湯化進展は、別府町に大量の観光客を呼び込むことに成功した。浴客数の推移をみると、明治 39（1906）年 39 万５千人、明治 40（1907）年 40 万８千人、明治 44（1911）年 54 万人となっている。この結果、明治 44（1911）年の旅館数は賄いの出る旅籠、長期逗留客を対象とした自炊の木賃宿及び両者の兼業を合わせて 286 軒と大幅に増加している。ただし、食事の出る旅籠専業は殆どなく、多くは木賃宿か木賃宿と旅籠の兼業であった。また、同年には別府ホテルも開業している。ベッド付き洋室 14 室、畳敷き和室７室、大小４つの浴室に加え、遊戯室、応接室、ビリヤード場、バーを備える本格的な施設であった。

観光のための広告・宣伝が始まったのもこの頃で、その一環として、菊池幽芳（きくちゆうほう）や徳富蘇峰など多くの名士が別府に招かれた。また、明治 45（1912）年には小倉衛成病院別府分院（こくらえいじゅびょういんべっぷぶんいん）も開設

566 湯付きによる源泉拡大については、段上達夫「別府温泉と上総掘り」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P93-P96 を参照。

されている（現：国立病院機構別府医療センター）。

当時の別府には多くの芸娼妓（げいしょうぎ）もいた。明治 11（1878）年には、既に、別府 52 名、浜脇 16 名、関 37 名、下ノ江 10 名の娼妓が確認できる。芸娼妓の数は明治年間を通じて増えており、明治末期には、別府で 80 人以上、浜脇で 120 人程度の数となっている。こうした芸娼妓は、大分県では、当初は旅館などにも住むことが許されていたが、明治後半になると貸座敷への居留が定められるようになる。浜脇では、共同浴場の周囲や新しく開発された湾岸部に多くの貸し屋敷がまとまって立地しており、特有の街並みを形成していた[567]。

明治期の特産品、土産物としては、江戸期に引き続いて竹細工（簾、籠など。当初は実用品中心だったが、次第にデザイン性も高まり、大正時代には海外にも輸出）があった他、縫針（地元の職人が地金の硬化に成功し、「折れず、曲がらず、錆びない針」として売り出して成功）、黄楊（つげ）細工、温泉絞（しぼり）（血の池地獄の泥で染めた手ぬぐい）などがあった。また、明治 13（1880）年の「紙健定席」（明治 30（1897）年に「松濤館」に改名）を皮切りに、明治 32（1899）年寄席「なの字館」ができるなど劇場も開設され、大正期までには活動写真館も普及、現在の松原公園周辺は、劇場、興行場、活動写真館、射的場、勧工場（商品の陳列・即売を行う場。デパートの前身）が集まる一大行楽場となっていた。明治 40（1907）年には別府公園（旧別府公園。第二次世界大戦後米軍に接収され、その後自衛隊駐屯地になり、昭和 52（1977）年に新公園として再整備）も作られ、園内には温泉神社（大正８（1919）年創建）、共同浴場、休憩所、料亭などが設けられた。この公園には、開園直後、当時皇太子であった大正天皇も行啓されている。

明治期に別府を訪れた有名人としては、菊池幽芳や徳富蘇峰に加え、徳田秋声、長塚節（ながつかたかし）、夏目漱石などがいる。

＜大正・昭和戦前期＞

大正から昭和にかけ、別府町は、大正 13（1924）年の市制施行、昭和 10（1935）年の石垣村、朝日村、亀川町編入と大きく拡大した。また、交通基盤については、かつての豊州電気鉄道が、昭和２（1927）年、大分電気鉄道（現：大分交通）となり、路線の拡幅や複線化を積極的に進めるとともに乗合自動車事業を開始した。これを契機に各社が参入、バス路線が急拡大していくこととなる。翌昭和３（1928）年には地獄巡りで有名な亀の井自動車も発足している。亀の井自動車の「亀の井遊覧バス」は、25 人乗りバスを４台配置し、女性ガイドが七五調で鉄輪の各地獄を解説してまわるという当時としては画期的なサービスを提供し、大きな人気を博した。この年は、別府で「中外産業博覧会」（当時全国で行われていた産業・勧業博覧会の一つ）が行われ、80 万人もの観客を集めていた時でもあり、「亀の井遊覧バス」の地獄巡りもこの開催に合わせて開始されたものであった。別府の地獄が大きな観光資源となる

567 芸娼妓の状況については、松田法子「大分県別府温泉における芸娼妓の社会と空間　旧浜脇村の貸座敷と娼妓を中心に」日本建築学会計画系論文集　第 83 巻　第 747 号　平成 30 年　P979-P986 を参照。

のはこれを契機とする[568]。また、昭和６（1931）年には別府温泉祭りも始まり、別府の春の風物詩となった。

源泉の掘削は大正、昭和戦前期も活発に続いている。これに伴い、当初は既存の温泉地周囲が多かった源泉の位置が、次第にそこを離れ、温泉地と温泉地を繋ぐ地域や市域拡大に伴って新たに開発された地域に広がり、それが新たな旅館街の拡張をもたらした。また、明治年間には共同浴場を中心とした旅館立地が進んでいたのに対し、大正期以降は、共同浴場と関係なく旅館が立地していく傾向が見られる。大正９（1920）年時点で、別府地域の旅館 171 軒のうち、８割以上に当たる 142 軒が内湯を導入している。既に旅館業者にとって共同浴場は必ずしも必要なものではなくなっていた。代わりに重要になったのが、眺望などの新たな魅力付けであり、海岸沿いに木造３階建て、４階建て、５階建ての旅館が林立していくことになった[569]。

この中で業態の変化も見られていく。自炊型の木賃宿よりも、一泊二食がついた旅籠型が次第に増えていくのである。この変化には同じ別府市内でも地域差があり、別府地域、特に海岸沿いで旅籠型の高層大規模旅館が増えていったのに対し、浜脇では木賃型が多く残り、高層化は進まなかった[570]。

旅館の内湯化が進む中でも、共同浴場の整備は続いた。大正３（1914）年に改築された「楠温泉」は浴舎の北側の公園に薬師如来像を安置して人気を博し、大正６（1917）年の霊潮泉の改築では、男湯と女湯の他に、砂湯８カ所、蒸し湯２カ所、あがり温泉浴も２カ所あり、入浴料は無料であった。その他、先に述べた不老園をはじめとする多数の共同浴場の再改築、梅園温泉や薬師温泉などの新規浴場開設など多数の整備が大正から昭和初期にかけて行われている。大正 14（1925）年には亀川海軍病院（現：国立病院機構別府医療センター）[571]、昭和３（1928）年には、当時東洋一と謳われ、第二次世界大戦後も昭和 63 （1988）年までレトロな外観で親しまれていたコンクリート建ての浜脇温泉・浜脇高等温泉も建築された。

この時期は、大型の観光客向け共同浴場だけでなく、地域住民向けの浴場整備も合わせて進んでいる[572]。また、この頃から温泉の給湯が事業として開発され、今も給湯事業を続けている泉都温泉給湯が大正９（1920）年に観音寺地区で開業するなど、幾つもの会社が設立されている[573]。

---

568 亀の井自動車の遊覧バスについては、中山昭則「温泉観光の過去と現在」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P157-P196

569 この段落は、松田法子・大場修「泉源開発と旅館街の立地傾向にみる近代大規模温泉町の 成立過程―別府温泉を事例として ―」日本建築学会計画系論文集　第 582 号　P153-P159　平成 16 年８付きを参照。

570 この段落は、松田法子・大場修「近代大規模温泉町の成立過程と大規模旅館の諸相―別府温泉を事例として ―」日本建築学会計画系論文集　第 582 号　P145-P152　平成 16 年８付きを参照。

571 亀川海軍病院については、永野康洋「近現代の別府温泉」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P84-P93 を参照。

572 住民向け共同浴場については、松田法子・大場修「泉源開発 と旅館街の 立地傾向にみる近代大規模温泉町の 成立過程―別府温泉を事例として ―」日本建築学会計画系論文集　第 582 号　P153-P159　平成 16 年８付きを参照。

573 給湯事業の開始については、景観保存計画事務局「別府温泉と上総掘り」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P97-P99 を参照。

レジャー施設としては大正 14（1925）年に鶴見園が開園、温泉と少女歌劇を売り物に「九州の宝塚」とも呼ばれた。続いて昭和４（1929）年には別府ケーブル遊園地（現：ラクテンチ）が開場した。ケーブルカーに乗ってかつて金山があった山の頂上に登って展望温泉を楽しむもので、ミニ動物園や演舞場もあった。昭和 12（1937）年には「別府国際温泉観光博覧会」という大イベントも別府公園で開催され、温泉館、観光館、満州館、朝鮮館、台湾館、美術館など 100 以上のパビリオンに連日１万人以上の観客が詰めかけた。昭和６（1931）年には九州帝国大学温泉治療学研究所が竣工した。これは、温泉浴を主とした光線浴、電気浴、炭酸ガス浴、鉱泥浴、ラジウム浴、各種薬浴、熱気浴、砂浴、ファンゴー纏浴、腸薬浴、赤外線浴、電光浴などの普通浴場、全身浴場、部分治療浴場などが整備された本格的な温泉医学施設であった[574]。また、昭和 14（1939）年には、亀川海軍病院が別府海軍病院になっている。

大正時代から昭和 10 年代にかけては、新たな特産品も発売された。明礬温泉では、従来からの湯の花に加え、温泉水を「別府薬用鉱水」として販売、硫黄山（伽藍岳）から湧出する温泉水は、天然薬・胃腸強壮薬「別府霊泉」として販売されていた。「別府鉱水サイダー」の全国販売も行われていた[575]。

上述した市制拡大、交通基盤の拡充、施設整備などにより、大正 12 （1923）年に発表された「全国温泉鉱泉ニ関スル調査」（大正 10（1921）年頃の数値と考えられる）では、別府温泉郷の入浴客数は 778,799 人で全国３位、昭和 16 （1941） 年に発行された「日本温泉大鑑」では入浴客数 1,011,339 人とついに 100 万人を突破、全国２位となっている[576]。

一方、昭和６（1931）年には、観海寺温泉が大火により灰燼に帰すなどの事件も起こっている。観音寺温泉は、明治以降大きく発展し、田山花袋・徳田秋声・大佛次郎・西条八十ら多くの文人が訪れていた名泉であった。

第二次世界大戦が激化すると、こうした賑わいも消えていき、一気に別府の温泉観光は停滞することになる。昭和 15（1940）年の紀元 2600 年祭を最後に国内観光市場は冷え切り、昭和 17（1942）年には県の命令で資源の供出が始まった。こうした中、鶴見園は昭和 18（1943）年に閉園を余儀なくされ、昭和２（1927）年に整備されて名物となっていた鉄輪のひょうたん温泉（大きなひょうたん型の建物がランドマークになっていた）も、昭和 20（1945）年５月、空襲の標的となるということで撤去されてしまった。

大正、昭和戦前期には、徳冨蘆花、斎藤茂吉、土屋文明、竹久夢二、高浜虚子、若山牧水、与謝野寛などがいる。

---

574 九州帝国大学温泉治療学研究所については、永野康洋「近現代の別府温泉」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P84-P93 を参照。

575 この段落は、永野康洋「近現代の別府温泉」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P84-P93 を参照。

576 入浴客数については、中山昭則「温泉観光の過去と現在」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P157-P196

＜第二次世界大戦後＞

敗戦後の別府は、米軍の進駐により始まった。別府公園だけでなく、多くの旅館・ホテルも米軍に接収された。旅館・ホテルの返還は、昭和 22（1947）年から始まり、昭和 28（1953）年にはほぼ終わったものの、建物も、庭園も、そのまま使えるような状態ではなかった。こうした状況に対し、別府市は、「別府国際観光温泉文化都市建設法」（憲法 95 条に基づく一つの地方公共団体にのみ適用される法律で、制定にあたっては当該地方公共団体の住民投票で過半数を得ることが必要）の成立を国会に請願した。昭和 25（1950）年に同法は成立、別府の観光による都市復興に国からの支援が受けられることとなった。

この法律により、別府国際観光港の整備及び九州中部を横断する国際観光道路の整備が進んだ。別府から湯布院、阿蘇、島原、雲仙、長崎へと繋がる九州横断道は、昭和 39（1964）年に完成、九州における広域観光ルートの構築に繋がった。また、同時期には、日豊線の無煙化（当初はディーゼル化し、その後電化）や複線化、特急の投入などにより、鉄道による輸送力も大幅に拡大された。

レジャー施設については、別府ケーブル遊園地が、昭和 25（1950）年、「別府ケーブルラクテンチ」として再開した。昭和 32（1957）年には展望塔である観光センターテレビ塔（現：別府タワー）が、昭和 37（1962）年、鶴見岳の頂上に繋がる別府ロープウェイが開業され、鶴見岳に気軽に登頂できるようになった。戦前からあった鶴見園は、再開後、昭和 44（1969）年、ホテル、大浴場、劇場を備えた鶴見園レジャーセンターとして再出発した（昭和 51（1976）年に閉園）。また、昭和 32（1957）年には「別府温泉観光産業大博覧会」が開催され、会場には 50 もの施設・パビリオンが立ち並び、連日１万人以上の観客が押し寄せている。

昭和 30 年代には、他にも、昭和 37（1962）年にザボン園、昭和 38（1963）年藤田観光別府園ファミリーランド（熱帯植物園だったが、閉園し、宅地に）、昭和 39（1964）年に大分生態水族館が開業している（現：大分マリーンパレス水族館「うみたまご」）。また続く昭和 40 年代には、昭和 42（1967）年にスギノイパレス（温泉、レストラン、アミューズメント、売店、ブライダルサロン等が揃ったエンターテインメント施設）と遊園地城島モートピアアイランド（現：城島高原パーク）が、昭和 43（1968）年に志高ユートピア（レーシングカートが名物の遊園地だったが、平成 20（2008）年閉園）が開園した。昭和 50 年代には、昭和 51（1976）年に「九州自然動物公園アフリカンサファリ」が開業している[577]。

レジャー以外の施設としては、昭和 35（1960）年には、財団法人大分県原子爆弾被爆者 対策協議会が世界初と謳われた原子爆弾被爆者別府温泉利用研究所が設立され、1980 年代後半には年間２万人を超える利用者がいた。しかし、被爆者の高齢化や死亡等で利用者が激減したことから、平成 23（2011）年に閉院している[578]。

---

577 別府温泉観光産業大博覧会や各施設の設立、昭和 30 年代半ばの観光客数の概数については、中山昭則「温泉観光の過去と現在」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P157-P196

578 溝口元「傷痍軍人とリハビリテーション ― 温泉療法ならびに職業補導を中心に」立正大学社会福祉研究所年報第 19 号　平成 29 年　P230-P244

こうした交通基盤、各種集客施設の整備を受け、別府への観光客は昭和 30 年代から大きく増加していく。団体旅行客が多く訪れるようになり、これに対応するため、別府のホテル・旅館は巨大化し、収容人数を拡大していった。数値でみると、昭和 31（1956）年、収容人数 14,835 人であったものが、昭和 56（1981）年には 45,000 人にまで膨れ上がった。これに伴い、かつての自炊型の宿泊施設はほぼ消滅し、宿泊施設も、ホテルの割合が大きく増大した。

別府市の観光客数推移をみると、昭和 30 年代半ばには 600 万人に届いていなかったものが、昭和 41（1966）年には 7,017,832 人、昭和 46（1971）年には 10,309,657 人と一千万人を突破、昭和 56（1981）年には 13,121,962 人とピークに達している。しかし、この後、これ以上の増加はなく、昭和 57（1982）年には 1,200 万人台に低下、さらに昭和 59（1984）年には 1,100 万人台まで減少した。その後、昭和 60 年代に入ると、バブル景気を受け観光客がやや増加し、平成元（1989）年から平成３（1991）年までは 1,200 万人台に戻っている。だが、バブルが崩壊すると、平成４（1992）年には一時 10,838,253 人と 1,100 万人を割り込む。その後は若干の回復を見せ、1,100 万人台に戻っているが、横ばい傾向が続くこととなった（平成 21（2009）年は 11,999,003 人）[579]。

1980 年代初頭、別府観光の成長が止まった理由としては、明治以降長く続いてきた大量集客のあり方が限界に来つつあったことが指摘される。別府は、当初は壮大な共同浴場、ついで眺望を売りにした海岸沿いの高層の旅館街、地獄巡りなどの景勝地、さらに各種の大型レジャー施設を相次いで開発し、日本一豊富な温泉湧出量を背景に、一泊二日型の行楽客、修学旅行などの団体客を多数獲得、急激な成長を果たしてきた。しかし、高度経済成長の終焉に伴い、団体による慰安旅行型の国内観光旅行は急激に衰退、またバブル崩壊以降は、新規の大型施設を作るだけでは観光地の魅力を打ち出せない時代が訪れた。より個性的で体験性の高い観光が求められる時代になったのである。この中で、別府は、ラクテンチの経営不振や別府を代表する大型旅館の民事再生など、入込数値だけでは測れない苦境に相対することになる[580]。

これに対し、別府市では、バブル崩壊後の平成６（1994）年、別府八湯の個性化を基軸とする新たな方針を打ち出し[581]、地元も、平成８（1996）年に「別府八湯勝手に独立宣言」を行って竹瓦の裏路地散歩を行う[582]など、地域の個性を深掘りし、活かす活動を次々と始めていった。中でも大きかったのが平成 13（2001）年に地元関係者により発足した「別府八湯温泉泊覧会(オンパク)」である。オンパクは、地域づくり 団体・個人・商店街・学生等で構成され

---

579 昭和 41 年以降の観光客数推移については、別府市ホームページ「観光統計年間調査」 https://www.city.beppu.oita.jp/sangyou/kankou/sokuhou_01.html（令和６年 12 月 20 日最終確認）を参照。

580 井上博文、鶴田浩一郎、遠島孜、高島鴨子、市原実、関谷忠「シンポジウム 『温泉観光都市別府の活性化』」総合観光研究 第３号 平成 16 年 11 月 P59-P66 を参照。当時の別府観光への危機感と問題認識がわかる。

581 別府市、山村順次「別府市における共同温泉と温泉地整備に関する調査研究報告書」平成６年３月

582 「別府八湯勝手に独立宣言」については岡村祐・野原卓・西村幸夫「我が国における『観光まちづくり』の歴史的展開-1960 年代以降の『まちづくり』が『観光』へ近接する側面に着目して-」観光科学研究 第２号 平成 21 年 P21-P30 を参照。

る市内外のオンパクパートナーが、参加費となるガイドブックの掲載料を支払い、行政・観光協会・商工会議所・旅館・商店等がスポンサーとなって、プログラムの企画・提供を行うという活動で、毎年多数の地域発のプロジェクトを生み出してきた。温泉泥によるエステサービス、地獄蒸し屋台等のプログラムの商品化など、オンパクの成果は数多くある。

市でも、オンパクとも連携し、泉都別府ツーリズム支援事業を展開（現在は終了）、地元のボランティアガイドによるまち歩き活動の別府八湯ウォーク、別府路地裏バル実行委員会、別府八湯てんてく実行委員会の活動などの支援を実施した。この他にも、鉄輪・明礬地区の別府の湯けむり・温泉地景観の重要文化的景観選定に関する活動や景観条例の策定などの歴史的・文化的景観の整備の推進や、国際クルーズ船やMICEの誘致などのインバウンド観光の振興、中心市街地活性化政策としての「別府現代芸術フェスティバル　混浴温泉世界」の継続的な支援など、多様な事業を実施してきている[583]。また、平成30（2018）年には、ラクテンチが刺激的なYouTube動画「湯～園地計画」で全国の耳目を惹き付けるという話題もあった[584]。

平成22（2010）年からは、それまでの統計基準での集計が終了し、観光庁の「観光入込客統計に関する共通基準」に則った統計となったため平成21年以前との比較はできない。そのため傾向のみの検討となるが、2010年代の状況をみると、平成22（2010）年7,932,851人、平成23（2011）年7,881,241人、平成24（2012）年8,036,213人、平成25（2013）年8,244,867人、平成26（2014）年8,165,065人、平成27（2015）年8,797,440人と緩やかな上昇を見せている。翌平成28（2016）年は、熊本地震の影響があり、7,944,021人と減少したものの、平成29（2017）年には8,806,878人と復活、平成30（2018）年には9,043,095人と新基準になってからの最高値を記録した。なお新型コロナウイルス感染症が拡大する直前の令和元（2019）年は8,335,773人（台風及び一部施設リニューアルの影響、韓国との外交摩擦などで減少）、新型コロナウイルス感染症が一応の収束を見た令和５（2023）年6,800,812人となっている。なお、令和４（2022）年度の宿泊施設数は337カ所、収容人員は21,529人、宿泊利用人員は1,927,572人泊である[585]。

近年の別府観光の緩やかな復活には、上述した多彩な観光振興活動、特に八湯それぞれの地域づくりと連携した動きが大きく貢献していると考えられる。こうした活動の多くは温泉に関わるものでもある。別府温泉郷は、歴史からアートまで、食や化粧品からYouTubeまでのあらゆる手段を使って、新たな温泉地像、観光像を作りつつある。

---

583 別府の近年の観光動向については、堀 桂子、佐藤 由利子、村山 武彦、錦澤 滋雄「別府市の観光まちづくりにおける協働の課題―マスツーリズムとニューツーリズムの分析より― ―マスツーリズムとニューツーリズムの分析より―」観光研究Vol.27　No.1　平成27年9月　P115～ P125を参照。混浴温泉世界については、別府市ホームページ「混浴温泉世界実行委員会事業」https://www.city.beppu.oita.jp/gakusyuu/bunkakatudou/konnyoku.html、NPO法人BEPPU PROJECTホームページhttps://www.beppuproject.com（令和６年12月20日最終確認）を参照。

584 日経クロストレンド「【新市場を創造！　「マーケター・オブ・ザ・イヤー２０１８」】「湯～園地」の舞台裏（後編）地方創生には余白のデザインが大事」平成30年６月18日参照。

585 大分県ホームページ「大分の温泉」https://www.pref.oita.jp/site/onsen/onsen-date.html（令和7年8月18日最終確認）。

別府温泉郷の源泉

令和５(2023)年現在における別府市の源泉数は 2,832 本で、利用源泉数が 1,907 本、うち自噴が 372 本、動力噴が 1,535 本である。泉温別にみると、25 度未満が４本、25 度以上 42 度未満が 229 本、42 度以上が 2,224 本、水蒸気及びガスが 375 本で、泉温が高い源泉が多い。湧出量は、自噴が 28,667 リットル／分、動力が 73,243 リットル／分で、自噴の方が一本あたりの湧出量が多くなっている[586]。

湧出量の豊富さから長年積極的に新規源泉の掘削が行われてきた別府市であるが、温度低下や掘削深度の増加、噴気・沸騰泉の減少などが確認されたことから、昭和 43（1968）年に、鉄輪温泉・亀川温泉・浜脇温泉・別府温泉南部が、一切の新規温泉掘削を禁止する特別保護地域に設定された。さらに平成 30（2018）年より市域のほぼ全域が保護地域に指定されており、保護地域では、一般の温泉は他の源泉から 100m 以内での掘削が不可（保護区域外では 60m 以内不可）、噴気・沸騰泉では 150m 以内が不可である（保護区域外でも 150m 以内不可）。令和４（2022）年４月からは掘削禁止の特別保護地域が、亀川温泉、堀田温泉や観海寺温泉を含む南立石、及び、明礬温泉の南側の一部にも拡大された[587]。また、大分県では、源泉を掘削する場合、動力装置での揚湯量は 50 リットル／分以下とし、噴気・沸騰泉の場合は 80㎜ 以下の口径の埋設管と定めている（大分県環境審議会温泉部会の内規）[588]。

下記、鉄輪温泉、明礬温泉の温泉分析書を公開している事業者の源泉リストを示す[589]。

＜鉄輪温泉＞

源泉名	温度	泉質	掘削／自然湧出	自噴／動力	所有者
湯けむりの里　東屋	94.1	酸性-ナトリウム-塩化物・硫酸塩泉	掘削	自噴	民間
うかり湯	95.5	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
海地獄	94.5	ナトリウム-塩化物温泉	自然湧出	自噴	民間
エンマの湯	99.7	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
鬼石の湯	88.6	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
別府温泉　鬼山地獄	81.0	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
温泉組合	97.6	単純温泉	噴気	自噴	民間
湯元　かなわ荘	97.1	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
竈地獄	98.0	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
山荘　神和苑	97.5	ナトリウム-硫酸塩・塩化物泉	掘削	自噴	民間
神和苑	98.9	ナトリウム-塩化物泉	自然湧出	自噴	民間
別府市鉄輪泉源	99.6	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	公営
別府市温泉供給事業鉄輪線渋の湯上	83.4	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	公営
別府市温泉供給事業鉄輪線上人湯上	82.5	ナトリウム-塩化物泉	噴気	自噴	公営

586 大分県ホームページ「大分の温泉」https://www.pref.oita.jp/site/onsen/onsen-date.html（令和６年 12 月 13 日最終確認）

587 掘削制限については、別府市「別府市温泉マネジメント計画」令和６年３月

588 現地調査ヒアリングによる。

589 環境省「鉄輪温泉、明礬温泉、柴石温泉国民保養温泉地計画書」令和２年 10 月

鉄輪むし湯（足蒸し）	99.5	単純温泉	掘削	自噴	公営
鉄輪むし湯	99.5	単純温泉	掘削	自噴	公営
金龍地獄	97.2	ナトリウム-塩化物泉	掘削	動力	民間
絶景の宿　さくら亭	92.2	酸性-ナトリウム-塩化物・硫酸塩酸泉	掘削	動力	民間
さくら亭（家族風呂）	92.2	酸性-ナトリウム-塩化物・硫酸塩酸泉	掘削	動力	民間
絶景の宿　さくら亭	52.3	ナトリウム-塩化物・硫酸塩泉	掘削	自噴	民間
サンライズニュータウン	92.1	単純温泉	噴気	自噴	民間
地獄蒸し工房鉄輪	99.3	単純硫黄泉	掘削	自噴	公営
星光鉄輪旅館	93.4	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
つるや温泉	98.5	ナトリウム-塩化物泉	噴気	自噴	民間
中野屋	95.3	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
ひょうたん温泉	97.8	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
ひょうたん温泉	97.5	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
別府市みゆき坂泉源	95.1	ナトリウム-塩化物温泉	掘削	自噴	民間
別府旅館　湯元美吉別荘	67.8	単純硫黄泉	掘削	動力	民間
ヤングセンター	97.2	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
やすらぎの宿　由布	78.7	ナトリウム-塩化物泉	掘削	動力	民間
陽光荘	89.3	ナトリウム-塩化物・硫酸塩泉	掘削	自噴	民間
旅館　よしとみ荘	88.0	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間

＜明礬温泉＞

源泉名	温度	泉質	掘削／自然湧出	自噴／動力	所有者
旅籠　扇山	43.1	単純温泉	掘削	動力	民間
岡本屋旅館	74.4	酸性・含硫黄-単純温泉	自然湧出	自噴	民間
別府市おぐら荘泉源	98.6	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
おぐら荘泉源	98.8	ナトリウム-塩化物泉	掘削	自噴	民間
鶴寿温泉	61.8	酸性・含鉄（Ⅱ・Ⅲ）-硫酸塩泉	自然湧出	自噴	公営
さわやかハートピア明礬	56.1	単純硫黄温泉	掘削	自噴	民間
さわやかハートピア明礬	59.2	単純温泉	掘削	動力	民間
トビ温泉	66.0	単純硫黄泉	自然湧出	自噴	民間
発電の湯（仮称）	94.3	単純温泉	掘削	自噴	民間
別府温泉保養ランド	42.4	単純硫黄泉	掘削	自噴	民間
別府温泉保養ランド露天大浴場	39.9	単純酸性泉	自然湧出	自噴	民間
別府温泉保養ランド	49.7	単純酸性泉	掘削	自噴	民間
みょうばん　湯の里	64.4	酸性・含硫黄-単純温泉	自然湧出	自噴	民間

別府温泉郷の共同浴場

＜共同浴場の概要＞

別府市の共同浴場は３つの形態があり、市営温泉、市有区営温泉及び区有区営温泉がある。そのうち、市営温泉は 17 カ所（うち２カ所は休業中）、市有区営温泉及び区有区営温泉は 82 カ所（うち１カ所閉鎖）、このうち鉄輪温泉の共同浴場は、市営温泉２カ所（鉄輪むし湯、熱の湯）、市有区営及び区有区営温泉９カ所（上人湯、渋の湯、北中温泉、すじ湯、地獄原温泉、大師温泉、北鉄輪温泉（閉鎖））（うち１カ所閉鎖）の計 12 カ所である。一方、明礬温泉では、市営温泉２カ所（地蔵温泉、鶴寿温泉）（２カ所とも休業中）、市有区営１カ所（照湯温泉）の計３カ所となっている[590]。

市有市営とは別府市が設置・運営している共同浴場、市有区営とは設置は別府市だが運営

590 環境省「鉄輪温泉、明礬温泉、柴石温泉国民保養温泉地計画書」令和２年 10 月

は「区（町会）」が行っている施設、区有区営とは設置も運営も「区（町会）」が行っている施設である。共同浴場の殆どに共通しているのは屋内ベンチと薬師如来石像だけであり、あとは設置・運営形態によって実態が異なる。市有市営には有人番台があるのに対し、市有区営の場合は番台が無人なことも多く、区有区営ではほぼ無人もしくは番台なしである。

区営の共同浴場とは、町会の組合員が運営を行っている浴場であるということを意味している。区有の場合は施設自体も町会の組合員が資金を工面して作っている。運営はボランティアであり、光熱費などの経費は、組合員費（町会の参加者など）が支払ってきた。そのため、そもそも組合員しか利用できない共同浴場もある。現在は、高齢化や施設の老朽化などの問題があり、外部の人に有料（割高）で入ってもらう、組合費より高額のサポーター費を払う新たな会員制度を作る、NPO 法人に運営を委ねるなどの工夫が行われている。一方、市営温泉の施設については、観光客を含め誰もが入れる施設として運営されている[591]。

＜竹瓦温泉[592]＞

竹瓦温泉は、明治 12（1879）年創設の共同浴場で、別府町北部に旅館街が形成されるきっかけとなった明治期の別府温泉拡大を支えた施設の一つである[593]。「嘗つて疎雑なる竹瓦の浴場なりしを以て此の名あり」と昭和初期の記録に残る（明治 35（1902）年、木造二階建てに改築されている）。明治に改築した建物は、男女計 22 個の浴場（泉浴各１、砂浴各１、臥浴各９）を擁し、階上に 90 畳の休憩室を持つものであった。当初から市有市営である[594]。

現在の建物は昭和 13（1938）年に建設されたもので、明治の改築では単純な入母屋造りであったものを豪華な唐破風造りとしている。また、現在２階は公民館に使用されているが、格天井（ごうてんじょう）で舞台が付き高欄に囲まれた広間があり、かつては浴客の憩いの場であった。浴場としては、普通浴の浴室が男女各１室、男女共用の砂湯が１室、砂湯用の上がり湯が２つある。１階エントランスのホール部分で男女を振り分け、普通浴室と砂湯用の男女別々の脱衣場・上がり湯に誘導する。砂湯を使うにあたっては、男女別の脱衣場で裸になり、その上に浴衣を着て砂場に行き、砂の上に横たわる。すると、「砂かけさん」と呼ばれる職員が温泉で暖められた砂をかけてくれる。横たわる際には木製の「砂枕」に頭を乗せる。掛ける砂の重さは体重の 1.5 倍くらいになり、かなり重い。

砂湯の利用は 30 分間で８人である（砂湯の管理の時間があるので、実際の砂湯の利用時間は 15 分程度である）。砂湯は左と右に分かれており、片方で砂湯を行い、もう片方はその間（30 分間）湯を張って砂を暖める。砂が温まったら使う面を交代させる（次に入ってくる客

591 別府市全体の共同浴場数及び共同浴場の仕組みについては、轟隆介・姫野由香・横田彩夏・長広颯太朗「大分県別府市に於ける今後の共同温泉の運営形態についての研究」日本建築学会九州支部研究報告　第 62 号　令和５年　P329-P332

592 この項は別途脚註を除き現地調査による。

593 開業年時及び改築年時などについては、別府市誌編纂委員会「別府市誌」別府市教育委員会　昭和 48 年参照。

594 別府市教育委員会編「別府市史」別府市教育会　昭和８年参照。ちなみに竹瓦の屋根とは割り竹で屋根を葺いたものである。

は前の組とは別の面を使う）。

砂湯の源泉は竹瓦温泉で湧出しているもの（ナトリウム・カルシウム・マグネシウム–塩化物・炭酸水素塩泉（塩化物泉）／pH7.3／泉温 52.1 度（測定時気温 14.3 度）[595]を使っており、源泉のパイプのバルブを開けると湯が計６本ある配管（左右３本づつ）を経由して上がってくる。各砂場を囲う枠の下にパイプがあり、そこに幾つも開けられている穴からお湯が出てきて、砂を覆う。竹の栓があり、それを閉めているとお湯が貯まり、開けるとお湯が下に抜ける。

お湯は源泉からそのまま出ている。配管やポンプに汚れが溜まるため、毎週第３水曜日に清掃を行っている。また、砂は段々と減ってくるので川砂を足している。


竹瓦温泉の外観。唐破風造りとなっている。


竹瓦温泉の休憩室。内部もレトロな雰囲気である。


砂湯。左に湯が張られ、右は砂となっている。


左側パイプ裏のバルブを回すと湯が枠の下から出る。


砂枕


砂場の地下の配管


上がり湯

595 竹瓦温泉（砂湯）の温泉分析書（平成 31 年 2 月 20 日調査）より。
https://www.city.beppu.oita.jp/doc/sisetu/sieionsen/04/bunseki_suna.pdf

＜鉄輪及び明礬の共同浴場＞

別府の共同浴場の典型として、鉄輪の渋の湯がある。ここは区有区営の「渋の湯組合温泉」であるが、観光客にも開放されている（組合員も組合員外も入浴料は 100 円均一）。

ここの特徴として小型の湯雨竹（ゆめたけ）（湯雨竹については「ひょうたん温泉」の項で後述）を設置し、平均 85 度となる源泉を 30 度以上冷却して使用していることがある。他の無人の区有区営共同浴場でも同様であるが、湯温の調整については、入浴者自身が源泉のバルブを動かして行うこととなっている。湯の管理の例として、最終的な湯温の管理を地域共同体に委ねている点でユニークな事例ということができる。





渋の湯の入り口と浴場（女湯）の全体像。入り口の上には賛助会員の名前が並んでおり、区（町会）の組合だけでなく、周辺の旅館との連携の下で運営されていることがわかる。浴場の中には丁寧に入り方が教示されており、観光客の外湯巡りにも対応している。



源泉のバルブ。どの範囲でどこまで動かしていいのかを教示する注意書きがついている。
温度を下げるための加水用の水道もあるが利用は推奨されていない。



ミニ湯雨竹。ひょうたん温泉を経営している会社の製品である。源泉の管が上部に通っており、そこから竹の下を通過する中で温度を急激に下げている。

なお、渋の湯を含む鉄輪及び明礬の共同浴場（大規模な日帰り入浴施設は除く）は下記の通りとなっている[596]。

①鉄輪温泉エリア（鉄輪・鉄輪上・北鉄輪・御幸・井田・風呂本・鉄輪東・北中）

・鉄輪むし湯（市営温泉）　：入浴料　700 円　レンタル浴衣 220 円　※足蒸しは無料
　塩化物泉（浴槽）
　単純温泉　泉温 99.5 度（むし湯、足蒸し）
・熱の湯（市営温泉）　：入浴料　無料　　塩化物泉
・北鉄輪温泉（廃業）
・砂原温泉（廃業）
・地獄原温泉　：入浴料　100 円　　塩化物泉
・渋の湯　：入浴料　100 円　　塩化物泉
・上人湯　：入浴料　100 円　　塩化物泉
・筋湯　：入浴料　100 円　　塩化物泉
・大師湯（組合員のみ）
・谷の湯　：入浴料　150 円　　塩化物泉
・ふれあい温泉（営業状況不明）
・湯の川温泉（組合員のみ）



鉄輪むし湯外観。蒸し湯は薬草を使ったもの。


無料で使える足蒸し湯


鉄輪むし湯にある旧むし湯跡地を整備した場所。右にある建屋は、旧むし湯の建材を使い、旧むし湯の様子を再現したモニュメント。左側にあるのは湯かけ上人。



一遍上人の立像「湯かけ上人」。永福寺の湯浴み祭（後述）の時しかできなかった湯かけをいつでも出来るように建立。

596 環境省「鉄輪温泉、明礬温泉、柴石温泉国民保養温泉地計画書」令和 2 年 10 月、及び、別府八湯温泉道　公式サイト https://onsendo.beppu-navi.jp（令和 6 年 12 月 13 日最終確認）を参照。



熱の湯



渋の湯の全景



筋湯

温泉遺産「洗濯湯」。大正年間に寄贈されたもので最初は「下ん熱湯」という名で浴用に使われていたが、泉温が低く、泉質が洗濯に適していたため洗濯湯になった。その後洗濯機の普及とともに廃止され、今は遺構が「温泉遺産」として整備されている。



③　明礬温泉エリア（明礬・小倉）

・鶴寿泉（市営温泉／休業中）

・地蔵泉（市営温泉／休業中）

・丘の湯温泉（組合員のみ）

・新湯温泉（組合員のみ）

・長泉寺薬師湯　　：入浴料　お賽銭　酸性泉

・照湯温泉　　：入浴料　300 円　単純泉　江戸時代の石組浴槽が残る。

鉄輪・明礬・別府の湯の管理の技術[597]

＜鉄輪むし湯＞

鉄輪むし湯は、鎌倉時代の建治２年（1276 年）に一遍上人によって創設されたと伝えられる蒸し湯を体験できるように再現した市営温泉である。石室の中に石菖（せきしょう）と呼ばれる薬草を敷き、その上に着衣のまま横たわるスタイルが特徴である。

現在の施設は平成 18（2006）年にリニューアルされたもの。開業時期については不明確であるが、明治時代、昭和初期の施設写真が残っており、リニューアルを重ねながら運営されてきたことがわかる。

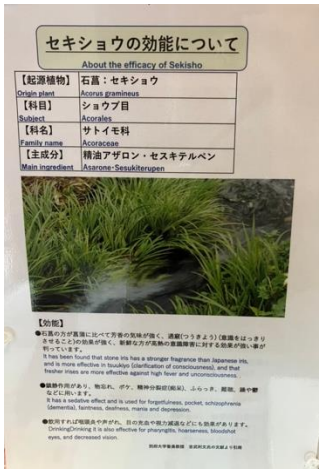


明治・昭和初期の鉄輪むし湯。昭和初期の建物は１階がむし湯、２階が公民館となっており、当時は混浴であった。
※鉄輪むし湯内の掲示資料

むし湯は石組みの石室の中に板で床を張り、床下と室内に温泉の蒸気を吹き込むことで室内の温度を高めている。床には石菖が敷かれており、その上に横たわることで清涼感のある石菖の香りとともに体内からじわりと温まり、発汗を促す。石室内は室温 60 度、湿度 90%をモニターで維持しており、室温は 98～100 度の蒸気の流入量によって調整している。入浴時間は８分が基本で、延長２分を含め最長 10 分までである。サウナのように出たり入ったりはしない。一度入浴すると 20-30 分汗が引かないほど温まる。

石菖は菖蒲の一種であり、健康促進の効能があるとされている。山の上の清流の両岸にしか生えないため、むし湯で使用する石菖は自生のものに加えて別府市役所温泉課で栽培することで、蒸し湯文化の保全に尽力している。石菖の収穫も温泉課が行っており、自生地や栽培地から月に一度、150kg 程度を収穫する。収穫した石菖は倉庫の中で扇風機を当てて干して保管している。石室内の石菖は、１日３回ほどほぐして状態を見つつ、へたっている部分だけを入れ替えて使う。入れ替え頻度は客入りや散水の状況によって変わる。

597 この項は基本的に現地調査による。



石菖の効能に関する説明。
※鉄輪むし湯内の掲示資料

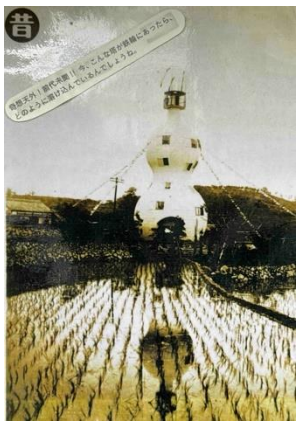
清掃は月に一回、温泉課の職員が高圧洗浄によって石室内を洗っている。蒸気のみなので、配管やバルブの詰まりは生じない。なお、蒸気を止めると塩分がたまるため、閉業中も蒸気は出しっぱなしにしている。施設としては機械の老朽化が早いことが悩みであり、エアコンや TV は長くても 10 年ほどで壊れる。エアコンの室外機は温泉地仕様のものであっても壊れやすい。

むし湯の利用者は夏の暑さで減るため「夏枯れ」と呼ばれており、10～３月頃の繁忙期に半年分の赤字を半年で挽回するようにしている。利用者アンケートでは「はじめてきた」という回答が 60%を占め、若い人がほとんどであり、利用者の 98%が「大満足」と回答している。別府市役所によれば、鉄輪はゆったりゆっくりした街並みが魅力なので、オーバーツーリズムにならないよう留意しながらむし湯の PR に努めたいと考えている。

＜ひょうたん温泉＞

ひょうたん温泉は、先に触れたように、昭和２（1927）年に整備された７階建て全高が 18m もあった「ひょうたん閣（木造の展望台）」がランドマークとなり、戦前から大きな人気を集めていた共同浴場（日帰り温泉）である。大正 11（1922）年、温泉を掘削してひょうたん型の風呂を造り、一般にも開放したのがそもそもの始まりとされている。何度もリニューアルを繰り返しているが、現在も当時のひょうたん風呂が女風呂に残っている（現在は「岩風呂」と呼ばれているが上からみると瓢箪（ひょうたん）の形である）。女風呂にある薬師如来や男風呂の滝湯は温泉として創業した当時からのもので、女風呂の盃風呂も古い。

敷地内にあるお堂には不動明王など３体の仏像が鎮座しているが、これは平成 21（2009）年に閉業した金龍地獄から移設したものである（金龍地獄は源泉の自然湧出の奇観を眺める別府の地獄の一つとして営業されており、多数の仏像が並ぶ様がユニークであった。閉園後、令和４（2022）年より温泉の仕組みを科学的に解説する「別府鉄輪地獄温泉ミュージアム」という展示施設が営業している）。



かつてひょうたん温泉のランドマークであった「ひょうたん閣」。空襲の標的になるということで、昭和 20 年に取り壊されてしまった（ひょうたん温泉展示写真）。



女風呂に残る岩風呂。かつてはここがひょうたん風呂と呼ばれ、ひょうたん温泉はこの無料開放から始まった。ひょうたんは秀吉の千成瓢箪から。



女風呂に残る盃風呂も古い。奥に薬師如来の立像が見える。薬師如来も創業時からである。



男風呂の滝風呂も創業当時からのもの。





昭和初期の滝湯の状況（左のひょうたん温泉展示写真）と金龍地獄から移転してきた不動尊（右）。金龍地獄にはコンクリート製の仏像や龍の像などが多数置かれていた。

ひょうたん温泉の源泉は２本あり、令和６（2024）年の分析では、泉質は両方ともナトリウム-塩化物泉（弱酸性低張性高温泉）、泉温は 100.4 度、pH 3.1 である。湧出量は、１号源泉、２号源泉ともに 300 リットル／分程度となっている。２本の源泉を使用することで、万が一源泉が止まってしまった場合にも施設を休止せずにすむようにリスクヘッジされている。も

しも源泉が止まってしまった場合は、止まった源泉の 50m 以内の地点を再掘削することとなるが、保健所が状態を確認し、行政の審議会に諮ってから再掘削ということになるので、３～６ヶ月はかかることとなる。源泉は、20～25 年に１回程度、不意に止まることがあるが、その原因は不明である。

源泉からは湯と蒸気が混ざって噴出している。１号源泉から噴出した蒸気は、ステンレス管を通じて二つに分かれたコンクリート製のタンクに入る。一つ目のタンクは蒸気と温泉水を分離する装置で、湯と蒸気が混ざった噴気が鉄板にぶつかり、蒸気と温泉水に分かれ、蒸気については上部の煙突から大気中に逃がされる（１回目の分離）。二つ目のタンクは 70 トンの貯湯ができる分離槽で、ここではタンクの内部に壁から斜め上に突き出た鉄板があり、そこに当たって下に水滴となって落ちた蒸気は温泉水と合流し、鉄板の上にいった蒸気はここでは逃がされず、ステンレス製の蒸気管に導かれる（２回目の分離）。



写真手前やや右の黒ずんだコンクリートのボックスの中に源泉の噴気が吹き出している。噴気は、右奥のやや小さめなコンクリートの分離槽で蒸気と湯への一回目の分離が行われる。分離した蒸気は上に逃がされ、それ以外は手前の大きなコンクリートの分離槽に入る。
二つ目のコンクリートの分離槽での蒸気と湯の分離では、蒸気は逃がされず、管を伝って施設内で様々に利用される。
源泉のパイプについているバルブには、バルブが錆びないよう、バケツが被されている。

70 トンの分離槽からの 90 度以上ある湯は、ステンレス製の管で、竹製温泉冷却装置の「湯雨竹（ゆめたけ）」に入り、そこからポンプで揚程されて貯湯タンクにいく。湯雨竹で温度が下がってからの配管は塩ビ製（VT（硬質ポリ塩化ビニル管）もしくは HT（耐熱性硬質ポリ塩化ビニル管））である。湯雨竹は、ひょうたん温泉が開発した高温の温泉の冷却装置で、仕掛けとしては、上部の檜の樋に高温の源泉を入れ、そこから溢れた湯が下部の「物干し型ユニット」数段に渡って設置されている細かな竹枝をつたって水滴状になって流れ落ちる。これにより、僅か数秒で 100 度の湯が 47 度程度になる。



湯雨竹の全体像。1 号源泉から来た 90 度のお湯がここを通るだけで 40 度台に下がる。

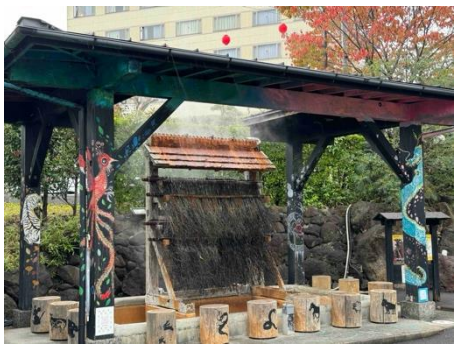


湯雨竹の内部。上の樋から下の竹の枝に流れると細かな水滴になり、下に落ちていく。

湯雨竹は、16 年前（平成 20（2008）年）に、ひょうたん温泉が、自社開発した装置である。開発以前は源泉からちょろちょろと少量のお湯を流すことで浴槽の温度を調整していた。高温の源泉を大量に浴槽に注ぐと入浴に適した温度まで湯温が下がらないため、大浴場の清掃後は各浴槽を満杯にするために時間を要する。加水をせずに源泉かけ流しを維持するためには、施設を午後８時に閉め、午後９時までに清掃したのちに朝までかけて湯を貯める必要があった。しかし、入浴客からは夜も入りたいという声が強く、これも装置の開発に繋がるひとつの要素となった。なお、湯雨竹には小さなものもあり、冷却温泉風呂や足湯に使われている。



冷却温泉風呂では奥の湯雨竹で温泉を冷やして水風呂を提供。



足湯の温度調整にも湯雨竹が使われている。

湯雨竹で人が入れる温度まで下げられた湯は、ポンプで揚程され、３つある貯湯タンクに入り、そこからは自然流下で引き湯される。ポンプは２台（配管も２系統）用意されており、故障した時のバックアップになるだけでなく、１ヶ月に１回定期的に切り替えて、メンテナンスを行っている。40 度台に温度が下がった段階では、湯のパイプは塩ビ製となっている。

ポンプの交換は２～３年に１回である。シリカがスケールとして溜まるため、年に１回、配管の掃除を行う。掃除は、下流から上流に向け、計 200～300m を２日かけて行っている。掃除は、針金の先にプロペラ様の器具を付け、それをモーターで回して、パイプ内のシリカをそぎ取る。ひょうたん温泉から析出するシリカは比較的柔らかいため、これで取ることができる。

湯量を調整するため、引き湯をしているパイプには多数のバルブが付いており、どこをど

れだけ回すかの指示が通るよう、番号が振られている。普段あまり使わないバルブについては、錆びないよう、ビニールで養生されている。



貯湯タンク。家族風呂の後ろにあり、手前に見えているものを含め、三つある。



塩ビ製のパイプ。普段使わないバルブはビニールで包んで錆びを防ぐ。

２号源泉では、蒸気の分離をするタンクは 30 トンの貯湯ができるようになっており、高さの違うコンクリートの槽が二つ合体した形となっている。このうち高さの低いところには分離された 90 度台のお湯が貯まっており、そこからの湯は、湯雨竹を通さず、80〜90 度のまま配湯する。この高温の湯は、坂道に沿って設置されたステンレス製のパイプによって引き湯され、主に各風呂の温度調整に利用されている（温度が下がった場合、２号源泉から配湯する湯量を増し、温度を上げる。上がった場合は逆に湯量を絞る）。また、高温のまま、飲泉などにも使用されているが、実際はかなりの量が余ってしまうため、別府市の配湯所に送っている（市営の共同浴場その他に利用されている）。引き湯の配管は２年に１度交換する。

コンクリートの槽のうち、高い方からは分離された蒸気が出ており、これもステンレス管で引き湯される。ここからの蒸気は、むし湯や地獄蒸しに使用されている。圧力が高まり過ぎないよう、一部は逃がされている。

蒸気管の一部は、シェルアンドチューブ式熱交換器による熱交換により、シャワーに用いる水道水を熱するために用いられている。シェルアンドチューブ式熱交換器は、多管式熱交換器ともいい、太い円柱状の胴体に細い多数の円管を配置し、胴体（シェル）側の流体と円管（チューブ）側の流体間で熱交換を行う装置である。熱交換によく使われる装置だが、高温側と低温側に大きな温度差が必要である。水道水については、一旦タンクに貯められており、そこから熱交換器に水を送っている。



左手にあるのが２号の源泉で、上に述べるパイプから蒸気が送られている。地下にもう一つパイプが伸びているが、これは今は使っておらず、メンテ時に蒸気を逃がす用になっている。右は熱交換に使う水道水が貯めてあるタンク。



２号のコンクリート製の分離槽。左側の下からは高温の湯が引き湯されており、上部の管からは蒸気が引かれている。圧を逃がすため、盛んに蒸気が出されていることがわかる。



別府市の配湯所に流している管。２号源泉の湯はかなり余っている。



２号源泉からの 90 度内外のお湯と蒸気については、ステンレス管で坂道に沿って引き湯されている。バックアップ用に２系統ある。



下部にある太い管がシェルアンドチューブ式熱交換器で、ここで蒸気と水道水からシャワー用の熱水を作っている。



２号源泉の熱湯は飲泉にも使われている（溢れた湯の受け皿に卵が入っている）。

各浴槽の湯温は１時間に１回測定し、イレギュラーがあったら浴室のバルブで１号と２号の割合を調整する。また、１号・２号各源泉から流されてくる蒸気は、蒸し湯、呼吸浴、地獄蒸しなどに利用されている。


浴槽の近くには湯量を調整するバルブが納められた箱がある。


箱の中身。温度調整用のバルブが見える。


２号源泉の蒸気が送られてきている地獄蒸しの釜。ひょうたん温泉には地獄蒸しの専門店があり料理を楽しめる他、売店で蒸した軽食も買える。


蒸し湯。上部に湯気を逃がす窓がある。


蒸気についてはそのまま呼吸浴として浴びることもできる。

浴槽からの廃湯は、全て川に流している。洗い場の排水は、浄化槽で処理をしている（湯けむりを守るためこの地区には下水が整備されていない）。

上記の温泉の管理は施設部 30 名で行っている。施設部は、受付や掃除業務も行っており、計 30 名が３シフト制で働いている。源泉の管理は施設部に所属しているうちの６名しかできない。そのうち、配管の異常を音だけで察知できるのは３名、その他、社長自身も定点管理を行って、音を聞き、異常の有無を見極めている。

＜別府温泉保養ランド＞

「別府温泉保養ランド」は、昭和 43（1968）年開業の、明礬地区にある素泊まり専用、長期逗留割引がある湯治客向けの宿泊施設である（一廻り七日の湯治周期に合わせて７日以上割引がある）。鉱泥「どろ湯」で有名で、紺屋鉱泥による温浴の様々な効能を謳っている。

紺屋鉱泥とは、昭和 30 年代頃までこの地にあった紺屋地獄の名前を保養ランドに自然湧出している泥の名に冠したものである。紺屋地獄は古くは天明３（1783）年の古河小松軒の「西遊雑記」や文化４（1807）年の脇蘭室の「菡海漁談」に名前が見えており、「西遊雑記」では藍色の泥が湧くといい、「菡海漁談」では海地獄、鬼山地獄などと並び称されている[598]。近代に入ると別府を代表する景勝のひとつとなり、大正時代の案内書では、明礬付近の遊覧先の筆頭に挙げられて「紺色の波紋を作って熱泥常に渦巻き此の名あり」と記されている[599]。

別府温泉保養ランドのホームページによれば、紺屋鉱泥は、温泉の噴気、腐植粘土層、地下水が揃って産出されているもので、硫化水素泉の効能だけでなく、腐食粘土にあるフミンの効能も合わせて期待できるという[600]。入浴施設としては、屋内に男女別の鉱泥「どろ湯」、一般の温泉「コロイド湯」、「蒸し湯」がある。また屋外に露天の「どろ湯」と小浴場（ともに混浴）がある。

保養ランドの「どろ湯」は、湯壺の底に地中から自然湧出する泥の上にお湯を張って入浴可能としたもので、お湯は、保養ランドが所有する源泉から吹き上がる蒸気を山水に当て、入浴に使う源泉（温度は 40 度台）を造成している。山水は常に流れている場所があり、そこから取水し、100m ほど離れたところの造成用タンクにもっていく。

落ち葉などもあるため、取水用の場所には３～４カ所網がついており、そこで漉（こ）している。必要以上の分の水はオーバーフローさせている。基本的に不足することはないが、山に雨が降らないと枯渇する危険性がある。



温泉を造成しているタンク。手前のステンレス管から蒸気が入り、向こうの塩ビ管から湯が出ている。



造成タンク内の様子。蒸気が注入され、泡が出ている。

598 近世の紺屋地獄については別府市誌編纂委員会「別府市誌」別府市　昭和 60 年２月を参照。

599 上野一也 編「泉都別府温泉案内」雅楽堂松尾数馬　大正 6 年

600 別府保養ランドホームページ「紺屋鉱泥とは」


造成タンクに山水を入れているパイプ


山水の取水箇所。落ち葉が入らないよう網が置かれている。

蒸気が噴き出る源泉は、地下 100m ほどの深さまでケーシングが入っている。地下の部分で不純物（泥や硫黄）が詰まり、次第に蒸気が減ってしまう。このケーシングは年に３回業者に依頼してメンテナンスをしている。メンテナンスは、ワイヤーで吊るした鉄の棒を上から何度も落として行う。これで不純物が取れれば再び蒸気が強くなる。源泉が古くなると段々蒸気が弱くなるので、隣接する場所に再ボーリングをしてきた。現在のものは５～６年前に掘削したものである。ただし、規制が強化されたので、今後はこうした対応は難しくなる。

源泉から吹き上がる蒸気の量はバルブで管理しており、バルブを開けると蒸気の量が増え、絞ると外に逃がす蒸気の量が増える。温泉からの蒸気が常に出ているため、周りの植物は枯れてしまう。蒸気を逃がす際、音と勢いを減少させるため、消音機が付いている。

蒸気は、造成タンクにいくとともに、泥湯、コロイド湯の加温用に使うためにも流されている。また、蒸し湯には蒸気が配管されている。


源泉。圧力調整用のバルブが付いている。右後方で蒸気を逃がしており、方形の消音機がついている。


バルブを手で調整する。目盛りなどはなく、長年の経験でどのくらい回すかを決める。

夏と冬で湯温を変えるため、夏は冬の３分の１程度の量を回して蒸気を少なめにしている。雨の日は１回転増やすなど、１日最低３回、多い時は５～６回温度調整のためバルブを回している。バルブに目盛りなどはついておらず、季節や気温、天候などに応じて経験で回す量を決めている。週１回から月１回くらいバルブを閉めて蒸気を止め、溜まっている水を逃が

し、機器を整備する。バルブ自体は熱くないが、パイプなどは熱くなっているので、軍手を付けての作業となる。

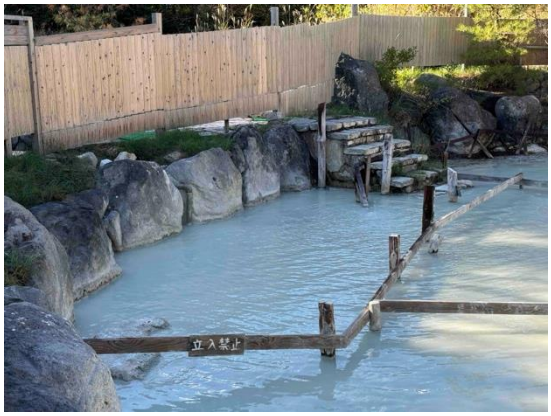
ケーシングの地上部分は詰まることはないが蒸気で破損することはある。また、蒸気は、造成に使っているだけでなく、各浴槽の加温にも使われている。

造成された湯は、各湯船に引き湯される。引き湯のパイプについても、詰まることはないが腐食するため、SAS 規格に基づいたステンレス管を使っている。また、より酸に強い塩ビ管を使っているところもある。ただし、塩ビ管は、ステンレス管に比べて、熱に弱い。破損するのは管と管の間の継ぎ手の部分である。ここはネジを切っているため、破損しやすい。


源泉からの配管


破損しやすい箇所

露天の泥湯は、先に述べたように、自然湧出する泥の上に、配管から供給される湯が張られ、さらに加温のため、源泉の蒸気が直接吹き込まれている。泥の湧出口は何カ所かあり、湧出口により粘性など若干性質が異なっている。泥自体は基本的に熱くないが、蒸気の噴き出し口近くについては熱くなっていることもある。そのため、蒸気が噴き出る辺りは立ち入り禁止である。



やや白濁した温泉水の下に泥がある。階段下のパイプから蒸気が供給され、泥と湯を温めている。泥が熱くなっているため、周辺は立ち入り禁止になっている。


画面左下の水面が乱れているところの下から泥が湧出している。

湧出する泥については、自然のものなので、栓などはない。蒸気は 24 時間出ており、調整バルブで量を調整する。造成温泉の湯については減ったら随時ホースで追加する。髪の毛や衛生用品などのゴミが出るため、女性職員が２日に１回程度網で泥を掬って綺麗にしている。また、泥に偏りが出るため、道具でならして平坦にする。この際、蒸気の管に触れると火傷をするため、長袖・長ズボンでの作業となる。


泥の中からゴミを取る網


泥を平坦にする道具

＜奥みょうばん山荘＞

「奥みょうばん山荘」は、明礬地区の奥にある秘湯的な温泉施設である。貸切湯が３つあり、そこで外来の入浴を受け付けている。宿泊設備もあるが、令和６（2024）年 12 月現在、休業中である。

「奥みょうばん山荘」の源泉は、昭和 40 年代終わり頃に掘られて以来蒸気が噴出している。初代と二代に渡って運営者はいたが、ともに稼働が芳しくなく、市街化調整区域にあるために建屋の建て替えをしないまま廃墟化していた。現在のオーナーが 20 年前に土地を購入して自らが三代目の運営者となり、営業許可に必要最小限のリフォームを施して開業、後に廃材や壊れた機器を元手にしたオーナーのセルフビルドで温泉施設を創造し、それを保守してきた。最初の 10 年は一日２～３の入湯者程度の稼働であったが、その後インターネットの普及に伴い、次第に増加してきた。

温泉分析書によれば、泉温は 95.2 度とされているが、これは検体の温度のことであって、実際の温泉湧出温度は記されていない。泉源は地下 200m 掘削されており、温泉水は地下で揮発して 130 度近い蒸気となって湧き上がってきている。奥みょうばん山荘は標高が高く、水の沸点が 97 度となっているため、蒸気が沸点 97 度を下回るようにして液化し、温泉水として浴用利用している。この温泉水を液化する装置は、自動車のラジエーターをイメージして作ったもので、廃棄されていた穴あき FRP タンクを再利用している。

源泉に入っているケーシングはステンレスではなく鉄管である。そこに上がってきた蒸気を長い鉄管で蒸気槽に導く。蒸気槽で一部が液化し、鉄が大量に混ざった廃液が出るので、これをドレンから排水して処理する。排水処理のための設備には鉄分が溜まっていくので清

掃が大変である。この蒸気槽の段階でかなりの熱損失が出ている。



蒸気槽。右に伸びている鉄管に源泉からの蒸気が入る。上の管で造成槽に送る。下にドレンが見えている。



源泉のケーシング。配管の左の先が蒸気槽。



ドレンからの排水。鉄分が多量に溶け込んでいる。そのため周りに鉄分がこびりつく。



ドレンからの排水は、後述する熱交換した井戸水とともに、生活用水として利用している。

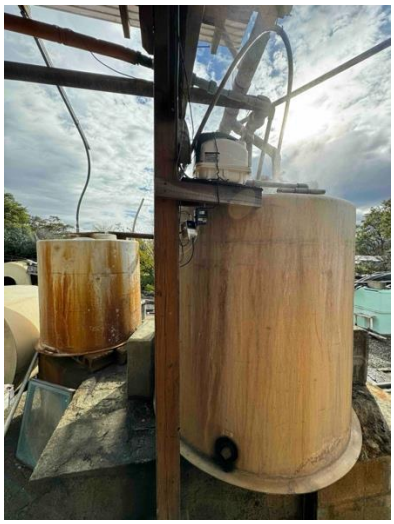
次に造成用のタンクに持っていく。このタンクは２つあり、季節によって使い分けをしている。造成用のタンクの中には最初は井戸水を入れておく。その水に蒸気槽から来た蒸気を入れると、井戸水が温泉水に造成される。造成された温泉水は、浴槽に引き湯する分以外は、このタンクに戻るように配管してある。そのため、井戸水を入れるのは最初だけで、後は戻ってきた温泉水にまた蒸気を吹き込む。

造成の際、一気に温度を下げることができると、温泉の成分が結晶として多く析出してくる（湯の花が増える）。蒸気を単に液化させただけでは温泉としては薄いものになってしまうので、温度を一気に下げ、湯の花を敢えて作って、「浴感（温泉に入っている感覚）」が高い温泉を造成している。このため、ブロワーで 15 度の空気を吹き込んで、温度を大きく下げている。また、タンクの中に螺旋状に井戸水のパイプを回しており、気温が高い夏の間はそこに井戸水を流して熱交換させて温度の下降速度をさらに上げている。熱交換してぬるくなった井戸水についても生活用水として使用している。

泉質が単純温泉であり、蒸気の段階では成分が薄いためスケールは付かないが、上記の手順で「浴感」が出るように湯の花を析出させているため、温泉水からは多くのスケールが出る。パイプの継ぎ手の部分にヨーグルト状の湯の花が溜まるため、１日２回掃除する。また、

１日数回バルブを大きく開き、流れを強くして、湯の花を流し取っている。

なお、温泉の蒸気自体も、地獄蒸し用の釜に利用している。そのため、上記で説明してきた配管以外にも、蒸気槽からの配管が施設内に設置されている。



造成用の二つのタンク。左手奥に蒸気槽がある。調査時（冬）は手前のタンクを使用していた。タンクの上にブロワーが見える。



造成用のタンクを上からみたところ。真ん中にまっすぐ入っているのが温泉の蒸気を導いている管。曲がっており、水が出ているのが温泉水を回している管。右手に熱交換用のホースや初期に投入する井戸水の管、ブロワーからの空気の管などがまとまって配管されている。



湯の花が析出し、やや白濁した「浴感のある」山荘の貸切風呂。浴感がある分だけ、清掃も大変になる。



地獄蒸しができる装置。下部に見えるパイプを通じて温泉の蒸気が直接引かれている。

源泉は、もともと寿命があるもので、スケールが張り付いて詰まるか、ケーシングが腐食して壊れてしまう。奥みょうばん荘の源泉は、ケーシングに鉄管を使っているため腐食してぼろぼろになっているが、地下の蒸気が急激に膨らんで爆発する危険性があり、手を出せないでいる。令和６（2024）年８月の台風の時、源泉のケーシングから横吹きして蒸気が来なくなったが、爆発の危険性が高いため、ボーリング業者が修理を受けてくれず、自力で直すことになった。このため、シートを張り、土嚢を積んで、地下の蒸気の抜け口を作り、そこから土砂を地中に投入して地下の圧力を減少させてから修理した。これだけの圧力を持つ源泉の力を現在はおそらく１割も使えていない。今後はこの活用も考えている。

＜寺社仏閣と温泉に関する祭礼＞[601]

温泉に関係する神社としては、まず、先に触れた日本三代実録に見える火男火売神社（ほのおほのめじんじゃ）がある。日本三代実録で二社、延喜式内社であるが延喜式でも二座となっている。現在は、鶴見山山麓に下宮（鶴見権現）、中腹の東山に中宮（御嶽権現）、山頂に上宮がある。江戸期には鶴見権現は天台宗、御嶽権現は真言宗の管理となっていた。

弘化２(1845）年に作成された豊後国速見郡鶴見村の地誌「鶴見七湯廼記」をみると、宮司家に伝わっていた古図では「神殿は二神相殿にましまし、幣殿、拝殿、神楽殿、廻廊、経蔵、塔、その外末社、薬師堂など、ことごとく備わりたりしこと」であったが、戦国期に焼失したと説明されている（その後、森藩により、寛文４(1664）年復興）。また、同記では、鶴見社の祭神を鶴見権現、熊野権現などと称するのは誤りとして火男神火売神の額を社頭に掲げさせたとあり、幕末、国学者が神仏習合の祭神をどのように代えさせていったかの事情を窺わせるものとのもなっている（同記の詞書を担当した伊島重枝は、八幡古表神社（はちまんこひょうじんじゃ）や伊勢神宮で国学を学び、火男火売神社の復古造営を担当した）[602]。

八坂神社（旧名：祇園宮、祇園さま）も温泉に関わる縁起を持つ神社である。現在の祭神は素戔嗚尊（スサノヲノミコト）、櫛名田姫（クシナダヒメ）、大己貴命、少彦名命などである。養老元（717）年、疫病を払うため、京都の祇園社（現：八坂神社）を勧請したのが創建という。この神社には、大己貴命、少彦名命が天下り、神通力を持って加持をし、山神楽や昼夜の祈念をしていると、温泉に五色の煙が立ち上り、毒気が消え、薬湯になったという言い伝えがあり、また、明治２（1869）年には大がかりな湯立祈祷をしたとの記録もある。

八幡朝見神社も温泉に関わる祭礼を行っている。この神社は、豊後国守護になった大友能直が鶴岡八幡宮から勧請した神社で、一時衰亡したが、江戸時代中期以降再興し、整備が進んだ。昭和 20（1945）年、別府公園に鎮座していた温泉神社が、GHQ の神道指令により、廃社となることになったため、温泉神社を合祀、それ以来、別府八湯温泉まつりの開会奉告祭と温泉神社神輿の御幸祭を八幡朝見神社で行うようになった。

八幡朝見神社に合祀された温泉神社は、別府公園内に大正８（1919）年に創建された神社で、別府市朝見にあった長谷神社（大歳神（おおとしがみ/たいさいしん））と、愛宕神社（迦具土命（かぐつちのみこと））を合祀して創建され、その際、大穴牟遅命、少彦名命も合わせて祀られることとなったものである[603]。昭和４(1929）年に別府商工会議所が設立された際、現在のなかよし公園に温泉神社の御神輿を迎える豊年祭を開始した。豊年祭は、昭和６（1931）年以降、春の「温泉まつり」となり、平成

601 各寺社仏閣の基本情報については別府市誌編纂委員会「別府市誌」別府市　昭和 60 年２月を参照。

602 「鶴見七湯廼記」については、段上達雄 「鶴見七湯廼記-その内容と復元の試み-」別府市教育委員会 べっぷの文化財 No.53　令和 5 年 3 月を参照。

603 温泉神社の合祀と祭神については、八幡朝見神社ホームページ「朝見神社について」
http://www.asami.or.jp/about.php（令和６年 12 月 20 日最終確認）を参照。

13（2001）年、現在の「別府八湯温泉まつり」へと改名された[604]。

この祭は、戦後になると、昭和 27（1952）年に別府市観光協会が設立されたことから、商工会議所の単独主催から市・商工会議所・観光協会３団体の主催イベントに変更になっている。また、別府市全体の温泉地のイベントであることの象徴として、八湯それぞれから湯を持ち寄り、樽神輿に注ぐ「湯かけ神輿」が行われるようになるとともに、昭和 51（1976）年からは、昭和 36（1961）年まであった別府観光祭の中で行われていた扇山火まつり（扇山(大平山)の中腹に温泉マークを描き出す火まつり）を取り入れている。現在では、ふれあい踊り（市民公募の歌詞に西条八十が補筆、中山晋平が作曲した別府音頭が前半にかかる）や湯けむり総パレードなどを含め、４月第一週に、八湯全ての会場を舞台に実施されている。

温泉にまつわる寺院としては長泉寺がある。朱湯山長泉寺は、江戸時代中期までは赤湯山と号していた。本尊は薬師如来で、後朱雀天皇の御代に皇太子が霊泉により病気平癒がかなったため、皇太子が冷泉天皇として即位した後に建立したという開山縁起がある。寺号長泉寺は「温泉常にたたえて絶ゆることなければ」の意であるという。第二次世界大戦前まで、乳貰いの薬師（乳地蔵）として箒を持った女性が参拝していたので縁日は大変な賑わいであった。



長泉寺。共同浴場もあり、入浴の際にはお賽銭を払う。

また、浜脇地区には、浜脇温泉広場の一隅に湯薬師如来像を祀る薬師堂がある。湯薬師如来像は豊国法師の作と伝えられ、破損が著しいが、衣文の彫り口には平安前期彫刻の名残が見られる。豊国法師は、日本書記の用明天皇２（587）年の項に、「用明天皇が病気になった時、その平癒のため仏教への帰依を願った。その際、穴穂部皇子に案内されて豊国法師が内裏に入った」と伝えられている僧であり、そのためか浜脇には、用明天皇が病気平癒のためこの地を訪れたという伝承が残る。また、８月下旬に行われている薬師祭は、安和年間（968～970

604 温泉まつりについては、景観保存計画事務局「祭り等との関わり」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画平成 24 年　P100-P104、別府温泉まつり公式サイト http://beppu-event.jp/onsenmatsuri/（令和６年 12 月 20 日最終確認）を参照。

年）に始まったとされている[605]。

薬師堂自体の創建の縁起は伝わっていないが、「豊陽古事談」に、浜脇には、延暦 14（795）年に創建され、その後廃寺となった後、天慶６（943）年に再建された医王山薬師寺があったと伝えられており、薬師堂との関連が想像される。ただし、史料上の初見は、寛政８（1796）年４月の 「浜脇・田野口 両村湯薬師佛極書（きめがき）」（類焼した薬師堂の再建の記録文書）である。

薬師祭は、湯薬師如来がご開帳されるとともに、竹の「風流見立細工」が展示されることが特徴となっている。江戸末期から、竹細工は、浜脇の湯治客向け土産物として有名であり、薬師祭の際には、販売用の竹細工がそこここに積みあげられて売られていた。明治４（1871）年、別府港が整備され、大阪からの定期航路ができると、大阪で盛んであった見立て細工の「つくりもの」文化が浜脇にも伝わってきた。こうした「つくりもの」の中でもとりわけ華美なものが風流見立細工であり、風景、花鳥風月、器物、風俗、判じ物などが造形されている。

薬師祭がもっとも盛んであったのは、昭和 10（1935）年から昭和 15（1940）年頃までで、浜脇地区の魚町、入江町、薬師町、新町を主会場に通りに面した部屋を開け放して、旅館は風流見立細工、 遊郭は歌舞伎人形、商店は商品棚や陳列の一部を利用して細工を展示した。そのため、浜脇特有の狭い路地には黒山の人だかりができていたという。この頃、薬師祭は人形祭とも呼ばれていた。

その後、第二次世界大戦の戦況の激化に伴い、規模が大幅に縮小されたが、戦後に復活し、盆踊りや舞台芸能も加わって盛大に行われるようになった。しかし、昭和 26（1951）年、ルース台風により薬師堂が倒壊したため、薬師如来像は難を逃れて崇福寺に合祀されることとなった。その後、薬師祭は、出開帳という形で継続したが、昭和 32（1957）年の売春防止法の施行による遊郭の廃止や旅館の老朽化などにより浜脇地区の入湯客が減少、また再開発によりかつての路地がなくなってしまったことなどにより衰退した。

再び賑わいを示すようになったのは、平成３（1991）年、温泉広場の一隅に薬師堂が復活してからである。現在では、「べっぷ浜脇薬師祭り」の名称で、８月下旬の２日間（見立細工の展示は３日間）、薬師如来のご開帳と法要、富くじ、子ども太鼓、花魁道中、薬師音頭大会（浜脇音頭）が華やかに行われ、地域コミュニティの協力で、見立を陳列できる場所も増えて来ている。

鉄輪温泉にある温泉山永福寺は、時宗の寺院で、江戸時代にあった湯滝山松寿寺を再興したものとなっている。本尊は阿弥陀如来である。松寿寺は、明治４（1871）年、無住であったため、明治政府の無檀無住寺院の廃止令（太政官布告）で廃絶した。その後、信徒が復興の願いを明治 23（1890）年に提出、明治 24 年(1891)に広島県尾道にあった永福寺を移転して再興した。かつて湯滝山、いま温泉山と号しているのは、一遍上人が鉄輪温泉の石風呂(蒸し湯)を始め、 渋の湯と熱の湯を開いたという縁起に因んだものである。寺号の松寿寺は一遍上人

605 薬師堂と見立細工については、入江秀利「見立細工と浜脇薬師祭り」別府市教育委員会 べっぷの文化財 No.43 平成 25 年３月を参照。ただし、豊陽古事談とそこからの推測については別府市誌編纂委員会「別府市誌」別府市 昭和 60 年２月を参照。現在の薬師祭についてはLittle Oita ホームページ「べっぷ浜脇薬師祭り 2024！開催内容（場所・日時・駐車場情報）」https://littleoita.com/magazine/230（令和６年 12 月 20 日最終確認）も参照。

の幼名松寿丸から取ったという[606]。


温泉山永福寺


永福寺の内部

「一遍上人絵伝」によれば、上人は建治２(1276）年に豊後に来訪しており、「一遍上人年譜略」には鉄輪に訪れたことが記されている。また、寛延３（1750）年に玖珠の安楽寺蔵本として上梓された「豊鐘善鳴録」には上人が松寿院を創建したとの記述が載る。ただし、松寿寺についての同時代史料が現れるのは江戸時代になってからで、その史料のひとつでは延享５(1748）年に時宗本山清浄光寺に山号・寺号を許されたとある。

永福寺では、毎年１回、「湯浴み祭り」が行われている。同寺の寺伝によれば、もともと松寿寺では時宗の開祖一遍智真上人の坐像(木像)を温泉で沐浴させる法会が実施されており、上人座像沐浴後の温泉に入ると、「風呂千風呂」といって、一回入っただけで千回分の効験があるとも言われていた。

現在実施されている「湯浴み祭り」は、昭和 35（1960）年に地元有志が観光目的で再興したもので、９月下旬に２日に亘って行われている。主な内容は、献湯筒供養、踊り念仏・奉納踊り、湯あみ法要とその後木像をお稚児さんが先導して町を回る稚児行列などである。また、永福寺は、国指定有形文化財「紙本著色遊行上人絵伝（平成９（1997）年指定）の部分（第７巻のみ）を所蔵している。

湯滝山松寿寺には、境内社として、温泉神社もあった。この温泉神社は、明治３（1870）年の神仏分離令によって鉄輪温泉の西の山に遷座することとなった。現在の祭神は大巳貴命と少彦名命である。八幡朝見神社に合祀された温泉神社との関係はない[607]。

606 鉄輪の永福寺については、景観保存計画事務局「祭り等との関わり」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P100-P104 を参照。また、現在の「湯浴み祭り」の内容については、別府市公式観光情報 Web サイト別府たび「第 65 回鉄輪湯あみ祭り」https://beppu-tourism.com/event/9938/（令和６年 12 月 20 日最終確認）も参照。

607 鉄輪の温泉神社については、飯沼賢司「湯けむり景観から見た別府温泉の歴史」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P69-P73 を参照。

＜調理法、食品加工[608]＞

鉄輪温泉は高温の蒸気を噴き出す源泉が多くあり、近世以前からそうした噴気を用いた調理が行われていた。弘化２(1845) 年の「鶴見七湯廼記」では、照湯の湯、伊麻井の湯の詞書で噴気による調理が行われていることが記されており、また、噴気による調理を行う鶴見の特産物として「地獄蒸軽羹」、「地獄蒸椿餅」、「行成餅」、「蒸琉球芋」などが載せられている。また、「きぬかつぎ(里芋の子芋)」、「まんじゅう」、「赤飯」、「粽(ちまき)」、「いびら」などを蒸している記述もある。

明治から昭和戦前期にかけても噴気を利用した調理は普通に行われていた。鉄輪温泉の地獄原と呼ばれる地域では、青竹を突っ込むだけで噴気が出ていたので、その噴気を使って農作物を手軽に蒸すことができた。また、地熱で焼けた土を使って芋の苗を育てることも行われていた。地面に穴を掘り、かまどのような形にして、茶を沸かし、菜蔬を蒸すという現在の地獄窯と同様の手法も多く実施されていた。また、かまどを使わず、直接蒸気を使うやり方も行われていた。ヨモギや芋、野菜の他に、第二次世界大戦前から既にゆで卵も作っている。土産物としては火を使わず、噴気で作る白玉饅頭や羊羹もあった。

こうした噴気による調理は、地元の住民だけが行っていたのではない。先に述べたように別府では、明治期、木賃宿という自炊の宿が多くあり、長期の湯治を行う客は基本自炊をしていた。鉄輪ではこうした湯治客の自炊にも噴気が使われていた。大正期から昭和初期には、木賃宿よりさらに一段大衆的な「貸間」という旅館の一室を提供する手法も広まり、昭和 24（1949）年まで、宿泊施設の 36.0%に貸間があった。この貸間でも自炊設備に噴気が利用できた（現在でも鉄輪には貸間のある旅館が多く残っている）。

長い歴史を持つ鉄輪の噴気による調理であるが、これが地獄蒸しとして有名になったのは、平成 13（2001）年に別府市の地域おこしイベント「別府八湯温泉泊覧会（オンパク）」が始まり、そこで鉄輪地区の「地獄蒸し屋台」が話題となったことが契機となっている。現在では、旅館・ホテルで地獄蒸し料理が出るとともに、貸間や旅館での地獄釜貸しで噴気による自炊体験が行え、さらには平成 22（2010）年には地獄蒸し体験ができる観光施設「地獄蒸し工房」も創設された。また地獄蒸しを利用した産品としては、温泉卵（明礬温泉では真っ黒な「黒たまご」も提供している）、プリン、まんじゅう（他の温泉地とは異なり、温泉の噴気で蒸している）、蒸し寿司などがある。

608 この項は、西澤千惠子「食文化との関わり」別府市文化的景観別府の湯けむり景観保存計画　平成 24 年　P105-P114 を参照。

＜特産品＞

①明礬と湯の花

・別府における明礬と湯の花の歴史[609]

江戸時代、別府の特産品としては、「豊後明礬」が有名であった。止血剤などの薬や皮なめし、染料を反物に固定させる媒染剤として使われる明礬は、古来、中国からの輸入でまかなわれていたが、寛文年間の 1666 年頃、渡辺五郎右衛門が別府で国内での開発に成功し、和明礬を世に出した。しかし、山普請に費やす膨大な費用や幕府への運上金、安価な唐明礬の輸入に苦しめられ、事業運営は安定せず、五郎右衛門は結局身上を潰すこととなった。

転機となったのが、享保 15（1730）年である。この年、鶴見村の明礬生産を請け負っていた脇屋儀助が、和薬種吟味掛役を務めていた医師丹羽正伯に、明礬の製造方法の吟味を受けることが叶い、豊後の和明礬の品質の高さを証明できた。このお墨付きにより、儀助は、唐明礬の一時的な輸入停止（清国との貿易が財政を支えていた対馬藩を除く）を成し遂げ、さらに全国に専売網（国内の他の場所で生産したものを含め、全ての和明礬の販売は儀助の会所が管理した）を構築し、全盛期には国内市場の７割を確保することに成功した。しかし、唐明礬の輸入禁止も、専売制も、他地域の商人の訴えや幕府の政策により二転三転したこと、脇売り（会所を通さない売買）が後を絶たなかったことなどから、その後の経営は必ずしも順調なばかりではなかった。

明治維新が起こると、中国産の明礬に加えて化学製品の輸入も増え、豊後明礬の経営は一気に苦しくなる。この中、明治 17（1884）年、豊後明礬は多大な失業者を出すに至った。この対策として開発されたのが、明礬の半製品を入浴剤として売る別府の入浴剤「湯の花」である。別府の「湯の花」は、明治 20 年代以降、京阪神を皮切りに全国へと順調に販売を伸ばし、明治 30 年代には、明礬とともに、地域の特産品としての地位を確立した。

別府における「湯の花」の主要生産地域は、明礬温泉がある明礬温泉地域とその北にある湯山地域の２地区である。ともに鍋山と高平火山の麓に位置し、地熱の高い地域となっている。粗製濫造や過当競争を防ぐため、明礬や湯山の生産者は「湯の花組合」を作り、「鉱泉華採収装置特許権」という湯の花小屋を作る土地利用の権利に関する一種の地券を発行することで、過当競争を防ぎ、事業の安定化を図った。これにより、昭和 16（1941）年まで、湯の花の製造販売は順調に推移したが、以後は減少、特に第二次世界大戦後は大きく落ち込み、昭和 22（1947）年の生産量は昭和 16 年時の 10 分の１以下となっている。この結果、昭和 24（1949）年、「湯の花組合」は解散し、湯の花の製造を行うのは僅か４業者のみとなった。生産が復活し始めたのは昭和 30 年代からで、昭和 60 年代には戦前の６割程度まで生産量が戻っている。

609 この項は、恒松栖　編「国指定重要無形文化財　湯の花の研究　湯の花とハイノキで明礬をつくる」平成 19 年２月、及び、現地調査ヒアリングを参照。

・湯の花小屋と湯の花づくりの方法[610]

別府の「湯の花」は江戸時代に開発された明礬製造の手法を用いた伝統的なやり方を今日まで継承している。以下、製法の概要を示す。

最初に行われるのが床づくりである。まず、地中５cm で 50 度～70 度程度の地熱が得られる平坦な場所を選び（平坦でないところについては石垣を作って水平にしている）、そこに、硫気溝と呼ばれる溝の本線と支線をバランスよく掘り、その上下左右に、噴気が通るよう隙間を残して、小石（丸く削った石で「栗石」という）を敷き詰め、床を作る。小石を敷き終わったら、その上に藁を敷いて、さらにその上から土を被せる。栗石には別府石と呼ばれる火山の噴火石が使われている。



床の溝と敷き詰められた栗石



切妻の屋根のみの小屋。妻側からみて湾曲している。

次に作った床の上に、切妻の屋根を掛けて小屋とする（屋根だけで壁に当たる部分はない）。屋根は、柱石を並べ、その上に左右から支え合うよう柱を置いていて柱組みを作り、上に棟木を載せる。次に柱組の間に木と竹で垂木を並べ、縄で縛る。垂木が揃ったら上から萱でふき、さらにその上から藁をかけ、横向きの竹で押さえ、紐で固定する。できた小屋は、上からみると、湾曲しており、それによって内部の噴気が逃げにくい構造となっている。萱と藁の屋根は一切結露せず、床に水滴が落ちることはない。屋根づくりに使う縄や紐には、そもそもは麻を使っていたが、近年ではビニールを利用している。



垂木の上に萱と藁の二重構造となっている。耐震性を高めるため熊本地震以降水平の材を足した。



屋根を小屋内部からみたところ。水分が屋根材に吸収され結露しないので水滴が落ちてくることはない。

610 この項は、恒松栖　編「国指定重要無形文化財　湯の花の研究　湯の花とハイノキで明礬をつくる」平成 19 年２月、及び、現地調査ヒアリングを参照。

小屋ができたら、厚さが均一になるよう床の土を叩き固め、その上に原料となる青粘土（ぎち）を５cm～10cm の厚さに敷き詰めてこれも叩き固める。青粘土が整ったら、硫気溝の取り入れ口から噴気を入れる。噴気は本線の溝から支線の溝へ流れ、それぞれの溝から小石の隙間を通って床全体に広がる。床に微妙な勾配をつけることで、取り入れ口から入れた噴気は、本線・支線を回り、小石の間に浸透して、最終的に硫気溝の出口から出てくる。

こうして噴気を入れ続けると、30～70 日程度で霜柱に似た結晶が 10㎜～50㎜ に成長する。それを採取し医薬部外品の入浴剤「薬用　湯の花」として製品化する。

現在、上記の方法で伝統的な「湯の花」を生産しているのは、「湯の花組合」が解散した後も残った４業者だけである。現在は、４業者とも、入浴施設や旅館など、湯の花製造以外の業種と兼業している[611]。

「別府明礬温泉の湯の花製造技術」は、平成 18（2006）年、国の重要無形民俗文化財に指定された。上記４業者は、この文化財の保護団体「明礬温泉湯の花製造技術保存会」を構成している。

・現在の製造／販売状況（みょうばん　湯の里）

「みょうばん　湯の里」は、江戸時代に豊後明礬の中興の祖となった脇屋儀助の後裔で、現在まで「湯の花」の製造を続けている企業が経営しており、別府「湯の花」の見学施設及び温泉の日帰り入浴施設を備えている（入浴施設として開業したのは昭和 63（1988）年）。企業体としては、湯の花を製造する企業「株式会社みょうばん湯の花製造」と、湯の花の販売と入浴施設を経営する企業「株式会社みょうばん湯の里」の２つに分かれている。なお、入浴施設で使用している源泉（「湯の里」源泉）は、泉質が単純酸性硫黄泉（硫化水素型）で、泉温は 61.9 度（測定時気温６度）、pH は 2.2 である。



同社（脇屋家）には、江戸時代の明礬製造に関わる貴重な古文書が伝わっている。左から寛永２（1749）年の「明礬山初り覚」、宝暦 11（1761）年の「我家奥義録」、宝暦年間（1751～1764 年）の「書上控」。

施設内には、湯の花の製造を行う「湯の花小屋」（無料見学可能）と露天の大浴場に加え、

611 現在の各事業者の状況については現地調査ヒアリングによる。

「薬用　湯の花」の直売を行っている売店、飲食施設、卵やプリンを蒸している地獄釜などがある。伝統的な製法で生産を続けている「薬用　湯の花」については、昭和 42(1967)年に、厚生労働省（当時は厚生省）から医薬部外品の認可を受けている（医薬部外品については５年に一度適合性調査を受けて合格する必要がある）。「湯の花」という名称で商標登録ができているわけではないので、保存会に参加している４事業者以外の製品も出回っており、苦労している。


湯の花小屋見学コース



同社の「薬用　湯の花」商品

「湯の花」のための小屋は、かつては地域全体で 300 棟もあったが、現在はみょうばん湯の里では 15 棟となっている。屋根が劣化すると、雨漏りなどの原因となるため、２～３年に一度、最低でも３～４年に一度屋根を作り直す必要がある。平成 28（2016）年の熊本地震では 10 棟が被災したが、文化庁の支援もあり３年で復興した。

藁については、もともとは掛け干ししたものを業者から購入していたが、文化財になったことで藁の価値が高騰しており、今は、藁も竹も人づてでなんとか手に入れている状況である。


実際に使われている湯の花小屋。


湯の花小屋の床を回った噴気が外に排出されている。

みょうばん湯の里では、伝統的な「湯の花」づくりの教育についても注力しており、令和６（2024）年には、日本化学会主催の中学生・高校生対象のイベントを「みょうばん湯の里」で行った。これは湯の花小屋に入って湯の花の析出過程を観察するとともに、分析装置を持ち

込んで大学の実験室と同様の成分分析を行うもので、みょうばん湯の里は歴史的な部分の講義を担当した。

湯の花職人は現在６人おり、全て男性で、若い人は 40 歳代である。この湯の花職人は、源泉の管理や浴場の温度の管理も合わせて行っている。湯の花の出来は、雨や寒暑など、天気や気候によって大きく左右される。そういった影響を判断して湯の花を円滑に製造していくためには、何年もの経験を積み、感覚を養っていかなければならない。データも取っているが、現時点では時間をかけて人材を育成していくしかない。

入浴施設については、もともと湯の花職人が入っていた浴場があったことから、それを発展させて作ったものとなっている（今はもとの職人の入っていた浴場がなく、跡地がため池となっている）。施設管理の上では、源泉の酸性度が高く、硫黄も含まれていることから、機械類の損耗が激しいという難しさを抱えている。温泉噴気を含んだ大気によって、温泉配湯用のポンプをはじめ、冷暖房機器、テレビ、冷蔵庫、レジやパソコンといった電化製品全てが、直ぐに壊れてしまう。噴気が近い機器ほどダメージが大きく、地獄蒸しの釜の近くのエアコンは二ヶ月、冷蔵庫は半年程度で故障する。レジ機器にいたっては、１年間に 20 台も故障する場合がある。そのため、電気店で明礬という所在地を明かすと保証を付けてもらうこともできない。対策として、エアコンの室外機に硫黄対策のコーティングを塗布し、またレジやパソコンは使わない時はポリエチレン気泡緩衝材を巻いて保護している。

この他、ステンレスの手すりが浴槽で溶けたこともあるし、湿気が強く、コンクリートが隆起してしまうということも起こっている。機器の修理代、買い換え代、コーティング費用、設備の保守費などに莫大な経費がかかる。また、スケールが溜まるので、毎年 12 月に休業日をもうけて従業員皆で清掃を行っているなど、温泉提供にまつわる苦労は多い。


かつて職人が入っていた温泉跡地。


全ての電化製品は使わない時保護しておく必要がある。

また、雨が降って温泉の色が薄くなった際などに入浴客からクレームを受けることがあり、自然のものである温泉の管理の難しさについての啓発の必要性を感じている。

②別府竹細工[612]

先に触れたように、別府では、既に江戸期から竹細工が湯治客の土産物として多数販売されていた。その隆盛は明治以降も続き、大正期以降は海外にも進出する。また、人材育成や技術開発のための機関の整備も実施されており、明治 35（1902）年に別府工業徒弟学校（現：大分県立大分工業高校）、昭和 13（1938）年に大分県工業試験場別府工芸指導所（現：大分県立竹工芸訓練センター）、昭和 25（1950）に別府市工芸研究所（現：別府市竹細工伝統産業会館）が設立されている。

昭和 30 年代に入ると、安価なプラスチック製品が市場に溢れるようになったことから、実用品としての竹細工販売の拡大は難しい状況となった。これに対応し、別府竹細工では工芸品化を推進、高級竹製品としての地位を確立していく。この中で昭和 42（1967）年には、生野祥雲斎が竹工芸の分野で初の人間国宝に認定され、昭和 54（1979）年には別府竹細工が経済産業省の伝統的工芸品の指定を受けている。

現在の別府竹細工では、若手作家が多く育ち、伝統的な技法を活かしながら、多くの工芸作品を世に送り出している。

湯量日本一を誇る別府温泉郷は、泉質も非常にバラエティに富み、蒸気泉を含む高温の泉源も多い。利用のあり方も、入浴、蒸し湯、蒸気による調理、さらには「地獄」の見物と多彩である。歴史も古く、奈良時代の史料に既に別府の「地獄」の様が記録されている。温泉地の性格も多様であり、海辺に臨む大型のホテル群もあれば、湯治の伝統を引き継ぐ歴史情緒あふれる地域も残る。

明治以降、別府には、大型の入浴施設から地獄巡りの遊覧バス、遊園地、サファリパークまで、観光客を集める施設やサービスが次々と開発されてきた。源泉の掘削も非常に盛んで、内湯を持つ大規模な宿泊施設の発展も著しく、高度経済成長期には 1,300 万人を超える観光客を集めた。一方、その中で、旅館での自炊施設のある貸間の提供など、伝統的な湯治客への対応も続いており、また「湯の花」製造に代表される伝統技術も継承されている。区有区営、つまり地元の人が作り、地元の人で運営する共同浴場の広がりも別府ならではの文化である。

高度経済成長期までは分裂しがちだったこういった様々な方向性は、バブル景気崩壊後、オンパクに代表される地域づくりと観光振興を両立させる活動が大きくなっていったことで、次第に重なり、協働しつつあるようにも見える。番台に人もいない共同浴場から秘湯、長期逗留型施設、高級旅館、リゾートホテル、巨大な日帰り入浴施設まで 150 以上もの施設が加盟している外湯巡りのプロモーション・サービス「別府八湯温泉道」は、そうした別府温泉郷の多様性とまとまり双方を示すわかりやすい事例になっている。

この別府の温泉文化を支えているのが個々の温泉の湯を管理している人々である。泉質や泉温など、対処が難しい源泉も多い中、それぞれが、あるいは歴史を継承し、あるいは新たな

612 この項は、別府市パンフレット「別府竹細工　暮らしと芸術」平成 30 年３月を参照。

技術や工夫を生み出して、温泉という自然に対峙している。別府の多様な温泉文化は、それを支える多彩な湯の管理の技術があってこそなのである。

１－３　温泉地現地調査の結果要約

ここでは、これまでの 15 カ所の温泉地への現地調査の結果要約を示す。各温泉地の調査結果の概要は、下記の表に示す通りである。

図表 2-1-2. 各温泉地の現地調査結果要約

①歴史的推移

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
近世の 1615 年頃までに開湯し、1650 年代には藩主も入湯、その後、士族や裕福な町人などへと湯治が広がった。米、調味料は麓から持って上がり、山菜や川魚を採って自炊する湯治場で、また混浴であった。この湯治の風習は近隣の農家を中心に昭和末期までそのまま続いていた。 昭和終わりからは秘湯ブームに乗り新たな発展を遂げているが、現在も、伝統的な自炊・混浴の風習が一部に残る。	史料上の初見は続日本後記の 837 年と古いが、本格的に湯治場として開けたのは 1636 年頃とされる。当初は食料持参が多かったが、江戸中期には食材が購入できる自炊宿が増え、近隣の農家が骨休めの湯治に多く通うとともに全国的にも有名となった。 近代に入ってからも高度経済成長期までは自炊の湯治が中心であったが、その後は大規模旅館も増える。ただし現在も自炊施設を持つ旅館が多く運営されている。	史料上の初見は日本三大実録の 863 年。湯治場としては近世二本松藩により整備されて栄えた。 1824 年、巨大土石流により壊滅的な被害を受け源泉地から麓に移転、そこも戊辰戦争時に焼かれ、明治初期に近隣の農民などが楽しむ小規模な湯治場として再興。それも火事で焼け、明治後半に現在地に移転した。 戦後すぐまでは外湯が中心。現在は湯治に加えスキーや登山が楽しめる保養型温泉地に。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
1470 年代の蓮如の入湯記録や 1486 年の堯恵の「北国紀行」が史料上の初出。 中世末期には有名武将の入湯記録も見える。近世には「草津千軒江戸構」と言われる程栄えた。湯治は自炊、外湯中心のものであったが、賄いを頼むことも、各種の遊興を楽しむこともできた。 明治初期にはベルツも着目した高温泉治療の時間湯が確立した。現在でも伝統湯という名称で残り、共同浴場で長期湯治をする人も見られる。	日向見薬師堂内に 1537 年の棟札が残っており、中世末期の開湯と思われる。近世には江戸からも湯治客が来るなど繁栄した。 明治以降も昭和終わりまで自炊湯治客が中心で、各旅館は地域の商店などと連携、湯治客は食材からお酒、料理の出前、按摩やさらには床屋まで頼むことが可能であった。また自炊などのお世話をする女中を雇うこともできた。 伝統的に、飲泉が実施されており、有名であった。	史料としては 1486 年の「北国紀行」が古い。1575 年には 400 段の石段を使った源泉からの引き湯が開始されている。 こうした基盤を活用し、江戸期には善光寺参りや榛名講といった参拝と湯治を組み合わせた旅が盛んに行われるなど大きく繁栄した。 明治期にはベルツに効能の高さが評価され、また徳冨蘆花の「不如帰」でも着目されたが、戦前までは自炊客の方が主流であった。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
史料上の初見は明暦年間（1655～1658 年）である。当初は宿が十分でなかったが、江戸後期には大きく繁栄するようになり、藩主が能登を巡検する際に入湯するほどになっていた。また、源泉地が海にあったことから鮮魚料理を購入することもできたという。 明治以降、埋め立てで海中の源泉地と陸続きになると、総湯が大規模化し、和倉はさらに発展する。ただし戦前までは自炊宿も多く残っていた。	史料上の初見は 1473 年の蓮如の「御文」で、近世には前田家大聖寺藩下で栄えた。湯ざや（共同浴場）を中心に湯宿が建ち並び、多くの町人・農民で賑わっていた。湯ざやの周りには入浴の間浴衣を預かるユカタベーと言われる少女が立ち並び、湯治の合間には医王寺詣でや付近の名勝巡りが行われていた。 明治初期から、湯治客が増加し、菊の湯、白鷺の湯など外湯整備が進んだ。内湯化は戦後である。	史料上の初見は、1577 年の上杉謙信の願文と武田信玄の書状であるが、多くの史料が現れるのは江戸期に入ってからとなる。湯は外湯（江戸期までに共同浴場６カ所）、宿は農地を持つ農民が運営する兼業のもののみで、湯治客は米・味噌その他の食料品を持参し、宿では、薪や漬物のみを無料提供、宿賃や寝具などの損料を取るといった自炊型の湯治場であった。 明治以降、特に戦後はスキーでも大きく栄え、近年は国際化も大きく進んでいる。

下呂温泉	有馬温泉	三朝温泉
史料上の初見は万里集九の「梅花無尽蔵」で 1489 年と 1491 年の入湯記録がある。江戸期には有馬や草津に次ぐ知名度があった。源泉は益田川の河原にあり、周りを板で囲って湯殿としていた。湯宿も多くあったが、貧しいものは温泉寺に泊まり、河原に降りて無料で湯治を行っていた。 水害の影響が大きく、安定した運営ができるようになったのは昭和初期となる。昭和 40 年代後半には資源管理のため地区全体で集中管理システムが導入されている。	史料上の初見は日本書紀の 631 年の舒明天皇の行幸の記録である。藤原道長、藤原定家、蓮如、足利将軍家、豊臣秀吉等、その後も連綿と多くの貴人の湯治場となった。 中心部に共同浴場があり、一の湯と二の湯に板で仕切られ、貴賤の別なく、町の南側に宿をとったものは一の湯に、北側に宿をとったものは二の湯に入っていた。入浴の管理は湯女が行っており、江戸期には大きな人気を博した。 源泉掘削による内湯化が進んだのは戦後となる。	史料上の初見は 1664 年の鳥取藩史料である。18 世紀に入るとご公儀が修造したお茶湯も出来、湯量も多く、広く栄えるようになった。 明治期からは湯治客が増え、都会からも土用の丑の日を中心に１～２週間の湯治を行うことが多くあった。 1914 年、内務省「全国鉱泉調査表」で三朝温泉のラジウムの含有量が世界２位であることがわかり、療養的色彩が強まった。この伝統は今も続いており、三朝温泉病院では温泉を利用した治療が行われている。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
史料上の初見は日本書紀の舒明天皇の 639 年の行幸である。また奈良時代の木簡にも多く名が残る。中世には河野氏の下で石手寺が支配、江戸になると松山藩により整備が進み、共同浴場を中心に多くの湯宿が建ち並んだ。７日ごとに湯銭を払い、基本は自炊であったが、食料・日用品など殆どのもの商人から買える程賑わっていた。 明治期には共同浴場が現在の道後温泉本館に建て替えられ発展の基礎となった。ただし内湯化は昭和 30 年代以降となっている。	史料上の初見は 1679 年の貝原益軒の「杖植紀行」で、この時点である程度栄えた温泉地であったことがわかる。江戸半ばになると御客屋と呼ばれる貴顕用の宿が整備され、文人墨客の紀行も多く記録されている。近隣の藩からの湯治も多く、佐賀藩士と柳川藩士が杖立温泉で争った「杖立騒動」という故事もある。 明治期までは自炊中心の湯治宿であったが、昭和期以降炭鉱客などで大きく発展、現在はその名残として背戸屋という特有の景観が残る。	史料上の初見は奈良時代の豊後国風土記であるが、入湯については 1550 年の大友宗麟の浜脇温泉への入湯まで降る。江戸期になると現在の別府八湯に繋がる各温泉地についての記録が多く残り、庶民を含む多数の湯治客を集めていたことがわかる。 明治以降、源泉掘削が大きく進み、共同浴場の拡大と内湯化が並行して進んだ。この中で鉄輪地区を中心に自炊での長期湯治の風習が昭和期まで広く残り、現在でも温泉の蒸気での自炊ができる宿が営業している。

②自然を活かした伝統的入浴法

乳頭温泉郷	草津温泉	四万温泉
江戸時代からの混浴の習慣を伝統として残しており、老舗の宿には混浴風呂が用意されている。	近世から業病に効能のある湯として著名。明治時代には高温の湯に集団で短時間入る時間湯が成立した（現在は伝統湯）。 今も風呂無しアパートで療養のための湯治をする人がいる。	日本三大胃腸の湯として飲泉が有名で飲泉所が整備されている。かつてはボトルで持ち帰る人も多くいた。 江戸時代に蒸し湯が有名であり、現代にも継承している。
伊香保温泉	**三朝温泉**	**杖立温泉**
老舗の旅館に立ち湯がある。また明治期にベルツが飲泉を薦めたことから今も飲泉所が残る。	ラジウムの含有率が高いことを大正時代から売りにしており、ラドン熱気浴などが実施されている。 三朝温泉病院では健康保険対応の運動浴や鉱泥湿布がある。	近世より、入り湯だけでなく、蒸し湯、箱に入って首だけ出して蒸気を浴びる箱蒸しがあり、現在も続く。
別府温泉郷		
石菖を敷き詰めた蒸し湯、紺屋地獄の泥を使った泥湯、砂湯などがある。かつて浜脇にあった砂湯は現在は共同浴場で再現されている。		

③温泉に関する伝承

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
入湯温泉郷最古の鶴の湯については傷ついた鶴が怪我を温泉で癒やしたことをマタギが目撃したことから名付けられたという謂れがある。	「続日本後紀」の承和４（837）年に蝦夷攻略の拠点であった玉造塞の温泉石神が鳴動し、温泉が川に流れ、新沼ができた、とある。	「日本三大実録」の貞観５（863）年に温泉の湯元である「小結（ゆい）」に従五位を授けるとあり、神格があったことがわかる。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
近世までの開湯伝説としては行基と源頼朝、明治以降については日本武尊による発見の伝承がある。	延暦年間（782～806 年）に征夷大将軍の坂上田村麻呂が入浴したのが始まりというものと、永延３(989）年頃に源頼光の家臣・碓氷貞光が発見したというものの二つの伝説がある。	開湯伝説としては、垂仁天皇の御宇に二つ岩より湧出というもの、行基が発見したというものがある。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
９世紀初頭に現在神社の奥の院が置かれているところに湧出していたものがいつの頃か海中湧出に変わったという伝承あり。 海中からの発見は、白鷺が傷を癒やしているところを発見、室町時代に畠山氏が発見、初代加賀藩主前田利長が発見、二代目藩主利常の時に越中商人が上申等諸説ある。	行基が老僧の教えに従ったところ湯が湧き出した。老僧が夢枕に立ち、薬師如来の化身であったことを明かしたという開湯伝説と、鎌倉幕府の武将・長谷部信連が、白鷺が足を湯にいれているところに出くわした。そこに女性が現れ、自分は薬師如来の化身であり、出湯を再興して欲しいと言われた。信連が湯を再興すると、かつて行基が彫った薬師尊像が見つかったという中興の伝説がある。	現在、共同浴場となっている「熊の手洗場」において熊が怪我を癒やしていたのを村人が見つけて湯を発見したというもの、聖武天皇の頃に行基が発見したというもの、修行中の山伏が見つけたというものなどがある。 この他薬師信仰があり、薬師については大湯に薬師三尊、他の 12 カ所の共同浴場に薬師十二神将が祀られている。
下呂温泉	**有馬温泉**	**三朝温泉**
かつて山頂に湧いていたが、鎌倉時代に、薬師如来の効験で川原に移った。その際は、白鷺の導きで発見されたという伝承がある。 再発見の際に薬師如来像が見つかったのでそのための堂宇を建立、それが温泉寺になったという開山縁起も伝えられる。	日本書記に舒明天皇の行幸の記録があるため、開湯伝説はなく、中興の伝説が二つある。一つは奈良時代に行基が山中で病人を介護したところ、それが薬師如来であったというもので、行基と薬師如来による開湯伝説のうちこれが最古という研究がある。 もう一つは平安末期に熊野権現の霊夢を受けた山伏仁西が有馬に来て温泉を再興したというものである。毎年入初式で上記二つの伝説に基づき行基と仁西の像の巡行が行われている。	樟樹の根を白狼が枕にしており、追い払ったところ、狼が枕にしていたところから温泉が出たという白狼伝説が株湯について伝えられている。 この発展として、源義朝の家来である大久保左馬之祐が、三徳山に参拝の途中、年老いた白い狼を見かけ、そのまま逃がしたところ、その夜、夢枕に妙見大菩薩が現れて、出湯の場所を授けたという伝説もある。これに因み、白狼や大久保左馬之祐の像が株湯近くにある。また白狼太鼓などの芸能もある。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
白鷺による開湯伝説と、釈日本紀の伊予国風土記の逸文にある「大己貴命が、大分の速見の湯を下樋で持ってきて少彦名命を癒やした」という伝承がある。病が治った少彦名命は石の上で舞ったとされ、その石を玉の石と呼び信仰の対象とした。現在もこの玉の石とされる石が道後温泉本館に置かれている。白鷺の像も各所にある。 釈日本紀の記述等を彫り込んだ湯釜が道後公園に湯釜薬師としておかれている。	神功皇后が応神天皇を産んだ際の産湯にまつわる伝承と、弘法大師空海が杖立温泉に訪れて杖立を霊泉として讃えたこと、その際、持っていた杖を立てたところ、芽が出て、枝も出したのでそこから杖立の名前ができたという謂れの二つがある。 なお、薬師堂が二つあり、うち一つは空海開山とされている。	開湯伝説はないが、奈良時代の豊後国風土記に温泉の噴出状況が記されている。また、鉄輪温泉の蒸し湯については一遍上人が開いたという謂れがある。 なお、各共同浴場には薬師が祀られている。

④温泉に関する信仰・祭礼行事

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
温泉神社 鶴の湯温泉に鶴の湯神社、黒湯温泉に薬師神社がある。鶴の湯温泉では薬師十二神将、黒湯温泉では薬師如来が祀られている。この他、鶴の湯には金精様も祀られている。 温泉寺 駒ヶ岳周辺の地域がかつては修験の霊場であり、石仏が多く残る。孫六温泉にも石仏があり、薬師と伝えられる。 祭礼 黒湯温泉の薬師神社に例祭がある。	温泉神社 温泉神社、温泉石神社、東鳴子神社がある。明治以降は全て大己貴命と少彦名命が祭神だが、江戸まで前者二つは修験系の山岳信仰、東鳴子は地蔵の子宝信仰であった。 祭礼 温泉神社では盛大な夏祭りが行われており、こけし祭りも実施されている。近年、内湯旅館から献湯式を実施している。	岳温泉神社 それまで温泉地で信仰されていた薬師如来と、温泉地を支える集落で信仰されていた安達太良明神双方を現在地に移転した際合祀した神社。 相応寺 徳一大師が薬師の湯を発見したという縁起がある寺。 祭礼 江戸期より温泉開きの八十八夜に薬師に関わる祭礼があった。現在も春祭として江戸期と同じく薬師を本尊とする相応寺が実施。また近年献湯式を開始。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
白根神社 近世までの祭神は白根明神（山岳信仰）、明治以降は日本武尊。 光泉寺 近世までの草津の温泉信仰の中心であった薬師堂焼失後、薬師信仰を受け継ぐ。 祭礼 温泉感謝祭は巫女が出るが観光協会の行事で祭礼ではない。かつて中心的な祭礼であった春の温泉開きの薬師縁日は今は花祭に。	日向見薬師堂 薬師信仰の堂宇がある。近世まであった定光寺のお堂であり、参籠者が多くいた。 神社等 各地区に小さな湯善神社があり、上記薬師堂とともに湯薬師とも呼ばれる。 祭礼 薬師堂には未だに病気快癒を願う、おしゃもじが奉納されている。観光協会で近年湯立て神事を薬師堂前で始めた。各地区の湯薬師をまとめた祭礼がある。	伊香保神社 明治以降は大己貴命と少彦名命だが、江戸までは薬師を本地とする山岳神であった。 薬師堂 かつてあった薬師が本然の医薬寺のお堂。江戸期は内湯もある宿房でもあった。 祭礼 観光協会が主催する伊香保祭りがある。石段でのケンカ神輿が名物。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
神社 少比古那神社がある。江戸時代までは「湯の薬師堂」であったが明治期に変更された。大同年間の開湯伝説の縁起がある。また源泉地にかつてあった弁天社も再興。 寺院 源泉地の集中管理装置に海中に温泉が湧いた時に浮かんできたという「お湯かけ薬師如来」がある。 祭礼 温泉関係者の法要の際に、薬師如来を本尊とした法会がある。	神社 白山神社は、白山信仰の神社。長谷部神社は開湯伝承の武将を祀っている。 医王寺 江戸期まで上記二神社を管理していた薬師信仰の寺院。温泉にまつわる古文書等多く保存。 祭礼 白山神社では大型観光イベント「こいこい祭り」を実施、湯立て神事もある。長谷部神社では春に近年温泉関係者向けの祭礼が開始された。医王寺でも温泉関連の法会実施。	神社 麻釜の湯の近くに釜神があり、明治期建立の碑に「温泉にあるところこの祭神があるので」大己貴命と少彦名命を祀ったと記されている。 寺院 本尊が薬師如来の健命寺があるが、温泉との関わりは薄い。野沢菜の縁起がある。 温泉の神仏としては健命寺横に薬師堂がある。江戸時代建立の縁起がある。藩主が御殿湯を作った際に現在地に遷座。 祭礼 温泉にまつわる大きな祭礼はない。

下呂温泉	有馬温泉	三朝温泉
神社 平成元年に湯殿山神社から分霊した下呂温泉神社がある。平成22年には加恵瑠神社も建立。 温泉寺 開湯縁起の薬師堂をもとに江戸時代創建されたとされる。近世から昭和初期まで湯治客が本堂に宿泊。 祭礼 温泉寺で８月上旬に温泉感謝祭が温泉関係者を集めて行われる。３月に薬師に温泉を納める薬師祭もある。 下呂温泉神社では10月に下呂温泉ゆかりの装束での行列や舞などが行われる例祭がある。	湯泉神社 明治以降は大己貴命と少彦名命だが、江戸までは温泉寺の境内社で湯山三権現が祭神だった。 寺院 温泉寺は薬師が本尊で有馬温泉の縁起に大きく関わる。また善福寺は中世末に有馬温泉の運営に関与していた。 祭礼 温泉に関する祭礼としては有馬温泉の中興の縁起に基づく入初式が大きく、温泉寺や湯泉神社も関わって実施されている。善福寺では秀吉記念の茶会がある。	三朝神社 明治期に地域の神社が多く合祀された神社。江戸期までは開山縁起の大久保左馬之祐を祭神としていた。 薬師堂 三徳山から移されたという謂れがある堂。 祭礼 江戸時代からの三朝薬師堂の薬師縁日が花祭となって継続されている。明治期に無形の民俗文化財のジンショ等が取り入れられ、観光イベントとして大きくなった。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
神社 湯神社（祭神は中世より大己貴命と少彦名命）と伊佐爾波神社（八幡神）で、湯祈祷を実施。 寺院 石手寺（本尊は薬師で熊野信仰がある）が中世まで温泉を管理。園満寺の地蔵菩薩にも江戸時代後半に湯が止まった時の伝承がある。 祭礼 18世紀からの湯祈祷の歴史を踏まえ、３月に道後温泉祭が行われている（湯祈祷と祝い餅まきと、1956年の内湯化を記念した献湯式）。	杖立温泉神社 温泉会館奥に祀られている。祭神不明。 薬師堂 空海開山の縁起がある杖立薬師堂と江戸期に建立された東林琉璃堂（本尊薬師）がある。 祭礼 小正月のどんど火祭りが1980年に再興された際に新たに湯かけ神事が追加された。	神社 鶴見嶽を祀る火男火売神社が古い（近世は権現信）。大正期に温泉神社を創始（戦後八坂潮見神社に合祀）。 寺院 共同浴場のある長泉寺（本尊薬師）、浜脇の湯薬師堂、一遍上人が蒸し湯を作ったという縁起のある鉄輪の永福寺がある（本尊は阿弥陀）。 祭礼 温泉神社を合祀した八坂潮見神社で温泉祭の祭礼実施。 浜脇薬師堂では「べっぷ浜脇薬師祭り」、永福寺では「湯浴み祭り」を実施。

⑤湯の管理１：源泉管理

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
古来沢沿いに湧く源泉を利用しており、多くの源泉がある。うち１カ所仙北市が所有する蒸気泉（造成泉）であることを除き自家源泉。 泉質は硫黄泉が多いが、単純温泉、ナトリウム - 塩化物・炭酸水素塩泉などもあり、バラエティに富む。 高温のため、そのまま使えず、山水を加水していることもある。	各地区によって泉質、泉温が異なる。高温泉、蒸気泉についてはスケールが溜まるが、60度以下の場合はスケールが少ない。 自家源泉が主体だが市有源泉もある（蒸気泉が多い）。市有泉は第三セクターが管理。 自然湧出、掘削自噴（上総掘り含む）、掘削動力噴など様々ある。蒸気泉については造成温泉にしているが、圧力が高くて爆発の危険があり、流化水素も多く危険である。	近世以来山頂にある同じ源泉を利用。所有は岳温泉管理株式会社。 泉質は酸性で泉温は55度ある。源泉近くには大量のスケールが出るため、毎週清掃が必要となっている。積雪の際に源泉を掘って管理する作業は、滑落や硫化水素中毒の恐れがあり、極めて危険である。

草津温泉	四万温泉	伊香保温泉
主要６源泉を草津町が管理。歴史的な源泉は、自然湧出で、泉質は強酸性、泉温は 50 度、スケールが多い。 1975 年湧出の万代鉱源泉は、掘削自噴で、泉質は強酸性で泉温は 90 度ある。スケールは少ない。	殆どが自家源泉で川原に自然湧出している（一部市有の源泉があるが、日帰り入浴施設用などで、内湯は自家源泉）。泉質アルカリ性でスケールは少ない。 川の水量により湯量が大きく影響される。	歴史的な黄金の湯は伊香保温泉小間口権者組合が所有。泉質は中性、含鉄分で赤くスケール多い。 もとは自然湧出のみだったが、量／泉温が低下したため掘削動力噴を追加し、混合泉になった。他に市有の 1996 年掘削の白銀の湯がある。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
歴史的な源泉は枯渇し、ほぼ同じところに動力泉を掘削。現在はそのうち４本を混合して利用している。和倉温泉合資会社が所有。泉温は 90 度前後と高く、泉質は弱アルカリ性となっている。 源泉にはスケールが多く、エアリフトの管が詰まりやすい。また汲み上げ後はまずスケールを沈殿槽で沈殿させて減らしている。	歴史的な源泉は枯渇し、ほぼ同じところに動力泉を掘削。主に使用しているのは５本の源泉の混合泉である（高温泉が掘削できたため、40 度以上の泉温を保つことができた）。 所有・管理は財産区。泉質は弱アルカリ性でスケールは少ない。	一般財団法人野沢会の保有源泉が 17、個人源泉が 23 となっている。共同源泉は近世よりの自然湧出である。 泉質はアルカリ性で泉温は 60 度以上のものが多い。スケールは少ない。
下呂温泉	**有馬温泉**	**三朝温泉**
自家源泉もあるが、中心は 12 本の共同源泉である。近世までの湯脈は水害で破壊されたため、昭和初年から掘削が進められた動力泉となっている。源泉の所有は下呂温泉開発協同組合である。45 度～80.2 度と泉温にばらつきがありこれを混合して 55 度としている。 泉質はアルカリ単純泉である。スケールは少ない。	歴史的な源泉は枯渇し、ほぼ同じところに掘削自噴の源泉を掘って利用している。主要源泉は有馬温泉(株)もしくは市有。 泉質は中性だが泉温は 90 度以上の高温で、含鉄で赤く、またスケールが極めて多い。そのため沈殿槽を用意するとともに、毎週ケーシングの交換を行っているが、100 度近い源泉が噴き出すため、極めて危険な作業となっている。	三徳川に沿って多数ある自家源泉が中心で一部共同の町有源泉がある。総数は 81。 古い旅館では足下湧出（浴槽の底がなくそこから直接湧出）の浴槽が残っている。また、もともとの株湯も共同浴場として残っている。 泉質は中性でラジウム含有量が高いことが特徴。泉温は 40～70 度。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
松山市有。歴史的な源泉は既に枯渇しており、現在稼働している 18 カ所の源泉は、全て、新規掘削の動力泉である。掘削箇所は歴史的な源泉があった周囲に広がっている。 泉質はアルカリ性単純性で、利用源泉は全て混合され、41～42 度の泉温となっている。スケールは少ない。	川沿いに湧出する源泉 23 本のうち殆どは個人所有だが一部観光協会所有のものがある。源泉管理の多くは地元の個人業者が担う。 100 度近い源泉が噴出し、泉質は中性であるが、蒸気が混じった形で噴出する源泉にはスケールが多く、年４回程度はケーシングの取り替えが必要である。温泉の蒸気部分は熱交換用に利用している。 蒸し風呂用には、蒸気ではなく、90 度以上の湯を利用。	明治の上総掘り普及以降積極的に掘削が行われたため、2,000 本近くの源泉が利用されており、湧出量でみると全体の３割が自噴である。個人源泉が主体だが、市有源泉もある。また、一部自然湧出も残る。 ナトリウム-塩化物泉が多く、一部は蒸気泉となっており、セパレーターで液化する他、蒸気での利用もある。

⑥湯の管理２：引き湯

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
自家源泉のある旅館のうち２つは山中で自然湧出しているところから２～３km引き湯をしている。スケールが溜まるため定期的に塩ビのパイプを外して叩いて取る必要がある。また冬季の小さな雪崩などでパイプが壊れることがあり、その際には重機が入れるのを待つ必要もある。 敷地内の自家源泉の場合、高温の湯を山水で加水することもある。また足下湧出も多い。	源泉のうち、蒸気泉のケーシングは鋼管で、その後造成温泉を作ってからは高温のため架橋ポリプロピレンの管を利用している。残りは塩ビ管。 他の源泉については泉温が60度以下だとスケールが付きにくいため、引き湯管の定期的な清掃は行われていない。ただしそれ以上の源泉では適宜清掃が実施されている。 なお、それほど高温ではない自家源泉では現在塩ビ管であるが、以前は鋼管や銅管も使われていたことがある。	山の上の源泉から８kmを自然流下で引き湯している。源泉付近は2011年まで木樋で現在は大口径の塩ビ管、その後の８kmの引き湯は昭和40年代まで木管で現在は保温材を巻いた塩ビ管を地中に入れている。 ８kmの引き湯後、４カ所ある分湯所で分湯され、その後も坂沿いの各旅館に坂の勾配を利用して自然流下で引き湯。各旅館の敷地内では、自然流下に加え、サイホンなども使われている。酸性度が高いためポンプは基本使われない。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
泉温を下げるため、及び、湯の花沈殿のため湯畑を利用。代々湯の花を集める業者がいる。また、個別の旅館でも湯小屋を作って貯めることで湯温を下げ湯の花を沈殿させている。 万代鉱源泉では90度の湯を下げるため熱交換を利用。 ポンプ、目地、パイプ等に耐酸性の高いものを草津独自で開発して使用。また戦後まで木管を使用していた。	スケールは少ないが、細い径だとカルシウムが詰まりやすいためその清掃が必要となる。また、泉温が高い自家源泉を利用している旅館は熱交換で泉温を低下させているところがある。 江戸時代、源泉のある川床より引き湯をしていくため、水〆切という手法（川の水をためて圧力を掛け、噴出の勢いを上げ、木管で引き湯）を使用していた。	400年前より石段の下に石の大樋を通じて自然流下で各旅館に配湯を続けている（源泉から石段の上までは塩ビのパイプを使用している）。 石の大樋から各旅館へは木の樋で引き湯。そこから先はサイホン等で旅館内の引き湯を実施。泉温低下に対して蒸気を当てての加温等も行う。 大樋のスケール取りは組合全体で実施する。また木の樋部分については一斉交換する。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
源泉がある弁天崎公園に集中管理装置（沈殿槽と貯湯槽）があり、そこから総湯と各旅館に配湯。 現在パイプは富士パイプでスケールは溜まらないことから交換・清掃はせず地中深くに埋設。基幹の本線があり、そこから各旅館に支線が伸びる。 金属管使用時は交換が必要だったことから浅く埋めていた。またタコ足配管であった。	戦前の内湯化の時から集中管理を実施。源泉からポンプで揚程し、混合、行き先別（総湯及び各旅館）に分湯。分湯の際にはストレーナーでゴミを取る。配管は塩ビで、屋外に出ているところは保温材を巻き、その上からアルミでカバー。距離のある旅館への配湯については一旦高所にある用水路沿いに埋まる基幹の配管に揚程して複数の分湯所を経由して配湯している。	共同源泉が多数あるが、地形が複雑なため大規模な貯湯槽にまとめる集中管理ができておらず、複数の源泉から複数の引き湯先に管路が繋がる入り組んだ構造となっている。 配管は富士パイプの温泉用塩ビ管で、地中埋設しており定期清掃はない。分湯枡は木製で、15年で壊れる。現在FRPに交換中である。スケールはつかないがゴミを定期清掃している。
下呂温泉	**有馬温泉**	**三朝温泉**
共同源泉の湯を４カ所のポンプ所（貯湯槽付き）に集めて集中管理している。旅館で余った湯はまたポンプ所に戻る。タンクはステンレス製、最新のもののみFRP製。 泉温は混合による熱量をシミュレーションして手作業で調整。パイプは富士パイプの温泉用塩ビ管。スケールは溜まらないがパイプの接着剤が50年しかもたないのでそこで交換。	主要な共同源泉からは自然流下で分湯所にいき、そこからも自然流下で各旅館に回る。配管は塩ビ管で管自体の耐久性は高いが、継ぎ手部分から空気と接触すると塩化物が析出し固まってしまうため、交換が必要となる。 古い構造の旅館では館の下に浴槽がありそこまで自然流下で持って行くが、新しい所では高所に揚程して各浴槽に流下させる。この際バルブやポンプに塩化物が析出するため高頻度での交換が必要。	大きくスケールが溜まることはないので、足下湧出の源泉以外は、高所にあるタンクに揚程してそこから各浴槽に配湯している。パイプの清掃は年１回程度である（足下湧出の場合は引き湯はない）。

道後温泉	杖立温泉	別府温泉郷
集中管理システムで源泉を混合し、適温としてから（高温泉の他、温度の低い冷泉用の貯湯槽もあり、混合して冬は高め、夏は低めに温度調整）総湯と各旅館に引き湯している。 集中管理のための分湯所は４カ所あり、うち３カ所は相互に湯をやりとりし、湯量を調整している。 スケールはつかないので年に１度の清掃のみ。	高温の蒸気を含む温泉となっているため、基本は、引き湯用のパイプも、蒸気を逃がすための煙突用のパイプも鋼管が使われているが、すぐに腐食が進むため、煙害が強いところでは半年に１回は交換している。温度がやや低いところではHTポリプロピレンのパイプに代替しているところもあり、そこでは今のところ交換の必要はないがまだごく一部である。	蒸気泉の場合、セパレーターにより蒸気と高温の湯に分け、高温の蒸気やまだ温度の下がらない湯についてはステンレス管、その後は塩ビ管を使用。高温の湯については、湯雨竹という装置で急激に温度を下げる。熱交換やブロワーでの空気吹き込みで下げるなどの手段も使われている。 ポンプ交換２年に１回程度で、年１回スケールを取る。

⑦湯の管理３：湯船・浴槽の湯の管理

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
高温の湯については山水の加水量をバルブで調整して適温にしている。そこまで高温でない場合は、掛け流しの量をバルブで調整する。 最も.新しい施設である休暇村では最終の微調整（加水もしくはボイラー加温）を自動で実施している。	源泉掛け流しの湯を、少量ずつ浴槽に流し適温にしている。 季節、天候により流す量をバルブ操作等で変えなければならないので経験が必要。	源泉掛け流しの湯を、少量ずつ浴槽に流し適温にしている。 季節、天候により流す量を変えなければならないので経験が必要。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
源泉掛け流しの湯を、①湯小屋で冷まし、②少量ずつ浴槽に流し、③湯もみをして、適温にしている。 季節、天候により流す量を変えなければならず経験が必要。	主要な旅館では源泉掛け流しの湯を、混合泉にしたり、熱交換で冷まし、少量ずつ浴槽に流し適温にしている。 季節、天候、川の水の量により流す量を変えなければならないのでバルブ操作が難しい。	源泉掛け流しの湯を ①浴槽に流す量を調整する ②高温蒸気をパイプに当てて加温する のいずれかの方法で適温にしている。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
①大浴場利用では、循環濾過＋自動加水／加温＋塩素投入 ②小規模な浴槽については源泉掛け流し ③総湯については熱交換で冷ましてから掛け流しで調整。	①大浴場利用では、 循環濾過＋自動加温＋塩素投入 ②個室付き浴槽では源泉掛け流し（客が湯量管理）がある。	源泉掛け流しでは湯量を手動で調整する。湯量の調整としては、引き湯距離が長い（比較的低温になる）ものと短いものを、どれだけ湯尻に近いところに入れていくかを手動で調整し、それでも調整仕切れない場合はバルブで源泉量を調整する。また湯口と湯尻で浴槽の温度が異なるので後は選んで入ってもらう旅館、共同浴場によって「あつ湯」と「ゆる湯」が分けられている場合も多い。 共同浴場ではかけ流しの源泉を浴槽外に捨てる量、加水用の水道によって湯温を調整する。

下呂温泉	有馬温泉	三朝温泉
大浴場のため循環濾過と塩素投入を行っている。 高温のため、清掃後に浴槽全体を入れ替えする時のみ加水し、後は掛け流し量を調整して温度を保っている。温度調整のための掛け流し量の調整はかつて手動であったが近年は自動化も始まっている。 個室の風呂は源泉掛け流しで量は入湯客が自身で調整する。	①伝統的な自然流下＋少量ずつ源泉をかけ流す湯温調整（竹樋＋杭など）。 ②掛け流し量をポンプで自動調整。 の２通りがある。②は１館のみでの先進設備だがスケールが析出するのでメンテナンスは大変。	源泉掛け流しの湯を、①低温・高温の湯を季節に合わせて混合して適温化（手動）、②足下湧泉の湯を加水して適温化（手動）、③足下湧泉の湯をそのまま提供（夏場や清掃後は熱くなりすぎて入れない／天井に熱を冷ます窓有）、のいずれかで提供。 またラドン熱気浴については源泉から湧き上がる蒸気を利用。季節によって自然に上下する（排煙窓がある室は比較的低温になるので熱すぎる時はそちらを利用する）。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
総湯は大浴場利用のため、循環濾過＋自動加温＋塩素投入を実施している。	入り湯については源泉が高温のため季節や天候に応じて山水の加水量を手動で深夜数時間かけて調整する。 箱蒸しは 98 度の源泉が流れる鉄のパイプから上がってくる蒸気を使う。 蒸し湯は 98 度の源泉が溜まっている浅い浴槽のようなものが下にあり、熱い時はそこに水を打ったり、あるいはドアを開けて調整する。	高温の湯について湯雨竹やブロワー、熱交換等で温度を落としその後はこまめに掛け流し量を調整して適温にしている。 泥湯では泥は自然湧出でその上に造成泉のお湯を張る。お湯の温度は造成時の蒸気量で調整、ぬるいときにはさらに蒸気を追加。 地元の共同湯では源泉掛け流しの量を入っている人がバルブで調整する。湯雨竹ミニがついていて源泉を冷却している所もある。 砂湯（竹瓦温泉）では自然湧出している温泉で砂を温める。調整はなく冬はぬるくなる。

⑧地域コミュニティ

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
近世まで 鶴の湯、黒湯、蟹場の三温泉が開湯。うち鶴の湯は湯株を複数人で分け合っており、隣村との運営協力の記録も残る。 近代 近代までは各温泉同士の結びつきは少ない。 現在 旧来型の湯治客（近隣の農村からの長期自炊湯治）が減少してきた昭和 50 年代から各温泉地を巡るスタンプラリーを開始。これを契機に、現在では、地域で宿の継承を支援するほど結びつきが強化された。	近世まで 村方に仙台藩に運上金を納める湯守がおり、その下で運営。湯守は基本的に世襲であった。温泉は外湯。 近代 大正時代より内湯が始まり、自家源泉主体の温泉地として発展。 現在 周辺のリゾート開発にともない一部地域に外部資本が入ったこともあったが、基本的には地元資本が多い。	近世まで 温泉地は二本松藩が直接運営。村方は麓から温泉地に物資などを運び込む役割。 近代 地元で岳温泉株式合資会社をつくり、源泉管理と引き湯を行い、温泉地を再興。その後、経営難に陥り、外部資本を同社に導入。昭和初期内湯化。 現在 社名を変更した岳温泉管理株式会社がそのまま源泉管理と引き湯を実施。ただし平成になってから資本は地元の温泉組合になった。

草津温泉	四万温泉	伊香保温泉
近世まで 中世末期に在地領主であった湯本氏の分家三家が内湯を認められるとともに温泉地を差配。他の宿は外湯を使用。湯の花は非人役の湯根氏が差配。 近代 明治２年の大火により湯本氏、湯根氏支配はなくなり、他の湯宿とともに県内資本に代替。また内湯化が進む。 現在 草津町が源泉を管理、また町役場が中心に歴史的町並み再生。女将の会も活躍。	近世まで 天領になってから村方（名主と湯守）による温泉地自治が確立。 近代 温泉組合が全住民を組合員としてでき、近世までと同様の共同湯の管理と利用を継承する一方、内湯化が進む。湯宿の経営層は江戸を引き継ぐ。 現在 温泉組合は旅館組合に代わったが、共同湯は残る。江戸以来の大手旅館中心であることは変わらない。	近世まで 戦国末期の国侍層が大手の湯宿となり、14 軒の湯宿が内湯をもち石段経由で引き湯、温泉を支配。うち 12 軒が輪番で名主に。その下に外湯利用の小規模宿屋が広がる。 近代 二度の大火で大家の多くが没落したが中央資本ではなく県内資本に代替。ただし石段引き湯の組合は変わらず。 現在 石段の引き湯組合は継続するが、新規掘削により中小も内湯化し、温泉街が拡大。
和倉温泉	**山中温泉**	**野沢温泉**
近世まで 湯番頭が所口（七尾）から派遣され、地元住民と対立。 近代 明治初めに湯番頭に手切れ金を渡して放逐。手切れ金は株で住民より集め、これが和倉温泉合資会社となって源泉を管理し、地域振興も担うように。総湯を整備し内湯化と集中管理開始。 現在 合資会社による温泉集中管理と総湯運営を継承。温泉については内湯への配湯の方が、総湯より、優先される。	近世まで 主要な宿屋が湯元十二軒衆として総湯を管理し、村を差配していた。温泉は総湯のみである。 近代 源泉・総湯は町の所有となったが、湯持ち衆との営業権契約と、住民の総湯無償利用が確保された。昭和初期に内湯化、集中管理は旅館組合の合資会社。 現在 戦後、山中町管理に。その後、加賀市合併の際に源泉、集中管理は財産区に。総湯は住民重視の性格が残る。	近世まで 村方で源泉と４カ所の共同浴場を管理。一時藩が大湯の源泉を御殿として接収していた。 近代 村方の組織が野沢組として残り源泉や共同湯、山林、神社等の管理を継続。地区の共同浴場も開始。昭和６年より内湯化。 現在 野沢組の温泉部門として（一財）野沢会が作られ温泉管理を継続。野沢組は認可地縁団体として山林や神社等を管理。他に地区の湯仲間が共同浴場管理。
下呂温泉	**有馬温泉**	**三朝温泉**
近世まで 湯番という宿経営と土地所有の株制度があり、株を持つ湯仲間が村を差配して湯役を運上した。外湯。 近代 近世までの湯仲間制度のもとに住民が「区」をつくり、源泉と外湯を所有。水害による湯脈破壊後、外部資本を導入して昭和初期に再興し、内湯化。 現在 温泉法施行後自家源泉掘削が拡大。温泉資源確保のため、昭和 40 年代後半に源泉保全と集中管理を開始。かつての湯仲間と戦前からの外部資本２家による開発と運営の共同組合管理。	近世まで 有力な旅館が有馬二十坊として外湯と湯女を管理し町を差配。株制度があった。町の差配は幕末に大火で衰退した後、町民選挙に変更。 近代 有馬町が唯一の外湯を管理していた。昭和 16 年より、新規掘削を、町と神戸電鉄と作った有馬温泉企業が開始。内湯化は泉源が増えた戦後。 現在 有馬温泉企業が伝統的な金湯の泉源を所有、管理。	近世まで 温泉場の数が多く、どこにも自由に入れた。17 世紀より村方が温泉の運上金を納める。 近代 明治期から自家源泉の内湯が多く開発された。大正期に村営ラジウム温泉療養所もできた。 現在 そもそもの源泉である株湯と河原湯が共同浴場として運営されている。町営のラドン熱気浴の施設もある。 自家源泉の掘削は昭和 30 年代で終わり、町のみの掘削となった。町有源泉は集中管理となっている。

道後温泉	杖立温泉	別府温泉郷
近世まで 中世までは石手寺管理。近世は外湯一つと藩主用の湯があった。宿の営業には株の取得が必要であった。湯銭徴収は明王院がまとめて実施。 近代 明王院がなくなり、共同湯を町方の組頭が管理。その後、町の代表者による原泉社から道後町管理に。外湯のみ。 現在 松山市編入により源泉・外湯管理は財産区に。新規源泉を掘削し、昭和 31 年より内湯化。財産区は昭和 41 年に破綻し、管理は市に。ただし現在でも旅館組合の発言権は強い。	近世まで 村方に温泉見取締役が置かれて湯銭を徴収、士分を賜っていた。外湯であった。 近代 明治期までは外湯、昭和初期から内湯ができ、炭鉱から団体客がきて宴会をする温泉地となった。 現在 小国町本体とは半独立となっており、旅館組合と観光協会が一体の組織として、温泉だけでなく、道路清掃などを含めた地域の管理を担っている。	近世まで 八湯で異なり、別府には内湯が、他は外湯であった。 近代 明治期の活発な掘削で内湯化が進むとともに、地元用の共同浴場、行政が関与する観光用の共同浴場双方で整備が進む。 現在 自家源泉が多く、県・市での掘削制限や資源有効利用施策が源泉管理施策となっている。共同浴場については、市有に加え地域の住民が所有・運営するものが多くある。 八湯ごとの地域づくり活動が全国的に有名。

⑨その他の文化要素

乳頭温泉郷	鳴子温泉郷	岳温泉
特産品、芸能、文学等 伝統的に湯治で利用されていた山菜・筍・茸・川魚が食の中心で、今もメニュー化されている。鶴の湯ではまんじゅう、諸越 など、黒湯温泉では黒たまごなどを販売。 景観・歴史情緒 鶴の湯では文化財である鶴の湯温泉本陣の建物を中心に歴史的な湯治場の風情を残す。黒湯温泉も大正時代の自炊棟などがあり、茅葺きも多く、自炊湯治時代の伝統を思わせるものとなっている。	特産品、芸能等 江戸時代より木工が盛ん。今はそのうち民芸品として評価を得たこけしと美術工芸品として発達した鳴子漆器が残る。明治時代には「栗だんご」が名産として作られ今も売れている。 景観・歴史情緒 大きな歴史景観整備はなされていないが、鳴子神社のご神湯であったとされる共同浴場「滝の湯」や 1596 年創業の「藤島旅館」等がある。自炊設備を持つ宿が多く湯治場の情緒が残る。	特産品、芸能等 以前は湯の花を作り、販売していた（地元の手作り）。 景観・歴史情緒 ８km ある引き湯の伝統を活かした湯守文化の継承を PR。 源泉を清掃する時に旅館まで湯の花が流れてくるがそれをミルキーデイとして岳の特徴にしている。
草津温泉	**四万温泉**	**伊香保温泉**
特産品、芸能、文学等 近世から有名であった「湯の花」を現在も提供している。 時間湯の伝統から湯もみ歌、草津節（大正）、戦後の湯もみイベントが生まれる。 景観・歴史情緒 湯畑、白旗源泉周辺の景観整備や滝下通りのせがい作りの建造物整備、裏草津での整備などで旧温泉街の歴史情緒を復興している。	景観・歴史情緒 歴史的景観としては、源泉地である薬師堂や歴史的建造物である旅館たむら、積善館があり、湯治場であった時の街並みも残る。	特産品、芸能、文学等 明治期に開発された湯の花饅頭が、全国の温泉饅頭の元祖として有名。また、徳冨蘆花の伊香保を舞台とした小説が戦前ヒットし、蘆花祭として戦後も継承される。蘆花記念館もある。 景観・歴史情緒 平成の伊香保再生事業でシンボルとなる石段周りを再整備し、そこを中心に景観作り実施している。

和倉温泉	山中温泉	野沢温泉
特産品、芸能、文学等 明治から昭和 30 年代まで湯の花を販売していた。また明治後半に一時「和倉焼」も造られた。かつては七尾湾の貝等もあったが、現在は北陸全体の海の幸を売り物にしている。湯元広場に温泉卵用の湯がある。 景観・歴史情緒 大正天皇が東宮時代に行啓した和倉御便殿本殿・供奉殿が残る。 旧湯元の広場やかつて海中の小島であった弁天島の公園整備、街灯や七福神整備、総湯の整備などで街への回遊を促している。	特産品、芸能等 江戸から栄えた山中漆器（人間国宝がいる）と幕末に誕生、大正・昭和に全国に流行した山中節が有名。また芭蕉が訪れ有名句や弟子を残しており、現在も多くの句碑があるとともに、芭蕉館も建てられている。 景観・歴史情緒 総湯のうち男湯は天平様式で再現、女湯は山中漆器をモチーフに新築、景観の目玉にしている。また、歴史的な景観のあるゆげ街道を整備、景勝地である鶴仙渓と合わせた回遊路を構築。	特産品、芸能、文学等 近世までは麻の生産に温泉を利用。その後はあけび細工に利用して大きく栄えた。その他洗濯にも利用。 また調理にも温泉を利用しており、野沢菜を洗う際には共同浴場が開放される。近年は野菜に加えゆで卵にも利用されている。 景観・歴史情緒 共同浴場のひとつ大湯が宮大工により歴史的な建築法で再現されている。また旅館で同じ造りにしているところもある。
下呂温泉	**有馬温泉**	**三朝温泉**
特産品、芸能、文学等 食品としては、温泉を調理には使っていないが朴葉寿司・朴葉餅・あねかえし（よもぎ餅）・鶏ちゃん等を PR している。 他に地元の黄柏を使った「奥田家下呂膏」があり、明治から有名である。芸能では野口雨情原作の新調下呂小唄があり、市雇用の芸者が継いでいる。 景観・歴史情緒 歴史建造物を集めた合掌村がある。また下呂膏を販売している「若松屋」も明治期の建物。	特産品、芸能等 中世より木工が土産物として有名だったが、現在は有馬籠細工と有馬人形筆のみに。 江戸より続く食材としては山椒と松茸昆布、明治になってからは炭酸煎餅が名物に。 有馬節が近世から有名で、上方、江戸にまで広がっている（浄瑠璃や歌舞伎の作品に）。 景観・歴史情緒 そぞろ歩きができる温泉街として休業・廃業した木造の旅館・商店の再生による歴史情緒がある通りづくりを実施。また共同浴場（金の湯）、大公の湯殿館を整備。	特産品、芸能、文学等 先述した「ジンショ」だけでなく、野口雨情作詞、中山晋平作曲の三朝小唄があり、戦前に映画化もされた。また白狼太鼓が 1977 年に再興された。 景観・歴史情緒 もともとの源泉である株湯、混浴の河原湯や大正時代の建物を改修したラドン熱気浴場、登録有形文化財の江戸からある宿の建物など温泉地の歴史を感じさせる施設がある。
道後温泉	**杖立温泉**	**別府温泉郷**
特産品、芸能、文学等 江戸時代より道後縞など周囲の特産品を土産物として販売。現在でも今治タオル、五色そうめん、一六タルト等を多く販売。道後のみのものとしては坊ちゃん団子がある。 正岡子規、夏目漱石など文学を大きく PR。正岡子規記念館がある。 景観・歴史情緒 80 年代より継続的に歴史的景観を整備。92 年には地元民間の協議会がビジョンを策定し、それに則り、市も協力して本館を含む三つの総湯、ハイカラロード、坊ちゃん電車等で回遊路を構築した。	特産品、芸能、文学等 鯉濃などの川魚料理、温泉の蒸気を使った調理などが名物。近年ではプリンなどを多く開発。竹細工もあるが近年は絵鯉（こいのぼり祭にちなむ鯉の絵馬）が有名。 令和元年まで伝承芝居（地区住民が実施する大衆演劇）を実施。 景観・歴史情緒 高度経済成長期までに作られた背戸屋と呼ばれる込み入った路地を独自の景観としている。 鯉のぼり祭りが有名。	特産品、芸能、文学等 鉄輪では江戸時代より温泉の蒸気を使った地獄蒸しが有名。 明礬温泉では伝統的な湯の花作りを継続。また工芸品として別府竹細工がある。 景観・歴史情緒 アートイベント「別府混浴温泉世界」が別府の街全体を使って実施されている。また、地域の魅力づくり活動で有名なオンパクの発祥の地であり、ソフト面での活動を多様に実施している。

２節　国民意識調査（ウェブ調査）

２－１　調査概要

日本においては、これまで述べてきた通り、長い歴史を通じ温泉の利用が国民に幅広く受け入れられている。ここでは、アンケート調査を通じ、温泉及び温泉文化に対しての国民の行動と意識を調査し、その実態と特性を整理する。

（１）調査対象

今回調査では、国民の意見を幅広く収集するため、全国 16 歳以上 80 歳未満の日本在住者 5,000 人を対象にアンケートを実施した。調査にあたっては、全国を 10 のブロックに分け、ブロックごとに男女・性別・年齢を、令和２（2020）年の国勢調査人口の分布に合わせて有効回答を収集し、地域や年齢・性別による偏りが起こらないよう工夫している。なお、地域のブロック分けについては、総務省統計局の区分を採用した。

地域ブロックごとの有効回答者数は下記に示す通りである。

図表 2-1-1. 地域ブロック別有効回答数　　（上段：人、下段：%）

n	北海道	東北（青森，岩手，宮城，秋田，山形，福島）	南関東（埼玉，千葉，東京，神奈川）	北関東・甲信（茨城，栃木，群馬，山梨，長野）	北陸（新潟，富山，石川，福井）	東海（岐阜，静岡，愛知，三重）	近畿（滋賀，京都，大阪，兵庫，奈良，和歌山）	中国（鳥取，島根，岡山，広島，山口）	四国（徳島，香川，愛媛，高知）	九州（福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，鹿児島，沖縄）
5000	211	339	1492	382	203	590	812	281	142	548
100.0	4.2	6.8	29.8	7.6	4.1	11.8	16.2	5.6	2.8	11.0

（２）調査期間

アンケートを実施した調査期間は令和６年 11 月 27 日（水）から 11 月 29 日（金）の３日間である。

（３）調査方法

ウェブパネルを用いたオンライン調査で実施した。

（４）その他

集計結果の合計値は、小数点第２位以下を四捨五入しているため、100.0%とならない場合がある。

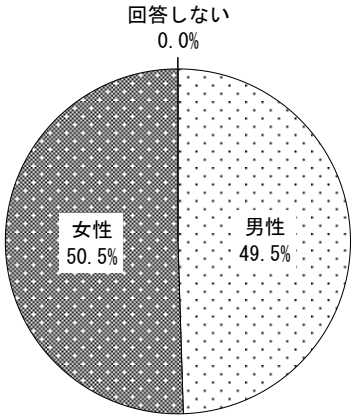
２－２　調査結果

（１）回答者の状況

性別

「女性」が 50.5%、「男性」が 49.5%である。

図表 2-2-1. 性別

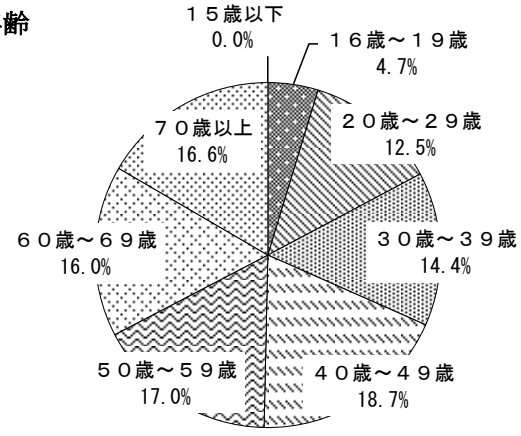


(n=5,000)

年齢

「４０歳～４９歳」が 18.7%、「５０歳～５９歳」が 17.0%、「７０歳以上」が 16.6%である。

図表 2-2-2. 年齢

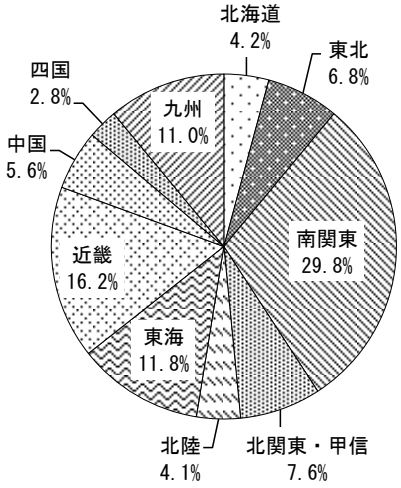


(n=5,000)

居住地

「南関東」が 29.8%、「近畿」が 16.2%、「東海」が 11.8%となっている。

図表 2-2-3. 地域

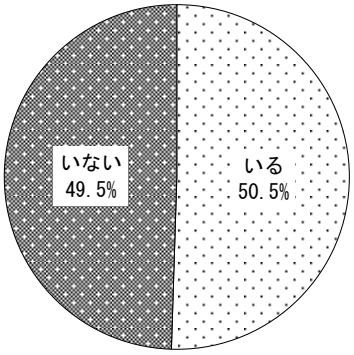


(n=5,000)

配偶者の有無

「いる」が 50.5%、「いない」が 49.5%となっている。

図表 2-2-4. 配偶者

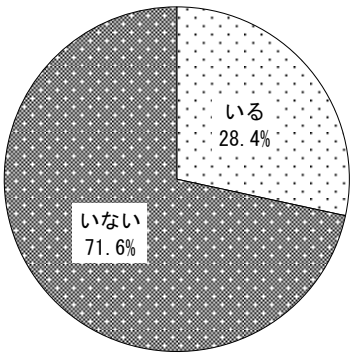


(n=5,000)

同居している子どもの有無

「いない」が 71.6%、「いる」が 28.4%となっている。

図表 2-2-5. 子供の同居

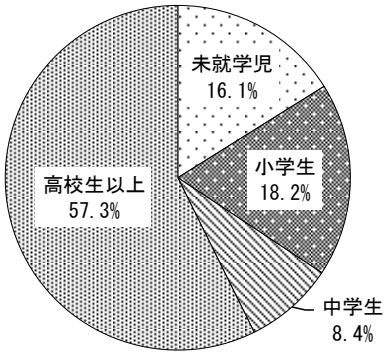


(n=5,000)

同居している子どもの年代

「高校生以上」が 57.3%、「小学生」が 18.2%、「未就学児」が 16.1%、「中学生」が 8.4%となっている。

図表 2-2-6. 子供の年齢

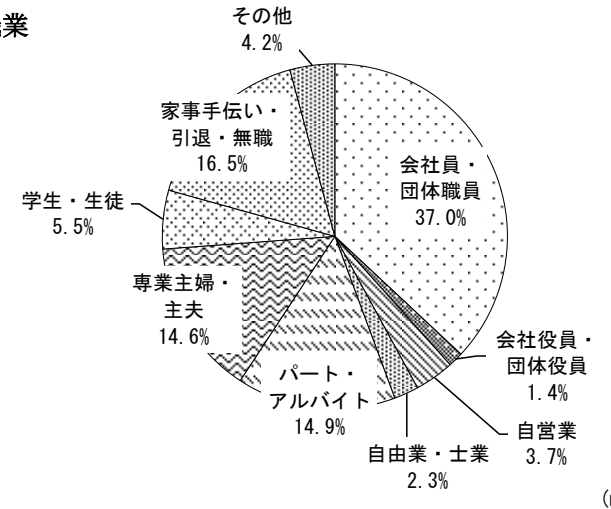


(n=1,420)

職業

「会社員・団体職員」が 37.0%、「家事手伝い・引退・無職」が 16.5%、「パート・アルバイト」が 14.9%となっている。

図表 2-2-7. 職業



(n=5,000)

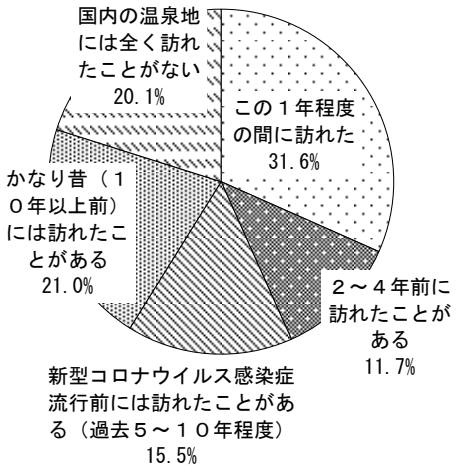
（２）温泉地への訪問状況と温泉文化についての考え方

温泉地への訪問経験

「この１年程度の間に訪れた」が 31.6%、「２～４年前に訪れたことがある」が 11.7%、「新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去５～１０年程度）」が 15.5%、「かなり昔（１０年以上前）には訪れたことがある」が 21.0%、「国内の温泉地には全く訪れたことがない」が 20.1%である。過去に温泉地に旅行にいった合計は計 79.9%となっている。

年齢別で見ると、温泉地訪問の未経験率（「国内の温泉地には全く訪れたことがない」）が 16 歳～19 歳、20 歳～29 歳、30 歳～39 歳で 30%を超えて全体より高くなっており、比較的若い層で未経験者が多い。

図表 2-2-8. 訪問経験

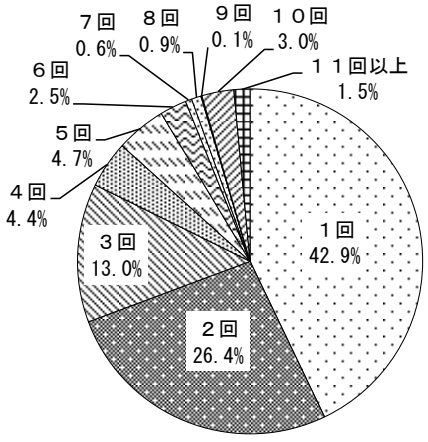


(n=5,000)

過去１年以内の温泉地への訪問回数

「１回」が 42.9%、「２回」が 26.4%、「３回」が 13.0%である。同居家族で見ると、中学生のいる家庭で「１回」が 53.1%と全体より 10.2 ポイント高くなっている。

図表 2-2-9. 訪問頻度



(n=1,582)

過去１年間で一番最近訪問した温泉地（上位 10 カ所）

訪れた温泉地の上位 10 カ所を見ると、「草津」が 5.1%で最も多く、次いで「箱根」4.4%、「有馬」3.8%、「別府」3.5%、「下呂」3.0%などと続いている。

男女別でみると、男性の方が多いのは「草津」、「道後」、「伊香保」、「鬼怒川」、逆に女性が多いのは「箱根」、「有馬」、「下呂」、「由布院・湯布院」である（「別府」、「熱海」には男女で大きな差はない）。

図表 2-2-10. 訪問した温泉地

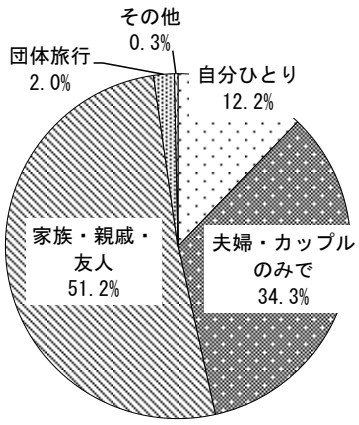
n	草津	箱根	有馬	別府	下呂	熱海	道後	伊香保	鬼怒川	由布院・湯布院
1582	80	69	60	55	47	46	37	37	29	27
100.0	5.1	4.4	3.8	3.5	3.0	2.9	2.3	2.3	1.8	1.7

同行者

「家族・親戚・友人」が 51.2%、「夫婦・カップルのみで」が 34.3%、「自分ひとり」が 12.2%である。

一番最近訪れた温泉地のうち、草津に行った人は「夫婦・カップルのみで」が 46.3%で最も多く、全体より 12.0 ポイント高くなっている。伊香保に行った人は「家族・親戚・友人」が 62.2%で最も多く、全体より 11.0 ポイント高くなっている。

図表 2-2-11. 同行者



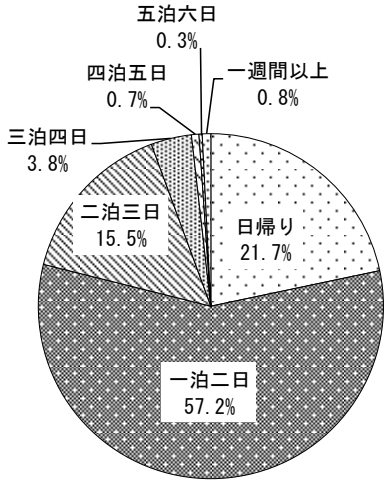
(n=1,582)

宿泊日数

「一泊二日」が 57.2%、「日帰り」が 21.7%、「二泊三日」が 15.5%となっており、一泊二日が過半を占める。

職業別で見ると、学生・生徒で「日帰り」が 41.2%と全体より 19.5 ポイントと高くなっている。

図表 2-2-12.訪問日数



(n=1,582)

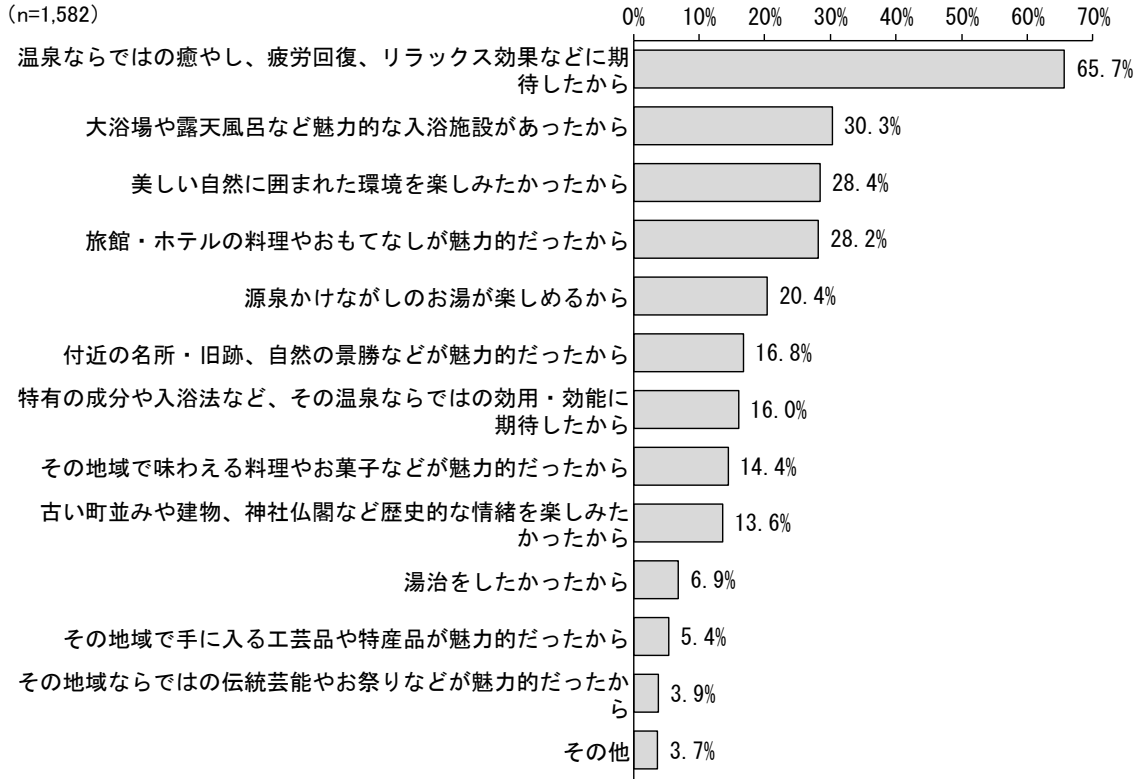
訪問理由

「温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などに期待したから」が 65.7%、「大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設があったから」が 30.3%、「美しい自然に囲まれた環境を楽しみたかったから」が 28.4%となっており、温泉の癒やしの効果への期待が高い。

年齢別で見ると、２０歳～２９歳で「湯治をしたかったから」が 17.1%と全体より 10.2 ポイント高くなっている。

一番最近訪れた観光地の１位であった草津では「湯治」という回答が 16.3%で平均よりかなり高い。２位の箱根では「大浴場などの入浴施設」が 39.1%と高く、３位の有馬では「特有の成分などの効用」という回答が 30.0%と多い。

図表 2-2-13. 訪問理由



一番最近訪れた温泉地で楽しんだこと

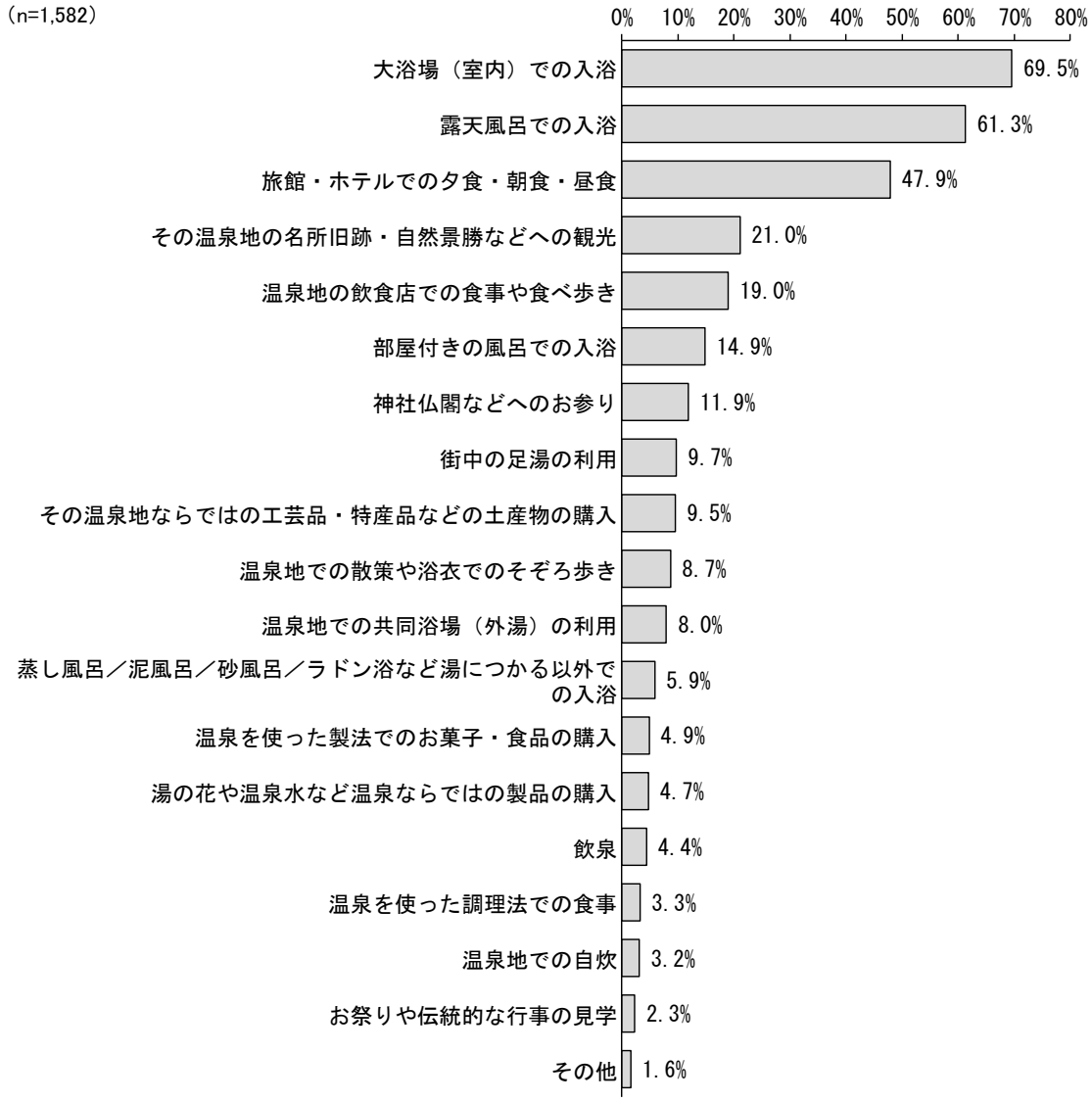
「大浴場（室内）での入浴」が 69.5%、「露天風呂での入浴」が 61.3%、「旅館・ホテルでの夕食・朝食・昼食」が 47.9%となっている。

年齢別で見ると、３０歳～３９歳で「部屋付きの風呂での入浴」が 25.5%と全体より 10.6 ポイント高くなっている。

同居家族で見ると、未就学児で「蒸し風呂/泥風呂/砂風呂/ラドン浴など湯につかる以外での入浴」が 16.5%で全体より 10.6 ポイント、「街中の足湯の利用」が 20.6%と全体より 10.9 ポイントそれぞれ高くなっている。

一番最近訪れた温泉地のうち、草津に行った人は「大浴場(室内)での入浴」が最も多く回答されてはいるものの、回答率は 56.3%で全体より 13.2 ポイント低くなっており、「街中の足湯の利用」が 31.3%で全体より 21.6 ポイント高くなっている。

図表 2-2-14. 楽しんだ内容

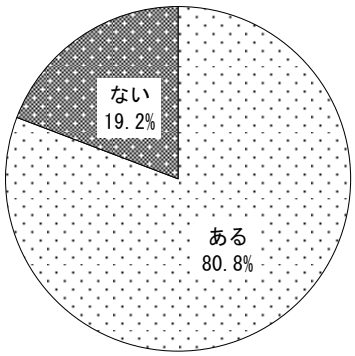


過去１年以内で一番最近訪問した温泉地以外への訪問

「ある」が 80.8%、「ない」が 19.2%となっている。

一番最近訪れた温泉地のうち、道後に行った人は「ある」が 68.4%で全体より 12.4 ポイント低い（他の温泉地にあまり行っていない)。

図表 2-2-15. 他の温泉地への訪問



(n=904)

一番最近訪問した温泉地以外に訪問した温泉地（上位 10 カ所）

訪れた温泉地の上位 10 カ所を見ると、「箱根」が 5.6%、「草津」が 5.2%、「熱海」と「有馬」が 4.1%となっている。

図表 2-2-16. 他の温泉地

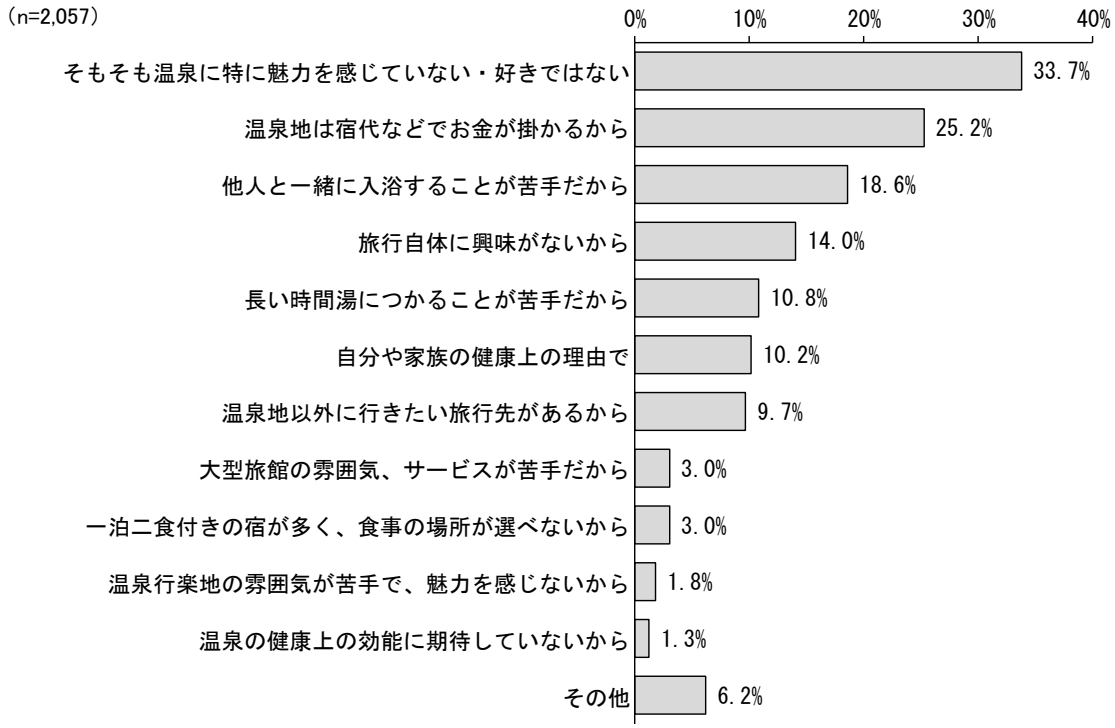
n	箱根	草津	熱海	有馬	伊香保	別府	下呂	道後	南紀白浜	鬼怒川
730	41	38	30	30	27	25	21	20	18	17
100.0	5.6	5.2	4.1	4.1	3.7	3.4	2.9	2.7	2.5	2.3

温泉地へ行かない理由

「そもそも温泉に特に魅力を感じていない・好きではない」が 33.7%、「温泉地は宿代などでお金が掛かるから」が 25.2%、「他人と一緒に入浴することが苦手だから」が 18.6%となっている。

年齢別で見ると、２０歳～２９歳で「そもそも温泉に特に魅力を感じていない・好きではない」が 44.1%と全体平均より 10.4 ポイント、７０歳以上で「自分や家族の健康上の理由で」が 21.4%と全体平均より 11.2 ポイントそれぞれ高くなっている。20 代の層の温泉離れが懸念される結果である。

図表 2-2-17. 温泉地に行かない理由



名湯だと思う温泉地の有無

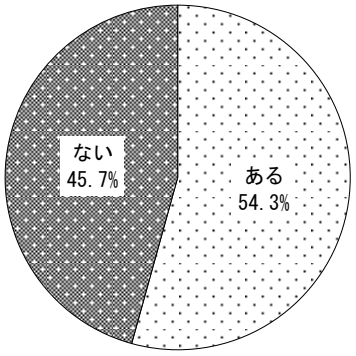
「ある」が 54.3%、「ない」が 45.7%となっている。

年齢別で見ると、２０歳～２９歳で「ない」が 58.6%と全体より 12.9 ポイント、７０歳以上で「ある」が 65.9%と全体より 11.6 ポイントそれぞれ高くなっている。

訪問経験で見ると、この１年程度の間に訪れた人は「ある」が 73.8%と全体より 19.5 ポイント高く、温泉地への訪問の間隔が間遠になるにつれて、「ある」と回答する割合が低くなる傾向がある。

過去１年間で一番最近訪れた温泉地のうち、上位 10 カ所ではいずれも「ある」が最も多く回答されており、全て 10 ポイント以上全体より高くなっている。

図表 2-2-18. 名湯があると思う割合



(n=5,000)

名湯だと思う温泉地（上位 10 カ所）

「草津」が 26.6%、「別府」が 17.3%、「有馬」が 14.1%となっている。男女別でみると、男性で１%以上回答が多いのが「草津」、「別府」、女性で１%以上多いのが「下呂」、「道後」、「由布院・湯布院」、「熱海」となっている。

年齢別でみると、10 代では「草津」の回答率が 31.9%と平均よりかなり高い。20 代では、「別府」が 21.2%と他の年齢層より高くなっている。

図表 2-2-19. 名湯だと思う温泉地

n	草津	別府	有馬	下呂	箱根	道後	由布院・湯布院	登別	熱海	伊香保
2714	721	470	383	236	235	184	181	180	128	113
100.0	26.6	17.3	14.1	8.7	8.7	6.8	6.7	6.6	4.7	4.2

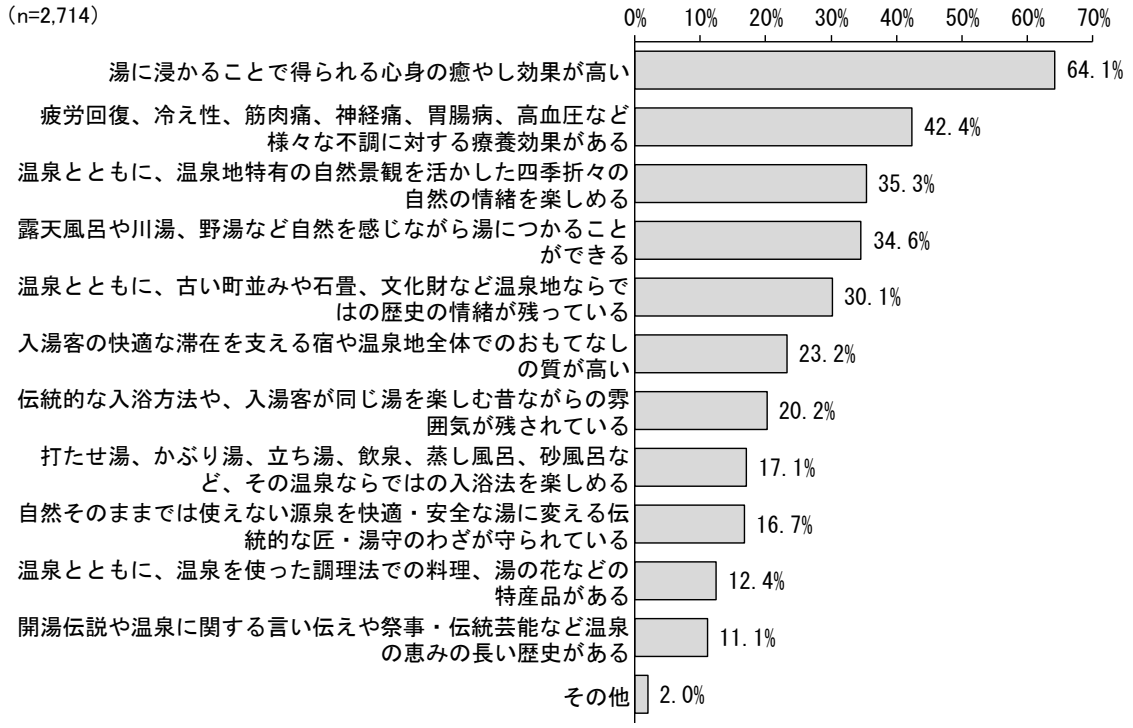
名湯だと思う理由

「湯に浸かることで得られる心身の癒やし効果が高い」が 64.1%、「疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する療養効果がある」が 42.4%となっており、癒やしや療養効果の高さが名湯と評価する大きな要因となっている。続いて「温泉とともに、温泉地特有の自然景観を活かした四季折々の自然の情緒を楽しめる」の 35.3%と「露天風呂や川湯、野湯など自然を感じながら湯につかることができる」の 34.6%が並んでおり、自然の情緒が評価されている。この後に「温泉とともに、古い町並みや石畳、文化財など温泉地ならではの歴史の情緒が残っている」が 30.1%と歴史的な情緒が続く。

年齢別で見ると、７０歳以上で「温泉とともに、温泉地特有の自然景観を活かした四季折々の自然の情緒を楽しめる」が 46.4%と全体より 11.1 ポイント高くなっている。

名湯だと思う温泉地について、別府、有馬、道後、伊香保と答えた人では、「温泉とともに、古い町並みや石畳、文化財など温泉地ならではの歴史の情緒が残っている」と回答した割合が 40%を超え、いずれも全体より 10 ポイント以上高くなっている。

図表 2-2-20. 名湯だと思う理由



行ってみたい温泉地の有無

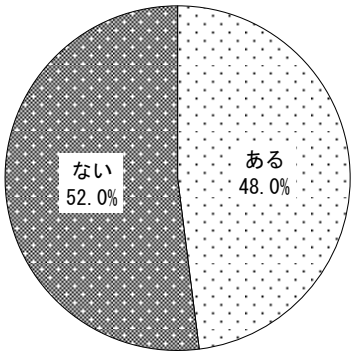
「ない」が 52.0%、「ある」が 48.0%となっている。

年齢別で見ると、２０歳～２９歳で「ない」が 65.1%と全体より 13.1 ポイント、７０歳以上で「ある」が 61.4%と全体より 13.4 ポイントそれぞれ高くなっている。

訪問経験で見ると、この１年程度の間に訪れた人は「ある」が 73.9%と全体より 25.9 ポイント高く、温泉地への訪問の間隔が短くなるにつれて、「ある」と回答する割合が高い傾向がある。

一番最近訪れた温泉地のうち、上位 10 カ所ではいずれも「ある」が最も多く回答されており、いずれも 10 ポイント以上全体より高くなっている。

図表 2-2-21.行ってみたい温泉地の有無



(n=5,000)

行ってみたい温泉地（上位 10 カ所）

「草津」が 20.0%、「別府」が 14.5%、「有馬」が 8.6%となっている。男女別では、男性で女性に比べ「別府」の回答率が比較的高く、女性では「由布院・湯布院」、「下呂」、「黒川」の回答率が比較的高くなっている。

図表 2-2-22.行ってみたい温泉地

n	草津	別府	有馬	由布院・湯布院	箱根	道後	下呂	登別	黒川	城崎
2398	480	348	207	194	189	177	172	136	96	95
100.0	20.0	14.5	8.6	8.1	7.9	7.4	7.2	5.7	4.0	4.0

行ってみたい理由

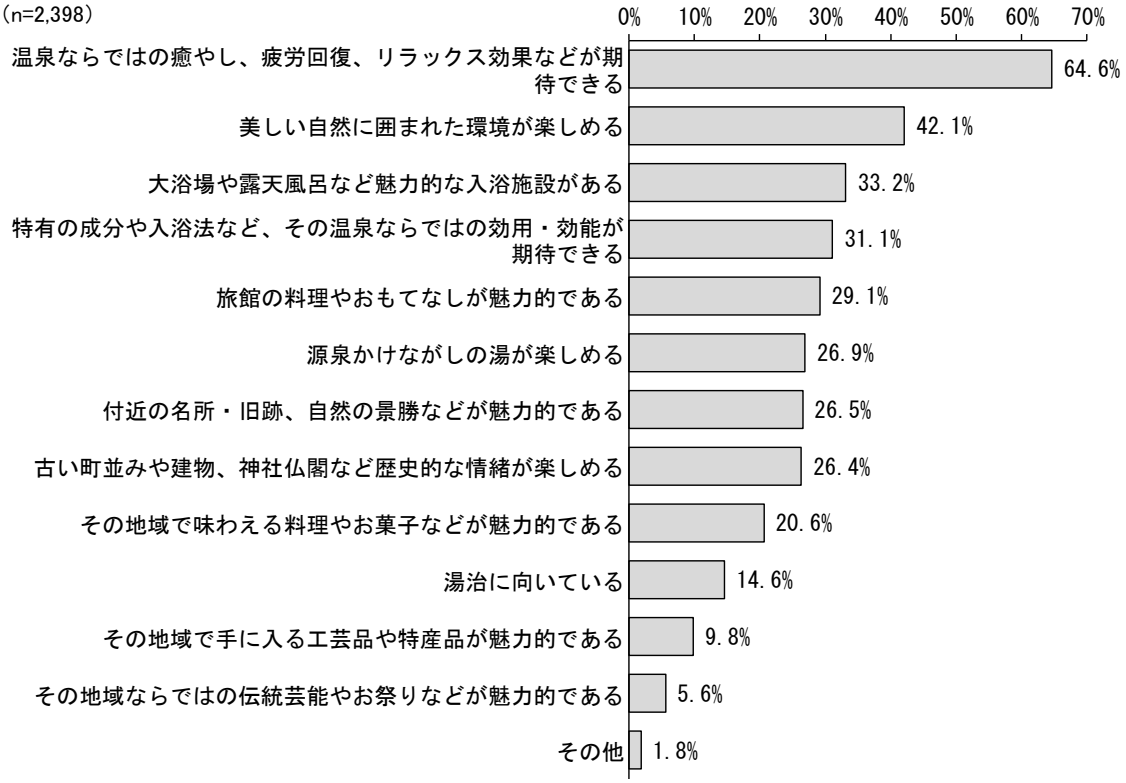
「温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などが期待できる」が 64.6%、「美しい自然に囲まれた環境が楽しめる」が 42.1%、「大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設がある」が 33.2%、「特有の成分や入浴法など、その温泉ならではの効用・効能が期待できる」31.1%となっており、癒やし・自然・入浴施設・療養効果が上位に並ぶ。

年齢別で見ると、２０歳～２９歳で「その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的である」が 31.2%と全体より 10.6 ポイント高くなっている。同居家族で見ると、未就学児で「その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的である」が 30.8%と全体より 10.2 ポイント高い。職業別で見ると、学生・生徒で「古い町並みや建物、神社仏閣など歴史的な情緒が楽しめる」が 37.6%と全体より 11.2 ポイント高くなっている。

訪問経験で見ると、この１年程度の間に訪れた人で「温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などが期待できる」が 68.4%、「美しい自然に囲まれた環境が楽しめる」が 43.3%とそれぞれ高く、またそれぞれ温泉地への訪問が短くなるにつれて回答率が高くなる傾向がある。

一番最近訪れた温泉地のうち、上位 10 カ所ではいずれも「温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などが期待できる」が最も多く回答されている。また、道後と鬼怒川では、「美しい自然に囲まれた環境が楽しめる」で 50%以上回答されており、全体より 10 ポイント以上高くなっている。

図表 2-2-23. 行ってみたい理由



日本ならではの温泉文化だと思うもの

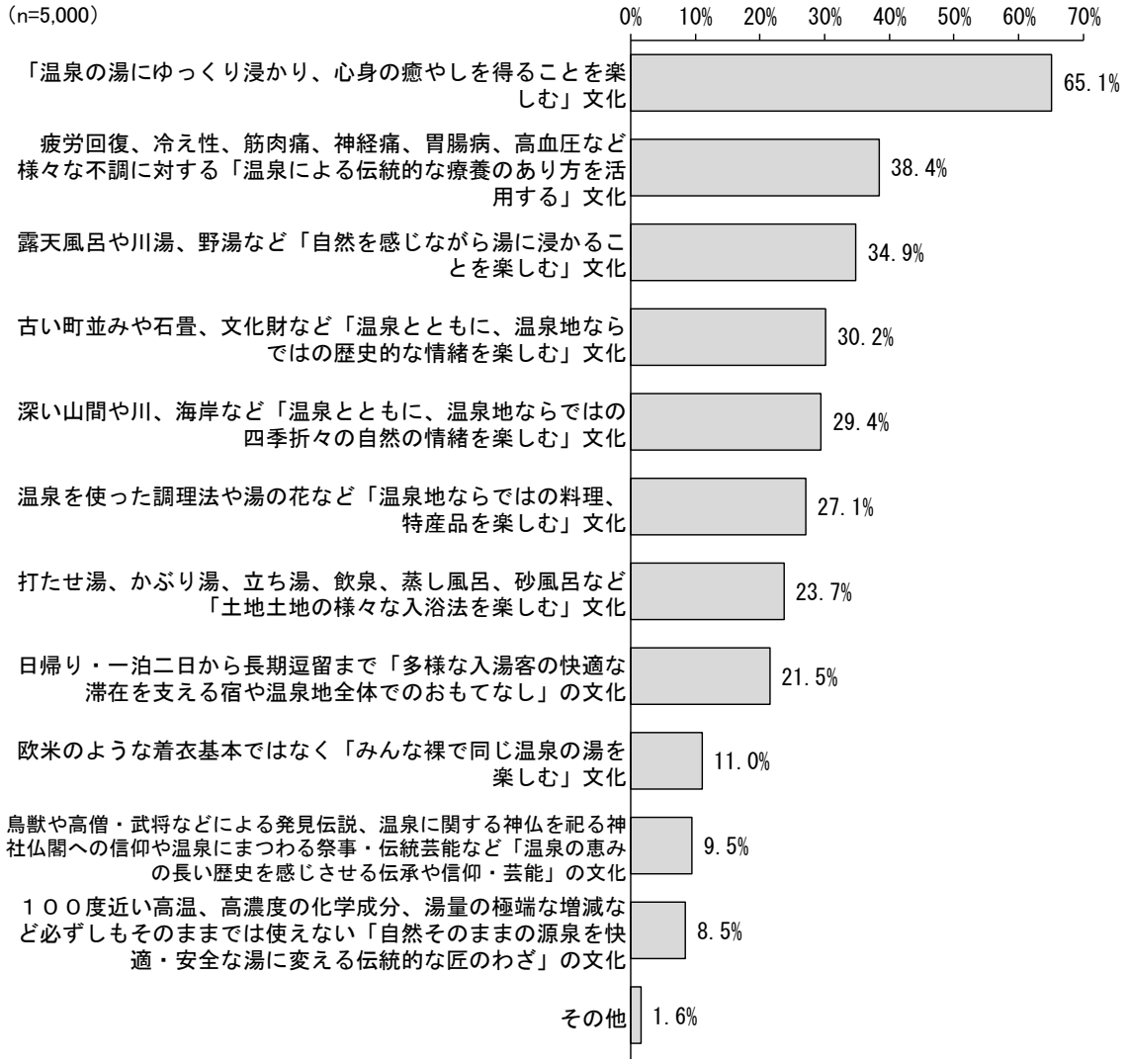
「『温泉の湯にゆっくり浸かり、心身の癒やしを得ることを楽しむ』文化」が 65.1%ともっとも高く、入浴とそれによる癒やしが日本人の考える温泉文化の核にあることがわかる。次いで、「疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する『温泉による伝統的な療養のあり方を活用する』文化」が 38.4%、「露天風呂や川湯、野湯など『自然を感じながら湯に浸かることを楽しむ』文化」が 34.9%、「古い町並みや石畳、文化財など『温泉とともに温泉地ならではの歴史的情緒を楽しむ』文化」が 30.2%と 30%台で並ぶ。この結果を見る限り、日本人が考える日本の温泉文化は、「入浴による心身の癒やし」を中核に、伝統を前提とした療養効果と、自然の中で湯を楽しむ環境、歴史的な情緒などが集まって構成されているものと考えられる。

この次に続くのが「深い山間や川、海岸など『温泉地ならではの四季折々の自然の情緒を楽しむ』文化」29.4%、「温泉を使った調理法や湯の花など『温泉地ならではの料理、特産品を楽しむ』文化」27.1%、「打たせ湯、かぶり湯、立ち湯、飲泉、蒸し風呂、砂風呂など『土地土地の様々な入浴法を楽しむ』文化」23.7%など、各温泉地独自の自然や料理・特産品、入浴法といった選択肢である。これらはいずれもそれぞれの温泉地ならではの地域性を象徴するものとなっており、日本の温泉文化には、基底として全てに通じる癒やしや自然との融和、歴史性といったものに加え、地域それぞれの多様性が重要と、人々が考えていることが、回答を通じて浮かび上がってくる。

次に属性での違いをみると、まず年齢別では、２０歳～２９歳で「温泉を使った調理法や湯の花など『温泉地ならではの料理、特産品を楽しむ』文化」が 37.8%と全体より 10.7 ポイント高くなっており、若年層で地域性が重視されていることがわかる。一方、もっとも基本となる「『温泉の湯にゆっくり浸かり、心身の癒やしを得ることを楽しむ』文化」については、６０歳～６９歳で 75.9%と全体より 10.8 ポイント、７０歳以上で 77.4%と全体より 12.3 ポイントそれぞれ高くなっており、高い年齢の方の回答率が高い。この理由としては、年を取るにつれて癒やしの必要性が高まるということに加え、温泉に浸かること自体に対することそのものへの愛着が高い年齢の方が大きいということがある可能性がある。

訪問経験で見ると、この１年程度の間に訪れた人で「『温泉の湯にゆっくり浸かり、心身の癒やしを得ることを楽しむ』文化」が 79.0%、「疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する『温泉による伝統的な療養のあり方を活用する』文化」が 46.8%、「露天風呂や川湯、野湯など『自然を感じながら湯に浸かることを楽しむ』文化」が 47.0%とそれぞれ高くなっている。また、いずれも、温泉地への訪問の間隔が短ければ短いほど回答率が高い。これをみると、温泉によく行く人ほど、上位に並ぶ癒やしや療養性、自然との融和などの温泉文化の中核的な価値に高い共感を得ている可能性が高いと考えられる。

図表 2-2-24. 日本ならではの温泉文化だと思うもの



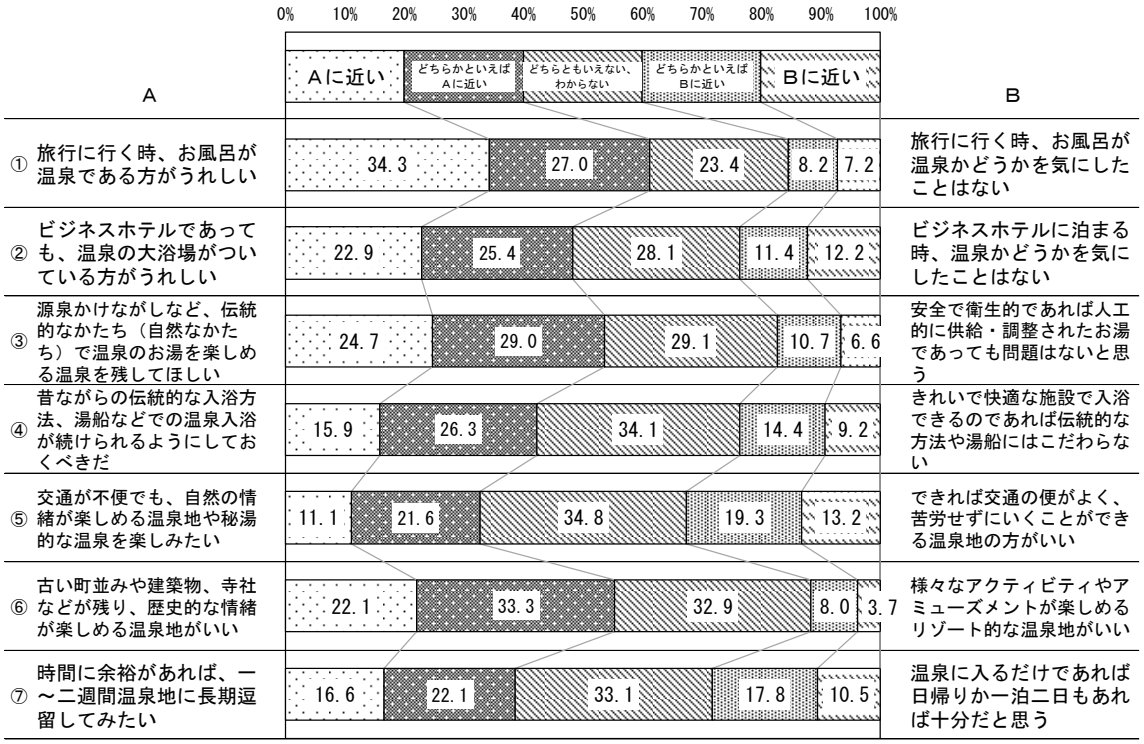
温泉についての意見

『A』(「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」)と『B』(「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」)を比較すると、いずれの項目においても『A』の方が多くなっている。

中でも、「旅行に行く時、お風呂が温泉である方がうれしい」が計 61.3%、「古い町並みや建築物、寺社などが残り、歴史的な情緒が楽しめる温泉地がいい」が計 55.4%、「源泉かけながしなど、伝統的なかたち(自然なかたち)で温泉のお湯を楽しめる温泉を残してほしい」が計 53.7%となっており、『A』の回答割合が 50%を超えている。これを見る限り、日本人は旅行にいくなら温泉に入りたいのであり、その時には歴史的情緒が欲しく、また温泉自体は源泉かけながしなど、昔の自然に近い姿の方が好ましいと考えていることがわかる。

また、訪問経験の回数との関係で見ると、『A』と回答する割合はこの1年程度の間に訪れた人が最も多く、逆に、訪問の間隔が長くなるにつれて「どちらともいえない、わからない」や『B』と回答する割合が増えている。温泉地に訪れるという行動と、温泉を大切だと思う気持ちは、相互に強く相関している。

図表 2-2-25.温泉についての意見



（３）集計表

図表 2-2-26. 訪問経験

		n	この１年程度の間に訪れた	２～４年前に訪れたことがある	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去５～１０年程度）	かなり昔（１０年以上前）には訪れたことがある	国内の温泉地には全く訪れたことがない
全 体		5000	31.6	11.7	15.5	21.0	20.1
性別	男性	2475	33.4	10.9	15.5	20.1	20.0
	女性	2525	29.9	12.4	15.6	21.9	20.2
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	30.8	16.5	14.8	6.8	31.2
	20歳～29歳	625	26.2	10.7	12.6	8.3	42.1
	30歳～39歳	718	30.6	9.5	12.8	15.6	31.5
	40歳～49歳	935	29.0	11.3	15.0	24.1	20.6
	50歳～59歳	852	27.0	12.2	16.3	29.8	14.7
	60歳～69歳	801	38.0	12.7	16.2	25.2	7.9
	70歳以上	832	38.5	11.8	19.5	22.8	7.5
居住地	北海道	211	40.8	12.8	10.4	16.6	19.4
	東北	339	29.2	12.1	14.5	21.2	23.0
	南関東	1492	33.8	9.2	16.0	20.7	20.2
	北関東・甲信	382	27.7	11.3	16.8	22.5	21.7
	北陸	203	33.0	16.7	19.2	14.8	16.3
	東海	590	28.6	14.2	14.1	23.4	19.7
	近畿	812	30.5	12.9	14.9	21.4	20.2
	中国	281	27.0	9.3	21.4	21.4	21.0
	四国	142	28.2	9.9	13.4	23.9	24.6
	九州	548	34.1	13.1	14.8	20.6	17.3
配偶者の有無	いる	2525	40.1	13.6	17.6	18.7	10.1
	いない	2475	23.0	9.7	13.5	23.4	30.4
同居している子どもの有無	いる	1420	37.3	13.9	16.9	19.9	12.0
	いない	3580	29.4	10.8	15.0	21.5	23.3
同居している子どもの年代	未就学児	228	42.5	14.5	14.5	11.8	16.7
	小学生	259	40.5	14.3	16.6	12.0	16.6
	中学生	119	41.2	15.1	19.3	11.8	12.6
	高校生以上	814	34.2	13.4	17.3	25.9	9.2
職業	会社員・団体職員	1848	35.5	12.7	15.7	17.8	18.2
	会社役員・団体役員	71	46.5	9.9	14.1	14.1	15.5
	自営業	183	34.4	9.8	16.9	24.0	14.8
	自由業・士業	113	31.0	10.6	13.3	25.7	19.5
	パート・アルバイト	747	28.5	12.0	14.9	22.1	22.5
	専業主婦・主夫	732	33.5	12.8	16.7	23.8	13.3
	学生・生徒	274	31.0	15.0	15.0	9.1	29.9
	家事手伝い・引退・無職	824	24.0	7.9	15.5	29.5	23.1
	その他	208	26.0	10.6	13.5	15.4	34.6

		n	この1年程度の間に訪れた	2～4年前に訪れたことがある	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	国内の温泉地には全く訪れたことがない
全体		5000	31.6	11.7	15.5	21.0	20.1
名湯だと思う温泉地	草津	721	42.2	12.9	22.3	17.8	4.9
	別府	470	39.4	16.2	21.9	17.9	4.7
	有馬	383	36.0	15.9	23.0	21.1	3.9
	下呂	236	34.3	20.8	17.4	21.6	5.9
	箱根	235	39.1	16.6	22.6	15.3	6.4
	道後	184	41.3	12.5	20.7	20.1	5.4
	由布院・湯布院	181	34.8	13.3	20.4	28.2	3.3
	登別	180	41.7	13.3	22.8	19.4	2.8
	熱海	128	46.1	8.6	20.3	21.1	3.9
	伊香保	113	41.6	11.5	25.7	17.7	3.5
行ってみたい温泉地	草津	480	42.7	19.0	21.9	12.3	4.2
	別府	348	47.7	15.5	24.4	9.8	2.6
	有馬	207	43.5	15.5	22.2	16.9	1.9
	由布院・湯布院	194	47.9	18.0	17.0	16.0	1.0
	箱根	189	42.3	16.9	21.7	15.9	3.2
	道後	177	48.0	14.7	24.9	10.2	2.3
	下呂	172	44.2	16.3	20.9	15.7	2.9
	登別	136	50.0	19.9	21.3	8.1	0.7
	黒川	96	53.1	13.5	18.8	13.5	1.0
	城崎	95	45.3	23.2	16.8	11.6	3.2

図表 2-2-27. 過去１年以内の温泉地への訪問回数

		n	１回	２回	３回	４回	５回	６回	７回	８回	９回	１０回	１１回以上
全 体		1582	42.9	26.4	13.0	4.4	4.7	2.5	0.6	0.9	0.1	3.0	1.5
性別	男性	827	42.7	26.7	12.9	5.0	5.1	1.8	0.5	0.5	0.2	3.3	1.3
	女性	755	43.0	26.0	13.1	3.7	4.4	3.3	0.8	1.3	0.0	2.6	1.7
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	73	46.6	20.5	11.0	6.8	4.1	2.7	0.0	1.4	1.4	4.1	1.4
	20歳～29歳	164	45.1	25.6	11.0	6.7	6.7	1.8	0.6	0.0	0.0	1.8	0.6
	30歳～39歳	220	46.4	24.5	12.7	5.0	3.2	1.4	0.5	1.4	0.5	3.6	0.9
	40歳～49歳	271	45.0	23.6	17.7	2.2	3.7	2.6	1.1	0.7	0.0	3.0	0.4
	50歳～59歳	230	46.1	19.1	13.5	4.3	5.2	3.9	1.3	1.7	0.0	2.6	2.2
	60歳～69歳	304	37.5	32.6	10.9	5.3	5.9	2.6	0.0	0.3	0.0	2.6	2.3
	70歳以上	320	39.4	30.9	12.5	3.1	4.4	2.5	0.6	0.9	0.0	3.4	2.2
居住地	北海道	86	43.0	25.6	11.6	0.0	8.1	0.0	0.0	1.2	0.0	9.3	1.2
	東北	99	31.3	24.2	17.2	3.0	9.1	4.0	2.0	2.0	0.0	6.1	1.0
	南関東	504	42.1	29.0	11.3	4.6	6.2	3.2	0.4	0.4	0.2	1.8	1.0
	北関東・甲信	106	44.3	27.4	12.3	6.6	0.9	2.8	0.9	0.0	0.0	2.8	1.9
	北陸	67	35.8	19.4	23.9	4.5	4.5	0.0	0.0	1.5	0.0	4.5	6.0
	東海	169	49.1	24.3	14.2	2.4	2.4	1.8	0.6	1.2	0.0	3.6	0.6
	近畿	248	46.0	27.8	11.3	6.0	2.8	1.2	0.8	1.6	0.4	1.6	0.4
	中国	76	43.4	26.3	17.1	5.3	2.6	2.6	0.0	1.3	0.0	0.0	1.3
	四国	40	42.5	27.5	10.0	2.5	7.5	2.5	2.5	2.5	0.0	0.0	2.5
	九州	187	42.8	22.5	12.8	4.8	4.3	4.3	0.5	0.0	0.0	4.3	3.7
配偶者の有無	いる	1013	42.1	27.2	13.0	3.9	5.3	2.5	0.6	0.9	0.0	3.2	1.3
	いない	569	44.3	24.8	13.0	5.1	3.7	2.6	0.7	0.9	0.4	2.6	1.9
同居している子どもの有無	いる	529	42.7	27.0	12.9	4.0	5.7	2.8	0.6	0.9	0.0	2.5	0.9
	いない	1053	42.9	26.0	13.1	4.6	4.3	2.4	0.7	0.9	0.2	3.2	1.8
同居している子どもの年代	未就学児	97	44.3	22.7	15.5	4.1	5.2	3.1	2.1	0.0	0.0	2.1	1.0
	小学生	105	44.8	22.9	15.2	4.8	4.8	1.9	0.0	1.0	0.0	4.8	0.0
	中学生	49	53.1	26.5	10.2	6.1	4.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	高校生以上	278	39.6	30.2	11.5	3.2	6.5	3.6	0.4	1.4	0.0	2.2	1.4
職業	会社員・団体職員	656	42.5	24.8	15.2	4.7	4.1	2.4	0.8	0.9	0.2	3.2	1.1
	会社役員・団体役員	33	27.3	39.4	12.1	9.1	3.0	6.1	0.0	0.0	0.0	3.0	0.0
	自営業	63	41.3	30.2	15.9	1.6	3.2	3.2	0.0	1.6	0.0	0.0	3.2
	自由業・士業	35	45.7	14.3	14.3	5.7	11.4	5.7	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	パート・アルバイト	213	47.4	26.3	9.9	5.2	6.1	0.9	0.0	0.9	0.0	1.9	1.4
	専業主婦・主夫	245	40.4	26.1	12.7	4.5	4.5	4.5	1.6	0.8	0.0	3.3	1.6
	学生・生徒	85	47.1	27.1	8.2	4.7	4.7	1.2	0.0	1.2	1.2	3.5	1.2
	家事手伝い・引退・無職	198	43.4	28.8	9.6	2.5	5.1	2.0	0.0	1.0	0.0	4.0	3.5
	その他	54	40.7	31.5	16.7	1.9	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	3.7	0.0

		n	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回	11回以上
全体		1582	42.9	26.4	13.0	4.4	4.7	2.5	0.6	0.9	0.1	3.0	1.5
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	42.5	18.8	16.3	7.5	6.3	3.8	1.3	3.8	0.0	0.0	0.0
	箱根	69	49.3	24.6	8.7	4.3	4.3	4.3	0.0	0.0	0.0	4.3	0.0
	有馬	60	41.7	31.7	13.3	5.0	1.7	0.0	1.7	3.3	1.7	0.0	0.0
	別府	55	40.0	34.5	12.7	5.5	5.5	1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	下呂	47	53.2	21.3	14.9	6.4	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1	0.0
	熱海	46	41.3	34.8	10.9	4.3	4.3	2.2	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0
	道後	37	48.6	21.6	10.8	0.0	8.1	2.7	2.7	2.7	0.0	2.7	0.0
	伊香保	37	48.6	21.6	21.6	0.0	2.7	2.7	0.0	0.0	0.0	2.7	0.0
	鬼怒川	29	55.2	24.1	10.3	3.4	0.0	0.0	0.0	3.4	0.0	3.4	0.0
	由布院・湯布院	27	44.4	22.2	25.9	0.0	0.0	7.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	0.0	31.7	31.7	19.5	2.4	7.3	0.0	0.0	0.0	4.9	2.4
	草津	38	0.0	31.6	23.7	13.2	5.3	5.3	0.0	5.3	0.0	13.2	2.6
	熱海	30	0.0	30.0	13.3	13.3	16.7	20.0	0.0	3.3	0.0	3.3	0.0
	有馬	30	0.0	33.3	30.0	3.3	13.3	10.0	3.3	0.0	0.0	3.3	3.3
	伊香保	27	0.0	25.9	29.6	22.2	3.7	11.1	3.7	0.0	0.0	3.7	0.0
	別府	25	0.0	24.0	24.0	20.0	4.0	8.0	4.0	0.0	0.0	8.0	8.0
	下呂	21	0.0	33.3	14.3	4.8	19.0	14.3	0.0	4.8	0.0	4.8	4.8
	道後	20	0.0	35.0	20.0	20.0	10.0	5.0	5.0	0.0	0.0	0.0	5.0
	南紀白浜	16	0.0	25.0	37.5	18.8	12.5	6.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	鬼怒川	17	0.0	29.4	17.6	29.4	23.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	304	45.7	23.4	13.8	4.3	5.9	2.3	0.0	1.0	0.0	2.3	1.3
	別府	185	50.8	25.9	8.6	3.2	4.9	2.2	0.5	0.0	0.0	1.6	2.2
	有馬	138	50.7	20.3	10.1	5.8	5.1	1.4	0.7	1.4	0.7	2.9	0.7
	下呂	81	50.6	24.7	11.1	2.5	4.9	2.5	0.0	1.2	0.0	1.2	1.2
	箱根	92	53.3	16.3	9.8	6.5	4.3	4.3	0.0	0.0	0.0	4.3	1.1
	道後	76	52.6	22.4	9.2	1.3	7.9	2.6	1.3	1.3	1.3	0.0	0.0
	由布院・湯布院	63	36.5	28.6	15.9	1.6	6.3	6.3	0.0	1.6	0.0	3.2	0.0
	登別	75	38.7	28.0	9.3	6.7	6.7	1.3	1.3	0.0	0.0	6.7	1.3
	熱海	59	44.1	22.0	13.6	6.8	5.1	5.1	0.0	1.7	0.0	1.7	0.0
	伊香保	47	42.6	25.5	12.8	4.3	8.5	2.1	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3
行ってみたい温泉地	草津	205	46.3	25.4	14.6	2.4	3.4	2.4	0.0	0.5	0.0	3.4	1.5
	別府	166	45.2	22.3	12.7	3.6	7.8	1.2	1.2	0.6	0.6	2.4	2.4
	有馬	90	48.9	27.8	10.0	3.3	5.6	1.1	1.1	1.1	0.0	1.1	0.0
	由布院・湯布院	93	43.0	31.2	11.8	1.1	5.4	1.1	3.2	2.2	0.0	1.1	0.0
	箱根	80	40.0	30.0	7.5	6.3	6.3	1.3	0.0	0.0	0.0	5.0	3.8
	道後	85	52.9	23.5	9.4	2.4	4.7	1.2	1.2	1.2	1.2	2.4	0.0
	下呂	76	39.5	30.3	13.2	3.9	3.9	3.9	0.0	0.0	0.0	1.3	3.9
	登別	68	35.3	23.5	19.1	4.4	5.9	1.5	1.5	1.5	0.0	5.9	1.5
	黒川	51	47.1	21.6	13.7	5.9	3.9	3.9	0.0	0.0	0.0	0.0	3.9
	城崎	43	55.8	27.9	9.3	0.0	2.3	2.3	0.0	2.3	0.0	0.0	0.0

図表 2-2-28.過去１年間で一番最近訪問した温泉地（上位 10 カ所）／母数は自由記述回答者

		n	草津	箱根	有馬	別府	下呂	熱海	道後	伊香保	鬼怒川	由布院・湯布院
全体		487	16.4	14.2	12.3	11.3	9.7	9.4	7.6	7.6	6.0	5.5
性別	男性	252	19.4	12.3	9.5	11.1	9.1	9.5	8.3	9.5	7.5	3.6
	女性	235	13.2	16.2	15.3	11.5	10.2	9.4	6.8	5.5	4.3	7.7
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	24	16.7	20.8	20.8	4.2	8.3	4.2	8.3	4.2	12.5	0.0
	20歳～29歳	67	25.4	11.9	16.4	7.5	6.0	7.5	3.0	7.5	9.0	6.0
	30歳～39歳	84	13.1	14.3	8.3	11.9	15.5	10.7	6.0	4.8	7.1	8.3
	40歳～49歳	82	13.4	14.6	11.0	9.8	7.3	12.2	9.8	11.0	7.3	3.7
	50歳～59歳	64	14.1	14.1	9.4	9.4	10.9	9.4	10.9	12.5	1.6	7.8
	60歳～69歳	84	14.3	14.3	14.3	17.9	7.1	9.5	8.3	4.8	4.8	4.8
	70歳以上	82	19.5	13.4	12.2	12.2	11.0	8.5	7.3	7.3	3.7	4.9
居住地	北海道	2	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	東北	9	44.4	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1
	南関東	200	23.5	28.5	2.5	2.5	5.0	15.5	3.0	9.0	9.5	1.0
	北関東・甲信	39	43.6	5.1	5.1	2.6	5.1	2.6	2.6	23.1	10.3	0.0
	北陸	10	0.0	0.0	10.0	0.0	10.0	10.0	0.0	50.0	20.0	0.0
	東海	63	6.3	12.7	9.5	6.3	46.0	12.7	1.6	1.6	3.2	0.0
	近畿	70	4.3	1.4	57.1	10.0	7.1	2.9	10.0	2.9	1.4	2.9
	中国	19	15.8	0.0	15.8	36.8	0.0	0.0	26.3	0.0	0.0	5.3
	四国	18	11.1	0.0	16.7	0.0	0.0	0.0	72.2	0.0	0.0	0.0
	九州	57	0.0	0.0	0.0	54.4	0.0	1.8	5.3	1.8	0.0	36.8
配偶者の有無	いる	298	15.8	13.1	12.1	13.8	10.7	8.7	7.7	7.4	5.7	5.0
	いない	189	17.5	15.9	12.7	7.4	7.9	10.6	7.4	7.9	6.3	6.3
同居している子どもの有無	いる	155	14.8	15.5	10.3	12.3	11.6	9.7	7.7	7.1	7.1	3.9
	いない	332	17.2	13.6	13.3	10.8	8.7	9.3	7.5	7.8	5.4	6.3
同居している子どもの年代	未就学児	28	14.3	7.1	10.7	14.3	7.1	25.0	0.0	7.1	10.7	3.6
	小学生	34	8.8	17.6	14.7	11.8	11.8	2.9	5.9	8.8	8.8	8.8
	中学生	19	21.1	21.1	10.5	10.5	15.8	0.0	10.5	10.5	0.0	0.0
	高校生以上	74	16.2	16.2	8.1	12.2	12.2	9.5	10.8	5.4	6.8	2.7
職業	会社員・団体職員	218	12.8	14.2	11.9	9.2	10.6	11.5	6.9	8.7	7.8	6.4
	会社役員・団体役員	13	23.1	30.8	7.7	23.1	0.0	7.7	0.0	7.7	0.0	0.0
	自営業	20	25.0	5.0	10.0	5.0	15.0	10.0	0.0	5.0	20.0	5.0
	自由業・士業	10	20.0	20.0	0.0	10.0	10.0	10.0	20.0	0.0	0.0	10.0
	パート・アルバイト	66	13.6	19.7	15.2	15.2	6.1	9.1	6.1	6.1	4.5	4.5
	専業主婦・主夫	70	12.9	15.7	15.7	12.9	14.3	5.7	8.6	5.7	1.4	7.1
	学生・生徒	27	18.5	11.1	22.2	7.4	7.4	7.4	7.4	3.7	14.8	0.0
	家事手伝い・引退・無職	48	27.1	6.3	6.3	16.7	8.3	10.4	8.3	12.5	0.0	4.2
	その他	15	40.0	6.7	6.7	6.7	0.0	0.0	26.7	6.7	0.0	6.7

		n	草津	箱根	有馬	別府	下呂	熱海	道後	伊香保	鬼怒川	由布院・湯布院
全体		487	16.4	14.2	12.3	11.3	9.7	9.4	7.6	7.6	6.0	5.5
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	23	17.4	8.7	8.7	8.7	8.7	26.1	4.3	8.7	4.3	4.3
	草津	19	0.0	15.8	21.1	10.5	21.1	5.3	0.0	5.3	15.8	5.3
	熱海	13	30.8	46.2	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	0.0	7.7	0.0
	有馬	13	23.1	7.7	7.7	23.1	7.7	0.0	7.7	0.0	0.0	23.1
	伊香保	12	58.3	41.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	別府	9	0.0	11.1	22.2	11.1	11.1	22.2	11.1	0.0	0.0	11.1
	下呂	10	0.0	10.0	40.0	10.0	20.0	0.0	0.0	0.0	20.0	0.0
	道後	10	20.0	10.0	10.0	30.0	10.0	20.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	南紀白浜	7	0.0	0.0	71.4	14.3	14.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	鬼怒川	7	28.6	0.0	0.0	0.0	14.3	14.3	0.0	42.9	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	138	28.3	10.9	8.0	8.0	8.7	10.9	4.3	12.3	8.0	0.7
	別府	73	12.3	5.5	12.3	31.5	6.8	8.2	4.1	0.0	4.1	15.1
	有馬	50	6.0	2.0	50.0	4.0	12.0	2.0	16.0	2.0	6.0	0.0
	下呂	30	10.0	10.0	13.3	10.0	46.7	3.3	0.0	3.3	3.3	0.0
	箱根	46	10.9	45.7	6.5	8.7	4.3	13.0	4.3	4.3	2.2	0.0
	道後	30	10.0	6.7	26.7	10.0	6.7	0.0	33.3	0.0	6.7	0.0
	由布院・湯布院	30	6.7	16.7	10.0	30.0	6.7	0.0	0.0	3.3	3.3	23.3
	登別	15	6.7	20.0	6.7	13.3	13.3	13.3	20.0	0.0	0.0	6.7
	熱海	30	0.0	23.3	10.0	3.3	3.3	36.7	3.3	6.7	13.3	0.0
	伊香保	26	34.6	7.7	0.0	3.8	0.0	15.4	3.8	26.9	7.7	0.0
行ってみたい温泉地	草津	80	28.8	8.8	12.5	12.5	10.0	7.5	1.3	10.0	7.5	1.3
	別府	57	17.5	8.8	15.8	24.6	7.0	5.3	3.5	1.8	8.8	7.0
	有馬	36	5.6	2.8	44.4	2.8	16.7	5.6	2.8	5.6	13.9	0.0
	由布院・湯布院	34	5.9	11.8	17.6	11.8	8.8	5.9	0.0	8.8	5.9	23.5
	箱根	36	11.1	30.6	11.1	8.3	2.8	22.2	2.8	2.8	5.6	2.8
	道後	31	6.5	12.9	29.0	9.7	6.5	6.5	19.4	3.2	3.2	3.2
	下呂	25	8.0	4.0	12.0	4.0	44.0	4.0	0.0	8.0	8.0	8.0
	登別	18	5.6	22.2	11.1	5.6	5.6	11.1	22.2	0.0	5.6	11.1
	黒川	14	0.0	21.4	0.0	42.9	7.1	7.1	0.0	0.0	0.0	21.4
	城崎	19	5.3	10.5	42.1	10.5	0.0	5.3	5.3	0.0	10.5	10.5

図表 2-2-29. 同行者

		n	自分ひとり	夫婦・カップルのみで	家族・親戚・友人	団体旅行	その他
全 体		1582	12.2	34.3	51.2	2.0	0.3
性別	男性	827	18.0	34.5	45.1	2.1	0.4
	女性	755	5.8	34.2	57.9	1.9	0.3
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	73	15.1	5.5	76.7	2.7	0.0
	20歳～29歳	164	20.7	31.1	46.3	1.8	0.0
	30歳～39歳	220	15.0	26.4	56.8	0.0	1.8
	40歳～49歳	271	12.5	28.0	58.7	0.7	0.0
	50歳～59歳	230	13.9	31.3	53.0	1.7	0.0
	60歳～69歳	304	10.5	47.0	40.1	2.0	0.3
	70歳以上	320	5.3	43.4	46.9	4.4	0.0
居住地	北海道	86	16.3	32.6	51.2	0.0	0.0
	東北	99	14.1	38.4	46.5	0.0	1.0
	南関東	504	14.3	33.7	50.2	1.4	0.4
	北関東・甲信	106	9.4	36.8	52.8	0.9	0.0
	北陸	67	7.5	32.8	52.2	6.0	1.5
	東海	169	5.9	36.1	56.8	1.2	0.0
	近畿	248	11.3	33.9	50.8	3.6	0.4
	中国	76	13.2	25.0	56.6	5.3	0.0
	四国	40	17.5	37.5	42.5	2.5	0.0
	九州	187	12.3	35.8	50.3	1.6	0.0
配偶者の有無	いる	1013	5.3	44.6	48.0	2.0	0.1
	いない	569	24.4	16.0	56.9	1.9	0.7
同居している子どもの有無	いる	529	6.6	23.1	68.6	1.5	0.2
	いない	1053	15.0	40.0	42.5	2.2	0.4
同居している子どもの年代	未就学児	97	9.3	14.4	75.3	0.0	1.0
	小学生	105	6.7	16.2	76.2	1.0	0.0
	中学生	49	8.2	8.2	81.6	2.0	0.0
	高校生以上	278	5.4	31.3	61.2	2.2	0.0
職業	会社員・団体職員	656	16.9	30.2	50.6	1.8	0.5
	会社役員・団体役員	33	18.2	45.5	30.3	6.1	0.0
	自営業	63	15.9	23.8	54.0	6.3	0.0
	自由業・士業	35	11.4	34.3	51.4	2.9	0.0
	パート・アルバイト	213	9.9	37.6	51.2	0.9	0.5
	専業主婦・主夫	245	2.4	42.9	52.2	2.0	0.4
	学生・生徒	85	10.6	5.9	80.0	3.5	0.0
	家事手伝い・引退・無職	198	8.6	43.9	46.5	1.0	0.0
	その他	54	16.7	48.1	35.2	0.0	0.0

		n	自分ひとり	夫婦・カップルのみで	家族・親戚・友人	団体旅行	その他
全体		1582	12.2	34.3	51.2	2.0	0.3
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	10.0	46.3	42.5	1.3	0.0
	箱根	69	14.5	37.7	47.8	0.0	0.0
	有馬	60	15.0	35.0	48.3	1.7	0.0
	別府	55	10.9	36.4	49.1	3.6	0.0
	下呂	47	6.4	34.0	59.6	0.0	0.0
	熱海	46	15.2	34.8	45.7	4.3	0.0
	道後	37	24.3	35.1	35.1	5.4	0.0
	伊香保	37	5.4	29.7	62.2	2.7	0.0
	鬼怒川	29	13.8	34.5	51.7	0.0	0.0
	由布院・湯布院	27	0.0	18.5	81.5	0.0	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	14.6	48.8	36.6	0.0	0.0
	草津	38	10.5	42.1	44.7	2.6	0.0
	熱海	30	16.7	46.7	33.3	3.3	0.0
	有馬	30	6.7	33.3	56.7	3.3	0.0
	伊香保	27	11.1	55.6	33.3	0.0	0.0
	別府	25	16.0	40.0	40.0	4.0	0.0
	下呂	21	19.0	42.9	38.1	0.0	0.0
	道後	20	30.0	35.0	35.0	0.0	0.0
	南紀白浜	16	31.3	37.5	31.3	0.0	0.0
	鬼怒川	17	17.6	41.2	41.2	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	304	8.2	35.2	54.9	1.3	0.3
	別府	185	10.3	35.1	50.8	3.8	0.0
	有馬	138	13.8	32.6	51.4	2.2	0.0
	下呂	81	7.4	30.9	61.7	0.0	0.0
	箱根	92	8.7	50.0	38.0	3.3	0.0
	道後	76	18.4	34.2	46.1	1.3	0.0
	由布院・湯布院	63	9.5	30.2	58.7	1.6	0.0
	登別	75	9.3	40.0	49.3	1.3	0.0
	熱海	59	13.6	40.7	45.8	0.0	0.0
	伊香保	47	6.4	38.3	55.3	0.0	0.0
行ってみたい温泉地	草津	205	9.3	36.1	53.7	1.0	0.0
	別府	166	12.7	35.5	48.8	3.0	0.0
	有馬	90	17.8	26.7	52.2	2.2	1.1
	由布院・湯布院	93	11.8	26.9	60.2	0.0	1.1
	箱根	80	18.8	36.3	42.5	2.5	0.0
	道後	85	15.3	36.5	47.1	1.2	0.0
	下呂	76	5.3	34.2	57.9	2.6	0.0
	登別	68	7.4	41.2	50.0	1.5	0.0
	黒川	51	5.9	31.4	56.9	3.9	2.0
	城崎	43	4.7	37.2	55.8	2.3	0.0

図表 2-2-30.宿泊日数

		n	日帰り	一泊二日	二泊三日	三泊四日	四泊五日	五泊六日	一週間以上
全体		1582	21.7	57.2	15.5	3.8	0.7	0.3	0.8
性別	男性	827	24.2	55.9	15.6	2.8	0.8	0.1	0.6
	女性	755	19.1	58.7	15.5	4.9	0.5	0.4	0.9
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	73	42.5	39.7	13.7	1.4	1.4	0.0	1.4
	20歳～29歳	164	27.4	51.8	17.1	2.4	0.0	0.0	1.2
	30歳～39歳	220	18.6	59.5	15.0	5.0	0.5	0.5	0.9
	40歳～49歳	271	22.5	60.9	12.2	2.2	0.4	0.4	1.5
	50歳～59歳	230	24.8	57.0	13.9	3.5	0.0	0.0	0.9
	60歳～69歳	304	18.1	60.2	15.8	3.3	2.3	0.3	0.0
	70歳以上	320	16.9	56.6	19.4	6.3	0.3	0.3	0.3
居住地	北海道	86	38.4	47.7	10.5	1.2	0.0	0.0	2.3
	東北	99	31.3	53.5	11.1	0.0	2.0	1.0	1.0
	南関東	504	15.7	59.5	17.5	5.6	0.6	0.4	0.8
	北関東・甲信	106	29.2	54.7	12.3	3.8	0.0	0.0	0.0
	北陸	67	11.9	70.1	14.9	0.0	3.0	0.0	0.0
	東海	169	16.6	65.1	14.8	3.0	0.0	0.0	0.6
	近畿	248	16.1	58.1	17.3	6.5	0.4	0.4	1.2
	中国	76	30.3	46.1	17.1	2.6	3.9	0.0	0.0
	四国	40	32.5	47.5	15.0	5.0	0.0	0.0	0.0
	九州	187	31.0	52.4	15.0	1.1	0.0	0.0	0.5
配偶者の有無	いる	1013	18.5	61.1	14.9	4.0	0.5	0.2	0.8
	いない	569	27.6	50.3	16.7	3.3	1.1	0.4	0.7
同居している子どもの有無	いる	529	19.8	59.5	14.6	4.2	0.8	0.2	0.9
	いない	1053	22.7	56.0	16.0	3.6	0.7	0.3	0.7
同居している子どもの年代	未就学児	97	21.6	60.8	11.3	3.1	0.0	0.0	3.1
	小学生	105	18.1	60.0	17.1	4.8	0.0	0.0	0.0
	中学生	49	18.4	63.3	14.3	4.1	0.0	0.0	0.0
	高校生以上	278	20.1	58.3	14.7	4.3	1.4	0.4	0.7
職業	会社員・団体職員	656	21.2	59.6	14.9	2.7	0.5	0.3	0.8
	会社役員・団体役員	33	18.2	54.5	27.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	自営業	63	14.3	54.0	23.8	4.8	3.2	0.0	0.0
	自由業・士業	35	17.1	40.0	22.9	17.1	0.0	0.0	2.9
	パート・アルバイト	213	25.4	55.9	15.0	2.8	0.9	0.0	0.0
	専業主婦・主夫	245	15.5	63.3	13.1	5.7	0.8	0.8	0.8
	学生・生徒	85	41.2	41.2	15.3	0.0	1.2	0.0	1.2
	家事手伝い・引退・無職	198	23.7	54.0	15.2	6.1	0.5	0.0	0.5
	その他	54	18.5	59.3	16.7	1.9	0.0	0.0	3.7

		n	日帰り	一泊二日	二泊三日	三泊四日	四泊五日	五泊六日	一週間以上
全体		1582	21.7	57.2	15.5	3.8	0.7	0.3	0.8
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	18.8	50.0	23.8	5.0	1.3	1.3	0.0
	箱根	69	23.2	60.9	14.5	1.4	0.0	0.0	0.0
	有馬	60	26.7	55.0	15.0	1.7	0.0	0.0	1.7
	別府	55	12.7	54.5	25.5	1.8	3.6	1.8	0.0
	下呂	47	8.5	72.3	19.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	熱海	46	6.5	73.9	17.4	2.2	0.0	0.0	0.0
	道後	37	24.3	51.4	24.3	0.0	0.0	0.0	0.0
	伊香保	37	16.2	75.7	8.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	鬼怒川	29	10.3	82.8	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0
	由布院・湯布院	27	22.2	55.6	22.2	0.0	0.0	0.0	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	14.6	43.9	31.7	7.3	0.0	0.0	2.4
	草津	38	5.3	63.2	18.4	10.5	0.0	0.0	2.6
	熱海	30	13.3	50.0	33.3	3.3	0.0	0.0	0.0
	有馬	30	6.7	46.7	33.3	10.0	0.0	0.0	3.3
	伊香保	27	7.4	74.1	14.8	3.7	0.0	0.0	0.0
	別府	25	24.0	36.0	40.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	下呂	21	9.5	47.6	33.3	9.5	0.0	0.0	0.0
	道後	20	15.0	60.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	南紀白浜	16	12.5	50.0	37.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	鬼怒川	17	17.6	58.8	23.5	0.0	0.0	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	304	18.4	59.9	16.1	3.9	1.0	0.0	0.7
	別府	185	21.6	55.7	20.0	1.6	1.1	0.0	0.0
	有馬	138	18.1	58.0	15.9	5.1	0.7	0.0	2.2
	下呂	81	22.2	56.8	14.8	3.7	1.2	0.0	1.2
	箱根	92	18.5	59.8	17.4	3.3	0.0	0.0	1.1
	道後	76	25.0	47.4	22.4	5.3	0.0	0.0	0.0
	由布院・湯布院	63	19.0	55.6	23.8	0.0	0.0	0.0	1.6
	登別	75	18.7	56.0	16.0	8.0	0.0	0.0	1.3
	熱海	59	11.9	62.7	22.0	3.4	0.0	0.0	0.0
	伊香保	47	21.3	59.6	14.9	4.3	0.0	0.0	0.0
行ってみたい温泉地	草津	205	22.4	64.9	10.2	2.0	0.0	0.0	0.5
	別府	166	30.7	50.6	16.9	1.2	0.6	0.0	0.0
	有馬	90	13.3	61.1	16.7	6.7	1.1	0.0	1.1
	由布院・湯布院	93	18.3	61.3	18.3	2.2	0.0	0.0	0.0
	箱根	80	17.5	50.0	22.5	7.5	0.0	0.0	2.5
	道後	85	22.4	57.6	17.6	1.2	0.0	0.0	1.2
	下呂	76	19.7	64.5	15.8	0.0	0.0	0.0	0.0
	登別	68	14.7	54.4	17.6	8.8	1.5	0.0	2.9
	黒川	51	13.7	68.6	17.6	0.0	0.0	0.0	0.0
	城崎	43	11.6	69.8	18.6	0.0	0.0	0.0	0.0

図表 2-2-31. 訪問理由

		n	温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などに期待したから	特有の成分や入浴法など、その温泉ならではの効用・効能に期待したから	大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設があったから	源泉かけながしのお湯が楽しめるから	湯治をしたかったから	美しい自然に囲まれた環境を楽しみたかったから	古い町並みや建物、神社仏閣など歴史的な情緒を楽しみたかったから	旅館・ホテルの料理やおもてなしが魅力的だったから	その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的だったから	その地域で手に入る工芸品や特産品が魅力的だったから	付近の名所・旧跡、自然の景勝などが魅力的だったから	その地域ならではの伝統芸能やお祭りなどが魅力的だったから	その他
全体		1582	65.7	16.0	30.3	20.4	6.9	28.4	13.6	28.2	14.4	5.4	16.8	3.9	3.7
性別	男性	827	65.4	16.7	31.0	21.6	8.6	26.1	12.8	25.4	13.4	5.2	16.8	3.4	3.7
	女性	755	66.0	15.2	29.5	19.1	5.0	31.0	14.4	31.3	15.5	5.7	16.7	4.4	3.7
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	73	65.8	16.4	28.8	17.8	11.0	30.1	17.8	23.3	20.5	5.5	15.1	5.5	4.1
	20歳～29歳	164	60.4	18.3	34.1	18.3	17.1	27.4	22.0	28.0	17.1	12.2	14.0	10.4	3.7
	30歳～39歳	220	65.5	20.5	30.5	17.3	7.7	27.7	16.4	28.2	15.9	5.5	10.0	5.0	3.6
	40歳～49歳	271	69.7	16.2	26.6	17.7	5.5	24.4	14.4	27.3	15.5	6.6	14.8	4.1	1.1
	50歳～59歳	230	65.7	16.1	28.7	20.4	7.0	25.7	14.8	25.7	12.6	4.8	11.7	4.3	5.7
	60歳～69歳	304	66.1	12.2	30.3	23.4	3.9	28.6	9.9	29.6	13.8	3.0	20.7	0.7	3.9
	70歳以上	320	64.7	15.0	32.8	23.8	4.1	34.4	8.4	30.6	11.6	3.8	24.7	1.9	4.4
居住地	北海道	86	62.8	20.9	45.3	23.3	8.1	27.9	5.8	24.4	11.6	5.8	14.0	7.0	3.5
	東北	99	60.6	14.1	25.3	20.2	7.1	17.2	10.1	32.3	14.1	5.1	13.1	6.1	5.1
	南関東	504	63.1	15.1	28.4	19.2	8.7	31.7	13.1	26.4	16.3	4.6	17.5	2.6	4.2
	北関東・甲信	106	68.9	15.1	27.4	24.5	3.8	34.0	14.2	25.5	16.0	5.7	26.4	2.8	2.8
	北陸	67	65.7	19.4	35.8	16.4	4.5	23.9	7.5	32.8	14.9	4.5	11.9	6.0	6.0
	東海	169	67.5	16.0	33.1	17.2	5.9	27.8	20.1	29.0	9.5	6.5	18.3	3.0	3.0
	近畿	248	67.3	18.5	31.0	21.4	7.3	24.6	16.5	32.3	13.7	5.6	13.7	4.4	2.8
	中国	76	71.1	11.8	30.3	21.1	1.3	28.9	17.1	30.3	11.8	5.3	19.7	1.3	6.6
	四国	40	52.5	25.0	20.0	12.5	10.0	25.0	20.0	17.5	32.5	12.5	25.0	5.0	0.0
	九州	187	71.7	12.8	29.4	24.6	5.9	30.5	9.6	27.8	12.3	5.3	13.9	5.3	3.2
配偶者の有無	いる	1013	65.4	15.1	29.5	21.4	5.6	27.2	12.8	30.3	14.1	5.1	17.7	2.9	3.3
	いない	569	66.3	17.6	31.6	18.6	9.1	30.6	14.9	24.4	14.9	6.0	15.1	5.6	4.6
同居している子どもの有無	いる	529	64.1	14.7	27.8	19.1	6.8	25.5	15.3	28.5	14.9	6.6	14.0	4.2	3.6
	いない	1053	66.5	16.6	31.5	21.1	6.9	29.9	12.7	28.0	14.2	4.8	18.1	3.7	3.8
同居している子どもの年代	未就学児	97	59.8	16.5	34.0	23.7	9.3	27.8	16.5	34.0	13.4	10.3	10.3	7.2	2.1
	小学生	105	56.2	13.3	27.6	14.3	8.6	18.1	16.2	25.7	15.2	4.8	14.3	1.9	1.9
	中学生	49	71.4	22.4	16.3	20.4	2.0	28.6	18.4	28.6	22.4	6.1	16.3	2.0	6.1
	高校生以上	278	67.3	13.3	27.7	19.1	6.1	27.0	14.0	27.7	14.0	6.1	14.7	4.3	4.3
職業	会社員・団体職員	656	67.8	17.7	29.6	19.4	8.2	27.0	14.5	27.7	13.1	6.1	12.7	5.2	2.9
	会社役員・団体役員	33	63.6	9.1	18.2	24.2	9.1	27.3	12.1	33.3	12.1	6.1	21.2	3.0	3.0
	自営業	63	58.7	19.0	33.3	22.2	15.9	27.0	19.0	28.6	12.7	6.3	19.0	4.8	6.3
	自由業・士業	35	62.9	22.9	25.7	31.4	11.4	25.7	5.7	31.4	11.4	2.9	14.3	8.6	5.7
	パート・アルバイト	213	63.4	15.5	31.9	18.3	3.3	26.3	12.7	26.3	14.1	4.7	15.5	1.4	4.7
	専業主婦・主夫	245	65.3	15.1	33.1	22.9	4.1	36.7	13.9	34.3	18.0	5.3	19.2	2.4	3.3
	学生・生徒	85	62.4	10.6	27.1	12.9	7.1	25.9	14.1	23.5	17.6	4.7	12.9	3.5	3.5
	家事手伝い・引退・無職	198	65.2	13.6	30.8	22.7	4.5	25.3	8.6	25.3	13.1	3.5	26.3	1.5	5.1
	その他	54	68.5	14.8	29.6	22.2	11.1	37.0	22.2	25.9	20.4	9.3	27.8	9.3	3.7

		n	温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などに期待したから	特有の成分や入浴法など、その温泉ならではの効用・効能に期待したから	大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設があったから	源泉かけながしのお湯が楽しめるから	湯治をしたかったから	美しい自然に囲まれた環境を楽しみたかったから	古い町並みや建物、神社仏閣など歴史的な情緒を楽しみたかったから	旅館・ホテルの料理やおもてなしが魅力的だったから	その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的だったから	その地域で手に入る工芸品や特産品が魅力的だったから	付近の名所・旧跡、自然の景勝などが魅力的だったから	その地域ならではの伝統芸能やお祭りなどが魅力的だったから	その他
全体		1582	65.7	16.0	30.3	20.4	6.9	28.4	13.6	28.2	14.4	5.4	16.8	3.9	3.7
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	56.3	18.8	20.0	28.8	16.3	30.0	15.0	23.8	13.8	3.8	17.5	5.0	1.3
	箱根	69	66.7	17.4	39.1	30.4	10.1	43.5	17.4	27.5	14.5	4.3	21.7	1.4	1.4
	有馬	60	61.7	30.0	20.0	20.0	11.7	26.7	23.3	31.7	13.3	6.7	8.3	6.7	3.3
	別府	55	67.3	12.7	36.4	16.4	9.1	21.8	12.7	36.4	20.0	7.3	21.8	7.3	5.5
	下呂	47	68.1	27.7	23.4	14.9	4.3	34.0	19.1	31.9	8.5	14.9	12.8	4.3	6.4
	熱海	46	71.7	15.2	28.3	15.2	8.7	28.3	17.4	37.0	23.9	4.3	13.0	2.2	0.0
	道後	37	64.9	18.9	10.8	8.1	8.1	18.9	48.6	16.2	27.0	8.1	21.6	8.1	0.0
	伊香保	37	62.2	10.8	24.3	16.2	5.4	13.5	24.3	29.7	10.8	2.7	24.3	0.0	8.1
	鬼怒川	29	79.3	24.1	34.5	24.1	6.9	44.8	27.6	37.9	27.6	10.3	24.1	13.8	0.0
	由布院・湯布院	27	77.8	25.9	37.0	33.3	11.1	40.7	18.5	51.9	22.2	11.1	14.8	7.4	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	78.0	19.5	34.1	24.4	7.3	29.3	31.7	43.9	26.8	17.1	26.8	7.3	0.0
	草津	38	63.2	28.9	44.7	34.2	18.4	47.4	28.9	44.7	34.2	10.5	34.2	18.4	2.6
	熱海	30	76.7	20.0	46.7	26.7	6.7	43.3	23.3	36.7	26.7	16.7	26.7	6.7	3.3
	有馬	30	63.3	23.3	46.7	43.3	16.7	60.0	20.0	30.0	30.0	16.7	33.3	10.0	0.0
	伊香保	27	51.9	11.1	14.8	40.7	11.1	37.0	25.9	22.2	3.7	3.7	22.2	0.0	3.7
	別府	25	60.0	24.0	32.0	40.0	16.0	40.0	12.0	28.0	20.0	4.0	24.0	16.0	0.0
	下呂	21	52.4	33.3	42.9	38.1	14.3	47.6	19.0	33.3	23.8	9.5	19.0	4.8	0.0
	道後	20	55.0	10.0	60.0	35.0	20.0	60.0	15.0	30.0	15.0	15.0	15.0	0.0	10.0
	南紀白浜	16	75.0	37.5	43.8	31.3	6.3	37.5	6.3	43.8	0.0	0.0	6.3	0.0	6.3
	鬼怒川	17	70.6	41.2	41.2	23.5	17.6	41.2	23.5	23.5	29.4	5.9	41.2	5.9	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	304	71.1	18.4	33.6	27.3	6.9	36.2	16.1	29.3	20.4	6.6	23.7	3.0	5.3
	別府	185	70.3	20.0	30.3	24.9	5.4	41.6	14.1	33.0	18.4	6.5	22.2	2.2	4.9
	有馬	138	68.1	23.2	36.2	21.7	5.8	31.2	21.0	32.6	19.6	6.5	20.3	2.9	5.8
	下呂	81	74.1	18.5	38.3	19.8	7.4	37.0	14.8	29.6	11.1	6.2	19.8	3.7	4.9
	箱根	92	72.8	12.0	31.5	16.3	5.4	31.5	19.6	35.9	16.3	7.6	19.6	4.3	2.2
	道後	76	67.1	18.4	35.5	25.0	7.9	36.8	18.4	32.9	23.7	7.9	11.8	1.3	1.3
	由布院・湯布院	63	77.8	23.8	38.1	22.2	11.1	41.3	22.2	38.1	14.3	6.3	22.2	6.3	0.0
	登別	75	68.0	16.0	41.3	21.3	4.0	30.7	10.7	29.3	10.7	8.0	21.3	0.0	1.3
	熱海	59	76.3	16.9	33.9	16.9	5.1	35.6	15.3	30.5	22.0	10.2	15.3	5.1	8.5
	伊香保	47	80.9	23.4	34.0	23.4	8.5	38.3	21.3	31.9	12.8	6.4	19.1	6.4	2.1
行ってみたい温泉地	草津	205	71.2	18.5	34.6	23.4	7.8	33.7	13.2	30.7	17.6	5.9	17.6	3.4	5.4
	別府	166	72.9	16.9	30.1	22.9	6.0	36.7	18.1	28.3	17.5	5.4	18.1	1.8	6.6
	有馬	90	67.8	23.3	43.3	24.4	6.7	40.0	20.0	36.7	12.2	7.8	15.6	4.4	5.6
	由布院・湯布院	93	69.9	18.3	30.1	25.8	8.6	38.7	16.1	36.6	15.1	9.7	18.3	2.2	2.2
	箱根	80	63.8	13.8	32.5	22.5	2.5	35.0	11.3	28.8	20.0	5.0	22.5	3.8	7.5
	道後	85	78.8	16.5	29.4	31.8	7.1	35.3	15.3	35.3	16.5	8.2	23.5	1.2	3.5
	下呂	76	76.3	13.2	35.5	15.8	3.9	30.3	15.8	44.7	14.5	3.9	19.7	5.3	1.3
	登別	68	64.7	22.1	41.2	22.1	4.4	35.3	10.3	35.3	17.6	4.4	22.1	4.4	1.5
	黒川	51	80.4	15.7	41.2	31.4	9.8	43.1	7.8	54.9	13.7	2.0	25.5	0.0	0.0
	城崎	43	72.1	14.0	25.6	23.3	4.7	34.9	14.0	39.5	16.3	7.0	16.3	4.7	2.3

図表 2-2-32.一番最近訪れた温泉地で楽しんだこと

		n	大浴場（室内）での入浴	露天風呂での入浴	部屋付きの風呂での入浴	蒸し風呂／泥風呂／砂風呂／ラドン浴など湯につかる以外での入浴	温泉地での共同浴場（外湯）の利用	街中の足湯の利用	飲泉	旅館・ホテルでの夕食・朝食・昼食	温泉地の飲食店での食事や食べ歩き	温泉地での自炊	温泉を使った調理法での食事	温泉を使った製法でのお菓子・食品の購入	湯の花や温泉水など温泉ならではの製品の購入	その温泉地ならではの工芸品・特産品などの土産物の購入	神社仏閣などへのお参り	その温泉地の名所旧跡・自然景勝などへの観光	温泉地での散策や浴衣でのそぞろ歩き	お祭りや伝統的な行事の見学	その他
全体		1582	69.5	61.3	14.9	5.9	8.0	9.7	4.4	47.9	19.0	3.2	3.3	4.9	4.7	9.5	11.9	21.0	8.7	2.3	1.6
性別	男性	827	69.8	58.4	13.8	7.3	8.9	11.0	4.8	41.6	17.0	3.6	4.0	4.7	4.4	8.5	10.3	20.3	7.9	2.3	1.2
	女性	755	69.3	64.4	16.0	4.4	6.9	8.3	3.8	54.7	21.1	2.6	2.5	5.0	5.2	10.7	13.6	21.9	9.5	2.4	2.0
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	73	65.8	53.4	15.1	11.0	16.4	12.3	9.6	32.9	26.0	9.6	8.2	8.2	11.0	11.0	11.0	19.2	6.8	6.8	0.0
	20歳～29歳	164	60.4	51.8	17.1	14.6	16.5	17.1	8.5	29.9	22.6	5.5	7.9	6.7	9.1	7.9	9.8	14.0	9.1	6.1	0.0
	30歳～39歳	220	56.8	55.5	25.5	11.4	10.9	14.5	5.5	39.5	23.2	5.5	4.1	6.4	3.6	9.1	12.3	18.2	8.2	1.8	2.7
	40歳～49歳	271	69.4	61.3	14.0	5.5	5.2	10.0	4.4	46.5	21.8	4.1	3.7	5.5	5.9	9.6	12.5	17.7	10.7	3.0	0.7
	50歳～59歳	230	73.9	62.6	13.0	3.9	7.4	8.7	3.0	50.4	20.0	2.6	2.6	4.8	4.3	8.7	14.3	21.7	8.7	2.2	0.4
	60歳～69歳	304	76.3	66.8	13.2	2.0	5.6	5.9	3.3	53.3	16.8	1.6	1.6	2.0	2.3	10.2	12.5	21.1	8.2	0.7	2.6
	70歳以上	320	74.4	65.6	10.0	1.9	4.7	6.3	2.2	60.3	11.6	0.0	0.9	4.4	3.4	10.3	10.0	29.4	7.8	0.9	2.5
居住地	北海道	86	79.1	69.8	11.6	2.3	3.5	4.7	3.5	52.3	10.5	1.2	2.3	2.3	1.2	8.1	7.0	15.1	8.1	5.8	3.5
	東北	99	69.7	51.5	10.1	6.1	11.1	8.1	5.1	39.4	14.1	2.0	4.0	4.0	5.1	9.1	7.1	14.1	8.1	3.0	1.0
	南関東	504	66.3	61.7	16.5	5.8	8.7	11.3	3.4	46.6	23.0	2.8	3.2	5.6	5.2	8.9	13.1	23.4	8.3	1.4	2.0
	北関東・甲信	106	70.8	62.3	7.5	5.7	6.6	10.4	3.8	40.6	18.9	3.8	1.9	5.7	4.7	13.2	15.1	27.4	8.5	1.9	1.9
	北陸	67	79.1	64.2	14.9	6.0	6.0	4.5	4.5	61.2	14.9	3.0	0.0	4.5	3.0	3.0	4.5	19.4	7.5	3.0	0.0
	東海	169	74.6	60.9	13.0	5.9	7.1	11.2	4.7	52.1	16.6	6.5	3.6	4.1	4.1	11.8	16.6	26.0	9.5	1.8	1.2
	近畿	248	67.7	61.3	15.7	6.0	8.5	12.5	7.3	50.0	19.8	3.6	3.6	5.2	5.2	9.3	11.7	17.7	9.7	3.2	1.6
	中国	76	78.9	64.5	7.9	0.0	9.2	7.9	0.0	46.1	19.7	1.3	1.3	5.3	2.6	10.5	14.5	18.4	9.2	2.6	2.6
	四国	40	67.5	42.5	15.0	7.5	10.0	10.0	5.0	47.5	15.0	10.0	10.0	2.5	7.5	10.0	15.0	30.0	15.0	5.0	2.5
	九州	187	64.2	62.6	21.9	9.6	7.0	5.9	4.8	47.1	17.6	1.1	4.3	4.8	5.9	10.2	8.6	17.1	7.0	1.6	0.0
配偶者の有無	いる	1013	70.4	63.2	14.9	4.9	6.3	9.1	3.7	50.4	17.1	2.9	2.7	4.3	4.9	9.9	11.2	21.5	9.0	1.8	1.5
	いない	569	68.0	57.8	14.8	7.6	10.9	10.9	5.6	43.2	22.3	3.7	4.4	5.8	4.4	9.0	13.2	20.2	8.1	3.3	1.8
同居している子どもの有無	いる	529	66.0	59.7	16.8	7.9	7.2	11.5	5.3	45.6	18.1	4.7	4.2	4.9	7.2	10.0	11.3	18.9	7.6	2.3	1.7
	いない	1053	71.3	62.0	13.9	4.8	8.4	8.8	3.9	49.0	19.4	2.4	2.8	4.8	3.5	9.3	12.2	22.1	9.2	2.4	1.5
同居している子どもの年代	未就学児	97	61.9	57.7	23.7	16.5	10.3	20.6	8.2	33.0	21.6	11.3	7.2	8.2	11.3	9.3	8.2	10.3	6.2	6.2	1.0
	小学生	105	54.3	54.3	17.1	11.4	4.8	12.4	4.8	38.1	18.1	2.9	3.8	3.8	9.5	9.5	12.4	17.1	7.6	1.9	1.9
	中学生	49	71.4	63.3	10.2	2.0	8.2	12.2	6.1	42.9	18.4	2.0	6.1	6.1	10.2	14.3	16.3	14.3	12.2	0.0	2.0
	高校生以上	278	70.9	61.9	15.5	4.7	6.8	7.9	4.3	53.2	16.9	3.6	2.9	4.0	4.3	9.7	11.2	23.4	7.2	1.4	1.8
職業	会社員・団体職員	656	68.4	59.3	17.5	9.1	9.3	12.5	5.2	41.0	20.6	4.1	4.1	5.2	4.7	7.2	11.9	17.1	8.7	2.9	0.5
	会社役員・団体役員	33	66.7	69.7	27.3	3.0	9.1	3.0	6.1	48.5	12.1	0.0	3.0	6.1	9.1	6.1	9.1	21.2	6.1	0.0	0.0
	自営業	63	68.3	69.8	19.0	7.9	7.9	17.5	6.3	52.4	20.6	3.2	3.2	7.9	9.5	19.0	19.0	30.2	15.9	4.8	0.0
	自由業・士業	35	51.4	68.6	17.1	5.7	5.7	8.6	2.9	57.1	11.4	5.7	2.9	2.9	5.7	5.7	8.6	20.0	8.6	5.7	2.9
	パート・アルバイト	213	68.5	57.3	11.7	3.3	9.4	7.5	3.8	51.2	24.4	2.3	2.3	4.2	2.8	9.9	11.3	21.6	6.6	0.9	2.3
	専業主婦・主夫	245	73.1	66.9	13.1	1.6	5.3	6.5	2.4	62.0	15.1	2.4	1.2	4.9	5.7	14.3	11.8	23.7	11.4	0.4	2.0
	学生・生徒	85	64.7	54.1	10.6	7.1	12.9	10.6	7.1	28.2	21.2	4.7	7.1	7.1	7.1	10.6	9.4	16.5	4.7	4.7	0.0
	家事手伝い・引退・無職	198	75.8	61.6	10.1	2.0	3.5	4.5	2.5	54.5	12.6	0.0	1.0	2.0	1.5	8.6	12.1	26.8	7.1	1.0	5.6
	その他	54	70.4	64.8	13.0	7.4	7.4	13.0	5.6	48.1	22.2	7.4	9.3	7.4	7.4	11.1	13.0	31.5	9.3	7.4	0.0

		n	大浴場（室内）での入浴	露天風呂での入浴	部屋付きの風呂での入浴	蒸し風呂／泥風呂／砂風呂／ラドン浴など湯につかる以外での入浴	温泉地での共同浴場（外湯）の利用	街中の足湯の利用	飲泉	旅館・ホテルでの夕食・朝食・昼食	温泉地の飲食店での食事や食べ歩き	温泉地での自炊	温泉を使った調理法での食事	温泉を使った製法でのお菓子・食品の購入	湯の花や温泉水など温泉ならではの製品の購入	その温泉地ならではの工芸品・特産品などの土産物の購入	神社仏閣などへのお参り	その温泉地の名所旧跡・自然景勝などへの観光	温泉地での散策や浴衣でのそぞろ歩き	お祭りや伝統的な行事の見学	その他
全体		1582	69.5	61.3	14.9	5.9	8.0	9.7	4.4	47.9	19.0	3.2	3.3	4.9	4.7	9.5	11.9	21.0	8.7	2.3	1.6
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	56.3	53.8	13.8	8.8	15.0	31.3	6.3	38.8	20.0	3.8	6.3	5.0	3.8	8.8	11.3	16.3	13.8	2.5	0.0
	箱根	69	68.1	71.0	13.0	5.8	11.6	14.5	8.7	44.9	27.5	7.2	4.3	7.2	10.1	15.9	21.7	26.1	2.9	0.0	0.0
	有馬	60	66.7	46.7	18.3	8.3	15.0	20.0	8.3	41.7	25.0	5.0	3.3	15.0	8.3	11.7	15.0	21.7	16.7	1.7	0.0
	別府	55	70.9	65.5	16.4	5.5	3.6	9.1	10.9	58.2	21.8	3.6	9.1	9.1	7.3	12.7	20.0	21.8	5.5	1.8	0.0
	下呂	47	76.6	59.6	10.6	10.6	6.4	12.8	8.5	59.6	31.9	4.3	10.6	4.3	4.3	19.1	17.0	19.1	12.8	4.3	0.0
	熱海	46	63.0	65.2	30.4	8.7	4.3	13.0	2.2	60.9	43.5	0.0	0.0	6.5	4.3	4.3	13.0	26.1	10.9	2.2	2.2
	道後	37	62.2	24.3	5.4	2.7	27.0	18.9	5.4	32.4	27.0	5.4	2.7	5.4	2.7	13.5	13.5	27.0	13.5	0.0	0.0
	伊香保	37	70.3	51.4	18.9	0.0	2.7	16.2	2.7	56.8	32.4	0.0	0.0	2.7	5.4	5.4	16.2	35.1	18.9	0.0	0.0
	鬼怒川	29	72.4	72.4	24.1	6.9	10.3	17.2	6.9	48.3	24.1	6.9	3.4	0.0	6.9	17.2	20.7	27.6	10.3	3.4	3.4
	由布院・湯布院	27	48.1	74.1	29.6	3.7	7.4	14.8	14.8	66.7	40.7	0.0	11.1	11.1	18.5	25.9	7.4	29.6	25.9	0.0	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	78.0	58.5	31.7	9.8	19.5	22.0	4.9	51.2	26.8	7.3	14.6	26.8	12.2	22.0	22.0	41.5	19.5	4.9	2.4
	草津	38	65.8	71.1	28.9	13.2	15.8	23.7	5.3	68.4	42.1	7.9	13.2	23.7	13.2	21.1	34.2	50.0	26.3	10.5	0.0
	熱海	30	73.3	83.3	30.0	13.3	16.7	13.3	0.0	53.3	16.7	6.7	3.3	10.0	16.7	20.0	26.7	36.7	10.0	3.3	0.0
	有馬	30	80.0	63.3	26.7	10.0	13.3	23.3	20.0	63.3	40.0	13.3	16.7	13.3	16.7	30.0	23.3	30.0	3.3	3.3	0.0
	伊香保	27	74.1	70.4	14.8	7.4	7.4	25.9	0.0	44.4	25.9	3.7	7.4	18.5	14.8	14.8	18.5	3.7	11.1	0.0	0.0
	別府	25	60.0	68.0	16.0	20.0	20.0	20.0	12.0	48.0	28.0	8.0	16.0	8.0	12.0	16.0	28.0	32.0	24.0	8.0	0.0
	下呂	21	71.4	57.1	28.6	23.8	14.3	9.5	14.3	57.1	9.5	14.3	0.0	0.0	4.8	14.3	9.5	23.8	19.0	4.8	0.0
	道後	20	75.0	55.0	10.0	10.0	30.0	15.0	10.0	55.0	10.0	5.0	5.0	5.0	10.0	10.0	10.0	30.0	15.0	0.0	0.0
	南紀白浜	16	87.5	75.0	12.5	6.3	18.8	18.8	0.0	50.0	18.8	0.0	0.0	6.3	12.5	18.8	6.3	25.0	12.5	0.0	0.0
	鬼怒川	17	76.5	76.5	17.6	11.8	23.5	11.8	17.6	70.6	29.4	5.9	11.8	11.8	5.9	11.8	23.5	47.1	17.6	5.9	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	304	71.1	66.4	16.4	4.3	8.9	12.5	4.3	52.3	28.0	2.0	3.6	7.9	4.9	14.1	16.8	32.9	13.2	1.6	3.3
	別府	185	68.6	60.0	15.7	7.0	11.4	12.4	4.3	47.6	27.6	2.2	6.5	9.7	6.5	17.8	16.2	26.5	11.4	2.7	2.2
	有馬	138	71.7	63.0	15.2	8.7	11.6	18.1	8.0	56.5	23.2	4.3	4.3	8.0	7.2	11.6	14.5	26.1	13.0	2.9	2.9
	下呂	81	79.0	66.7	12.3	4.9	8.6	13.6	1.2	46.9	22.2	2.5	2.5	3.7	2.5	12.3	13.6	25.9	9.9	3.7	2.5
	箱根	92	73.9	73.9	18.5	6.5	10.9	12.0	4.3	44.6	25.0	3.3	5.4	8.7	4.3	7.6	23.9	32.6	10.9	1.1	1.1
	道後	76	75.0	64.5	9.2	2.6	14.5	14.5	5.3	51.3	26.3	3.9	1.3	9.2	3.9	9.2	10.5	18.4	17.1	0.0	1.3
	由布院・湯布院	63	76.2	71.4	33.3	6.3	9.5	12.7	7.9	58.7	33.3	3.2	6.3	9.5	4.8	15.9	15.9	25.4	14.3	6.3	0.0
	登別	75	80.0	69.3	12.0	0.0	2.7	5.3	1.3	58.7	12.0	0.0	0.0	2.7	4.0	9.3	12.0	25.3	9.3	2.7	1.3
	熱海	59	69.5	71.2	22.0	10.2	11.9	11.9	5.1	52.5	20.3	6.8	3.4	6.8	3.4	11.9	16.9	30.5	8.5	0.0	0.0
	伊香保	47	70.2	76.6	14.9	2.1	10.6	17.0	2.1	48.9	23.4	0.0	2.1	8.5	10.6	12.8	14.9	23.4	6.4	2.1	0.0
行ってみたい温泉地	草津	205	74.6	63.9	13.7	3.9	9.3	12.7	3.9	50.7	21.0	2.0	2.0	7.8	3.9	8.8	15.6	23.4	9.8	1.5	1.5
	別府	166	72.9	62.7	12.0	6.0	9.0	10.2	4.2	38.6	19.9	1.2	4.2	5.4	2.4	11.4	13.3	22.3	7.8	1.2	1.8
	有馬	90	81.1	72.2	13.3	8.9	7.8	14.4	5.6	62.2	26.7	4.4	4.4	4.4	7.8	16.7	20.0	23.3	12.2	4.4	3.3
	由布院・湯布院	93	76.3	64.5	19.4	3.2	10.8	8.6	7.5	59.1	31.2	2.2	2.2	4.3	6.5	15.1	16.1	26.9	9.7	3.2	2.2
	箱根	80	73.8	73.8	16.3	5.0	7.5	11.3	2.5	56.3	20.0	3.8	1.3	5.0	8.8	10.0	18.8	28.8	12.5	0.0	1.3
	道後	85	72.9	69.4	15.3	2.4	9.4	11.8	2.4	57.6	30.6	2.4	4.7	12.9	3.5	11.8	15.3	30.6	18.8	2.4	1.2
	下呂	76	82.9	71.1	15.8	2.6	10.5	6.6	2.6	60.5	27.6	2.6	2.6	7.9	2.6	11.8	11.8	28.9	17.1	2.6	0.0
	登別	68	80.9	67.6	16.2	5.9	4.4	8.8	8.8	51.5	20.6	2.9	2.9	5.9	5.9	11.8	11.8	23.5	8.8	1.5	0.0
	黒川	51	82.4	74.5	23.5	5.9	5.9	7.8	3.9	68.6	25.5	0.0	3.9	3.9	7.8	15.7	13.7	23.5	19.6	0.0	0.0
	城崎	43	62.8	55.8	18.6	0.0	16.3	9.3	2.3	60.5	25.6	2.3	2.3	0.0	0.0	7.0	20.9	25.6	18.6	0.0	2.3

図表 2-2-33. 過去１年以内で一番最近訪問した温泉地以外への訪問

		n	ある	ない
全 体		904	80.8	19.2
性別	男性	474	81.4	18.6
	女性	430	80.0	20.0
	回答しない	0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0
	16歳～19歳	39	82.1	17.9
	20歳～29歳	90	74.4	25.6
	30歳～39歳	118	82.2	17.8
	40歳～49歳	149	80.5	19.5
	50歳～59歳	124	83.1	16.9
	60歳～69歳	190	81.1	18.9
	70歳以上	194	80.9	19.1
居住地	北海道	49	69.4	30.6
	東北	68	79.4	20.6
	南関東	292	83.2	16.8
	北関東・甲信	59	81.4	18.6
	北陸	43	83.7	16.3
	東海	86	84.9	15.1
	近畿	134	78.4	21.6
	中国	43	79.1	20.9
	四国	23	73.9	26.1
	九州	107	80.4	19.6
配偶者の有無	いる	587	81.8	18.2
	いない	317	78.9	21.1
同居している子どもの有無	いる	303	78.9	21.1
	いない	601	81.7	18.3
同居している子どもの年代	未就学児	54	88.9	11.1
	小学生	58	81.0	19.0
	中学生	23	87.0	13.0
	高校生以上	168	73.8	26.2
職業	会社員・団体職員	377	80.1	19.9
	会社役員・団体役員	24	83.3	16.7
	自営業	37	91.9	8.1
	自由業・士業	19	78.9	21.1
	パート・アルバイト	112	76.8	23.2
	専業主婦・主夫	146	84.2	15.8
	学生・生徒	45	75.6	24.4
	家事手伝い・引退・無職	112	79.5	20.5
	その他	32	84.4	15.6

		n	ある	ない
全 体		904	80.8	19.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	46	84.8	15.2
	箱根	35	88.6	11.4
	有馬	35	80.0	20.0
	別府	33	84.8	15.2
	下呂	22	90.9	9.1
	熱海	27	81.5	18.5
	道後	19	68.4	31.6
	伊香保	19	89.5	10.5
	鬼怒川	13	84.6	15.4
	由布院・湯布院	15	80.0	20.0
名湯だと思う温泉地	草津	165	86.7	13.3
	別府	91	80.2	19.8
	有馬	68	79.4	20.6
	下呂	40	82.5	17.5
	箱根	43	86.0	14.0
	道後	36	86.1	13.9
	由布院・湯布院	40	85.0	15.0
	登別	46	76.1	23.9
	熱海	33	97.0	3.0
	伊香保	27	85.2	14.8
行ってみたい温泉地	草津	110	85.5	14.5
	別府	91	81.3	18.7
	有馬	46	87.0	13.0
	由布院・湯布院	53	86.8	13.2
	箱根	48	91.7	8.3
	道後	40	80.0	20.0
	下呂	46	82.6	17.4
	登別	44	81.8	18.2
	黒川	27	92.6	7.4
	城崎	19	94.7	5.3

図表 2-2-34. 一番最近訪問した温泉地以外に訪問したの温泉地（上位 10 カ所）

		n	箱根	草津	熱海	有馬	伊香保	別府	下呂	道後	南紀白浜	鬼怒川
全体		730	5.6	5.2	4.1	4.1	3.7	3.4	2.9	2.7	2.2	2.3
性別	男性	386	5.7	4.7	3.6	3.6	4.4	3.6	2.8	3.1	1.8	2.6
	女性	344	5.5	5.8	4.7	4.7	2.9	3.2	2.9	2.3	2.6	2.0
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	32	3.1	3.1	3.1	6.3	0.0	0.0	9.4	3.1	0.0	3.1
	20歳～29歳	67	9.0	6.0	7.5	4.5	3.0	4.5	3.0	4.5	3.0	1.5
	30歳～39歳	97	8.2	10.3	3.1	5.2	2.1	5.2	2.1	0.0	1.0	4.1
	40歳～49歳	120	5.8	5.0	1.7	2.5	5.8	6.7	2.5	4.2	2.5	3.3
	50歳～59歳	103	6.8	1.9	6.8	2.9	4.9	1.0	2.9	2.9	1.0	2.9
	60歳～69歳	154	3.2	3.9	3.2	5.2	1.9	3.9	3.2	3.2	0.6	0.6
	70歳以上	157	4.5	5.7	4.5	3.8	5.1	1.3	1.9	1.9	5.1	1.9
居住地	北海道	34	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0
	東北	54	0.0	1.9	0.0	0.0	1.9	0.0	1.9	0.0	0.0	0.0
	南関東	243	14.4	7.8	9.1	1.2	7.8	0.8	2.5	2.5	0.4	4.9
	北関東・甲信	48	2.1	14.6	2.1	0.0	12.5	0.0	2.1	2.1	0.0	4.2
	北陸	36	0.0	5.6	0.0	0.0	0.0	8.3	0.0	0.0	0.0	2.8
	東海	73	2.7	5.5	5.5	2.7	0.0	4.1	12.3	2.7	0.0	0.0
	近畿	105	1.0	1.9	1.0	15.2	0.0	5.7	3.8	3.8	12.4	1.0
	中国	34	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	2.9	0.0	5.9	2.9	2.9
	四国	17	0.0	0.0	0.0	5.9	0.0	5.9	0.0	5.9	5.9	0.0
	九州	86	1.2	2.3	1.2	8.1	0.0	10.5	0.0	2.3	0.0	0.0
配偶者の有無	いる	480	4.8	5.2	3.5	4.2	5.0	2.5	2.9	2.7	2.1	1.5
	いない	250	7.2	5.2	5.2	4.0	1.2	5.2	2.8	2.8	2.4	4.0
同居している子どもの有無	いる	239	5.0	5.9	4.6	4.2	5.4	2.5	2.5	2.1	1.7	0.8
	いない	491	5.9	4.9	3.9	4.1	2.9	3.9	3.1	3.1	2.4	3.1
同居している子どもの年代	未就学児	48	12.5	4.2	4.2	6.3	4.2	4.2	2.1	0.0	2.1	0.0
	小学生	47	0.0	6.4	4.3	4.3	6.4	6.4	0.0	2.1	2.1	0.0
	中学生	20	5.0	5.0	10.0	5.0	5.0	5.0	0.0	5.0	0.0	5.0
	高校生以上	124	4.0	6.5	4.0	3.2	5.6	0.0	4.0	2.4	1.6	0.8
職業	会社員・団体職員	302	7.6	6.6	5.0	3.6	3.3	5.3	3.0	3.3	2.0	2.3
	会社役員・団体役員	20	5.0	10.0	0.0	5.0	0.0	0.0	0.0	5.0	5.0	0.0
	自営業	34	5.9	2.9	8.8	8.8	2.9	2.9	5.9	0.0	2.9	0.0
	自由業・士業	15	0.0	6.7	0.0	6.7	6.7	13.3	0.0	6.7	0.0	0.0
	パート・アルバイト	86	2.3	3.5	3.5	3.5	3.5	2.3	2.3	3.5	0.0	4.7
	専業主婦・主夫	123	6.5	4.1	4.1	4.9	5.7	1.6	3.3	3.3	4.9	1.6
	学生・生徒	34	2.9	2.9	2.9	5.9	0.0	0.0	5.9	2.9	0.0	2.9
	家事手伝い・引退・無職	89	2.2	4.5	1.1	2.2	3.4	2.2	2.2	0.0	1.1	2.2
	その他	27	7.4	3.7	7.4	3.7	7.4	0.0	0.0	0.0	3.7	3.7

		n	箱根	草津	熱海	有馬	伊香保	別府	下呂	道後	南紀白浜	鬼怒川
全体		730	5.6	5.2	4.1	4.1	3.7	3.4	2.9	2.7	2.2	2.3
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	39	10.3	0.0	10.3	7.7	17.9	0.0	0.0	5.1	0.0	5.1
	箱根	31	6.5	9.7	19.4	3.2	16.1	3.2	3.2	3.2	0.0	0.0
	有馬	28	7.1	14.3	0.0	3.6	0.0	7.1	14.3	3.6	17.9	0.0
	別府	28	7.1	7.1	0.0	10.7	0.0	3.6	3.6	10.7	3.6	0.0
	下呂	20	10.0	20.0	10.0	5.0	0.0	5.0	10.0	5.0	5.0	5.0
	熱海	22	27.3	4.5	0.0	0.0	0.0	9.1	0.0	9.1	0.0	4.5
	道後	13	7.7	0.0	0.0	7.7	0.0	7.7	0.0	0.0	0.0	0.0
	伊香保	17	11.8	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	17.6
	鬼怒川	11	9.1	27.3	9.1	0.0	0.0	0.0	18.2	0.0	0.0	0.0
	由布院・湯布院	12	8.3	8.3	0.0	25.0	0.0	8.3	0.0	0.0	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	143	7.7	9.8	6.3	4.9	6.3	2.1	2.1	2.8	0.7	4.9
	別府	73	5.5	5.5	5.5	9.6	1.4	11.0	0.0	8.2	1.4	0.0
	有馬	54	11.1	9.3	1.9	14.8	1.9	0.0	11.1	0.0	5.6	3.7
	下呂	33	6.1	6.1	9.1	6.1	0.0	0.0	30.3	0.0	12.1	3.0
	箱根	37	18.9	10.8	13.5	0.0	8.1	2.7	2.7	5.4	0.0	5.4
	道後	31	0.0	3.2	0.0	16.1	0.0	3.2	6.5	29.0	3.2	0.0
	由布院・湯布院	34	5.9	11.8	2.9	0.0	0.0	5.9	0.0	5.9	0.0	2.9
	登別	35	5.7	8.6	2.9	5.7	2.9	5.7	0.0	5.7	5.7	2.9
	熱海	32	6.3	9.4	21.9	3.1	0.0	0.0	9.4	0.0	3.1	3.1
	伊香保	23	8.7	4.3	0.0	0.0	34.8	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3
行ってみたい温泉地	草津	94	6.4	7.4	2.1	6.4	4.3	0.0	0.0	4.3	2.1	4.3
	別府	74	6.8	4.1	4.1	2.7	1.4	12.2	2.7	5.4	4.1	0.0
	有馬	40	7.5	7.5	5.0	7.5	0.0	5.0	7.5	0.0	12.5	0.0
	由布院・湯布院	46	6.5	6.5	4.3	6.5	4.3	6.5	2.2	2.2	2.2	2.2
	箱根	44	11.4	11.4	4.5	9.1	4.5	4.5	6.8	4.5	0.0	2.3
	道後	32	9.4	9.4	3.1	3.1	6.3	0.0	0.0	12.5	0.0	0.0
	下呂	38	5.3	5.3	5.3	5.3	0.0	0.0	15.8	0.0	5.3	2.6
	登別	36	8.3	11.1	5.6	5.6	2.8	2.8	2.8	0.0	8.3	0.0
	黒川	25	0.0	0.0	8.0	0.0	0.0	8.0	4.0	8.0	4.0	0.0
	城崎	18	5.6	0.0	0.0	16.7	5.6	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0

図表 2-2-35.温泉地へ行かない理由

		n	長い時間湯につかることが苦手だから	他人と一緒に入浴することが苦手だから	温泉の健康上の効能に期待していないから	大型旅館の雰囲気、サービスが苦手だから	一泊二食付きの宿が多く、食事の場所が選べないから	温泉行楽地の雰囲気が苦手で、魅力を感じないから	温泉地以外に行きたい旅行先があるから	旅行自体に興味がないから	温泉地は宿代などでお金が掛かるから	自分や家族の健康上の理由で	そもそも温泉に特に魅力を感じていない・好きではない	その他
全体		2057	10.8	18.6	1.3	3.0	3.0	1.8	9.7	14.0	25.2	10.2	33.7	6.2
性別	男性	993	9.1	12.9	1.3	2.5	2.4	2.0	8.3	15.7	25.2	8.8	36.2	6.4
	女性	1064	12.5	23.9	1.2	3.5	3.6	1.6	11.0	12.5	25.3	11.5	31.5	5.9
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	90	12.2	22.2	0.0	2.2	2.2	2.2	3.3	8.9	13.3	4.4	35.6	8.9
	20歳～29歳	315	9.2	16.8	2.2	1.9	3.5	2.9	6.7	13.0	23.2	6.3	44.1	1.9
	30歳～39歳	338	9.8	22.5	1.8	4.7	4.1	1.8	8.9	13.6	21.6	6.2	43.2	3.6
	40歳～49歳	418	12.4	24.6	1.4	3.1	2.2	1.4	8.6	14.8	29.4	7.7	33.7	3.6
	50歳～59歳	379	10.6	14.8	1.1	2.1	2.9	0.5	10.8	15.8	24.3	11.3	26.1	11.6
	60歳～69歳	265	14.3	17.4	0.4	4.2	2.6	2.6	9.8	15.8	31.3	13.2	25.7	9.1
	70歳以上	252	7.9	11.1	0.8	2.4	3.2	2.0	16.7	11.9	25.0	21.4	27.4	7.1
居住地	北海道	76	10.5	13.2	0.0	3.9	2.6	1.3	9.2	10.5	35.5	5.3	36.8	0.0
	東北	150	6.7	13.3	0.0	1.3	4.7	1.3	7.3	16.0	24.0	8.0	41.3	6.0
	南関東	611	12.9	16.2	1.6	3.6	2.3	2.0	9.2	12.6	24.2	11.1	34.0	6.5
	北関東・甲信	169	10.1	20.7	1.2	1.2	2.4	0.6	7.1	8.9	24.3	9.5	40.2	7.1
	北陸	63	4.8	22.2	1.6	4.8	7.9	6.3	11.1	14.3	23.8	14.3	25.4	7.9
	東海	254	10.6	22.0	0.8	3.9	2.0	0.8	11.8	15.4	29.1	8.7	31.5	6.7
	近畿	338	10.1	16.9	1.2	1.8	4.4	2.7	9.2	17.5	21.3	13.3	29.6	7.7
	中国	119	11.8	22.7	0.8	3.4	2.5	0.0	12.6	16.8	30.3	6.7	32.8	4.2
	四国	69	11.6	33.3	2.9	1.4	4.3	4.3	17.4	8.7	24.6	5.8	34.8	2.9
	九州	208	11.1	19.7	1.9	4.3	1.9	1.4	8.7	15.4	25.5	10.1	33.2	5.3
配偶者の有無	いる	725	13.9	19.9	1.1	2.9	2.5	1.4	11.2	11.0	28.3	12.0	26.3	7.2
	いない	1332	9.2	17.9	1.4	3.1	3.3	2.0	8.9	15.7	23.6	9.2	37.8	5.6
同居している子どもの有無	いる	454	12.3	17.8	1.3	2.9	2.4	0.9	10.1	9.5	28.2	11.2	24.9	8.4
	いない	1603	10.4	18.8	1.2	3.1	3.2	2.1	9.5	15.3	24.4	9.9	36.2	5.6
同居している子どもの年代	未就学児	65	7.7	24.6	1.5	1.5	0.0	0.0	7.7	4.6	21.5	3.1	35.4	7.7
	小学生	74	8.1	8.1	1.4	4.1	4.1	0.0	9.5	5.4	31.1	4.1	35.1	4.1
	中学生	29	13.8	20.7	6.9	0.0	0.0	0.0	6.9	3.4	24.1	6.9	31.0	0.0
	高校生以上	286	14.3	18.5	0.7	3.1	2.8	1.4	11.2	12.2	29.4	15.4	19.2	10.5
職業	会社員・団体職員	666	10.2	17.6	2.0	3.0	3.5	1.7	10.5	12.6	23.1	5.7	33.6	5.7
	会社役員・団体役員	21	4.8	4.8	0.0	0.0	4.8	4.8	4.8	9.5	9.5	14.3	52.4	0.0
	自営業	71	8.5	16.9	0.0	1.4	1.4	1.4	11.3	18.3	21.1	7.0	21.1	18.3
	自由業・士業	51	29.4	23.5	2.0	7.8	11.8	5.9	15.7	15.7	19.6	15.7	35.3	2.0
	パート・アルバイト	333	12.0	22.2	0.9	3.3	3.0	1.2	10.8	17.1	28.8	6.3	33.0	5.1
	専業主婦・主夫	271	14.8	22.1	1.1	3.7	3.0	1.1	11.4	11.1	26.2	15.1	25.8	5.5
	学生・生徒	107	12.1	22.4	0.0	2.8	2.8	2.8	9.3	9.3	17.8	6.5	29.9	5.6
	家事手伝い・引退・無職	433	7.2	15.2	1.2	2.3	2.3	2.3	7.4	16.9	30.7	18.2	35.3	7.2
	その他	104	8.7	15.4	1.0	2.9	0.0	1.0	2.9	11.5	18.3	6.7	58.7	5.8

		n	長い時間湯につかることが苦手だから	他人と一緒に入浴することが苦手だから	温泉の健康上の効能に期待していないから	大型旅館の雰囲気、サービスが苦手だから	一泊二食付きの宿が多く、食事の場所が選べないから	温泉行楽地の雰囲気が苦手で、魅力を感じないから	温泉地以外に行きたい旅行先があるから	旅行自体に興味がないから	温泉地は宿代などでお金が掛かるから	自分や家族の健康上の理由で	そもそも温泉に特に魅力を感じていない・好きではない	その他
全 体		2057	10.8	18.6	1.3	3.0	3.0	1.8	9.7	14.0	25.2	10.2	33.7	6.2
名湯だと思う温泉地	草津	163	7.4	13.5	0.0	1.8	3.7	0.6	17.2	10.4	43.6	16.6	16.6	8.0
	別府	106	10.4	22.6	0.0	0.9	5.7	0.0	20.8	15.1	37.7	14.2	16.0	4.7
	有馬	96	13.5	13.5	1.0	6.3	3.1	2.1	18.8	9.4	29.2	19.8	15.6	9.4
	下呂	65	16.9	21.5	0.0	7.7	4.6	0.0	26.2	9.2	26.2	7.7	12.3	7.7
	箱根	51	11.8	27.5	2.0	7.8	3.9	0.0	19.6	15.7	39.2	9.8	9.8	7.8
	道後	47	21.3	14.9	2.1	8.5	2.1	2.1	21.3	8.5	38.3	23.4	14.9	8.5
	由布院・湯布院	57	3.5	14.0	0.0	3.5	5.3	0.0	12.3	12.3	38.6	21.1	10.5	10.5
	登別	40	10.0	17.5	0.0	0.0	0.0	0.0	15.0	0.0	52.5	27.5	0.0	2.5
	熱海	32	9.4	31.3	0.0	6.3	3.1	0.0	12.5	9.4	46.9	6.3	9.4	9.4
	伊香保	24	8.3	20.8	0.0	4.2	0.0	0.0	20.8	4.2	45.8	8.3	16.7	25.0
行ってみたい温泉地	草津	79	5.1	7.6	0.0	2.5	0.0	0.0	13.9	8.9	53.2	21.5	6.3	13.9
	別府	43	2.3	16.3	0.0	0.0	2.3	0.0	14.0	11.6	48.8	18.6	4.7	7.0
	有馬	39	5.1	12.8	0.0	7.7	0.0	2.6	12.8	10.3	33.3	25.6	2.6	15.4
	由布院・湯布院	33	9.1	12.1	0.0	0.0	3.0	0.0	12.1	6.1	45.5	24.2	0.0	15.2
	箱根	36	11.1	16.7	2.8	5.6	2.8	2.8	22.2	11.1	41.7	19.4	0.0	11.1
	道後	22	13.6	18.2	4.5	0.0	0.0	0.0	27.3	22.7	45.5	27.3	9.1	9.1
	下呂	32	3.1	9.4	0.0	3.1	3.1	0.0	21.9	9.4	43.8	18.8	0.0	12.5
	登別	12	0.0	25.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3	8.3	41.7	25.0	0.0	0.0
	黒川	14	7.1	14.3	7.1	7.1	0.0	0.0	35.7	7.1	14.3	21.4	7.1	7.1
	城崎	14	7.1	14.3	0.0	14.3	14.3	7.1	14.3	7.1	28.6	21.4	0.0	21.4
訪問経験	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	12.0	20.0	1.4	3.6	3.2	1.8	13.6	16.4	33.1	14.2	16.7	9.2
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	9.6	17.1	1.1	2.4	2.8	1.8	5.6	11.6	17.0	6.0	51.6	3.0

図表 2-2-36.名湯だと思う温泉地の有無

		n	ある	ない
全 体		5000	54.3	45.7
性別	男性	2475	54.8	45.2
	女性	2525	53.8	46.2
	回答しない	0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	57.0	43.0
	20歳～29歳	625	41.4	58.6
	30歳～39歳	718	48.3	51.7
	40歳～49歳	935	50.2	49.8
	50歳～59歳	852	52.9	47.1
	60歳～69歳	801	63.0	37.0
	70歳以上	832	65.9	34.1
居住地	北海道	211	54.0	46.0
	東北	339	46.0	54.0
	南関東	1492	51.7	48.3
	北関東・甲信	382	53.9	46.1
	北陸	203	61.6	38.4
	東海	590	55.8	44.2
	近畿	812	54.9	45.1
	中国	281	54.8	45.2
	四国	142	51.4	48.6
	九州	548	62.0	38.0
配偶者の有無	いる	2525	63.1	36.9
	いない	2475	45.3	54.7
同居している子どもの有無	いる	1420	60.2	39.8
	いない	3580	51.9	48.1
同居している子どもの年代	未就学児	228	61.8	38.2
	小学生	259	60.6	39.4
	中学生	119	60.5	39.5
	高校生以上	814	59.6	40.4
職業	会社員・団体職員	1848	57.0	43.0
	会社役員・団体役員	71	63.4	36.6
	自営業	183	55.7	44.3
	自由業・士業	113	48.7	51.3
	パート・アルバイト	747	47.1	52.9
	専業主婦・主夫	732	59.3	40.7
	学生・生徒	274	54.7	45.3
	家事手伝い・引退・無職	824	51.3	48.7
	その他	208	47.6	52.4

		n	ある	ない
全 体		5000	54.3	45.7
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	73.8	26.3
	箱根	69	71.0	29.0
	有馬	60	80.0	20.0
	別府	55	90.9	9.1
	下呂	47	76.6	23.4
	熱海	46	71.7	28.3
	道後	37	81.1	18.9
	伊香保	37	67.6	32.4
	鬼怒川	29	82.8	17.2
	由布院・湯布院	27	81.5	18.5
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	70.7	29.3
	草津	38	84.2	15.8
	熱海	30	86.7	13.3
	有馬	30	100.0	0.0
	伊香保	27	74.1	25.9
	別府	25	84.0	16.0
	下呂	21	90.5	9.5
	道後	20	80.0	20.0
	南紀白浜	16	87.5	12.5
	鬼怒川	17	70.6	29.4
行ってみたい温泉地	草津	480	84.2	15.8
	別府	348	85.6	14.4
	有馬	207	85.5	14.5
	由布院・湯布院	194	82.5	17.5
	箱根	189	82.0	18.0
	道後	177	84.7	15.3
	下呂	172	81.4	18.6
	登別	136	93.4	6.6
	黒川	96	86.5	13.5
	城崎	95	83.2	16.8
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	73.8	26.2
	2～4年前に訪れたことがある	584	76.9	23.1
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	68.7	31.3
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	41.9	58.1
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	12.2	87.8

図表 2-2-37.名湯だと思う温泉地（上位 10 カ所）

		n	草津	別府	有馬	下呂	箱根	道後	由布院・湯布院	登別	熱海	伊香保
全体		2714	26.6	17.3	14.1	8.7	8.7	6.8	6.7	6.6	4.7	4.2
性別	男性	1356	28.2	18.0	14.3	7.7	8.4	6.1	5.7	6.2	4.0	4.4
	女性	1358	24.9	16.6	13.9	9.6	8.9	7.4	7.7	7.1	5.4	4.0
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	135	31.9	14.1	12.6	11.9	11.1	3.7	2.2	3.0	3.7	6.7
	20歳～29歳	259	24.7	21.2	6.9	9.3	8.1	6.6	5.0	1.9	4.6	3.9
	30歳～39歳	347	28.2	16.4	13.5	8.9	9.8	7.2	7.2	4.3	6.6	4.3
	40歳～49歳	469	24.9	17.9	14.5	9.4	8.3	8.5	7.2	5.8	3.6	3.4
	50歳～59歳	451	26.4	15.3	11.5	10.6	8.9	6.7	8.9	9.5	3.5	4.4
	60歳～69歳	505	23.4	16.4	17.4	5.9	8.1	6.5	6.7	7.3	5.3	3.6
	70歳以上	548	29.6	18.8	17.0	7.8	8.2	6.2	5.8	8.9	5.1	4.6
居住地	北海道	114	13.2	5.3	4.4	1.8	1.8	2.6	1.8	52.6	0.0	0.9
	東北	156	11.5	4.5	1.9	0.0	1.3	1.3	0.6	1.9	1.3	1.9
	南関東	771	41.8	11.9	7.7	5.4	21.1	4.3	4.9	6.5	8.0	6.7
	北関東・甲信	206	51.9	12.1	3.9	5.3	8.7	2.4	1.5	2.4	6.3	18.0
	北陸	125	32.0	12.0	4.8	4.0	3.2	1.6	4.0	3.2	3.2	6.4
	東海	329	31.0	16.1	11.6	38.0	6.4	6.4	4.0	6.4	9.1	2.1
	近畿	446	12.3	15.2	49.8	9.4	2.0	10.1	6.5	3.4	2.0	0.2
	中国	154	14.3	31.2	13.6	3.2	1.3	22.7	11.7	3.9	2.6	1.3
	四国	73	17.8	20.5	16.4	1.4	4.1	34.2	9.6	11.0	1.4	0.0
	九州	340	7.9	41.5	2.6	0.9	3.2	3.8	19.1	2.4	0.9	0.6
配偶者の有無	いる	1593	26.2	16.9	14.2	8.5	7.5	6.8	6.2	7.0	4.5	4.1
	いない	1121	27.0	17.8	14.0	8.9	10.3	6.8	7.4	6.2	5.0	4.3
同居している子どもの有無	いる	855	25.3	16.1	13.8	8.1	8.2	6.8	5.6	6.5	4.3	4.9
	いない	1859	27.2	17.9	14.3	9.0	8.9	6.8	7.2	6.7	4.9	3.8
同居している子どもの年代	未就学児	141	21.3	14.9	14.9	7.1	7.8	7.1	4.3	3.5	4.3	5.7
	小学生	157	21.0	15.9	8.3	10.8	8.3	5.1	5.1	5.1	5.7	3.2
	中学生	72	25.0	13.9	6.9	2.8	5.6	5.6	4.2	2.8	2.8	2.8
	高校生以上	485	27.8	16.9	16.3	8.2	8.7	7.4	6.4	8.5	4.1	5.6
職業	会社員・団体職員	1054	24.9	16.7	13.1	9.2	8.9	6.7	6.6	5.9	4.5	4.4
	会社役員・団体役員	45	24.4	17.8	13.3	0.0	11.1	0.0	6.7	2.2	8.9	2.2
	自営業	102	28.4	14.7	18.6	5.9	3.9	3.9	2.9	7.8	3.9	4.9
	自由業・士業	55	16.4	27.3	14.5	5.5	10.9	18.2	10.9	7.3	5.5	3.6
	パート・アルバイト	352	26.7	17.6	12.5	10.8	9.4	7.7	8.5	5.7	5.7	4.5
	専業主婦・主夫	434	24.7	14.5	15.0	8.1	7.8	7.4	7.6	8.5	5.1	4.1
	学生・生徒	150	34.0	20.0	12.7	12.7	10.7	6.0	2.7	2.7	3.3	6.0
	家事手伝い・引退・無職	423	29.8	19.6	17.0	7.8	8.7	5.0	6.1	10.2	4.3	2.6
	その他	99	32.3	18.2	12.1	5.1	6.1	10.1	6.1	1.0	5.1	5.1

		n	草津	別府	有馬	下呂	箱根	道後	由布院・湯布院	登別	熱海	伊香保
全体		2714	26.6	17.3	14.1	8.7	8.7	6.8	6.7	6.6	4.7	4.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	59	66.1	15.3	5.1	5.1	8.5	5.1	3.4	1.7	0.0	15.3
	箱根	49	30.6	8.2	2.0	6.1	42.9	4.1	10.2	6.1	14.3	4.1
	有馬	48	22.9	18.8	52.1	8.3	6.3	16.7	6.3	2.1	6.3	0.0
	別府	50	22.0	46.0	4.0	6.0	8.0	6.0	18.0	4.0	2.0	2.0
	下呂	36	33.3	13.9	16.7	38.9	5.6	5.6	5.6	5.6	2.8	0.0
	熱海	33	45.5	18.2	3.0	3.0	18.2	0.0	0.0	6.1	33.3	12.1
	道後	30	20.0	10.0	26.7	0.0	6.7	33.3	0.0	10.0	3.3	3.3
	伊香保	25	68.0	0.0	4.0	4.0	8.0	0.0	4.0	0.0	8.0	28.0
	鬼怒川	24	45.8	12.5	12.5	4.2	4.2	8.3	4.2	0.0	16.7	8.3
	由布院・湯布院	22	4.5	50.0	0.0	0.0	0.0	0.0	31.8	4.5	0.0	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	29	37.9	13.8	20.7	6.9	24.1	0.0	6.9	6.9	6.9	6.9
	草津	32	43.8	12.5	15.6	6.3	12.5	3.1	12.5	9.4	9.4	3.1
	熱海	26	34.6	15.4	3.8	11.5	19.2	0.0	3.8	3.8	26.9	0.0
	有馬	30	23.3	23.3	26.7	6.7	0.0	16.7	0.0	6.7	3.3	0.0
	伊香保	20	45.0	5.0	5.0	0.0	15.0	0.0	0.0	5.0	0.0	40.0
	別府	21	14.3	38.1	0.0	0.0	4.8	4.8	9.5	9.5	0.0	0.0
	下呂	19	15.8	0.0	31.6	52.6	5.3	10.5	0.0	0.0	15.8	0.0
	道後	16	25.0	37.5	0.0	0.0	12.5	56.3	12.5	12.5	0.0	0.0
	南紀白浜	14	7.1	7.1	21.4	28.6	0.0	7.1	0.0	14.3	7.1	0.0
	鬼怒川	12	58.3	0.0	16.7	8.3	16.7	0.0	8.3	8.3	8.3	8.3
名湯だと思う温泉地	草津	721	100.0	21.4	13.3	9.4	11.1	5.3	4.2	6.5	6.7	7.9
	別府	470	32.8	100.0	13.0	6.8	6.8	8.1	9.1	7.4	2.1	2.1
	有馬	383	25.1	15.9	100.0	9.4	3.4	9.4	4.4	3.9	2.9	0.8
	下呂	236	28.8	13.6	15.3	100.0	5.1	3.8	3.4	4.2	8.1	0.4
	箱根	235	34.0	13.6	5.5	5.1	100.0	1.7	5.5	6.4	17.4	7.2
	道後	184	20.7	20.7	19.6	4.9	2.2	100.0	6.0	3.3	2.2	0.5
	由布院・湯布院	181	16.6	23.8	9.4	4.4	7.2	6.1	100.0	5.0	5.0	0.6
	登別	180	26.1	19.4	8.3	5.6	8.3	3.3	5.0	100.0	3.3	3.3
	熱海	128	37.5	7.8	8.6	14.8	32.0	3.1	7.0	4.7	100.0	5.5
	伊香保	113	50.4	8.8	2.7	0.9	15.0	0.9	0.9	5.3	6.2	100.0
行ってみたい温泉地	草津	404	60.1	20.3	14.6	8.7	8.2	7.4	4.7	6.4	5.7	7.7
	別府	298	37.2	47.0	12.8	8.1	9.7	9.1	5.7	7.7	8.7	3.4
	有馬	177	28.2	16.4	58.2	11.3	4.0	7.9	5.1	7.9	4.5	3.4
	由布院・湯布院	160	30.0	23.1	13.8	5.0	12.5	4.4	30.0	7.5	8.1	4.4
	箱根	155	31.6	19.4	9.0	5.2	54.2	7.1	10.3	7.7	17.4	5.8
	道後	150	32.7	22.7	16.7	9.3	8.7	48.7	7.3	6.0	4.0	3.3
	下呂	140	31.4	14.3	19.3	50.0	10.0	9.3	7.9	5.0	5.0	2.9
	登別	127	29.9	15.0	11.8	9.4	7.1	6.3	12.6	44.9	5.5	3.1
	黒川	83	24.1	33.7	12.0	4.8	3.6	7.2	21.7	4.8	0.0	3.6
	城崎	79	29.1	16.5	34.2	15.2	3.8	13.9	3.8	1.3	2.5	1.3
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1168	26.0	15.8	11.8	6.9	7.9	6.5	5.4	6.4	5.1	4.0
	2～4年前に訪れたことがある	449	20.7	16.9	13.6	10.9	8.7	5.1	5.3	5.3	2.4	2.9
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	534	30.1	19.3	16.5	7.7	9.9	7.1	6.9	7.7	4.9	5.4
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	440	29.1	19.1	18.4	11.6	8.2	8.4	11.6	8.0	6.1	4.5
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	123	28.5	17.9	12.2	11.4	12.2	8.1	4.9	4.1	4.1	3.3

図表 2-2-38.名湯だと思う理由

		n	湯に浸かることで得られる心身の癒やし効果が高い	伝統的な入浴方法や、入湯客が同じ湯を楽しむ昔ながらの雰囲気が残されている	露天風呂や川湯、野湯など自然を感じながら湯につかることができる	打たせ湯、かぶり湯、立ち湯、飲泉、蒸し風呂、砂風呂など、その温泉ならではの入浴法を楽しめる	疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する療養効果がある	自然そのままでは使えない源泉を快適・安全湯に変える伝統的な匠・湯守のわざが守られている	入湯客の快適な滞在を支える宿や温泉地全体でのおもてなしの質が高い	開湯伝説や温泉に関する言い伝えや祭事・伝統芸能など温泉の恵みの長い歴史がある	温泉とともに、温泉地特有の自然景観を活かした四季折々の自然の情緒を楽しめる	温泉とともに、古い町並みや石畳、文化財など温泉地ならではの歴史の情緒が残っている	温泉とともに、温泉を使った調理法での料理、湯の花などの特産品がある	その他
全体		2714	64.1	20.2	34.6	17.1	42.4	16.7	23.2	11.1	35.3	30.1	12.4	2.0
性別	男性	1356	63.7	21.7	35.6	17.7	41.8	17.0	23.7	11.6	32.7	28.5	10.7	2.1
	女性	1358	64.6	18.6	33.6	16.4	42.9	16.3	22.8	10.5	38.0	31.7	14.1	1.8
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	135	63.7	22.2	38.5	17.0	35.6	15.6	23.0	12.6	32.6	31.9	9.6	2.2
	20歳～29歳	259	48.6	22.8	34.0	22.0	29.7	20.5	23.2	10.8	25.9	30.5	17.0	1.5
	30歳～39歳	347	58.8	23.1	32.0	19.3	36.3	21.0	21.3	12.7	27.7	30.3	15.6	1.4
	40歳～49歳	469	61.8	20.5	32.2	20.0	40.7	15.4	21.5	13.4	30.5	30.1	13.9	1.7
	50歳～59歳	451	65.0	19.1	31.0	14.0	47.0	15.1	19.3	8.9	37.5	31.7	11.1	2.9
	60歳～69歳	505	71.9	17.4	37.8	14.7	43.2	13.7	24.2	9.3	36.8	30.7	10.1	2.0
	70歳以上	548	69.2	19.7	37.6	15.5	50.7	17.7	28.5	11.1	46.4	27.7	10.9	1.8
居住地	北海道	114	76.3	14.9	40.4	14.9	46.5	9.6	22.8	8.8	38.6	18.4	11.4	0.0
	東北	156	67.3	18.6	34.0	23.1	42.9	16.0	23.1	9.0	29.5	15.4	11.5	1.9
	南関東	771	65.4	21.7	37.0	15.4	44.5	20.1	23.9	10.2	36.7	33.1	12.7	1.7
	北関東・甲信	206	55.8	20.9	38.8	15.0	40.3	16.0	20.9	10.2	41.7	30.6	13.6	4.4
	北陸	125	63.2	19.2	30.4	10.4	43.2	20.0	20.0	13.6	43.2	32.8	9.6	1.6
	東海	329	64.1	20.7	35.6	18.8	43.2	14.0	21.6	11.9	31.3	30.1	11.6	2.4
	近畿	446	60.5	18.8	29.4	16.1	39.5	16.4	22.4	14.1	32.7	35.4	10.1	1.6
	中国	154	59.7	25.3	25.3	18.8	41.6	12.3	26.6	12.3	35.7	33.1	11.7	1.3
	四国	73	58.9	28.8	27.4	16.4	42.5	20.5	30.1	13.7	39.7	31.5	12.3	2.7
	九州	340	69.1	16.2	38.2	21.2	40.3	15.0	24.4	8.2	33.2	24.4	17.1	2.1
配偶者の有無	いる	1593	66.0	19.5	34.5	16.6	44.3	15.9	23.0	10.4	35.8	29.0	10.7	1.3
	いない	1121	61.5	21.1	34.8	17.8	39.6	17.8	23.6	12.0	34.7	31.8	14.9	2.9
同居している子どもの有無	いる	855	63.3	20.0	33.3	18.5	42.9	17.8	22.8	10.5	34.0	29.2	12.2	1.1
	いない	1859	64.6	20.2	35.2	16.4	42.1	16.2	23.5	11.3	35.9	30.6	12.5	2.4
同居している子どもの年代	未就学児	141	57.4	23.4	33.3	26.2	32.6	22.7	23.4	15.6	27.0	25.5	14.9	0.7
	小学生	157	52.2	21.0	35.0	15.9	36.3	13.4	17.8	8.9	24.8	24.2	8.3	0.6
	中学生	72	63.9	15.3	33.3	13.9	43.1	20.8	19.4	13.9	33.3	25.0	12.5	0.0
	高校生以上	485	68.5	19.4	32.8	17.7	48.0	17.3	24.7	9.1	39.2	32.6	12.6	1.4
職業	会社員・団体職員	1054	62.7	20.5	32.8	18.9	40.1	17.5	20.3	10.2	31.0	28.7	11.5	1.6
	会社役員・団体役員	45	48.9	17.8	37.8	8.9	46.7	17.8	17.8	6.7	24.4	17.8	8.9	0.0
	自営業	102	53.9	18.6	34.3	15.7	40.2	20.6	20.6	13.7	42.2	30.4	10.8	2.9
	自由業・士業	55	65.5	29.1	38.2	23.6	54.5	23.6	21.8	16.4	36.4	27.3	18.2	0.0
	パート・アルバイト	352	63.1	19.3	36.4	16.8	40.9	14.2	24.1	12.5	35.2	34.7	15.9	2.3
	専業主婦・主夫	434	71.9	16.8	34.3	15.0	47.2	16.6	26.0	8.8	39.9	31.1	12.9	1.4
	学生・生徒	150	57.3	24.0	35.3	15.3	32.0	17.3	20.0	11.3	33.3	36.0	9.3	2.0
	家事手伝い・引退・無職	423	66.9	21.3	34.8	14.4	47.0	14.4	28.4	12.5	40.7	27.7	10.6	2.8
	その他	99	64.6	21.2	43.4	23.2	39.4	18.2	28.3	14.1	39.4	34.3	20.2	4.0

		n	湯に浸かることで得られる心身の癒やし効果が高い	伝統的な入浴方法や、入湯客が同じ湯を楽しむ昔ながらの雰囲気が残されている	露天風呂や川湯、野湯など自然を感じながら湯につかることができる	打たせ湯、かぶり湯、立ち湯、飲泉、蒸し風呂、砂風呂など、その温泉ならではの入浴法を楽しめる	疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する療養効果がある	自然そのままでは使えない源泉を快適・安全な湯に変える伝統的な匠・湯守のわざが守られている	入湯客の快適な滞在を支える宿や温泉地全体でのおもてなしの質が高い	開湯伝説や温泉に関する言い伝えや祭事・伝統芸能など温泉の恵みの長い歴史がある	温泉とともに、温泉地特有の自然景観を活かした四季折々の自然の情緒を楽しめる	温泉とともに、古い町並みや石畳、文化財など温泉地ならではの歴史の情緒が残っている	温泉とともに、温泉を使った調理法での料理、湯の花などの特産品がある	その他
全体		2714	64.1	20.2	34.6	17.1	42.4	16.7	23.2	11.1	35.3	30.1	12.4	2.0
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	59	72.9	22.0	33.9	20.3	37.3	23.7	30.5	8.5	28.8	23.7	10.2	0.0
	箱根	49	65.3	32.7	51.0	26.5	51.0	24.5	26.5	12.2	49.0	36.7	14.3	0.0
	有馬	48	52.1	37.5	41.7	31.3	41.7	29.2	33.3	14.6	43.8	47.9	12.5	0.0
	別府	50	72.0	16.0	48.0	12.0	54.0	16.0	34.0	14.0	32.0	24.0	14.0	6.0
	下呂	36	63.9	38.9	30.6	27.8	38.9	16.7	30.6	11.1	27.8	36.1	8.3	0.0
	熱海	33	72.7	24.2	51.5	21.2	42.4	24.2	27.3	9.1	36.4	27.3	12.1	0.0
	道後	30	66.7	50.0	40.0	13.3	46.7	13.3	33.3	20.0	43.3	33.3	13.3	0.0
	伊香保	25	64.0	28.0	52.0	8.0	44.0	20.0	28.0	12.0	44.0	44.0	8.0	0.0
	鬼怒川	24	83.3	25.0	45.8	33.3	50.0	29.2	29.2	20.8	33.3	16.7	8.3	4.2
	由布院・湯布院	22	72.7	27.3	40.9	31.8	40.9	40.9	22.7	18.2	45.5	31.8	13.6	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	29	82.8	27.6	48.3	34.5	44.8	37.9	41.4	37.9	51.7	41.4	31.0	0.0
	草津	32	68.8	31.3	62.5	34.4	62.5	40.6	31.3	31.3	59.4	43.8	21.9	0.0
	熱海	26	76.9	34.6	65.4	26.9	42.3	19.2	38.5	23.1	65.4	46.2	15.4	0.0
	有馬	30	73.3	30.0	50.0	26.7	70.0	30.0	33.3	20.0	40.0	40.0	16.7	3.3
	伊香保	20	55.0	30.0	30.0	10.0	40.0	35.0	20.0	20.0	40.0	25.0	10.0	5.0
	別府	21	71.4	33.3	47.6	28.6	38.1	42.9	28.6	33.3	47.6	42.9	14.3	0.0
	下呂	19	68.4	5.3	57.9	31.6	57.9	31.6	36.8	21.1	52.6	36.8	5.3	5.3
	道後	16	81.3	18.8	37.5	37.5	62.5	25.0	50.0	12.5	37.5	50.0	12.5	0.0
	南紀白浜	14	85.7	28.6	42.9	28.6	35.7	21.4	28.6	7.1	50.0	42.9	14.3	0.0
	鬼怒川	12	83.3	41.7	41.7	16.7	83.3	25.0	25.0	16.7	41.7	33.3	16.7	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	721	65.9	30.0	39.8	20.0	45.5	22.2	25.9	14.4	43.1	39.3	14.3	1.5
	別府	470	66.6	24.9	36.6	24.5	46.8	20.4	28.1	12.1	41.3	41.1	16.8	0.6
	有馬	383	59.3	21.7	29.2	16.4	42.6	16.4	27.7	14.4	37.6	42.8	11.0	2.1
	下呂	236	64.8	19.5	39.4	19.9	43.6	16.1	23.3	15.3	39.0	35.6	11.4	3.0
	箱根	235	68.9	17.0	40.4	14.0	46.0	21.3	28.1	8.5	39.1	31.9	14.9	0.9
	道後	184	63.0	29.9	18.5	15.8	46.7	17.4	27.7	17.9	39.7	45.1	10.9	3.3
	由布院・湯布院	181	70.2	23.2	37.6	20.4	43.6	20.4	33.7	17.7	48.6	39.2	22.1	2.8
	登別	180	70.6	19.4	33.9	20.6	48.9	18.9	21.1	12.8	41.7	30.0	12.2	0.6
	熱海	128	72.7	21.9	41.4	18.8	45.3	18.8	32.0	14.8	40.6	35.2	15.6	2.3
	伊香保	113	68.1	26.5	40.7	17.7	46.0	22.1	17.7	8.8	37.2	42.5	14.2	1.8
行ってみたい温泉地	草津	404	73.5	22.8	38.4	16.6	51.5	18.8	26.0	13.1	39.6	34.7	10.9	2.0
	別府	298	73.5	23.5	40.6	22.1	45.6	16.4	32.6	12.1	40.3	38.3	12.8	1.3
	有馬	177	68.4	29.9	33.9	26.0	53.1	25.4	31.6	19.2	41.2	39.5	11.3	1.1
	由布院・湯布院	160	73.8	24.4	44.4	22.5	47.5	23.8	31.3	11.3	46.9	38.8	15.6	1.9
	箱根	155	71.0	18.7	43.9	18.1	51.6	19.4	31.6	15.5	47.1	38.7	11.6	0.0
	道後	150	64.7	28.7	31.3	18.0	49.3	14.0	33.3	18.0	46.7	54.0	16.0	2.0
	下呂	140	70.0	22.9	45.0	19.3	42.1	19.3	25.7	15.0	44.3	42.1	13.6	3.6
	登別	127	75.6	20.5	43.3	22.0	44.9	16.5	26.0	15.7	44.9	29.9	12.6	0.8
	黒川	83	75.9	20.5	53.0	22.9	48.2	21.7	42.2	14.5	42.2	38.6	15.7	1.2
	城崎	79	59.5	20.3	27.8	15.2	38.0	21.5	30.4	10.1	38.0	43.0	12.7	0.0
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1168	70.2	24.7	41.5	20.5	46.1	18.8	25.9	12.3	38.5	31.3	10.5	1.5
	2～4年前に訪れたことがある	449	65.0	12.7	35.6	17.1	41.6	14.5	21.4	8.9	29.2	28.3	12.5	0.4
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	534	65.0	18.4	32.4	15.0	43.8	18.0	24.7	12.0	39.3	32.0	14.2	3.0
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	440	54.3	18.9	22.3	12.0	36.6	13.4	19.3	9.5	32.7	26.6	11.6	3.2
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	123	35.0	17.1	18.7	10.6	24.4	10.6	12.2	8.1	19.5	30.9	25.2	3.3

図表 2-2-39.行ってみたい温泉地の有無

		n	ある	ない
全 体		5000	48.0	52.0
性別	男性	2475	48.9	51.1
	女性	2525	47.0	53.0
	回答しない	0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	46.4	53.6
	20歳～29歳	625	34.9	65.1
	30歳～39歳	718	40.0	60.0
	40歳～49歳	935	44.5	55.5
	50歳～59歳	852	47.1	52.9
	60歳～69歳	801	56.8	43.2
	70歳以上	832	61.4	38.6
居住地	北海道	211	51.2	48.8
	東北	339	38.1	61.9
	南関東	1492	47.3	52.7
	北関東・甲信	382	46.9	53.1
	北陸	203	55.7	44.3
	東海	590	48.8	51.2
	近畿	812	48.5	51.5
	中国	281	47.7	52.3
	四国	142	42.3	57.7
	九州	548	52.6	47.4
配偶者の有無	いる	2525	57.5	42.5
	いない	2475	38.2	61.8
同居している子どもの有無	いる	1420	53.7	46.3
	いない	3580	45.7	54.3
同居している子どもの年代	未就学児	228	52.6	47.4
	小学生	259	53.7	46.3
	中学生	119	56.3	43.7
	高校生以上	814	53.6	46.4
職業	会社員・団体職員	1848	49.8	50.2
	会社役員・団体役員	71	56.3	43.7
	自営業	183	46.4	53.6
	自由業・士業	113	44.2	55.8
	パート・アルバイト	747	45.1	54.9
	専業主婦・主夫	732	52.5	47.5
	学生・生徒	274	45.6	54.4
	家事手伝い・引退・無職	824	44.8	55.2
	その他	208	41.8	58.2

		n	ある	ない
全 体		5000	48.0	52.0
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	62.5	37.5
	箱根	69	71.0	29.0
	有馬	60	81.7	18.3
	別府	55	83.6	16.4
	下呂	47	80.9	19.1
	熱海	46	71.7	28.3
	道後	37	62.2	37.8
	伊香保	37	70.3	29.7
	鬼怒川	29	79.3	20.7
	由布院・湯布院	27	81.5	18.5
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	82.9	17.1
	草津	38	81.6	18.4
	熱海	30	90.0	10.0
	有馬	30	96.7	3.3
	伊香保	27	70.4	29.6
	別府	25	88.0	12.0
	下呂	21	90.5	9.5
	道後	20	75.0	25.0
	南紀白浜	16	93.8	6.3
	鬼怒川	17	88.2	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	77.1	22.9
	別府	470	78.1	21.9
	有馬	383	75.5	24.5
	下呂	236	75.0	25.0
	箱根	235	75.3	24.7
	道後	184	79.3	20.7
	由布院・湯布院	181	74.0	26.0
	登別	180	78.9	21.1
	熱海	128	79.7	20.3
	伊香保	113	75.2	24.8
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	73.9	26.1
	2～4年前に訪れたことがある	584	66.3	33.7
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	60.6	39.4
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	28.6	71.4
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	7.0	93.0

図表 2-2-40.行ってみたい温泉地（上位 10 カ所）

		n	草津	別府	有馬	由布院・湯布院	箱根	道後	下呂	登別	黒川	城崎
全体		2398	20.0	14.5	8.6	8.1	7.9	7.4	7.2	5.7	4.0	4.0
性別	男性	1211	20.0	15.6	8.8	6.4	8.4	7.3	6.5	5.8	3.4	4.0
	女性	1187	20.1	13.4	8.5	9.9	7.3	7.5	7.8	5.6	4.6	4.0
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	110	28.2	14.5	4.5	1.8	9.1	6.4	10.9	2.7	1.8	2.7
	20歳～29歳	218	23.4	15.1	4.6	3.7	7.8	7.8	9.6	1.4	1.4	6.9
	30歳～39歳	287	20.2	15.0	6.6	7.3	8.4	4.9	9.4	4.9	1.7	4.5
	40歳～49歳	416	20.0	15.9	9.4	8.9	9.4	10.1	7.0	6.0	4.3	3.8
	50歳～59歳	401	20.7	16.5	6.7	11.2	9.5	8.0	8.5	8.2	4.7	2.5
	60歳～69歳	455	18.0	14.1	11.0	10.5	7.0	7.3	6.2	6.4	6.6	4.8
	70歳以上	511	18.0	11.7	11.2	6.5	5.7	6.3	4.1	5.7	3.7	3.1
居住地	北海道	108	15.7	15.7	7.4	4.6	5.6	6.5	2.8	27.8	0.9	0.0
	東北	129	21.7	10.1	1.6	7.0	1.6	5.4	3.9	3.9	0.8	0.8
	南関東	705	23.3	12.5	5.2	7.7	14.6	6.0	6.2	5.2	2.3	2.1
	北関東・甲信	179	33.0	14.5	5.0	6.1	7.3	5.6	4.5	3.9	0.6	1.7
	北陸	113	25.7	8.0	9.7	6.2	4.4	2.7	4.4	2.7	1.8	4.4
	東海	288	22.6	11.5	8.7	6.9	6.3	6.6	20.8	6.3	2.1	2.8
	近畿	394	15.5	10.7	22.6	6.6	3.3	9.4	7.6	3.6	2.0	12.2
	中国	134	11.2	23.9	8.2	8.2	7.5	13.4	4.5	6.0	6.7	3.7
	四国	60	13.3	16.7	8.3	10.0	6.7	26.7	6.7	1.7	8.3	11.7
	九州	288	11.8	27.1	3.5	15.6	5.2	6.3	2.4	4.5	16.3	1.0
配偶者の有無	いる	1452	18.8	14.4	8.5	8.5	6.8	7.7	6.3	6.3	4.3	4.3
	いない	946	21.9	14.7	8.8	7.5	9.5	6.9	8.5	4.7	3.6	3.4
同居している子どもの有無	いる	762	19.3	14.3	9.2	8.4	6.6	6.0	6.4	6.8	3.8	5.2
	いない	1636	20.4	14.6	8.4	7.9	8.5	8.0	7.5	5.1	4.1	3.4
同居している子どもの年代	未就学児	120	17.5	10.0	5.0	6.7	9.2	5.0	8.3	4.2	3.3	5.8
	小学生	139	20.1	16.5	7.2	10.8	6.5	8.6	4.3	7.2	4.3	4.3
	中学生	67	11.9	7.5	9.0	4.5	4.5	7.5	9.0	3.0	6.0	6.0
	高校生以上	436	20.6	15.8	11.0	8.7	6.2	5.3	6.2	8.0	3.4	5.3
職業	会社員・団体職員	921	22.1	15.3	7.6	9.1	9.0	6.9	8.7	6.3	3.8	4.2
	会社役員・団体役員	40	20.0	20.0	5.0	5.0	10.0	5.0	0.0	2.5	2.5	5.0
	自営業	85	15.3	14.1	10.6	5.9	4.7	9.4	5.9	4.7	3.5	3.5
	自由業・士業	50	14.0	4.0	16.0	4.0	14.0	10.0	6.0	2.0	4.0	0.0
	パート・アルバイト	337	17.8	15.7	6.8	6.8	8.3	9.5	6.8	5.6	4.2	3.6
	専業主婦・主夫	384	15.9	12.2	11.5	11.5	4.4	7.3	6.3	5.5	6.0	3.9
	学生・生徒	125	28.0	17.6	4.8	1.6	9.6	6.4	11.2	2.4	2.4	4.8
	家事手伝い・引退・無職	369	20.6	13.3	9.8	6.5	7.3	6.8	5.1	6.5	2.7	4.6
	その他	87	18.4	16.1	10.3	9.2	8.0	5.7	4.6	5.7	5.7	1.1

		n	草津	別府	有馬	由布院・湯布院	箱根	道後	下呂	登別	黒川	城崎
全体		2398	20.0	14.5	8.6	8.1	7.9	7.4	7.2	5.7	4.0	4.0
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	50	46.0	20.0	4.0	4.0	8.0	4.0	4.0	2.0	0.0	2.0
	箱根	49	14.3	10.2	2.0	8.2	22.4	8.2	2.0	8.2	6.1	4.1
	有馬	49	20.4	18.4	32.7	12.2	8.2	18.4	6.1	4.1	0.0	16.3
	別府	46	21.7	30.4	2.2	8.7	6.5	6.5	2.2	2.2	13.0	4.3
	下呂	38	21.1	10.5	15.8	7.9	2.6	5.3	28.9	2.6	2.6	0.0
	熱海	33	18.2	9.1	6.1	6.1	24.2	6.1	3.0	6.1	3.0	3.0
	道後	23	4.3	8.7	4.3	0.0	4.3	26.1	0.0	17.4	0.0	4.3
	伊香保	26	30.8	3.8	7.7	11.5	3.8	3.8	7.7	0.0	0.0	0.0
	鬼怒川	23	26.1	21.7	21.7	8.7	8.7	4.3	8.7	4.3	0.0	8.7
	由布院・湯布院	22	4.5	18.2	0.0	36.4	4.5	4.5	9.1	9.1	13.6	9.1
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	34	17.6	14.7	8.8	8.8	14.7	8.8	5.9	8.8	0.0	2.9
	草津	31	22.6	9.7	9.7	9.7	16.1	9.7	6.5	12.9	0.0	0.0
	熱海	27	7.4	11.1	7.4	7.4	7.4	3.7	7.4	7.4	7.4	0.0
	有馬	29	20.7	6.9	10.3	10.3	13.8	3.4	6.9	6.9	0.0	10.3
	伊香保	19	21.1	5.3	0.0	10.5	10.5	10.5	0.0	5.3	0.0	5.3
	別府	22	0.0	40.9	9.1	13.6	9.1	0.0	0.0	4.5	9.1	4.5
	下呂	19	0.0	10.5	15.8	5.3	15.8	0.0	31.6	5.3	5.3	0.0
	道後	15	26.7	26.7	0.0	6.7	13.3	26.7	0.0	0.0	13.3	0.0
	南紀白浜	15	13.3	20.0	33.3	6.7	0.0	0.0	13.3	20.0	6.7	0.0
	鬼怒川	15	26.7	0.0	0.0	6.7	6.7	0.0	6.7	0.0	0.0	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	556	43.7	20.0	9.0	8.6	8.8	8.8	7.9	6.8	3.6	4.1
	別府	367	22.3	38.1	7.9	10.1	8.2	9.3	5.4	5.2	7.6	3.5
	有馬	289	20.4	13.1	35.6	7.6	4.8	8.7	9.3	5.2	3.5	9.3
	下呂	177	19.8	13.6	11.3	4.5	4.5	7.9	39.5	6.8	2.3	6.8
	箱根	177	18.6	16.4	4.0	11.3	47.5	7.3	7.9	5.1	1.7	1.7
	道後	146	20.5	18.5	9.6	4.8	7.5	50.0	8.9	5.5	4.1	7.5
	由布院・湯布院	134	14.2	12.7	6.7	35.8	11.9	8.2	8.2	11.9	13.4	2.2
	登別	142	18.3	16.2	9.9	8.5	8.5	6.3	4.9	40.1	2.8	0.7
	熱海	102	22.5	25.5	7.8	12.7	26.5	5.9	6.9	6.9	0.0	2.0
	伊香保	85	36.5	11.8	7.1	8.2	10.6	5.9	4.7	4.7	3.5	1.2
行ってみたい温泉地	草津	480	100.0	13.5	8.1	5.6	7.3	6.9	6.3	4.2	1.3	2.1
	別府	348	18.7	100.0	6.3	6.9	6.0	6.3	6.9	5.5	5.5	2.9
	有馬	207	18.8	10.6	100.0	4.8	6.8	7.7	5.8	4.8	0.5	6.8
	由布院・湯布院	194	13.9	12.4	5.2	100.0	8.2	6.2	1.5	8.2	13.4	2.1
	箱根	189	18.5	11.1	7.4	8.5	100.0	4.2	4.8	5.3	1.1	1.6
	道後	177	18.6	12.4	9.0	6.8	4.5	100.0	6.8	3.4	5.6	5.1
	下呂	172	17.4	14.0	7.0	1.7	5.2	7.0	100.0	2.3	1.7	4.7
	登別	136	14.7	14.0	7.4	11.8	7.4	4.4	2.9	100.0	2.2	0.7
	黒川	96	6.3	19.8	1.0	27.1	2.1	10.4	3.1	3.1	100.0	3.1
	城崎	95	10.5	10.5	14.7	4.2	3.2	9.5	8.4	1.1	3.2	100.0
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1169	17.5	14.2	7.7	8.0	6.8	7.3	6.5	5.8	4.4	3.7
	2～4年前に訪れたことがある	387	23.5	14.0	8.3	9.0	8.3	6.7	7.2	7.0	3.4	5.7
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	471	22.3	18.0	9.8	7.0	8.7	9.3	7.6	6.2	3.8	3.4
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	301	19.6	11.3	11.6	10.3	10.0	6.0	9.0	3.7	4.3	3.7
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	70	28.6	12.9	5.7	2.9	8.6	5.7	7.1	1.4	1.4	4.3

図表 2-2-41.行ってみたい理由

		n	温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などが期待できる	特有の成分や入浴法など、その温泉ならではの効用・効能が期待できる	大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設がある	源泉かけながしの湯が楽しめる	湯治に向いている	美しい自然に囲まれた環境が楽しめる	古い町並みや建物、神社仏閣など歴史的な情緒が楽しめる	旅館の料理やおもてなしが魅力的である	その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的である	その地域で手に入る工芸品や特産品が魅力的である	付近の名所・旧跡、自然の景勝などが魅力的である	その地域ならではの伝統芸能やお祭りなどが魅力的である	その他
全体		2398	64.6	31.1	33.2	26.9	14.6	42.1	26.4	29.1	20.6	9.8	26.5	5.6	1.8
性別	男性	1211	64.2	30.6	33.3	27.6	16.2	40.5	26.3	26.7	18.5	8.6	24.7	5.0	2.1
	女性	1187	65.0	31.7	33.0	26.2	13.0	43.7	26.5	31.7	22.7	11.0	28.4	6.1	1.5
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	110	65.5	33.6	36.4	20.0	9.1	42.7	34.5	22.7	17.3	16.4	26.4	13.6	1.8
	20歳～29歳	218	55.0	29.4	31.7	22.0	14.7	35.3	34.9	28.0	31.2	17.0	26.6	9.6	0.5
	30歳～39歳	287	62.0	33.1	30.3	23.0	13.2	33.8	23.7	29.3	26.1	9.1	21.3	5.6	2.4
	40歳～49歳	416	65.4	29.3	32.0	25.7	16.1	37.7	29.6	28.1	24.5	9.9	27.4	5.8	1.0
	50歳～59歳	401	67.3	32.7	31.4	26.7	15.2	42.6	27.9	29.7	20.7	10.0	25.4	6.0	1.2
	60歳～69歳	455	67.0	30.1	34.5	28.8	16.3	44.4	24.8	30.1	16.9	8.8	25.9	5.3	1.8
	70歳以上	511	64.8	31.3	35.8	32.1	13.3	50.5	20.0	30.5	13.7	6.5	30.1	2.0	3.1
居住地	北海道	108	63.9	25.9	37.0	29.6	16.7	38.9	17.6	24.1	19.4	7.4	18.5	6.5	1.9
	東北	129	65.9	33.3	45.7	34.1	18.6	41.1	23.3	31.8	20.9	7.0	22.5	3.1	1.6
	南関東	705	65.5	31.3	32.1	24.3	14.9	46.4	25.1	27.9	20.1	8.9	26.7	4.5	1.7
	北関東・甲信	179	62.6	34.1	29.1	31.8	14.5	46.9	29.6	32.4	25.7	8.9	34.1	3.4	1.1
	北陸	113	65.5	30.1	30.1	27.4	11.5	39.8	25.7	29.2	21.2	11.5	31.0	7.1	1.8
	東海	288	63.5	33.3	30.2	25.3	13.2	41.7	29.5	29.2	18.8	9.0	26.7	6.6	1.4
	近畿	394	62.2	29.4	33.2	25.1	10.7	39.6	28.2	28.4	18.8	10.2	25.4	7.6	1.8
	中国	134	64.2	29.1	30.6	20.9	18.7	38.1	27.6	31.3	17.2	9.7	27.6	4.5	3.0
	四国	60	56.7	35.0	31.7	23.3	8.3	38.3	31.7	31.7	16.7	13.3	33.3	3.3	8.3
	九州	288	68.8	30.2	36.8	33.3	18.8	37.5	25.0	30.2	25.3	13.5	24.0	6.9	1.0
配偶者の有無	いる	1452	64.6	30.4	32.4	27.4	14.5	41.1	24.2	28.6	18.5	8.7	25.4	4.5	1.7
	いない	946	64.5	32.2	34.2	26.1	14.7	43.6	29.7	30.0	23.9	11.5	28.2	7.3	1.9
同居している子どもの有無	いる	762	62.9	28.6	31.1	24.3	15.7	40.2	25.9	29.1	19.8	9.3	25.9	5.6	0.9
	いない	1636	65.3	32.3	34.1	28.1	14.1	43.0	26.6	29.2	21.0	10.0	26.8	5.6	2.2
同居している子どもの年代	未就学児	120	63.3	32.5	26.7	21.7	17.5	35.8	28.3	32.5	30.8	14.2	21.7	9.2	0.8
	小学生	139	51.8	21.6	28.1	21.6	10.1	31.7	26.6	20.1	16.5	4.3	23.0	2.2	0.0
	中学生	67	61.2	28.4	26.9	23.9	19.4	31.3	28.4	20.9	17.9	13.4	25.4	11.9	1.5
	高校生以上	436	66.5	29.8	33.9	25.9	16.5	45.4	24.5	32.3	18.1	8.9	28.0	4.8	1.1
職業	会社員・団体職員	921	66.1	31.6	31.2	24.5	15.4	36.5	26.6	26.4	22.4	8.1	22.8	5.3	0.9
	会社役員・団体役員	40	52.5	30.0	20.0	35.0	20.0	40.0	27.5	22.5	17.5	10.0	15.0	5.0	5.0
	自営業	85	61.2	29.4	32.9	27.1	14.1	42.4	32.9	31.8	12.9	10.6	24.7	7.1	2.4
	自由業・士業	50	66.0	36.0	42.0	44.0	14.0	54.0	34.0	32.0	30.0	14.0	38.0	10.0	2.0
	パート・アルバイト	337	61.1	29.7	34.1	25.8	16.3	40.4	31.5	32.6	22.0	11.6	28.2	5.9	1.5
	専業主婦・主夫	384	67.4	31.3	34.6	26.3	13.5	49.5	22.7	34.4	21.1	10.9	32.8	4.2	1.8
	学生・生徒	125	60.0	28.8	34.4	17.6	7.2	44.8	37.6	23.2	18.4	15.2	28.0	12.0	1.6
	家事手伝い・引退・無職	369	65.0	29.3	35.8	32.0	13.3	45.3	19.5	29.0	15.4	8.4	28.7	3.3	2.4
	その他	87	60.9	41.4	32.2	36.8	18.4	51.7	21.8	29.9	23.0	10.3	20.7	10.3	8.0

		n	温泉ならではの癒やし、疲労回復、リラックス効果などが期待できる	特有の成分や入浴法など、その温泉ならではの効用・効能が期待できる	大浴場や露天風呂など魅力的な入浴施設がある	源泉かけながしの湯が楽しめる	湯治に向いている	美しい自然に囲まれた環境が楽しめる	古い町並みや建物、神社仏閣など歴史的な情緒が楽しめる	旅館の料理やおもてなしが魅力的である	その地域で味わえる料理やお菓子などが魅力的である	その地域で手に入る工芸品や特産品が魅力的である	付近の名所・旧跡、自然の景勝などが魅力的である	その地域ならではの伝統芸能やお祭りなどが魅力的である	その他
全体		2398	64.6	31.1	33.2	26.9	14.6	42.1	26.4	29.1	20.6	9.8	26.5	5.6	1.8
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	50	72.0	34.0	36.0	32.0	18.0	44.0	32.0	40.0	28.0	6.0	24.0	6.0	0.0
	箱根	49	67.3	40.8	42.9	36.7	12.2	44.9	26.5	28.6	24.5	16.3	42.9	2.0	2.0
	有馬	49	67.3	44.9	34.7	32.7	10.2	46.9	36.7	34.7	22.4	18.4	32.7	6.1	0.0
	別府	46	63.0	41.3	47.8	45.7	26.1	28.3	30.4	34.8	37.0	13.0	23.9	13.0	0.0
	下呂	38	65.8	39.5	31.6	18.4	15.8	28.9	39.5	15.8	18.4	10.5	26.3	7.9	2.6
	熱海	33	69.7	39.4	48.5	27.3	9.1	33.3	21.2	24.2	12.1	12.1	18.2	0.0	0.0
	道後	23	65.2	30.4	30.4	17.4	17.4	52.2	39.1	26.1	17.4	13.0	39.1	4.3	8.7
	伊香保	26	61.5	23.1	26.9	23.1	15.4	34.6	42.3	34.6	19.2	7.7	23.1	3.8	0.0
	鬼怒川	23	78.3	52.2	30.4	34.8	17.4	52.2	39.1	26.1	26.1	17.4	30.4	13.0	0.0
	由布院・湯布院	22	72.7	40.9	50.0	40.9	9.1	50.0	36.4	40.9	54.5	22.7	45.5	9.1	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	34	61.8	47.1	41.2	41.2	11.8	50.0	44.1	35.3	44.1	26.5	41.2	14.7	0.0
	草津	31	74.2	58.1	48.4	58.1	29.0	48.4	38.7	41.9	41.9	25.8	41.9	16.1	0.0
	熱海	27	85.2	48.1	40.7	33.3	11.1	63.0	33.3	59.3	37.0	29.6	40.7	14.8	0.0
	有馬	29	72.4	55.2	41.4	51.7	17.2	48.3	37.9	41.4	31.0	24.1	34.5	6.9	0.0
	伊香保	19	57.9	31.6	26.3	31.6	21.1	47.4	36.8	26.3	31.6	15.8	36.8	0.0	5.3
	別府	22	68.2	31.8	45.5	36.4	27.3	31.8	27.3	31.8	27.3	22.7	36.4	13.6	0.0
	下呂	19	68.4	36.8	47.4	36.8	26.3	36.8	47.4	68.4	36.8	21.1	21.1	5.3	0.0
	道後	15	86.7	33.3	40.0	53.3	26.7	40.0	40.0	33.3	26.7	20.0	53.3	13.3	0.0
	南紀白浜	15	86.7	33.3	60.0	66.7	13.3	60.0	33.3	46.7	13.3	6.7	46.7	0.0	0.0
	鬼怒川	15	86.7	46.7	53.3	26.7	20.0	33.3	13.3	46.7	26.7	13.3	40.0	6.7	0.0
名湯だと思う温泉地	草津	556	69.2	37.4	37.8	30.8	16.4	50.2	31.7	29.9	24.8	10.8	31.7	5.2	1.6
	別府	367	63.8	36.0	37.1	28.6	15.5	46.9	28.9	33.2	24.8	14.2	34.6	5.2	0.8
	有馬	289	67.1	31.1	31.5	26.3	12.8	39.8	29.4	27.3	20.1	11.1	27.7	6.2	2.4
	下呂	177	65.0	31.1	33.9	23.7	12.4	46.9	37.3	35.6	20.9	13.6	33.3	9.0	1.1
	箱根	177	71.8	23.7	36.7	28.2	13.0	44.6	29.4	34.5	21.5	7.9	33.3	2.8	1.7
	道後	146	66.4	33.6	28.8	23.3	12.3	38.4	37.0	34.2	18.5	13.0	34.9	5.5	3.4
	由布院・湯布院	134	71.6	38.8	40.3	32.8	18.7	53.7	35.8	38.1	29.1	14.2	36.6	9.0	0.7
	登別	142	59.9	28.9	39.4	28.9	13.4	47.9	25.4	21.1	15.5	9.9	28.9	2.8	1.4
	熱海	102	71.6	30.4	36.3	28.4	12.7	55.9	29.4	34.3	24.5	15.7	34.3	5.9	2.9
	伊香保	85	68.2	34.1	28.2	24.7	15.3	45.9	34.1	24.7	22.4	7.1	25.9	5.9	0.0
行ってみたい温泉地	草津	480	70.8	41.7	30.6	30.6	17.5	45.0	34.0	28.1	24.0	7.1	29.8	5.8	1.0
	別府	348	69.8	38.2	33.9	29.6	16.1	43.4	31.6	31.9	23.0	10.6	30.7	5.2	1.1
	有馬	207	68.6	36.2	35.7	29.5	13.5	40.6	29.5	30.9	19.3	11.6	28.5	5.8	1.9
	由布院・湯布院	194	72.7	32.0	37.1	23.7	11.3	54.6	32.0	35.1	32.0	11.9	35.1	3.6	1.0
	箱根	189	70.9	21.7	38.6	24.9	13.2	47.6	34.4	38.6	23.8	13.2	36.0	5.3	0.5
	道後	177	63.8	29.4	32.8	24.3	14.7	40.1	50.3	33.3	22.0	13.6	45.2	5.1	1.7
	下呂	172	72.1	32.0	29.7	22.7	10.5	47.1	30.8	34.9	18.6	8.1	32.0	6.4	1.2
	登別	136	69.1	37.5	45.6	30.9	16.2	52.9	23.5	22.8	29.4	12.5	35.3	4.4	0.7
	黒川	96	65.6	38.5	40.6	41.7	22.9	46.9	31.3	46.9	25.0	14.6	29.2	6.3	1.0
	城崎	95	58.9	31.6	24.2	20.0	12.6	41.1	30.5	35.8	31.6	11.6	27.4	5.3	2.1
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1169	68.4	35.8	39.9	32.2	14.5	43.3	28.1	31.8	22.9	11.5	26.5	6.6	1.3
	2～4年前に訪れたことがある	387	65.9	27.4	30.7	26.1	13.2	41.1	22.0	27.9	17.8	7.8	24.8	4.4	1.3
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	471	63.7	29.1	29.5	26.1	18.3	46.5	28.9	31.0	21.4	8.5	28.7	4.5	2.1
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	301	55.1	22.6	17.9	12.0	12.0	38.2	22.9	19.3	15.3	8.0	27.2	3.7	3.7
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	70	38.6	24.3	24.3	12.9	11.4	14.3	20.0	21.4	14.3	8.6	18.6	11.4	2.9

図表 2-2-42. 日本ならではの温泉文化だと思うもの

		n	「温泉の湯にゆっくり浸かり、心身の癒やしを得ることを楽しむ」文化	欧米のような着衣基本ではなく「みんな裸で同じ温泉の湯を楽しむ」文化	露天風呂や川湯、野湯など「自然を感じながら湯に浸かることを楽しむ」文化	打たせ湯、かぶり湯、立ち湯、飲泉、蒸し風呂、砂風呂など「土地土地の様々な入浴法を楽しむ」文化	疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する「温泉による伝統的な療養のあり方を活用する」文化	100度近い高温、高濃度の化学成分、湯量の極端な増減など必ずしもそのままでは使えない「自然そのままの源泉を快適・安全な湯に変える伝統的な匠のわざ」の文化	日帰り・一泊二日から長期逗留まで「多様な入湯客の快適な滞在を支える宿や温泉地全体でのおもてなし」の文化	鳥獣や高僧・武将などによる発見伝説、温泉に関する神社仏閣へ祭事・伝統芸能など温泉の恩恵や温泉にまつわる信仰や温泉の恩み長い歴史を感じさせる伝承や信仰、芸能」の文化	深い山間や川、海岸など「温泉とともに、温泉地ならではの四季折々の自然の情緒を楽しむ」文化	古い町並みや石畳、文化財など「温泉とともに、温泉地ならではの歴史的な情緒を楽しむ」文化	温泉を使った調理法や湯の花など「温泉地ならではの料理、特産品を楽しむ」文化	その他
全体		5000	65.1	11.0	34.9	23.7	38.4	8.5	21.5	9.5	29.4	30.2	27.1	1.6
性別	男性	2475	63.2	13.3	35.2	22.1	36.0	8.4	21.5	10.1	28.5	26.9	25.3	2.1
	女性	2525	67.0	8.8	34.5	25.3	40.8	8.6	21.5	8.9	30.4	33.3	28.8	1.1
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	57.0	13.5	32.9	17.7	26.6	11.4	20.3	10.5	23.6	23.6	28.3	2.1
	20歳～29歳	625	46.9	11.5	23.8	18.4	24.3	10.6	16.3	10.2	17.1	20.8	37.8	1.9
	30歳～39歳	718	57.2	11.8	30.5	25.3	30.8	9.9	17.7	12.4	23.5	25.2	31.5	1.5
	40歳～49歳	935	62.0	9.1	31.4	21.2	38.7	8.2	18.3	9.3	25.0	30.5	30.9	1.5
	50歳～59歳	852	68.4	11.5	35.3	22.8	40.6	9.0	20.1	8.6	30.0	31.1	25.8	2.0
	60歳～69歳	801	75.9	9.7	42.3	25.7	46.2	6.7	23.7	9.0	36.2	35.1	19.7	1.4
	70歳以上	832	77.4	12.1	43.6	29.9	48.9	6.4	32.0	7.8	43.3	37.4	18.9	1.1
居住地	北海道	211	69.7	8.5	33.2	21.3	31.8	7.1	20.4	7.1	23.7	23.7	26.5	2.8
	東北	339	61.7	10.6	29.2	22.1	36.6	7.7	23.0	5.6	27.7	23.3	31.6	1.2
	南関東	1492	64.3	10.8	36.5	24.3	38.2	9.2	20.5	11.5	28.5	29.4	27.1	1.5
	北関東・甲信	382	64.1	10.5	34.6	21.5	35.9	8.9	22.0	11.8	31.7	35.9	29.6	2.1
	北陸	203	72.9	10.8	38.4	22.7	44.3	8.4	25.6	8.9	33.0	36.0	26.1	0.5
	東海	590	63.6	12.2	32.0	22.9	38.5	8.0	19.0	9.3	28.6	32.7	25.8	1.9
	近畿	812	65.0	10.2	34.6	21.4	38.3	7.4	20.4	8.4	29.4	29.6	23.3	2.0
	中国	281	68.7	11.4	34.9	24.6	40.6	7.5	22.1	8.9	32.4	32.7	27.0	1.4
	四国	142	57.7	16.2	33.8	28.2	46.5	9.9	21.1	8.5	28.2	30.3	26.8	0.7
	九州	548	67.0	11.7	37.0	28.8	39.2	9.7	25.9	8.6	32.1	29.7	30.1	0.9
配偶者の有無	いる	2525	69.9	11.1	37.7	25.2	42.3	8.0	22.7	8.6	32.6	32.7	22.6	1.0
	いない	2475	60.1	10.9	32.0	22.2	34.5	9.1	20.2	10.4	26.3	27.6	31.6	2.2
同居している子どもの有無	いる	1420	66.8	10.4	34.4	23.5	38.6	9.1	20.8	9.3	28.2	29.8	23.7	0.9
	いない	3580	64.4	11.3	35.1	23.8	38.4	8.3	21.8	9.6	29.9	30.3	28.4	1.8
同居している子どもの年代	未就学児	228	58.3	12.3	28.5	27.2	28.9	14.0	14.0	11.8	18.9	21.5	29.8	0.0
	小学生	259	55.6	11.2	30.1	20.1	28.6	8.1	15.1	9.7	22.0	26.6	25.9	0.4
	中学生	119	63.9	8.4	27.7	18.5	32.8	13.4	18.5	12.6	30.3	27.7	26.1	0.0
	高校生以上	814	73.1	10.0	38.3	24.3	45.3	7.4	24.9	8.0	32.4	33.4	21.0	1.5
職業	会社員・団体職員	1848	61.4	11.5	32.7	22.2	35.0	9.3	18.7	10.3	25.8	26.1	25.8	1.5
	会社役員・団体役員	71	54.9	8.5	35.2	15.5	36.6	5.6	23.9	7.0	26.8	22.5	31.0	0.0
	自営業	183	66.1	14.2	39.3	16.9	41.5	9.3	22.4	11.5	33.9	33.3	26.2	0.5
	自由業・士業	113	66.4	20.4	38.9	36.3	48.7	15.9	24.8	15.9	34.5	38.1	36.3	0.9
	パート・アルバイト	747	66.0	9.4	34.4	23.6	38.4	7.8	21.2	8.7	29.7	30.4	27.7	1.2
	専業主婦・主夫	732	74.6	8.5	38.0	27.3	47.4	7.4	24.5	6.7	35.5	38.3	26.6	1.0
	学生・生徒	274	59.1	12.4	32.5	17.9	27.0	10.2	21.5	10.9	23.7	27.0	27.7	1.8
	家事手伝い・引退・無職	824	68.8	11.4	37.1	26.0	40.4	6.7	24.0	9.0	32.3	33.0	24.2	2.8
	その他	208	56.3	11.1	32.2	26.0	36.5	9.6	23.6	10.6	29.8	26.0	42.8	2.9

		n	「温泉の湯にゆっくり浸かり、心身の癒やしを得ることを楽しむ」文化	欧米のような着衣基本ではなく「みんな裸で同じ温泉の湯を楽しむ」文化	露天風呂や川湯、野湯など「自然を感じながら湯に浸かることを楽しむ」文化	打たせ湯、かぶり湯、立ち湯、飲泉、蒸し風呂、砂風呂など「土地土地の様々な入浴法を楽しむ」文化	疲労回復、冷え性、筋肉痛、神経痛、胃腸病、高血圧など様々な不調に対する「温泉による伝統的な癒養のあり方を活用する」文化	100度近い高温、高濃度の化学成分、湯量の極端な増減など必ずしもそのままでは使えない「自然そのままの源泉を快適・安全な湯に変える伝統的な匠のわざ」の文化	日帰り・一泊二日から長期逗留まで「多様な入湯客の快適な滞在を支える宿や温泉地全体でのおもてなし」の文化	鳥獣や高僧・武将などによる発見伝説、温泉に関する神仏を祀る社など神仏と温泉の恵みの長い歴史を感じさせる伝承や信仰、芸能」の文化	深い山間や川、海岸などに、温泉地ならではの四季折々の自然の情緒を楽しむ」文化	古い町並みや石畳、文化財など「温泉とともに、温泉地ならではの歴史的な情緒を楽しむ」文化	「温泉を使った調理法や湯の花など「温泉地ならではの料理、特産品を楽しむ」文化	その他
全体		5000	65.1	11.0	34.9	23.7	38.4	8.5	21.5	9.5	29.4	30.2	27.1	1.6
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	72.5	16.3	42.5	21.3	40.0	15.0	22.5	10.0	31.3	22.5	13.8	2.5
	箱根	69	75.4	21.7	44.9	42.0	47.8	20.3	29.0	21.7	33.3	33.3	17.4	0.0
	有馬	60	71.7	21.7	43.3	38.3	40.0	8.3	38.3	10.0	41.7	50.0	18.3	0.0
	別府	55	80.0	18.2	49.1	34.5	52.7	14.5	36.4	10.9	43.6	40.0	23.6	0.0
	下呂	47	72.3	27.7	38.3	25.5	40.4	12.8	23.4	17.0	31.9	44.7	14.9	0.0
	熱海	46	80.4	13.0	52.2	32.6	43.5	10.9	17.4	13.0	37.0	32.6	19.6	0.0
	道後	37	78.4	16.2	45.9	37.8	59.5	27.0	29.7	24.3	35.1	48.6	35.1	0.0
	伊香保	37	70.3	18.9	48.6	21.6	43.2	13.5	29.7	10.8	43.2	51.4	27.0	2.7
	鬼怒川	29	79.3	20.7	55.2	20.7	51.7	10.3	34.5	34.5	37.9	34.5	17.2	0.0
	由布院・湯布院	27	85.2	33.3	55.6	55.6	40.7	18.5	25.9	18.5	48.1	40.7	40.7	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	85.4	17.1	56.1	43.9	51.2	24.4	26.8	24.4	39.0	53.7	31.7	0.0
	草津	38	81.6	34.2	68.4	57.9	60.5	23.7	34.2	28.9	55.3	57.9	26.3	0.0
	熱海	30	80.0	36.7	63.3	50.0	56.7	33.3	33.3	26.7	56.7	50.0	36.7	0.0
	有馬	30	73.3	26.7	66.7	46.7	60.0	33.3	30.0	23.3	50.0	50.0	33.3	0.0
	伊香保	27	51.9	22.2	51.9	25.9	48.1	18.5	22.2	14.8	33.3	37.0	11.1	3.7
	別府	25	80.0	28.0	52.0	32.0	44.0	12.0	44.0	20.0	40.0	40.0	32.0	0.0
	下呂	21	66.7	33.3	33.3	57.1	61.9	14.3	42.9	28.6	47.6	42.9	23.8	0.0
	道後	20	75.0	15.0	40.0	45.0	55.0	25.0	35.0	20.0	45.0	35.0	20.0	0.0
	南紀白浜	16	81.3	37.5	68.8	43.8	43.8	18.8	43.8	12.5	62.5	50.0	18.8	0.0
	鬼怒川	17	88.2	29.4	52.9	23.5	58.8	23.5	17.6	23.5	29.4	47.1	29.4	5.9
名湯だと思う温泉地	草津	721	78.8	18.0	54.2	37.4	53.3	13.6	31.3	16.6	45.5	47.4	25.4	0.1
	別府	470	78.3	17.9	54.0	38.1	53.6	14.0	37.0	13.8	46.8	46.6	28.5	0.0
	有馬	383	75.7	13.6	48.3	31.1	52.2	12.5	31.3	12.0	39.9	41.3	20.9	0.8
	下呂	236	75.4	17.4	46.6	28.8	52.5	11.0	27.1	16.5	43.2	43.2	22.0	0.4
	箱根	235	80.0	14.0	47.7	30.6	47.7	11.1	28.9	10.6	37.0	40.9	22.1	1.3
	道後	184	77.7	13.0	48.4	36.4	62.0	11.4	31.0	17.4	44.0	51.1	25.0	1.1
	由布院・湯布院	181	83.4	17.1	51.4	40.3	58.0	17.7	30.4	16.6	52.5	51.4	33.1	1.1
	登別	180	78.9	14.4	43.9	35.6	51.1	10.0	33.9	10.0	38.9	36.7	15.6	0.0
	熱海	128	83.6	19.5	56.3	42.2	56.3	17.2	32.8	14.8	48.4	45.3	27.3	1.6
	伊香保	113	74.3	16.8	44.2	35.4	46.9	15.9	26.5	14.2	38.9	48.7	22.1	0.9
行ってみたい温泉地	草津	480	83.1	15.4	55.2	36.3	60.2	12.5	32.7	15.0	43.1	49.4	25.4	0.2
	別府	348	82.5	15.5	57.5	39.7	58.6	13.5	31.0	12.6	49.1	46.6	28.7	0.0
	有馬	207	83.1	14.5	52.7	38.2	58.5	13.0	36.2	14.5	42.5	44.9	18.8	0.0
	由布院・湯布院	194	84.0	17.5	58.8	38.7	55.7	13.4	34.5	16.0	55.2	51.5	31.4	0.0
	箱根	189	85.7	13.8	52.9	36.0	56.1	12.7	33.9	14.8	50.8	49.7	25.9	0.0
	道後	177	80.8	12.4	54.2	34.5	56.5	11.9	31.1	16.9	42.9	53.1	27.1	0.0
	下呂	172	78.5	16.9	53.5	31.4	52.3	11.0	29.7	13.4	51.2	48.3	27.3	0.0
	登別	136	79.4	14.7	52.2	38.2	52.9	15.4	40.4	16.9	44.1	44.9	23.5	0.0
	黒川	96	84.4	21.9	64.6	52.1	47.9	25.0	42.7	16.7	51.0	49.0	27.1	0.0
	城崎	95	75.8	16.8	49.5	32.6	51.6	8.4	35.8	17.9	46.3	46.3	32.6	0.0
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	79.0	16.9	47.0	31.9	46.8	13.2	29.5	13.7	38.4	36.7	21.2	0.3
	2～4年前に訪れたことがある	584	75.9	10.8	36.0	27.4	43.3	9.1	27.4	8.9	32.2	31.8	21.7	0.2
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	75.4	11.7	44.4	28.1	47.6	9.4	26.9	12.1	36.9	35.3	23.9	0.5
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	61.5	7.4	31.3	21.1	39.4	6.3	16.6	7.2	28.5	31.5	22.5	2.0
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	32.8	5.1	11.4	8.1	14.3	2.4	6.5	3.6	8.8	13.6	46.6	4.9

図表 2-2-43.温泉への意見

A：旅行に行く時、お風呂が温泉である方がうれしい

B：旅行に行く時、お風呂が温泉かどうかを気にしたことはない

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全 体		5000	34.3	27.0	23.4	8.2	7.2
性別	男性	2475	32.5	27.2	26.8	7.3	6.1
	女性	2525	36.0	26.9	20.0	9.0	8.2
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	24.9	24.1	30.4	12.7	8.0
	20歳～29歳	625	17.1	24.8	34.4	12.5	11.2
	30歳～39歳	718	26.2	25.8	28.4	8.9	10.7
	40歳～49歳	935	32.4	27.3	25.0	8.0	7.3
	50歳～59歳	852	35.3	28.3	23.2	7.0	6.1
	60歳～69歳	801	42.2	28.0	17.0	6.9	6.0
	70歳以上	832	50.1	28.2	13.1	5.5	3.0
居住地	北海道	211	38.9	24.6	21.8	5.7	9.0
	東北	339	31.9	21.5	28.3	10.9	7.4
	南関東	1492	34.2	27.3	23.5	8.0	7.0
	北関東・甲信	382	34.8	26.2	25.9	6.3	6.8
	北陸	203	42.4	28.1	16.3	7.9	5.4
	東海	590	34.1	26.4	22.5	9.0	8.0
	近畿	812	33.6	27.8	22.4	8.7	7.4
	中国	281	29.2	32.4	23.8	7.1	7.5
	四国	142	25.4	24.6	26.8	9.9	13.4
	九州	548	36.9	28.3	22.6	7.5	4.7
配偶者の有無	いる	2525	42.9	29.2	17.5	6.4	4.0
	いない	2475	25.4	24.8	29.4	9.9	10.4
同居している子どもの有無	いる	1420	39.1	28.8	20.8	7.7	3.7
	いない	3580	32.3	26.3	24.4	8.4	8.6
同居している子どもの年代	未就学児	228	35.5	29.8	20.6	9.6	4.4
	小学生	259	33.6	28.6	27.0	8.1	2.7
	中学生	119	37.8	33.6	21.8	5.0	1.7
	高校生以上	814	42.0	27.9	18.7	7.4	4.1
職業	会社員・団体職員	1848	31.9	29.5	24.4	7.6	6.7
	会社役員・団体役員	71	36.6	28.2	18.3	14.1	2.8
	自営業	183	33.9	20.8	26.2	12.0	7.1
	自由業・士業	113	32.7	16.8	31.0	8.0	11.5
	パート・アルバイト	747	34.0	27.2	23.2	8.0	7.6
	専業主婦・主夫	732	42.9	28.3	16.5	8.6	3.7
	学生・生徒	274	21.9	27.4	29.6	13.5	7.7
	家事手伝い・引退・無職	824	36.4	24.9	22.2	6.8	9.7
	その他	208	34.1	19.2	30.3	5.3	11.1

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	34.3	27.0	23.4	8.2	7.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	47.5	36.3	10.0	5.0	1.3
	箱根	69	44.9	39.1	11.6	1.4	2.9
	有馬	60	41.7	35.0	15.0	6.7	1.7
	別府	55	67.3	25.5	5.5	1.8	0.0
	下呂	47	57.4	19.1	10.6	10.6	2.1
	熱海	46	56.5	26.1	10.9	4.3	2.2
	道後	37	43.2	35.1	10.8	8.1	2.7
	伊香保	37	64.9	16.2	16.2	2.7	0.0
	鬼怒川	29	51.7	31.0	6.9	6.9	3.4
	由布院・湯布院	27	66.7	14.8	14.8	0.0	3.7
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	58.5	31.7	9.8	0.0	0.0
	草津	38	60.5	18.4	13.2	7.9	0.0
	熱海	30	63.3	20.0	10.0	6.7	0.0
	有馬	30	66.7	20.0	10.0	3.3	0.0
	伊香保	27	59.3	14.8	14.8	7.4	3.7
	別府	25	40.0	24.0	24.0	8.0	4.0
	下呂	21	47.6	33.3	9.5	9.5	0.0
	道後	20	50.0	20.0	20.0	5.0	5.0
	南紀白浜	16	56.3	37.5	6.3	0.0	0.0
	鬼怒川	17	64.7	11.8	5.9	5.9	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	50.1	30.7	11.1	5.1	3.1
	別府	470	48.9	33.0	9.6	6.0	2.6
	有馬	383	47.5	31.1	12.8	6.3	2.3
	下呂	236	49.2	30.5	10.2	5.5	4.7
	箱根	235	52.8	28.9	8.1	5.1	5.1
	道後	184	46.7	25.5	15.8	7.6	4.3
	由布院・湯布院	181	50.3	29.8	11.6	3.9	4.4
	登別	180	51.7	29.4	11.7	6.1	1.1
	熱海	128	51.6	31.3	7.0	5.5	4.7
	伊香保	113	47.8	28.3	12.4	6.2	5.3
行ってみたい温泉地	草津	480	56.5	30.6	8.8	3.3	0.8
	別府	348	54.9	30.7	8.9	4.3	1.1
	有馬	207	48.8	36.2	9.7	3.9	1.4
	由布院・湯布院	194	63.4	26.3	8.2	1.0	1.0
	箱根	189	52.9	33.9	9.0	2.6	1.6
	道後	177	57.6	29.4	9.0	2.3	1.7
	下呂	172	49.4	32.0	10.5	3.5	4.7
	登別	136	57.4	29.4	9.6	2.2	1.5
	黒川	96	68.8	19.8	8.3	3.1	0.0
	城崎	95	46.3	40.0	5.3	7.4	1.1
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	53.9	27.8	12.1	4.6	1.6
	2～4年前に訪れたことがある	584	41.1	33.0	18.3	5.3	2.2
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	41.6	32.8	15.7	6.6	3.3
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	21.3	31.5	26.4	11.1	9.7
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	7.4	13.2	46.7	13.5	19.2

A：ビジネスホテルであっても、温泉の大浴場がついている方がうれしい

B：ビジネスホテルに泊まる時、温泉かどうかを気にしたことはない

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	22.9	25.4	28.1	11.4	12.2
性別	男性	2475	21.7	27.6	29.8	9.7	11.2
	女性	2525	24.2	23.2	26.4	13.1	13.1
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	19.0	22.4	33.8	11.0	13.9
	20歳～29歳	625	13.3	19.8	39.8	13.3	13.8
	30歳～39歳	718	18.0	22.4	33.0	11.3	15.3
	40歳～49歳	935	21.2	24.9	30.3	11.2	12.4
	50歳～59歳	852	23.9	26.1	27.6	10.7	11.7
	60歳～69歳	801	28.3	28.6	19.9	10.6	12.6
	70歳以上	832	31.4	29.7	19.4	12.1	7.5
居住地	北海道	211	26.5	22.3	26.1	10.9	14.2
	東北	339	20.1	22.7	32.7	13.0	11.5
	南関東	1492	24.0	23.7	30.0	10.8	11.5
	北関東・甲信	382	20.2	28.3	27.7	11.0	12.8
	北陸	203	29.6	28.1	23.2	9.4	9.9
	東海	590	21.2	28.5	26.3	12.2	11.9
	近畿	812	23.0	26.2	28.2	9.9	12.7
	中国	281	19.2	26.3	27.4	16.0	11.0
	四国	142	19.7	24.6	22.5	12.7	20.4
	九州	548	24.5	25.0	26.3	12.4	11.9
配偶者の有無	いる	2525	28.3	29.1	23.4	10.4	8.7
	いない	2475	17.5	21.5	32.8	12.5	15.7
同居している子どもの有無	いる	1420	27.0	27.7	27.4	11.1	6.9
	いない	3580	21.3	24.5	28.4	11.6	14.2
同居している子どもの年代	未就学児	228	28.1	23.7	30.7	11.0	6.6
	小学生	259	22.0	30.1	31.3	11.2	5.4
	中学生	119	24.4	33.6	31.1	5.0	5.9
	高校生以上	814	28.6	27.1	24.7	11.9	7.6
職業	会社員・団体職員	1848	22.3	26.6	29.4	10.9	10.8
	会社役員・団体役員	71	22.5	32.4	33.8	4.2	7.0
	自営業	183	20.2	30.1	25.1	12.0	12.6
	自由業・士業	113	22.1	21.2	24.8	13.3	18.6
	パート・アルバイト	747	22.6	23.2	28.1	12.3	13.8
	専業主婦・主夫	732	28.1	25.8	22.8	13.3	10.0
	学生・生徒	274	17.5	24.5	32.8	13.1	12.0
	家事手伝い・引退・無職	824	22.3	24.8	27.9	10.1	14.9
	その他	208	23.6	20.7	31.7	11.1	13.0

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	22.9	25.4	28.1	11.4	12.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	27.5	37.5	16.3	11.3	7.5
	箱根	69	31.9	37.7	13.0	10.1	7.2
	有馬	60	26.7	40.0	18.3	3.3	11.7
	別府	55	36.4	38.2	16.4	5.5	3.6
	下呂	47	48.9	19.1	19.1	8.5	4.3
	熱海	46	30.4	41.3	15.2	8.7	4.3
	道後	37	35.1	40.5	2.7	10.8	10.8
	伊香保	37	37.8	35.1	18.9	8.1	0.0
	鬼怒川	29	34.5	31.0	17.2	10.3	6.9
	由布院・湯布院	27	33.3	33.3	22.2	3.7	7.4
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	41.5	24.4	26.8	7.3	0.0
	草津	38	44.7	34.2	15.8	5.3	0.0
	熱海	30	66.7	23.3	10.0	0.0	0.0
	有馬	30	40.0	50.0	10.0	0.0	0.0
	伊香保	27	44.4	25.9	18.5	0.0	11.1
	別府	25	48.0	28.0	20.0	0.0	4.0
	下呂	21	23.8	47.6	28.6	0.0	0.0
	道後	20	30.0	50.0	10.0	10.0	0.0
	南紀白浜	16	37.5	50.0	6.3	0.0	6.3
	鬼怒川	17	35.3	41.2	11.8	0.0	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	33.1	32.7	16.1	10.3	7.8
	別府	470	31.9	32.6	15.1	11.5	8.9
	有馬	383	30.3	31.6	19.8	9.9	8.4
	下呂	236	32.6	33.1	12.3	11.9	10.2
	箱根	235	31.9	32.3	14.9	9.8	11.1
	道後	184	32.6	31.0	15.2	12.0	9.2
	由布院・湯布院	181	29.8	27.6	18.2	12.2	12.2
	登別	180	32.8	33.9	15.6	11.1	6.7
	熱海	128	34.4	32.8	11.7	10.2	10.9
	伊香保	113	33.6	25.7	20.4	9.7	10.6
行ってみたい温泉地	草津	480	37.3	31.9	13.8	11.0	6.0
	別府	348	39.1	30.7	14.9	9.2	6.0
	有馬	207	36.2	34.8	16.9	5.8	6.3
	由布院・湯布院	194	43.8	32.0	12.9	6.7	4.6
	箱根	189	32.8	33.3	19.0	7.4	7.4
	道後	177	39.0	32.8	10.2	9.0	9.0
	下呂	172	36.0	30.2	15.1	9.9	8.7
	登別	136	41.2	34.6	13.2	5.9	5.1
	黒川	96	44.8	27.1	10.4	9.4	8.3
	城崎	95	23.2	43.2	9.5	14.7	9.5
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	36.7	32.6	16.9	7.9	5.9
	2～4年前に訪れたことがある	584	29.1	30.8	24.5	8.9	6.7
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	25.5	31.9	22.5	10.6	9.5
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	13.7	20.7	28.9	18.1	18.6
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	5.4	10.7	51.2	12.2	20.5

A：源泉かけながしなど、伝統的なかたち（自然なかたち）で温泉のお湯を楽しめる温泉を残してほしい

B：安全で衛生的であれば人工的に供給・調整されたお湯であっても問題はないと思う

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	24.7	29.0	29.1	10.7	6.6
性別	男性	2475	22.9	29.3	32.4	10.0	5.3
	女性	2525	26.4	28.7	25.8	11.3	7.8
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	18.1	28.7	31.6	13.1	8.4
	20歳～29歳	625	11.8	22.9	42.2	12.8	10.2
	30歳～39歳	718	17.8	22.1	37.7	13.5	8.8
	40歳～49歳	935	21.3	29.1	31.0	11.8	6.8
	50歳～59歳	852	24.6	29.7	29.6	10.3	5.8
	60歳～69歳	801	32.3	32.0	20.6	9.5	5.6
	70歳以上	832	38.5	35.9	16.6	6.3	2.8
居住地	北海道	211	33.2	23.7	26.5	9.5	7.1
	東北	339	22.1	28.3	31.3	10.9	7.4
	南関東	1492	23.9	28.8	30.2	10.5	6.7
	北関東・甲信	382	23.3	30.6	29.8	8.9	7.3
	北陸	203	31.0	31.5	22.7	10.3	4.4
	東海	590	22.0	31.2	26.9	13.7	6.1
	近畿	812	24.1	28.0	29.3	11.8	6.8
	中国	281	23.1	28.8	28.5	11.0	8.5
	四国	142	21.1	33.1	27.5	8.5	9.9
	九州	548	28.8	28.3	30.5	8.4	4.0
配偶者の有無	いる	2525	30.8	32.4	23.6	9.0	4.1
	いない	2475	18.4	25.5	34.7	12.4	9.1
同居している子どもの有無	いる	1420	26.4	30.8	27.9	10.4	4.4
	いない	3580	24.0	28.3	29.6	10.8	7.4
同居している子どもの年代	未就学児	228	19.3	30.7	31.6	12.3	6.1
	小学生	259	22.4	27.0	34.4	12.7	3.5
	中学生	119	28.6	26.9	33.6	9.2	1.7
	高校生以上	814	29.4	32.7	24.0	9.3	4.7
職業	会社員・団体職員	1848	21.1	30.2	32.0	10.7	6.0
	会社役員・団体役員	71	25.4	28.2	35.2	8.5	2.8
	自営業	183	28.4	26.8	30.1	8.7	6.0
	自由業・士業	113	27.4	27.4	29.2	8.8	7.1
	パート・アルバイト	747	23.3	28.5	28.9	11.4	7.9
	専業主婦・主夫	732	32.9	27.7	23.0	11.6	4.8
	学生・生徒	274	16.8	29.2	33.6	13.9	6.6
	家事手伝い・引退・無職	824	27.5	29.1	25.5	9.1	8.7
	その他	208	26.0	26.9	30.8	10.1	6.3

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	24.7	29.0	29.1	10.7	6.6
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	37.5	37.5	17.5	5.0	2.5
	箱根	69	30.4	44.9	15.9	4.3	4.3
	有馬	60	15.0	45.0	25.0	13.3	1.7
	別府	55	41.8	30.9	21.8	3.6	1.8
	下呂	47	40.4	29.8	17.0	6.4	6.4
	熱海	46	30.4	41.3	17.4	8.7	2.2
	道後	37	37.8	45.9	8.1	2.7	5.4
	伊香保	37	56.8	16.2	13.5	13.5	0.0
	鬼怒川	29	27.6	41.4	17.2	10.3	3.4
	由布院・湯布院	27	51.9	22.2	22.2	0.0	3.7
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	46.3	24.4	17.1	12.2	0.0
	草津	38	42.1	28.9	21.1	7.9	0.0
	熱海	30	63.3	20.0	6.7	3.3	6.7
	有馬	30	53.3	26.7	13.3	6.7	0.0
	伊香保	27	40.7	44.4	7.4	0.0	7.4
	別府	25	44.0	36.0	12.0	8.0	0.0
	下呂	21	23.8	57.1	14.3	4.8	0.0
	道後	20	35.0	30.0	20.0	15.0	0.0
	南紀白浜	16	37.5	50.0	6.3	6.3	0.0
	鬼怒川	17	47.1	11.8	17.6	11.8	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	38.3	36.5	14.3	8.3	2.6
	別府	470	37.4	32.6	18.7	8.5	2.8
	有馬	383	30.5	39.7	16.4	9.4	3.9
	下呂	236	36.4	33.1	16.1	10.6	3.8
	箱根	235	35.3	35.7	15.7	9.4	3.8
	道後	184	32.6	34.8	16.3	12.0	4.3
	由布院・湯布院	181	37.0	28.7	19.3	12.7	2.2
	登別	180	36.1	38.3	14.4	7.2	3.9
	熱海	128	42.2	28.9	18.0	8.6	2.3
	伊香保	113	38.9	31.9	15.0	8.8	5.3
行ってみたい温泉地	草津	480	41.9	34.2	15.6	6.5	1.9
	別府	348	41.1	37.4	13.2	7.8	0.6
	有馬	207	36.2	41.5	11.1	9.2	1.9
	由布院・湯布院	194	46.4	32.5	9.8	10.3	1.0
	箱根	189	34.9	45.0	10.6	7.4	2.1
	道後	177	42.9	32.2	13.0	9.6	2.3
	下呂	172	34.9	33.7	18.0	9.3	4.1
	登別	136	39.7	39.7	12.5	6.6	1.5
	黒川	96	52.1	28.1	9.4	8.3	2.1
	城崎	95	30.5	40.0	16.8	11.6	1.1
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	39.1	34.1	17.1	7.4	2.4
	2～4年前に訪れたことがある	584	27.7	36.0	25.5	8.4	2.4
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	27.9	33.8	23.0	11.5	3.7
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	16.8	29.4	31.0	13.1	9.6
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	5.9	12.8	52.8	14.0	14.5

A：昔ながらの伝統的な入浴方法、湯船などでの温泉入浴が続けられるようにしておくべきだ

B：きれいで快適な施設で入浴できるのであれば伝統的な方法や湯船にはこだわらない

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	15.9	26.3	34.1	14.4	9.2
性別	男性	2475	16.1	25.7	36.7	13.4	8.2
	女性	2525	15.7	27.0	31.6	15.4	10.3
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	16.0	22.4	34.6	16.5	10.5
	20歳～29歳	625	8.8	21.0	42.4	15.7	12.2
	30歳～39歳	718	12.4	20.1	38.4	16.4	12.7
	40歳～49歳	935	13.2	23.7	37.8	16.4	9.0
	50歳～59歳	852	15.4	27.7	34.0	13.8	9.0
	60歳～69歳	801	21.2	30.1	29.6	11.5	7.6
	70歳以上	832	22.7	34.9	24.3	12.4	5.8
居住地	北海道	211	19.9	26.5	31.3	10.0	12.3
	東北	339	17.1	22.4	32.7	16.2	11.5
	南関東	1492	16.2	26.4	34.2	15.0	8.2
	北関東・甲信	382	15.4	26.4	38.7	9.9	9.4
	北陸	203	22.2	28.1	29.6	13.3	6.9
	東海	590	13.1	25.4	33.7	16.9	10.8
	近畿	812	14.3	26.1	35.3	14.4	9.9
	中国	281	16.0	28.1	32.0	14.6	9.3
	四国	142	13.4	28.2	33.8	11.3	13.4
	九州	548	17.0	27.7	33.9	15.0	6.4
配偶者の有無	いる	2525	19.5	30.0	29.9	14.1	6.5
	いない	2475	12.2	22.6	38.3	14.7	12.0
同居している子どもの有無	いる	1420	17.0	28.3	33.5	15.4	5.8
	いない	3580	15.4	25.6	34.3	14.1	10.6
同居している子どもの年代	未就学児	228	15.8	21.9	37.3	16.7	8.3
	小学生	259	15.1	21.6	40.2	18.5	4.6
	中学生	119	16.8	31.9	35.3	10.9	5.0
	高校生以上	814	18.1	31.7	30.1	14.6	5.5
職業	会社員・団体職員	1848	15.5	25.4	37.0	14.0	8.1
	会社役員・団体役員	71	15.5	29.6	40.8	12.7	1.4
	自営業	183	16.4	27.3	35.5	11.5	9.3
	自由業・士業	113	16.8	24.8	31.0	11.5	15.9
	パート・アルバイト	747	12.9	26.1	36.1	14.9	10.0
	専業主婦・主夫	732	19.1	28.8	27.3	17.8	7.0
	学生・生徒	274	13.1	23.0	35.8	19.0	9.1
	家事手伝い・引退・無職	824	16.7	28.6	29.7	12.4	12.5
	その他	208	18.3	21.2	38.0	11.5	11.1

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	15.9	26.3	34.1	14.4	9.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	21.3	45.0	21.3	10.0	2.5
	箱根	69	27.5	34.8	21.7	13.0	2.9
	有馬	60	13.3	38.3	30.0	13.3	5.0
	別府	55	25.5	40.0	18.2	12.7	3.6
	下呂	47	29.8	17.0	27.7	19.1	6.4
	熱海	46	21.7	34.8	30.4	13.0	0.0
	道後	37	29.7	43.2	18.9	2.7	5.4
	伊香保	37	43.2	32.4	13.5	5.4	5.4
	鬼怒川	29	24.1	34.5	24.1	6.9	10.3
	由布院・湯布院	27	33.3	33.3	11.1	18.5	3.7
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	26.8	31.7	24.4	12.2	4.9
	草津	38	36.8	23.7	18.4	7.9	13.2
	熱海	30	53.3	26.7	13.3	3.3	3.3
	有馬	30	33.3	46.7	6.7	6.7	6.7
	伊香保	27	33.3	22.2	18.5	14.8	11.1
	別府	25	40.0	16.0	36.0	0.0	8.0
	下呂	21	14.3	42.9	23.8	14.3	4.8
	道後	20	25.0	30.0	25.0	15.0	5.0
	南紀白浜	16	18.8	50.0	12.5	6.3	12.5
	鬼怒川	17	23.5	41.2	17.6	5.9	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	26.2	31.5	24.1	13.0	5.1
	別府	470	24.0	33.2	22.6	13.4	6.8
	有馬	383	19.1	37.9	26.9	9.1	7.0
	下呂	236	22.9	30.1	24.2	12.3	10.6
	箱根	235	20.4	30.2	25.1	15.3	8.9
	道後	184	20.7	33.2	26.6	12.5	7.1
	由布院・湯布院	181	21.5	29.8	23.8	18.2	6.6
	登別	180	20.6	33.3	28.9	12.8	4.4
	熱海	128	26.6	28.9	22.7	15.6	6.3
	伊香保	113	23.9	30.1	27.4	8.8	9.7
行ってみたい温泉地	草津	480	27.5	34.0	22.5	11.7	4.4
	別府	348	26.4	32.8	23.3	13.5	4.0
	有馬	207	24.2	36.7	23.7	8.2	7.2
	由布院・湯布院	194	32.5	34.5	20.6	8.8	3.6
	箱根	189	22.2	33.3	22.2	14.8	7.4
	道後	177	26.6	31.6	23.7	13.6	4.5
	下呂	172	18.0	29.7	29.7	14.0	8.7
	登別	136	24.3	38.2	22.8	11.8	2.9
	黒川	96	31.3	33.3	21.9	12.5	1.0
	城崎	95	21.1	34.7	25.3	13.7	5.3
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	25.9	34.0	23.0	12.2	4.9
	2～4年前に訪れたことがある	584	15.4	33.0	31.8	13.7	6.0
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	16.2	30.2	31.5	15.1	6.9
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	11.7	24.1	35.0	17.3	11.9
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	4.7	9.7	53.9	14.8	16.9

A：交通が不便でも、自然の情緒が楽しめる温泉地や秘湯的な温泉を楽しみたい

B：できれば交通の便がよく、苦労せずにいくことができる温泉地の方がいい

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	11.1	21.6	34.8	19.3	13.2
性別	男性	2475	12.7	23.0	36.1	17.6	10.5
	女性	2525	9.5	20.2	33.5	21.0	15.8
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	12.7	19.0	32.5	22.8	13.1
	20歳～29歳	625	7.4	16.2	45.1	16.8	14.6
	30歳～39歳	718	7.8	20.6	37.7	18.2	15.6
	40歳～49歳	935	8.8	20.1	35.3	20.7	15.1
	50歳～59歳	852	11.5	23.9	35.3	18.3	10.9
	60歳～69歳	801	11.9	23.1	30.5	21.2	13.4
	70歳以上	832	17.8	25.0	28.2	18.6	10.3
居住地	北海道	211	11.8	25.6	32.7	16.1	13.7
	東北	339	8.3	22.1	42.8	16.2	10.6
	南関東	1492	10.9	21.6	34.5	18.6	14.5
	北関東・甲信	382	11.3	20.7	35.9	20.7	11.5
	北陸	203	14.3	23.6	27.6	20.2	14.3
	東海	590	10.3	19.2	35.1	23.2	12.2
	近畿	812	10.6	21.4	35.0	19.2	13.8
	中国	281	11.0	22.1	30.6	20.6	15.7
	四国	142	7.7	21.8	33.1	16.9	20.4
	九州	548	14.4	22.1	35.6	19.0	8.9
配偶者の有無	いる	2525	13.5	24.7	31.3	19.8	10.7
	いない	2475	8.7	18.4	38.4	18.7	15.8
同居している子どもの有無	いる	1420	11.8	25.2	34.0	18.9	10.1
	いない	3580	10.8	20.1	35.1	19.5	14.4
同居している子どもの年代	未就学児	228	9.6	27.6	34.2	17.1	11.4
	小学生	259	11.6	21.6	37.5	19.7	9.7
	中学生	119	10.1	27.7	37.8	16.8	7.6
	高校生以上	814	12.7	25.3	32.3	19.4	10.3
職業	会社員・団体職員	1848	10.5	24.7	35.7	17.4	11.8
	会社役員・団体役員	71	16.9	18.3	35.2	23.9	5.6
	自営業	183	14.2	23.0	35.5	14.8	12.6
	自由業・士業	113	10.6	22.1	32.7	18.6	15.9
	パート・アルバイト	747	8.3	18.6	37.9	19.9	15.3
	専業主婦・主夫	732	11.9	21.3	28.8	23.9	14.1
	学生・生徒	274	10.9	19.0	36.1	24.5	9.5
	家事手伝い・引退・無職	824	12.4	20.1	34.2	17.6	15.7
	その他	208	14.4	14.4	38.0	20.7	12.5

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	11.1	21.6	34.8	19.3	13.2
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	16.3	31.3	28.8	15.0	8.8
	箱根	69	17.4	27.5	29.0	20.3	5.8
	有馬	60	10.0	30.0	25.0	25.0	10.0
	別府	55	21.8	34.5	27.3	10.9	5.5
	下呂	47	29.8	12.8	27.7	23.4	6.4
	熱海	46	8.7	32.6	32.6	17.4	8.7
	道後	37	21.6	24.3	35.1	8.1	10.8
	伊香保	37	29.7	24.3	27.0	10.8	8.1
	鬼怒川	29	13.8	55.2	13.8	13.8	3.4
	由布院・湯布院	27	18.5	29.6	33.3	11.1	7.4
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	24.4	26.8	29.3	14.6	4.9
	草津	38	23.7	31.6	23.7	13.2	7.9
	熱海	30	40.0	20.0	26.7	3.3	10.0
	有馬	30	26.7	23.3	23.3	20.0	6.7
	伊香保	27	29.6	22.2	22.2	14.8	11.1
	別府	25	28.0	24.0	28.0	12.0	8.0
	下呂	21	0.0	47.6	19.0	19.0	14.3
	道後	20	25.0	35.0	15.0	15.0	10.0
	南紀白浜	16	31.3	43.8	12.5	6.3	6.3
	鬼怒川	17	23.5	23.5	11.8	17.6	23.5
名湯だと思う温泉地	草津	721	18.9	27.0	24.4	21.2	8.5
	別府	470	18.9	25.5	23.6	23.2	8.7
	有馬	383	15.4	26.6	26.1	22.5	9.4
	下呂	236	14.4	25.8	22.0	25.0	12.7
	箱根	235	16.6	21.7	26.4	18.7	16.6
	道後	184	13.0	25.5	22.8	25.0	13.6
	由布院・湯布院	181	12.2	25.4	25.4	22.1	14.9
	登別	180	16.1	29.4	24.4	20.6	9.4
	熱海	128	14.1	27.3	21.9	24.2	12.5
	伊香保	113	23.0	23.9	27.4	15.9	9.7
行ってみたい温泉地	草津	480	18.5	30.0	23.8	20.4	7.3
	別府	348	21.6	27.3	23.3	19.8	8.0
	有馬	207	16.4	32.4	22.2	20.3	8.7
	由布院・湯布院	194	21.1	28.4	20.6	20.1	9.8
	箱根	189	16.9	24.9	23.8	22.2	12.2
	道後	177	18.6	25.4	21.5	26.0	8.5
	下呂	172	15.1	24.4	25.6	22.7	12.2
	登別	136	17.6	33.8	22.1	19.9	6.6
	黒川	96	24.0	32.3	21.9	15.6	6.3
	城崎	95	11.6	31.6	16.8	27.4	12.6
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	19.7	29.9	26.3	16.0	8.2
	2～4年前に訪れたことがある	584	11.3	26.4	32.7	19.7	9.9
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	11.7	22.3	28.7	24.3	13.0
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	5.1	17.4	37.6	21.6	18.3
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	3.3	9.5	51.2	18.0	18.0

A：古い町並みや建築物、寺社などが残り、歴史的な情緒が楽しめる温泉地がいい

B：様々なアクティビティやアミューズメントが楽しめるリゾート的な温泉地がいい

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全 体		5000	22.1	33.3	32.9	8.0	3.7
性別	男性	2475	21.0	31.5	36.2	8.2	3.1
	女性	2525	23.1	35.1	29.7	7.9	4.2
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	18.6	27.4	34.6	13.5	5.9
	20歳～29歳	625	13.3	24.2	45.0	11.5	6.1
	30歳～39歳	718	16.7	28.3	40.4	9.7	4.9
	40歳～49歳	935	20.3	32.0	34.7	9.5	3.5
	50歳～59歳	852	24.1	33.9	33.5	5.4	3.2
	60歳～69歳	801	26.1	39.8	25.1	6.1	2.9
	70歳以上	832	30.3	41.0	21.9	5.3	1.6
居住地	北海道	211	26.1	28.9	34.6	6.6	3.8
	東北	339	17.7	31.0	37.5	9.1	4.7
	南関東	1492	22.9	33.0	32.7	7.8	3.6
	北関東・甲信	382	21.2	35.9	31.9	7.6	3.4
	北陸	203	24.6	35.0	28.6	8.9	3.0
	東海	590	22.5	34.2	31.7	8.1	3.4
	近畿	812	21.4	33.5	33.3	8.1	3.7
	中国	281	22.4	35.2	32.7	6.4	3.2
	四国	142	19.7	31.0	36.6	6.3	6.3
	九州	548	21.4	33.6	32.1	9.7	3.3
配偶者の有無	いる	2525	25.3	38.1	26.9	7.2	2.5
	いない	2475	18.8	28.5	39.0	8.8	4.9
同居している子どもの有無	いる	1420	22.0	35.7	30.4	8.9	3.0
	いない	3580	22.1	32.4	33.9	7.7	3.9
同居している子どもの年代	未就学児	228	15.4	31.6	34.6	13.6	4.8
	小学生	259	18.9	34.0	34.7	10.0	2.3
	中学生	119	21.8	34.5	32.8	8.4	2.5
	高校生以上	814	24.9	37.6	27.4	7.2	2.8
職業	会社員・団体職員	1848	21.2	33.0	33.8	8.8	3.2
	会社役員・団体役員	71	21.1	38.0	26.8	11.3	2.8
	自営業	183	23.5	32.8	32.8	7.7	3.3
	自由業・士業	113	22.1	30.1	38.1	4.4	5.3
	パート・アルバイト	747	20.7	33.5	33.6	8.2	4.0
	専業主婦・主夫	732	26.1	39.5	25.4	6.0	3.0
	学生・生徒	274	16.1	29.2	36.9	12.8	5.1
	家事手伝い・引退・無職	824	23.8	32.5	32.5	7.4	3.8
	その他	208	20.2	23.6	44.2	5.8	6.3

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	22.1	33.3	32.9	8.0	3.7
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	28.8	41.3	21.3	6.3	2.5
	箱根	69	31.9	40.6	15.9	10.1	1.4
	有馬	60	35.0	45.0	13.3	5.0	1.7
	別府	55	41.8	36.4	9.1	9.1	3.6
	下呂	47	48.9	25.5	10.6	12.8	2.1
	熱海	46	26.1	45.7	21.7	4.3	2.2
	道後	37	35.1	40.5	16.2	8.1	0.0
	伊香保	37	40.5	43.2	16.2	0.0	0.0
	鬼怒川	29	17.2	41.4	27.6	13.8	0.0
	由布院・湯布院	27	22.2	33.3	37.0	7.4	0.0
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	39.0	31.7	26.8	2.4	0.0
	草津	38	42.1	42.1	10.5	5.3	0.0
	熱海	30	46.7	26.7	23.3	3.3	0.0
	有馬	30	46.7	30.0	13.3	10.0	0.0
	伊香保	27	44.4	33.3	11.1	0.0	11.1
	別府	25	36.0	28.0	28.0	4.0	4.0
	下呂	21	9.5	42.9	28.6	14.3	4.8
	道後	20	25.0	45.0	20.0	5.0	5.0
	南紀白浜	16	50.0	31.3	18.8	0.0	0.0
	鬼怒川	17	41.2	29.4	17.6	5.9	5.9
名湯だと思う温泉地	草津	721	35.0	41.2	17.9	4.6	1.4
	別府	470	30.6	41.7	18.1	7.9	1.7
	有馬	383	31.1	43.9	18.0	5.5	1.6
	下呂	236	35.6	35.6	18.2	6.8	3.8
	箱根	235	30.6	40.9	18.7	7.7	2.1
	道後	184	34.2	39.7	18.5	4.9	2.7
	由布院・湯布院	181	29.3	39.2	21.0	6.6	3.9
	登別	180	27.8	41.7	22.8	6.7	1.1
	熱海	128	30.5	34.4	25.8	8.6	0.8
	伊香保	113	29.2	38.9	23.9	4.4	3.5
行ってみたい温泉地	草津	480	39.2	40.6	14.8	4.4	1.0
	別府	348	33.9	41.4	19.0	5.5	0.3
	有馬	207	30.9	49.8	15.0	3.4	1.0
	由布院・湯布院	194	36.1	43.8	12.9	4.6	2.6
	箱根	189	34.4	40.7	18.0	6.3	0.5
	道後	177	44.6	36.7	14.7	2.8	1.1
	下呂	172	37.2	33.1	17.4	9.3	2.9
	登別	136	33.8	38.2	21.3	5.9	0.7
	黒川	96	36.5	39.6	19.8	4.2	0.0
	城崎	95	36.8	42.1	15.8	4.2	1.1
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	32.1	38.7	20.8	6.9	1.5
	2～4年前に訪れたことがある	584	22.9	39.0	28.3	8.2	1.5
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	26.3	40.7	25.0	6.2	1.9
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	17.7	34.3	36.9	6.9	4.2
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	7.1	14.9	56.6	12.4	9.0

A：時間に余裕があれば、一～二週間温泉地に長期逗留してみたい

B：温泉に入るだけであれば日帰りか一泊二日もあれば十分だと思う

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全 体		5000	16.6	22.1	33.1	17.8	10.5
性別	男性	2475	16.9	24.0	35.0	15.7	8.4
	女性	2525	16.2	20.2	31.3	19.8	12.5
	回答しない	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
年齢	15歳以下	0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	16歳～19歳	237	14.3	20.7	33.8	18.6	12.7
	20歳～29歳	625	11.5	17.3	42.9	16.8	11.5
	30歳～39歳	718	13.2	22.8	33.8	17.8	12.3
	40歳～49歳	935	15.8	20.7	33.3	19.4	10.8
	50歳～59歳	852	20.3	22.4	30.9	17.8	8.6
	60歳～69歳	801	19.0	23.8	30.1	16.9	10.2
	70歳以上	832	18.5	24.9	30.0	17.3	9.3
居住地	北海道	211	23.2	23.7	29.9	12.8	10.4
	東北	339	15.9	18.3	37.2	19.2	9.4
	南関東	1492	16.8	23.3	33.2	16.1	10.7
	北関東・甲信	382	16.2	23.8	35.3	17.3	7.3
	北陸	203	20.7	21.7	30.0	17.7	9.9
	東海	590	14.7	23.9	31.5	18.0	11.9
	近畿	812	14.5	19.8	37.6	18.0	10.1
	中国	281	17.1	22.1	26.7	22.1	12.1
	四国	142	13.4	16.2	30.3	21.8	18.3
	九州	548	18.1	22.3	30.5	20.1	9.1
配偶者の有無	いる	2525	19.0	24.5	29.1	18.8	8.6
	いない	2475	14.1	19.6	37.3	16.7	12.3
同居している子どもの有無	いる	1420	18.2	22.8	31.8	18.9	8.3
	いない	3580	15.9	21.8	33.6	17.3	11.3
同居している子どもの年代	未就学児	228	17.1	24.6	30.3	18.9	9.2
	小学生	259	19.3	22.0	32.8	20.1	5.8
	中学生	119	16.0	19.3	34.5	24.4	5.9
	高校生以上	814	18.4	23.1	31.6	17.7	9.2
職業	会社員・団体職員	1848	16.6	24.7	33.1	16.5	9.1
	会社役員・団体役員	71	14.1	21.1	42.3	18.3	4.2
	自営業	183	20.2	23.0	30.6	14.8	11.5
	自由業・士業	113	18.6	22.1	33.6	14.2	11.5
	パート・アルバイト	747	15.5	20.2	32.9	19.9	11.4
	専業主婦・主夫	732	17.5	20.5	30.2	20.9	10.9
	学生・生徒	274	12.0	21.9	33.9	21.2	10.9
	家事手伝い・引退・無職	824	17.5	19.7	35.4	16.1	11.3
	その他	208	15.9	20.7	32.7	16.8	13.9

		n	Aに近い	どちらかといえばAに近い	どちらともいえない、わからない	どちらかといえばBに近い	Bに近い
全体		5000	16.6	22.1	33.1	17.8	10.5
過去1年間で一番最近訪問した温泉地	草津	80	27.5	31.3	20.0	16.3	5.0
	箱根	69	18.8	36.2	23.2	14.5	7.2
	有馬	60	18.3	25.0	30.0	13.3	13.3
	別府	55	34.5	21.8	21.8	10.9	10.9
	下呂	47	27.7	27.7	27.7	12.8	4.3
	熱海	46	21.7	26.1	28.3	23.9	0.0
	道後	37	37.8	13.5	16.2	27.0	5.4
	伊香保	37	29.7	35.1	21.6	13.5	0.0
	鬼怒川	29	20.7	37.9	24.1	13.8	3.4
	由布院・湯布院	27	29.6	25.9	25.9	11.1	7.4
一番最近訪問した温泉地以外	箱根	41	34.1	19.5	26.8	19.5	0.0
	草津	38	34.2	36.8	18.4	5.3	5.3
	熱海	30	43.3	26.7	20.0	6.7	3.3
	有馬	30	36.7	16.7	23.3	10.0	13.3
	伊香保	27	22.2	18.5	18.5	18.5	22.2
	別府	25	40.0	24.0	28.0	4.0	4.0
	下呂	21	19.0	28.6	38.1	4.8	9.5
	道後	20	25.0	35.0	30.0	10.0	0.0
	南紀白浜	16	12.5	37.5	25.0	12.5	12.5
	鬼怒川	17	35.3	17.6	23.5	11.8	11.8
名湯だと思う温泉地	草津	721	24.3	30.7	20.0	17.8	7.4
	別府	470	24.0	23.8	24.0	18.9	9.1
	有馬	383	19.8	27.4	27.9	18.0	6.8
	下呂	236	23.7	30.5	19.5	16.5	9.7
	箱根	235	23.8	29.8	19.1	17.0	10.2
	道後	184	26.6	20.7	22.3	19.6	10.9
	由布院・湯布院	181	24.3	30.4	21.0	14.9	9.4
	登別	180	22.8	28.3	25.0	18.9	5.0
	熱海	128	30.5	28.9	11.7	18.8	10.2
	伊香保	113	21.2	24.8	27.4	16.8	9.7
行ってみたい温泉地	草津	480	29.4	27.7	18.5	17.3	7.1
	別府	348	28.2	31.9	17.2	16.4	6.3
	有馬	207	20.8	30.9	26.6	14.5	7.2
	由布院・湯布院	194	27.8	30.9	19.1	14.9	7.2
	箱根	189	22.2	32.8	20.1	18.0	6.9
	道後	177	27.7	24.3	18.1	18.1	11.9
	下呂	172	24.4	31.4	18.6	16.3	9.3
	登別	136	28.7	34.6	16.2	17.6	2.9
	黒川	96	28.1	33.3	19.8	16.7	2.1
	城崎	95	22.1	25.3	25.3	15.8	11.6
訪問経験	この1年程度の間に訪れた	1582	25.9	28.3	23.7	15.2	7.0
	2～4年前に訪れたことがある	584	19.5	27.2	26.9	18.5	7.9
	新型コロナウイルス感染症流行前には訪れたことがある（過去5～10年程度）	777	18.1	25.7	29.3	19.4	7.3
	かなり昔（10年以上前）には訪れたことがある	1051	11.1	19.0	34.6	20.8	14.4
	国内の温泉地には全く訪れたことがない	1006	4.7	9.7	52.9	17.0	15.7